

明暗

夏目漱石

青空文庫

一

医者は探りさぐを入れた後あとで、手術台の上から津田つだを下おろした。

「やっぱり穴が腸まで続いているんです。この前探った時は、途中に癒痕はんこんの隆起りゅうきがあつたので、ついそこが行きどまりだとばかり思つて、ああ云つたんですが、今日疎通きようを好くするために、そいつをがりがり掻き落して見ると、まだ奥があるんです」

「そうしてそれが腸まで続いているんですか」

「そうです。五分ぐらいだと思つていたのが約一寸ほどあるんです」

津田の顔には苦笑の裡うちに淡く盛り上げられた失望の色が見えた。医者は白いだぶだぶした上着の前に両手を組み合わせたまま、ちよつと首を傾けた。その様子が「御気の毒ですが事実だから仕方がありません。医者は自分の職業に対して虚言うそを吐く訳に行かないんですから」という意味に受取れた。

津田は無言のまま帯を締め直して、椅子いすの背に投げ掛けられた袴はかまを取り上げながらまた医者の方を向いた。

「腸まで続いているとすると、癒なほりつこないんですか」

「そんな事はありません」

医者は活潑かつぱつにまた無雑作むぞうさに津田の言葉を否定した。併あわせて彼の気分をも否定するごとくに。

「ただ今^{いま}までのように穴の掃除ばかりしては駄目なんです。それじやいつまで経^たつても肉の上^{あが}りこはないから、今度は治療法を変えて根本的の手術を一^{ひと}思^{おも}いにやるよりほかに仕方がありませんね」

「根本的の治療と云うと」

「切^{せつ}開^{かい}です。切開して穴と腸といっしょにしてしまふんです。すると天然自然^{てんねんしぜん}割^さかれた面^{めん}の両側^{りょうがわ}が癒^ゆ着^{ちやく}して来ますから、まあ本式に癒^ゆるようになるんです」

津田は黙^{もく}つて点頭^{うなず}いた。彼の傍^{そば}には南側の窓下に据^すえられた洋^テ卓^{ーブル}の上に一台の顕微鏡^{けんびきよう}が載^のつていた。医者と懇意な彼は先刻^{さつき}診察所へ這入^{はい}った時、物珍らしさに、それを覗^{のぞ}かせて貰^{もら}ったので

ある。その時八百五十倍の鏡の底に映つたものは、まるで図に撮影つたように鮮やかに見える着色の葡萄状の細菌であつた。

津田は袴を穿はいてしまつて、その洋卓の上に置いた皮の紙入を取り上げた時、ふとこの細菌の事を思い出した。すると連想が急に彼の胸を不安にした。診察所を出るべく紙入を懷ふところに収めた彼はすでに出ようとしてまた躊躇ちゆうちよした。

「もし結核性のものだとすると、たとい今おつしやつたような根本的な手術をして、細い溝みぞを全部腸の方へ切り開いてしまつても癒らないんでしよう」

「結核性なら駄目です。それからそれへと穴を掘つて奥の方へ進んで行くんだから、口元だけ治療したつて役にや立ちません」

津田は思わず眉^{まゆ}を寄せた。

「私^{わたし}のは結核性じゃないんですか」

「いえ、結核性じゃありません」

津田は相手の言葉にどれほどの真実さがあるかを確かめようとして、ちよつと眼を医者の上に据^すえた。医者は動かなかつた。

「どうしてそれが分るんですか。ただの診察で分るんですか」

「ええ。診察^みの様子で分ります」

その時看護婦が津田の後に廻^{あと}った患者の名前を室^{へや}の出口に立つて呼んだ。待ち構えていたその患者はすぐ津田の背後に現われた。津田は早く退却しなければならなくなつた。

「じやいつその根本的手術をやっていただけでしょう」

「いつでも。あなたの御都合の好い時でようござんす」

津田は自分の都合を善く考えてから日取をきめる事にして室外に出た。

二

電車に乗った時の彼の気分は沈んでいた。身動きのならないほど客の込み合う中で、彼は釣^{つり}革^{かわ}にぶら下りながらただ自分の事ばかり考えた。去年の疼痛^{とうつう}がありありと記憶の舞台^{ぶたい}に上った。白いベッドの上に横^{よこ}えられた無残^{みじめ}な自分の姿が明かに見えた。鎖を切って逃げる事ができない時に犬の出すような自分の唸^{うな}り声

判然聴えた。それから冷たい刃物の光と、それが互に触れ合う音と、最後に突然両方の肺臓から一度に空気を搾り出すような恐ろしい力の圧迫と、圧された空気が圧されながらに収縮する事ができないために起るとしか思われない劇しい苦痛とが彼の記憶を襲った。

彼は不愉快になった。急に気を換えて自分の周囲を眺めた。周囲のものは彼の存在にすら気がつかずにみんな澄ましていた。彼はまた考えつづけた。

「どうしてあんな苦しい目に会ったんだろう」

荒川堤 あらかわづつみ

へ花見に行った帰り途から何らの予告なしに突発した当時の疼痛について、彼は全くの盲目漢であつた。その原因

はあらゆる想像のほかにあつた。不思議というよりもむしろ恐ろしかった。

「この肉体はいつ何^{なんどき}時どんな変^{へん}に会わないとも限らない。それどころか、今現^{げん}にどんな変がこの肉体のうちに起りつつあるかも知れない。そうして自分は全く知らずにいる。恐ろしい事だ」

ここまで働らいて来た彼の頭はそこでとまる事ができなかった。どつと後^{うしろ}から突き落すような勢で、彼を前の方に押しやった。突然彼は心^{うち}の中で叫んだ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。いっとう変るか分らない。そうしてその変るところをおれは見たのだ」

彼は思わず唇^{くちびる}を固く結んで、あたかも自尊心^{きずつつ}を傷けられた人の

ような眼を彼の周囲に向けた。けれども彼の心のうちに何事が起りつつあるかをまるで知らない車中の乗客は、彼の眼遣めづかいに対して少しの注意も払わなかった。

彼の頭は彼の乗っている電車のように、自分自身の軌道レールの上を走って前へ進むだけであつた。彼は二三日前にさんちある友達から聞いたポアンカレの話の思い出した。彼のために「偶然」の意味を説明してくれたその友達は彼に向つてこう云つた。

「だから君、普通世間で偶然だ偶然だという、いわゆる偶然の出来事というのは、ポアンカレの説によると、原因があまりに複雑過ぎてちよつと見当がつかない時に云うのだね。ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫の配合が必要で、その

必要な配合が出来得るためには、またどんな条件が必要であつたかと考えて見ると、ほとんど想像がつかないだろう」

彼は友達の言葉を、単に与えられた新らしい知識の断片として聞き流す訳に行かなかつた。彼はそれをぴたりと自分の身の上に当て^あ嵌^はめて考えた。すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押しやったり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするよう^うに思えた。しかも彼はついぞ今まで自分の行動について他^{ひと}から牽^{けん}制^{せい}を受けた覚^{おぼえ}がなかつた。する事はみんな自分の力でし、言う事はことごとく自分の力で言つたに相違なかつた。

「どうしてあの女はあすこへ嫁に行つたのだらう。それは自分で行こうと思つたから行つたに違ない。しかしどうしてもあすこへ

嫁に行くはずではなかったのに。そうしてこのおれはまたどうしてあの女と結婚したのだろう。それもおれが貰もらおうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない。しかしおれはいまだかつてあの女を貰もらおうとは思つていなかったのに。偶然？　ポアンカレーのいわゆる複雑の極致？　何だか解と解らない」

彼は電車を降りて考えながら宅うちの方へ歩いて行つた。

三

角かどを曲つて細い小路こうじへ這入はいつた時、津田はわが門前に立つてゐる細君の姿を認めた。その細君はこつちを見ていた。しかし津田

の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直った。そうして白い繊い手^{ほそ}を額の所へ翳^{かざ}すようにあてがって何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍^{そば}へ寄つて来るまでその態度を改めなかつた。

「おい何を見ているんだ」

細君は津田の声を聞くとさも驚ろいたように急にこつちをふり向いた。

「ああ吃驚^{びっくり}した。——御歸り遊ばせ」

同時に細君は自分のもっているあらゆる眼の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎ^{そそ}かけた。それから心持腰を曲^{かが}めて軽い会釈^{えしやく}をした。

なか 半ば細君の嬌態きょうたいに応じようとした津田はなか 半ば 逡巡しゆんじゆんして
立ち留まった。

「そんな所に立って何をしているんだ」

「待ってたのよ。御帰りを」

「だって何か一生懸命に見ていたじゃないか」

「ええ。あれ雀すずめよ。雀が御向うの宅うちの二階ひさしの庇に巢を食ってるんでしょう」

津田はちよつと向うの宅の屋根を見上げた。しかしそこには雀らしいものの影も見えなかった。細君はすぐ手を夫の前に出した。

「何だい」

ステッキ
「洋杖」

津田は始めて気がついたように自分の持つている洋杖を細君に渡した。それを受取った彼女はまた自分で玄関の格子戸こうしどを開けて夫を先へ入れた。それから自分も夫のあと後につ跟着くつぬぎ脱から上あがつた。

夫に着物を脱ぎ換えさせた彼女は津田が火鉢ひばちの前に坐すわるか坐らないうちに、また勝手の方から石鹼しゃばん入いれを手拭てぬぐいに包んで持つて出た。

「ちよつと今のうち一風呂浴びていらつしやい。またそこへ坐り込おつくうむと臆おつくう劫になるから」

津田は仕方なしに手を出して手拭てぬぐいを受取った。しかしすぐ立とうとはしなかった。

「湯は今日はやめにしようかしら」

「なぜ。——さっぱりするから行つていらつしやいよ。帰るとすぐ御飯にして上げますから」

津田は仕方なしにまた立ち上つた。室^{へや}を出る時、彼はちよつと細君の方をふり返つた。

「今日帰りに小林さんへ寄つて診^みて貰つて来たよ」

「そう。そうしてどうなの、診察の結果は。おおかたもう癒^{なお}つてるんでしよう」

「ところが癒らない。いよいよ厄介な事になつちまつた」

津田はこう云つたなり、後^{あと}を聞きたがる細君の質問を聞き捨てにして表へ出た。

同じ話題が再び夫婦の間にあいだ戻つて来たのは晩食ゆうめしが済んで津田がまだ自分の室へ引き取らない宵よの口くちであつた。

「厭いやね、切るなんて、怖こわくつて。今までのようにそつとしておいたつてよかないの」

「やっぱり医者の方から云うとこのままじゃ危険なんだろうね」
「だけど厭だわ、あなた。もし切り損ないでもすると」

細君は濃い恰かつこう好まっの好い眉まゆを心持寄せて夫を見た。津田は取り合ずに笑つていた。すると細君が突然氣がついたように訊きいた。
「もし手術をするとすれば、また日曜でなくつちやいけないんでしょう」

細君にはこの次の日曜に夫と共に親類から誘われて芝居見物に

行く約束があつた。

「まだ席を取つてないんだから構やしないさ、断わつたつて」

「でもそりや悪いわ、あなた。せつかく親切にああ云つてくれるものを断^{ことわ}つちや」

「悪かないよ。相当の事情があつて断わるんなら」

「でもあたし行きたいんですもの」

「御前は行きたければおいでな」

「だからあなたもいらつしやいな、ね。御^{おいや}厭？」

津田は細君の顔を見て苦笑を洩^もらした。

四

細君は色の白い女であつた。そのせいで形の好い彼女の眉が一
 際^{ときわ}引立つて見えた。彼女はまた癖のようによくその眉を動かし
 た。惜しい事に彼女の眼は細過ぎた。おまけに愛^{あい}嬌^{きよう}のない一
 重^{ひとまぶち}瞼であつた。けれどもその一重瞼の中に輝やく瞳子は漆黒
 であつた。だから非常によく働らいた。或時は専^{せん}横^{おう}と云つても
 いいくらいに表情を恣^{ほし}ま^いにした。津田は我知らずこの小^ちさい眼
 から出る光に牽^ひきつけられる事があつた。そうしてまた突然何の
 原因もなしにその光から跳^はね返される事もないではなかつた。
 彼がふと眼を上げて細君を見た時、彼は刹那^{せつな}的に彼女の眼に宿
 る一種の怪しい力を感じた。それは今まで彼女の口にしつつあつ

た甘い言葉とは全く釣り合わない妙な輝やきであつた。相手の言葉に対して返事をしようとした彼の心の作用がこの眼つきのためにちよつと遮断しゃだんされた。すると彼女はすぐ美しい齒を出して微笑した。同時に眼の表情があとかたもなく消えた。

「嘘うそよ。あたし芝居なんか行かなくつてもいいのよ。今のはただ甘つたれたのよ」

黙つた津田はなおしばらく細君から眼を放さなかつた。

「何だつてそんなむずかしい顔をして、あたしを御覧になるの。」

——芝居はもうやめるから、この次の日曜に小林さんに行つて手術を受けていらつしやい。それで好いでしょう。岡本へは二三にさんち日中じゅうに端書はがきを出すか、でなければ私がちよつと行つて断わつて

来ますから」

「御前は何つてもいいんだよ。せつかく誘つてくれたもんだから」
 「いえ私も止しよにするわ。芝居よりもあなたの健康の方が大事ですもの」

津田は自分の受けべき手術についてなお詳くわしい話を細君にしなければならなかった。

「手術つてたつて、そう腫物できものの膿うみを出すように簡単にや行かないだよ。最初下剤げざいをかけてまず腸を綺麗きれいに掃除しておいて、それからいよいよ切開すると、出血の危険があるかも知れないというので、創口きずぐちヘガーゼを詰めたまま、五六日の間はじつとして寝ているんだそうだから。だからたといこの次の日曜に行くとし

たところで、どうせ日曜一日じや済まないんだ。その代り日曜が延びて月曜になろうとも火曜になろうとも大した違にやならないし、また日曜を繰り上げて明日にしたところで、明後日にしたところで、やっぱり同じ事なんだ。そこへ行くとまあ楽な病気だね」「あんまり楽でもないわあなた、一週間も寝たぎりで動く事ができなくつちや」

細君はまたぴくぴくと眉を動かして見せた。津田はそれに全く無頓着であると云った風に、何か考えながら、二人の間に置かれた長火鉢の縁に右の肘を靠たせて、その中に掛けてある鉄瓶の蓋を眺めた。朱銅の蓋の下では湯の沸る音が高くした。

「じやどうしても御勤めを一週間ばかり休まなくつちやならない

わね」

「だから吉川^{よしかわ}さんに会って訳を話して見た上で、日取をきめようかと思つているところだ。黙つて休んでも構わないようなもののそうも行かないから」

「そりやあなた御話しになる方がいいわ。平生^{ふだん}からあんなに御世話になつてゐるんですもの」

「吉川さんに話したら明日^{あした}からすぐ入院しろつて云うかも知れない」

入院という言葉聞いた細君は急に細い眼を広げるようにした。

「入院？ 入院なさるんじゃないでしょう」

「まあ入院さ」

「だって小林さんは病院じゃないっていつかおっしやったじゃないの。みんな外来の患者ばかりだって」

「病院というほどの病院じゃないが、診療所の二階が空^あいてるもんだから、そこへ入^はいる事もできるようになってるんだ」

「綺麗^{きれい}？」

津田は苦笑した。

「自宅^{うち}よりは少しあ綺麗かも知れない」

今度は細君が苦笑した。

五

寝る前の一時間か二時間を机に向つて過ごす習慣になつていた津田はやがて立ち上つた。細君は今まで通りの楽な姿勢で火鉢ひばちに倚よりかかつたまま夫を見上げた。

「また御勉強？」

細君は時々立ち上がる夫に向つてこう云つた。彼女がこういう時には、いつでもその語調のうちに或物足らなさがあるように津田の耳に響いた。ある時の彼は進んでそれに媚こびようとした。あの時の彼はかえつて反感的にそれから逃のがれたくなつた。どちらの場合にも、彼の心の奥底には、「そう御前のような女とばかり遊んじやいられない。おれにはおれでする事があるんだから」という相手を見縊みくびつた自覚がぼんやり働らいていた。

彼が黙つて間の襖あいふすまを開けて次の室へやへ出て行こうとした時、細君はまた彼の背後うしろから声を掛けた。

「じゃ芝居はもうおやめね。岡本へは私から断つておきましょうね」

津田はちよつとふり向いた。

「だから御前はおいでよ、行きたければ。おれは今のような訳で、どうなるか分らないんだから」

細君は下を向いたぎり夫を見返さなかつた。返事もしなかつた。津田はそれぎり勾配こうばいの急な階子段はしごだんをぎしぎし踏んで二階あがへ上つた。

彼の机の上には比較的大きな洋書が一冊載のせてあつた。彼は坐

るなりそれを開いて枝折しおりの挿はさんである頁を目標ページめあてにそこから読みに
 かつた。けれども三四日等閑さんよつかなおざりにしておいた咎とがが祟たたつて、前
 後の続き具合がよく解らなかつた。それを考え出そうとするため
 には勢い前の所をもう一遍読み返さなければならぬので、氣の
 差さした彼は、読む事の代りに、ただ頁をばらばらひるがえと翻ひるがえして書物の
 厚味ばかりを苦にするように眺めた。すると前途りようえん遼遠りようえんという
 氣おのずが自から起つた。

彼は結婚後三四カ月目に始めてこの書物を手にした事を思い出
 した。氣がついて見るとそれから今日こんにちまでにもう二カ月以上も経た
 っているのに、彼の読んだ頁はまだ全体の三分の二にも足らな
 かつた。彼は平生から世間へ出る多くの人が、出るとすぐ書物に遠

ざかつてしまうのを、さも下らない愚物ぐぶつのように細君の前で罵ののっていた。それを夫の口癖として聴かされた細君はまた彼を本当の勉強家として認めなければならぬほど比較的多くの時間が二階で費やされた。前途遼遠という氣と共に、面目ないという心持がどこからか出て来て、意地悪く彼の自尊心を擦くすった。

しかし今彼が自分の前に拈ひろげている書物から吸収しようと力つとめている知識は、彼の日々の業務上に必要なものではなかった。それにはあまりに専門的で、またあまりに高尚過ぎた。学校の講義から得た知識ですら滅多めったに實際の役に立った例ためしのない今の勤め向きとはほとんど没交渉と云つてもいいくらいのものであった。彼はただそれを一種の自信力として貯たくわえておきたかった。他の注意

を惹ひく粧しょう飾よくとしても身に着けておきたかつた。その困難が今の彼に臃おぼろ氣げながら見えて来た時、彼は彼の己おの惚ぼれに訊きいて見た。
 「そう旨うまくは行かないものかな」

彼は黙もくつて煙草たばこを吹かした。それから急に氣がついたように書物を伏せて立ち上った。そうして足あし早はやに階子段をまたぎしぎし鳴らして下へ降りた。

六

「おいお延のぶ」
 彼は襖ふすま越ごしに細君の名を呼びながら、すぐ唐紙からかみを開けて茶

の間の入口に立った。すると長火鉢ながひばちの傍わきに坐っている彼女の前に、いつの間にか取り拵はなげられた美しい帯と着物の色がたちまち彼の眼に映った。暗い玄関から急に明るい電灯の点ついた室へやを覗いた彼の眼にそれが常よりも際立きわだって華麗はなやかに見えた時、彼はちよつと立ち留まつて細君の顔と派出はでやかな模様とを等分に見較みくらべた。

「今時分そんなものを出してどうするんだい」

お延は檜ひおうぎ扇模様の丸帯の端はじを膝の上に載せたまま、遠くから津田を見やった。

「ただ出して見たのよ。あたしこの帯まだ一遍も締しめた事がないんですもの」

「それで今度^{こんだ}その服装^{なり}で芝居^{しばや}に出かけようと云うのかね」

津田の言葉には皮肉に伴う或冷やかさがあつた。お延は何^{なん}にも答えずに下を向いた。そうしていつもする通り黒い眉^{まゆ}をぴくりと動かして見せた。彼女に特異なこの所作^{しよさ}は時として変に津田の心を唆^そかすと共に、時として妙に彼の氣持を悪くさせた。彼は黙つて縁側^{えんがわ}へ出て厠^{かわや}の戸を開けた。それからまた二階へ上がろうとした。すると今度は細君の方から彼を呼びとめた。

「あなた、あなた」

同時に彼女は立つて來た。そうして彼の前を塞^{ふさ}ぐようにして訊^きいた。

「何か御用なの」

彼の用事は今の彼にとって細君の帯よりも長襦袢ながじゆばんよりもむしろ大事なものであつた。

「御父さんからまだ手紙は来なかつたかね」

「いいえ来ればいつもの通り御机の上に載せておきますわ」

津田はその予期した手紙が机の上に載つていなかったから、わざわざ下りて来たのであつた。

「郵便函ゆうびんばこの中を探させましょうか」

「来れば書留だから、郵便函の中へ投げ込んで行くはずはないよ」

「そうね、だけど念のためだから、あたしちよいと見て来るわ」

御延は玄関の障子しょうじを開けて沓脱くつぬぎへ下りようとした。

「駄目だよ。書留がそんな中に入つてゐる訳がないよ」

「でも書留でなくってただのが入ってるかも知れないから、ちよつと待っていていらつしやい」

津田はようやく茶の間へ引き返して、先刻飯を食う時に坐つた座蒲団が、まだ火鉢の前に元の通り据えてある上に胡坐をかいた。そうしてそこに燦爛と取り乱された濃い友染模様の色を見守つた。

すぐ玄関から取つて返したお延の手にははたして一通の書状があつた。

「あつてよ、一本。ことによると御父さまからかも知れないわ」
こう云いながら彼女は明るい電灯の光に白い封筒を照らした。
「ああ、やっぱりあたしの思つた通り、御父さまからよ」

「何だ書留じやないのか」

津田は手紙を受け取るなり、すぐ封を切つて読み下した。しかしそれを読んでしまつて、また封筒へ収めるために巻き返した時には、彼の手がただ器械的に動くだけであつた。彼は自分の手元も見なければ、またお延の顔も見なかつた。ぼんやり細君のよそ^{ゆきぎ}行着の荒い御召^{おめし}の縞柄^{しまがら}を眺めながら独り^{ひと}ごとのように云つた。

「困るな」

「どうなすつたの」

「なに大した事じやない」

見栄^{みえ}の強い津田は手紙の中に書いてある事を、結婚してまだ間もない細君に話したくなかつた。けれどもそれはまた細君に話さ

なければならぬ事でもあった。

七

「今月はいつも通り送金ができないからそつちでどうか都合しておけというんだ。年寄はこれだから困るね。そんならそうともつと早く云つてくれればいいのに、突然金の要^いる間際^{まぎわ}になつて、こんな事を云つて来て……」

「いったいどういう訳なんでしよう」

津田はいったん巻き収めた手紙をまた封筒から出して膝^{ひざ}の上で繰り拵げた。

「貸家が二軒先月末に空いちまったんだそうだ。それから塞が^{ふさ}つて
る分からも家賃が入って来ないんだそうだ。そこへ持つて来て、
庭の手入だの垣根^{つくろ}の繕^{つくろ}いなので、だいぶ臨時費^{かき}が嵩^{かさ}んだから今月
は送れないって云うんだ」

彼は開いた手紙を、そのまま火鉢^{ひばち}の向う側にいるお延の手に渡
した。御延はまた何も云わずにそれを受取ったぎり、別に読もう
ともしなかった。この冷かな細君の態度を津田は最初から恐れて
いたのであった。

「なにそんな家賃なんぞ^{あて}当にしないだつて、送つてさえくれよう
と思えばどうにでも都合はつくのさ。垣根を繕うたつていくらか
かるものかね。煉瓦^{れんが}の塀^{へい}を一丁も^{こしら}拵えやしまいし」

津田の言葉に偽いつわりはなかった。彼の父はよし富裕でないまでも、
 毎月息子夫婦のためにその生計の不足を補つてやるくらいの出
 費に窮する身分ではなかった。ただ彼は地味な人であつた。津田
 から云えば地味過ぎるぐらい質素であつた。津田よりもずっと派
 出で好きな細君から見ればほとんど無意味に近い節儉家であつた。
 「御父さまはきつと私わたし達が要らない贅ぜい沢たくをして、むやみに
 御金をばつぱつと遣つかうようにでも思つていらつしやるのよ。きつ
 とそうよ」

「うんこの前京都へ行つた時にも何だかそんな事を云つてたじや
 ないか。年寄はね、何でも自分の若い時の生計くらひを覚えていて、同
 年輩の今の若いものも、万事自分のして来た通りにしなければな

らないように考えるんだからね。そりや御父さんの三十もおれの三十も年齒としに變りはないかも知れないが、周囲ぐもりはまるで違っているんだからそうは行かないさ。いつかも会へ行く時會費はいくらだと訊きくから五円だつて云つたら、驚ろいて恐ろしいような顔をした事があるよ」

津田は平生ふだんからお延が自分の父を輕蔑けいべつする事を恐れていた。それでいて彼は彼女の前にわが父に対する非難がましい言葉を洩もらさなければならなかった。それは本当に彼の感じた通りの言葉であつた。同時にお延の批判に対して先手を打つという点で、自分と父の言訳にもなつた。

「で今月はどうするの。ただでさえ足りないところへ持つて来て、

あなたが手術のために一週間も入院なさると、またそっちの方でもいくらかかかるでしょう」

夫の手前老人に対する批評を憚はばかった細君わとうの話頭は、すぐ實際問題の方へ入って来た。津田の答は用意されていなかった。しばらくして彼は小声で独ひとりごと語のように云った。

「藤井の叔父に金があると、あすこへ行くんだが……」

お延は夫の顔を見つめた。

「もう一遍御父さまのところへ云って上げる訳にや行かないの。ついでに病気の事も書いて」

「書いてやれない事もないが、また何とかとか云って来られると面倒だからね。御父さんに捕まると、そりやなかなか埒らちは開あか

ないよ」

「でもほかに当^{あて}がなければ仕方なかないの」

「だから書かないとは云わない。こつちの事情が好く向うへ通じるようにする事はするつもりだが、何しろすぐの間には合わないからな」

「そうね」

その時津田は真^まともにお延の方を見た。そうして思い切ったよ
うな口調で云った。

「どうだ御前岡本さんへ行つてちよつと融通して貰つて来ないか」

「厭^{いや}よ、あたし」

お延はすぐ断つた。彼女の言葉には何の淀^{よど}みもなかった。遠慮と斟^{しん}酌^{やく}を通り越したその語氣が津田にはあまりに不意過ぎた。彼は相当の速力で走っている自動車を、突然停^とめられた時のような衝^{シヨック}撃を受けた。彼は自分に同情のない細君に対して氣を悪くする前に、まず驚ろいた。そうして細君の顔を眺めた。

「あたし、厭よ。岡本へ行つてそんな話をするのは」

お延は再び同じ言葉を夫の前に繰り返した。

「そうかい。それじゃ強^しいて頼まないでもいい。しかし……」

津田がこう云いかけた時、お延は冷かな（けれども落ちついた）

夫の言葉を、^{すく}掬つて追^おい退^のけるように^{さえぎ}遮った。

「だつて、あたしきまりが悪いんですもの。いつでも行^くたんびに、お延は好い所へ嫁に行つて仕合せだ、厄介はなし、生^{くら}計に困るんじやなしつて云われつけているところへ持つて来て、不意にそんな御金の話なんかすると、きつと変な顔をされるにきまつて
いるわ」

お延が一概に津田の依頼^{しりぞ}を斥^{しりぞ}けたのは、夫に同情がないというよりも、むしろ岡本に対する見^み栄^えに制^させられたのだという事がよくやく津田の腑^ふに落^おちた。彼の眼のうちに宿^すつた冷やかな光が消えた。

「そんなに楽な身分のように吹^{ふい}聴^{ちよう}しちや困るよ。買^かい被^ぶられ

るのもいいが、時によるとかえってそれがために迷惑しないとも限らないからね」

「あたし吹聴した覚おぼえなんかないわ。ただ向うでそうきめているだけよ」

津田は追ついきゆう窮きゆうもしなかった。お延もそれ以上説明する面倒を取らなかつた。二人はちよつと会話を途切とぎらした後でまた實際問題に立ち戻つた。しかし今まで自分の経済に関して余り心を痛めた事のない津田には、別にどうしようという分ぶんべつ別べつも出なかつた。「御父さんにも困つちまうな」というだけであつた。

お延は偶然思いついたように、今までそつちのけにしてあつた、自分の晴着と帯に眼を移した。

「これどうかしましたか」

彼女は金きんの入った厚い帯の端はじを手につけて、夫の眼に映るように、電灯の光に翳かざした。津田にはその意味がちよつと呑のみ込めなかった。

「どうかするって、どうするんだい」

「質屋へ持ってったら御金を貸してくれるでしょう」

津田は驚ろかされた。自分がいまだかつて経験した事のないようなやりくり算段さんだんを、嫁に來たての若い細君が、疾とくの昔から承知しているとすれば、それは彼にとって驚ろくべき価値のある発見に相違なかった。

「御前自分の着物かなんか質に入れた事があるのかい」

「ないわ、そんな事」

お延は笑いながら、さげす軽蔑むような口調で津田の問を打ち消した。

「じや質に入れるにしたところで様子が分らないだろう」

「ええ。だけどそんな事何でもないでしょう。入れると事がきまれば」

津田は極端な場合のほか、自分の細君にそうしたげび下卑た真似まねをさせたくなかった。お延は弁解した。

「時ときが知ってるのよ。あの婢おんなうちは宅にいる時分よく風呂敷包を抱えて質屋へ使いに行つた事があるんですつて。それから近頃じや端は書がきさえ出せば、向うから品物を受取りに来てくれるつていうじやありませんか」

細君が大事な着物や帯を自分のために提供してくれるのは津田にとって嬉しい事実であつた。しかしそれをあえてさせるのはまた彼にとつての苦痛にほかならなかつた。細君に対して氣の毒というよりもむしろ夫の^{ほこ}矜りを^{きずつ}傷けるという意味において彼は^{ちよ}躊躇した。

「まあよく考えて見よう」

彼は金策上何らの解決も与えずにまた二階へ^{あが}上つて行つた。

九

翌日津田は例のごとく自分の勤め先へ出た。彼は午前に一回ひ

よつくり階子段はしごだんの途中で吉川に出会った。しかし彼は下りがけ、
向は上りむこうのぼがけだったので、擦れ違すちがいていねいに叮嚀おじぎな御辞儀をしたぎり、
彼は何にも云わなかった。もう午飯ひるめしに間もないという頃、彼は
そつと吉川の室へやの戸たをたたいて、遠慮がちな顔を半分ほど中へ出
た。その時吉川は煙草たばこを吹かしながら客と話をしていた。その客
は無論彼の知らない人であつた。彼が戸を半分ほど開けた時、今
まで調子づいていたらしい主客の会話が突然止まつた。そうして
二人ともこつちを向いた。

「何か用かい」

吉川から先へ言葉をかけられた津田は室の入口で立ちどまつた。
「ちよつと……」

「君自身の用事かい」

津田は固^{もと}より表向の用事で、この室へ始^し終^{じゆう}出^{しゆつ}入^{にゆう}すべき人ではなかった。跋^{ばつ}の悪そうな顔つきをした彼は答えた。

「そうです。ちよつと……」

「そんなら後^{あと}にしてくれたまえ。今少し差^さ支^しえるから」

「はあ。気がつかない事をして失礼しました」

音のしないように戸を締^しめた津田はまた自分の机の前に歸つた。午後になつてから彼は二返^{にへん}ばかり同じ戸の前に立つた。しかし二返共吉川の姿はそこに見えなかった。

「どこかへ行かれたのかい」

津田は下へ降りたついでに玄関にいる給^{きゆうじ}使^しに訊^きいた。眼鼻だ

ちの整ったその少年は、石段の下に寝ている毛の長い茶色の犬の方へ自分の手を長く出して、それを段上へ招き寄せる魔術のごとくに口笛を鳴らしていた。

さつき

「ええ先刻御客さまといっしよに御出かけになりました。ことによると今日はもうこちらへは御帰りにならないかも知れませんよ」

でいり

毎日人の出入の番ばかりして暮しているこの給使は、少なくとも

もこの点にかけて、津田よりも確な予言者であつた。津田はだれが伴つて来たか分らない茶色の犬と、それからその犬を友達にしようとして大いに骨を折っているこの給使とをそのままにしておいて、また自分の机の前に立ち戻つた。そうしてそこで定刻まで例のごとく事務を執つた。

時間になった時、彼はほかの人よりも一足後おくれて大きな建物を
出た。彼はいつもの通り停留所の方へ歩きながら、ふと思い出し
たように、また隠ポケット袋から時計を出して眺めた。それは精密な
時刻を知るためよりもむしろ自分の歩いて行く方向を決するため
であつた。帰りに吉川の私宅うちへ寄つたものか、止したものかと考
えて、無意味に時計と相談したと同じ事であつた。

彼はとうとう自分の家とは反対の方角に走る電車に飛び乗つた。
吉川の不在勝な事をよく知り抜いている彼は、宅うちまで行つたところ
で必ず会えるとも思つていなかった。たまさかいたにしたところ
で、都合が悪ければ会わずに帰されるだけだという事も承知し
ていた。しかし彼としては時々吉川家の門を潜くぐる必要があつた。

それは礼儀のためでもあった。義理のためでもあった。また利害のためでもあった。最後には単なる虚栄心のためでもあった。

「津田は吉川と特別の知り合である」

彼は時々こういう事実を背中に背負^{しよ}つて見たくなつた。それからその荷を背負つたままみんなの前に立ちたくなつた。しかも自^{みずか}ら重んずるといった風の彼の平生の態度を毫^{ごう}も崩^{くず}さずに、この事実を背負つていたかつた。物をなるべく奥の方へ押し隠しながら、その押し隠しているところを、かえつて他^{ひと}に見せたがるのと同じような心理作用の下^{もと}に、彼は今吉川の玄関に立つた。そうして彼自身は飽^あくまでも用事のためにわざわざここへ来たものと自分を解釈していた。

十

厳め^{いか}しい表玄関の戸はいつもの通り締^しまっていた。津田はその
 上半部^{じょうはんぶ}に透^{すか}し彫^{ぼり}のように簞^はめ込まれた厚^{こう}い格子^{こうし}の中を何気なく
 覗^{のぞ}いた。中には大きな花崗^{みかげいし}石^{いし}の沓^{くつ}脱^{ぬぎ}が静かに横たわっていた。
 それから天^{てん}井^{じょう}の真中^{まんなか}から蒼^{あお}黒^{くろ}い色^{いろ}をした鋳^い物^{もの}の電灯^{でんとう}笠^{がさ}が
 下がっていた。今までついぞここに足を踏み込んだ例^{たとえ}のない彼は
 わざとそこを通り越して横手へ廻^{まわ}った。そうして書生部屋^{しやせいへ}のすぐ
 傍^{そば}にある内玄関^{ないげんかん}から案内^{あんない}を頼^{たの}んだ。

「まだ御歸^{ごき}りになりません」

こくらはかま
小倉の袴を着けて彼の前に膝をついた書生の返事は簡単であつた。それですぐ相手が帰るものと呑み込んでいるらしい彼の様子が少し津田を弱らせた。津田はどうとう折り返して訊いた。

「奥さんはおいでですか」

「奥さんはいらつしやいます」

事実を云うと津田は吉川よりもかえつて細君の方と懇意であつた。足をここまで運んで来る途中の彼の頭の中には、すでに最初から細君に会おうという気分がだいぶ働らいていた。

「ではどうぞ奥さんに」

彼はまだ自分の顔を知らないこの新らしい書生に、もう一返取次を頼み直した。書生は厭な顔もせず奥へ入った。それからま

た出て来た時、少し改まった口調で、「奥さんが御目におかかりになるとおっしゃいますからどうぞ」と云つて彼を西洋建の応接間へ案内した。

彼がそこにある椅子に腰をかけるや否や、まだ茶も 苳たばこ盆ぼんも運ばれない先に、細君はすぐ顔を出した。

「今御帰りがけ？」

彼はおろした腰をまた立てなければならなかった。

「奥さんはどうなすつて」

津田の挨拶あいさつに軽い会釈えしやくをしたなり席に着いた細君はすぐこゝう訊きいた。津田はちよつと苦笑した。何と返事をしていいか分らなかった。

「奥さんができたせいかな近頃はあんまり宅^{うち}へいらつしやらなくなつたようね」

細君の言葉には遠慮も何もなかった。彼女は自分の前に年齢^{とし}下の男を見るだけであつた。そうしてその年齢下の男はかねて眼^め下の男であつた。

「まだ嬉しいんでしよう」

津田は軽く砂を揚げて来る風を、じつとしてやり過^{すご}す時のように、おとなしくしていた。

「だけど、もうよっぽどになるわね、結婚なすつてから」

「ええもう半^{はん}歳^{とし}と少しになります」

「早いものね、ついこの間^{あいだ}だと思つていたのに。——それでどう

なのこの頃は」

「何がです」

「御夫婦仲がよ」

「別にどうという事ありません」

「じやもう嬉しいところは通り越しちまったの。嘘^{うそ}をおつしやい」

「嬉しいところなんか始めからないんですから、仕方がありません」

「じやこれからよ。もし始めからないなら、これからよ、嬉しいところの出て来るのは」

「ありがとう、じや楽しみにして待っていますよう」

「時にあなた御いくつ？」

「もうたくさんです」

「たくさんじゃないわよ。ちよつと伺いたいから伺ったんだから、正直に淡泊さつぱりとおっしゃいよ」

「じゃ申し上げます。実は三十です」

「すると来年はもう一ね」

「順に行けばまあそうなる 勘かんじよう定じようです」

「お延さんは？」

「あいつは三です」

「来年？」

「いえ今年」

十一

吉川の細君はこんな調子でよく津田に調戲からかった。機嫌きげんの好い時はなおさらであつた。津田も折々は向うを調戲い返した。けれども彼の見た細君の態度には、笑談しょうだんとも真面目まじめとも片のつかない或物が閃ひらめく事がたびたびあつた。そんな場合に出会ふと、根強い性質たちに出来上つている彼は、談話の途中でよく拘泥こだわつた。そうしてもし事情が許すならば、どこまでも話の根を掘ほじつて、相手の本意を突き留めようとした。遠慮のためにそこまで行けない時は、黙つて相手の顔色だけを注視した。その時の彼の眼には必然の結果としていつでも軽い疑いの雲がかかった。それが臆病に

も見えた。注意深くも見えた。または自衛的に慢^{たか}ぶる神経の光を放つかのごくにも見えた。最後に、「思慮^みに充ちた不安」とでも形容してしかるべき一種の匂も帯びていた。吉川の細君は津田に会うたんびに、一度か二度きつと彼をそこまで追い込んだ。津田はまたそれと自覚しながらいつの間^まにかそこへ引き摺^ずり込まれた。

「奥さんはずいぶん意地が悪いですね」

「どうして？ あなた方^{がた}の御年齒^{おとし}を伺ったのが意地が悪いの」

「そう云う訳でもないですが、何だか意味のあるような、またなような訊^きき方をしておいて、わざとその後^{あと}をおつしやらないんだから」

「後なんかありやしないわよ。いったいあなたはあんまり研究家だから駄目ね。学問をするには研究が必要かも知れないけれども、交際に研究は禁物きんもつよ。あなたがその癖をやめると、もつと人ひと好きのする好い男になれるんだけれども」

津田は少し痛かった。けれどもそれは彼の胸に来る痛さで、彼の頭こたに伝つたえる痛さではなかった。彼の頭はこの露骨な打撃の前に冷然として相手を見下みくだしていた。細君は微笑した。

「嘘うそだと思うなら、帰ってあなたの奥さんに訊きいて御覧遊ばせ。お延さんもきつと私と同意見だから。お延さんばかりじゃないわ、まだほかにもう一人あるはずよ、きつと」

津田の顔が急に堅くなった。唇くちびるの肉が少し動いた。彼は眼を自

分の膝ひざの上に落したぎり何も答えなかった。

「解つたでしよう、誰だか」

細君は彼の顔を覗のぞき込むようにして訊きいた。彼は固もとよりその誰であるかをよく承知していた。けれども細君の云う事を肯定する気は毫ごうもなかった。再び顔を上げた時、彼は沈黙の眼を細君の方に向けた。その眼が無言の裡うちに何を語っているか、細君には解らなかった。

「御氣さわに障さわつたら堪かん忍にんしてちようだい。そう云うつもりで云つたんじゃないんだから」

「いえ何とも思つちやいません」

「本当に？」

「本当に何とも思っちゃいません」

「それでやっと安心した」

細君はすぐ元の軽い調子を恢復かいふくした。

「あなたまだどこか子供子供したところがあるのね、こうして話していると。だから男は損なようでやっぱり得とくなのね。あなたはそら今おっしやった通りちようどでしょう、それからお延さんが今年三になるんだから、年齒でいうと、よっぽど違うんだけれども、様子からいうと、かえって奥さんの方が更ふけてるくらいよ。更けてると云つちや失礼に当るかも知れないけれども、何と云つたらいいでしょうね、まあ……」

細君は津田を前に置いてお延の様子を形容する言葉を思案する

らしかった。津田は多少の好奇心をもつて、それを待ち受けた。
「まあ老成ろうせいよ。本当に伶俐りこうな方かたね、あんな伶俐りこうな方は滅多めったに見
た事がない。大事にして御上げなさいよ」

細君の語勢からいうと、「大事にしてやれ」という代りに、
「よく気をつけろ」と云つても大した変りはなかつた。

十二

その時二人の頭の上に下さがつてゐる電灯がぱつと点ついた。先刻さつき取
次に出た書生がそつと室へやの中へ入つて来て、音のしないようにブ
ラインドを卸おろして、また無言のまま出て行つた。瓦斯ガス煖炉だんろの色

のだんだん濃くなつて来るのを、最前さいぜんから注意して見ていた津田は、黙つて書生の後姿を目送もくそうした。もう好い加減に話を切り上げて帰らなければならないという気がした。彼は自分の前に置かれた紅茶茶碗の底に冷たく浮いている檸檬レモンの一切ひとときれを除けるようにしてその余りを残すりなく啜すつた。そうしてそれを相図あいずに、自分の持つて来た用事を細君に打ち明けた。用事は固もとより単簡たんかんであつた。けれども細君の諾否だくひだけですぐ決定されべき性質のものではなかつた。彼の自由に使用したいという一週間前後の時日を、月のどこへ置いていいか、そこは彼女にもまるで解らなかつた。「いつだつて構くやしないでしょう。繰くり合せあわさえつけば」

彼女はさも無雑作むぞうさな口ぶりで津田に好意を表してくれた。

「無論繰合せはつくようにしておいたんですが……」

「じゃ好いじゃありませんか。明日あしたから休んだって」

「でもちよつと伺つた上でない」と

「じゃ帰つたら私からよく話しておきましょう。心配する事も何にもないわ」

細君は快よく引き受けた。あたかも自分が他のひとのために働らいてやる用事がまた一つできたのを喜こぶようにも見えた。津田はこの機嫌きげんのいい、そして同情のある夫人を自分の前に見るのが嬉しうれかった。自分の態度なり所作しよさなりが原動力になつて、相手をそうさせたのだという自覚が彼をなおさら嬉しくした。

彼はある意味において、この細君から子供扱いにされるのを好す

いていた。それは子供扱いにされるために二人の間に起る一種の親しみを自分が握る事ができたからである。そうしてその親しみをよくよく立ち割って見ると、やはり男女両性の間にしか起り得ない特殊な親しみであつた。例えて云うと、或人が茶屋女などに突然背中を打^どやされた刹那^{せつな}に受ける快感に近い或物であつた。

同時に彼は吉川の細君などがどうしても子供扱いにする事のできない自己^{ゆたか}を裕にもつていた。彼はその自己をわざと押し蔵^{かく}して細君の前に立つ用意を忘れなかつた。かくして彼は心置なく細君から^{なぶ}翻られる時の軽い感じを前に受けながら、背後はいつでも自分の築いた厚い重い壁に^よ寄りかかつていた。

彼が用事を済まして椅子^{いす}を離れようとした時、細君は突然口を

開ひらいた。

「また子供のううなのように泣いたり唸うなったりしちやいけませんよ。大きな体なりをして」

津田は思わず去年の苦痛を思い出した。

「あの時は実際弱りました。唐紙からかみの開閉あけたてが局部こたにこた応えて、そのたんびにぴくんぴくんと身体全体からだが寢床ねどこの上で飛び上ったくらいなんです。しかし今度は大丈夫です」

「そう？ 誰が受合くちはばつてくれたの。何だか解とつたもんじやないわね。あんまり口幅くちはばつたい事をおつしやると、見届けに行きますよ」

「あなたに見舞みまいに来ていただけのような所じやありません。狭く

つて汚なくつて変な部屋なんですから」

「いっこう構わないわ」

細君の様子は本気なのか調戲^{からか}うのかちよつと要領を得なかった。

医者の専門が、自分の病氣以外の或方面に属するので、婦人などはあまりそこへ近づかない方がいいと云おうとした津田は、少し^{くちこも}口籠^{ちゆうちよ}つて躊躇^{ちゆうちよ}した。細君は虚に乗じて肉薄した。

「行きますよ、少しあなたに話す事があるから。お延さんの前じや話しくい事なんだから」

「じゃそのうちまた私の方から伺います」

細君は逃げるようにして立った津田を、笑い声と共に応接間から送り出した。

十三

往来へ出た津田の足はしだいに吉川の家を遠ざかった。けれども彼の頭は彼の足ほど早く今までいた応接間を離れる訳に行かなかった。彼は比較的人通りの少ない宵闇よいやみの町を歩きながら、やはり明るい室内の光景をちらちら見た。

冷たそうに燦きらつく肌はだ合あいの七宝製しっぽうの花か瓶びん、その花瓶なめの滑らかな表面に流れる華麗はなやかな模様の色、卓上に運ばれた銀きせの丸盆、同じ色の角砂糖入と牛乳入、蒼黒あおぐろい地じの中に茶の唐草からくさ模様を浮かした重そうな窓掛、三隅みすみに金箔きんぱくを置いた装飾用のアルバム、

——こういうものの強い刺戟しげきが、すでに明るい電灯の下もとを去つて、暗い戸外へ出た彼の眼の中を不秩序に往来した。

彼は無論この渦うずまく色の中に坐っている女主人公の幻影を忘れる事ができなかった。彼は歩きながら先刻彼女と取り換さつきわせた会話を、ぽつりぽつり思い出した。そうしてその或部分に來ると、あたかも炒いり豆まめを口に入れた人のように、咀そ嚼しゃくしつつ味わつた。「あの細君はことによると、まだあの事件について、おれに何か話をする気かも知れない。その話を実はおれは聞きたくないのだ。しかしまた非常に聞きたいのだ」

彼はこの矛盾した両面を自分の胸うちの中で自分に公言した時、たちまちわが弱点を曝露ばくろした人のように、暗い路の上で赤面した。

彼はその赤面を通り抜けるために、わざとすぐ先へ出た。

「もしあの細君があゝの事件についておれに何か云い出す気がある
とすると、その主意ははたしてどこにあるだろう」

今の津田はけつしてこの問題に解決を与える事ができなかった。

「おれに調戲^{からか}うため？」

それは何とも云えなかった。彼女は元来他^{ひと}に調戲^すう事の好きな女

であつた。そうして二人の間^{あいだがら}柄はその方面の自由を彼女に与

えるに充分であつた。その上彼女の地位は知らず知らずの間に今

の彼女を放慢にした。彼を焦^しらす事から受け得られる単なる快感

のために、遠慮^{うち}の埒^{まち}を平気で跨^{また}ぐかも知れなかった。

「もしそうでないとしたら、……おれに対する同情のため？ お

れを^{ひいき}贖^{ひいき}負にし過ぎるため？」

それも何とも云えなかった。今までの彼女は實際彼に対して親切でもあり、また贖^{ひいき}負にもしてくれた。

彼は広い通りへ来てそこから電車へ乗った。堀^{ほり}端^{ばた}を沿うて走

るその電車の窓硝子^{まどガラス}の外には、黒い水と黒い土手と、それから

その土手の上に蟠^{わだか}まる黒い松の木が見えるだけであつた。

車内の片隅^{かたすみ}に席を取つた彼は、窓^{すか}を透してこのさむぎむしい

秋の夜の景色^{けしき}にちよつと眼を注いだ後^{あと}、すぐまたほかの事を考え

なければならなかつた。彼は面倒になつて昨夕^{ゆうべ}はそのままにして

おいた金の工面^{くめん}をどうかしなければならぬ位^{いち}地にあつた。彼は

すぐまた吉川の細君の事を思い出した。

「先刻事情^{さつき}を打ち明けてこつちから云い出しさえすれば訳はなかつたのに」

そう思うと、自分が氣を利^きかしたつもりで、こう早く席を立つて来てしまったのが残り惜しくなった。と云つて、今さらその用事だけで、また彼女に会いに行く勇氣は彼には全くなかつた。

電車を下りて橋を渡る時、彼は暗い欄干^{らんかん}の下に蹲踞^{うずく}まる乞食^{こじき}を見た。その乞食は動く黒い影のように彼の前に頭を下げた。彼は身に薄い外套^{がいとう}を着けていた。季節からいうとむしろ早過ぎるガス^{ガス}だんろ^{だんろ}瓦斯^{瓦斯}暖炉^{だんろ}の温かい^{ほのお}をもう見て来た。けれども乞食と彼との懸隔^{けんかく}は今の彼の眼中にはほとんど入^{はい}る余地がなかつた。彼は窮した人のように感じた。父が例月の通り金を送ってくれないのが不

都合に思われた。

十四

津田は同じ気分で自分の宅の門前まで歩いた。彼が玄関の格子へ手を掛けようとすると、格子のまだ開かない先に、障子の方がすうと開いた。そうしてお延の姿がいつの間にか彼の前に現われていた。彼は吃驚したように、薄化粧を施こした彼女の横顔を眺めた。

彼は結婚後こんな事でよく自分の細君から驚ろかされた。彼女の行為は時として夫の先を越すという悪い結果を生む代りに、時

としては非常に氣の利いた証拠をも挙げた。日常瑣末の事件のうち、よくこの特色を發揮する彼女の所作を、津田は時々自分の眼先にちらつく洋刀ナイフの光のように眺める事があつた。小さいながら冴さえているという感じと共に、どこか氣味の悪いという心持も起つた。

咄嗟とつさの場合津田はお延が何かの力で自分の歸りを予感したように思った。けれどもその訳を訊きく氣にはならなかつた。訳を訊いて笑いながらはぐらかされるのは、夫の敗北のように見えた。

彼は澄まして玄関から上へ上がった。そうしてすぐ着物を着換えた。茶の間の火鉢ひばちの前には黒塗の足のついた膳ぜんの上に布巾ふきんを掛けたのが、彼の歸りを待ち受けるごとくに据すえてあつた。

「今日もどこかへ御廻り？」

津田が一定の時刻に宅へ帰らないと、お延はきつとこういう質問を掛けた。勢い津田は何とか返事をしなければならなかった。しかしそう用事ばかりで遅くなるとも限らないので、時によると彼の答は変に曖昧なものになった。そんな場合の彼は、自分のために薄化粧をしたお延の顔をわざと見ないようにした。

「あてて見ましょうか」

「うん」

今日の津田はいかにも平気であった。

「吉川さんでしょう」

「よくあたるね」

「たいてい容子ようすで解りますわ」

「そうかね。もつとも昨夜ゆうべ吉川さんに話をしてから手術の日取りをきめる事にしようって云ったんだから、あたる訳は訳だね」

「そんな事がなくったって、妾あかしあてるわ」

「そうか。偉いね」

津田は吉川の細君に頼んで来た要点だけをお延に伝えた。

「じやいつから、その治療に取りかかるの」

「そういう訳だから、まあいつからでも構わないようなもんだけれども……」

津田の腹には、その治療にとりかかる前に、是非金の工面くめんをしなければならぬという屈託くつたくがあつた。その額は無論大したも

のではなかった。しかし大した額でないだけに、これという簡便な調達方ちようだつかたの胸に浮ばない彼を、なお焦いらつかせた。

彼は神田にいる妹いもとの事をちよつと思ひ浮べて見たが、そこへ足を向ける気にはどうしてもなれなかった。彼が結婚後家計膨ぼうちよ脹うという名義の下に、毎月まいげつの不足を、京都にいる父から填補てんぽして貰もらう事になった一面には、盆暮ぼんくれの賞与で、その何分なんぶんかを返済するという条件があつた。彼はいろいろの事情から、この夏その条件を履行りこうしなかつたために、彼の父はすでに感情を害していた。それを知っている妹はまた大体の上においてむしろ父の同情者であつた。妹の夫の手前、金の問題などを彼女の前に持ち出すのを最初から屑いさぎよしとしなかつた彼は、この事情のために、な

おさら堅くなつた。彼はやむをえなければ、お延の忠告通り、もう一返父に手紙を出して事情を訴えるよりほかに仕方がないと思つた。それには今の病気を、少し手重ておもに書くのが得策だろうとも考えた。父母ふぼに心配をかけない程度で、実際の事実に多少の光沢つやを着けるくらいの事は、良心の苦痛を忍ばないで誰にでもできる手加減であつた。

「お延昨夜お前ゆうべの云つた通りもう一遍御父さんに手紙を出そうよ」「そう。でも……」

お延は「でも」と云つたなり津田を見た。津田は構わず二階へ上あがつて机の前に坐つた。

十五

西洋流のレターペーパーを使いつけた彼は、机の抽斗^{ひきだし}からラヴェンダー色の紙と封筒とを取り出して、その紙の上へ万年筆で何心なく二三行書きかけた時、ふと気がついた。彼の父は洋筆^{ペン}や万年筆でだらしなく綴^{つづ}られた言文一致の手紙などを、自分の倅^{せがれ}から受け取る事は平生^{ひごろ}からあまり喜こんでいなかった。彼は遠くにいる父の顔を眼の前に思い浮べながら、苦笑して筆を擱^おいた。手紙を書いてやったところでとうてい効能^{ききめ}はあるまいという気が続いて起った。彼は木炭紙に似たざらつく厚い紙の余りへ、山羊髯^{やぎひげ}を生やした細^ほ面^{そおもて}の父の顔をいたずらにスケッチして、どうし

ようかと考えた。

やがて彼は決心して立ち上った。襖ふすまを開けて、二階の上り口あがぐちの所に出て、そこから下にいる細君を呼んだ。

「お延お前の所に日本の巻紙と状袋があるかね。あるならちよいとお貸し」

「日本の？」

細君の耳にはこの形容詞が変に滑稽こっけいに聞こえた。

「女のならあるわ」

津田はまた自分の前に粹いきな模様入の半切はんきりを拡ひろげて見た。

「これなら気に入るかしら」

「中さえよく解るように書いて上げたら紙なんかどうでもよかな

いの」

「そうは行かないよ。御父さんはあれでなかなかむずかしいんだからね」

津田は真面目な顔をしてなお半切を見つめていた。お延の口元には薄笑いの影が差した。

「時をちよいと買わせにやりましょうか」

「うん」

津田は生返事をした。白い巻紙と無地の封筒さえあれば、必ず自分の希望が成功するという訳にも行かなかった。

「待っていらつしやい。じきだから」

お延はすぐ下へ降りた。やがて潜り戸が開いて下女の外へ出る

足音が聞こえた。津田は必要の品物が自分の手に入るまで、何もせずに、ただ机の前に坐つて煙草^{たばこ}を吹かした。

彼の頭は勢い彼の父を離れなかった。東京に生れて東京に育つたその父は、何ぞというとすぐ上方^{かみがた}の悪口^{わるくち}を云いたがる癖に、いつか永住の目的をもつて京都に落ちついてしまった。彼がその土地を余り好まない母に同情して多少不賛成^もの意を洩らした時、父は自分で買った土地と自分が建てた家とを彼に示して、「これをどうする気か」と云った。今よりもまだ年の若かった彼は、父の言葉の意味さえよく解らなかった。所置はどうでもできるのになと思つた。父は時々彼に向つて、「誰のためでもない、みんな御前のためだ」と云つた。「今はそのありがた味^みが解らないかも知

れないが、おれが死んで見ろ、きっと解る時が来るから」とも云った。彼は頭の中で父の言葉と、その言葉を口にする時の父の態度とを描き出した。子供の未来の幸福を一手に引き受けたような自信に充ちたその様子が、近づくべからざる予言者のように、彼には見えた。彼は想像の眼で見る父に向つて云いたくなつた。

「御父さんが死んだ後で、一度に御父さんのありがた味が解るよりも、お父さんが生きているうちから、毎月正確にお父さんのありがた味が少しずつ解る方が、どのくらい楽だか知れやしません」

彼が父の機嫌を損ないような巻紙の上へ、なるべく金を送つてくれそうな文句を、堅苦しい候文で認め出したのは、それから約

十分後であつた。彼はぎごちない思いをして、ようやくそれを書き上げた後で、もう一遍読み返した時に、自分の字の拙い事にくづく愛想を尽かした。文句はとにかく、こんな字ではどうてい成功する資格がないようにも思つた。最後に、よし成功しても、こつちで要る期日まで金はとも来ないような気がした。下女にそれを投函させた後、彼は黙つて床の中へ潜り込みながら、腹の中で云つた。

「その時はその時の事だ」

十六

翌日の午後津田は呼び付けられて吉川の前に立った。

「昨日^{きのう}宅へ来たってね」

「ええちよつと御留守へ伺つて、奥さんに御目にかかつて参りました」

「また病氣だそうじゃないか」

「ええ少し……」

「困るね。そうよく病氣をしちや」

「何実はこの前の続きです」

吉川は少し意外そうな顔をして、今まで使っていた食後の小楊^{こよう}子^{うじ}を口から吐き出した。それから内隠袋^{うちがくし}を探^{さが}つて、苳^{たばこ}入^{いれ}を取^とり出そうとした。津田はすぐ灰皿の上にあつた燐寸^{マッチ}を擦^すつた。あ

まり氣を利か^きそうとして急^せいたものだから、一本目は役に立たないで直ぐ消えた。彼は周章^{あわ}てて二本目を擦^あつて、それを大事そうに吉川の鼻の先へ持つて行つた。

「何しろ病氣なら仕方がない、休んでよく養生したらいいだろう」
津田は礼を云つて室^{へや}を出ようとした。吉川は煙^{けむ}りの間から訊^きいた。

「佐々木には斷つたろうね」

「ええ佐々木さんにもほかの人にも話して、繰^くり合せ^{あわ}をして貰^{もら}う事にしてあります」

佐々木は彼の上^{うわ}役^{やく}であつた。

「どうせ休むなら早い方がいいね。早く養生して早く好^よくなつて、

そうしてせっせと働らなくなつちや駄目だ」

吉川の言葉はよく彼のきしやうの氣性を現わしていた。

「都合がよければ明日あしたからにしたまえ」

「へえ」

こう云われた津田は否いや応おうなしに明日から入院しなければなら
ないような心持がした。

彼の身体からだが半分戸の外へ出かかった時、彼はまた後うしろから呼びと
められた。

「おい君、お父さんは近頃どうしたね。相変らずお丈夫かね」
ふり返った津田の鼻を葉巻の好に香においが急おかに冒した。

「へえ、ありがとう、お蔭かげさまで達者でございます」

「大方詩でも作って遊んでるんだらう。気楽で好いね。昨夕^{ゆうべ}も岡本と或所で落ち合つて、君のお父さんの噂^{うわさ}をしたがね。岡本も羨^{うらや}ましがつてたよ。あの男も近頃少し閑暇^{ひま}になつたようなものやっぱり、君のお父さんのようにや行かないからね」

津田は自分の父がけつしてこれらの人から羨^{うら}やましがられてい
るとは思わなかつた。もし父の境遇に彼らをおいてやろうとい
うものがあつたなら、彼らは苦笑して、少なくとももう十年はこ
のままにしておいてくれと頼むだろうと考えた。それは固^{もと}より自
分の性格から割り出した津田の觀察に過ぎなかつた。同時に彼らの
性格から割り出した津田の觀察でもあつた。

「父はもう時勢^{じせい}後^{おく}れですから、ああでもして暮らしているより

ほかに仕方がございません」

津田はいつの間にかまた室の中に戻つて、元通りの位置に立つていた。

「どうして時勢後れどころじゃない、つまり時勢に先だっているから、ああした生活が送れるんだ」

津田は挨拶あいさつに窮した。向うの口の重宝ちようほうなのに比べて、自分の口の不重宝ぶちようほうさが荷になった。彼は手持無沙汰てもちぶさたの気味で、緩ゆるく消えて行く葉巻の煙りを見つめた。

「お父さんに心配を掛けちゃいけないよ。君の事は何でもこつちに分つてゐるから、もし悪い事があると、僕からお父さんの方へ知らせるやうな、好いかね」

津田はこの子供に対するような、笑じょうだん談とも訓戒とも見分みわけのつかない言葉を、苦笑しながら聞いた後で、ようやく室外に逃のがれた。
出た。

十七

その日の帰りがけに津田は途中で電車を下りて、停留所から賑にぎやかな通りを少し行つた所で横へ曲つた。質屋の暖簾のれんだの碁会ごかいし所よの看板だの鳶とびの頭かしらのいそうな格子戸こうしどづく作りだのを左右に見ながら、彼は彎わんきよく曲した小路こうじの中ほどにある擦硝すりガラス子張はりの扉を外から押して内へ入った。扉の上部に取り付けられた電鈴ベルが鋭どい音

を立てた時、彼は玄関の突き当りの狭い部屋から出る四五人の眼の光を一度に浴びた。窓のないその室は狭いばかりでなく實際暗かった。外部から急に入つて来た彼にはまるで穴蔵のような感じを与えた。彼は寒そうに長椅子の片隅へ腰をおろして、たつた今暗い中から眼を光らして自分の方を見た人達を見返した。彼らの多くは室の真中に出してある大きな瀬戸物火鉢の周囲を取り巻くようにして坐っていた。そのうちの二人は腕組のまま、二人は火鉢の縁に片手を翳したまま、ずっと離れた一人はそこに取り散らした新聞紙の上へ甜めるように顔を押し付けたまま、また最後の一人は彼の今腰をおろした長椅子の反対の隅に、心持身体を横にして洋袴の膝頭を重ねたまま。

電鈴ベルの鳴った時申し合せたように戸口をふり向いた彼らは、一いち瞥べつの後また申し合せたように静かになってしまった。みんな黙もくつて何事かを考え込んでいるらしい態度で坐っていた。その様子が津田の存在に注意を払わないというよりも、かえつて津田から注意されるのを回避するのだとも取れた。単に津田ばかりでなく、お互に注意され合う苦痛はばを憚はばかつて、わざとそつぽへ眼を落して、いるらしくも見えた。

この陰気な一いちぐん群の人々は、ほとんど例外なしに似たり寄つたりの過去をもっているものばかりであつた。彼らはこうして暗い控室はなの中で、静かに自分の順番の来るのを待つてゐる間に、むしろ華はなやかに彩いろどられたその過去の断片のために、急に黒い影を投げ

かけられるのである。そうして明るい所へ眼を向ける勇氣がないので、じつとその黒い影の中に立ち竦すくむようにして閉じ籠こもつているのである。

津田は長椅子の肱ひじ掛かけに腕を載せて手を額にあてた。彼は黙もく禱とうを神に捧げるようなこの姿勢のもとに、彼が去年の暮以来この医者家で思いがけなく会った二人の男の事を考えた。

その一人は事実彼の妹いも婿むこにほかならなかった。この暗い室の中で突然彼の姿を認めた時、津田は吃驚びっくりした。そんな事に対して比較的無頓着むとんじやくな相手も、津田の驚ろき方が反響したために、ちよつと挨拶あいさつに窮したらしかった。

他の一人は友達であつた。これは津田が自分と同性質の病氣に

雇^{かか}っているものと思ひ込んで、向うから平氣に声をかけた。彼らはその時二人いっしょに医者^{セックス}の門を出て、晩飯を食いながら、性と愛^{ラブ}という問題についてむずかしい議論をした。

妹婿の事は一時の驚ろきだけで、大した影響もなく済んだが、それ^{あと}ぎり以後のなさそうに思えた友達と彼との間には、その後異^ご常な結果が生れた。

その時の友達の言葉と今の友達の境遇とを連結して考えなければならなかつた津田は、突然衝^{シヨック}撃を受けた人のように、眼を開いて額から手を放した。

すると診察所から紺^{こん}セルの洋服を着た三十恰好^{がっこう}の男が出て来て、すぐ薬局の窓の所へ行つた。彼が隠^{かくし}袋から紙入を出して金を払お

うとする途端^{とたん}に、看護婦が敷居の上に立った。彼女と見知り越^{ごし}の津田は、次の患者の名を呼んで再び診察所の方へ引き返そうとする彼女を呼び留めた。

「順番を待っているのが面倒だからちよつと先生に訊^きいて下さい。
明日^{あした}か明後日^{あさつて}手術を受けに来て好いかつて」

奥へ入った看護婦はすぐまた白い姿を暗い室^{へや}の戸口に現わした。
「今ちようど二階が空^あいておりますから、いつでも御都合の宜^{よろ}しい時にどうぞ」

津田は逃^{のが}れるように暗い室を出た。彼が急いで靴を穿^はいて、擦^す硝子張^{りガラス張り}の大きな扉を内側へ引いた時、今まで真暗に見えた控室にぱつと電灯が点^ついた。

十八

津田の宅へ歸つたのは、昨日よりはやや早目であつたけれども、近頃急に短かくなつた秋の日脚は疾くに傾いて、先刻まで往来にだけ残つていた肌寒の余光が、一度に地上から払い去られるように消えて行く頃であつた。

彼の二階には無論火が点いていなかった。玄関も真暗であつた。今角の車屋の軒灯を明らかに眺めて来たばかりの彼の眼は少し失望を感じた。彼はがらりと格子を開けた。それでもお延は出て来なかつた。昨日の今頃待ち伏せでもするようにして彼女から毒

気を抜かれた時は、余り好い心持もしなかったが、こうして迎える人もない真暗な玄關に立たされて見ると、やっぱり昨日の方が愉快だったという気が彼の胸のどこかでした。彼は立ちながら、「お延お延」と呼んだ。すると思いがけない二階の方で「はい」という返事がした。それから階子段はしごだんを踏んで降りて来る彼女の足音が聞こえた。同時に下女が勝手の方から馳かけ出して来た。

「何をしているんだ」

津田の言葉には多少不満の響きがあった。お延は何にも云わなかった。しかしその顔を見上げた時、彼はいつもの通り無言の裡うちに自分を牽ひきつけようとする彼女の微笑を認めない訳に行かなかった。白い歯が何より先に彼の視線を奪った。

「二階は真暗じゃないか」

「ええ。何だかぼんやりして考えていたもんだから、つい御帰りに気がつかなかったの」

「寝ていたな」

「まさか」

下女が大きな声を出して笑い出したので、二人の会話はそれぎり切れてしまった。

湯に行く時、お延は「ちよつと待つて」と云いながら、石鹼と^{てぬぐい}手拭を例の通り彼女の手から受け取つて火鉢の傍を離れようと^{ひばち そば}する夫を引きとめた。彼女は^{うし むき}後ろ向になつて、^{かさ}重ね^{だんす}箆笥の一番下の^{ひきだし}抽斗から、ネルを重ねた^{めいせん}銘仙の^{どてら}襦袢を出して夫の前へ置く

た。

「ちよつと着てみてちようだい。まだ圧おしが好く利きいていないかも知れないけども」

津田は煙けむに巻かれたような顔をして、黒八丈くろはちようの襟えりのかかった荒い豎たて縞しまの襦どてら袍みまを見守もった。それは自分の買った品でもなければ、拵こしらえてくれと誂あつらえた物でもなかった。

「どうしたんだい。これは」

「拵えたのよ。あなたが病院へ入る時の用心に。ああいう所で、あんまり変な服装なりをしているのは見つともないから」

「いつの間に拵えたのかね」

彼が手術のため一週間ばかり家うちを空あけなければならぬと云つ

て、その訳をお延に話したのは、つい二三日前の事であつた。その上彼はその日から今日に至るまで、ついぞ針を持つて裁物板の前に坐つた細君の姿を見た事がなかつた。彼は不思議の感に打たれざるを得なかつた。お延はまた夫のこの驚きをあたかも自分の労力に対する報酬のごとくに眺めた。そうしてわざと説明も何も加えなかつた。

「布は買ったのかい」

「いいえ、これあたしの御古よ。この冬着ようと思つて、洗張をしたまま仕立てずにしまつたの」

なるほど若い女の着る柄だけに、縞がただ荒いばかりでなく、色合もどつちかというとむしろ派出過ぎた。津田は袖を通した

わが姿を、やつこだこ 奴 風のような風をして、少しきまり悪そうに眺め

た後でお延に云った。

「とうとう明日あしたか明後日あさってやって貰う事にきめて来たよ」

「そう。それであたしはどうなるの」

「御前はどうかもしやしないさ」

「いっしょに随ついて行っちゃいけないの。病院へ」

お延は金の事などをまるで苦にしていならしく見えた。

十九

津田の明あくる朝眼あさを覚さましたのはいつもよりずっと遅かった。家

の内なかはもう一片ひとかたづき付かたづいた後のようにひっそり閑かんとしていた。座敷から玄關を通つて茶の間の障しょうじ子を開けた彼は、その火鉢の傍そばにきちんと坐つて新聞を手てにしている細君を見た。穏やかな家庭を代表するような音を立てて鉄瓶てつびんが鳴つていた。

「氣を許して寝ると、寢坊ねぼうをするつもりはなくなつても、つい寝過ねごすもんだな」

彼は云い訳らしい事をいって、曆こよみの上にかけてある時計を眺めた。時計の針はもう十時近くさの所を指していた。

顔を洗つてまた茶の間へ戻つた時、彼は何気なく例の黒塗ぜんの膳に向つた。その膳は彼の着席を待ち受けたというよりも、むしろ待ち草臥くたびれたといった方が適當であつた。彼は膳の上に掛けてあ

る布巾ふきんをと除ろうとしてふと気がついた。

「こりやいけない」

彼は手術を受ける前日に取るべき注意を、かつて医者から聞かされた事を思い出した。しかし今の彼はそれを明らかに覚えていなかった。彼は突然細君に云った。

「ちよつと訊きいてくる」

「今すぐ？」

お延は吃びっくり驚して夫の顔を見た。

「なに電話でだよ。訳やない」

彼は静かな茶の間の空気を自分で蹴散けちらす人のように立ち上ると、すぐ玄関から表へ出た。そうして電車通りを半はんちよう丁ほど右

へ行つた所にある自動電話へ馳^かけつけた。そこからまた急ぎ足に取つて返した彼は玄関に立つたまま細君を呼んだ。

「ちよつと二階にある紙入を取つてくれ。御前の墓^{がまぐち}口でも好い」
 「何^{なん}になさるの」

お延には夫の意味がまるで解らなかつた。

「何でもいいから早く出してくれ」

彼はお延から受取つた墓口を懷^{ふところ}中へ放^{ほう}り込^こんだまま、すぐ大通りの方へ引き返した。そうして電車に乗つた。

彼がかなり大きな紙包を抱えてまた戻つて来たのは、それから約三四十分後^ごで、もう午^{ひる}に間もない頃であつた。

「あの墓口の中にや少しつきや入っていないんだね。もう少しあ

るのかと思ったら」

津田はそう云いながら腋わきに抱えた包みを茶の間の畳の上へ放り出した。

「足りなくって？」

お延は細かい事にまで気を遣つかわないではいられないという眼つきを夫の上に向けた。

「いや足りないというほどでもないがね」

「だけど何をお買いになるかあたしちつとも解らないんですもの。もしかすると髪結床かみいどこかと思っただけれども」

津田は二カ月以上手を入れない自分の頭に気がついた。永く髪を刈らないと、心持番ばんの小さい彼の帽子が、被かぶるたんびに少しず

つきしんで来るようだという、つい昨日きのうの朝受けた新らしい感じまで思い出した。

「それにあんまり急いでいらつしたもんだから、つい二階まで取りに行けなかったのよ」

「実はおれの紙入の中にも、そうたくさん入つてゐる訳じゃないんだから、まあどつちにしたつて大した変りはないんだがね」

彼は墓口の悪わるくち口ばかり云えた義理でもなかった。

お延は手早く包紙を解いて、中から紅茶の缶かんと、麵麴パンと牛酪バタを取り出した。

「おやおやこれ召しやがるの。そんなら時ときを取りにおやりになればいいのに」

「なにあいっじや分らない。何を買つて来るか知れやしない」

やがて好い香においのするトーストと濃いけむりを立てるウーロン茶

とがお延の手で用意された。

朝飯あさめしとも午飯ひるめしとも片のつかない、極めてきわ単純な西洋流の食

事を済ました後で、津田は独りひとごとのように云った。

「今日は病気の報知かたがた無沙汰見舞ぶさたみまいに、ちよつと朝の内藤井

の叔父おじの所まで行つて来きようと思つてたのに、とうとう遅くなつ

ちまった」

彼の意味は仕方がないから午後にこの訪問の義務を果そうとい
うのであつた。

二十

藤井というのは津田の父の弟であつた。広島に三年長崎に二年という風に、方々移り歩かなければならない官吏生活を余儀なくされた彼の父は、教育上津田を連れて任地任地を巡礼のように経めぐる不便と不利益とに痛く頭を悩ましたあげく、早くから彼をその弟に託して、いっさいの面倒を見て貰う事にした。だから津田は手もなくこの叔父に育て上げられたようなものであつた。したがって二人の関係は普通の叔父甥おい いきの域を通り越してゐた。性質や職業の差違を問題のほかに置いて評すると、彼らは叔父甥というよりもむしろ親子であつた。もし第二の親子という言葉が使え

るなら、それは最も適切にこの二人の間あいだから 柄を説明するものであつた。

津田の父と違つてこの叔父はついで東京を離れた事がなかつた。半生の間しじゅう始終動き勝であつた父に比べると、単にこの点だけでもそこに非常な相違があつた。少なくとも非常な相違があるように津田の眼には映じた。

「緩慢かんまんなる人世の旅行者」

叔父がかつて津田の父を評した言葉のうちにこういう文句があつた。それを何気なく小耳に挟はさんだ津田は、すぐ自分の父をそういう人だと思ひ込んでしまつた。そして今日こんにちまでその言葉を忘れなかつた。しかし叔父の使つた文句の意味は、頭の発達しない

当時よく解らなかつたと同じように、今になつても判然しなかつた。ただ彼は父の顔を見るたんにそれを思い出した。肉の少ない細^{ほそ}面^{おもて}の腮^{あご}の下に、売^う卜^{らない}者^{しや}見たような疎髯^{そぜん}を垂らしたその姿と、叔父のこの言葉とは、彼にとってほとんど同じものを意味していた。

彼の父は今から十年ばかり前に、突然^{へんろ}遍路に倦^うみ果てた人のように官界を退いた。そうして実業に従事し出した。彼は最後の八年を神戸で費^{つい}やした後^{あと}、その間に買っておいた京都の地面へ、新しい普請^{ふしん}をして、二年前にとうとうそこへ引き移った。津田の知らない間^まに、この閑静^{かんせい}な古い都が、彼の父にとって隠栖^{いんせい}の場所と定められると共に、終焉^{しゅうえん}の土地とも変化したのである。

その時叔父は鼻の頭へ皺しわを寄せるようにして津田に云った。

「兄貴はそれでも少し金たまが溜たまつたと見えるな。あの風船玉が、じつと落ちつけるようになったのは、全く金の重みのために違ちがない」

しかし金の重みのいつまで経たつてもかからない彼自身は、最初から動うごかなかつた。彼は始し終しゅう東京にいて始し終しゅう貧乏ひんぱしていた。彼

はいまだかつて月給というものを貰もらつた覚おぼえのない男であつた。月

給きんが嫌いというよりも、むしろくれ手がなかつたほどわがままだつたという方が適當かも知れなかつた。規則きそくずくめな事に何でも

反対はんたいしたがつた彼は、年を取つてその考が少し變つて來た後あとでも、

やはり以前の強情きやうじやうを押し通とおしていた。これは今さら自分の主義しゆぎを改あらめたところで、ただ人に輕けい蔑べつされるだけで、いっいつこう得とくには

ならないという事をよく承知しているからでもあつた。

実際の世の中に立つて、端的たんてきな事実と組み打ちをして働いた経験のないこの叔父は、一面において当然迂濶うかつな人生批評家であなければならぬと同時に、一面においてははなはだ鋭利な観察者であつた。そうしてその鋭利な点はことごとく彼の迂濶な所から生み出されていた。言葉を換かえていうと、彼は迂濶の御蔭おかげで奇警けいな事を云つたり為したりした。

彼の知識は豊富な代りに雑駁ざつぱくであつた。したがつて彼は多くの問題に口を出したがつた。けれどもいつまで行つても傍観者の態度を離れる事ができなかつた。それは彼の位地いちちが彼を余儀なくするばかりでなく、彼の性質が彼をそこに抑おさえつけておくせいで

もあつた。彼は或頭をもつていた。けれども彼には手がなかつた。もしくは手があつても、それを使おうとしなかつた。彼は始終懐ふところとこで手てをしていたがつた。一種の勉強家であると共に一種の不ふ手てのうもの精者に生れついた彼は、ついに活字で飯を食わなければならぬ運命の所有者に過ぎなかつた。

二十一

こういう人にありがちな場ば末すえ生活せいかつを、藤井は市の西北にしきたにあたる高台の片隅かたすみで、この六七年続けて来たのである。ついこの間まで郊外に等しかつたその高台のここかしこに年々ねんねん建て増さ

れる大小の家が、年々彼の眼から蒼い色を奪つて行くように感ぜられる時、彼は洋筆^{ペン}を走らす手を止めて、よく自分の兄の身の上を考えた。折々は兄から金でも借りて、自分も一つ住宅^{こしら}を拵えて見ようかしらという氣を起した。その金を兄はとても貸してくれそうもなかった。自分もいざとなると貸して貰う性分ではなかった。「緩慢^{かんまん}なる人生の旅行者」と兄を評した彼は、実を云うと、物質的に不安なる人生の旅行者であつた。そうして多数の人の場合において常に見出されるごとく、物質上の不安は、彼にとってある程度の精神的不安に過ぎなかった。

津田の宅^{うち}からこの叔父の所へ行くには、半分道^{はんぶんみち}ほど川沿^{かわぞい}の電車を利用する便利があつた。けれどもみんな歩いたところで、

一時間とかからない近距離なので、たまさかの散歩がてらには、かえってやかましい交通機関の援たすけに依らない方が、彼の勝手であった。

一時少し前に宅うちを出た津田は、ぶらぶら河縁かわべりを伝つたつて終点の方に近づいた。空は高かった。日の光が至る所に充みちていた。向うの高みを蔽おほっている深い木立こたちの色が、浮き出したように、くつきり見えた。

彼は道々今朝けさ買い忘れたリチネの事を思い出した。それを今日の午後四時頃に吞めと医者から命令された彼には、ちよつと薬種屋へ寄つてこの下剤を手に入れておく必要があつた。彼はいつもの通り終点を右へ折れて橋を渡らずに、それとは反対な賑にぎやかな

町の方へ歩いて行こうとした。すると新らしく線路を延長する計画でもあると見えて、彼の通路に当る往来の一部分が、最も無遠慮な形式で筋違すじかいに切断されていた。彼は残酷に在来の家屋を掻かき撈むしつて、無理にそれを取り払ったような凸凹でこぼこだらけの新道路の角かどに立って、その片隅かたすみに塊かたまつている一群いちぐんの人々を見た。

群集はまばらではあるが三列もしくは五列くらいの厚さで、真中にいる彼とほぼ同年輩ぐらいな男の周囲に半円形をかたちづくっていた。

こぶと
 小肥りにふとつたその男は双子木綿ふたこもめんの羽織着物に角帯かくおびを締めして、下駄まないたげたを穿はいていたが、頭には笠かさも帽子も被かぶつていなかった。

彼の後うしろに取り残された一本の柳を盾たてに、彼は綿めんフラネルの裏の付

いた大きな袋を両手で持ちながら、見物人を見廻した。

「諸君僕がこの袋の中から玉子を出す。この空^{から}つぼうの袋の中からきつと出して見せる。驚ろいちやいけない、種は懷中にあるんだから」

彼はこの種の人間としてはむしろ不相応なくらい横^{おうふう}風な言葉

でこんな事を云った。それから片手を胸の所で握つて見せて、その握つた拳^{こぶし}をまたぱつと袋の方へぶつけるように開いた。「そら

玉子を袋の中へ投げ込んだぞ」と騙^{だま}さないばかりに。しかし彼は

騙したのではなかった。彼が手を袋の中へ入れた時は、もう玉子がちゃんとその中に入っていた。彼はそれを親指と人さし指の間に挟^{はさ}んで、一応半円形をかたちづくっている見物にとつくり眺め

さした後で地面の上に置いた。

津田は軽蔑^{けいべつ}に嘆賞^{たんしょう}を交えたような顔をして、ちよつと首を傾

けた。すると突然^{うしろ}後から彼の腰のあたりを突つつくもののあるの

に気がついた。軽い衝撃^{しゅっく}を受けた彼はほとんど反射作用のよう

うしろに後をふり向いた。そうしてそこにさも悪戯^{いたづら}小僧らしく笑いな

がら立っている叔父の子を見出した。徽章^{きしょう}の着いた制帽と、半^は

洋袴^{んずボン}と、背中にしよつた背囊^{はいのう}とが、その子の来た方角を彼に

語るには充分であつた。

「今学校の帰りか」

「うん」

子供は「はい」とも「ええ」とも云わなかつた。

二十二

「お父さんはどうした」

「知らない」

「相変らずかね」

「どうだか知らない」

自分が十ぐ^{とお}らいであつた時の心理状態をまるで忘れてしまった津田には、この返事が少し意外に思えた。苦笑した彼は、そこへ気がつくと共に黙った。子供はまた一生懸命に手品^{てずまつか}遣いの方ばかり注意しだした。服装から云うと一夜^{いちや}作りとも見られるその男

はこの時精一杯大きな声を張りあげた。

「諸君もう一つ出すから見ていたまえ」

彼は例の袋を片手でぐつと締^{しご}扱いて、再び何か投げ込む真^ま似^ねを小器用にした後、麗^{れいれい}々と第二の玉子を袋の底から取り出した。

それでも飽^あき足らないと見えて、今度は袋を裏返しにして、薄汚ない棉^{めん}フラネルの縞^{しま}柄^{がら}を遠慮なく群衆の前に示した。しかし第三の玉子は同じ手真似と共に安々と取り出された。最後に彼はあたかも貴重品でも取扱うような様子で、それを丁^{てい}寧^{ねい}に地面の上へ並べた。

「どうだ諸君こうやって出そうとすれば、何^{いくつ}個でも出せる。しかしそう玉子ばかり出してもつまらないから、今^{こん}度^だは一つ生^とき^りた鶏

を出そう」

津田は叔父の子供をふり返った。

「おい真事まこともう行こう。小父おじさんはこれからお前の宅うちへ行くんだよ」

真事には津田よりも生きた鶏の方が大事であつた。

「小父さん先へ行つてさ。僕もつと見ているから」

「ありや嘘うそだよ。いつまで経つたつて生きた鶏なんか出て来やしないよ」

「どうして？　だつて玉子はあるなに出たじやないの」

「玉子は出たが、鶏は出ないんだよ。ああ云つて嘘を吐ついていつまでも人を散らさないようにするんだよ」

「そうしてどうするの」

そうしてどうするのかその後の事は津田にもちつとも解らなかつた。面倒になった彼は、真事を置き去りにして先へ行こうとした。すると真事が彼の袂たもとをつらまえた。

「小父さん何か買つてさ」

宅で強請ねだられるたんびに、この次この次といつて逃げておきながら、その次行く時には、つい買つてやるのを忘れるのが常のようになつていた彼は、例の調子で「うん買つてやるさ」と云つた。

「じゃ自動車、ね」

「自動車は少し大き過ぎるな」

「なに小さいのさ。七円五十銭のさ」

七円五十銭でも津田にはたしかに大き過ぎた。彼は何にも云わずに歩き出した。

「だってこの前もその前も買ってやるっていったじやないの。小父^じさんの方があの玉子を出す人よりよっぽど嘘吐^{うそつ}きじやないか」

「あいつは玉子を出す^とが鶏^{とり}なんか出せやしないんだよ」

「どうして」

「どうしてって、出せないよ」

「だから小父さんも自動車なんか買えないの」

「うん。——まあそうだ。だから何かほかのものを買ってやろう」
「じゃキツドの靴さ」

毒気を抜かれた津田は、返事をする前にまた黙って一二間歩い

た。彼は眼を落して真事まことの足を見た。さほど見苦しくもないその靴は、茶とも黒ともつかない一種変な色をしていた。

「赤かつたのを宅うちでお父さんが染めたんだよ」

津田は笑いだした。藤井が子供の赤靴を黒く染めたという事ことが柄らが、何だか彼にはおかしかった。学校の規則を知らないで拵こしらえた赤靴を規則通りに黒くしたのだという説明を聞いた時、彼はまた叔父の窮きゆう策うさくを滑稽こっけい的に批判したくなった。そうしてその窮策から出た現在のお手際てぎわを撥くすぐつたいような顔をしてじろじろ眺めた。

「真事、そりや好い靴だよ、お前」

「だってこんな色の靴誰も穿^はいていないんだもの」

「色はどうでもね、お父さんが自分で染めてくれた靴なんか滅多^{めった}に穿^はけやしないよ。ありがたいと思って大事にして穿^はかなくつちやいけない」

「だってみんなが^{むくいぬ}彪犬の皮だ彪犬の皮だって^{からか}擲揄うんだもの」

藤井の叔父と彪犬の皮、この二つの言葉をつなげると、結果はまた新らしいおかしみになった。しかしそのおかしみは微^{かす}かな哀傷を誘って、津田の胸を通り過ぎた。

「彪犬じゃないよ、小父さんが受け合ってやる。大丈夫彪犬じゃ

ない立派な……」

津田は立派な何といつていいかちよつと行きつまつた。そこを
 好い加減にしておく真事ではなかった。

「立派な何さ」

「立派な——靴さ」

津田はもし懷中が許すならば、真事まことのために、望み通りキツド
 の編あみあげ上を買つてやりたい氣がした。それが叔父に對する恩返し
 の一端になるようにも思われた。彼は胸算むなざんで自分の懷ふところにある紙
 入の中を勘かんじよう定して見た。しかし今の彼にそれだけの都合をつ
 ける余裕はほとんどなかった。もし京都から為替かわせが届くならばと
 も考えたが、まだ届くか届かないか分らない前に、苦しい思いを

して、それだけの実意を見せるにも及ぶまいという世間心も起つた。

「真事、そんなにキツドが買いたければね、今度宅へ来た時、小母さんに買って貰い。小父さんは貧乏だからもつと安いもので今日は負けといてくれ」

彼は賺すようにまた宥めるように真事の手を引いて広い往来をぶらぶら歩いた。終点に近いその通りは、電車へ乗り降りの必要上、無数の人の穿物で絶えず踏み堅められる結果として、四五年この方町並が生れ変つたように立派に整のつて来た。ところどころのショーウィンドーには、一概に場末ものとして馬鹿にできないような品が綺麗に飾り立てられていた。真事はその間を向

う側へ馳^かけ抜けて、朝鮮人の飴屋^{あめや}の前へ立つかと思うと、また此^こ方側^{こちら}へ戻つて来て、金魚屋の軒の下に佇^{たたず}立んだ。彼の馳^かけ出す時には、隠^{ポケット}袋^{ポッケット}の中でビー玉の音が、きつとじやらじやらした。

「今日学校でこんなに勝つちやった」

彼は隠袋の中へ手をぐつと挿^さし込んで掌^{てのひら}いっぱい^のにそのビー玉を載^のせて見せた。水色だの紫色だの丸い硝子玉^{ガラス}が迸^{ほと}ばしるやうに往来の真中へ転がり出した時、彼は周章^{あわ}ててそれを追いかけた。そうして後^{うしろ}を振り向きながら津田に云つた。

「小父さんも拾つてさ」

最後にこの目まぐるしい叔父の子のために一軒の玩具屋^{おもちゃや}へ引き摺^ずり込まれた津田は、とうとうそこで一元五十銭の空氣銃を買

つてやらなければならぬ事になった。

^{すずめ}「雀ならいいが、むやみに人を狙^{ねら}つちやいけないよ」

「こんな安い鉄砲じや雀なんか取れないだろう」

「そりやお前が下手だからさ。下手ならいくら鉄砲が好くつたつて取れないさ」

「じや小父さんこれで雀打つてくれる？　これから宅^{うち}へ行つて」

好い加減をいうとすぐ後^{あと}から実行を逼^{せま}られそうな様子なので、

津田は生^{なま}返^{へん}事^じをしたなり話をほかへそらした。真事は戸田だの

渋谷だの坂口だのと、相手の知りもしない友達の名前を勝手に並べ立てて、その友達を片^{かた}端^{っぱし}から批評し始めた。

「あの岡本って奴^{やつ}、そりや狡猾^{ずる}いんだよ。靴を三足も買ってもら

ってるんだもの」

話はまた靴へ戻つて来た。津田はお延と関係の深いその岡本の
子と、今自分の前でその子を評している真事とを心の中で比較し
た。

二十四

「御前おまい近頃岡本の所へ遊びに行くかい」

「ううん、行かない」

「また喧嘩けんかしたな」

「ううん、喧嘩なんかしない」

「じゃなぜ行かないんだ」

「どうしてでも——」

真事まことの言葉には後あとがありそうだった。津田はそれが知りたかった。

「あすこへ行くといろんなものをくれるだろう」

「ううん、そんなにいけない」

「じゃ御馳走ごちそうするだろう」

「僕こないだ岡本の所でライスカレーを食べたら、そりや辛からかったよ」

ライスカレーの辛いぐらいは、岡本へ行かない理由になりそうもなかった。

「それで行くのが厭いやになつた訳でもあるまい」

「ううん。だつてお父さんが止せつて云うんだもの。僕岡本の所へ行つてブランコがしたいんだけども」

津田は小首を傾けた。叔父おじが子供を岡本へやりたがらない理由わけは何だろうと考へた。肌合はだあいの相違、家風の相違、生活の相違、

それらのものがすぐ彼の心に浮かんた。始終しじゅう机に向つて沈黙の

間に活字的の氣きえんを天下に散布している叔父は、實際の世間にお

いてけつして筆ほどの有力者ではなかつた。彼は暗あんにその距離を

自覺していた。その自覺はまた彼を多少頑固かたくなにした。幾分か排

外的にもした。金力権力本位の社会に出て、他ひとから馬鹿にされる

のを恐れる彼の一面には、その金力権力のために、自己の本領を

一分でも冒されては大変だという警戒の念が絶えずどこかに働いているらしく見えた。

「真事なぜお父さんに訊いて見なかったのだい。岡本へ行っちゃなぜいけないんですって」

「僕訊いたよ」

「訊いたらお父さんは何と云った。——何とも云わなかったろう」
「ううん、云った」

「何と云った」

真事は少し羞恥^{はにか}んでいた。しばらくしてから、彼はぽつりぽつり句切^{くぎり}を置くような重い口調^{くちよう}で答えた。

「あのね、岡本へ行くとね、何でも一^{はじめ}さんの持つてるものをね、

宅へ歸^{うち}つて来てからね、買^うつてくれ、買^うつてくれっていうから、それでいけないって」

津田はようやく気がついた。富の程度に多少等差のある二人の活計^{くらしむぎ}向^むは、彼らの子供が持つ玩具^{おもちゃ}の末に至るまでに、多少等差をつけさせなければならなかったのである。

「それでこいつ自動車だのキツドの靴だのって、むやみに高いものばかり強請^{ねだる}んだな。みんな一^{はじめ}さんの持つてるのを見て来たんだろう」

津田は擲^{から}揄^かい半分手を挙^あげて真事の背中を打とうとした。真事は跋^{ばつ}の悪い真相を曝露^{ばくろ}された大人^{おとな}に近い表情をした。けれども大人のように言訳がましい事はまるで云わなかった。

「嘘だよ。嘘だよ」

彼は先刻津田に買ってもらった一円五十銭の空気銃を担いだまま、まどんだん自分の宅の方へ逃げ出した。彼の隠袋の中にあるビー玉が数珠を劇しく揉むように鳴った。背囊の中では弁当箱だか教科書だかが互にぶつかり合う音がごとりごとりと聞こえた。

彼は曲り角の黒板塀の所でちよつと立ちどまって、鼪のように津田をふり返ったまま、すぐ小さい姿を小路のうちに隠した。津田がその小路を行き尽して突きあたりにある藤井の門を潜った時、突然ドンという銃声が彼の間一ぱかり前で起った。彼は右手の生垣の間から大事そうに彼を狙撃している真事の黒い姿を苦笑をもつて認めた。

二十五

座敷で誰かと話をしている叔父の声を聞いた津田は、格子の間から一足の客靴を覗いて見たなり、わざと玄関を開けずに、茶の間の縁側の方へ廻った。もと植木屋でもあつたらしいその庭先には木戸の用心も竹垣の仕切もないので、同じ地面の中に近頃建て増された新らしい貸家の勝手口を廻ると、すぐ縁鼻まで歩いて行けた。目隠しにしては少し低過ぎる高い茶の樹を二三本通り越して、彼の記憶にいつまでも残っている柿の樹の下を潜った津田は、型のごとくそこに叔母の姿を見出した。障子の簾入硝

子に映るその横顔が彼の眼に入った時、津田は外部そとから声を掛けた。

「叔母さん」

叔母はすぐ障子を開けた。

「今日はどうしたの」

彼女は子供が買つて貰つた空気銃の礼も云わずに、不思議そうな眼を津田の上に向けた。四十の上をもう三つか四つ越したこの叔母の態度には、ほとんど愛想あいそというものがなかった。その代り時と場合によると世間せけん並の遠慮を超越した自然が出た。そのうちにはほとんど性セックスの感じを離れた自然さえあつた。津田はいつでもこの叔母と吉川の細君とを腹の中で比較した。そうしていつで

もその相違に驚ろいた。同じ女、しかも年齢としのそう違わない二人の女が、どうしてこんなに違つた感じを他ひとに与える事ができるかというのが、第一の疑問であつた。

「叔母さんは相変らず色気がないな」

「この年齢になつて色気があつちや氣きち狂がいだわ」

津田は縁側えんがわへ腰をかけた。叔母は上あがれとも云わないで、膝ひざの上に載のせた紅絹もみの片きれへ軽い火熨斗ひのしを当てていた。すると次の間まからほどき物を持つて出て来たお金きんさんという女が津田にお辞儀じぎをしたので、彼はすぐ言葉をかけた。

「お金さん、まだお嫁の口はきまりませんか。まだなら一つ好いところを周旋しましょうか」

お金さんはえへへと人の好きそうに笑いながら少し顔を赤らめて、彼のために座蒲団ざぶとんを縁側えんがわへ持つて来きようとした。津田はそれを手で制して、自分から座敷の中に上り込んだ。

「ねえ叔母さん」

「ええ」

気のなさそうな生返事なまへんじをした叔母は、お金さんが生温なまぬるい番

茶を形式的に津田の前へ注ついで出した時、ちよつと首をあげた。

「お金さん由雄よしおさんによく頼たのんでおおきなさいよ。この男は親切うそで嘘を吐かない人だから」

お金さんはまだ逃げ出さずにもじもじしていた。津田は何とか云わなければすまなくなつた。

「お世辞せじじゃありません、本当の事です」

叔母は別に取り合う様子もなかった。その時裏で真事の打つ空
 気銃の音がぽんぽんしたので叔母はすぐ聴きき耳みみを立てた。

「お金さん、ちよつと見て来て下さい。バラ丸だまを入れて打つと危あ
 険ぶないから」

叔母は余計なものを買つてくれたと云わんばかりの顔をした。

「大丈夫ですよ。よく云い聞かしてあるんだから」

「いえいけません。きつとあれで面白半分にお隣りの鶏とりを打つに
 違ちがないから。構かまわないから丸たまだけ取り上げて来て下さい」

お金さんはそれを好い機しおに茶の間から姿をかくした。叔母は黙
 つて火鉢ひばちに挿さし込んだ鏝こてをまた取り上げた。皺しわだらけな薄い絹が、

彼女の膝の上で、綺麗きれいに平たく延びて行くのを何気なく眺ながめていた津田の耳に、客間の話し声が途切れ途切れに聞こえて来た。

「時に誰です、お客は」

叔母は驚ろいたようにまた顔を上げた。

「今まで気がつかなかったの。妙ねあなたの耳もずいぶん。ここ
で聞いてたつてよく解るじやありませんか」

二十六

津田は客間にいる声の主を、坐すわったまま突き留めようと力つとめて見た。やがて彼は軽く膝を拍うった。

「ああ解つた。小林でしょう」

「ええ」

叔母は嫣然にこりともせず、簡単な答を落ちついて与えた。

「何だ小林か。新らしい赤靴なんか穿はき込んで厭いやにお客さんぶつてるもんだから誰かと思つたら。そんなら僕も遠慮しずにあつちへ行けばよかつた」

想像の眼で見るにはあまりに陳腐過ちんぷぎる彼の姿が津田の頭の中に出て来た。この夏会つた時の彼の異いな服装なりもおのずと思ひ出された。白縮緬しろちりめんの襟えりのかかつた襦袢じゆばんの上へ薩摩さつま縋すがを着て、茶せんすじ筋はかまの袴すきやに透綾すきやの羽織をはおつたその拵こしらえは、まるで傘屋かさやの主人あるじが町内の葬式の供に立つた帰りがけで、強飯こわめしの折でも懐ふところに

入れているとしか受け取れなかった。その時彼は泥棒に洋服を盗まれたという言訳を津田にした。それから金を七円ほど貸してくれと頼んだ。これはある友達が彼の盗難に同情して、もし自分の質に入れてある夏服を受け出す余裕が彼にあるならば、それを彼にやってもいいと云ったからであつた。

津田は微笑しながら叔母に訊いた。

「あいつまた何だつて今日に限つて座敷なんかへ通つて、堂々とお客ぶりを發揮しているんだろう」

「少し叔父さんに話があるのよ。それがここじやちよつと云い悪い事なんでね」

「へえ、小林にもそんな真面目な話があるのかな。金の事か、そ

れでなければ……」

こう云いかけた津田は、ふと真面目な叔母の顔を見ると共に、
後を引つ込ましてしまった。叔母は少し声を低くした。その声は
むしろ彼女の落ちついた調子に釣り合っていた。

「お金^{きん}さんの縁談の事もあるんだからね。ここであんまり何かい
うと、あの子がきまりを悪くするからね」

いつもの高調子と違って、茶の間で聞いているとちよつと誰だ
か分らないくらいな紳士風の声を、小林が出しているのは全くそ
れがためであつた。

「もうきまつたんですか」

「まあ旨^{うま}く行きそうなのさ」

叔母の眼には多少の期待が輝やいた。少し乾燥はしゃぎ気味になった津田はすぐ付け加えた。

「じや僕が骨を折って周旋しなくつても、もういいんだな」

叔母は黙って津田を眺めた。たとい軽薄とまで行かないでも、こういう巫山ふざけ戯からた空っぽ虚うな彼の態度は、今の叔母の生活気分とまるでかけ離れたものらしく見えた。

「由雄さん、お前さん自分で奥さんを貰う時、やっぱりそんな料りようけん
簡で貰ったの」

叔母の質問は突然であると共に、どういう意味でかけられたのかさえ津田には見けん当とうがつかなかった。

「そんな料りよう簡けんって、叔母さんだけ承知しているぎりで、当人

の僕にや分らないんだから、ちよつと返事のしようがないがな」
 「何も返事を聞かなくなつたつて、叔母さんは困りやしないけれどもね。——女一人を片づける方ほうの身になつて御覽なさい。たいていの事じゃないから」

藤井は四年前長女を片づける時、仕度したくをしてやる余裕がないのですでに相当の借金をした。その借金がようやく片づいたと思うと、今度はもう次女を嫁にやらなければならなくなつた。だからここでもしお金さんの縁談が纏まとまるとすれば、それは正に三人目の出費ものいりに違なかつた。娘とは格が違うからという意味で、できるだけ儉約したところで、現在の生計向くらしむきに多少苦しい負担の暗影を投げる事はたしかであつた。

二十七

こういう時に、せめて費用の半分でも、津田が進んで受け持つ事ができたなら、年頃彼の世話をしてきた藤井夫婦にとっては定めし満足な報酬であつたろう。けれども今のところ財力の上で叔父叔母に捧げ得る彼の同情は、高々真事まことの穿はきたがつているキツドの靴を買ってやるくらいなものであつた。それさえ彼は懷都ふところ合ついでで見合せなければならなかつたのである。まして京都から多少の融通を仰あおいで、彼らの経済に幾分の潤沢うるおいをつけてやろうなどという親切気はてんで起らなかつた。これは自分が事情を報告

したところで動く父でもなし、父が動いたところで借りる叔父でもない、頭からきめてかかっているせいでもあった。それで彼はただ自分の所へさえ早く為替かわせが届いてくれればいいという期待に縛しばられて、叔母の言葉にはあまり感激した様子も見せなかった。すると叔母が「由雄よしおさん」と云い出した。

「由雄さん、じゃどんな料簡で奥さんを貰もらったの、お前さんは」「まさか冗談じょうだんに貰やしません。いくら僕だつてそう浮ふついた

ところばかりから出来上つてるように解釈されちゃ可哀相かわいそうだ」

「そりや無論本気でしようよ。無論本気には違なからうけれどもね、その本気にもまたいろいろ段等だんとうがあるもんだからね」

相手次第では侮辱とも受け取られるこの叔母の言葉を、津田は

かえって好奇心で聞いた。

「じゃ叔母さんの眼に僕はどう見えるんです。遠慮なく云つて下さいな」

叔母は下を向いて、ほどき物をいじくりながら薄笑いをした。

それが津田の顔を見ないせいだか何だか、急に気味の悪い心持を彼に与えた。しかし彼は叔母に対して少しも退避^{たじろ}ぐ気はなかった。

「それでもいざとなると、なかなか真面目^{まじめ}なところもありますからね」

「そりや男だもの、どこかちゃんとしたところがなくっちゃ、毎日会社へ出たつて、勤まりっこありやしないからね。だけでも――

――

こう云いかけた叔母は、そこで急に氣を換えたようにつけ足した。

「まあ止よみましょう。今さら云つたつて始まらない事だから」

叔母は先刻火熨斗さつきひのしをかけた紅絹もみの片きれを鄭寧ていねいに重ねて、濃い渋ひようしぬを引いた畳紙たたしの中へしまい出した。それから何となく拍子ひょうし抜けのした、しかもどこかに物足らなそうな不安の影を宿している津田の顔を見て、ふと氣がついたような調子で云つた。

「由雄さんはいったい贅ぜいたく沢ざ過ぎるよ」

学校を卒業してから以来の津田は叔母に始終しじゆうこう云われつけていた。自分でもまたそう信じて疑わなかった。そうしてそれを大した悪い事のようにも考えていなかった。

「ええ少し贅沢です」

「服装なりや食物ばかりじゃないのよ。心が派出はでで贅沢に出来上つてるんだから困るっていうのよ。始終御馳走ごちそうはないかないかつて、きよろきよろそこいらを見廻してゐる人みたやうで」

「じゃ贅沢どころかまるで乞食こじきじゃありませんか」

「乞食じゃないけれども、自然真面目まじめさが足りない人のように見えるのよ。人間は好い加減なところで落ちつくと、大変見つとも好いもんだがね」

この時津田の胸を掠かすめて、自分の従妹いとこに当る叔母の娘の影が突然通り過ぎた。その娘は二人とも既婚の人であつた。四年前に片づいた長女は、その後夫のちに従つて台湾に渡つたぎり、今でもそこ

に暮していた。彼の結婚と前後して、ついこの間嫁に行つた次女は、式が済むとすぐ連れられて福岡へ立つてしまった。その福岡は長男の真弓^{まゆみ}が今年から籍を置いた大学の所在地でもあつた。

この二人の従妹^{いとこ}のどっちも、貰おうとすれば容易^{たやす}く貰える地位にあつた津田の眼から見ると、けつして自分の細君として適當の候補者ではなかつた。だから彼は知らん顔をして過ぎた。当時彼の取つた態度を、叔母の今の言葉と結びつけて考えた津田は、別にこれぞと云つて疾^やましい点も見出し得なかつたので、何気ない風をして叔母の動作を見守つていた。その叔母はついと立つて戸棚の中にある支那^{しな}鞆^{なばん}の蓋^{ふた}を開けて、手に持った畳紙をその中にしまつた。

二十八

奥の四畳半で先刻さつきからお金きんさんに学課の復習をして貰もらっていた真事まことが、突然お金さんにはまるで解らない仏蘭西語フランスごの読本よみほんを浚さらい始めた。ジュ・シユイ・ポリ、とか、チュ・エ・マラード、とか、一字一字の間にわざと長い句切くぎりを置いて読み上げる小学二年生の頓とんきよう狂きやうな声を、例いつもながらおかしく聞いている津田の頭の上で、今度は柱時計がボンボンと鳴った。彼はすぐ袂たもとに入れてあるリチネを取り出して、飲みにくそうに、どろどろした油の色を眺めた。すると、客間でも時計の音に促うながされたような叔父の声がした。

「じゃあっちへ行こう」

叔父と小林は縁伝いに茶の間へ入つて来た。津田はちよつと居い住居すまいを直して叔父に挨拶あいさつをしたあとで、すぐ小林の方を向いた。
「小林君だ**い**ぶ景氣が**好**いようだね。立派な服をこしらえ**た**じやないか」

小林はホームスパンみたようなざらざらした地合じあいの背広せびろを着ていた。いつもと違つてその洋袴ズボンの折目がまだ少しも崩くずれていないので、誰の眼にも仕立卸したてしとしか見えなかつた。彼は変り色の靴下うしろを後へ隠すようにして、津田の前に坐すわり込んだ。

「へへ、冗談じょうだん云つちやいけない。景氣の**好**いのは君の事だ」
彼の新調はどこかのデパートメント・ストアの窓硝子まどガラスの中に

飾つてある三つ揃みぞろいに括りつけてあつた正札を見つけて、その価段ねだん通りのものを彼が注文して拵えたのであつた。

「これで君二十六円だから、ずいぶん安いものだろう。君見たいな贅ぜいたく沢ざやかから見たらどうか知らないが、僕なんぞにやこれたくさんだからね」

津田は叔母の手前重ねて悪わる口くちを云う勇氣もなかった。黙つて茶碗ちやわんを借り受けて、八の字を寄せながらリチネを飲んだ。そこにいるものがみんな不思議そうに彼の所作しよさを眺めた。

「何だいそれは。変なものを飲むな。薬かい」

今日こんにちまで病氣という病氣をした例ためしのない叔父の医薬に対する無

知はまた特別のものであった。彼はリチネという名前を聞いてすら、それが何のために服用されるのか知らなかった。あらゆる疾病つぺいとほとんど没交渉なこの叔父の前に、津田が手術だの入院だのという言葉を使つて、自分の現在を説明した時に、叔父は少しも感動しなかった。

「それでその報知にわざわざやつて来た訳かね」

叔父は御苦労さまと云わぬばかりの顔をして、胡麻塩ごましおだらけの髯ひげを撫なでた。生やしていると云うよりもむしろ生えていると云つた方が適当なその髯は、植木屋を入れない庭のように、彼の顔のところどころ爺々じじむさく見せた。

「いったい今の若いものは、から駄目だね。下らん病氣ばかりし

て」

叔母は津田の顔を見てにやりと笑った。近頃急に「今の若いものは」という言葉を、癖のように使い出した叔父の歴史を心得ている津田も笑い返した。よほど以前この叔父から惑^{わくびよう}病^{どうげ}は同源^んだの疾患は罪悪だのと、さも偉そうに云い聞かされた事を憶^{おも}い出すと、それが病気に罹^{かか}らない自分の自慢とも受け取れるので、なおのこと滑稽^{こっけい}に感ぜられた。彼は薄笑いと共にまた小林の方を見た。小林はすぐ口を出した。けれども津田の予期とは全くの反対を云った。

「何今の若いものだつて病気をしないものもあります。現^{わたくし}に私^{わたし}なんか近頃ちつとも寝た事がありません。私考えるに、人間は金が

無いと病氣にや罹^からないもんだろうと思います」

津田は馬鹿馬鹿しくなった。

「つまらない事をいうなよ」

「いえ全くだよ。現に君なんかがよく病氣をするのは、するだけの余裕があるからだよ」

この不^ふ論^{ろん}理^りな断案は、云い手が真^ま面^め目^めなだけに、津田をなお失笑させた。すると今度は叔父が賛成した。

「そうだよこの上病氣にでも罹った日にやどうにもこうにもやり切れないからね」

薄暗くなつた室^{へや}の中で、叔父の顔が一番薄暗く見えた。津田は立って電灯のスイッチを振^{ねじ}った。

二十九

いつの間にか勝手口へ出て、お金さんと下女を相手に皿さらこぼち小鉢の音を立てていた叔母がまた茶の間へ顔を出した。

「由雄さん久しぶりだから御飯を食べておいで」

津田は明日あしたの治療を控えているので断つて帰ろうとした。

「今日は小林といっしょに飯を食うはずになっているところへお前が来たのだから、ことによると御馳走ごちそうが足りないかも知れないが、まあつき合つて行くさ」

叔父にこんな事を云われつけない津田は、妙な心持がして、ま

た尻しりを据すえた。

「今日は何事があるんですか」

「何ね、小林が今度——」

叔父はそれだけ云って、ちよつと小林の方を見た。小林は少し得意そうににやにやしていた。

「小林君どうかしたのか」

「何、君、なんでもないんだ。いずれきまったら君の宅うちへ行つて詳しい話くわをするがね」

「しかし僕は明日あしたから入院するんだぜ」

「なに構わない、病院へ行くよ。見舞かたがた」

小林は追いかけて、その病院のある所だの、医者の名だのを、

さも自分に必要な知識らしく訊いた。医者の方が自分と同じ小林なので「はあそれじゃあの堀さんの」と云ったが急に黙ってしまった。堀というのは津田の妹婿の姓であつた。彼がある特殊な病氣のために、つい近所にいるその医者のもとへ通つたのを小林はよく知っていたのである。

彼の詳しい話くわというのを津田はちよつと聞いて見たい氣がした。それは先刻さつき叔母の云つたお金さんの結婚問題らしくもあつた。またそうでないらしくも見えた。この思わせぶりな小林の態度から、多少の好奇心を唆そそられた津田は、それでも彼に病院へ遊びに來いとは明言しなかつた。

津田が手術の準備だと云つて、せつかく叔母の持こしらえてくれた肉

にも肴さかなにも、日頃大好きな茸飯たけめしにも手をつけないので、さすがの叔母も気の毒がつて、お金さんに頼んで、彼の口にする事のできる麵麩パンと牛乳を買つて来させようとした。ねとねとしてむやみに齒の間に挟はさまるここいらの麵麩に内心辟易へきえきしながら、また贅ぜいた沢くだと云われるのが少し怖いので、津田はただおとなしく茶の間を立つお金さんの後姿うしろすがたを見送つた。

お金さんの出て行つた後で、叔母はみんなの前で叔父に云つた。「どうかまああの子こも今度こんだの縁もとが纏まとまるようになると仕合せです
がね」

「纏まるだろうよ」

叔父は苦くのなさそうな返事をした。

「至極しごくよさそうに思います」

小林の挨拶あいさつも気軽かった。黙っているのは津田と真事まことだけであつた。

相手の名を聞いた時、津田はその男に一二度叔父の家うちで会つたような心持もしたが、ほとんど何らの記憶も残っていないかつた。

「お金さんはその人を知つてゐるんですか」

「顔は知つてゐるよ。口は利きいた事がないけれども」

「じゃ向うも口を利いた事なんかないんでしょう」

「当り前さ」

「それでよく結婚が成立しつかするもんだな」

津田はこういつて然しかるべき理窟りくつが充分自分の方にあると考へた。

それをみんなに見せるために、彼は馬鹿馬鹿しいというよりもむしろ不思議であるという顔つきをした。

「じやどうすれば好いんだ。誰でもみんなお前が結婚した時のようにしなくっちゃいけないというのかね」

叔父は少し機嫌きげんを損じたらしい語気で津田の方を向いた。津田はむしろ叔母に対するつもりでいたので、少し気の毒になった。

「そういう訳じやないんです。そういう事情のもとにお金さんの結婚が成立しちや不都合だなんていう気は全くなかったのです。たといどんな事情だろうと結婚が成立さえすれば、無論結構なんですから」

それでも座は白けてしまった。今まで心持よく流れていた談話
が、急に堰き止められたように、誰も津田の言葉を受け継いで、
順々に後へ送ってくれるものがなくなつた。

小林は自分の前にある麦酒の洋盃を指して、ないしょのような
小さい声で、隣りにいる真事に訊いた。

「真事さん、お酒を上げましょうか。少し飲んで御覧なさい」
「苦いから僕厭だよ」

真事はすぐ跳ねつけた。始めから飲ませる気のなかつた小林は、
それを機にははと笑つた。好い相手ができたと思つたのか真事は

突然小林に云った。

「僕一円五十銭の空氣銃をもつてるよ。持つて来て見せようか」
 すぐ立つて奥の四畳半へ馳^かけ込んだ彼が、そこから新らしい玩^{おも}具^もを茶の間へ持ち出した時、小林は行きがかり上、ぴかぴかする空氣銃の嘆賞者とならなければすまなかつた。叔父も叔母も嬉^{うれ}しがっているわが子のために、一^{いち}言^{ごん}の愛^{あい}嬌^{きよう}を義務的に添える必要があつた。

「どうも時計を買いえの、万年筆を買いえのつて、貧乏な阿爺^{おやじ}を責めて困る。それでも近頃馬だけはどうか諦^{あきら}めようだから、まだ始末が好い」

「馬も存外安いもんですな。北海道へ行きますと、一頭五六円で

立派なのが手に入ります」

「見て来たような事を云うな」

空気銃の御蔭で、みんながまた満遍なく口を利くようになった。結婚が再び彼らの話頭に上った。それは途切れた前の続きに相違なかった。けれどもそれを口にする人々は、少しずつ前と異った気分によつて、彼らの表現を支配されていた。

「こればかりは妙なものでね。全く見ず知らずのものが、いっしょになったところで、きつと不縁になるとも限らないしね、またいくらこの人ならばと思ひ込んでできた夫婦でも、末始終和合するとは限らないんだから」

叔母の見て来た世の中を正直に纏めるところなるよりほかに仕

方なかつた。この大きな事実のいちぐう一隅にお金さんの結婚を安全におこうとする彼女の態度は、弁護的というよりもむしろ説明的であつた。そうしてその説明は津田から見ると最も不完全でまた最も不安全であつた。結婚について津田の誠実を疑うような口ぶりを見せた叔母こそ、この点にかけて根本的な真面目まじめさを欠いてゐるとしか彼には思えなかつた。

「そりや楽な身分の人の云い草ですよ」と叔母は開き直つて津田に云つた。「やれ交際ふざいだの、やれ婚約だのつて、そんな贅ぜい沢たくな事を、我々風情が云つてられますか。貰つてくれ手、来てくれ手があれば、それでありがたいと思わなくっちゃやならないくらいのものです」

津田はみんなの手前今のお金さんの場合についてかれこれ云いたくなかった。それをいうほどの深い関係もなくまた興味もない彼は、ただ叔母が自分に対してもつ、不真面目ふまじめという疑念を塗り潰つぶすために、向うの不真面目さを啓発しておかなくてはいけないという心持に制せられるので、黙ってしまう訳に行かなかった。彼は首を捻ひねって考え込む様子をしながら云った。

「何もお金さんの場合をとやかく批評する気はないんだが、いたい結婚を、そう容易たやすく考えて構わないものか知ら。僕には何だか不真面目なような気がしていけないがな」

「だって行く方で真面目に行く気になり、貰う方でも真面目に貰う気になれば、どこと云って不真面目なところが出て来きようはず

がないじゃないか。由雄さん」

「そういう風に手つとり早く真面目になれるかが問題でしょう」

「なれればこそ叔母さんなんぞはこの藤井家へお嫁に来て、ちゃんとこうしているじゃありませんか」

「そりや叔母さんはそうでしょうが、今の若いものは……」

「今だつて昔だつて人間に変わりがあるものかね。みんな自分の決心一つです」

「そう云つた日にやまるで議論にならない」

「議論にならなくつても、事実の上で、あたしの方が由雄さんに勝つてるんだから仕方がない。いろいろ選^えり好^{この}みをしたあげく、お嫁さんを貰つた後でも、まだ選り好みをして落ちつかずにいる

人よりも、こつちの方がどのくらい真面目だか解りやしない」

先刻さつきから肉を突ツついていた叔父は、自分の口を出さなければ

ならない時機に到着した人のように、皿から眼を放した。

三十一

「だいぶやかましくなつて来たね。黙つて聞いていると、叔母甥おばおいの対話とは思えないよ」

二人の間にこう云つて割り込んで来た叔父はその実行司じつでも審判官でもなかつた。

「何だか双方敵愾てきがい心をもつて云い合つてるようだが、喧嘩けんかでも

したのかい」

彼の質問は、単に質問の形式を具えた注意に過ぎなかった。真^まこと事を相手にビー珠^{だま}を転がしていた小林^{ぬす}が偷むようにしてこつちを見た。叔母も津田も一度に黙ってしまった。叔父はついに調停者の態度で口を開かなければならなくなった。

「由雄、御前見たような今の若いものには、ちよつと理解出来^{にく}悪いかも知れないがね、叔母さんは嘘^{うそ}を吐^ついてるんじゃないよ。知りもしないおれの所へ来るとき、もうちゃんと覚悟をきめていたんだからね。叔母さんは本当に来ない前から来た後^{あと}と同じように真面目だったのさ」

「そりや僕だって伺わないでも承知しています」

「ところがさ、その叔母さんがだね。どういふ訳でそんな大決心をしたかというのだね」

そろそろ酔の廻った叔父は、火熱^{ほて}った顔へ水分を供給する義務を感じた人のように、また洋盃^{コップ}を取り上げて麦酒^{ビール}をぐいと飲んだ。「実を云うとその訳を今日^{きょう}までまだ誰にも話した事がないんだが、どうだ一つ話して聞かせようか」

「ええ」

津田も半分は真面目であつた。

「実はだね。この叔母さんはこれでこのおれに意^いがあつたんだ。つまり初めからおれの所へ来たかつたんだね。だからまだ来ないうちから、もう猛烈に自分の覚悟をきめてしまったんだ。――」

「馬鹿な事をおつしやい。誰があなたのような醜男ぶおとこに意いなんぞあるもんですか」

津田も小林も吹き出した。独りひときよとした真事は叔母の方を向いた。

「お母さん意があるって何」

「お母さんは知らないからお父さんに伺って御覧」

「じやお父さん、何さ、意があるってのは」

叔父はにやにやしながら、禿はげた頭の真中を大事そうに撫なで廻した。気のせいかなその禿が普通の時よりは少し赤いように、津田の眼に映った。

「真事、意があるってえのはね。——つまりそのね。——まあ、

好きなのさ」

「ふん。じゃ好いじゃないか」

「だから誰も悪いと云つてやしない」

「だって皆みんなな笑うじゃないか」

この問答の途中へお金きんさんがちようど歸つて來たので、叔母はすぐ真事の床を敷かして、彼を寢間ねまの方へ追いやつた。興に乗つた叔父の話はますます發展するばかりであつた。

「そりや昔むかしだって恋愛事件はあつたよ。いくらお朝あさが怖こわい顔をしたつてあつたに違ちがないが、だね。そこにまた今の若いものにはとうてい解と解くらない方面もあるんだから、妙だろう。昔は女の方で男に惚ほれたけれども、男の方ではけつして女に惚ほれなかつたもん

だ。——ねえお朝そうだったろう」

「どうだか存じませんよ」

叔母は真事の立つた後あとへ坐つて、さつさと松茸飯まつだけめしを手盛てもりにして食べ始めた。

「そう怒つたつて仕方がない。そこに事実があると同時に、一種の哲学があるんだから。今おれがその哲学を講釈してやる」

「もうそんなむずかしいものは、伺わなくつてもたくさんです」

「じゃ若いものだけに教えてやる。由雄も小林も参考のためによく聴いとくがいい。いったいお前達ひとは他の娘を何だと思う」

「女だと思つてます」

津田は交まぜ返かえし半分わざと返事をした。

「そうだろう。ただ女だと思うだけで、娘とは思わないんだろう。それがおれ達とは大違いだて。おれ達は父母ふぼから独立したただの女として他人の娘を眺めた事がいまだかつてない。だからどこのお嬢さんを拝見しても、そのお嬢さんには、父母という所有者がちゃんと食つついてるんだと始めから観念している。だからいくら惚ほれたくつても惚れられなくなる義理じゃないか。なぜと云つて御覧、惚れるとか愛し合うとかいうのは、つまり相手をこつちが所有してしまうという意味だろう。すでに所有権のついてるものに手を出すのは泥棒じゃないか。そういう訳で義理堅い昔の男はけっして惚れなかったね。もつとも女はたしかに惚れたよ。現にそこで松茸飯を食つてるお朝なぞも実はおれに惚れたのさ。し

かしおれの方じやかつて彼女を愛した覚おぼえがない」

「どうでもいいから、もう好い加減にして御飯になさい」

眞事を寝かしつけに行つたお金さんと呼ば返した叔母は、彼女にいいつけて、みんなの茶碗に飯をよそわせた。津田は仕方なしに、ひとり下味まぜい食しよく麵パン麩をにちやにちや噛かんだ。

三十二

食後の話はもうはずまなかつた。と云つて、別にしんみりした方面へ落ちて行くでもなかつた。人々の興味を共通に支配する題目の柱が折れた時のように、彼らはてんでんばらばらに口を聞い

た後で、誰もそれを会話の中心に纏めようと努力するもののないに気が付いた。まと

餉ちやぶだい 台の上に

両りようひじ 肱

を突いた叔父が

酔後の欠を

続けざまに

二つした。叔母が下女を呼んで

残物さんぶつを勝手へ運ばした。先刻か

ら重苦しい空気の影響を少しずつ感じていた津田の胸に、今夜聞

いた叔父の言葉が、月の面を過ぎる浮雲のように、時々薄い陰を

おもて

投げた。そのたびに他人から見ると、麦酒ビールの泡と共に消えてしま

うべきはずの言葉を、津田はかえって意味ありげに自分で追いか

けて見たり、また自分で追い戻して見たりした。そこに気のつい

た時、彼は我ながら不愉快になった。

同時に彼は自分と叔母との間に取り換わされた言葉の投げ合も

思い出さずにはいられなかった。その投げ合の間、彼は始終自分を抑えつけて、なるべく心の色を外へ出さないようにしていた。そこに彼の誇りがあると共に、そこに一種の不快も潜んでいたことは、彼の気分が彼に教える事実であつた。

半日以上の暇を潰したこの久しぶりの訪問を、単にこういう不快の立場から眺めた津田は、すぐその対照として活潑な吉川夫人とその綺麗な応接間とを記憶の舞台に躍らした。つづいて近頃ようやく丸鬚まるまげに結い出したお延のぶの顔が眼の前に動いた。

彼は座を立とうとして小林を顧みた。

「君はまだいるかね」

「いや。僕ももう御暇おいとましよう」

小林はすぐ吸い残した敷島しきしまの袋を洋袴ズボンの隠袋かくしへねじ込んだ。すると彼らの立ち際たぎわに、叔父が偶然らしくまた口を開いた。

「お延はどうしたい。行こう行こうと思ひながら、つい貧乏暇なしだもんだから、御無沙汰ごぶさたをしている。宜しく云よろつてくれ。お前の留守にや閑ひまで困るだろうね、彼の女あんなも。いったい何をして暮してゐるかね」

「何って別にする事もないでしょうよ」

こう散漫に答えた津田は、何と思つたか急に後あとからつけ足した。「病院へいっしょに入りたいなんて気楽な事をいうかと思うと、やれ髪を刈れの湯に行けのつて、叔母さんよりもよっぽどやかましい事を云いますよ」

「感心じゃないか。お前のようなお洒落しゃれにそんな注意をしてくれるものはほかにありやしないよ」

「ありがたい仕合せだな」

「芝居しばやはどうだい。近頃行くかい」

「ええ時々行きます。この間も岡本から誘われたんだけど、あいにくこの病気の方の片をつけなけりやならないんでね」

津田はそこでちよつと叔母の方を見た。

「どうです、叔母さん、近い内帝劇へでも御案内しましょうか。たまにやああいう所へ行つて見るのも薬ですよ、氣がはればれてね」

「ええありがとう。だけど由雄さんの御案内じゃ——」

「お厭ですか」

「厭より、いつの事だか分らないからね」

芝居場などを余り好まない叔母のこの返事を、わざと正面に受けた津田は頭を搔かいて見せた。

「そう信用がなくなつた日にや僕もそれまでだ」

叔母はふふんと笑つた。

「芝居はどうでもいいが、由雄さん京都の方はどうして、それから」

「京都から何とか云つて来ましたかこつちへ」

津田は少し真剣な表情をして、叔父と叔母の顔を見比べた。けれども二人は何とも答えなかった。

「実は僕の所へ今月は金を送れないから、そつちでどうでもしろつて、お父さんが云つて来たんだが、ずいぶん乱暴じゃありませんか」

叔父は笑うだけであつた。

「兄貴あにきは怒つてゐるんだろう」

「いったいお秀ひでがまた余計な事を云つてやるからいけない」

津田は少し忌々いまいましそうに妹の名前を口にした。

「お秀とがに咎とがはありません。始めから由雄さんの方が悪いにきまつてゐるんだもの」

「そりやそうかも知れないけれども、どこの国にあなたおやじ阿爺やっから送つて貰つた金を、きちんきちん返す奴やつがあるもんですか」

「じゃ最初からきちんきちん返すって約束なんかしなければいいのに。それに……」

「もう解りましたよ、叔母さん」

津田はとても敵^{かな}わないという心持をその様子に見せて立ち上がった。しかし敗北の結果急いで退却する自分に景気を添えるため、促^{うな}がすように小林を引張って、いっしょに表へ出る事を忘れなかった。

三十三

戸外^{そと}には風もなかった。静かな空気が足早に歩く二人の頬^{ほお}に冷

たく触れた。星の高く輝やく空から、眼に見えない透明な露^{つゆ}がし
 としと降りているらしくも思われた。津田は自分で外套^{がいとう}の肩を
 撫^なでた。その外套の裏側に滲^しみ込んでくるひんやりした感じを、
 はつきり指先で味わって見た彼は小林を顧^{かえり}みた。

「日^に中^{ちゅう}は暖^{あつた}かだが、夜になるとやっぱり寒いね」

「うん。何と云つてももう秋だからな。実際外套が欲しいくらい
 だ」

小林は新調の三^みつ揃^{ぞろい}の上に何にも着ていなかった。ことさらに
 爪^{つま}先^{さき}を厚く四角に拵^{こしら}えたいかつい亜米利加^{アメリカ}型の靴をごとごと鳴
 らして、太^スい洋^{テツ}杖^キをわざとらしくふり廻す彼の態度は、まるで
 冷たい空氣に抵抗する示威運動者に異^{こと}ならなかった。

「君学校にいた時分作ったあの自慢の外套はどうした」

彼は突然意外な質問を津田にかけた。津田は彼にその外套を見せびらかした当時を思い出さない訳に行かなかった。

「うん、まだあるよ」

「まだ着ているのか」

「いくら僕が貧乏だって、書生時代の外套を、そう大事そうにつまで着ているものかね」

「そうか、それじゃちようど好い。あれを僕にくれ」

「欲しければやつても好い」

津田はむしろ冷やかに答えた。靴足袋くつたびまで新らしくしている男

が、他の着古した外套を貰ひといたがるのは少し矛盾であった。少く

とも、その人の生活に横わる、不規則な物質的の凸凹を証拠立てていた。しばらくしてから、津田は小林に訊いた。

「なぜその背広せびろといっしよに外套も揃えなかったんだ」

「君と同年おんじように僕を考えちゃ困るよ」

「じゃどうしてその背広だの靴だのができたんだ」

「訊き方が少し手酷てきびし過ぎるね。なんぼ僕だつてまだ泥棒はしないから安心してくれ」

津田はすぐ口を閉じた。

二人は大きな坂の上に出た。広い谷を隔てて向に見える小高い岡が、怪獣の背のように黒く長く横わっていた。秋の夜の灯火がところどころに点々と少量の暖かみを滴したたらした。

「おい、歸りにどこかで一杯やろうじやないか」

津田は返事をする前に、まず小林の様子を窺^{うかが}った。彼らの右手には高い土手があつて、その土手の上には蓊^{こんもり}鬱^{ふさ}した竹藪^{たけやぶ}が一面に生^おい被^{かぶ}さつていた。風がないので竹は鳴らなかつたけれども、眠つたように見えるその笹^{ささ}の葉の梢^{こずえ}は、季節相応な蕭^{しょう}索^{さく}の感じを津田に与えるに充分であつた。

「ここはいやに陰気な所だね。どこかの大名華族の裏に当るんで、いつまでもこうして放^{ほう}つてあるんだらう。早く切り開いちまえばいいのに」

津田はこういつて当面の挨拶^{あいさつ}をごまかそうとした。しかし小林の眼に竹藪などはまるで入らなかつた。

「おい行こうじゃないか、久しぶりで」

「今飲んだばかりなのに、もう飲みたくなつたのか」

「今飲んだばかりつて、あれつばかり飲んだんじや飲んだ部へ入らないからね」

「でも君はもう充分ですつて断つていたじゃないか」

「先生や奥さんの前じや遠慮があつて酔えないから、仕方なしにああ云つたんだね。まるつきり飲まないんならともかくも、あのくらい飲ませられるのはかえつて毒だよ。後から適當の程度まで酔つておいて止めない^やと身体に障る^{からだ}からね^{さわ}」

自分に都合の好い理窟^{りくつ}を勝手に拵^{こし}らえて、何でも津田を引張ろうとする小林は、彼にとって少し迷惑な伴侶^{つれ}であつた。彼は冷か

し半分に訊^きいた。

「君が奢^{おご}るのか」

「うん奢つても好い」

「そうしてどこへ行くつもりなんだ」

「どこでも構わない。おでん屋でもいいじゃないか」

二人は黙つて坂の下まで降りた。

三十四

順路からいうと、津田はそこを右へ折れ、小林は真直^{まっすぐ}に行かなければならなかった。しかし体^{てい}よく分れようとして帽子へ手を

かけた津田の顔を、小林は覗き込むように見て云った。

「僕もそっちへ行くよ」

彼らの行く方角には飲み食いに都合のいい町が二三町続いていた。その中程にある酒場バーめいた店の硝子戸ガラスどが、暖かそうに内側から照らされているのを見つけた時、小林はすぐ立ちどまった。

「ここが好い。ここへ入ろう」

「僕は厭だよ」

「君の氣に入りそうな上等の宅うちはここいらにないんだから、ここで我慢しようじゃないか」

「僕は病氣だよ」

「構わん、病氣の方は僕が受け合つてやるから、心配するな」

「冗談云うな。厭だよ」

「細君には僕が弁解してやるからいいだろう」

面倒になった津田は、小林をそこへ置き去りにしたまま、さつさと行こうとした。すると彼とすれすれに歩を移して来た小林が、少し改まった口調で追究した。

「そんなに厭か、僕といっしょに酒を飲むのは」

実際そんなに厭であつた津田は、この言葉を聞くとすぐとまつた。そうして自分の傾向とはまるで反対な決断を外部へ現わした。

「じゃ飲もう」

二人はすぐ明るい硝子戸ガラスドを引いて中へ入った。客は彼らのほかに五六人いたぎりであつたが、店があまり広くないので、比較的

込み合っているように見えた。割合樂に席の取れそうな片隅^{かたすみ}を
 舐^{えら}んで、差し向いに腰をおろした二人は、通した注文の来る間、
 多少物珍らしそうな眼を周囲^{あたり}へ向けた。

服装から見た彼らの相客^{あいきやくちゆう}中に、社会的地位のありそうな
 ものの一人もなかった。湯帰りと見えて、縞^{しま}の半纏^{はんてん}の肩へ濡^ぬれ
 手拭^{てぬぐい}を掛けたのだの、木綿物^{もめんもの}に角帯^{かくおび}を締^しめて、わざとらし
 く平打^{ひらうち}の羽織の紐^{ひも}の真中へ擬物^{まがいもの}の翡翠^{ひすい}を通したのだのはむ
 しろ上等の部であった。ずっとひどいのは、まるで紙屑買としか
 見えなかった。腹掛^{はらがけ}股引^{ももひき}も一人交^{まじ}っていた。

「どうだ平民的でいいじゃないか」

小林は津田の猪口^{ちよく}へ酒を注^つぎながらこう云った。その言葉を打

ち消すような新調したての派出はでな彼の背広せびろが、すぐことさらしく津田の眼に映ったが、彼自身はまるでそこに気がついていないらしかった。

「僕は君と違ってどうしても下等社界の方に同情があるんだからな」

小林はあたかもそこに自分の兄弟分でも揃そろっているような顔をして、一同を見廻した。

「見たまえ。彼らはみんな上流社会より好人相をしているから」
挨拶あいさつをする勇氣のなかった津田は、一同を見廻す代りに、かえって小林を熟視した。小林はすぐ讓歩した。

「少くとも陶然とうぜんとしているだろう」

「上流社会だつて陶然とするからな」

「だが陶然としかたが違ふよ」

津田は昂然こうぜんとして両者の差違を訊きかなかつた。それでも小林

は少しも悄氣しよげずに、ぐいぐい杯さかずきを重ねた。

「君はこういう人間を輕蔑けいべつしているね。同情に憚あたしないものとして、始めから見くびっているんだ」

こういうや否や、彼は津田の返事も待たずに、向うにいる牛乳配達見たような若ものに声をかけた。

「ねえ君。そうだろう」

出し抜けに呼びかけられた若者は、倔強くつきような頸筋くびすじを曲げてちよつとこつちを見た。すると小林はすぐ杯さかずきをそつちの方へ出した。

「まあ君一杯飲みたまえ」

若者はにやにやと笑った。不幸にして彼と小林との間には一間ほどの距離があつた。立つて杯を受けるほどの必要を感じなかつた彼は、微笑するだけで動かなかつた。しかしそれでも小林には満足らしかった。出した杯を引込めながら、自分の口へ持つて行つた時、彼はまた津田に云つた。

「そらあの通りだ。上流社会のように高慢ちきな人間は一人もいやしない」

三十五

インヴァネスを着た小作りな男が、半纏はんとんの角刈かくがりと入れ違ちがに這入はいつて来て、二人から少し隔へだたつた所に席を取つた。廂ひさしを深くおろした鳥打とりうちを被かぶつたまま、彼は一応ぐるりと四方あたりを見廻まわした後あとで、懷ふところへ手を入れた。そうしてそこから取り出した薄い小型の帳面を開けて、読むのだから考えるのだから、じつと見つめていた。彼はいつまで経たつても、古ぼけたトンビを脱だごうとしなかった。帽子も頭へ載せたままであつた。しかし帳面はそんなに長くひろげていかなかった。大事そうにそれを懷はかへしまうと、今度は飲みながら、じろりじろりと他の客ほかを、見ないようになして見始めた。その相間あいま相間には、ちんちくりんな外套がいとうの羽根の下から手を出して、薄い鼻の下の髭ひげを撫なでた。

さつき

先刻から氣をつけるともなしにこの様子に氣をつけていた二人は、自分達の視線が彼の視線に行き合つた時、ぴたりと真向^{まむき}になつて互に顔を見合せた。小林は心持前へ乗り出した。

「何だか知つてるか」

津田は元の通りの姿勢を崩^{くず}さなかつた。ほとんど返事^{あたい}に働^{はたら}いたという口調で答えた。

「何だか知るもんか」

小林はなお声を低くした。

「あいつは探偵^{たんてい}だぜ」

津田は答えなかつた。相手より酒量の強い彼は、かえつて相手ほど平生を失わなかつた。黙つて自分の前にある猪口^{ちよく}を干した。

小林はすぐそれへなみなみと注いだ。

「あの眼つきを見ろ」

薄笑いをした津田はようやく口を開いた。

「君見たいにむやみに上流社会の悪口をいうと、さつそく社会主義者と間違えられるぞ。少し用心しろ」

「社会主義者？」

小林はわざと大きな声を出して、ことさらにインヴァネスの男の方を見た。

「笑わかせやがるな。こつちや、こう見えたって、善良なる細民の同情者だ。僕に比べると、乙に上品ぶって取り繕ろつてる君達の方がよっぽどの悪者だ。どつちが警察へ引つ張られて然るべき

だかよく考えて見ろ」

鳥打の男が黙って下を向いているので、小林は津田に喰つてかかるよりほかに仕方がなかった。

「君はこうした土方や人足をてんから人間扱いにしないつもりかも知れないが」

小林はまたこう云いかけて、そこいらを見廻したが、あいにくどこにも土方や人足はいなかった。それでも彼はいつこう構わずにしゃべりつづけた。

「彼らは君や探偵よりいくら人間らしい崇高な生地きじをうぶのままもつてるか解らないぜ。ただその人間らしい美しさが、貧苦きくという塵埃ほこりで汚よごれているだけなんだ。つまり湯に入れないから穢きたない

んだ。馬鹿にするな」

小林の語気は、貧民の弁護というよりもむしろ自家じかの弁護らしく聞こえた。しかしむやみに取り合つてこつちの体面きずつを傷けられては困るという用心が頭に働くので、津田はわざと議論を避けていた。すると小林がなお追おっかけて来た。

「君は黙つてるが僕のいう事を信じないね。たしかに信じない顔つきをしている。そんなら僕が説明してやろう。君は露西亞ロシアの小説を読んだらう」

露西亞の小説を一冊も読んだ事のない津田はやはり何とも云わなかった。

「露西亞の小説、ことにドストエフスキの小説を読んだものは必

ず知ってるはずだ。いかに人間が下賤げせんであろうとも、またいかに無教育であろうとも、時としてその人の口から、涙がこぼれるほどありがたい、そうして少しも取り繕つくろわない、至純至精の感情が、泉のように流れ出して来る事を誰でも知ってるはずだ。君はあれを虚偽と思うか」

「僕はドストエヴスキを読んだ事がないから知らないよ」

「先生に訊きくと、先生はありや嘘うそだと云うんだ。あんな高尚な情操をわざと下劣な器うつわに盛って、感傷的に読者を刺戟しげきする策略に過ぎない、つまりドストエヴスキがあたったために、多くの模倣者が続出して、むやみに安っぽくしてしまった一種の芸術的技巧に過ぎないというんだ。しかし僕はそうは思わない。先生からそん

な事を聞くと腹が立つ。先生にドストエヴスキは解らない。いくら年齢としを取ったって、先生は書物の上で年齢を取っただけだ。いくら若かろうが僕は……」

小林の言葉はだんだん逼せまつて来た。しまいに彼は感慨に堪たえんという顔をして、涙をぽたぽた 卓テーブル 布クロスの上に落した。

三十六

不幸にして津田の心臓には、相手に釣り込まれるほどの酔が廻まわっていなかった。同化の埒うちがい外からこの興奮状態を眺める彼の眼はついに批判的であつた。彼は小林を泣かせるものが酒であるか、

叔父であるかを疑った。ドストエヴスキであるか、日本の下層社会であるかを疑った。そのどっちにしたところで、自分とあまり交渉のない事もよく心得ていた。彼はつまらなかった。また不安であつた。感激家によつて彼の前にふり落された涙の痕を、ただ迷惑そうに眺めた。

探偵^{たんでい}として物色^{ぶつしよく}された男は、懐^{ふところ}からまた薄い手帳を出し

て、その中へ鉛筆で何かしきりに書きつけ始めた。猫のように物静かでありながら、猫のようにすべてを注意しているらしい彼の挙動が、津田を変な気持ちにした。けれども小林の酔は、もうそんなところを通り越していた。探偵などはまるで眼中になかった。

彼は新調の背広^{せびろ}の腕をいきなり津田の鼻の先へ持つて来た。

「君は僕が汚ない服装なりをすると、汚ないと云つて軽蔑けいべつするだろう。またたまに綺麗きれいな着物を着ると、今度は綺麗だと云つて軽蔑するだろう。じゃ僕はどうすればいいんだ。どうすれば君から尊敬されるんだ。後生ごしょうだから教えてくれ。僕はこれでも君から尊敬されたいんだ」

津田は苦笑しながら彼の腕を突き返した。不思議にもその腕には抵抗力がなかった。最初の勢が急にどこかへ抜けたように、おとなしく元の方角へ戻つて行つた。けれども彼の口は彼の腕ほど素直ではなかった。手を引込みました彼はすぐ口を開いた。

「僕は君の腹の中をちゃんと知つてゐる。君は僕がこれほど下層社会こしやうに同情しながら、自分自身貧乏な癖に、新らしい洋服なんか拵

えたので、それを矛盾だと云つて笑う氣だろう」

「いくら貧乏だつて、洋服の一着ぐらい拵えるのは当り前だよ。

拵えなけりや赤裸はだかで往来を歩かなければなるまい。拵えたつて結構じゃないか。誰も何とも思つてやしないよ」

「ところがそうでない。君は僕をただめかすんだと思つてる。お洒落しゃれだと解釈している。それが悪い」

「そうか。そりや悪かつた」

もうやりきれないと観念した津田は、とうとう降参の便利を悟つたので、好い加減に調子を合せ出した。すると小林の調子も自然と變つて來た。

「いや僕も悪い。悪かつた。僕にも洒落氣しゃれけはあるよ。そりや僕も

充分認める。認めるには認めるが、僕がなぜ今度この洋服を作ったか、その訳を君は知るまい」

そんな特別の理由を津田は固^{もと}より知ろうはずがなかった。また知りたくもなかった。けれども行きがかり上訊^きいてやらない訳にも行かなかった。両手を左右へひろげた小林は、自分で自分の服^な装^りを見廻しながら、むしろ心細そうに答えた。

「実はこの着物で近^{きん}々^{きん}都^{みやこ}落^{おち}をやるんだよ。朝鮮へ落ちるんだよ」

津田は始めて意外な顔をして相手を見た。ついでに先刻^{さつき}から苦になつていた襟^{えり}飾^{かざり}の横つちよに曲つているのを注意して直させた後で、また彼の話^{はなし}を聴きつづけた。

長い間叔父の雑誌の編輯へんしゅうをしたり、校正をしたり、その間には自分の原稿を書いて、金をくれそうな所へ方々持つて廻つたりして、始終忙しじゅうがしそうに見えた彼は、とうとう東京にいたたまれなくなった結果、朝鮮へ渡つて、そこの或新聞社へ雇われる事に、はぼ相談がきまつたのであつた。

「こう苦しくつちや、いくら東京に辛防しんぼうしていたつて、仕方がないからね。未来のない所に住んでるのは實際厭いやだよ」

その未来が朝鮮へ行けば、あらゆる準備をして自分を待つてい
 そうな事をいう彼は、すぐまた前言を取り消すような口も利きいた。
 「要するに僕なんぞは、生涯しょうがい漂浪ひょうろうして歩く運命をもつて
 生れて来た人間かも知れないよ。どうしても落ちつけないんだも

の。たとい自分が落ちつく気でも、世間が落ちつかせてくれないから残酷だよ。駈落者^{かけおちもの}になるよりほかに仕方がないじゃないか」「落ちつけないのは君ばかりじゃない。僕だってちつとも落ちついていられやしない」

「もったいない事をいうな。君の落ちつけないのは贅沢^{ぜいたく}だからさ。僕のは死ぬまで麵麩^{パンおっ}を追かけて歩かなければならないんだから苦しいんだ」

「しかし落ちつけないのは、現代人の一般の特色だからね。苦しいの君ばかりじゃないよ」

小林は津田の言葉から何らの慰藉^{いしや}を受ける気色^{けしき}もなかった。

三十七

先刻さつきから二人の様子を眺めていた下女が、いきなり来て、わざとらしく食卓テーブルの上を片づけ始めた。それを相図のように、インヴァネスを着た男がすうと立ち上った。疾とうに酒をやめて、ただ話ばかりしていた二人も澄とらましている訳に行かなかった。津田は機会を捉とらえてすぐ腰を上げた。小林は椅子を離れる前に、まず彼らの間に置かれたM・C・C・の箱を取った。そうしてその中からまた新らしい金口きんぐちを一本出してそれに火を点つけた。行きがけの駄賃だちんらしいこの所作しよさが、煙草たばこの箱を受け取とつて袂たもとへ入れる津田の眼を、皮肉に擦くすぐつた。くした。

時刻はそれほどでなかったけれども、秋の夜^よの往来は意外に更^ふけやすかった。昼は耳につかない一種の音を立てて電車が遠くの方を走っていた。別々の気分に働らきかけられている二人の黒い影が、まだ離れずに河の縁^{ふち}をつたつて動いて行つた。

「朝鮮へはいつ頃行くんだね」

「ことによると君の病院へ入^はいつているうちかも知れない」

「そんなに急に立つのか」

「いやそうとも限らない。もう一遍先生が向うの主筆に会つてく
れてからでないと、判^{はつきり}然した事は分らないんだ」

「立つ日がかい、あるいは行く事がかい」

「うん、まあ——」

彼の返事は少し曖昧であつた。津田がそれを追究もしないで、さっさと行き出した時、彼はまた云い直した。

「実を云うと、僕は行きたくもないんだがなあ」

「藤井の叔父が是非行けとでも云うのかい」

「なにそうでもないんだ」

「じや止したらいいじやないか」

津田の言葉は誰にでも解り切つた理窟なだけに、同情に飢えていそうな相手の気分を残酷に射貫いたと一般であつた。数歩の後、小林は突然津田の方を向いた。

「津田君、僕は淋しいよ」

津田は返事をしなかつた。二人はまた黙つて歩いた。浅い河

床の真中を、少しばかり流れている水が、ぼんやり見える橋杭はしぐいの下で黒く消えて行く時、幽かすかに音を立てて、電車の通る相間あいまに、ちよろちよると鳴った。

「僕はやつぱり行くよ。どうしても行つた方がいいんだからね」

「じゃ行くさ」

「うん、行くとも。こんな所にいて、みんなに馬鹿にされるより、朝鮮か台湾に行つた方がよっぽど増しだ」

彼の語気は癪かんばし走つていた。津田は急に穏やかな調子を使う必要を感じた。

「あんまりそう悲観しちやいけないよ。年齒としさえ若くつて身体からださえ丈夫なら、どこへ行つたつて立派に成せいこう効できるじゃないか。

——君が立つ前一つ送別会を開こう、君を愉快にするために」
今度は小林の方がいい返事をしなかった。津田は重ねて跋ばつを合
せる態度に出た。

「君が行ったらお金きんさんの結婚する時困るだろう」

小林は今まで頭のなかになかった妹の事を、はっと思い出した
人のように津田を見た。

「うん、あいつも可哀相かわいそうだけれども仕方がない。つまりこんな
やくざな兄貴あにきをもったのが不仕合せだと思って、諦あきららめて貰もらうん
だ」

「君がいなくたって、叔父や叔母がどうかしてくれるんだろう」
「まあそんな事になるよりほかに仕方がないからな。でなければ

この結婚を断つて、いつまでも下女代りに、先生の宅うちで使つて貰うんだが、——そいつはまあどっちにしたつて同じようなもんだろう。それより僕はまだ先生に気の毒な事があるんだ。もし行くとなると、先生から旅費を借りなければならぬからね」

「向うじゃくれないのか」

「くれそうもないな」

「どうにかして出させたら好いだろう」

「さあ」

一分ばかりの沈黙を破つた時、彼はまた独り言ひとごとのように云つた。

「旅費は先生から借りる、外套がいうは君から貰う、たつた一人の妹は置おいてき堀ぼりにする、世話はないや」

これがその晩小林の口から出た最後の台詞であつた。二人はついに分れた。津田は後をも見ずにさつさと宅の方へ急いだ。

三十八

彼の門は例の通り締まっていた。彼は潜り戸へ手をかけた。ところが今夜はその潜り戸もまた開かなかった。立てつけの悪いせいかと思つて、二三度やり直したあげく、力任せに戸を引いた時、ごとりという重苦しいの抵抗力を裏側に聞いた彼はようやく断念した。

彼はこの予想外の出来事に首を傾けて、しばらく戸の前に佇立

んだ。新らしい世帯を持ってから今日に至るまで、一度も外泊した覚のない彼は、たまに夜遅く帰る事があつても、まだこうした経験には出会わなかつたのである。

きよう

ひとも

今日の彼は灯点し頃から早く宅へ歸りたがつていた。叔父の家で名ばかりの晩飯を食つたのも仕方なしに食つたのであつた。進みもしない酒を少し飲んだのも小林に対する義理に過ぎなかつた。夕方以後の彼は、むしろお延のぶの面影おもかげを心におきながら外で暮していた。その薄ら寒い外から歸つて来た彼は、ちやうど暖かい家庭の灯火ともしびを慕つて、それを目標めあてに足を運んだのと一般であつた。彼の身体が土堀からだどべいに行き当つた馬のようにとまると共に、彼の期待も急に門前で喰いとめられなければならなかつた。そうしてそれ

を喰いとめたものがお延であるか、偶然であるかは、今の彼にとつてけつして小さな問題でなかった。

彼は手を挙げて開かない潜り戸をとんとんと二つ敲いた。「ここを開けろ」というよりも「ここをなぜ締めた」といつて詰問するような音が、更け渡りつつある往来の暗がりに響いた。すると内側ですぐ「はい」という返事がした。ほとんど反響に等しいくらい早く彼の鼓膜を打ったその声の主は、下女でなくてお延であった。急に静まり返った彼は戸の此方側で耳を澄ました。用のある時だけ使う事にしてある玄関先の電灯のスイッチを振る音が明らかに聞こえた。格子がすぐがらりと開いた。入口の開き戸がまだ閉てない事はたしかであった。

「どなた？」

潜りのすぐ向う側まで来た足音が止まると、お延はまずこう云つて誰^{すいか}何した。彼はなおの事^せ急き込んだ。

「早く開けろ、おれだ」

お延は「あらッ」と叫んだ。

「あなただつたの。御免^{ごめんあそ}遊ばせ」

ごとごと云わして、^{かきがねはず}を外した後で夫を内へ入れた彼女はいつもより少し蒼^{あお}い顔をしていた。彼はすぐ玄関から茶の間へ通り抜けた。

茶の間はいつもの通りきちんと片づいていた。鉄^{てつびん}瓶が約束通り鳴っていた。長^{ながひばち}火鉢の前には、例によつて厚いメリンスの座^ざ。

蒲団ぶとんが、彼の帰りを待ち受けるごとくに敷かれてあつた。お延の
 坐りつけたその向むこうには、彼女の座蒲団のほかに、女持の硯箱すずりばこ
 が出してあつた。青貝で梅の花を散らした螺鈿らでんの蓋ふたは傍わきへ取り除
 けられて、梨地なしじの中に簞はめ込んだ小さな硯ねがつやつやと濡ぬれてい
 た。持主が急いで座を立つた証しょうこ拠こに、細い筆の穂先が、巻紙の
 上へ墨を滲にじませて、七八寸書きかけた手紙の末を汚けがしていた。
 戸締りとじまをして夫あとの後から入ってきたお延は寝巻ねまきの上へ平生着ふだんぎの
 羽織を引っかけたままそこへぺたりと坐つた。

「どうもすみません」

津田は眼を上げて柱時計を見た。時計は今十一時を打つたばかりの
 ところであつた。結婚後彼がこのくらいな刻限に帰つたのは、

例外にしたところで、けっして始めてではなかった。

「何だつて締め出しなんか喰わせたんだい。もう帰らないとでも思つたのか」

「いいえ、さつきから、もうお帰りか、もうお帰りかと思つて待つてたの。しまいにあんまり淋さむしくつてたまらなくなつたから、とうとう宅うちへ手紙を書き出したの」

お延の両親は津田の父母と同じように京都にいた。津田は遠くからその書きかけの手紙を眺めた。けれどもまだ納なつとく得がでできなかった。

「待つてたものがなんで門なんか締めるんだ。物騒ぶつそうだからかね」
「いいえ。——あたし門なんか締めやしないわ」

「だって現に締まっていたじゃないか」

「時が昨夕締めつ放しにしたまんまなのよ、きつと。いやな人」

こう云ったお延はいつもする癖の通り、ぴくぴく彼女の眉を動かして見せた。日中用のない潜り戸の、を、朝外し忘れたという弁解は、けっして不合理なものではなかった。

「時はどうしたい」

「もう先刻寝かしてやったわ」

下女を起してまで責任者を調べる必要を認めなかった津田は、潜り戸の事をそのままにして寝た。

あくる朝の津田は、顔も洗わない先から、昨夜寝るまで全く予想していなかった不意の観物みものによつて驚ろかされた。

彼の床を離れたのは九時頃であつた。彼はいつもの通り玄関を抜けて茶の間から勝手へ出ようとした。すると嬋娟あでやかに盛粧せいそうしたお延が澄ましてそこに坐つていた。津田ははつと思つた。寝起ねおきの顔へ水をかけられたような夫の様子に満足したらしい彼女は微笑を洩もらした。

「今御眼覚おめざめ？」

津田は眼をぱちつかせて、赤い手絡てがらをかけた大丸髻おおまるまげと、派出はでな刺繡ぬいをした半襟はんえりの模様と、それからその真中にある化粧けしやうご後

の白い顔とを、さも珍らしい物でも見るような新らしい眼つきで眺めた。

「いったいどうしたんだい。朝っぱらから」

お延は平気なものであつた。

「どうもしないわ。——だって今日はあなたがお医者様へいらつしやる日じゃないの」

昨夜遅くそこへ脱ぎ捨てて寝たはずの彼の袴はかまも羽織も、畳んだなり、ちゃんと取り揃そろえて、渋紙しぶかみの上へ載せてあつた。

「お前もいっしょに行くつもりだったのかい」

「ええ無論行くつもりだわ。行つちや御迷惑なの」

「迷惑って訳はないがね。——」

津田はまた改めて細君の服装なりを吟味ぎんみするように見た。

「あんまりおつくりがおおげさ大袈裟だからね」

彼はすぐ心うちの中でこの間見た薄暗い控室の光景を思い出した。

そこに坐っている患者の一群ひとむれとこの着飾った若い奥様とは、とても調和すべき性質のものでなかった。

「だってあなた今日は日曜よ」

「日曜だって、芝居やお花見に行くのとは少し違うよ」

「だって妾あたし……」

津田に云わせれば、日曜はなおの事患者が朝から込み合うだけであつた。

「どうもそういうでこな服装なりをして、あのお医者様へ夫婦お

揃いで乗り込むのは、少し——」

「辟易へきえき？」

お延の漢語が突然津田を擦くすった。彼は笑い出した。ちよつと眉まゆを動かしたお延はすぐ甘あま垂たれるような口調を使った。

「だってこれから着物なんか着換えるのは時間がかかって大変な
んですもの。せつかく着ちまつたんだから、今日はこれで堪かん忍にん
してちようだいよ、ね」

津田はどうとう敗北した。顔を洗っているとき、彼は下女くるまに俵たわを二台云いつけるお延の声を、あたかも自分が急せき立たてられでも
するように世話せわしなく聞いた。

普通の食事を取らない彼の朝飯あさめしはほとんど五分とかからなかつた。

楊枝ようじも使わないで立ち上った彼はすぐ二階へ行こうとした。

「病院へ持つて行くものを纏まとめなくっちゃ」

津田の言葉と共に、お延はすぐ自分の後うしろにある戸棚とだなを開けた。

「ここに拵こしらえてあるからちよつと見てちようだい」

よそ行着ゆきぎを着た細君いたわを労らなければならなかつた津田は、やや

重い手提鞆てさげかばんと小さな風呂敷包ふろしきづつみを、自分の手で戸棚とだなから引き摺ず

り出した。包の中には試しに袖そでを通したばかりの例の襦袢どてらと平

紵けの寝巻紐ねまきひもが這入はいっているだけであつたが、鞆かばんの中からは、

楊枝だの齒磨粉はみがきだの、使いつけたラヴェンダー色の書翰用紙しよかんようしだ

の、同じ色の封筒だの、万年筆だの、小さい鍬はさみだの、毛抜だのが

雑然と現われた。そのうちで一番重くて嵩張^{かさば}った大きな洋書を取り出した時、彼はお延に云った。

「これは置いて行くよ」

「そう、でもいつでも机の上に乗っていて、枝折^{しおり}が挟^{はさ}んであるから、お読みになるのかと思って入れといたのよ」

津田君は何にも云わずに、二カ月以上もかかってまだ読み切れない経済学の独逸書^{ドイツしょ}を重そうに畳の上に置いた。

「寝ていて読むにや重くって駄目だよ」

こう云った津田は、それがこの大部^{たいぶ}の書物を残して行く正当の理由であると知りながら、あまり好い心持がしなかった。

「そう、本はどれが要^いるんだか妾分らないから、あなた自分でお

好きなのを扱よつてちようだい」

津田は二階から軽い小説を二三冊持つて来て、経済書の代りに鞆の中へ詰め込んだ。

四十

天氣が好いので幌ほろを畳たたました二人は、鞆かばんと風呂敷包を、各めいめい自ごの俵くるまの上に一つずつ乗せて家を出た。小路こうじの角を曲つて電車通りを一二丁行くと、お延の車夫が突然津田の車夫に声をかけた。俵は前後ともすぐとまった。

「大變。忘れものがあるの」

車上でふり返った津田は、何にも云わずに細君の顔を見守った。
 念入ねんいりに身仕舞みじまいをした若い女の口から出る刺戟しげきせい性に富んだ言葉
 のために引きつけられたものは夫ばかりではなかった。車夫も梶か
 棒じぼうを握ったまま、等しくお延のぶの方へ好奇の視線を向けた。傍そばを
 通る往来の人さえ一瞥いちべつの注意を夫婦の上へ与えないではいられ
 なかった。

「何だい。何を忘れたんだい」

お延は思案するらしい様子をした。

「ちよつと待っててちようだい。すぐだから」

彼女は自分の俤だけを元へ返した。中ぶらちゅうぶらりんの心的状態でそ
 こに取り残された津田は、黙ってその後姿を見送った。いったん

小路の中に隠れた俤がやがてまた現はげわれると、劇しい速力でまた彼の待っている所まで馳かけて来た。それが彼の眼の前でとまった時、車上的お延は帯の間から一尺ばかりの鉄製の鎖くさりを出して長くぶら下げて見せた。その鎖の端はじには環わがあつて、環の中には大小五六個の鍵かぎが通してあるので、鎖を高く示そうとしたお延の所作と共に、じやらじやらという音が津田の耳に響いた。

「これ忘れたの。箆たんす笥の上に置きつ放しにしたまま」

夫婦以外に下女しかない彼らの家庭では、二人揃そろつて外出する時の用心に、大事なものに錠じようを卸おろしておいて、どっちかが鍵だけ持つて出る必要があつた。

「お前預かっておいで」

じやらじやらするものを再び帯の間に押し込んだお延は、平手
でほんとその上を敲たたきながら、津田を見て微笑した。

「大丈夫」

俤は再び走かけ出した。

彼らの医者に着いたのは予定の時刻より少し後おくれていた。しかし午ひるまでの診察時間に間に合わないほどでもなかった。夫婦して控室に並んで坐るのが苦になるので、津田は玄関を上ると、すぐ薬局の口へ行つた。

「すぐ二階へ行つてもいいでしょうね」

薬局にいた書生は奥から見習いの看護婦を呼んでくれた。まだ十六七にしかならないその看護婦は、何の造ぞう作もなく笑いながら

津田にお辞儀じぎをしたが、傍に立っているお延の姿を見ると、少し物々しさに打たれた気味で、いったいこの孔雀くじやくはどこから入つて来たのだろうという顔つきをした。お延が先せんを越して、「御ごやっ厄介かいになります」とこつちから挨拶あいさつをしたので、始めて気がついたように、看護婦も頭を下げた。

「君、こいつを一つ持ってくれたまえ」

津田は車夫から受取つた鞆かばんを看護婦に渡して、二階の上り口あがくちの方へ廻つた。

「お延こつちだ」

控室の入口に立つて、患者のいる部屋の中を覗のぞき込んでいたお延は、すぐ津田のあと後に随ついて階子段はしごだんを上あがつた。

「大變陰氣な室ね、あすこは」

みなみひがし
南 東の開いた二階は幸に明るかつた。障子しょうじを開けて縁えんが

側わへ出た彼女は、つい鼻の先にある西洋洗濯屋の物干ものほしを見ながら、津田を顧かえりみた。

「下と違つてここは陽気ね。そうしてちよつといいお部屋ね。畳は汚よごれているけれども」

もと請負師うけおいしか何かの妾しやうたく宅たくに手を入れて出来上つたその医
院の二階には、どことなく粹いきな昔の面影おもかげが残つていた。

「古いけれども宅うちの二階よりましかも知れないね」

日に照らされてきらきらする白い洗濯物の色を、秋らしい気分
で眺めていた津田は、こう云つて、時代のために多少燻くすぶつた天て

井んじようだの床とこばしら柱しらだのを見廻した。

四十一

そこへ先刻さつぎの看護婦が急須きゆうすへ茶を淹いれて持ってきた。

「今仕度したくをしておりますから、少しの間どうぞ」

二人は仕方なしに行儀よく差向いに坐つたなり茶を飲んだ。

「何だか気がそわそわして落ちつかないのね」

「まるでお客さまに行つたようだろう」

「ええ」

お延は帯の間から女持の時計を出して見た。津田は時間の事よ

りもこれから受ける手術の方が気になった。

「いったい何分ぐらいで済むのかなあ。眼で見ないでもあの刃物^{はもの}の音だけ聞いていると、好い加減変な心持になるからな」

「あたし怖^{こわ}いわ、そんなものを見るのは」

お延は実際怖^{まゆ}そうに眉を動かした。

「だからお前はここに待つといでよ。わざわざ手術台の傍^{そば}まで来て、穢^{きた}ないところを見る必要はないんだから」

「でもこんな場合には誰か身寄^{みより}のものが立ち合わなくっちゃ悪いんでしよう」

津田は真面目^{まじめ}なお延の顔を見て笑い出した。

「そりや死ぬか生きるかっていうような重い病気の時の事だね。

誰がこれしきの療治に立合人^{たちあい}なんか呼んで来る奴^{やつ}があるものかね」

津田は女に穢^{きた}ないものを見せるのが嫌^{きら}な男であつた。ことに自分の穢^{きた}ないところを見せるは厭^{いや}であつた。もつと押しつめていうと、自分で自分の穢^{きた}ないところを見るのでさえ、普通の人以上に苦痛を感じる男であつた。

「じや止^よみましょう」と云つたお延はまた時計を出した。

「お午^{ひる}までに済むでしうか」

「済むだろうと思うがね。どうせこうなりやいつだって同^{おん}なじこつちやないか」

「そりやそうだけど……」

お延は後を云わなかった。津田も訊きかなかった。

看護婦がまた階はしご子段の上へ顔を出した。

「支度したくができましたからどうぞ」

津田はすぐ立ち上った。お延も同時に立ち上ろうとした。

「お前はそこに待つといでと云うのに」

「診察室へ行くんじゃないのよ。ちよつとここの電話を借りるのよ」

「どこかへ用があるのかね」

「用じゃないけど、——ちよつとお秀さんの所へあなたの事を知らせておこうと思って」

同じ区内にある津田の妹の家はそこからあまり遠くはなかった。

今度の病気について妹いもとの事をあまり頭の中に入れていなかった津田は、立とうとするお延を留めた。

「いいよ、知らせないでも。お秀なんか知らせるのはあんまり仰ぎようさん山過ぎるよ。それにあいつが来るとやかましくつていけないからね」

年は下でも、性質の違うこの妹は、津田から見たある意味の苦に手であつた。

お延は中ちゆうごし腰のまゝ答えた。

「でも後あとでまた何か云われると、あたしが困るわ」

強しいてとめる理由も見出みいだし得なかつた津田は仕方なしに云つた。
「かけても構わないが、何も今に限つた事はないだろう。あいつ

は近所だから、きつとすぐ来るよ。手術をしたばかりで、神経が過敏になつてるところへもつて来て、兄さんが何とかで、お父さんがかんとかだと云われるのは實際楽しいやないからね」

お延は微かな声で階下を憚るような笑い方をした。しかし彼女の露わした白い歯は、あら気の毒だという同情よりも、滑稽だという単純な感じを明らかに夫に物語っていた。

「じやお秀さんへかけるのは止すから」

こう云つたお延は、とうとう津田といっしよに立ち上つた。

「まだほかにかける所があるのかい」

「ええ岡本へかけるのよ。ひる午までにかけるつて約束があるんだから、いいでしょう、かけても」

前後して階子段はしごだんを下りた二人は、そこで別々になった。一人が電話口の前に立った時、一人は診察室の椅子へ腰をおろした。

四十二

「リチネはお飲みでしたらうね」

医者は糊の強い洗い立ての白い手術着をこわこわさせながら津田きに訊いた。

「飲みましたが思ったほど効目ききめがないようでした」

昨日きのうの津田にはリチネの効目を気にするだけの暇さえなかった。それからそれへと忙がしく心を使わせられた彼がこの下剤げざいから受

けた影響は、ほとんど精神的に零^{ゼロ}であつたのみならず、生理的にも案外微弱であつた。

「じやもう一度浣^{かん}腸^{ちよう}しましょう」

浣腸の結果も充分でなかつた。

津田はそれなり手術台に上^{のほ}つて仰^{あおむけ}向に寝た。冷たい防水布が

じかに皮膚に触れた時、彼は思わず冷^{ひや}りとした。堅い括^{くく}り枕^{まくら}に着

けた彼の頭とは反対の方角からばかり光線が差し込むので、彼の

眼は明りに向つて寝る人のように、少しも落ちつけなかつた。彼

は何度も瞬^{まばた}きをして、何度も天^{てん}井^{じよう}を見直した。すると看護婦

が手術の器械を入れたニツケル製の四角な浅い盆みたようなもの

を持って彼の横を通つたので、白い金属性の光がちらちらと動い

た。仰向けに寝ている彼には、それが自分の眼を掠^{かす}めて通り過ぎ
 るとしか思われなかった。見てならない気味の悪いものを、こと
 さらに偷^{ぬす}み見たのだという心持がなおのこと募^つった。その時表の
 方で鳴る電話のベルが突然彼の耳に響いた。彼は今まで忘れてい
 たお延の事を急に思い出した。彼女の岡本へかけた用事がやつと
 済んだ時に、彼の療治はようやく始まったのである。

「コカインだけでやります。なに大して痛い事はないでしょう。
 もし注射が駄目だったら、奥の方へ薬を吹き込みながら進んで行
 くつもりです。それで多分できそうですから」

局部を消毒しながらこんな事を云う医者 of 言葉を、津田は恐ろ
 しいようなまた何でもないような一種の心持で聴いた。

局部魔睡きよくぶますいは都合よく行つた。まじまじと天井を眺めている彼は、ほとんど自分の腰から下に、どんな大事件が起っているか知らなかった。ただ時々自分の肉体の一部に、遠い所で誰かが圧迫を加えているような気がするだけであつた。鈍い抵抗にぶがそこに感ぜられた。

「どんなです。痛かないでしょう」

医者いしやの質問には充分の自信があつた。津田は天井を見ながら答えた。

「痛ありません。しかし重い感じだけがあります」

その重い感じというのを、どう云い現わしていいか、彼には適當な言葉がなかった。無神経な地面が人間の手で掘り割られる時、

ひよつとしたらこんな感じを起しはしまいかという空想が、ひよつくり彼の頭の中に浮かんだ。

「どうも妙な感じです。説明のできないような」

「そうですか。我慢できますか」

途中で脳貧血でも起されては困ると思つたらしい医者言葉つきが、何でもな^{ぶどうしゆ}い彼をかえつて不安にした。こういう場合予防のために葡萄酒などを飲まされるものかどうか彼は全く知らなかつたが、何しろ特別の手当を受ける事は厭^{いや}であつた。

「大丈夫です」

「そうですか。もう直^{じき}です」

こういう会話を患者と取り換わせながら、間断なく手を働らか

せている医者の態度には、熟練からのみ来る手際が閃めいていそうに思われた。けれども手術は彼の言葉通りそう早くは片づかなかつた。

切物の皿に当つて鳴る音が時々した。鋏で肉をじよきじよき

切るような響きが、強く誇張されて鼓膜を威嚇した。津田はその

たびにガーゼで拭き取られなければならない赤い血潮の色を、想

像の眼で腥さそうに眺めた。じつと寝かされている彼の神経はじ

つとしているのが苦になるほど緊張して来た。むず痒い虫のよう

なものが、彼の身体を不安にするために、気味悪く血管の中を這

い廻つた。

彼は大きな眼を開いて天井を見た。その天井の上には綺麗な

に着飾ったお延がいた。そのお延が今何を考えているか、何をしているか、彼にはまるで分らなかった。彼は下から大きな声を出して、彼女を呼んで見たくなった。すると足の方で医者の声が出た。

「やっと済みました」

むやみにガーゼを詰め込まれる、こそばゆい感じのした後で、あと

医者はまた云った。

「はんこん 癍痕が案外堅いんで、出血の恐れがありますから、当分じつとして下さい」

最後の注意と共に、津田はようやく手術台から下ろおされた。

四十三

診察室を出るとき、後うしろから随ついて来た看護婦が彼に訊きいた。

「いかがです。気分のお悪いような事はございませんか」

「いいえ。——蒼あおい顔おでもしているかね」

自分自身に多少懸念けねんのあつた津田はこう云いつて訊きき返さなければならなかつた。

創きず口ぐちにできるだけ多くのガーゼを詰め込まれた彼の感じは、

他ひとが想像する倍以上に重苦しいものであつた。彼は仕方なしにそのそ歩あるいた。それでも階はしご子ご段だんを上あがる時には、割さかれた肉とガーゼとが擦こすれ合あつてざらざらするような心持がした。

お延は階段の上に立っていた。津田の顔を見ると、すぐ上から声を掛けた。

「済んだの？ どうして？」

津田ははっきりした返事も与えずに室へやの中に這入はいった。そこには彼の予期通り、白いシーツに裹つつまれた蒲団ふとんが、彼の安臥あんがを待つべく長々と延べてあつた。羽織を脱ぎ捨てるが早いか、彼はすぐその上へ横になつた。鼠ねずみ地のネルを重ねた銘仙めいせんの襦袍どてらを後うしろから着せるつもりで、両手で襟えりの所を持ち上げたお延は、拍子ひょうし抜けのした苦笑と共に、またそれを袖そで置だたみにして床とこの裾すその方に置いた。

「お薬はいただかなくていいの」

彼女は傍そばにいる看護婦の方を向いて訊きいた。

「別に内用のお薬は召し上らないでも差さ支しえないのでございます。お食事の方はただいまこしらえ、こしらえてこちらから持って参ります」

看護婦は立ちかけた。黙って寝ていた津田は急に口を開いた。

「お延、お前何か食うなら看護婦さんに頼んだらいいだろう」

「そうね」

お延は躊躇ちゆうちよした。

「あたしどうしようかしら」

「だって、もう昼過だろう」

「ええ。十二時二十分よ。あなたの手術はちょうど二十八分かつたのね」

時計の蓋ふたを開けたお延は、それを眺めながら精密な時間を云つた。津田が手術台の上で俎まないたへ乗せられた魚のように、おとなしく我慢している間、お延はまた彼の見つめなければならなかった天てんじよう井の上で、時計と睨にらめつ競くらでもするように、手術の時間を計っていたのである。

津田は再び訊きいた。

「今から宅うちへ帰ったって仕方がないだろう」

「ええ」

「じゃここで洋食でも取って貰って食ったらいいじゃないか」

「ええ」

お延の返事はいつまで経たつても捗はかばか々しくなかった。看護婦は

とうとう下へ降りて行つた。津田は疲れた人が光線の刺戟しげきを避けるような気分で眼をねむつた。するとお延が頭の上で、「あなた、あなた」というので、また眼を開あかなければならなかつた。

「心持が悪いの？」

「いいや」

念を押したお延はすぐ後あとを云つた。

「岡本でよろしくつて。いずれそのうち御見舞あがに上りますからつて」

「そうか」

津田は軽い返事をしたなり、また眼をつぶろうとした。するとお延がそうさせなかつた。

「あの岡本でね、今日は非芝居へいつしよに來いって云うんですが、行つちやいけなくつて」

氣のよく廻る津田の頭に、今朝からのお延の所作が一度に閃め
 いた。病院へ随ついて来るにしては派出過はですぎる彼女の衣裳いしやうといひ、
 出る前に日曜だと断つた彼女の注意といひ、ここへ來てから、そ
 わそわして岡本へ電話をかけた彼女の態度といひ、ことごとく芝
 居の二字に向つて注そそぎ込まれていゝようにも取れた。そういう眼
 で見ると、手術の時間を精密に計つた彼女の動機さえ疑惑の種に
 ならないではすまなかつた。津田は黙つて横を向いた。床とこの間の
 上に取り揃そろえて積み重ねてある、封筒ふうとうだの書翰しよかん用紙ようしだの鋏はさみだの
 書物だのが彼の眼についた。それは先刻さつ鞆たんぼへ入れて彼がここへ持

つて来たものであつた。

「看護婦に小さい机を借りて、その上へ載せようと思つたんですけれども、まだ持つて来てくれないから、しばらくの間、ああしておいたのよ。本でも御覧になつて」

お延はすぐ立つて床の間から書物をおろした。

四十四

津田は書物に手を触れなかつた。

「岡本へは断つたんじゃないのか」

不審よりも不平な顔をした彼が、向^{むき}を変えて寝返りを打つた時

に、堅固にできていない二階の床が、彼の意を迎えるように、ずしんと鳴った。

「断つたのよ」

「断つたのには是非来いって言うのかね」

この時津田は始めてお延の顔を見た。けれどもそこには彼の預期した何物も現われて来なかった。彼女はかえって微笑した。

「断つたのには是非来いって言うのよ」

「しかし……」

彼はちよつと行きつまつた。彼の胸には云うべき事がまだ残っているのに、彼の頭は自分の思わく通り迅速じんそくに働らいてくれない

かった。

「しかし——断つたのに是非来いなんていうはずがないじゃないか」

「それを云うのよ。岡本もよっぽどの没分曉わからずやね」

津田は黙ってしまった。何と云って彼女を追ついきゆう究していいか見けんとう当がつかなかった。

「あなたまだ何かあたしを疑ぐつていらつしやるの。あたし厭だわ、あなたからそんなに疑ぐられちゃ」

彼女の眉まゆがさもさも厭そうに動いた。

「疑ぐりやしないが、何だか変だからさ」

「そう。じゃその変なところを云つてちようだいな、いくらでも

説明するから」

不幸にして津田にはその変なところが明瞭めいりように云えなかつた。

「やっぱり疑ぐつていらつしやるのね」

津田ははつきり疑つていないと云わなければ、何だか夫として自分の品格かかに関わるような気がした。と云つて、女から甘く見られるのも、彼にとって少なからざる苦痛であつた。二つの我がが我を張り合つて、彼の心のうちで闘う間、よそ目に見える彼は、比較的冷静であつた。

「ああ」

お延は微かすかな溜息ためいきを洩もらしてそつと立ち上つた。いったん閉た切きつた障子しょうじをまた開けて、南向の縁側えんがわへ出た彼女は、手摺てすり

の上へ手を置いて、高く澄んだ秋の空をぼんやり眺めた。隣の洗濯屋の物干ものほしに隙間なく吊すきまされたワイシャツシャツだのシーツだのが、先さ刻つき見た時と同じように、強い日光を浴びながら、乾いた風に揺れていた。

「好いお天気だ事」

お延ひとが小さな声で独りごとのようにこう云った時、それを耳にした津田は、突然籠かごの中うちにいる小鳥の訴えを聞かされたような心持がした。弱い女を自分の傍そばに縛しばりつけておくのが少し可哀相かわいそうになった。彼はお延に言葉をかけようとして、接穂つぎほのないのに困った。お延も欄干らんかんに身を倚よせたまますぐ座敷の中へ戻つて来なかった。

そこへ看護婦が二人の食事を持って下から上^{あが}つて来た。

「どうもお待遠さま」

津田の膳^{ぜん}には二個の鶏卵^{けいらん}と一合のソップと麵麩^{パン}がついているだけであつた。その麵麩も半片の二分ノ一と分量はいつのまにか定められていた。

津田は床の上に腹^{はらばい}這になつたまま、むしやむしや口を動かしながら、機会を見計らつて、お延に云つた。

「行くのか、行かないのかい」

お延はすぐ肉匙^{フオーク}の手を休めた。

「あなた次第よ。あなたが行けとおっしゃれば行くし、止せとおっしゃれば止すわ」

「大変柔順だな」

「いつでも柔順だわ。——岡本だつてあなたに伺つて見た上で、もしいいとおっしゃつたら連れて行つてやるから、御病氣が大した事でなかったら、訊きいて見ろつて云うんですもの」

「だつてお前の方から岡本へ電話をかけたんじゃないか」

「ええそりやそうよ、約束ですもの。一返いっぺん断つたけれども、模様次第では行けるかも知れないだろうから、もう一返その日の午ひるまでに電話で都合を知らせろつて云つて来たんですもの」

「岡本からそういう返事が来たのかい」

「ええ」

しかしお延はその手紙を津田に示していなかった。

「要するに、お前はどんなんだ。行きたいのか、行きたくないのか」

津田の顔色を見定めたお延はすぐ答えた。

「そりや行きたいわ」

「とうとう白状したな。じゃおいでよ」

二人はこういう会話と共に午ひるめし飯を済ました。

四十五

手術後の夫を、やっと安静状態に寝かしておいて、自分一人下へ降りた時、お延はもう約束の時間をだいぶおく後らせていた。彼女

は自分の行先を車夫に教えるために、ただ一口劇場の名を云つたなり、すぐ俵くるまに乗った。門前に待たせておいたその俵は、角の帳場にある四五台のうちで一番新らしいものであつた。

小路こうじを出た護謨輪ゴムわは電車通りばかり走った。何の意味なしに、ただ賑にぎやかな方角へ向けてのみ速力を出すといった風の、景氣の好い車夫の駟かけ方かたが、お延に感染した。ふつくらした厚い席の上で、彼女の身体からだが浮うつきながら早く揺うごくと共に、彼女の心にも柔らかで軽快な一種の動揺が起った。それは自分の左右前後に紛ふんとして活躍する人生を、容赦なく横切つて目的地へ行く時の快感であつた。

車上の彼女は宅うちの事を考える暇がなかつた。機嫌きげんよく病院の二

階へ寝かして来た津田の影像イメジが、今日一日ぐらい安心して彼を忘れても差さ支しえないという保証を彼女に与えるので、夫の事もまるで苦にならなかった。ただ目の未来が彼女の俤おとともに動いた。芝居その物に大した嗜好しこうを始めからもっていない彼女は、時間が後おくれたのを氣にするよりも、ただ早くそこに行き着くのを氣にした。こうして新らしい俤で走っている道中が現しげきに刺戟であると同様の意味で、そこへ行き着くのはさらに一層の刺戟であつた。

俤は茶屋の前でとまつた。挨拶あいさつをする下女にすぐ「岡本」と答えたお延の頭には、提ちよう灯ちんだの暖簾のれんだの、紅白の造り花などがちらちらした。彼女は俤を降りる時一度に眼に入つたこれらの色と形の影を、まだ片づける暇もないうちに、すぐ廊下伝いに案

内されて、それよりも何層倍か錯綜さくそうした、また何層倍か濃厚な模様を、縦横に織り拵こしらえている、海のような場内へ、ひよつこり顔を出した。それは茶屋の男が廊下の戸を開けて「こちらへ」と云った時、その隙間すきまから遠くに前の方を眺めたお延の感じであった。好んでこういう場所へ出しゅつ入にゅうしたがる彼女にとって、別に珍らしくもないこの感じは、彼女にとって、永久に新しい感じであつた。だからまた永久に珍らしい感じであるとも云えた。彼女は暗闇くらやみを通り抜けて、急に明海あかるみへ出た人のように眼を覚さました。そうしてこの氛圍ふんいきの片隅かたすみに身を置いた自分は、眼の前に動く生きた大きな模様の一部分となつて、拳止動作共きよしどうさことごとくこれからその中に織り込まれて行くのだという自覚が、緊張し

た彼女の胸にはつきり浮んだ。

席には岡本の姿が見えなかった。細君に娘二人を入れても三人にしかならないので、お延の坐るべき余地は充分あった。それでも姉娘の継子つぎこは、お延の座があいにく自分の影になるのを氣遣きづかうように、後うしろを向いて筋違すじかいに身体からだを延ばしながらお延に訊きいた。

「見えて？ 少しこと換かわつてあげましょうか」

「ありがとう。ここでたくさん」

お延は首を振つて見せた。

お延のすぐ前に坐つていた十四になる妹娘の百合子ゆりこは左利ひだりききなので、左の手に軽い小さな象牙ぞうげせい製の双眼鏡を持つたまま、その肱ひじを、赤い布きれで裹つつんだ手摺てすりの上に載のせながら、後うしろをふり返つた。

「遅かったのね。あたし宅の方へいらっしやるのかと思つてたのよ」

年の若い彼女は、まだ津田の病氣について挨拶かたがたお延に何か云うほどの智慧をもたなかった。

「御用があつたの？」

「ええ」

お延はただ簡単な返事をしたぎり舞台の方を見た。それは先刻から姉妹の母親が傍目もふらず熱心に見つめている方角であつた。彼女とお延は最初顔を見合せた時に、ちよつと黙礼を取り替わせただけで、拍子木の鳴るまでついに一言も口を利かなかつた。

四十六

「よく来られたのね。ことによると今日はむずかしいんじゃないかつて、先刻さつきつぎ継と話してたの」

幕が引かれてから、始めてうち寛くつろいだ様子を示した細君は、ようやくお延に口を利き出した。

「そら御覧なさい、あたしの云った通りじゃなくって」

誇り顔に母の方を見てこう云った継子はすぐお延に向つてその後あとを云い足した。

「あたしお母さまと賭かけをしたのよ。今日あなたが来るか来ないか

つて。お母さまはことによると来ないだろうっておっしゃるから、あたしきつといらつしやるに違ないって受け合つたの」

「そう。また御神籤おみくじを引いて」

継子は長さ二寸五分幅六分ぐらいの小さな神籤箱の所有者であつた。黒塗の上へ篆てんしよ書の金文字で神籤と書いたその箱の中には、象牙ぞうげを平たく削けずつた精巧の番号札が数かず通り百本納められていた。彼女はよく「ちよつと見て上げましょうか」と云いながら、小楊こよう枝入じいれを取り扱うような手つきで、短冊形たんざくがたの薄い象牙札を振り出しては、箱の大きさと釣り合うようにできた文句入もんくいりの折手本おりでほんを繰くりひろげて見た。そうしてそこに書いてある蠅はえの頭ほどな細かい字を読むために、これも附属品として始めから添えてある小

さな虫眼鏡を、羽二重はぶたえの裏をつけた更紗さいしやの袋から取り出して、も
 ったいらしくその上へ翳かぎしたりした。お延が津田と浅草へ遊びに
 行つた時、玩具おもちゃとしては高過ぎる四円近くの代価を払つて、仲
 見世から買つて歸つた精巧なこの贈物は、来年二十一になる継子
 にとつて、処女の空想に神秘の色を遊戯ゆうぎ的に着けてくれる無邪
 気な裝飾品であつた。彼女は時として帙入ちつのままそれを机の上か
 ら取つて帯の間に挟はさんで外出する事さえあつた。

「今日も持つて来たの？」

お延は調戲からかいはんぶん半分彼女きに訊いて見たくなつた。彼女は苦笑し
 ながら首を振つた。母が傍そばから彼女に代つて返事をするごとくに
 云つた。

「今日の予言はお神籤みくじじゃないのよ。お神籤よりもっと偉えらい予言なの」

「そう」

お延は後が聞きたそうにして、母子おやこを見比べた。

「継つぎはね……」と母が云いかけたのを、娘はすぐ追被おつかぶせるようにとめた。

「止よしてちようだいよ、お母さま。そんな事ここで云つちや悪いわよ」

今まで黙つて三人の会話を聴きいていた妹娘の百合子ゆりこが、くすくす笑い出した。

「あたし云つてあげてもいいわ」

「お止しなさいよ、百合子さん。そんな意地の悪い事するのは。いいわ、そんなら、もうピアノを浚さらって上げないから」

母は隣りにいる人の注意を惹ひかないように、小さな声を出して笑った。お延もおかしかった。同時になお訳が訊ききたかった。

「話してちようだいよ、お姉さまに怒られたって構わないじゃないの。あたしがついてるから大丈夫よ」

百合子はわざと腮あごを前へ突き出すようにして姉を見た。心持小鼻をふくらませたその態度は、話す話さないの自由を我に握った人の勝利を、もののしく相手に示していた。

「いいわ、百合子さん。どうしても勝手になさい」

こう云いながら立つと、継子は後の戸うしろを開けてすぐ廊下へ出た。

「お姉さま怒ったのね」

「怒ったんじやないよ。きまりが悪いんだよ」

「だってきまりの悪い事なんかかないの。あんな事云ったって」
「だから話してちょうだいよ」

とし
年齒の六つほど下な百合子の小供らしい心理状態を観察したお

延は、それを旨く利用しようと試みた。けれども不意に座を立つ

た姉の挙動が、もうすでにその状態を崩くずしていたので、お延の慫し

ようよう

憑よは何の効目ききめもなかった。母はとうとうすべてに対する責任

を一人で背負しよわなければならなかった。

「なに何でもないんだよ。継がね、由雄さんはああいう優しい好
い人で、何でも延子さんのいう通りになるんだから、今日はきつ

と来るに違ないって云つただけなんだよ」

「そう。由雄が継子さんにはそんなに頼母たのもしく見えるの。ありがたいわね。お礼を云わなくっちゃならないわ」

「そうしたら百合子が、そんならお姉様も由雄さん見たような人の所へお嫁に行くといいつて云つたんでね、それをお前の前で云われるのが恥ずかしいもんだから、ああやって出て行つたんだよ」

「まあ」

お延は弱い感かんとし投詞をむしろ淋さみしそうに投げた。

四十七

手前勝手な男としての津田が不意にお延の胸に上った。自分の朝夕^{あさゆう}尽している親切は、ずいぶん精一杯なつもりでいるのに、夫の要求する犠牲には際限がないのかしらんという、不断からの疑念が、濃い色でぱつと頭の中へ出た。彼女はその疑念を晴らしてくれる唯一^{ゆいいつ}の責任者が今自分の前にいるのだという自覚と共に、岡本の細君を見た。その細君は、遠くに離れている両親をもった彼女から云えば、東京中で頼りにするたった一人の叔母であつた。

「良人^{おとと}というものは、ただ妻の情愛を吸い込むためにのみ生存する海綿^{かいめん}に過ぎないのだろうか」

これがお延のとうから叔母^{おば}にぶつかつて、質^{ただ}して見たい問であ

った。不幸にして彼女には持つて生れた一種の氣位きぐらゐがあつた。

見方次第では瘦やせがまん我慢とも虚栄心とも解釈のできるこの氣位が、

叔母に対する彼女を、この一点で強く牽けんせい制した。ある意味から

いうと、毎日土俵の上で顔を合せて相撲すもうを取つてゐるような夫婦

關係というものを、内側の二人から眺めた時に、妻はいつでも夫

の相手であり、またたまには夫の敵であるにしたところで、いつ

たん世間に向つたが最後、どこまでも夫の肩を持たなければ、体てい

よく夫婦として結びつけられた二人の弱味を表へ曝さらすような氣が

して、恥ずかしくていられないというのがお延の意地であつた。

だから打ち明け話をして、何か訴えたくてたまらない時でも、夫

婦から見れば、やっぱり「世間」という他人の部類へ入れべきこ

の叔母の前へ出ると、敏感のお延は外聞が悪くって何も云う氣にならなかつた。

その上彼女は、自分の予期通り、夫が親切に親切を返してくれないのを、足りない自分の不行届ふゆきとどきからでも出たように、傍はたから解釈されてはならないと日頃から掛念けねんしていた。すべての噂うわさのうちで、愚鈍という非難を、彼女は火のように恐れていた。

「世間には津田よりも何層倍きか氣きむずかしい男を、すぐ手の内に丸め込む若い女さえあるのに、二十三にもなつて、自分の思うように良人おつとを綾あやなして行けないのは、畢ひつきよう 竟知恵ちえがないからだ」

知恵と徳とをほとんど同じように考えていたお延には、叔母からこう云われるのが、何よりの苦痛であつた。女として男に対す

る腕をもつていないと自白するのは、人間でありながら人間の用をなさないと自白するくらいの屈辱として、お延の自尊心を傷けたのである。時と場合が、こういう立ち入った談話を許さない劇場でないにいたところで、お延は黙っているよりほかに仕方がなかった。意味ありげに叔母の顔を見た彼女は、すぐ眼を外せた。

舞台一面に垂れている幕がふわふわ動いて、継目の少し切れた間から誰かが見物の方を覗いた。気のせいかもしれない。お延の方を見ているようなので、彼女は今向け換えたばかりの眼をまたよそに移した。下は席を出る人、座へ戻る人、途中を歩く人で、一度にざわつき始めていた。坐ったぎりの大多数も、前後左右に思い思いの姿勢を取ったり崩したりして、片時も休まなかった。無数の

黒い頭が渦うずのように見えた。彼らの或者の派出はでな扮装つくりが、色彩の運動から来る落ちつかない快感を、乱雑にちらちらさせた。

土間どまから眼を放したお延は、ついに谷を隔へだてた向う側を吟味ぎんみし始めた。するとちょうどその時後うしろをふり向いた百合子が不意に云った。

「あすこに吉川さんの奥さんが来ていてよ。見えたでしょう」

お延は少し驚ろかされた眼を、教わった通りの見当けんとうへつけて、そこに容易たやすく吉川夫人らしい人の姿を発見した。

「百合子さん、眼が早いね、いつ見つけたの」

「見つけやしないのよ。先刻さつきから知ってるのよ」

「叔母さんや継子さんも知ってるの」

「ええ皆みんなな知ってるのよ」

知らないのは自分だけだったのによく気のついたお延が、なおその方を百合子の影から見守っていると、故意だか偶然だか、いきなり吉川夫人の手にあつた双眼鏡が、お延の席に向けられた。「あたし厭いやだわ。あんなにして見られちゃ」

お延は隠れるように身を縮ちぢめた。それでも 向むこう側がわの双眼鏡は、なかなかお延の見当から離れなかった。

「そんならいいわ。逃げ出しちまうだけだから」

お延はすぐ継子の後あとを追おっかけて廊下へ出た。

四十八

そこから見渡した外部そとの光景も場所柄ばしょがらだけに賑にぎわっていた。
 裏うらへ貫ぬきを打うって取り除はずしのできるように拵こしらえた透すかしの板敷を、
 絶間ななく知らない人が往もつたり来きたりした。廊下りやの端はじに立つて、
 半なかば柱はしらに身みを靠もたせたお延のぶが、継子の姿みいを見出みいすまでには多少の
 時間じかんがかかった。それを向う側がわに並ならんでいる売店うりみせの前に認めめた時、
 彼女はすぐ下へ降りた。そうして軽く足早に板敷を踏ふんで、目指めざ
 す人のいる方へ渡わった。

「何を買かつてゐるの」

後うしろから覗のぞき込むようにして訊きいたお延のぶの顔と、驚おどろろいてふり返
 った継子の顔とが、ほとんど擦すれ擦すれになつて、微笑ほほえみ合あつた。

「今困つてるところなのよ。^{はじめ}一さんが何かお土産^{みやげ}を買ってくれて云うから、見ているんだけど、あいにく何^{なん}にもないのよ、あの人の喜びそうなものは」

疳^{かん}違^{ちが}いをして、男の子の玩具^{おもちゃ}を買おうとした継子は、それからそれへいろいろなものを並べられて、買うには買われず、止^よすには止されず、弱つているところであつた。役者に縁故^{えんこ}のある紋^{もん}などを着けた花簪^{はなかんざし}だの、紙入^{てぬぐい}だの、手拭^{てぬぐい}だのの前に立つて、もじもじしていた彼女は、どうしたらよかうという訴えの眼をお延に向けた。お延はすぐ口を利^きいてやった。

「駄目よ、あの子は、拳銃^{ピストル}とか木剣^{ぼっけん}とか、人殺しのできそうなものでなくつちや氣に入らないんだから。そんな物^{いき}こんな粹^{いき}な

所にあらうはずがないわ」

売店の男は笑い出した。お延はそれを機しおに年下の女の手を取った。

「とにかく叔母さんに訊いてからになさいよ。——どうもお気の毒さま、じやいずれまた後のちほど」

こう云ったなりさつさと歩き出した彼女は、気の毒そうにして
いる継子を、廊下の端はじまで引張るようにして連れて来た。そこで
とまった二人は、また一本の軒のきばしら柱たてを盾に立話をした。

「叔父さんはどうなすつたの。今日はなぜいらつしやらないの」
「来るのよ、今に」

お延は意外に思った。四人でさえ窮屈なところへ、あの大きな

男が割り込んで来るのはたしかに一事件ひとじけんであつた。

「あの上叔父さんに来られちゃ、あたし見たいに薄っぺらなものは、お圧されてへしやげちまうわ」

「百合子さんと入れ代るのよ」

「どうして」

「どうしてもその方が都合が好いんでしょう。百合子さんはいてもいなくっても構わないんだから」

「そう。じやもし、由雄が病氣でなくって、あたしといっしょに來たらどうするの」

「その時はその時で、またどうかするつもりなんでしょう。もう一いっけん間取るとか、それでなければ、吉川さんの方といっしょにな

るとか」

「吉川さんとも前から約束があつたの？」

「ええ」

継子はその後を云わなかった。岡本と吉川の家庭がそれほど接近しているとも考えていなかったお延は、そこに何か意味があるのではないかと、ちよつと不審を打つて見たが、時間に余裕のある人の間に起りがちな、単に娯楽のための約束として、それを眺める余地も充分あるので、彼女はついに何にも訊^きかなかった。二人の話はただ吉川夫人の双眼鏡に触れただけであつた。お延はわざと手真似^{てまね}までして見せた。

「こうやって真^まともに向けるんだから、敵^{かな}わないわね」

「ずいぶん無遠慮でしょう。だけど、あれ西洋風なんだって、宅うちのお父さまがそうおっしゃってよ」

「あら西洋じゃ構わないの。じゃあたしの方でも奥さんの顔をあやつてつけつけ見ても好い訳ね。あたし見て上げようかしら」
「見て御覧なさい、きつと嬉うれしがってよ。延子さんはハイカラだつて」

二人が声を出して笑い合っている傍そばに、どこからか来た一人の若い男がちよつと立ちどまつた。無地の羽織ともぬいに友縫もんの紋を付けて、セルの行灯袴あんどんばかまを穿はいたその青年紳士は、彼らと顔を見合せるや否や、「失礼」と挨拶あいさつでもして通り過ぎるように、鄭てい重ちゆうな態度を無言のうちに示して、板敷へ下りて向うへ行つた。

継子は赧^{あか}くなった。

「もう這^{はい}入りましようよ」

彼女はすぐお延^{うな}を促^{うな}がして内へ入った。

四十九

場^{じょう}中^{ちゆう}の様子は先刻^{さつき}見た時と何の変りもなかった。土間を歩

く男^{なん}女^{にょ}の姿が、

まるで人の頭の上を渡っているように煩^{わづ}らわし

く眺^{なが}められた。

できるだけ多くの注意を惹^ひこうとする浮誇^{ふこ}の活動

さえ至る所に出現した。そうして次の色彩に席を譲るべくすぐ消

滅した。眼中の小世界はただ動揺であつた、乱雑であつた、そう

していつでも粉飾ふんしよくであつた。

比較的静かな舞台ぶたいの裏側では、道具方の使う金槌かなづちの音が、一般の予期を唆そそるべく、折々場内へ響き渡つた。合間合間には幕のうしろひようしぎ後で拍子木を打つ音が、攪かき廻まわされた注意を一点に纏まとめようとする警柝けいたくの如ように聞こえた。

不思議なのは観客であつた。何もする事のないこの長い幕間まくあいを、少しの不平も云わず、かつて退屈の色も見せず、さも太平らしく、空疎な腹に散漫な刺戟しげきを盛つて、他愛たわいなく時間のために流されていた。彼らは穏和おだやかであつた。彼らは楽しそうに見えた。お互の吐く呼吸いきに酔つ払つた彼らは、少し醒さめかけると、すぐ眼を転じて誰かの顔を眺めた。そうしてすぐそこに陶然たる或物を

認めた。すぐ相手の気分と同化する事ができた。

席に戻った二人は愉快らしく四辺^{あたり}を見廻した。それから申し合せたように問題の吉川夫人の方を見た。婦人の双眼鏡はもう彼らを覘^{ねら}つていなかった。その代り双眼鏡の主人もどこかへ行つてしまった。

「あらいらつしやらないわ」

「本当ね」

「あたし探^{さが}してあげましょうか」

百合子はすぐ自分の手に持ったこつちのオペラグラスを眼^あへ宛てがった。

「いない、いない、どこかへ行っちゃまった。あの奥さんなら二^{ににん}

人前まえぐらい肥ふとつてるんだから、すぐ分るはずだけでも、やつぱりいないわよ」

そう云いながら百合子は象牙の眼鏡を下へ置いた。綺麗きれいな友ゆうぜ染模んもよう様の背中が隠れるほど、帯を高く背負しよつた令嬢としては、言葉が少しもよそゆきでないのです、姉はおかしさを堪こらえるような口元に、年上らしい威厳を示して、妹を窘たしなめた。

「百合子さん」

妹は少しも応こたえなかった。例の通りちよつと小鼻を膨ふくらませて、それがどうしたんだといった風の表情をしながら、わざと継子を見た。

「あたしもう帰りたくなつたわ。早くお父さまが来てくれると好

いんだけどな」

「歸りたければお歸りよ。お父さまがいらっしゃらなくつても構わないから」

「でもいるわ」

百合子はやはり動かなかつた。子供でなくつてはふるまいにくいこの腕白らしい態度の傍かたわらに、お延が年相応の分別ぶんべつを出して叔母に向つた。

「あたしちよつと行つて吉川さんの奥さんに御挨拶ごあいさつをして来ましょうか。澄すましていちや悪いわね」

実を云うと彼女はこの夫人をあまり好いていなかった。向うでもこつちを嫌きらっているように思えた。しかも最初先方から自分を

嫌い始めたために、この不愉快な現象が二人の間に起つたのだという。^{おぼろげ}臆氣な理由さえあつた。自分が嫌われるべき何らのきつかけも与えないのに、向うで嫌い始めたのだという自信も伴^{ともな}つていた。先刻^{さつき}双眼鏡を向けられた時、すでに挨拶^{あいさつ}に行かなければならないと氣のついた彼女は、即座にそれを断行する勇氣を起し得なかつたので、内心の不安を質問の形に引き直して叔母に相談しかけながら、腹の中では、その義務を容易^{たやす}く果させるために、叔母が自分と連れ立って、夫人の所へ行つてくれはしまいかと暗^{あん}に願っていた。

叔母はすぐ返事をした。

「ああ行つた方がいいよ。行つといでよ」

「でも今いらつしやらないから」

「なにきつと廊下にでも出ておいでなんだよ。行けば分るよ」

「でも、——じゃ行くから叔母さんもいつしよにいらつしやいな」

「叔母さんは——」

「いらつしやらない？」

「行つてもいいがね。どうせ今に御飯を食べる時に、いつしよになるはずになつてゐるんだから、御免蒙ごめんこうむつてその時にしようかと
思つてゐるのよ」

「あらそんなお約束があるの。あたしちつとも知らなかつたわ。

誰と誰がいつしよに御飯を召上めしやがるの」

「みんなよ」

「あたしも？」

「ああ」

意外の感に打たれたお延は、しばらくしてから答えた。

「そんならあたしもその時にするわ」

五十

岡本の来たのはそれから間もなくであつた。茶屋の男に開けて貰^{もら}つた戸の隙間^{すきま}から中を覗^{のぞ}いた彼は、おいでおいでをして百合子を廊下へ呼び出した。そこで二人がみんなの邪魔にならないような小声の立^{たちばなし}談を、二言三言取り換わした後で、百合子は約束

通り男に送られてすぐ場外へ出た。そうして入れ代りに入つて来た彼がその後へ窮屈あつそうに坐つた。こんな場所ではちよつと身体からだの位置を變るのさえ臆おっくう劫おっくうそうに見える肥満な彼は、坐つてしまつてからふと氣のついたように、半分ばかり背後うしろを向いた。

「お延、代つてやろうか。あんまり大きいのが前を塞ふさいで邪魔だろう」

一夜いちやづく作りの山が急に出来上つたような心持のしたお延は、舞台あたりへ氣を取られてゐる四辺へ遠慮して動かなかつた。毛織ものを肌へ着けた例ためしのない岡本は、毛だらけな腕を組んで、これもおつき合あいだと云つた風に、みんなの見てゐる方角へ視線を向けた。そこでは色の生なまつ白しろい變な男が柳の下をうろうろしていた。荒い縞しま

の着物をぞろりと着流して、博多^{はかた}の帯をわざと下の方へ締め^しめたその色男は、素足に雪駄^{せった}を穿^はいているので、歩きたびにちやらちやという不愉快な音を岡本の耳に響かせた。彼は柳の傍^{そば}にある橋と、橋の向うに並んでゐる土蔵の白壁を見廻して、それからそのついでに観客の方へ眼を移した。然^{しか}るに観客の顔はことごとく緊張していた。雪駄をちやらちやら鳴らして舞台の上を往ったり来たりするこの若い男の運動に、非常な重大の意味でもあるように、満場は静まり返って、咳^{せき}一つするものがなかった。急に表から入って来た彼にとつて、すぐこの特殊な空氣に感染する事が困難であつたのか、また馬鹿^{うしろ}らしかつたのか、しばらくすると彼はまた窮屈^{うしろ}そうに半分後を向いて、小声でお延に話しかけた。

「どうだ面白いかね。——由雄さんはどうだ。——」

簡単な質問を次から次へと三つ四つかけて、一口ずつの返事をお延から受け取った彼は、最後に意味ありげな眼をしてさらに訊きいた。

「今日はどうだったい。由雄さんが何とか云やしなかったかね。

おおかたぐずぐず云つたんだろう。おれが病気で寝ているのに貴様一人芝居しばやへ行くなんて不埒ふらち千万だとか何とか。え？ きつとそうだろう」

「不埒千万だなんて、そんな事云やしないわ」

「でも何か云われたろう。岡本は不都合な奴だぐらい云われたに違あるまい。電話の様子がどうも変だったぜ」

小声でさえ話をするものが周囲あたりに一人もない所で、自分だけ長い受け答をするのはきまりが悪かったので、お延はただ微笑していた。

「構わないよ。叔父さんが後で話をしてやるから、そんな事は心配しないでもいいよ」

「あたし心配なんかしちやいないわ」

「そうか、それでも少しや気がかりだろう。結婚早々旦那様の御ご機嫌きげんを損じちや」

「大丈夫よ。御機嫌なんか損じちやいないって云うのに」

お延は煩うるさそうに眉まゆを動かした。面白半分調戯からかって見た岡本は少し真面目まじめになった。

「実は今日お前を呼んだのはね、ただ芝居しばやを見せるためばかりじゃない、少し呼ぶ必要があつたんだよ。それで由雄さんが病気のところを無理に来て貰つたような訳だが、その訳さえ由雄さんよおに後から話しておけば何でもない事さ。叔父さんがよく話しておくよ」

お延の眼は急に舞台を離れた。

「理由わけつていつたい何」

「今ここじゃ話し悪いがね。にくいずれ後で話すよ」

お延は黙るよりほかに仕方なかった。岡本はつけ足すように云つた。

「今日は吉川さんといっしょに食堂で晩食ばんめしを食べる事になつてゐる

んだよ。知ってるかね。そら吉川もあすこへ来ているだろう」

先刻^{さつき}まで眼につかなかった吉川の姿がすぐお延の眼に入った。

「叔父さんといっしょに來たんだよ。倶楽部^{クラブ}から」

二人の会話はそこで途切^{とぎ}れた。お延はまた真面目に舞台の方を見出した。しかし十分経^たつか経たないうちに、彼女の注意がまたそつと後の戸^{うしろ}を開ける茶屋の男によつて乱された。男は叔母に何か耳語^{ささや}いた。叔母はすぐ叔父の方へ顔を寄せた。

「あのね吉川さんから、食事の用意を致させておきましたから、この次の幕間^{まくあい}にどうぞ食堂へおいで下さいますようにつて」
叔父はすぐ返事を伝えさせた。

「承知しました」

男はまた戸をそつと閉^たてて出て行つた。これから何が始まるの
だろうかと思つたお延は、黙つて会食の時間を待つた。

五十一

彼女が叔父叔母の^{あと}後に随^ついて、継子といつしよに、二階の^{かたす}片隅^みにある奥行^みの深い食堂に入るべく席を立つたのは、それから
小一時間^{のち}後であつた。彼女は自分と肩を並べて、すれすれに廊下
を歩いて行く従妹^{いとこ}に小声で訊^きいて見た。

「いったいこれから何が始まるの」

「知らないわ」

継子は下を向いて答えた。

「ただ御飯を食べるぎりなの」

「そうなんでしょう」

訊きこうとすれば訊こうとするほど、継子の返事が曖あいまい昧まいになっ

てくるように思われたので、お延はそれぎり口を閉じた。継子は

前ちちははに行く父母に遠慮があるのかも知れなかった。また自分は何なんに

も承知していないのかも分らなかった。あるいは承知していても、

お延に話したくないので、わざと短かい返事を小さな声で与えな

いとも限らなかつた。

鋭いちべつい一瞥の注意を彼らの上に払って行きがちな、廊下で出逢であ

う多数の人々は、みんなお延よりも継子の方に余分の視線を向け

た。忽然^{こつぜん}お延の頭に彼女と自分との比較^{ひら}が閃^{ひら}めいた。姿^{すがた}恰^{かつこ}好^うは継子に立ち優^{まさ}つていても、服装^{なり}や顔^{かお}形^{かたち}では是非^{はにか}ひけを取らなければならなかつた彼女は、いつまでも子供らしく羞恥^{はにか}んでゐるような、またどこまでも氣苦^{ういうい}勞^うのなさそうに初^{ういうい}々^うしく出来上^{しつと}つた、処女としては水の滴^{した}たるばかりの、この従妹^{いとこ}を輕^{しつと}い嫉妬^{しつと}の眼^みで視^みた。そこにはたとい氣の毒^{ぶべつ}だとい侮蔑^{ごべつ}の意^いが全^くく打ち消^かされていないにしたところで、ちよつと彼^{ひが}我^がの地位^{ちゐ}を易^かえて立つて見^みたいぐらいな羨望^{せんぼう}の念^{ねん}が、著^{いちじ}るしく働^{はたら}らいていた。お延は考^{かん}えた。

「処女であつた頃、自分にもかつてこんなお嬢さんらしい時期があつたろうか」

幸か不幸か彼女はその時期を思い出す事ができなかった。平生
 継子を標準めやすにおかないで、何とも思わずに暮していた彼女は、今
 その従妹と肩を並べながら、賑にぎやかな電灯で明るく照らされた廊
 下の上に立って、またかつて感じた事のない一種の哀愁あいしゆうに打
 たれた。それは軽いものであった。しかし涙に変化しやすい性質たち
 のものであった。そうして今嫉妬しつとの眼で眺めたばかりの相手の手
 を、固く握り締めしめたくなくなるような種類のものであった。彼女は心
 の中で継子に云った。

「あなたは私より純潔です。私が羨うらやましがるほど純潔です。け
 れどもあなたの純潔は、あなたの未来の夫に対して、何の役にも
 立たない武器に過ぎません。私のように手落なく仕向けてすら夫

は、けつしてこっちの思う通りに感謝してくれるものではありません。あなたは今に夫の愛を繋ぐために、その貴い純潔な生地を失わなければならないのです。それだけの犠牲を払って夫のために尽してすら、夫はことによるとあなたに辛くあたるかも知れません。私はあなたが羨ましいと同時に、あなたがお気の毒です。近いうちに破壊しなければならない貴い宝物を、あなたはそれと心づかずに、無邪気にもっているからです。幸か不幸か始めから私には今あなたのもっているような天然そのままの器が完全に具わっておりませんでしたから、それほどの損失もないのだと云えば、云われないこともないでしょうが、あなたは私と違います。あなたは父母の膝下を離れると共に、すぐ天真の姿を傷けられま

す。あなたは私よりも可^{かわい}哀^{そう}相です」

二人の歩き方は遅かった。先に行つた岡本夫婦が人に遮^{さえ}ぎられて見えなくなつた時、叔母はわざわざ取つて返した。

「早くおいでなね。何をぐずぐずしているの。もう吉川さんの方
じや先へ来て待つていらつしやるんだよ」

叔母の眼は継子の方にばかり注がれていた。言葉もとくに彼女
に向つてかけられた。けれども吉川という名前を聞いたお延の耳
には、それが今までの気分を一度に吹き散らす風のように響いた。
彼女は自分のあまり好いていない、また向うでも自分をあまり好
いていないらしい、吉川夫人の事をすぐ思い出した。彼女は自分
の夫が、平生から一^{ひと}方^{かた}ならぬ恩顧^{おんこ}を受けている勢力家の妻君と

して、今その人の前に、能^{あた}う限^{かぎ}りの愛^{あい}嬌^{きよう}と礼儀とを示さなければならなかった。平静のうちに一種の緊張を包んで彼女は、知らん顔をして、みんなの後^{あと}に随^ついて食堂に入つた。

五十二

叔母の云つた通り、吉川夫婦は自分達より一足早く約束の場所へ来たものと見えて、お延の目^ま標^とにするその夫人は、入口の方を向いて叔父と立^{たち}談^{ばなし}をしていた。大きな叔父の後姿よりも、向う側に食^はみ出している大^{だい}々^{だい}した夫人のかつぷくが、まずお延の眼に入つた。それと同時に、肉づきの豊かな頬に笑^{みなぎ}いを漲^{みなぎ}らして

いた夫人の方でも、すぐ眸ひとみをお延の上に移した。しかし咄嗟とつさの電火作用は起ると共に消えたので、二人は正式に挨拶あいさつを取り換かわすまで、ついに互を認め合わなかった。

夫人に投げかけた一瞥いちべつについて、お延はまたその傍そばに立っている若い紳士を見ない訳に行かなかった。それが間違もなく、先さき刻廊下つきで継子といつしよになつて、冗談じょうだん半分夫人の双眼鏡をはしたなく批評し合つた時に、自分達を驚ろかした無言の男なので、彼女は思わずひやりとした。

簡単な挨拶が各自の間に行われる間、控目にみんなの後うしろに立っていた彼女は、やがて自分の番が廻つて来た時、ただ三好みよしさんとしてこの未知の人に紹介された。紹介者は吉川夫人であつたが、

夫人の用いる言葉が、叔父に対しても、叔母に対しても、また継子に対しても、みんな自分に対するのと同じ事で、その間に少しも変りがないので、お延はついにその三好の何人なんびとであるかを知らずにしまった。

席に着くとき、夫人は叔父の隣りに坐すわった。一方の隣には三好が坐らせられた。叔母の席は食卓の角であつた。継子のは三好の前であつた。余つた一脚の椅子いすへ腰を下ろすべく余儀なくされたお延は、少し躊躇ちゆうちよした。隣りには吉川がいた。そうして前は吉川夫人であつた。

「どうですかけたら」

吉川は催促するようにお延を横から見上げた。

「さあどうぞ」と気軽に云つた夫人は正面から彼女を見た。

「遠慮しずにおかけなさいよ。もうみんな坐つてゐるんだから」

お延は仕方なしに夫人の前に着席した。先^{せん}を越^こすつもりでいたのに、かえつて先を越されたという拙^{ます}い感じが胸のどこかにあつた。自分の態度を礼儀から出た本当の遠慮と解釈して貰うように、これから仕向けて行かなければならないという意志もすぐ働^{はたら}いた。その意志は自分と正反対な継子の初^う心^ぶらしい様子を、食卓^{テーブル}越^{ごし}に眺めた時、ますます強固にされた。

継子はまたいつもよりおとなし過ぎた。ろくろく口も利^きかないで、下ばかり向いている彼女の態度の中^{うち}には、ほとんど苦痛に近い或物^{みすか}が見透された。気の毒そうに彼女を一目見やつたお延は、

すぐ前にいる夫人の方へ、彼女に特有な愛嬌あいきようのある眼を移した。社交に慣れ切った夫人も黙っている人ではなかった。

調子の好い会話の断片が、二三度二人の間を往ったり来たりした。しかしそれ以上に発展する余地のなかった題目は、そこでぴたりととまってしまった。二人の間に共通な津田を話の種にしようと思つたお延が、それを自分から持ち出したものかどうかと遅疑ぎしているうちに、夫人はもう自分を置き去りにして、遠くにいる三好に向つた。

「三好さん、黙っていないで、ちつとあつちの面白い話でもして継子さんに聞かせてお上げなさい」

ちようど叔母と話を途切とぎらしていた三好は夫人の方を向いて静

かに云った。

「ええ何でも致しましょう」

「ええ何でもなさい。黙ってちやいけません」

命令的なこの言葉がみんなを笑わせた。

「また独逸^{ドイツ}を逃げ出した話でもするがいい」

吉川はすぐ細君の命令を具体的にした。

「独逸を逃げ出した話も、何度となく繰^くり返^{かえ}すんでね、近頃はもう他^{ひと}よりも自分の方が陳腐^{ちんぷ}になつてしまいました」

「あなたのような落ちついた方^{かた}でも、少しは周章^{あわて}たでしょうね」

「少しどころなら好いですが、ほとんど夢中でしたろう。自分じやよく分らないけれども」

「でも殺されるとは思わなかったでしょう」

「さよう」

三好が少し考えていると、吉川はすぐ隣りから口を出した。

「まさか殺されるとも思うまいね。ことにこの人は」

「なぜです。人間がずうずうしいからですか」

「という訳でもないが、とにかく非常に命を惜しがる男だから」

継子が下を向いたままくすくす笑った。戦争前後に独逸を引き上げて来た人だという事だけがお延に解った。

五十三

三好を中心にした洋行談がひとしきり弾はずんだ。相間あいま相間に巧みなきっかけを入れて話の後を釣り出して行く吉川夫人のお手際てぎわを、黙って観察していたお延は、夫人がどんな努力で、彼ら四人の前に、この未知の青年紳士を押し出そうと試みつつあるかを見抜いた。穩和おだやかというよりもむしろ無口な彼は、自分でそうと気がつかないうちに、彼に好意をもった夫人の口車くちぐるまに乗せられて、最も有利な方面から自分をみんなの前に説明していた。

彼女はこの談話の進行中、ほとんど一言も口を挟さしはさむ余地を与えられなかった。自然の勢い沈黙の謹聴者たるべき地位に立った彼女には批判の力ばかり多く働べらいた。卒直と無遠慮の分子を多量に含んだ夫人の技巧が、毫べいも技巧の臭味くさみなしに、着々成功して

行く段取りを取を、一步ごとに眺めた彼女は、自分の天性と夫人のそ

れとの間に非常の距離がある事を認めない訳に行かなかった。しかしそれは上下の距離でなくって、平面の距離だという気がした。では恐るるに足りないかというところ、平面の距離だという気がした。一部分は得意な現在の地位からも出て来るらしい命令的態度のほかに、夫人の技巧には時として恐るべき破壊力が伴って来はしまいかという危険の感じが、お延の胸のどこかでした。

「こつちの気のせいかしらん」

お延がこう考えていると、問題の夫人が突然彼女の方に注意を移した。

「延子さんが呆れていらつしやる。あきあたしがあんまりしゃべるも

んだから」

お延は不意を打たれて退避^{たじ}ろいだ。津田の前でかつて挨拶^{あいさつ}に困った事のない彼女の智恵が、どう働いて好いか分らなくなった。ただ空疎な薄笑が瞬間の虚^{きよ}を充^みたした。しかしそれは御役目にもならない偽りの愛^{あい}嬌^{きよう}に過ぎなかった。

「いいえ、大変面白^{うかが}く伺^{うかが}っております」と後^{あと}から付け足した時は、お延自分でももう時機^{とき}の後^{おく}れている事に気がついていた。またやり損^{そく}なつたという苦^{にが}い感じが彼女の口の先^{さき}まで湧^わいて出た。今日こそ夫人の機嫌^{きげん}を取り返してやろうという気^き込^こみが一度に萎^なえた。夫人は残酷に見えるほど早く調子を易^かえて、すぐ岡本に向った。

「岡本さんあなたが外国から帰っていらしってから、もうよつぱ

どになりますね」

「ええ。何しろ ひとむかしまえ 一昔前の事ですからな」

「一昔前つて何年頃なの、いったい」

「さよう せいれき 西暦……」

自然だか偶然だか叔父はもったいぶった考え方をした。

「ふふっせんそう 普仏戦争時分？」

「馬鹿にしちやいけません。これでもあなたの だんなさま 旦那様を案内し

て ロンドン 倫敦を連れて歩いて上げた おぼえ 覚があるんだから」

「パリ じや巴理で ろうじよう 籠城した組じやないのね」

「冗談じやない」

三好の洋行談をひとしきりで切り上げた夫人は、すぐ話頭を、

それと関係の深い他の方面へ持つて行つた。自然吉川は岡本の相手にならなければすまなくなつた。

「何しろ自動車のできたで、あれが通ると、みんなふり返つて見た時分だつたからね」

「うん、あの鈍臭いのろくきバスがまだ幅を利きかしていた時代だよ」

その鈍臭いバスが、そういう交通機関を自分で利用した記憶のないほかの者にとって、何の思い出にならなかつたにも関わらず、當時を回顧する二人の胸には、やつぱり淡い一種の感慨を惹ひき起すらしく見えた。継子と三好を見較みくらべた岡本は、苦笑しながら吉川に云つた。

「お互に年を取つたもんだね。不断はちつとも気がつかずに、ま

だ若いつもりかなんかで、しきりにはしやぎ廻っているが、こうして娘の隣に坐つて見ると、少し考えるね」

「じや始^{しじゆう}終^そその子の傍^{そば}に坐つていらつしたら好いでしょう」
叔母はすぐ叔父に向つた。叔父もすぐ答えた。

「全くだよ。外国から歸つて来た時にや、この子がまだ」と云いかけてちよつと考えた彼は、「幾つだっけかな」と訊^きいた。叔母がそんな呑^{のん}氣^きな人に返事をする義務はないといわぬばかりの顔をして黙っているの、吉川が傍から口を出した。

「今度はお爺^{じい}さまお爺^{じい}さまつて云われる時機が、もう眼^{がん}前^{ぜん}に逼^{せま}つて来たんだ。油断はできません」

継子が顔を赧^{あか}くして下を向いた。夫人はすぐ夫の方を見た。

「でも岡本さんにや自分の年齒としを計る生きた時計が付いてるから、まだよいんです。あなたと来たら何にも反省器械はんせいきかいを持つていらつしやらないんだから、全く手に余るだけですよ」

「その代りお前だつていつまでもお若くつていらつしやるじやないか」

みんなが声を出して笑った。

五十四

彼らほど多人数たにんずでない、したがって比較的静かなほかの客が、まるで舞台をよそにして、気楽そうな話ばかりしているお延のい

群^{ちぐん}を折々見た。時間を儉約するため、わざと軽い食事を取ったものたちが、珈琲^{コヒー}も飲まずに、そろそろ立ちかける時が来ても、お延の前にはそれからそれへと新らしい皿が運ばれた。彼らは中途で拭^{ナプキン}布^{ほう}を放り出す訳に行かなかった。またそんな世話しない真似^{まね}をする気もないらしかった。芝居を観^みに来たというよりも、芝居場へ遊びに来たという態度で、どこまでもゆつくり構えていた。

「もう始まったのかい」

急に静かになった食堂を見廻した叔父は、こう云って白服のボイに訊^きいた。ボイは彼の前に温かい皿を置きながら、鄭寧^{ていねい}に答えた。

「ただ今開あきました」

「いいや開いたって。この際眼よりも口の方が大事だ」

叔父はすぐ皮付とりの鶏ももの股を攻撃し始めた。向うにいる吉川も、

舞台で何が起つていようとまるで頓とんじやく着あしないらしかった。彼

はすぐ叔父の後あとへついて、劇とは全く無関係な食物くいものの挨拶あいさつをした。

「君は相変らず旨うまそうに食うね。——奥さんこの岡本君が今よりもっと食つて、もっと肥つてた時分、西洋人の肩かたぐるま車へ乗つた話をお聞きですか」

叔母は知らなかった。吉川はまた同じ問を継子にかけた。継子も知らなかった。

「そうでしょうね、あんまり外聞がいぶんの好い話じゃないから、きつと隠しているんですよ」

「何が？」

叔父はようやく皿から眼を上げて、不思議そうに相手を見た。すると吉川の夫人が傍そばから口を出した。

「おおかた重過ぎてその外国人を潰つぶしたんでしよう」

「そんならまだ自慢になるが、みんなに変な顔をしてじろじろ見られながら、倫敦ロンドンの群衆の中で、大男の肩の上へ噛かじりついていたんだ。行列を見るためにね」

叔父おじはまだ笑いもしなかった。

「何を捏造ねつぞうする事やら。いったいそりやいつの話だね」

「エドワード七世の戴冠式たいかんしきの時さ。行列を見ようとしてマンシヨンハウスの前に立つてたところが、日本と違って向うのものがあんまり君より背丈せいが高過ぎるもんだから、苦し紛れまぎにいつしよに行つた下宿の亭主に頼んで、肩車に乗せて貰つたつて云うじゃないか」

「馬鹿を云つちやいけない。そりや人違だ。肩車へ乗つた奴はちやんと知つてゐるが、僕じやない、あの猿だ」

叔父の弁解はむしろ真面目まじめであつた。その真面目な口から猿という言葉が突然出た時、みんなは一度に笑つた。

「なるほどあの猿ならよく似合うね。いくら英吉利人イギリスじんが大きいたつて、どうも君じや辻褄つじつまが合わない過ぎると思つたよ。——あの

猿と来たらまたずいぶんわいしょう矮小だからな」

知つていながらわざと間違えたふりをして見せたのか、あるいは最初から事実を知らなかったのか、とにかく吉川はやつと腑に落ちたらしい言葉遣いをして、なおその当人の猿という渾名を、一座を賑にぎわせる滑稽こっけいの余音よいんのごとく繰り返かえした。夫人は半ば好奇かいで、半ば戒飭かいちよくてき的な態度を取った。

「猿だなんて、いったい誰の事をおっしゃるの」

「なにお前の知らない人だ」

「奥さん心配なさらないでも好ござんす。たとい猿がこの席にしようとも、我々は表裏ひょうりなく彼を猿々と呼び得る人間なんだから。その代り向うじや私の事を豚々おんつて云つてゐるから、同なじ事です」

こんな他愛たわいもない会話が取り換わされている間、お延はついに社交上の一員として相当の分わけまえ前を取る事ができなかった。自分を吉川夫人に売りつける機会はいつまで経たつても来なかった。夫人は彼女を眼中に置いていなかった。あるいはむしろ彼女を回避していた。そうして特に自分の一軒いっけん置いて隣りに坐っている継子にばかり話しかけた。たとい一分間でもこの従妹いとこを、注意の中心として、みんなの前に引き出そうとする努力の迹あとさえありありと見えた。それを利用する事のできない継子が、感謝とは反対に、かえつて迷惑そうな表情を、遠慮なく外部そとに示すたびに、すぐ彼女と自分とを比較したくなるお延の心には羨望せんぼうの漣漪さざなみが立つた。

「自分がもしあの従妹の地位に立ったなら」

会食中の彼女はしばしばこう思った。そうしてその後から暗に
ひとな人馴れない継子をあわ憐れんだ。最後には何という気の毒な女だろう
 という軽侮けいぶの念が例もの通り起った。

五十五

彼らの席を立ったのは、男達の燻くゆらし始めた食後の葉巻に、白
 い灰が一寸近くも溜たまった頃であつた。その時誰かの口から出た
 「もう何時なんじだろう」というきつかけが、偶然お延の位地に変化を
 与えた。立ち上る前の一瞬間を捉とらえた夫人は突然お延に話しかけ

た。

「延子さん。津田さんはどうなすって」

いきなりこう云つておいて、お延の返事も待たずに、夫人はすぐその後を自分で云い足した。

「先刻から伺おう伺おうと思つてた癖に、つい自分の勝手な話ばかりして——」

この云訳をお延は腹の中で嘘らしいと考えた。それは相手の使う当座の言葉つきや態度から出た疑でなくつて、彼女に云わせると、もう少し深い根拠のある推定であつた。彼女は食堂へ這入つて夫人に挨拶をした時、自分の使つた言葉をよく覚えていた。それは自分のためというよりも、むしろ自分の夫のために使

った言葉であつた。彼女はこの夫人を見るや否や、恭しく頭を下げて、「毎度津田が御厄介になりまして」と云つた。けれども夫人はその時その津田については一言も口を利かなかつた。自分が挨拶を交換した最後の同席者である以上、そこにはそれだけの口を利く余裕が充分あつたにも関わらず、夫人は、すぐよそを向いてしまった。そうして二三日前津田から受けた訪問などは、まるで忘れているような風をした。

お延は夫人のこの挙動を、自分が嫌われているからだとばかり解釈しなかつた。嫌われている上に、まだ何か理由があるに違ないと思つた。でなければ、いくら夫人でも、とくに津田の名前を回避するような素振を、彼の妻たるものに示すはずがないと思つ

た。彼女は自分の夫がこの夫人の氣に入っているという事実をよ
 く承知していた。しかし単に夫を^{ひいき}贖負にしてくれるという事が、
 何でその人を妻の前に談話の題目として憚^{はば}かられるのだろう。お
 延は解らなかつた。彼女が会食中、当然他^{ひと}に好かれべき女性とし
 ての自己の天分を、夫人の前に發揮するために、二人の間に存在
 する^{ゆい}唯一^{いつ}の共通点とも見られる津田から出立しようと試みて、
 ついに^つ出立し得なかつたのも、一つはこれが胸に^{つか}痞えていたから
 であつた。それをいよいよ席を立とうとする間際^{まぎわ}になつて、向う
 から切り出された時のお延は、ただ夫人の云訳に對してのみ、嘘^{うそ}
 らしいという疑を^{いだ}抱くだけではすまなかつた。今頃になつて夫の
 病氣の見舞をいってくれる夫人の心の中には、やむをえない社交

上の辞令以外に、まだ何か存在しているのではなかろうかと考えた。

「ありがとうございます。お蔭かげさまで」

「もう手術をなすったの」

「ええ今日こんにち」

「今日きょう？ それであなたよくこんな所へ来られましたね」

「大した病気でもございませんものですから」

「でも寝ていらつしやるんでしょう」

「寝てはおります」

夫人はそれで構わないのかという様子をした。少なくとも彼女の黙っている様子がお延にはそう見えた。他ひとに對して男らしく無

遠慮にふるまっている夫人が、自分にだけは、まるで別な人間として出てくるのではないかと思われた。

「病院へ御入りおはいになつて」

「病院と申すほどの所ではございませんが、ちようどお医者様の二階が空あいておるので、五六日ごろくんちそこへおいていただく事にしております」

夫人は医者の名前と住所ところとを訊きいた。見舞に行くつもりだとも何とも云わなかったけれども、実はそのために、わざわざ津田の話を持ち出したのじやなかろうかという氣のしたお延は、始めて夫人の意味が多少自分に呑み込めたような心持もした。

夫人と違つて最初から津田の事をあまり念頭においていなかった

たらしい吉川は、この時始めて口を出した。

「当人に聞くと、去年から病氣を持ち越しているんだってね。今の若さにそう病氣ばかりしちや仕方がない。休むのは五六日に限った事もないんだから、癒^{なお}るまでよく養生するように、そう云つて下さい」

お延は礼を云った。

食堂を出た七人は、廊下でまた二組に分れた。

五十六

残りの時間を叔母の家族とともに送ったお延には、それから何

の波瀾はらんも来なかつた。ただ襦袢どてらを着て横臥おうがした寝巻姿ねまきすがたの津田の
 面影おもかげが、熱心に舞台を見つめている彼女の頭の中に、不意に出
 て来る事があつた。その面影は今まで読みかけていた本を伏せて、
 ここに坐つてゐる彼女を、遠くから眺めてゐるらしかつた。しか
 しそれは、彼女が喜こんで彼を見返そうとする刹那せつなに、「いや疳か
 違んちがいをしちやいけない、何をしてゐるかちよつと覗のぞいて見ただ
 けだ。お前なんか用のあるおれじやない」という意味を、眼つ
 きで知らせるものであつた。騙だまされたお延は何だ馬鹿らしいとい
 う氣になつた。すると同時に津田の姿も幽霊のようにすぐ消えた。
 二度目にはお延の方から「もうあなたのような方の事は考えて上
 げません」と云い渡した。三度目に津田の姿が眼に浮んだ時、彼

女は舌打したうちをしたくなった。

食堂へ入る前の彼女はいまだかつて夫の事を念頭においていなかったの、お延に云わせると、こういう不可抗な心の作用は、すべて夕飯後ゆうめしごに起った新らしい経験にほかならなかった。彼女は黙って前後二様にようの自分を比較して見た。そうしてこの急劇な變化の責任者として、胸のうちで、吉川夫人の名前を繰くり返さない訳に行かなかった。今夜もし夫人と同じ食卓テーブルで晚餐ばんさんを共にしなかったならば、こんな変な現象はけっして自分に起らなかったろうという気が、彼女の頭のどこかでした。しかし夫人のいかなる点が、この苦にがい酒を醸かもす醗酵はつこう分子ぶんしとなつて、どんな具合に彼女の頭のなかに入り込んだのかと訊きかれると、彼女はとても判はつき

然^りした返事を与えることができなかった。彼女はただ不明瞭^{ふめいりよう}な材料をもっていた。そうして比較的明瞭な断案に到着していた。材料に不足な掛念^{けねん}を抱^{いだ}かない彼女が、その断案を不備として疑うはずはなかった。彼女は総て^{すべ}の源因が吉川夫人にあるものと固く信じていた。

芝居が了^はねていったん茶屋へ引き上げる時、お延はそこでまた夫人に会う事を恐れた。しかし会つてもう少し突ツ込んで見たいような氣もした。帰りを急ぐ混雜^{ごたごた}した間際^{まぎわ}に、そんな機会の来るはずもないと、始めから諦^{あきら}らめている癖に、そうした好奇の心が、会いたくないという回避の念の蔭^{かげ}から、ちよいちよい首を出した。

茶屋は幸にして異^{ちが}つていた。吉川夫婦の姿はどこにも見えなかつた。襟^{えり}に毛皮の付いた重^{にじゅうまわ}そうな二重廻^{ひっか}しを引掛^{ひっか}けながら岡本がコートに袖^{そで}を通してゐるお延^{かえり}を顧^{かえり}みた。

「今日は宅^{うち}へ来て泊^とつて行かないかね」

「え、ありがとう」

泊^とるとも泊^とらないとも片^あづかない挨拶^{あいさつ}をしたお延^{かえり}は、微笑^{あき}しながら叔母を見た。叔母はまた「あなたの気^き楽^{らく}さ加減^{かへん}にも呆^{あき}れま^{あき}すね」という表情^{へいしやう}で叔父を見た。そこに氣^きがつかないのか、あるいは氣^きがついても無頓着^{むとんじやく}なのか、彼は同じ事を、前よりはもつと真面目^{まじめ}な調子で繰^くり返^{かへ}した。

「泊^とつて行^いくなら、泊^とつといでよ。遠慮^{えんりょ}は要^いらないから」

「泊っていったって、あなた、宅^{うち}にや下女がたった一人で、この子の帰るのを待ってるんですもの。そんな事無理ですわ」

「はあ、そうかね、なるほど。下女一人じゃ不用心だね」

そんなら止^よすが好かろうと云った風の様子をした叔父は、無論最初からどっちでも構わないものをちよつと問題にして見ただけであつた。

「あたしこれでも津田へ行つてからまだ一晩も御^ご厄^{やつかい}介になつた事はなくつてよ」

「はあ、そうだったかね。それは感心に品行方正^{いたり}の至^{いた}だね」

「厭^{いと}だ事。——由雄だつて外へ泊つた事なんか、まだ有りやしないわ」

「いや結構ですよ。御夫婦お揃そろいで、お堅かたくつていらつしやるのは

――

「何なよりもつて恐きょうえん悦つしごく至極きごく」

さつき

先刻聞いた役者の言葉を、小さな声で後あとへ付け足した継子は、

そう云った後で、自分ながらその大胆さに呆あきれたように、薄赤く

なつた。叔父はわざと大きな声を出した。

「何ですつて」

継子はきまりが悪いので、聞こえないふりをして、どんどん門か
口ぐちの方へ歩いて行つた。みんなもその後あとに随ついて表へ出た。

車へ乗る時、叔父はお延に云つた。

「お前宅^{うち}へ泊れなければ、泊らないでいいから、その代りいつかおいでよ、二三^{にさんちじゅう}日中にね。少し訊^ききたい事があるんだから」

「あたしも叔父さんに伺わなくつちやならない事があるから、今日のお礼かたがた是非上るわ。もしか都合ができたら明日^{あした}にでも伺つてよ、好くつて」

「オー、ライ」

四人の車はこの英語を相図^{あいず}に走^かけ出^だした。

五十七

津田の宅^{うち}とほぼ同じ方角に当る岡本の住居^{すまい}は、少し道程^{みちのり}が遠

いので、三人の後に随あといたお延ゴムの護謨輪わは、小路こうじへ曲る例の角かどまでいっしょに来る事ができた。そこで別れる時、彼女は幌ほろの中から、前に行く人達に声をかけた。けれどもそれが向うへ通じたか通じないか分らないうちに、彼女の俤くるまはもう電車通りを横に切れていた。しんとした小路の中で、急に一種の淋さみしさが彼女の胸を打った。今まで団体的に旋回していたものが、吾われ知らず調子を踏ふみ外はずして、一人圈けん外がいにふり落された時のように、淡いながら頼りを失った心持で、彼女は自分の宅うちの玄関を上った。

下女は格子こうしの音を聞いても出て来なかった。茶の間には電灯が明るく輝やいているだけで、鉄瓶てつびんさえいつものように快い音を立てなかった。今朝けさ見たと何の変りもない室へやの中を、彼女は今朝

と違つた眼で見廻した。薄ら寒い感じが心細い氣分を抱擁し始めた。その瞬間が過ぎて、ただの淋しさが不安の念に変わりかけた時、歡樂に疲れた身体を、からだ長火鉢の前に投げかけようとした彼女は、突然勝手口の方を向いて「時、時」と下女の名前を呼んだ。同時に勝手の横に付いている下女部屋の戸を開けた。

二畳敷の真中に縫物をひろげて、その上に他愛なく突ツ伏していたお時は、急に顔を上げた。そうしてお延を見るや否や、いきなり「はい」という返事を判然はつきりして立ち上つた。それと共に、針仕事のため、わざと低目にした電灯の笠へ、崩れかかつた束髪くずの頭をぶつけたので、あらぬ方かたへ波をうった電球が、なおのこと彼女を狼狽ろうばいさせた。

お延は笑いもしなかった。叱る気にもならなかった。こんな場合
 合に自分ならという彼^{ひが}我の比較さえ胸に浮かばなかった。今の彼
 女には寝ぼけたお時でさえ、そこにいてくれるのが頼母^{たのも}しかつた。
 「早く玄関を締^しめてお寝。潜^{くぐ}りの^{かきがね}はあたしがかけて来たから」
 下女を先へ寝かしたお延は、着物も着換えずにまた火鉢^{ひばち}の前へ
 坐つた。彼女は器械的に灰をほじくつて消えかかった火種に新ら
 しい炭を継^つぎ足^たした。そうして家庭としては欠くべからざる要件
 のごとくに、湯を沸^わかした。しかし夜更^{よふけ}に鳴る鉄瓶^{てつびん}の音に、一
 人耳を澄ましている彼女の胸に、どこからともなく逼^{せま}つてくる孤
 独の感が、先刻^{さつき}帰つた時よりもなお劇^{はげ}しく募^つつて来た。それが平
 生遅い夫の戻りを待ちあぐんで起す淋^{さび}しみに比べると、遙^{はる}かに程

度が違うので、お延は思わず病院に寝ている夫の姿を、懐かしそうに心の眼で眺めた。

「やっぱりあなたがいらつしやらないからだ」

彼女は自分の頭の中に描き出した夫の姿に向つてこう云つた。

そうして明日は^{あした}何を^{あした}おいても、まず病院へ見舞に行かなければならないと考えた。しかし次の瞬間には、お延の胸がもうびたりと夫の胸に食^{くっ}ついてい^なかつた。二人の間に何だか挟^{はさ}まつてしまつた。こつちで寄り添おうとすればするほど、中^{ちゆうかん}間にあるその邪魔ものが彼女の胸を突ツついた。しかも夫は平気で澄ましていた。半ば意地^なになつた彼女の方でも、そんなら宜^{よろ}しゅうござい^なますといつて、夫に背中を向け^なたくなつた。

こういう立場まで来ると、彼女の空想は会えしやく釈なく吉川夫人の上に飛び移らなければならなかった。芝居場で一度考えた通り、もし今夜あの夫人に会わなかったなら、最愛の夫に対して、これほど不愉快な感じを抱いだかずにすんだらうにという氣ばかり強くした。

しまいに彼女はどこかにいる誰かに自分の心を訴えたくなった。昨夜書ゆうべきかけた里へやる手紙の続つづきを書こうと思つて、筆を執とりかけた彼女は、いつまで経たつても、夫婦仲よく暮しているから安心してくれという意味よりほかに、自分の思いを巻紙の上に運ぶ事ができなかつた。それは彼女が常に両親に対して是非云いたい言葉であつた。しかし今夜は、どうしてもそれだけでは物足らない

言葉であつた。自分の頭を纏^{まと}める事に疲れ果た彼女は、とうとう筆を投げ出した。着物もそこへ脱ぎ捨てたまま、彼女はついに床へ入った。長い間眼に映つた劇場の光景が、断片的に幾通りもの強い色になつて、興奮した彼女の頭をちらちら刺戟^{しげき}するので、彼女は焦^じらされる人のように、いつまでも眠に落ちる事ができなかった。

五十八

彼女は枕の上で一時を聴いた。二時も聴いた。それから何時^{なんじ}だか分らない朝の光で眼を覚^さました。雨戸の隙間^{すきま}から差し込んで来

るその光は、明らかに例もより寝過ごした事を彼女に物語っていた。

彼女はその光で枕元に取り散らされた昨夕の衣裳を見た。上着と下着と長襦袢ながじゅばんと重なり合つて、すぼりと脱ぎ捨てられたまま、畳の上に崩くずれているので、そこには上うえ下した裏うら表おもての、しだらなく一度に入り乱れた色の塊かたまりりがあるだけであつた。その色の塊の下から、細長く折目の付いた端はじを出した金糸入りの檜扇ひおうぎ模様もようの帯は、彼女の手の届く距離まで延びていた。

彼女はこの乱雑な有様を、いささか呆あきれた眼で眺めた。これがかねてから、几帳面きちようめんを女徳じよとくの一つと心がけて来た自分の所作しよさかと思うと、少しあさましいような心持にもなった。津田に嫁とつい

で以後、かつてこんな不体裁ふしだらを夫に見せた覚おぼえのない彼女は、その夫が今自分と同じ室へやの中に寝ていないのを見て、ほっと一息した。だらしないのは着物の事ばかりではなかった。もし夫が入院しないで、例いっもの通り宅うちにいたならば、たといどんなに夜更よふかししようとも、こう遅くまで、氣を許して寝ているはずがないと思つた彼女は、眼が覚さめると共に跳はね起きなかつた自分を、どうしても怠けものとして輕蔑けいべつしない訳に行かなかつた。それでも彼女は容易に起き上らなかつた。昨夕ゆうべの不首尾つぐなを償さつきうためか、自分の知らない間まに起きてくれたお時の足音が、先刻さつきから台所で聞こえるのを好い事にして、彼女はいつまでも肌触りの暖かい夜具の中に包まれていた。

そのうち眼を開けた瞬間に感じた、すまないという彼女の心持がだんだん弛ゆるんで来た。彼女はいくら女だつて、年に一度や二度このくらいの事をしても差さしつか支えなかうと考え直すようになった。彼女の関ふし節ぶしが楽々しだした。彼女はいつにない暢のんびりした気分で、結婚後始めて経験する事のできたこの自由をありがたく味わった。これも畢ひつき竟よう 夫が留守のお蔭かげだと氣のついた時、彼女は当分一人になった今の自分を、むしろ祝福したいくらいに思つた。そうして毎日夫と寝起ねおきを共にしていながら、つい心にもとめず、今日まで見過ごしてきた窮屈というものが、彼女にとつて存外重い負担であつたのに驚ろかされた。しかし偶発的に起つたこの瞬間の覚醒かくせいは無論長く続かなかつた。いったん解放された

自由の眼で、やきもきした昨夕ゆうべの自分を嘲あざけるように眺めた彼女が床を離れた時は、もうすでに違つた氣分に支配されていた。

彼女は主婦としていつもやる通りの義務を遅いながら綺麗きれいに片づけた。津田がいないので、だいぶ省はぶける手数てすうを利用して、下女わづらも煩わづらわさずに、自分で自分の着物を畳んだ。それから軽い身仕舞みじまいをして、すぐ表へ出た彼女は、寄道もせずに、通りから半丁ほど行つた所にある、新しい自動電話の箱の中に入つた。

彼女はそこで別々の電話を三人へかけた。その三人のうちで一番先に扱えらばれたものは、やはり津田であつた。しかし自分で電話口へ立つ事のできない横臥状態おうがにある彼の消息は、間接に取次の口から聞くよりほかに仕方がなかつた。ただ別に異状のあるはず

はないと思つていた彼女の予期は外れ^{はず}なかつた。彼女は「順当でございます、お変りはございません」という保証の言葉を、看護婦らしい人の声から聞いた後で、どのくらい津田が自分を待ち受けているかを知るために、今日は見舞に行かなくつてもいいかと尋ねて貰つた。すると津田がなぜかと云つて看護婦に訊^きき返させた。夫の声も顔も分らないお延は、判断に苦しんで電話口で首を傾けた。こんな場合に、彼は是非来てくれと頼むような男ではなかつた。しかし行かないと、機嫌^{きげん}を悪くする男であつた。それでは行けば喜ぶかというともなかつた。彼はお延に親切の仕損^{しぞん}をさせておいて、それが女の義務じゃないかといった風に、取り澄ました顔をしないとも限らなかつた。ふとこんな事を考え

た彼女は、昨夕吉川夫人から受け取ったらしく自分では思っている、夫に対する一種の感情を、つい電話口で洩^もらしてしまった。「今日は岡本へ行かなければならないから、そちらへは参りませんって云って下さい」

それで病院の方を切った彼女は、すぐ岡本へかけ易^かえて、今に行ってもいいかと聞き合せた。そうして最後に呼び出した津田の妹へは、彼の現状を一口報告^{ひとくち}的に通じただけで、また宅^{うち}へ帰った。

五十九

お時の御給仕で朝食兼帯あさめしけんたい ひる ぜんの午の膳ぜんに着くのも、お延にとつては、結婚以来始めての経験であつた。津田の不在から起るこの変化が、女王クイーンらしい気持を新らしく彼女に与えると共に、毎日の習慣に反して貪むさほり得たこの自由が、いつもよりはかえつて彼女を囚とらえた。身体からだのゆつくりした割合に、心の落ちつけなかつた彼女は、お時に向つて云つた。

「旦那様だんなさまがいらつしやらないと何だか変ね」

「へえ、御淋おさむしゆうございます」

お延はまだ云い足りなかつた。

「こんな寝坊をしたのは始めてね」

「ええ、その代りいつでもお早いんだから、たまには朝とお午と

いっしょでも、宜^{よろ}しゅうございましょう」

「旦那様がいらつしやらないと、すぐあの通りだなんて、思やしなくって」

「誰がでございます」

「お前がさ」

「飛んでもない」

お時のわざとらしい大きな声は、下手な話し相手よりもひどくお延の趣味に^{こた}応えた。彼女はすぐ黙^{もく}つてしまった。

三十分ほど^た経つて、お時の沓^{くつぬぎ}脱^{そく}に揃^{そろ}えたよそゆきの下駄^{げた}を穿^はいてまた表へ出る時、お延は玄関まで送つて来た彼女を^{かえり}顧みた。

「よく気をつけておくれよ。昨夕見たいに寝てしまうと、不用心

だからね」

「今夜も遅く御帰りになるんでございますか」

お延はいつ帰るかまるで考えていなかった。

「あんなに遅くはならないつもりだがね」

たまさかの夫の留守に、ゆっくり岡本で遊んで来たいような気が、お延の胸のどこかでした。

「なるたけ早く帰って来て上げるよ」

こう云い捨てて通りへ出た彼女の足は、すぐ約束の方角へ向つた。

岡本の住居すまいは藤井の家とほぼ同じ見当けんとうにあるので、途中までは例の川かわ沿ぞいの電車を利用する事ができた。終点から一つか二つ

手前の停留所で下りたお延は、そこに掛け渡した小さい木の橋を横切つて、向う側の通りを少し歩いた。その通りは二三日前にさんちの晩、酒場バーを出た津田と小林とが、二人の境遇や性格の差違から来る纏もつれ合あつた感情を互に抱きながら、朝鮮行きだの、お金さんだのを問題にして歩いた往来であつた。それを津田の口から聞かされていなかつた彼女は、二人の様子を想像するまでもなく、彼らとは反対の方角に無心で足を運ばせた後で、叔父おじの宅うちへ行くには是非共上のぼらなければならぬ細長い坂へかかつた。すると偶然向うから来た継子に言葉をかけられた。

「昨日きんじつは」

「どこへ行くの」

「お稽古^{けいこ}」

去年女学校を卒業したこの従妹^{いとこ}は、余暇^{ひま}に任せていろいろなものを習っていた。ピアノだの、茶だの、花だの、水彩画だの、料理だの、何へでも手を出したがるその人の癖を知っているのです、お稽古という言葉聞いた時、お延は、つい笑いたくなくなつた。

「何のお稽古？ トーダンス？」

彼らはこんな楽屋落^{がくやおち}の笑談^{じょうだん}をいうほど親しい間柄^{あいだがら}であつた。

しかしお延から見れば、自分より余裕のある相手の境遇^{きんぐう}に對して、多少の皮肉を意味しないとも限らないこの笑談が、肝^{かん}心の当人^{んじん}には、いっこう諷刺^{ふうし}としての音響を伝えずにすむらしかつた。

「まさか」

彼女はただこう云つて機嫌きげんよく笑つた。そうして彼女の笑は、いかに鋭敏なお延でも、無邪氣その物だと許さない訳に行かなかつた。けれども彼女はついにどこへ何の稽古に行くかをお延に告げなかつた。

「冷かすから厭いやよ」

「また何か始めたの」

「どうせ慾張だから何を始めるか分らないわ」

稽古事の上で、継子が慾張という異名を取っている事も、彼女の宅では隠れない事実であつた。最初妹からつけられて、たちまち家族のうちに伝播でんぱんしたこの悪口わるくちは、近頃彼女自身によつて

平氣に使用されていた。

「待っていらつしやい。じき歸つて来るから」

軽い足でさつさと坂を下りて行く継子の後姿を一度ふり返つて見たお延の胸に、また尊敬と輕侮とを搗き交ぜたその人に対するいつもの感じが起つた。

六十

岡本の邸宅へ着いた時、お延はまた偶然叔父の姿を玄関前に見出した。羽織も着ずに、兵児帯をだらりと下げて、その結び目の所に、後へ廻した両手を重ねた彼は、傍で鋤を動かしている植木

屋としきりに何か話をしていたが、お延を見るや否や、すぐ向うから声を掛けた。

「来たね。今庭いじりをやつてるところだ」

植木屋の横には、大きな通草あけびの蔓つるが巻いたまま、地面の上に投げ出されてあつた。

「そいつを今その庭の入口の門の上へ這はわせようというんだ。ちよつと好いだろう」

お延は網代組あじろぐみの竹垣の中程にあるその茅門かやもんを支ちえている鉾やうななぐりの柱と丸太の桁けたを見較べた。

「へえ。あの袖垣そでがきの所にあつたのを抜いて来たの」

「うんその代りあすこへは玉縁たまぶちをつけた目関垣めせきがきを拵こしらえたよ」

近頃身体に暇ができて、自分の意匠通り住居を新築したこの

叔父の建築に関する単語は、いつの間にか急に殖えていた。言葉

を聴いただけではとても解らないその目関垣というものを、お延

はただ「へえ」と云つて応答つてゐるよりほかに仕方がなかった。

「食後の運動には好いわね。お腹が空いて」

「笑談じゃない、叔父さんはまだ午飯前なんだ」

お延を引張つて、わざわざ庭先から座敷へ上つた叔父は「住、

住」と大きな声で叔母を呼んだ。

「腹が減つて仕方がない、早く飯にしてくれ」

「だから先刻みんなといっしょに召上がれば好いのに」

「ところが、そう勝手元の御都合のいいようにばかりは参らんで

す、世の中というものはね。第一物に区切ものくぎりのあるという事をあな
 たは御承知ですか」

自業自得な夫に対する叔母の態度が澄ましたものであると共に、
 叔父の挨拶あいさつも相変らずであつた。久しぶりで故郷の空気を吸つ
 たような感じのしたお延は、心のうちで自分の目の前にいるこの
 一対いっついの老夫婦と、結婚してからまだ一年と経たたない、云わば新
 生活の門出かどでにある彼ら二人とを比較して見なければならなかつた。
 自分達も長ながの月日さえ踏んで行けば、こうなるのが順当なのだろ
 うか、またはいくら永くいつしよに暮らしたところで、性格が違
 えば、互いの立場も末始終すえしじゆうまで変つて行かなければならないの
 か、年の若いお延には、それが智恵と想像で解けない一種の疑問

であつた。お延は今の津田に満足してはいなかつた。しかし未来の自分も、この叔母のように膏あぶら氣が抜けて行くだろうとは考えられなかつた。もしそれが自分の未来に横よこわる必然の運命だとすれば、いつまでも現在の光沢つやを持ち続けて行こうとする彼女は、いつか一度悲しいこの打撃を受けなければならなかつた。女らしいところがなくなつてしまつたのに、まだ女としてこの世の中に生存するのは、真しんに恐ろしい生存であるとしたか若い彼女には見えなかつた。

そんな距離の遠い感想が、この若い細君の胸に湧わいているとは夢にも氣のつきようはずのない叔父は、自分の前に据すえられた膳ぜんに向つて胡坐あぐらを掻かきながら、彼女を見た。

「おい何をぼんやりしているんだ。しきりに考え込んでいるじゃないか」

お延はすぐ答えた。

「久しぶりにお給仕でもしましょう」

飯櫃おはちがあいにくそこにないので、彼女が座を立ちかけると叔母が呼びとめた。

「御給仕をしたくったって、麵麩パンだからできないよ」

下女が皿の上に狐色なまぎに焦こげたトーストを持って来た。

「お延、叔父さんは情なさけない事なになっちゃったよ。日本に生れて米の飯かが食いえないんだから可哀かわい想そうだろう」

糖尿病とうにようびようの叔父は既定の分量以外に澱粉質でんぷんしつを摂取せつしゅする

事を主治医から厳禁されてしまったのである。

「こうして豆腐ばかり食ってるんだがね」

叔父の膳にはとても一人では平らげ切れないほどの白い豆腐が
生なまのままですべて供えられた。

むくむくと肥え太った叔父の、わざとする情なさけなさそうな顔を見
たお延は、大して気の毒にならないばかりか、かえって笑いたく
なった。

「少しや断食でもした方がいいんでしょう。叔父さんみたいに肥
って生きてるのは、誰だって苦痛に違ないから」

叔父は叔母を顧かえりみた。

「お延は元から悪口やだったが、嫁に行ってから一層達者になっ

たようだね」

六十一

小さいうちから彼の世話になつて成長したお延は、いろいろの角度で出^{しゅつ}没^{ぼつ}するこの叔父の特色を他人よりよく承知していた。肥^{から}った身体に釣り合わない神経質の彼には、時々自分の室^{へや}に入つたぎり、半日ぐらい黙つて口を利^きかずにいる癖がある代りに、他の顔^{ひと}さえ見ると、また何かしらしゃべらないでは片^{かた}時^{とき}もいられないといった気^き作^{さく}な風があつた。それが元気のやり場所に困るからというよりも、なるべく相手を不愉快にしたくないという対

人的な想いやりや、または客を前に置いて、ただのつそつとして
いる自分の手持無沙汰てもちぶさたを避けるためから起る場合が多いので、用
件以外の彼の談話には、彼の平生の心がけから来る一種の興味的
中心があつた。彼の成効せいこうに少なからぬ貢献をもたらしたらしく
思われる、社交上極めて有利な彼のこの話術は、その所有者の天
から稟うけた諧謔趣味かいぎやくしゆみのために、一層派出な光彩はでを放つ事がし
ばしばあつた。そうしてそれが子供の時分から彼の傍そばにいたお延
の口に、いつの間にか乗り移つてしまった。機嫌きげんのいい時に、彼
を向うへ廻かへして軽口かるくちの吐き競くらをやるくらいは、今の彼女にとつ
て何の努力も要いらない第二の天性のようなものであつた。しかし
津田に嫁よめいでの彼女は、嫁ぐとすぐにこの態度を改めた。と

ころが最初^{つし}慎みのために控えた悪^{わる}口は、二カ月経つても、三カ月経つてもなかなか出て来なかつた。彼女はついにこの点において、岡本にいた時の自分とは別個の人間になつて、彼女の夫に対して、岡本にいた時の自分とは別個の人間になつて、彼女の夫に対してしなければならなくなつた。彼女は物足らなかつた。同時に夫を欺^{あざ}むいているような気がしてならなかつた。たまに来て、もとに変わらない叔父の様子を見ると、そこに昔^{むか}しの自由を憶^{おも}い出させる或物があつた。彼女は生^{なま}豆腐^{どうふ}を前に、胡坐^{あぐら}を搔^かいている剽^{ひょうき}軽^んな彼の顔を、過去の記念のように懐^{なつ}かし氣に眺めた。

「だつてあたしの悪口は叔父さんのお仕込^{しこみ}じやないの。津田に教わつた覚^{おぼえ}なんか、ありやしないわ」

「ふん、そうでもあるめえ」

わざと江戸っ子を使った叔父は、そういう種類の言葉を、いっさい家庭に入れてはならないもののごとくに忌み嫌う叔母の方を見た。傍から注意するとな面白がつて使いたがる癖をよく知っているの、叔母は素知らぬ顔をして取り合わなかった。すると目標が外れた人のように叔父はまたお延に向った。

「いったい由雄さんはそんなに厳格な人かね」

お延は返事をしずに、ただにやにやしていた。

「ははあ、笑ってるところを見ると、やっぱ嬉しいんだな」

「何がよ」

「何がよって、そんなに白ばつくれなくっても、分つていらあな。

——だが本当に由雄さんはそんなに厳格な人かい」

「どうかあたしよく解らないわ。なぜまたそんな事を真面目く
さつてお訊きになるの」

「少しこつちにも料簡りようけんがあるんだ、返答次第では」

「おお怖こわい事。じゃ云つちまうわ。由雄は御察しの通り厳格な人
よ。それがどうしたの」

「本当にかい」

「ええ。ずいぶん叔父さんも苦く呪どいのね」

「じゃこつちでも簡潔に結論を云つちまう。はたして由雄さんが、
お前のいう通り厳格な人ならばだ。とうてい悪口の達者なお前
は向かないね」

こう云いながら叔父は、そこに黙って坐っている叔母の方を、

頷^{あご}でしゃくつて見せた。

「この叔母さんなら、ちようどお誂^{あつ}らえ向^{むき}かも知れないがね」

淋しい心持が遠くから来た風のように、不意^なにお延の胸を撫^なでた。彼女は急に悲しい氣分に囚^{とら}えられた自分を見て驚ろいた。

「叔父さんはいつでも氣樂そうで結構ね」

津田と自分とを、好過^{こうか}ぎるほど仲の好い夫婦と仮定してかかつた、調^{からかい}戲^{はんぶん}半分の叔父の笑^{じょうだん}談^{だん}を、ただ座興^{ざきやう}から来た出鱈^{でたらめ}目

として笑つてしまうには、お延の心にあまり隙^{すき}があり過ぎた。と

云つて、その隙^あを飽^あくまで取り繕^{とつく}ろつて、他人の前に、何一つ不

足のない夫を持った妻としての自分を示さなければならぬとのみ考えている彼女は、心に感じた通りの何物をも叔父の前に露出

する自由をもっていなかった。もう少しで涙が眼の中に溜たまろうとしたところを、彼女は瞬またたきでごまかした。

「いくらお誂あつらえ向むきでも、こう年を取っちゃ仕方がない。ねえお延」

年の割にどこへ行つても若く見られる叔母が、こう云つて水々した光沢つやのある眼をお延の方に向けた時、お延は何にも云わなかった。けれども自分の感情を隠すために、第一の機会を利用する事は忘れなかった。彼女はただ面白そうに声を出して笑った。

六十二

親身しんみの叔母よりもかえって義理の叔父の方を、心の中で好いていたお延は、その報酬として、自分もこの叔父から特別に可愛かわいがられていたという信念を常にもつていた。洒落しゃらくでありながら神経質に生れついた彼の気合きあいをよく呑み込んで、その両面に行き渡った自分の行動を、寸分違たがわず叔父の思い通りに樂々と運んで行く彼女には、いつでも年齢としの若さから来る柔軟性が伴っていたので、ほとんど苦痛というものなしに、叔父を喜こばし、また自分に満足を与える事ができた。叔父が鑑賞の眼を向けて、常に彼女の所作よさを眺めていてくれるように考えた彼女は、時とすると、変化に乏しい叔母の骨はどうしてあんなに堅いのだろうと怪しむ事さえあつた。

いかにして異性を取り扱うべきかの修養を、こうして叔父からばかり学んだ彼女は、どこへ嫁に行つても、それをそのまま夫に应用すれば成^{せいこう}効するに違ないと信じていた。津田といつしよになつた時、始めて少し勝手の違ふような感じのした彼女は、この生れて始めての経験を、なるほどという眼つきで眺めた。彼女の努力は、新らしい夫を叔父のような人間に熟^{こな}しつけるか、またはすでに出来上つた自分の方を、新らしい夫に合うように改造するか、どつちかにしなければならぬ場合によく出合つた。彼女の愛は津田の上にあつた。しかし彼女の同情はむしろ叔父型の人間に注^{そそ}がれた。こんな時に、叔父なら嬉^{うれ}しがってくれるものと思ふ事がしばしば出て来た。すると自然の勢いが彼女にそれを逐^{ちく}い

一叔父に話してしまえと命令した。その命令に背くほど意地の強い彼女は、今までどうかどうか我慢して通して来たものを、今更告白する気にはとてもなれなかった。

こうして叔父夫婦を欺むあざむいてきたお延には、叔父夫婦がまた何の掛念けねんもなく彼女のために騙だまされているという自信があつた。同時に敏感な彼女は、叔父の方でもまた彼女に打ち明けたくつて、しかも打ち明けられない、津田に対する、自分のと同程度ぐらいなある秘密をもっているという事をよく承知していた。有体ありていに見透みすかした叔父の腹の中を、お延に云わせると、彼はけつして彼女に大切な夫としての津田を好いていなかったのである。それが二人の間に横よこわる氣質の相違から来る事は、たとい二人を比較して

見た上でなくても、あまり想像に困難のかからない仮定であつた。少くとも結婚後のお延はじきそこに気がついた。しかし彼女はまだその上に材料をもつていた。粗放のようで一面に緻密な、無頓着じやくのようで同時に鋭敏な、口先は冷淡でも腹の中には親切気のあるこの叔父は、最初会見の当時から、すでに直観的に津田を嫌きらつていたらしかった。「お前はああいう人が好きなのかね」と訊きかれた裏側に、「じやおれのようなものは嫌きらだつたんだね」という言葉が、ともに響いたらしく感じた時、お延は思わずはつとした。しかし「叔父さんの御意見は」とこつちから問い返した時の彼は、もうその気き下味せきい関を通り越していた。

「おいでよ、お前さえ行く気なら、誰にも遠慮いは要らないから」

と親切に云ってくれた。

お延の材料はまだ一つ残っていた。自分に対して何にも云わなかった叔父の、津田に関するもつと露骨な批評を、彼女は叔母の口を通して聞く事ができたのである。

「あの男は日本中の女がみんな自分に惚ほれなくつちやならないよ
うな顔つきをしているじゃないか」

不思議にもこの言葉はお延にとって意外でも何でもなかった。

彼女には自分が津田を精せい一いつぱい杯愛し得るといふ信念があつた。同

時に、津田から精一杯愛され得るといふ期待も安心もあつた。ま

た叔父の例の悪わるくち口が始まつたといふ気が何より先に起つたので、

彼女は声を出して笑つた。そうして、この悪口はつまり嫉妬しつとから

来たのだと一人腹の中で解釈して得意になった。叔母も「自分の若い時の己惚おのぼれは、もう忘れているんだからね」と云つて、彼女に相槌あいづちを打つてくれた。……

叔父の前に坐つたお延は自分の後うしろにあるこんな過去を憶おもい出さない訳に行かなかつた。すると「厳格」な津田の妻として、自分が向くとか向かないとかいう下らない彼の笑談しょうだんのうちに、何か真面目まじめな意味があるのではなからうかという気さえ起つた。

「おれの云つた通りじゃないかね。なければ仕合せだ。しかし万一何かあるなら、また今ないにしたところで、これから先ひよつと出て来たなら遠慮なく打ち明けなけりやいけないよ」

お延は叔父の眼の中に、こうした慈愛の言葉さえ讀んだ。

六十三

感傷的の氣分を笑に紛まぎらした彼女は、その苦痛から逃のがれるために、すぐ自分の持つて来た話題を叔父叔母の前に切り出した。

「昨日きのうの事は全体どういう意味なの」

彼女は約束通り叔父に説明を求めなければならなかった。すると返答を与えるはずの叔父がかえって彼女に反問した。

「お前はと思う」

特に「お前」という言葉に力を入れた叔父は、お延の腹でも読むような眼遣めづかいをして彼女をじっと見た。

「解らないわ。藪^{やぶ}から棒にそんな事訊^きいたつて。ねえ叔母さん」

叔母はにやりと笑った。

「叔父さんはね、あたしのようなうつかりものには解らないが、お延にならきつと解る。あいつは貴様^{きさま}より気が利^きいてるからつておつしやるんだよ」

お延は苦笑するよりほかに仕方なかった。彼女の頭には無論臃^おぼろげ^{ぼろげ}気ながらある臆測^{おくそく}があつた。けれども強^しいられないのに、慚^り巧^{こう}ぶつてそれを口外するほど、彼女の教育は蓮葉^{はすは}でなかった。

「あたしにだつて解りつこないわ」

「まああてて御覧。たいてい見^{けんとう}当^{とう}はつくだろう」

どうしてもお延の方から先に何か云わせようとする叔父の気色^{けしき}

を見て取った彼女は、二三度押問答の末、とうとう推察の通りを云った。

「見合じやなくって」

「どうして。——お前にはそう見えるかね」

お延の推測を首肯^{うけが}う前に、彼女の叔父から受けた反問がそれからそれへと続いた。しまいに彼は大きな声を出して笑った。

「あたった、あたった。やっぱりお前の方が住^{すみ}より伶俐だね」

こんな事で、二人の間に優劣^まをつける気楽な叔父を、お住とお延が馬鹿にして冷評^{ひやか}した。

「ねえ、叔母さんだつてそのくらいの事ならたいい見当がつくわね」

「お前も御賞おほめにあずかつたつて、あんまり嬉うれしくないだろう」

「ええちつともありがたかないわ」

お延の頭に、一座を切り舞わした吉川夫人の幹旋あつせんぶりがまた描えがき出いだされた。

「どうもあたしそうだろうと思つたの。あの奥さんが始終しじゅう継子さんと、それからあの三好さんて方かたを、引き立てよう、引き立てようとして、骨を折っていらつしやるんですもの」

「ところがあのお継と来たら、また引き立たない事夥おびただしいんだからな。引き立てようとすれば、かえつて引き下がるだけで、まるで紙かんぷくろ袋かぶを被かぶつた猫見たいだね。そこへ行くと、お延のようなのはどうしても得とくだよ。少くとも当世とうせいむき向だ」

「厭^{いや}にしゃあしゃあしているからでしょう。何だか賞^ほめられてるんだか、悪く云われてるんだか分らないわね。あたし継子さんのようなおとなしい人を見ると、どうかしてあんなになりたいと思うわ」

こう答えたお延は、叔父のいわゆる当世向を發揮する余地の自分に与えられなかつた、したがって自分から見ればむしろ不成^{ふせいこ}効^うに終つた、昨夕^{ゆうべ}の会合を、不愉快と不満足の眼で眺めた。

「何でまたあたしがあの席に必要なだつたの」

「お前は継子の従姉^{いとこ}じゃないか」

ただ親類だからというのが唯^{ゆい}一^{いつ}の理由だとすれば、お延のほかに出席しなければならぬ人がまだたくさんあつた。その上

相手の方では当人がたった一人出て来ただけで、紹介者の吉川夫婦を除くと、向うを代表するものは誰もいなかった。

「何だか変じやないの。そうするともし津田が病気でなかったら、やっぱり親類としては是非出席しなければ悪い訳になるのね」

「それやまた別口だ。ほかに意味があるんだ」

叔父の目的中には、昨夕ゆうべの機会を利用して、津田とお延を、一

度でも余計吉川夫婦に接近させてやろうという好意が含まれていたのである。それを叔父の口から判はつきり切聴かされた時、お延は日

頃自分が考えている通りの叔父の気性きしょうがそこに現われているよ

うに思つて、暗あんに彼の親切を感謝すると共に、そんならなぜあの

吉川夫人ともっと親しくなれるように仕向けてくれなかったのか

と恨^{うら}んだ。二人を近づけるために同じ食卓に坐らせたまは坐^うらせたには坐らせ
たが、結果はかえつて近づけない前より悪くなるかも知れないと
いう特殊な心理を、叔父はまるで承知していなしかつた。お
延はいくら行き届いても男はやっぱり男だと批評したくなつた。
しかしその後^{あと}から、吉川夫人と自分との間に横^{よこ}わる一種微妙な関
係を知らない以上は、誰が出て来ても畢^{ひつきよう} 竟^{よこ}どうする事もでき
ないのだから仕方がないという、嘆息を交えた寛^{かんじよ}恕^{じよ}の念も起つ
て来た。

六十四

お延はその問題をそこへ放り出したまま、まだ自分の腑に落ちずに残っている要点を片づけようとした。

「なるほどそういう意味合だったの。あたし叔父さんに感謝なくつちやならないわね。だけどまだほかに何かあるんでしよう」「あるかも知れないが、たといないにしたところで、単にそれだけでも、ああしてお前を呼ぶ価値は充分あるだろう」

「ええ、有るには有るわ」

お延はこう答えなければならなかった。しかしそれにしては勧誘の仕方が少し猛烈過ぎると腹の中で思った。叔父は果して最後の^{いちもつ}一物を胸に蔵い込んでいた。

「実はお前にお媚さんの眼利^{めきき}をして貰おうと思ったのさ。お前は

よく人を見抜く力をもってるから相談するんだが、どうだろうあの男は。お継の未来の夫としていいだろうか悪いだろうか」

叔父の平生から推して、お延はどこまでが真面目な相談なのか、ちよつと判断に迷った。

「まあ大変な御役目を承わったのね。光栄の至りだ事」

こう云いながら、笑って自分の横にいる叔母を見たが、叔母の様子が案外沈着なので、彼女はすぐ調子を抑えた。

「あたしのようなものが眼利めききをするなんて、少し生意氣よ。それにただ一時間ぐらいああしていつしよに坐っていただけじゃ、誰だって解りっこないわ。千里眼でもなくつちや」

「いやお前にはちよつと千里眼らしいところがあるよ。だから皆みんな

なが訊ききたがるんだよ」

「冷評ひやかしちゃ厭いやよ」

お延はわざと叔父を相手にしないふりをした。しかし腹の中では自分に媚こびる一種の快感を味わった。それは自分が實際ひと他にそう思われているらしいという把握はさくから来る得意にほかならなかった。けれどもそれは同時に彼女を失意にする覲てきめん面の事実で破壊されべき性質のものであった。彼女は反対に近い例証としてその裏面にすぐ自分の夫を思い浮べなければならなかった。結婚前千里眼以上に彼の性質を見抜き得たとばかり考えていた彼女の自信は、結婚後今日こんにちに至るまでの間に、明らかな太陽に黒い斑点のできるように、思い違いかんちがい疳違こんせきの痕迹で、すでにそこそこ汚よごれてい

た。^{ひつきよう}畢 竟 夫に對する自分の直覺は、長い月日の経験によつて、

訂正されべく、補修されべきものかも知れないという心細い真理に、ようやく頭を下げかけていた彼女は、叔父に煽^{あお}られてすぐ図に乗るほど若くもなかった。

「人間はよく交際^{つきあ}つて見なければ實際解らないものよ、叔父さん」
 「そのくらいな事は御前に教わらないだつて、誰だつて知つてらあ」

「だからよ。一度会つたぐらいで何にも云える訳がないつていうのよ」

「そりや男の云^い草^{ぐさ}だろう。女は一眼見ても、すぐ何かいうじやないか。またよく旨^{うま}い事を云うじやないか。それを云つて御覽と

いうのさ、ただ叔父さんの参考までに。なにもお前に責任なんか持たせやしないから大丈夫だよ」

「だって無理ですもの。そんな予言者みたいな事。ねえ叔母さん」

叔母はいつものようにお延に加勢かせいしなかった。さればと云つて、

叔父の味方にもならなかった。彼女の予言を強しいる気色けしきを見せな

い代りに、叔父の悪強わるじいもとめなかった。始めて嫁にやる可愛かわいい

長女の未来の夫に関する批判の材料なら、それがどんなに軽かろ

うと、耳を傾むける値打ねうちは充分あるといった風も見えた。お延は

当り障あたさわりのない事を一口二口云つておくよりほかに仕方がなかつ

た。

「立派な方じゃありませんか。そうして若い割に大変落ちついて

いらつしやるのね。……」

その後を待つていた叔父は、お延が何にも云わないので、また催促するように訊いた。

「それつきりかね」

「だって、あたしあの方の——軒置いてお隣へ坐らせられて、ろくろくお顔も拝見しなかつたんですもの」

「予言者をそんな所へ坐らせるのは悪かつたかも知れないがね。」

——何かありそうなもんじやないか、そんな平凡な観察でなしに、もつとお前の特色を發揮するような、ただ一言で、ずばりと向うの急所へあたるような……」

「むずかしいのね。——何しろ一度ぐらいじや駄目よ」

「しかし一度だけで何か云わなければならぬ必要があるとしたらどうだい。何か云えるだろう」

「云えないわ」

「云えない？　じゃお前の直覚は近頃もう役に立たなくなつたんだね」

「ええ、お嫁に行つてから、だんだん直覚が擦り減すへらされてしまつたの。近頃は直覚じゃなくつて鈍どん覚かくだけよ」

六十五

口先でこんな押問答を長たらしく繰り返していたお延の頭の中

には、また別の考えが絶えず並行して流れていた。

彼女は夫婦和合の適例として、叔父から認められている津田と自分を疑わなかった。けれども初対面の時から津田を好いてくれなかった叔父が、その後彼の好悪を改めるはずがないという事もよく承知していた。だから睦しむつましそうな津田と自分とを、彼は始終不思議な眼で、眺めているに違ないと思っていた。それを他の言葉で云い換えると、どうしてお延のような女が、津田を愛し得るのだらうという疑問の裏に、叔父はいつでも、彼自身の先見に対する自信を持ち続けていた。人間を見損みそくなつたのは、自分でなくて、かえつてお延なのだという断定が、時機を待つて外部に揺曳ようえいするために、彼の心に下層にいつも沈澱ちんでんしているらしか

った。

「それだのに叔父はなぜ三好に対する自分の評を、こんなに執濃しつこく聴こうとするのだろうか」

お延は解げしかねた。すでに自分の夫を見損なつたものとして、暗あんに叔父から目指めざされているらしい彼女に、その自覚を差しおいて、おいそれと彼の要求に応ずる勇氣はなかった。仕方がないので、彼女はしまいに黙つてしまった。しかし年来遠慮のなさ過ぎる彼女を見慣れて来た叔父から見ると、この際彼女の沈黙は、不思議に近い現象にほかならなかつた。彼はお延を措おいて叔母の方を向いた。

「この子は嫁に行つてから、少し人間が變つて来たようだね。だ

いぶ臆病になった。それもやつぱり旦那様の感化かな。不思議なもんだな」

「あなたがあんまり苛めるからですよ。さあ云え、さあ云え、責めるように催促されちゃ、誰だって困りますよ」

叔母の態度は、叔父を窘めるよりもむしろお延を庇護う方に傾いていた。しかしそれを嬉しがるには、彼女の胸が、あまり自分の感想で、いっぱいになり過ぎていた。

「だけどころや第一が継子さんの問題じゃなくって。継子さんの考え一つできまるだけだとあたし思うわ、あたしなんかが余計な口を出さないだつて」

お延は自分で自分の夫を扱んだ当時の事を憶い起さない訳に行

かなかつた。津田を見出した彼女はすぐ彼を愛した。彼を愛した
 彼女はすぐ彼の許に嫁ぎたい希望を保護者に打ち明けた。そうし
 てその許諾と共にすぐ彼に嫁いだ。冒頭から結末に至るまで、彼
 女はいつでも彼女の主人公であつた。また責任者であつた。自分
 の料簡りようけんをよそにして、他人の考えなどを頼りたがつた覚おぼえはい
 まだかつてなかつた。

「いったい継子さんは何とおっしゃるの」

「何とも云わないよ。あいつはお前よりなお臆病だからね」

「肝心かんじんの当人がそれじゃ、仕方がないじゃありませんか」

「うん、ああ臆病じゃ實際仕方がない」

「臆病じゃないのよ、おとなしいのよ」

「どっちにしたって仕方がない、何にも云わないんだから。あるいは何にも云えないのかも知れないね、種がなくなつて」

そういう二人が漫然として結びついた時に、夫婦らしい関係が、はたして両者の間に成立し得るものかというのが、お延の胸に横よこたわる深い疑問であつた。「自分の結婚ですらこうなのに」という論理ロジックがすぐ彼女の頭に閃ひらめいた。「自分の結婚だつて畢ひつき竟ようは似たり寄つたりなんだから」という風に、この場合を眺める事のできなかつた彼女は、一直線に自分の眼をつけた方ばかり見た馬鹿らしいよりも恐ろしい氣になつた。なんという氣楽な人だろうとも思つた。

「叔父さん」と呼びかけた彼女は、呆あきれたように細い眼を強く張

つて彼を見た。

「駄目だよ。あいつは初めっから何にも云う気がないんだから。元来はそれでお前に立ち合つて貰つたような訳なんだ、実を云うとね」

「だつてあたしが立ち合えばどうするの」

「とにかく継が是^{つぎ}非^{つぎ}そうしてくれつておれ達に頼んだんだ。つまりあいつは自分よりお前の方をよつぽど^{りこ}慥巧^{りこ}だと思つてるんだ。そうしてたとい自分は解らなくつても、お前なら後からいろいろ云つてくれる事があるに違ないと思ひ込んでゐるんだ」

「じゃ最初からそうおつしやれば、あたしだつてその氣で行くの
に」

「ところがまたそれは厭だいやというんだ。是非黙つててくれというんだ」

「なぜでしょう」

お延はちよつと叔母の方を向いた。「きまりが悪いからだよ」と答える叔母を、叔父は遮さえぎった。

「なにきまりが悪いばかりじゃない。成心せいしんがあつちや、好い批評ができないというのが、あいつの主意なんだ。つまりお延の公平に得た第一印象を聞かして貰いたいというんだろう」

お延は初めて叔父に強しいられる意味を理解した。

六十六

お延から見た継子は特殊の地位を占めていた。こちらの利害を心にかけてくれるという点において、彼女は叔母に及ばなかった。自分と気が合うという意味では叔父よりもずっと縁が遠かった。その代り血統上の親和力や、異性に基くもとづ牽引性けんいんせい以外に、年齢の相似から来る有利な接触面をもっていた。

若い女の心を共通に動かすいろいろな問題の前に立つて、興味に充ちた眼を見張る時、自然の勢として、彼女は叔父よりも叔母よりも、継子に近づかなければならなかった。そうしてその場合における彼女は、天分から云つて、いつでも継子の優者であつた。経験から推せば、もちろん継子の先輩に違なかつた。少なくとも

そういう人として、継子から一段上に見られているという事を、彼女はよく承知していた。

この小さい嘆美者には、お延のいうすべてを何でも真に受ける癖があつた。お延の自覚から云えば、一つ家に寝起ねおきを共にしている長い間に、自分の優越を示す浮誇ふこの心から、柔軟じゅうなんせい性に富んだこの従妹いとこを、いつの間にかそう育て上げてしまったのである。

「女は一目見て男を見抜かなければいけない」

彼女はかつてこんな事を云つて、無邪気な継子を驚ろかせた。

彼女はまた充分それをやり終おほせるだけの活きた眼力がんりきを自分に具えているものとして継子に対した。そうして相手の驚きが、羨みうらやから嘆賞まぎわに變つて、しまいに崇拜の間際まで近づいた時、偶然彼

女の自信を實現すべき、津田と彼女との間に起つた相思の恋愛事件が、あたかも神秘の^{ほのお}のごとく、継子の前に燃え上つた。彼女の言葉は継子にとってついに永久の真理その物になった。一般の世間に向つて得意であつた彼女は、とくに継子に向つて得意でなければならなかつた。

お延の見た通りの津田が、すぐ継子に伝えられた。日常接触の機会を自分自身にもっていない継子は、わが眼わが耳の範囲外に^は食み出している未知の部分を、すべて彼女から与えられた間接の知識で補なつて、容易に津田という理想的な全体を造り上げた。

結婚後半年以上を経過した今のお延の津田に対する考えは變つていた。けれども継子の彼に対する考えは毫^{ちよう}も變らなかつた。彼

女は飽くまでもお延を信じていた。お延も今更前言を取り消すような女ではなかった。どこまでも先見の明によつて、天の幸福を享ける事のできた少数の果報者として、継子の前に自分を標榜ひょうぼうしていた。

過去から持ち越したこういう二人の關係を、余儀なく記憶の舞台に躍おどらせて、この事件の前に坐らなければならなくなつたお延は、辛いよりもむしろ快よくなかつた。それは皆みんなが寄つてたかつて、今まで糊塗ことして來た自分の弱点を、早く自白しろと間接に責めるように思えたからである。こつちの「我が」以上に相手が意地の悪い事をするように見えたからである。

「自分の過失に対しては、自分が苦しみさえすればそれでたくさ

んだ」

彼女の腹の中には、平生から貯蔵してあるこういう弁解があつた。けれどもそれは何事も知らない叔父や叔母や継子に向つて叩きつける事のできないものであつた。もし叩きつけるとすれば、彼ら三人を無心に使噓しそして、自分に当擦あてこすりをやらせる天に向つてするよりほかに仕方がなかつた。

膳ぜんを引かせて、叔母の新らしく淹いれて来た茶をがぶがぶ飲み始めた叔父は、お延の心にこんな交こみ入いつた蟠わだかまりが蜿蜒うねくつていようと思うはずがなかつた。造りたての平庭ひらにわを見渡しながら、晴せ々せいした顔つきで、叔母と二言三言、自分の考案になつた樹きや石の配置について批評しあつた。

「来年はあの松の横の所へ楓かえでを一本植えようと思うんだ。何だか

ここから見ると、あすこだけ穴あが開いてるようでおかしいからね」

お延は何の気なしに叔父の指さしている見当けんとうを見た。隣家となりと地じ

続つづきになつてゐる堀際へいぎわの土をわざと高く盛り上げて、そこへ小

さな孟宗藪もうそうやぶをこんもり繁しげらした根の辺あたりが、叔父のいう通り疎まばら

に隙すいていた。先刻さつきから問題を変えよう変えようと思つて、暗あんに

機会を待つていた彼女は、すぐ氣転きを利きかした。

「本当ね。あすこを塞ふさがないと、さもさも藪やぶを拵こしらえましたつて云

うようで変ね」

談話は彼女の予期した通りよその溝へ流れ込んだ。しかしそれが再びもとの道へ戻つて来た時は、前より急な傾斜面を通らなけ

ればならなかった。

六十七

それは叔父が先刻玄関先で鋤^{くわ}を動かしていた出入^{でいり}の植木屋に呼ばれて、ちよつと席^{はす}を外した後^{あと}、また庭口から座敷へ上つて来た時の事であつた。

まだ学校から帰らない百合子^{ゆりこ}や一の噂^{はじめうわさ}に始^はまつた叔母とお延の談話は、その時また偶然にも継子の方に滑^{すべ}り込みつつあつた。

「慾張^{よくばり}屋さん、もう好い加減に帰りそうなもんだのにね、何を
しているんだろう」

叔母はわざわざ百合子の命つけた渾名あやなで継子と呼んだ。お延はすぐその慾張屋の様子を思い出した。自分に許された小天地のうちでは飽あくまで放恣ほうしなくせに、そこから一步踏み出すと、急に謹慎の模型見たように竦すくんでしまう彼女は、まるで父母の監督によつて仕切られた家庭という籠かごの中で、さも愉快らしく囀さえずる小鳥のようなもので、いったん戸を開けて外へ出されると、かえつてどう飛んでいいか、どう鳴いていいか解らなくなるだけであつた。

「今日は何のお稽古けいこに行つたの」

叔母は「あてて御覧」と云つた後で、すぐ坂の途中から持つて来たお延の好奇心を満足させてくれた。しかしその稽古の題目が近頃熱心に始め出した語学だと聞いた時に、彼女はまた改めて従い

妹^{とこ}の多慾に驚ろかされた。そんなにいろいろなものに手を出して
 いったい何にするつもりだろうという氣さえした。

「それでも語学だけには少し特別の意味があるんだよ」

叔母はこう云つて、弁護かたがた継子の意味をお延に説明した。
 それが間接ながらやはり今度の結婚問題に係してゐるので、お
 延は叔母の手前^{しゅしやう}殊^{しゅ}勝^{しょう}らしい顔をしてなるほど^{うなず}首肯かなけれ
 ばならなかつた。

夫の好むもの、でなければ夫の職業上妻が知っていると都合の
 好いもの、それらを予想して結婚前に習つておこうという女の心
 がけは、未来^{りようじん}の良人に対する親切に違なかつた。あるいは単に男
 の氣に入るためとしても有利な手段に違なかつた。けれども継子

にはまだそれ以上に、人間としてまた細君としての大事な稽古けいこがいくらでも残っていた。お延の頭に描き出されたその稽古は、不幸にして女を善くするものではなかった。しかし女を鋭敏にするものであった。悪く摩擦するには相違なかった。しかし怜悧れいりに研ぎ澄すますものであった。彼女はその初歩を叔母から習った。叔父のお蔭かげでそれを今日こんにちに発達させて来た。二人はそういう意味で育て上げられた彼女を、満足の眼で眺めているらしかった。

「それと同じ眼がどうしてあの継子に満足できるだろう」

従妹いとこのどこにも不平らしい素振そぶりさえ見せた事のない叔父叔母は、この点においてお延に不可解であった。強しいて解釈しようとするば、彼らは姪めいと娘を見る眼に区別をつけているとでも云うよりほ

かに仕方がなかった。こういう考えに襲われると、お延は突然口
 惜やしくなった。そういう考えがまた時々発作ほつきのようにお延の胸を
 掴つかんだ。しかし城府を設けない行き届いた叔父の態度や、取扱い
 に公平を欠いた事のない叔母の親切で、それはいつでも燃え上る
 前に吹き消された。彼女は人に見えない袖そでを顔へあてて内部の赤
 面を隠しながら、やつぱり不思議な眼をして、二人の心持を解け
 ない謎なぞのように不断から見つめていた。

「でも継子さんは仕合せね。あたし見たいに心配しんぱい性しやうでないか
 ら」

「あの子はお前よりもずっと心配性だよ。ただ宅うちにいと、いく
 ら心配したくつても心配する種がないもんだから、ああして平気

でいられるだけなのさ」

「でもあたしなんか、叔父さんや叔母さんのお世話になつてた時分から、もつと心配性だつたように思うわ」

「そりやお前と継つぎとは……」

途中で止めた叔母は何をいう気が解らなかつた。性質が違うという意味にも、身分が違うという意味にも、また境遇が違うという意味にも取れる彼女の言葉を追究する前に、お延ははつと思つた。それは今まで気のつかかなかつた或物に、突然ぶつかつたような動悸どうきがしたからである。

「昨日きのうの見合に引き出されたのは、容貌ようぼうの劣者として暗あんに従妹の器量を引き立てるためではなかつたらうか」

お延の頭に石火せつかのようなこの暗示が閃めいた時、彼女の意志も平へい常ぜいより倍以上の力をもつて彼女に逼せまった。彼女はついに自分を抑おさえつけた。どんな色をも顔に現さなかつた。

「継子さんは得とくな方かたね。誰にでも好かれるんだから」

「そうも行かないよ。けれどもこれは人の好すき々すきだからね。あんな馬鹿でも……」

叔父が縁側えんがわへ上つたのと、叔母がこう云いかけたのとは、ほとんど同時であつた。彼は大きな声で「継がどうしたって」と云いながらまた座敷へ入つて来た。

すると今まで抑え^{おさ}つけていた一種の感情がお延の胸に盛り返して来た。飽^あくまで機嫌^{きげん}の好い、飽^あくまで元氣に充^みちた、そうして飽^あくまで楽天的に肥え太ったその顔が、瞬間のお延をとつさに刺^し戟^{げき}した。

「叔父さんもずいぶん人が悪いのね」

彼女は藪^{やぶ}から棒^{やぶ}にこう云わなければならなかった。今日^{こんにち}まで二人の間に何^{なんび}百^{やっ}遍^{ぺん}となく取り換わされたこの常^{じょう}套^{とう}な言葉を使^{つか}ったお延の声は、いつもと違^{ちが}っていた。表情にも特殊なところがあつた。けれども先刻^{さつき}からお延の腹の中にどんな潮^{うしお}の満干^{みちひ}があつたか、そこにまるで氣のつかずにいた叔父は、平生の細心にも

似ず、全く無邪氣であつた。

「そんなに人が悪うがすかな」

例の調子でわざと空つとぼけた彼は、澄まして刻煙草きぎみを雁首がんくびへ詰めた。

「おれの留守るすにまた叔母さんから何か聴きいたな」

お延はまだ黙っていた。叔母はすぐ答えた。

「あなたの人の悪いぐらい今さら私から聴かないでもよく承知してるそうですよ」

「なるほどね。お延は直覺派だからな。そうかも知れないよ。何しろ一目見てこの男の懷中には金がいくらあつて、彼はそれを犢ふ鼻んどし禪しのミツはきへ挟はさんでいるか、または胴どう巻まきへ入れて臍へその上に乗つ

けているか、ちゃんと見分ける女なんだから、なかなか油断はできないよ」

叔父の笑じょうだん談はけつして彼の予期したような結果を生じなかった。お延は下を向いて眉まゆと睫まつげ毛をいっしよに動かした。その睫毛の先には知らない間まに涙がいっぱい溜たまった。勝手を違えた叔父の悪わるくち口もぱたりととまった。変な圧迫が一度に三人を抑えつけた。

「お延どうかしたのかい」

こう云った叔父は無言の空虚を充たすために、煙管きせるで灰吹はいふきを叩いた。叔母も何とかその場を取り繕つくろわなければならなかった。

「何だね小供らしい。このくらいな事で泣くものがありますか。

いつもの笑談じゃないか」

叔母の小言^{こごと}は、義理のある叔父の手前を兼た挨拶^{あいさつ}とばかりは

聞えなかつた。二人の關係を知り抜いた彼女の立場を認める以上、どこから見ても公平なものであつた。お延はそれをよく承知してゐた。けれども叔母の小言をもつともと思えば思うほど、彼女はお泣きたくなつた。彼女の唇^{くちびる}が顫^{ふる}えた。抑えきれない涙が後から後からと出た。それにつれて、今まで堰^せきとめていた口の関も破れた。彼女はついに泣きながら声を出した。

「何もそんなにまでして、あたしを苛^{いじ}めなくなつたつて……」
叔父は当惑そうな顔をした。

「苛めやしないよ。賞^ほめてるんだ。そらお前が由雄さんの所へ行
く前に、あの人を評した言葉があるだろう。あれを皆^{みんな}な蔭^{かげ}で感心
しているんだ。だから……」

「そんな事承^{うかが}わなくつても、もうたくさんです。つまりあたしが
芝居へ行つたのが悪いんだから。……」

沈黙がすこし続いた。

「何だかとんだ事になつちまつたんだね。叔父さんの調^{からか}戯^かい方^{かた}が
悪かつたのかい」

「いいえ。皆^{みな}んなあたしが悪いんでしよう」

「そう皮肉を云つちやいけない。どこが悪いか解らないから訊^き
んだ」

「だから皆みんななあたしが悪いんだって云ってるじゃありませんか」

「だが訳を云わないからさ」

「訳なんかないんです」

「訳がなくて、ただ悲しいのかい」

お延はなお泣き出した。叔母は苦にが々しい顔をした。

「何だねこの人は。駄々うツ子じやあるまいし。宅うちにいた時分、い

くら叔父さんに調戲われたって、そんなに泣いた事なんか、あり

やしないくせに。お嫁に行きたてで、少し旦那だんなから大事にされる

と、すぐそうなるから困るんだよ、若い人は」

お延は唇くちびるを噛かんで黙った。すべての原因が自分にあるものとの

み思い込んだ叔父はかえって気の毒そうな様子を見せた。

「そんなに叱ったってしょうがないよ。おれが少し冷評^{ひやか}し過ぎたのが悪かったんだ。——ねえお延そうだろう。きつとそうに違ない。よしよし叔父さんが泣かした代りに、今に好い物をやる」
 ようやく発作^{ほっさ}の去ったお延は、叔父からこんな風に小供扱いにされる自分をどう取り扱って、跋^{ばっ}の悪いこの場面に、平静な一転化を与えたものだろうと考えた。

六十九

ところへ何にも知らない継子^{つぎこ}が、語学^{げいこ}の稽古^{けいこ}から帰って来て、ひよつくり顔を出した。

「ただいま」

和解の心棒を失って困っていた三人は、突然それを見出した人のように喜こんだ。そうしてほとんど同時に挨拶を返した。

「お帰んなさい」

「遅かったのね。先刻から待ってたのよ」

「いや大変なお待兼ねだよ。継子さんはどうしたろう、どうしたろうって」

神経質な叔父の態度は、先刻の失敗を取り戻す意味を帯びているので、平生よりは一層快豁であつた。

「何でも継子さんに逢つて、是非話したい事があるんだそうだ」
 こんな余計な事まで云つて、自分の目的とは反対な影を、お延

の上に逆まに投げておきながら、彼はかえつて得意になっているさかき
らしかった。

しかし下女が襖越に手を突いて、風呂の沸いた事を知らせに來た時、彼は急に思いついたように立ち上った。

「まだ湯なんかに入っちゃいけない。少し庭に用が残ってるから。——お前達先へ入るなら入るがいい」

彼は氣に入りの植木屋を相手に、残りの秋の日を土の上に費やすべく、再び庭へ下り立った。

けれどもいったん背中を座敷の方へ向けた後でまたふり返った。「お延、湯に入つて晩飯でも食べておいで」

こう云つて二三間歩いたかと思うと彼はまた引き返して來た。

お延は頭がよく働くその世話しない様子を、いかにも彼の特色らしく感心して眺めた。

「お延が来たから晩に藤井でも呼んでやろうか」

職業が違つても同じ学校出だけに古くから知り合の藤井は、津田との関係上、今では以前よりよほど叔父に縁の近い人であつた。これも自分に対する好意からだと解釈しながら、お延は別に嬉しうれいと思う気にもなれなかつた。藤井一家と津田、二つのものが離れているよりも、はるか余計に、彼女は彼らより離れていた。

「しかし来るかな」といった叔父の顔は、まさにお延の腹の中を物語つていた。

「近頃みんなおれの事を隠居隠居つていうが、あの男の隠居主義

と来たら、遠い昔からの事で、とうていおれなどの及ぶところじやないんだからな。ねえ、お延、藤井の叔父さんは飯を食いに来いったら、来るかい」

「そりやどうかあたしにや解らないわ」

叔母は婉えんきよく曲に自己を表現した。

「おおかたいらつしやらないでしょう」

「うん、なかなかおいそれとやって来そうもないね。じや止よすか。

——だがまあ試しにちよつと掛けてみるがいい」

お延は笑い出した。

「掛けてみるつたつて、あすこにや電話なんかありやしないわ」

「じや仕方がない。使でもやるんだ」

手紙を書くのが面倒だったのか、時間が惜しかったのか、叔父はそう云ったなりさつさと庭口の方へ歩いて行つた。叔母も「じやあたしは御免蒙ごめんこうむつてお先へお湯に入ろう」と云いながら立ち上つた。

叔父の潔癖を知つて、みんなが遠慮するのに、自分だけは平気で、こんな場合に、叔父の言葉通り断行して顧かえりみない叔母の態度は、お延にとつて羨うらやましいものであつた。また忌いましいものであつた。女らしくない厭いやなものであると同時に、男らしい好いものであつた。ああできたらしさぞ好かうという感じと、いくら年をとつてもああはやりたくないという感じが、彼女の心にいつもの通り交錯こうさくした。

立って行く叔母の後うしろすがた姿を彼女がぼんやり目送もくそうしていると、
一人残った継子が突然誘った。

「あたしのお部屋へ来なくって」

二人は火鉢ひばちや茶器で取り散らされた座敷をそのままにして外へ
出た。

七十

継子の居間はとりも直さず津田に行く前のお延の居間であつた。
そこに机を並べて二人いた昔の心持が、まだ壁にも天てんじよう井いにも
残っていた。硝子戸ガラスどを箦はめた小さい棚たなの上に行儀よく置かれた木

彫の人形もそのままであつた。薔薇ばらの花を刺繡ぬいにした籃入かごいりのピ
 ンクツシヨンもそのままであつた。二人してお対つに三越から買つ
 て来た唐草からくさ模様の染付そめつけの一輪挿いちりんざしもそのままであつた。

四方を見廻したお延は、従妹いとこと共に暮した処女時代の句くわいを至る
 所に嗅かいだ。甘い空想に充みちたその句が津田という対象を得てつ
 いに実現された時、忽然こつぜん鮮あざやかなほのおに変化した自己の感情の前
 に扑舞べんぶしたのは彼女であつた。眼に見えないでも、瓦斯ガスがあつた
 から、ぱつと火が点ついたのだと考えたのは彼女であつた。空想と
 現実の間には何らの差違を置く必要がないと論断したのは彼女で
 あつた。顧かえりみるとその時からもう半年はんとし以上経過していた。いつ
 か空想はついに空想にとどまるらしく見え出して来た。どこまで

行つても現実化されないものらしく思われた。あるいは極めて現実化され悪いものらしくなつて来た。お延の胸の中には微かな溜息さえ宿つた。

「昔は淡い夢のように、しだいしだいに確実な自分から遠ざかつて行くのではなからうか」

彼女はこういう觀念の眼で、自分の前に坐つてゐる従妹を見た。多分は自分と同じ徑路を踏んで行かなければならない、またひとつとしたら自分よりもつと予期に外れた未来に突き当らなければならぬこの処女の運命は、叔父の手にある諾否の賽が、畳の上に転がり次第、今明日中にでも、永久に片づけられてしまうのであつた。

お延は微笑した。

「継子さん、今日はあたしがお神籤みくじを引いて上げましょうか」

「なんで？」

「何でもないので。ただよ」

「だってただじやつまらないわ。何かきめなくっちゃ」

「そう。じゃきめましょう。何がいいでしょうね」

「何がいいか、そりやあたしにや解らないわ。あなたがきめて下さらなくっちゃ」

継子は容易に結婚問題を口へ出さなかった。お延の方からむやみに云い出されるのも苦痛らしかった。けれども間接にどこかでそこに触れて貰もらいたい様子がありありと見えた。お延は従妹いとこを喜よろ

こばせてやりたかった。と云つて、後で自分の迷惑になるような責任を持つのは厭いやであつた。

「じゃあたしが引くから、あなた自分でおきめなさい、ね。何でも今あなたのお腹の中で、一番知りたいと思つてる事があるでしょう。それにするのよ、あなたの方で、自分勝手に。よくつて」

お延は例の通り継子の机の上に乗っている彼ら夫婦の贈物を取ろうとした。すると継子が急にその手を抑えた。

「厭よ」

お延は手を引込めなかつた。

「何が厭なの。いいからちよいとお貸しなさいよ。あなたの嬉しがるのを出して上げるから」

神籤みくじに何の執着もなかったお延は、突然こうして継子たわむと戯れた

くなつた。それは結婚以前の処女らしい自分を、彼女に憶おもい起さ

せる良い媒なかだち介であつた。弱いものの虚きよを衝つくために用いられる

腕の力が、彼女を男らしく活かつぱつ潑にした。抑えられた手を跳はね返

した彼女は、もう最初の目的を忘れていた。ただ神籤箱みくじばこを継子

の机の上から奪い取りたかつた。もしくはそれを言い前に、ただ

継子と争いたかつた。二人は争つた。同時に女性の本能から来る

わざとらしい声はばかを憚はばりなく出して、遊技ゆうぎ的な戦いくさいに興を添えた。

二人はついに硯すずりばこ箱の前に飾つてある大事な一輪いちりん挿さしを引ひつ繰く

り返かえした。紫檀したんの台からころと転がり出したその花瓶かびんは、中

にある水を所ところ嫌きらわず打ち空あけながら畳の上に落ちた。二人は

ようやく手を引いた。そうして自然の位置から不意に放り出され
た可愛らしい花瓶を、同じように黙って眺めた。それから改めて
顔を見合わせるや否や、急に抵抗する事のできない衝動を受けた人
のように、一度に笑い出した。

七十一

偶然の出来事がお延をなお小供らしくした。津田の前でかつて
感じた事のない自由が瞬間に復活した。彼女は全く現在の自分を
忘れた。

「継子さん早くぞうきん雑巾を取っていらつしやい」

「厭よ。あなたが零こぼしたんだから、あなた取っていらつしやい」

二人はわざと譲り合つた。わざと押問答をした。

「じゃジャン拳けんよ」と云い出したお延は、織ほそい手を握つて勢よく

継子の前に出した。継子はすぐ応じた。宝石の光る指が二人の間にちらちらした。二人はそのたんびに笑つた。

「狡猾ずるいわ」

「あなたこそ狡猾いわ」

しまいにお延が負けた時には零こぼれた水がもう机掛と畳の目の中へ綺麗きれに吸い込まれていた。彼女は落ちつき払たもとつて袂たもとから出したハンケチで、濡ぬれた所を上から抑おさえつけた。

「雑巾なんか要いりやしない。こうしておけば、それでたくさんよ。

水はもう引いちまったんだから」

彼女は転がった花瓶はなびんを元の位置に直して、くだ擡けかかった花を鄭て

寧いねいにその中へ挿さし込んだ。そうして今までの頓とんきよう興きようをまるで

忘れた人のように澄まし返った。それがまたたまらなくおかしいと見えて、継子はいつまでも一人で笑っていた。

発作ほつさくが静まった時、継子は帯の間に隠した帙ちつ入いりの神籤みくじを取り

出して、傍そばにある本箱の抽斗ひきだしへしまい易かえた。しかもその上か

らびちんと錠じようを下おろして、わざとお延の方を見た。

けれども継子にとっていつまでも続く事のできるらしいこの無意味な遊技的感興は、そう長くお延を支配する訳に行かなかった。ひとしきり我を忘れた彼女は、従妹いとこより早く醒さめてしまった。

「継子さんはいつでも気楽で好いわね」

彼女はこう云つて継子を見返した。当り障りあたさわのない彼女の言葉

はとても継子に通じなかった。

「じゃ延子さんは気楽でないの」

自分だつて気楽な癖にと云わんばかりの語氣のうちには、誰か
らでも、世間見ずの御嬢さん扱いにされる兼かねての不平も交つてい
た。

「あなたとあたしといたどこが違うんでしょう」

二人は年齢としが違つた。性質も違つた。しかし気兼苦勞という点
にかけて二人のどこにどんな違があるか、それは継子のまだ考え
た事のない問題であつた。

「じゃ延子さんどんな心配があるの。少し話してちょうだいな」

「心配なんかないわ」

「そら御覧なさい。あなただつてやつぱり気楽じゃないの」

「そりや気楽は気楽よ。だけどあなたの気楽さは少し訳が違うのよ」

「どうしてでしょう」

お延は説明する訳に行かなかつた。また説明する気になれなかつた。

「今に解るわ」

「だけど延子さんとあたしとは三つ違よ、たつた」

継子は結婚前と結婚後の差違をまるで勘かんじょう定ていに入れていなか

つた。

「ただ年齢ばかりじやないのよ。境遇の変化よ。娘が人の奥さんになるとか、奥さんがまた旦那様を亡くなして、未亡人になるとか」

継子は少し怪訝な顔をしてお延を見た。

「延子さんは宅にいた時と、由雄さんの所へ行つてからと、どつちが気楽なの」

「そりや……」

お延は口籠った。継子は彼女に返答を拵える余地を与えなかった。

「今の方が気楽なんでしょう。それ御覧なさい」

お延は仕方なしに答えた。

「そうばかりにも行かないわ。これで」

「だってあなたが御自分で望んでいらした方じゃないの、津田さんは」

「ええ、だからあたし幸福よ」

「幸福でも気楽じゃないの」

「気楽な事も気楽よ」

「じゃ気楽は気楽だけれども、心配があるの」

「そう継子さんのように押しつめて来ちや敵かなわないわね」

「押しつめる気じゃないけれども、解らないから、ついそうなるのよ」

七十二

だんだん勾配こうばいの急になつて来た会話は、いつの間にか継子の結婚問題に滑りすべ込んで行つた。なるべくそれを避けたかつたお延には、今までの行きがかり上、またそれを避ける事のできない義理があつた。経験に乏しい処女の期待するような予言はともかくも、男女なんによ關係に一日いちじつの長ある年上の女として、相当の注意を与えてやりたい親切もないではなかつた。彼女は差し障りさわのない際きわどい筋の上を婉曲えんきよくに渡つて歩いた。

「そりや駄目だめよ。津田の時は自分の事だから、自分によく解つた

んだけれども、他の事になるとまるで勝手が違つて、ちつとも解らなくなるのよ」

「そんなに遠慮しないだつてよかないの」

「遠慮じゃないのよ」

「じゃ冷淡なの」

お延は答える前にしばらく間をおいた。

「継子さん、あなた知つてて。女の眼は自分に一番縁故の近いものに出会つた時、始めてよく働らく事ができるのだという事を。

眼が一秒で十年以上の手柄てがらをするのは、その時に限るのよ。しかもそんな場合は誰だつて生涯しょうがいにそうたんとありやしないわ。

ことによると生涯に一回いっぺんも来ないですんでしまうかも知らない

わ。だからあたしなんかの眼はまあ盲目^{めくら}同然よ。少なくとも平生は」

「だって延子さんはそういう明るい眼をちゃんと持っていていらつしやるんじゃないの。そんならなぜそれをあたしの場合に使って下さらなかったの」

「使わないんじゃない、使えないのよ」

「だって岡目^{おかめはちもく}八目^{はちもく}って云うじやありませんか。傍^{はた}にいるあなたには、あたしより余計公平に分るはずだわ」

「じゃ継子さんは岡目八目で生涯の運命をきめてしまう気なの」「そうじやないけれども、参考にやなるでしょう。ことに延子さんを信用しているあたしには」

お延はまたしばらく黙っていた。それから少し前よりは改^{あらた}まった態度で口を利^きき出した。

「継子さん、あたし今あなたにお話ししたでしょう、あたしは幸福だつて」

「ええ」

「なぜあたしが幸福だかあなた知つてて」

お延はそこで句切^{くぎり}をおいた。そうして継子の何かいう前に、すぐ後を継^つぎ足^たした。

「あたしが幸福なのは、ほかに何にも意味はないのよ。ただ自分の眼で自分の夫を扱^{えら}ぶ事ができたからよ。岡目八目でお嫁に行かなかったからよ。解^とつて」

継子は心細そうな顔をした。

「じゃあたしのようなものは、とても幸福になる望はないのね」
お延は何とか云わなければならなかった。しかしすぐは何とも云えなかった。しまいに突然興奮したらしい急な調子が思わず彼女の口から迸ほとばしり出した。

「あるのよ、あるのよ。ただ愛するのよ、そうして愛させるのよ。そうさえすれば幸福になる見込はいくらでもあるのよ」

こう云ったお延の頭の中には、自分の相手としての津田ばかりが鮮明に動いた。彼女は継子に話しかけながら、ほとんど三好みよしの影さえ思い浮べなかった。幸いそれを自分のためとのみ解釈した継子は、真まともにお延の調子を受けるほど感激しなかった。

「誰を」と云った彼女は少し呆れたようにお延の顔を見た。「昨^{うべ}夕お目にかかったあの方^{かた}の事？」

「誰でも構わないのよ。ただ自分でこうと思い込んだ人を愛するのよ。そうして是非その人に自分を愛させるのよ」

平生^{つづ}包み蔵^{かく}しているお延の利かない氣性^{きしょう}が、しだいに鋒^{ほう}鉞^{ぼう}を露^{あら}わして来た。おとなしい継子はそのたびに少しずつ^{あと}後^{さが}へ退つた。しまいに近寄りにくい二人の間の距離を悟った時、彼女は微^{かす}かな溜息^{ためいき}さえ吐^ついた。するとお延が忽然^{こつぜん}また調子を張り上げた。

「あなたあたしの云う事を疑^{うたぐ}っていらつしやるの。本当よ。あたし嘘^{うそ}なんか吐^ついちやいないわ。本当よ。本当にあたし幸福なのよ。

解ったでしよう」

こう云つて絶対に継子を首肯うけがさせた彼女は、後からまた独り言ひとごとのように付け足した。

「誰だつてそうよ。たとい今その人が幸福でないにしたところで、その人の料簡りようけん一つで、未来は幸福になれるのよ。きつとなれるのよ。きつとなつて見せるのよ。ねえ継子さん、そうでしょう」

お延の腹の中を知らない継子は、この予言をただ漠然ばくぜんと自分の身の上に応用して考えなければならなかった。しかしいくら考えてもその意味はほとんど解らなかつた。

その時廊下伝いに聞こえた忙がしい足音の主ががらりと室の入口を開けた。そうして学校から帰った百合子が、遠慮なくつかつか入って来た。彼女は重そうに肩から釣るした袋を取って、自分の机の上に置きながら、ただ一口「ただいま」と云って姉に挨拶した。

彼女の机を据えた場所は、ちょうどもとお延の坐っていた右手の隅であった。お延が津田へ片づくや否や、すぐその後へ入る事のできた彼女は、従姉のいなくなったのを、自分にとって大変な好都合のように喜こんだ。お延はそれを知ってるので、わざと言葉をかけた。

「百合子さん、あたしまたお邪魔に上りましたよ。よくって」

百合子は「よくいらつしやいました」とも云わなかつた。机の角へ右の足を載せて、少し穴の開きあそうになつた黒い靴足袋くつたびの親指の先を、手で撫なでていたが、足を畳の上へおろすと共に答えた。

「好いわ、来ても。追い出されたんでなければ」

「まあひどい事」と云つて笑つたお延は、少し間まをおいてから、また彼女を相手にした。

「百合子さん、もしあたしが津田を追い出されたら、少しは可かわい哀相そうだと思つて下さるでしょう」

「ええ、そりや可哀相だと思つて上げてもいいわ」

「そんなら、その時はまたこのお部屋へおいて下すつて」

「そうね」

百合子は少し考える様子をした。

「いいわ、おいて上げても。お姉さまがお嫁に行つた後なら」

「いえ継子さんがお嫁にいらつしやる前よ」

「前に追い出されるの？ そいつは少し——まあ我慢してなるべく追い出されないようにしたらいいでしょう、こつちの都合もある事だから」

こう云つた百合子は年上の二人と共に声を揃^{そろ}えて笑つた。そうして袴^{はかま}も脱^はがずに、火鉢^{ひばち}の傍^{そば}へ来てその間に坐^{すわ}りながら、下女の持つてきた木皿を受取つて、すぐその中にある餅菓子^{もちがし}を食べ出した。

「今頃お八ツ？ このお皿を見ると思い出すのね」

お延は自分が百合子ぐらいであつた当時を回想した。学校から帰ると、待ちかねて各自めいめいの前に置かれる木皿へ手を出したその頃の様子がありありと目に浮かんだ。旨うまそうに食べる妹の顔を微笑して見ていた継子も同じ昔を思い出すらしかった。

「延子さんあなた今でもお八ツ召しやがつて」

「食べたり食べなかつたりよ。わざわざ買うのは億劫おっくうだし、そうかつて宅うちに何かあつても、昔むかしのよう旨おいしくないのね、もう」

「運動が足りないからでしょう」

二人が話しているうちに、百合子は綺麗きれいに木皿を空からにした。そうして木に竹を接ついだような調子で、二人の間に割り込んで来た。

「本当よ、お姉さまはもうじきお嫁に行くのよ」

「そう、どこへいらつしやるの」

「どこだか知らないけれども行く事は行くのよ」

「じゃ何という方の所へいらつしやるの」

「何という名だか知らないけれども、行くのよ」

お延は根気よく三度目の問を掛けた。

「それはどんな方なの」

百合子は平気で答えた。

「おおかた由雄さんみたいな方なんでしょう。お姉さまは由雄さんが大好きなんだから。何でも延子さんの云う通りになって、大変好きな人だって、そう云っててよ」

薄赤くなつた継子は急に妹の方へかかつて行つた。百合子は頓いもと
んきよう興んな声を出してすぐそこを飛び退いた。

「おお大変大変」

入口の所でちよつと立ちどまつてこう云つた彼女は、お延と継子
 をそこへ残したまま、一人で室を逃へげ出して行つた。

七十四

お延が下女から食事の催促を受けて、二返目に継子と共に席を
 立つたのは、それから間まもなくであつた。

一家のものは明るい室に晴々はればれした顔を揃そろえた。先刻さつき何かに拗すね

て縁の下へ這入ったなり容易に出て来なかったという一さえ、機嫌よく叔父と話をしていた。

「一さんは犬みたいよ」と百合子がわざわざ知らせに来た時、お延はこの小さい従妹から、彼がぱくりと口を開いて上から鼻の先へ出された餅菓子に食いついたという話を聞いたのであつた。

お延は微笑しながらいわゆる犬みたいな男の子の談話に耳を傾けた。

「お父さま 彗星が出るとか何か悪い事があるんでしよう」

「うん昔の人はそう思っていた。しかし今は学問が開けたから、そんな事を考えるものは、もう一人もなくなっちゃった」

「西洋では」

西洋にも同じ迷信が古代に行われたものかどうか、叔父は知らないらしかった。

「西洋？　西洋にや昔からない」

「でもシーザーの死ぬ前に彗星が出たっていうじゃないの」

「うんシーザーの殺される前か」と云った彼は、ごまかすよりほかに仕方がないらしかった。

「ありや羅馬ローマの時代だからな。ただの西洋とは訳が違ふよ」
はじめ

一はそれで納得なっとくして黙った。しかしすぐ第二の質問をかけた。前よりは一層奇抜なその質問は立派に三段論法の形式を具えていた。井戸を掘って水が出る以上、地面の下は水でなければならぬ、地面の下が水である以上、地面は落おっこちなければならない。

しかるに地面はなぜ落こちないか。これが彼の要旨ようしであつた。それに対する叔父の答弁がまたすこぶるしどろもどろなので、傍はたのものもみんなおかしがつた。

「そりやお前落ちないさ」

「だって下が水なら落ちる訳じゃないの」

「そう旨うまくは行かないよ」

女おんな連なれん

が一度に笑い出すと、一はたちまち第三の問題に飛び移つた。

「お父さま、僕この宅うちが軍艦だと好いな。お父さまは？」

「お父さまは軍艦よりただの宅の方が好いね」

「だって地震の時宅なら潰つぶれるじゃないの」

「ははあ軍艦ならいくら地震があつても潰れないか。なるほどこいつは気がつかなかつた。ふうん、なるほど」

本式に感服している叔父の顔を、お延は微笑しながら眺めた。

先刻藤井を晩餐に招待するといった彼は、もうその事を念頭においていないらしかった。叔母も忘れたように澄ましていた。お延はつい一に訊いて見たくなつた。

「一さん藤井の真事さんと同級なんでしょう」

「ああ」と云つた一は、すぐ真事についてお延の好奇心を満足させた。彼の話は、とうてい子供でなくては云えない、観察だの、批評だの、事実だのに富んでいた。食卓は一時彼の力で賑わつた。みんなを笑わせた真事の逸話の中に、下のようなのがあつた。

ある時学校の歸りに、彼は一といつしよに大きな深い穴を覗き
 込んだ。土木工事のために深く掘り返されて、往來の真中に出来
 上ったその穴の上には、一本の杉丸太が掛け渡してあつた。一は
 真事に、その丸太の上を渡つたら百円やると云つた。すると無鉄
 砲な真事は、背はいのう囊しよを背負つて、彪むくいぬ犬いぬの皮で拵こしらえたといわれる
 例の靴を穿はいたまま、「きつとくれる？」と云いながら、ほとん
 ど平たい幅をもっていない、つるつる滑すべりそうな材木を渡り始め
 た。最初は今に落ちるだろうと思つて見ていた一は、相手が一歩
 一歩と、危こわないながらゆつくりゆつくり自分に近づいて来るのを
 見て、急に怖こわくなつた。彼は深い穴の真上にある友達をそこへ置お
 き去ざりにして、どんどん逃げだした。真事はまた始しじゆう終足元に気

を取られなければならないので、丸太を渡り切ってしまうまでは、一がどこへ行つたか全く知らずにいた。ようやく冒険を仕^し遂^とげて、約束通り百円貰おうと思つて始めて眼を上げると、相手はいつの間にか逃げてしまつて、一の影も形もまるで見えなかつたというのである。

「一の方が少し小^こ慥^り巧^{こう}のようだな」と叔父が評した。

「藤井さんは近頃あんまり遊びに来ないようね」と叔母が云つた。

七十五

小供が一つ学校の同級にいる事のほかに、お延の関係から近頃

岡本と藤井の間に起つた交際には多少の特色があつた。否いやでも顔を合せなければならぬ祝儀しゅうぎ不祝儀ぶしゅうぎの席を未来に控えている彼らは、事情の許す限り、双方から接近しておく便宜を、平生から認めない訳に行かなかつた。ことに女の利害を代表する岡本の方は、藤井よりも余計この必要を認めなければならない地位に立つていた。その上岡本の叔父には普通の成功者に附随する一種の如才じよさいなさがあつた。持つて生れた楽天的な広い横断おうだんめん面もあつた。神経質な彼はまた誤解を恐れた。ことに生計くらしむき向に不自由のないものが、比較的貧しい階級から受けがちな尊大不遜ふそんの誤解を恐れた。多年の多忙と勉強のために損なわれた健康を回復するために、当分閑地についた昨今の彼には、時間の余裕も充分あつた。

その時間の空虚なところを、自分の趣味にかな適う模細工モザイクで毎日埋めて行く彼は、今まで自分と全く縁故のないものとして、平気で通り過ぎた人や物にだんだん接近して見ようという意志ももっていた。

これらの原因がこんがら困絡がつて、叔父は時々藤井の宅うちへ自分の方から出かけて行く事があつた。排外的に見える藤井は、律義りちぎに叔父の訪問を返そうとしなかつたが、そうかと云つて彼を厭いやがる様子も見せなかつた。彼らはむしろ快よく談じた。そこ底まで打ち解けた話ではできないにしたところで、ただ相互の世界を交換するだけでも、多少の興味にはなつた。その世界はまた妙に食い違つていた。一方から見るといかにも迂濶うかつなものが、他方から眺めると

いかにも高尚であつたり、片側で卑俗と解釈しなければならないものを、向うでは是非とも實際的に考えたがつたりするところに、思わざる発見がひよいひよい出て来た。

「つまり批評家つて云うんだらうね、ああ云う人の事を。しかしあれじゃ仕事はできない」

お延は批評家という意味をよく理解しなかった。實際の役に立たないから、口先で偉そうな事を云つて他をひとごまかすんだらうと思つた。「仕事ができなくつて、ただ理窟りくつを弄もてあそんでいる人、そういう人に世間はどんな用があるだらう。そういう人が物質上相当の報酬を得ないで困るのは当然ではないか」。これ以上進む事のできなかつた彼女は微笑しながら訊きいた。

「近頃藤井さんへいらしつて」

「うんこないだもちよつと散歩の歸りに寄つたよ。草臥くたびれた時、

休むにはちょうど都合の好い所にある宅だからね、あすこは」

「また何か面白いお話してもあつて」

「相変わらず妙な事を考へてゐるね、あの男は。こないだは、男が女を引張り、女がまた男を引張るつて話をさかんにやつて来た」

「あら厭いやだ」

「馬鹿らしい、好い年をして」

お延と叔母はこもこも呆あきれたような言葉を出す間に、継子だけ

はよそを向いた。

「いや妙な事があるんだよ。大將なかなか調べているから感心だ。

大将のいうところによると、こうなんだ。どこの宅うちでも、男の子は女親を慕い、女の子はまた反対に男親を慕うのが当り前だというんだが、なるほどそう云えば、そうだね」

親身しんみの叔母よりも義理の叔父を好いていたお延は少し真面目まじめになつた。

「それでどうしたの」

「それでこうなんだ。男と女は始し終しゅう引張り合わないと、完全な人間になれないんだ。つまり自分に不足なところがどこかにあつて、一人じゃそれをどうしても充みたす訳に行かないんだ」

お延の興味は急に退ひきかけた。叔父の云う事は、自分の疾とうに知っている事実には過ぎなかった。

「昔から陰陽いんようわごう和合わごうっていうじゃありませんか」

「ところが陰陽和合が必然でありながら、その反対の陰陽不和がまた必然なんだから面白いじゃないか」

「どうして」

「いいかい。男と女が引張り合うのは、互に違つたところがあるからだろう。今云つた通り」

「ええ」

「じゃその違つたところは、つまり自分じゃない訳だろう。自分とは別物だろう」

「ええ」

「それ御覧。自分と別物なら、どうしたっていっしょになれっこ

ないじゃないか。いつまで経ったって、離れているよりほかに仕方がないじゃないか」

叔父はお延を征服した人のようにならからと笑った。お延は負けなかった。

「だけどそりや理窟りくつよ」

「無論理窟さ。どこへ出ても立派に通る理窟さ」

「駄目よ、そんな理窟は。何だか変ですよ。ちょうど藤井の叔父さんがふり廻しそうな屁理窟へりくつよ」

お延は叔父をやり込める事ができなかった。けれども叔父のいう通りを信ずる気にはなれなかった。またどうあっても信ずるのは厭いやであつた。

七十六

叔父は面白半分まだいろいろな事を云った。

男が女を得て成じょうぶつ仏する通りに、女も男を得て成仏する。し

かしそれは結婚前の善男善女に限られた真理である。一ひとたび度夫婦

関係が成立するや否や、真理は急に寝返りを打って、今までとは

正反対の事実を我々の眼の前に突きつける。すなわち男は女から

離れなければ成仏できなくなる。女も男から離れなければ成仏し

悪にくくなる。今までの牽引けんいん力がたちまち反撥はんぱつ性せいに変化する。

そうして、昔から云い習わして来た通り、男はやっぱり男同志、

女はどうしても女同志という諺を永久に認めたくなる。つまり人間が陰陽和合の実を挙げるのは、やがて来るべき陰陽不和の理を悟るために過ぎない。……

叔父の言葉のどこまでが藤井の受売で、どこからが自分の考えなのか、またその考えのどこまでが真面目で、どこからが笑談なのか、お延にはよく分らなかった。筆を持つ術を知らない叔父は恐ろしく口の達者な人であった。ちよつとした心棒があると、その上に幾枚でも手製の着物を着せる事のできる人であった。俗にいう警句という種類のものが、いくらでも彼の口から出た。お延が反対すればするほど、膏が乗つてとめどなく出て来た。お延はどうとう好い加減にして切り上げなければならなかった。

「ずいぶんのべつね、叔父さんも」

「口じやとても敵かないっこないからお止よしよ。こつちで何かいうと、なお意地になるんだから」

「ええ、わざわざ陰陽不和を醸かもすように仕向けるのね」

お延が叔母とこんな批評を取り換わせている間、叔父はにこにこして二人を眺めていたが、やがて会話の途切とぎれるのを待つて、徐ろおもむに宣告を下した。

「とうとう降参しましたかな。降参したなら、降参したで宜よろしい。敗まけたものを追ついきゆう窮きゆうはしないから。——そこへ行くと男にはまた弱いものを憐あわれむという美点があるんだからな、こう見えても」
彼はさも勝利者らしい顔を粧よそおつて立ち上がった。障しょうじ子を開け

て室の外へ出ると、もったいぶった足音が書斎の方に向いてだんだん遠ざかって行つた。しばらくして戻つて来た時、彼は片手に小型の薄っぺらな書物を四五冊持っていた。

「おいお延好いものを持って来た。お前明日にでも病院へ行くなら、これを由雄さんの所へ持つてツておやり」

「何よ」

お延はすぐ書物を受け取つて表紙を見た。英語の標題が、外国語に熟しない彼女の眼を少し悩ませた。彼女は拾い読ひろよみにぼつぽつ読み下した。ブック・オフ・ジョークス。イングリッシ・ウィット・エンド・ヒュモア。……

「へええ」

「みんな滑稽こっけいなもんだ。洒落しやれだとか、謎なぞだとかね。寝ていて読むにはちようど手頃で好いよ、肩が凝こらなくつてね」

「なるほど叔父さん向むきのものね」

「叔父さん向でもこのくらいな程度なら差支さしつかえあるまい。いくら由雄さんが嚴格だつて、まさか怒りやしまい」

「怒るなんて、……」

「まあいいや、これも陰陽和合のためだ。試しに持ってツてみるさ」

お延が礼を云つて書物を膝ひざの上に置くと、叔父はまた片々かたかたの手に持った小さい紙片かみぎれを彼女の前に出した。

「これは先刻さつきお前を泣かした賠償ばいしょうきん金だ。約束だからついでに

持っておいで」

お延は叔父の手から紙片を受取らない先に、その何であるかを知った。叔父はことさらにそれをふり廻した。

「お延、これは陰陽不和になった時、一番よく利きく薬だよ。たいいの場合には一服吞むとすぐ平癒へいゆする妙薬だ」

お延は立っている叔父を見上げながら、弱い調子で抵抗した。

「陰陽不和じゃないのよ。あたし達のは本当の和合なのよ」

「和合ならなお結構だ。和合の時に吞めば、精神がますます健全になる。そうして身体からだはいよいよ強壯になる。どっちへ転んでも間違のない妙薬だよ」

叔父の手から小切手を受け取って、じっとそれを見つめていた

お延の眼に涙がいつぱい溜^{たま}つた。

七十七

お延は叔父の送らせるといふ俤^{くるま}を断つた。しかし停留所まで自身で送つてやるという彼の好意を断りかねた。二人はついに連れ立って長い坂を河^{かわ}縁^{べり}の方へ下りて行つた。

「叔父さんの病気には運動が一番いいんだからね。——なに歩くのは自分の勝手さ」

肥^いつていて呼^{いき}息が短いので、坂を上^{のぼ}るときおかしいほど苦しがる彼は、まるで帰りを忘れたような事を云つた。

二人は途々夜の更ふけた昨ゆう夕べの話をした。仮うた寝たをして突うちツ伏ふしていたお時の様子などがお延うちの口に上った。もと叔父うちの家うちにいたという縁故で、新夫婦ふたり二人ぎりの家庭に住み込んだこの下女うしろに対して、叔父は幾分か周旋者の責任を感じなければならなかった。

「ありや叔母さんがよく知ってるが、正直で好い女なんだよ。留る守すなんぞさせるには持つて来いだって受合うったくらいだからね。だが独ひとりで寝ちまひとちや困るね、不用心で。もっともまだ年とし齒はが年齒としだからな。眠い事も眠いだろうよ」

いくら若くつても、自分ならそんな場合にぐっすり寝込まれる訳のものでないという事をよく承知していたお延は、叔父おじのこの想おもいやりをただ笑いながら聴いていた。彼女に云わせれば、こう

して早く帰るのも、あんなに遅くなつた昨日の結果を、今度は繰^くり返^{かえ}させたくないという主意からであつた。

彼女は急いでそこへ来た電車に乗つた。そうして車の中から叔父に向つて「さよなら」といった。叔父は「さよなら、由雄さんによろしく」といった。二人が辛^{から}うじて別れの挨拶^{あいさつ}を交換するや否や、一種の音と動揺がすぐ彼女を支配し始めた。

車内のお延は別に纏^{まと}まつた事を考えなかつた。入れ替り立ち替り彼女の眼の前に浮ぶ、昨日^{きのう}からの関係者の顔や姿は、自分の乗っている電車のように早く廻転するだけであつた。しかし彼女はそうして目眩^{めまぐる}しい影像^{イメジ}を一貫している或物を心のうちに認めた。もしくはその或物が根^{こん}調^{ちよう}で、そうした断片的な影像が眼の前

に飛び廻るのだとも云えた。彼女はその或物を拈^{ねん}定^{てい}しなければならなかった。しかし彼女の努力は容易に成^{せい}効^{こう}をもつて酬^くいられなかった。団子を認めた彼女は、ついに個々を貫^くいている串を見定める事のできないうちに電車を下りてしまった。

玄関の格子^{こうし}を開ける音と共に、台所の方から駈^かけ出して来たお時は、彼女の予期通り「お帰り」と云つて、鄭^{てい}寧^{ねい}な頭を畳の上に押し付けた。お延は昨日に違つた下女の判^{はっ}切^{きり}した態度を、さも自分の手柄^{てがら}でもあるように感じた。

「今日は早かつたでしょう」

下女はそれほど早いとも思っていないらしかった。得意なお延の顔を見て、仕方なさそうに、「へえ」と答えたので、お延はま

た讓歩した。

「もつと早く帰ろうと思つたんだけれどもね、つい日が短かいもんだから」

自分の脱ぎ棄てた着物をお時に畳ませる時、お延は彼女に訊いた。

「あたしのいない留守に何にも用はなかつたろうね」

お時は「いいえ」と答えた。お延は念のためもう一遍問を改めた。

「誰も来やしなかつたろうね」

するとお時が急に忘れたものを思い出したように調子高な返事をした。

「あ、いらつしやいました。あの小林さんとおつしやる方が」

夫の知人としての小林の名はお延の耳に始めてではなかった。

彼女には二三度その人と口を利^きいた記憶があつた。しかし彼女はあまり彼を好いていなかった。彼が夫からはなはだ軽く見られていゝという事もよく呑み込んでいた。

「何しに來たんだろう」

こんなぞんざいな言葉さえ、つい口先へ出そうになつた彼女は、それでも尋常な調子で、お時に訊き返した。

「何か御用でもおありだつたの」

「ええあの外^{がい}套^{とう}を取りにいらつしやいました」

夫から何にも聞かされていゝないお延に、この言葉はまるで通じ

なかった。

「外套？ 誰の外套？」

周密なお延はいろいろな問をお時にかけて、小林の意味を知ろうとした。けれどもそれは全くの徒勞であつた。お延が訊きけば訊くほど、お時が答えれば答えるほど、二人は迷宮に入るだけであつた。しまいに自分達より小林の方が変だという事に氣のついた二人は、声を出して笑つた。津田の時々使うノンセンスと云う英語がお延の記憶に蘇よみが生えつた。「小林とノンセンス」こう結びつけて考えると、お延はたまらなくおかしくなつた。発作ほつぎのように込み上げてくる滑稽こっけい感に遠慮なく自己を託した彼女は、電車うちの中から持ち越して歸つて來た、氣がかりな宿題を、しばらく忘れ

ていた。

七十八

お延はその晩京都にいる自分の両親へ宛あてて手紙を書いた。一お昨日とといきのうも昨日も書きかけて止やめにしたその音信たよりを、今日は是非ぜひとも片づけてしまわなければならないと思い立った彼女の頭の中には、けっして両親の事ばかり働いているのではなかった。

彼女は落ちつけなかった。不安から逃のがれようとする彼女には注意を一つ所に集める必要があつた。先刻さつきからの疑問を解決したいという切な希望もあつた。要するに京都へ手紙を書けば、ざわぎ

わしがちな自分の心持を纏めて見る事ができそうに思えたのである。

筆を取り上げた彼女は、例の通り時候の挨拶から始めて、無沙汰の申し訳までを器械的に書き了つた後で、しばらく考えた。

京都へ何か書いてやる以上は、是非とも自分と津田との消息を的におかなければならなかった。それはどの親も新婚の娘から聞きたがる事項であつた。どの娘もまた生家の父母に知らせなくつてはすまない事項であつた。それを差し措いて里へ手紙をやる必要はほとんどあるまいとまで平生から信じていたお延は、筆を持つたまま、目下自分と津田との間柄は、はたしてどんなところにどういふ風に関係しているかを考えなければならなかった。彼

女はありのままその物を父母に報知する必要に逼られてはいなかった。けれどもある男に嫁いだ一個の妻として、それを見極めておく要求を痛切に感じた。彼女はじっと考え込んだ。筆はそこでとまったぎり動かなくなった。その動かなくなった筆の事さえ忘れて、彼女は考えなければならなかった。しかも知ろうとすればするほど、確としたところは手に掴めなかった。

手紙を書くまでの彼女は、ざわざわした散漫な不安に悩まされていた。手紙を書き始めた今の彼女は、ようやく一つ所に落ちついた。そうしてまた一つ所に落ちついた不安に悩まされ始めた。先刻電車の中で、ちらちら眼先につき出したいろいろの影像是、みんなこの一点に向って集注するのだという事を、前後両様の比

較から発見した彼女は、やつと自分を苦しめる不安の大根おおねに辿たどりついた。けれどもその大根の正体はどうしても分らなかった。勢い彼女は問題を未来に繰り越さなければならなかった。

「今日解決ができれば、明日解決するよりほかに仕方がない。
こんにち みょうにち

明日解決ができれば明日後日解決するよりほかに仕方がない。
みょうごにち

明後日解決ができれば……」

これが彼女の論法ロジックであつた。また希望であつた。最後の決心であつた。そうしてその決心を彼女はすでに継子の前で公言していたのである。

「誰でも構わない、自分のこうと思ひ込んだ人を飽くまで愛する事によつて、その人に飽くまで自分を愛させなければやまない」

彼女はここまで行く事を改めて心に誓った。ここまで行つて落ちつく事を自分の意志に命令した。

彼女の気分は少し軽^{かる}くなった。彼女は再び筆を動かした。なるべく父^ふ母^ぼの喜^こび^びそうな津田と自分の現況^{はばか}を憚^{はば}りなく書き連ねた。幸福^{ふく}そうに暮^くしている二人の趣^{おもむき}が、それからそれへと描^{びよう}出^しさ^{ゆつ}れた。感激^{かん}に充^みちた筆の穂先^ほがさらさらと心持よく紙の上を走るのが彼女には面白^{おもしろ}かった。長い手紙がただ一息に出来上^{あがり}った。その一息がどのくらいの時間に相当^{たいあ}しているかという事を、彼女はまるで知らなかつた。

しまいに筆を擱^おいた彼女は、もう一遍自分の書いたものを最初から読み直して見た。彼女の手を支配^{しはい}したと同じ気分が、彼女の

眼を支配しているので、彼女は訂正や添削てんさくの必要をどこにも認めなかった。日頃苦にして、使う時にはきつと言海げんかいを引いて見る、うろ覚えの字さえそのままで少しも気にかからなかった。てには違のために意味の通じなくなつたところを、二三力所ちよいちよいと取り繕つくろただけで、彼女は手紙を巻いた。そうして心の中でそれを受取る父母に断つた。

「この手紙に書いてある事は、どこからどこまで本当です。嘘うそや、気休きやすめや、誇張は、一字ありません。もしそれを疑う人があるなら、私はその人を憎にくみます、軽蔑けいべつします、唾つばきを吐きかけます。その人よりも私の方が真相を知っているからです。私は上うわ部の事実以上の真相をここに書いています。それは今私にだけ解つて

いる真相なのです。しかし未来では誰にでも解らなければなら
ない真相なのです。私はけっしてあなた方を欺あざむいてはおりません。
私があなた方を安心させるために、わざと欺あざむき騙の手紙を書いた
のだというものがあつたなら、その人は眼の明いた盲目めくらです。そ
の人こそ嘘吐うそつきです。どうぞこの手紙を上げる私を信用して下さい。
神様はすでに信用していらっしゃるのですから」

お延は封書を枕元へ置いて寝た。

七十九

始めて京都で津田に会った時の事が思い出された。久しぶりに

父^{ちちは}母^{はは}の顔を見に歸つたお延は、着いてから二三日^{にさんち}して、父に使
 を頼^{たの}まれた。一通^{いっとう}の封書と一^{いつ}帙^{しつ}の唐^{とう}本^{ほん}を持つて、彼女は五六
 町^{へだた}隔^はつた津田^{うぢ}の宅まで行かなければならなかつた。軽い神經痛に
 悩^{なや}まされて、寝たり起きたりぶらぶらしていた彼女の父は、病中
 の徒^{つれづれ}然^{なぐさ}を慰めるために折々津田の父から書物を借り受けるのだ
 という事を、お延はその時始めて彼の口から聞かされた。古いの
 を返して新らしいのを借りて来るのが彼女の用向であつた。彼女
 は津田の玄関に立つて案内を乞うた。玄関には大きな衝^つ立^{いた}が立
 ててあつた。白い紙の上に躍^{おど}つて見える変な字を、彼
 女が驚ろいて眺めていると、その衝立^{うしろ}の後から取次に現われたの
 は、下女でも書生でもなく、ちょうどその時彼女と同じように京

都の家へ来ていた由雄であつた。

二人は固よりそれまでに顔を合せた事がなかつた。お延の方ではただ噂で由雄を知っているだけであつた。近頃家へ歸つて来たとか、または歸つているとかいう話は、その朝始めて父から聞いたぐらいのものであつた。それも父に新らしく本を借りようという気が起つて、彼がそのための手紙を書いた。事のついでに過ぎなかつた。

由雄はその時お延から帙入の唐本を受取つて、なぜだか、明詩別裁という嚴めしい字で書いた標題を長らくの間見つめていた。その見つめている彼を、お延はまたいつまでも眺めていなければならなかつた。すると彼が急に顔を上げたので、お延が今

まで熱心に彼を見ていた事がすぐ発覚してしまった。しかし由雄の返事を待ち受ける位地に立たせられたお延から見れば、これもやむをえない所作しよさに違なかつた。顔を上げた由雄は、「父はあいにく今留守ですが」と云つた。お延はすぐ帰ろうとした。すると由雄がまた呼びとめて、自分の父宛あての手紙を、お延の見ている前で、断りも何にもせず、開封した。この平氣な挙動がまたお延の注意を惹ひいた。彼の遣口やりくちは不作法ぶさほうであつた。けれども果斷に違なかつた。彼女はどうしても彼を粗野がさつとか乱暴とかいう言葉で評する氣にならなかつた。

手紙を一目見た由雄は、お延を玄関先に待たせたまま、入用いりようの書物を探しに奥へ這入はいつた。しかし不幸にして父の借ろうとす

る漢籍は彼の眼のつく所になかった。十分ばかりしてまた出て来た彼は、お延を空しく引きとめておいた詫を述べた。指定の本はちよつと見つからないから、彼の父の帰り次第、こつちから届けるようにすると云った。お延は失礼だというので、それを断った。自分がまた明日にでも取りに来るからと約束して宅へ帰った。

するとその日の午後由雄が向うから望みの本をわざわざ持つて来てくれた。偶然にもお延がその取次に出た。二人はまた顔を見合せた。そうして今度はすぐ両方で両方を認め合つた。由雄の手に提げた書物は、今朝お延の返しに行ったものに比べると、約三倍の量があつた。彼はそれを更紗の風呂敷に包んで、あたかも鳥籠でもぶら下げているような具合にしてお延に示した。

彼は招ぜられるままに座敷へ上つてお延の父と話をした。お延から云えば、とても若い人には堪^たえられそうもない老人向の雑談を、別に迷惑そうな様子もなく、方角違の父と取り換わせた。彼は自分の持つて来た本については何事も知らなかった。お延の返しに行つた本についてはなお知らなかった。劃の多い四角な字の重なつてゐる書物は全く読めないのだと断つた。それでもこちらから借りに行つた呉梅村詩^{ごばいそんし}という四文字^{よもじ}を^{あて}的に、書棚をあつちこつちと探してくれたのであつた。父はあつく彼の好意を感謝した。

……

お延の眼にはその時の彼がちらちらした。その時の彼は今の彼^{べつにん}と別人ではなかつた。といつて、今の彼と同人でもなかつた。

平たく云えば、同じ人が變つたのであつた。最初無関心に見えた彼は、だんだん自分の方に牽ひきつけられるように變つて來た。いったん牽きつけられた彼は、またしだいに自分から離れるように變つて行くのではなからうか。彼女の疑はほとんど彼女の事實であつた。彼女はその疑を拭うたいぬぐ去るために、その事實を引ひツ繰くり返さなければならなかつた。

八十

強い意志がお延の身体全体からだに充みち渡つた。朝になつて眼を覺さました時の彼女には、怯懦きようだほど自分に縁の遠いものはなかつた。

寝起ねおきの悪過ぎた前の日の自分を忘れたように、彼女はすぐ飛び起きた。夜具を跳ね退はけて、床を離れる途端とたんに、彼女は自分で自分の腕の力を感じた。朝寒あささむの刺戟しげきと共に、締しまった筋肉が一度に彼女を緊縮させた。

彼女は自分の手で雨戸を手繰たぐった。戸外そとの模様はいつもよりまだよッぽど早かった。昨日きのうに引き換えて、今日は津田のいる時よりもかえって早く起きたという事が、なぜだか彼女には嬉うれしかった。怠なまけて寝過した昨日の償つくない、それも満足の一つであった。

彼女は自分で床を上げて座敷を掃はき出した後で鏡台に向った。そうして結ゆってから四日目になる髪を解といた。油で汚よごれた所へ二三度櫛くしを通して、癖がついて自由にならないのを、無理に廂ひさしに束

ね上げた。^あそれが済んでから始めて下女を起した。

食事のできるまでの時間を、下女と共に働らいた彼女は、膳に^{ぜん}着いた時、下女から「今日は大変お早うございましたね」と云われた。何にも知らないお時は、彼女の早起を驚ろいているらしかつた。また自分が主人より遅く起きたのをすまない事でもしたように考えているらしかつた。

「今日は旦那様^{だんなさま}のお見舞に行かなければならないからね」

「そんなにお早くいらつしやるんでございますか」

「ええ。^{きのう}昨日行かなかつたから今日は少し早く出かけましょう」

お延の言葉遣は平生より鄭寧^{ていねい}で片づいていた。そこに或落ちつきがあつた。そうしてその落ちつきを裏切る意気があつた。意

氣に伴なう果斷も遠くに見えた。彼女の中にある心の調子がおのずと態度にあらわれた。

それでも彼女はすぐ出かけようとはしなかった。襷たすきを外して盆

を持ったお時を相手に、しばらく岡本の話などをした。もと世話

になった覺おぼえのあるその家族は、お時にとつても、興味に充みちた題

目なので、二人は同じ事を繰り返すようにしてまで、よく彼らに

ついて語り合つた。ことに津田のいない時はそうであつた。とい

うのは、もし津田がいると、ある場合には、彼一人が除外物のけものにさ

れたような変な結果おちいに陥るからであつた。ふとした拍子からそん

な氣き下味まづい思いを一二度経験した後で、そこに氣をつけ出したお

延は、そのほかにまだ、富裕な自分の身内を自慢らしく吹ふい聴ちよう

したがる女と夫から解釈される不快を避けなければならぬ理由もあつたので、お時にもかねてその旨を言ひ含めておいたのである。

「御嬢さまはまだどこへもおきまりになりませんのでございますか」

「何だかそんな話もあるようだけれどもね、まだどうなるかよく解らない様子だよ」

「早く好い所へいらつしやるようになる、結構でございますがね」

「おおかたもうじきでしょう。叔父さんはあんな性急だから。それに継子さんはあたしと違って、ああいう器量好しだしね」

きりようよ

せつかち

お時は何か云おうとした。お延は下女のお世辞せじを受けるのが苦痛だったので、すぐ自分でその後あとをつけた。

「女はどうしても器量が好くないと損ね。いくら伶俐りこうでも、気が利きいていても、顔が悪いと男には嫌きらわれるだけね」

「そんな事はございせん」

お時が弁護するように強くこういつたので、お延はなお自分を主張したくなつた。

「本当よ。男はそんなもののよ」

「でも、それは一時の事で、年を取るとそうは参りますまい」

お延は答えなかつた。しかし彼女の自信はそんな弱いものではなかつた。

「本当にあたしのような不器量なものは、生れ変つてでも来なく
つちや仕方がない」

お時は呆れた顔をしてお延を見た。
あき

「奥様が不器量なら、わたくしなんか何といえбайいのでござい
ましょう」

お時の言葉はお世辞でもあり、事実でもあつた。両方の度合を
よく心得ていたお延は、それで満足して立ち上つた。

彼女が外出のため着物を着換えていると、戸外そとから誰か来たら
しい足音がして玄関の号鈴ベルが鳴つた。取次に出たお時に、「ちよ
つと奥さんに」という声が聞こえた。お延はその声の主を判断し
ようとして首を傾けた。

八十一

袖を口へ当ててくすくす笑いながら茶の間へ駈^かけ込んで来たお時は、容易に客の名を云わなかった。彼女はただおかしさを噛^かみ殺そうとして、お延の前で悶^{もだ}え苦しんだ。わずか「小林」という言葉を口へ出すのでさえよほど手間取った。

この不時の訪問者をどう取り扱っていいか、お延は解らなかった。厚い帯を締め^しかけているので、自分がすぐ玄関へ出る訳に行かなかつた。といつて、掛^{かけとり}取でも待たせておくように、いつまでも彼をそこに立たせるのも不作法であつた。姿^{すがた}見の前に立^たち

疎^{すく}んだ彼女は当惑^{まゆ}の眉を寄せた。仕方がないので、今出^でがけだから、ゆつくり会ってはいられないがとわざわざ断^{ことわ}らした後で、彼を座敷へ上げた。しかし会って見ると、満^{まん}更^{ざら}知らない顔でもないので、用だけ聴いてすぐ帰って貰^{もら}う事もできなかった。その上小林は斟^{しん}酌^{しゃく}だの遠慮^{えんりょ}だの知らない点にかけて、たいていの人に引^ひを取らないように、天から生^なみつけられた男であつた。お延^{のび}の時間が逼^{せま}っているのを承知^{せいち}の癖^{くせ}に、彼は相手さえ悪い顔をしなれば、いつまで坐り込んでいても差^さ支^しえないものと独^{ひと}りで合^が点^{てん}しているらしかった。

彼は津田の病気をよく知っていた。彼は自分が今度地位を得て朝鮮に行く事を話した。彼のいうところによれば、その地位は未

来に希望のある重要のものであった。彼はまた探偵に跟^つけられた話をした。それは津田といつしよに藤井から帰る晩の出来事だと云つて、驚ろいたお延の顔を面白そうに眺めた。彼は探偵に跟けられるのが自慢らしかった。おおかた社会主義者として目^め指^ざされているのだらうという説明までして聴かせた。

彼の談話には氣の弱い女に衝^{シヨック}撃^キを与えるような部分があつた。

津田から何にも聞いていないお延は、怖^{こわ}々^{ごわ}ながらついそこに釣^つり込まれて大切な時間を度外においた。しかし彼の云う事を素直にはいはい聴いているとどこまで行つてもはてしがなかった。しまいにはこつちから催促^{みち}して、早く向うに用事を切り出させるように仕向けるよりほかに途^{みち}がなくなつた。彼は少しきまりの悪そ

うな様子をしてようやく用向を述べた。それは昨夕^{ゆうべ}お延とお時を
さんざ笑わせた外套^{がいとう}の件にほかならなかった。

「津田君から貰うっていう約束をしたもんですから」

彼の主意は朝鮮へ立つ前ちよつとその外套を着て見て、もしあ
んまり自分の身体^{からだ}に合わないようなら今のうちに直させたいとい
うのであつた。

お延はすぐ入用^{いりよう}の品を筆筒^{たんす}の底から出してやろうかと思つた。
けれども彼女はまだ津田から何にも聞いていなかった。

「どうせもう着る事なんかなろうとは思ふんですが」といつて
逡巡^{たためら}った彼女は、こんな事に案外やかましい夫の気性^{きしょう}をよく知
っていた。着古した外套^{がいとう}一つが本^{もと}で、他日細君の手落^{ておちよば}呼わり

などをされた日には耐^{たま}らないと思つた。

「大丈夫ですよ、くれるつて云つたに違^{ちが}ないんだから。嘘^{うそ}なんか吐^つきやしませんよ」

出してやらないと小林を嘘吐^{うそつき}としてしまうようなものであつた。
「いくら酔払つていたつて気は確^{たしか}なんですからね。どんな事があつたつて貰う物を忘れるような僕じゃありませんよ」

お延はどうとう決心した。

「じゃしばらく待つてて下さい。電話でちよつと病院へ聞き合せてにやりますから」

「奥^{あん}さんは実に几帳^{きちようめん}面ですね」と云つて小林は笑つた。けれどもお延の暗^{あん}に恐れていた不愉快そうな表情は、彼の顔のどこにも

認められなかった。

「ただ念のためにですよ。あとでわたくしがまた何とか云われると困りますから」

お延はそれでも小林が気を悪くしない用心に、こんな弁解がましい事を付け加えずにはいられなかった。

お時が自働電話へ駈^かけつけて津田の返事を持って来る間、二人はなお対座した。そうして彼女の帰りを待ち受ける時間を談話で繋^{つな}いだ。ところがその談話は突然な閃^{ひら}めきで、何にも予期していなかったお延の心臓を躍^{おど}らせた。

八十二

「津田君は近頃だいぶおとなしくなつたようですね。全く奥さんの影響でしよう」

お時が出て行くや否や、小林は藪やぶから棒ぼうにこんな事を云い出した。お延は相手が相手なので、当あたらず障さわらずの返事をしておくに限ると思つた。

「そうですか。私自身じや影響なんかまるでないように思つておりますがね」

「どうして、どうして。まるで人間が生れ變つたようなものです」
小林の云い方があまり大袈裟おおげさなので、お延はかえつて相手を冷ひ評やし返してやりたくなつた。しかし彼女の氣位きぐらいがそれを許さな

かったので、彼女はわざと黙っていた。小林はまたそんな事を顧慮する男ではなかった。秩序も段落も構わない彼の話題は、突飛にここかしこを駈け回る代りに、時としては不作法なくらい一直線に進んだ。

「やッぱり細君の力には敵いませんね、どんな男でも。——僕のような独身ものには、ほとんど想像がつかないけれども、何かあるんでしょね、そこに」

お延はどうとう自分を抑える事ができなくなった。彼女は笑い出した。

「ええあるわ。小林さんなんかにはとても見当のつかない神秘的なものがたくさんあるわ、夫婦の間には」

「あるなら一つ教えていただきたいもんですね」

「独り^{ひと}ものが教わったって何にもならないじゃありませんか」

「参考になりますよ」

お延は細い眼のうちに、賢^{かし}こそうな光りを見せた。

「それよりあなた御自分で奥さんをお貰^{もら}いになるのが、一番^{ちかみ}捷

径^ちじゃありませんか」

小林は頭を搔^かく真似^{まね}をした。

「貰いたくつても貰えないんです」

「なぜ」

「来てくれ手がなければ、自然貰えない訳じゃありませんか」

「日本は女の余ってる国よ、あなた。お嫁なんかどんなのでもそ

こいらにごろごろ転がつてるじゃありませんか」

お延はこう云ったあとで、これは少し云い過ぎたと思った。しかし相手は平気であつた。もつと強くて烈しい言葉に平生から慣れ抜いている彼の神経は全く無感覚であつた。

「いくら女が余つていても、これから駈かけ落おちをしようという矢先ですからね、来ッこありませんよ」

駈落という言葉が、ふと芝居でやる男女二人の道行みちゆきをお延に想おもひ起させた。そうした濃厚な恋愛を象かたどる艶めかしい歌舞伎かぶき姿を、ちらりと胸に描いた彼女は、それと全く縁の遠い、他の着ひと古した外套がいとうを貰うために、今自分の前に坐っている小林を見て微笑した。

「駈落かけおちをなさるのなら、いつそ二人でなすつたらいいでしょう」

「誰とです」

「そりやきまっていますわ。奥さんのほかに誰も伴つれていらつしやる方はないじやありませんか」

「へえ」

小林はこう云つたなり畏かしこまった。その態度が全くお延の予期はずに外れていたので、彼女は少し驚ろかされた。そうしてかえつて予期以上おかしくなった。けれども小林は真面目まじめであつた。しばらく間まをおいてから独り言ひとごとのような口調で、彼は妙なことを云い出した。

「僕だつて朝鮮三さんがい界まで駈落のお供をしてくれるような、実じつの

ある女があれば、こんな変な人間にならないで、すんだかも知れませんか。実を云うと、僕には細君がないばかりじゃないんです。何にもないんです。親も友達もないんです。つまり世の中がないんですね。もっと広く云えば人間がないんだとも云われるでしょうが」

お延は生れて初めての人に会ったような気がした。こんな言葉をまだ誰の口からも聞いた事のない彼女は、その表面上の意味を理解するだけでも困難を感じた。相手をどう捌こなしていいかの点になると、全く方角が立たなかった。すると小林の態度はなお感慨を帯びて来た。

「奥さん、僕にはたった一人の妹いもとがあるんです。ほかに何にもな

い僕には、その妹が非常に貴重に見えるのです。普通の人の場合よりどのくらい貴重だか分りやしません。それでも僕はその妹をおいて行かなければならないのです。妹は僕のあとへどこまでも喰ツついて来たがります。しかし僕はまた妹をどうしても伴^つれて行く事ができないのです。二人いっしょにいるよりも、二人離れ離れになつてゐる方が、まだ安全だからです。人に殺される危険がまだ少ないからです」

お延は少し気味が悪くなつた。早く歸つて来てくれればいいと思うお時はまだ歸らなかつた。仕方なしに彼女は話題を変えてこの圧迫から逃^{のが}れようと試みた。彼女はすぐ成功した。しかしそれがために彼女はまたとんでもない結果に陥^{おちい}つた。

八十三

特殊の経過をもったその時の問答は、まずお延の言葉から始まった。

「しかしあなたのおつしやる事は本当なんでしょうかね」

小林ははたして沈痛らしい今までの態度をすぐ改めた。そうしてお延の思わく通り向うから訊^きき返して来た。

「何がです、今僕の云った事がですか」

「いいえ、そんな事じゃないの」

お延は巧みに相手を岐^{わきみち}路に誘い込んだ。

「あなた先刻^{さつき}おつしやつたでしょう。近頃津田がだいぶ變つて来たつて」

小林は元へ戻らなければならなかった。

「ええ云いました。それに違ないから、そう云ったんです」

「本当に津田はそんなに變つたでしょうか」

「ええ變りましたね」

お延は臍^ふに落ちないような顔をして小林を見た。小林はまた何か証^{しょうこ}拠でも握っているらしい様子をしてお延を見た。二人がしばらく顔を見合せている間、小林の口元には始終^{しじゅう}薄笑いの影が射していた。けれどもそれは終^{つい}に本式の笑いとなる機会を得ずに消えてしまわなければならなかった。お延は小林なんぞに調戲^{からか}わ

れる自分じゃないという態度を見せたのである。

「奥さん、あなた自分だつて大概気がつきそうなものじゃありませんか」

今度は小林の方からこう云つてお延に働らきかけて来た。お延はたしかにそこに気がついていて、けれども彼女の気がついてゐる夫の変化は、全く別ものであつた。小林の考へている、少なくとも彼の口にしてゐる、変化とはまるで反対の傾向を帯びてゐた。津田といつしよになつてから、おぼろげ臆気ながらしだいしだいに明るくなりつつあるように感ぜられるその変化は、非常に見分けにくい色調しきちようの階段をそろりそろりと動いて行く微妙なものであつた。どんな鋭敏な観察者が外部そとから覗のぞいてもとうてい判りわかこない

性質のものであった。そうしてそれが彼女の秘密であった。愛する人が自分から離れて行こうとする毫釐ごうりの変化、もしくは前から離れていたのだという悲しい事実を、今になって、そろそろ認め始めたという心持の変化。それが何で小林ごときものに知れよう。「いっこう気がつきませんね。あれでどこか変ったところでもあるんでしょうか」

小林は大きな声を出して笑った。

「奥さんはなかなか空そらツとぽ惚かなける事が上手だから、僕なんざあとでも敵かなわない」

「空惚かなけるっていうのはあなたの事じゃありませんか」

「ええ、まあ、そんならそうにしておきましょう。——しかし奥

さんはそういう旨い^{うま}お手際^{てぎわ}をもつていられるんですね。ようやく解^とつた。それで津田君がああ変化して来るんですね、どうも不思議だと思つたら」

お延はわざと取り合わなかった。と云つて別に煩^{うる}さい顔もしなかつた。愛^{あい}嬌^{きよう}を見せた平氣とでもいうような態度をとつた。小林はもう一步前へ進み出した。

「藤井さんでもみんな驚ろいていますよ」

「何を」

藤井という言葉^{ことば}を耳にした時、お延の細い眼がたちまち相手の上に動いた。誘^{おび}き出^だされると知りながら、彼女はついこういつて訊^きき返さなければならなかつた。

「あなたのお手際にです。津田君を手のうちに丸め込んで自由に
するあなたの靈妙なお手際にです」

小林の言葉は露骨過ぎた。しかし露骨な彼は、わざと愛嬌半分
にそれをお延の前で披露するらしかった。^{ひろう}お延はつんとして答え
た。

「そうですか。わたくしにそれだけの力があるんですかね。自分
にや解りませんが、藤井の叔父さんや叔母さんがそう云って下さ
るなら、おおかた本当なんでしょうよ」

「本当ですとも。僕が見たって、誰が見たって本当なんだから仕
方がないじゃありませんか」

「ありがとう」

お延はさも軽蔑けいべつした調子で礼を云った。その礼の中に含まれていた苦にが々しい響は、小林にとって全く予想外のものであるらしかつた。彼はすぐ彼女を宥なだめるような口調で云った。

「奥さんは結婚前の津田君を御承知ないから、それで自分の津田君に及ぼした影響を自覚なさらないんでしょうが、——」

「わたくしは結婚前から津田を知っております」

「しかしその前は御存じないでしょう」

「当り前ですわ」

「ところが僕はその前をちゃんと知っているんですよ」

話はこんな具合にして、とうとう津田の過去に溯さかのぼって行つた。

八十四

自分のまだ知らない夫の領分に這^{はい}入り込んで行くのはお延にと
 って多大の興味に違なかつた。彼女は喜こんで小林の談話に耳を
 傾けようとした。ところがいざ聴こうとすると、小林はけつして
 要領を得た事を云わなかつた。云つても肝^{かん}心^{じん}のところはわざと
 略してしまつた。例^{たと}えば二人が深夜非常線にかかつた時の光景に
 は一口触れるが、そういう出来事に出合うまで、彼らがどこで夜^よ
 深^{ふか}しをしていたかの点になると、彼は故意に暈^{ぼか}しさつて、全く語
 らないという風を示した。それを訊^きけば意味ありげににやにや笑
 つて見せるだけであつた。お延は彼がとくにこうして自分を焦^じ燥^ら

しているのではなからうかという気さえ起した。

お延は平生から小林を軽く見ていた。半ば^{なか}夫の評価を標準におき、半ば自分の直覺を信用して成立ったこの侮蔑^{ぶべつ}の裏には、まだ他^{ひと}に向つて公言しない大きな因^{ファクトー}子があつた。それは単に小林が貧乏であるという事に過ぎなかつた。彼に地位がないという点にほかならなかつた。売れもしない雑誌の編輯^{へんしゅう}、そんなものはきまつた職業として彼女の眼に映るはずがなかつた。彼女の見た小林は、常に無籍^{むせき}もののような顔をして、世の中をうろうろしていた。宿^ぐなしらしい愚痴^{ぐち}を零^{こぼ}して、厭^{いや}がらせにそこいらをまごつき歩くだけであつた。

しかしこの種の輕蔑に、ある程度の不気味はいつでも附^{つき}物で

あつた。ことにそういう階級に馴ならされない女、しかも経験に乏しい若い女には、なおさらの事でなければならなかつた。少くとも小林の前に坐つたお延はそう感じた。彼女は今までに彼ぐらいな貧しさの程度の人に出合わないとは云えなかつた。しかし岡本の宅へ出入うちではいりをするそれらの人々は、みんなその分を弁わきままていた。身分には段等だんとうがあるものと心得て、みんなおのれに許された範圍内においてのみ行動をあえてした。彼女はいまだかつて小林のように横着な人間に接した例がなかつた。彼のように無遠慮に自分に近づいて来るもの、富も位地もない癖に、彼のように大きな事を云うもの、彼のようにむやみに上流社会の悪体あくたいを吐くものにはけつして会つた事がなかつた。

お延は突然気がついた。

「自分の今相手にしているのは、平生考えていた通りの馬鹿でなくつて、あるいは手に余る擦れツ枯らしじやなかうか」

軽蔑の裏に潜んでいる不気味な方面が強く頭を持上げた時、

お延の態度は急に改たまつた。すると小林はそれを見届けた証に、またはそれに全くの無頓着でか、アははと笑い出した。

「奥さんまだいろいろ残ってますよ。あなたの知りたい事がね」
「そうですね。今日はもうそのくらいでたくさんでしょう。あんまり一度きに伺ってしまうと、これから先の楽しみがなくなりますから」

「そうですね、じゃ今日はこれで切り上げときますかな。あんまり奥さんに気を揉もませて、歇ヒステリ斯的里でも起されると、後あとでまた僕の責任だなんて、津田君に恨うらまれるだけだから」

お延は後うしろを向いた。後は壁であつた。それでも茶の間に近いその見当けんとうに、彼女はお時の消息を聞こうとする努力を見せた。けれども勝手口は今まで通り静かであつた。疾とうに帰るべきはずのお時はまだ帰つて来なかつた。

「どうしたんでしょう」

「なに今に帰つて来ますよ。心配しないでも迷まいご児になる氣遣きづかいはないから大丈夫です」

小林は動こうとしなかつた。お延は仕方がないので、茶を淹い

れ代^かえるのを口実に、席を立とうとした。小林はそれさえ遮^{さえ}ぎつた。

「奥さん、時間があるなら、退屈^{たいくつ}凌^{しの}ぎに幾らでも先刻^{さつき}の続きを話しますよ。しゃべって潰^{つぶ}すのも、黙って潰^{つぶ}すのも、どうせ僕見たいな穀潰^{ごくつぶ}しにや、同^{おん}なし時間なんだから、ちつとも御遠慮にや及びません。どうです、津田君にはあれでまだあなたに打ち明けないような水臭いところがだいぶあるんでしょう」

「あるかも知れませんか」

「ああ見えてなかなか淡泊^{たんぱく}でないからね」

お延ははっと思つた。腹の中で小林の批評を首肯^{うけが}わない訳に行かなかつた彼女は、それがあたっているだけになおの事感情を害

した。自分の立場を心得ない何という不作法な男だろうと思つて小林を見た。小林は平気で前の言葉を繰り返した。

「奥さんあなたの知らない事がまだたくさんありますよ」

「あつても宜しいじやございませんか」

「いや、実はあなたの知りたいと思つてゐる事がまだたくさんあるんですよ」

「あつても構いません」

「じゃ、あなたの知らなければならぬ事がまだたくさんあるんだと云い直したらどうです。それでも構いませんか」

「ええ、構いません」

八十五

小林の顔には皮肉の渦が漲うずみななぎつた。進んでも退しりぞいてもこつちのものだという勝利の表情がありありと見えた。彼はその瞬間の得意を永久に引き延ばして、いつまでも自分で眺め暮くしたいような素そ振ぶりさえ示した。

「何という陋ろうれつ劣な男だろう」

お延は腹の中でこう思った。そうしてしばらくの間じつと彼と睨にらめつ競くらをしていた。すると小林の方からまた口を利きき出した。

「奥さん津田君が変った例証として、是非あなたに聴きかせなければならぬ事があるんですが、あんまりおびえていらつしやるよ

うだから、それは後廻しにして、その反対の方、すなわち津田君がちつとも変らないところを少し御参考までにお話しておきますよ。これはいやでも私の方では是非奥さんに聴いていただきたいのです。——どうです聴いて下さいますか」

お延は冷淡に「どうともあなたの御随意に」と答えた。小林は「ありがたい」と云つて笑つた。

「僕は昔から津田君に軽蔑けいべつされていました。今でも津田君に軽蔑さつきされています。先刻さつきからいう通り津田君は大変変りましたよ。けれども津田君の僕に対する軽蔑だけは昔も今も同様なのです。毫ごうも変らないのです。これだけはいくら伶俐りこうな奥さんの感化力でもどうする訳にも行かないと見えますね。もつともあなた方から

見たら、それが理の当然なんでしょうけれどもね」

小林はそこで言葉を切つて、少し苦しそうなお延の笑い顔に見入った。それからまた続けた。

「いや別に変つて貰いたいという意味じゃありませんよ。その点について奥さんの御尽力を仰ぐ気は毛頭ないんだから、御安心なさい。実をいうと、僕は津田君にばかり軽蔑されている人間じゃないんです。誰にでも軽蔑されている人間なんです。下らない女にまで軽蔑されているんです。有ありてい体に云えば世の中全体が寄つてたかつて僕を軽蔑しているんです」

小林の眼は据すわつていた。お延は何という事もできなかった。

「まあ」

「それは事実です。現に奥さん自身でもそれを腹の中で認めていらつしやるじやありませんか」

「そんな馬鹿な事があるもんですか」

「そりや口の先では、そうおつしやらなければならぬでしょう」
 「あなたもずいぶん僻^{ひが}んでいらつしやるのね」

「ええ僻^{ひが}んでるかも知れませんが、僻もうが僻むまいが、事實は事實ですからね。しかしそりやどうでもいいんです。もともと無能^{やくざ}に生れついたのが悪いんだから、いくら輕蔑されたって仕方がありませんまい。誰を恨む^{うら}訳にも行かないのでしよう。けれども世間からのべつにそう取り扱われつけて来た人間の心持を、あなたは御承知ですか」

小林はいつまでもお延の顔を見て返事を待っていた。お延には何もいう事がなかった。まるつきり同情の起り得ない相手の心持、それが自分に何の関係があろう。自分にはまた自分で考えなければならぬ問題があつた。彼女は小林のために想像の翼つばささえ伸ばしてやる氣にならなかつた。その様子を見た小林はまた「奥さんと云い出した。」

「奥さん、僕は人に厭いやがられるために生きています。わざわざ人の厭がるような事を云つたりしたりするんです。そうでもしなければ苦しくつてたまらないんです。生きていられないのです。僕の存在を人に認めさせる事ができないんです。僕は無能です。幾ら人から軽蔑けいべつされても存分な讐かたきうち討うちができません。仕

方がないからせめて人に嫌われてでも見ようと思うのです。それが僕の志願なのです」

お延の前にまるで別世界に生れた人の心理状態が描き出された。誰からでも愛されたい、また誰からでも愛されるように仕向けて行きたい、ことに夫に対しては、是非共そうしなければならない、というのが彼女の腹であつた。そうしてそれは例外なく世界中の誰にでも当て^あて^{はま}って、毫^{ごう}も悖^{もと}らないものだ、と、彼女は最初から信じ切つていたのである。

「吃^{びつく}驚りしたようじゃありませんか。奥さんはまだそんな人に会つた事がないんでしょう。世の中にはいろいろの人がありますからね」

小林は多少溜飲りゆういんの下りたような顔をした。

「奥さんは先刻さつきから僕を厭がっている。早く帰ればいい、帰ればいいと思っている。ところがどうした訳か、下女が帰って来ないもんだから、仕方なしに僕の相手になっている。それがちやんと僕には分るんです。けれども奥さんはただ僕を厭な奴やつだと思うだけで、なぜ僕がこんな厭な奴になったのか、その原因を御承知ない。だから僕がちよつとそこを説明して上げたのです。僕だつてまさか生れたてからこんな厭な奴でもなかったんでしようよ、よくは分りませんけれどもね」

小林はまた大きな声を出して笑った。

八十六

お延の心はこの不思議な男の前に入り乱れて移って行つた。一には理解が起らなかった。二には同情が出なかった。三には彼の真面目さが疑がわれた。反抗、畏怖、輕蔑、不審、馬鹿らしさ、嫌惡、好奇心、——雜然として彼女の胸に交錯したいろいろなものはけつして一点に纏まる事ができなかった。したがってただ彼女を不安にするだけであつた。彼女はしまいに訊いた。

「じゃあなたは私を厭がらせるために、わざわざここへいらしたと言明なさるんですね」

「いや目的はそうじゃありません。目的は外套を貰いに來たん

です」

「じゃ外套を貰いに来たついでに、私を厭がらせようとおっしゃるんですか」

「いやそうでもありません。僕はこれで天然自然のつもりなんですからね。奥さんよりもほど技巧は少ないと思ってるんです」

「そんな事はどうしても、私の間にはつきりお答えになつたらいいじゃありませんか」

「だから僕は天然自然だと云うのです。天然自然の結果、奥さんが僕を厭がられるようになるというだけなのです」

「つまりそれがあなたの目的でしょう」

「目的じゃありません。しかし本望^{ほんもう}かも知れません」

「目的と本望とどこが違うんです」

「違いますかね」

お延の細い眼から憎悪ぞうおの光が射した。女だと思つて馬鹿にするなという気性きしょうがありありと瞳子ひとみの裏うちに宿つた。

「怒ようけんつちやいけません」と小林が云つた。「僕は自分の小さな料り

簡かんから敵かたきうち打うちをしてるんじゃないという意味を、奥さんに

説明して上げただけです。天がこんな人間になつて他ひとを厭いとがらせ
てやれと僕に命ずるんだから仕方がないと解釈していただきたい
ので、わざわざそう云つたのです。僕は僕に悪い目的はちつとも
ない事をあなたに承認していただきたいのです。僕自身は始めか
ら無目的だという事を知つておいていただきたいのです。しかし

天には目的があるかも知れません。そうしてその目的が僕を動かしているかも知れません。それに動かされる事がまた僕の本望かも知れません」

小林の筋の運び方は、少し困^{こん}絡^{がら}かり過ぎていた。お延は彼の論^{ロジック}理^{すき}の間隙を突くだけに頭が鍊^ねれていなかった。といって無条件で受け入れていいか悪いかを見分けるほど整った脳力ももたなかった。それでいて彼女は相手の吹きかける議論の要点を掴^{つか}むだけの才気を充分に具えていた。彼女はすぐ小林の主意を一口に纏^{まと}めて見せた。

「じゃあなたは人を厭^{いと}がらせる事は、いくらでも厭^{いと}がらせるが、それに対する責任はけっして負^おわないというんでしよう」

「ええそこです。そこが僕の要点なんです」

「そんな卑怯な——」

「卑怯じゃありません。責任のない所に卑怯はありません」

「ありますとも。第一この私があなたに対してどんな悪い事をした^{おぼえ}覚があるんでしょう。まあそれから伺いますから、云つて御覧なさい」

「奥さん、僕は世の中から無籍もの扱いにされている人間ですよ」
「それが私や津田に何の関係があるんです」

小林は待つてたと云わぬばかりに笑い出した。

「あなた方から見たらおおかたないでしょう。しかし僕から見れば、あり過ぎるくらいあるんです」

「どうして」

小林は急に答えなくなつた。その意味は宿題にして自分でよく考えて見たらよかろうと云う顔つきをした彼は、黙つて煙草^{たばこ}を吹かし始めた。お延は一層の不快を感じた。もう好い加減に歸つてくれと云いたくなつた。同時に小林の意味もよく突きとめておきたかつた。それを見抜いて、わざと高を括^{くく}つたように落ちついてゐる小林の態度がまた癪^{しゃく}に障^{さわ}つた。そこへ先刻^{さつき}から心持ちに待ち受けていたお時がようやく歸つて来たので、お延の蟠^{わだか}まりは、一定した様式^{もと}の下に表現される機会の来ない先にまた崩^{くず}されてしまわなければならなかつた。

八十七

お時は縁側^{えんがわ}へ坐つて外部^{そと}から障子^{しょうじ}を開けた。

「ただいま。大変遅くなりました。電車で病院まで行つて参りましたものですから」

お延は少し腹立たしい顔をしてお時を見た。

「じゃ電話はかけなかったのかい」

「いいえかけたんでございます」

「かけても通じなかったのかい」

問答を重ねているうちに、お時の病院へ行つた意味がようやくお延に呑み込めるようになって来た。——始め通じなかった電話

は、しまいに通じるだけは通じてても用を弁ずる事ができなかった。看護婦を呼び出して用事を取次いで貰おうとしたが、それすらお時の思うようにはならなかった。書生だか薬局員だかが始終相手になって、何か云うけれども、それがまたちつとも要領を得なかった。第一言語が不明瞭であつた。それから判切聞こえるところも辻褄の合わない事だらけだつた。要するにその男はお時の用事を津田に取次いでくれなかったらしいので、彼女はとうとう諦^{あき}らめて、電話箱を出てしまった。しかし義務を果さないでそのまま宅へ帰るのが厭^{いや}だったので、すぐその足で電車へ乗って病院へ向つた。

「いったん帰って、伺つてからにしようかと思ひましたけれども、

ただ時間が長くかかるぎりでございますし、それにお客さまがこうして待っておいでの事をなまじい存じておるものでございますから」

お時のいう事はもつともであつた。お延は礼を云わなければならなかつた。しかしそのために、小林からさんざん厭いやな思おもいをさせられたのだと思うと、氣を利きかした下女がかえつて恨うらめしくもあつた。

彼女は立つて茶の間へ入つた。すぐそこに据すえられた銅あかの金具の光る重かさね筆だんす笥すの一番下の抽ひき斗だしを開けた。そうして底の方から問題の外がい套とうを取り出して来て、それを小林の前へ置いた。

「これでしよう」

「ええ」と云った小林はすぐ外套を手につつて、品物を改める古着屋のような眼で、それを引ッ繰ひくり返かえした。

「思つたよりだいぶ汚よごれていますね」

「あなたにやそれでたくさんだ」と云いたかつたお延は、何にも答えずに外套を見つめた。外套は小林のいう通り少し色が變つていた。襟えりを返して日に当らない所を他の部分と比較して見ると、それが著いちじるしく目立つた。

「どうせただ貰うんだからそう贅ぜいたく沢たくも云えませんかね」

「お氣に召さなければ、どうぞ御遠慮なく」

「置いて行けとおっしゃるんですか」

「ええ」

小林はやッぱり外套を放さなかつた。お延は痛快な気がした。

「奥さんちよつとここで着て見てもよござんすか」

「ええ、ええ」

お延はわざと反対を答えた。そうして窮屈そでそうな袖へ、もがくようにして手を通す小林を、坐つたまま皮肉な眼で眺めた。

「どうですか」

小林はこう云いながら、背中をお延の方に向けた。見苦しいたた畳み皺じわが幾筋もお延の眼に入いつた。アイロンの注意でもしてやるべきところを、彼女はまた逆ぎやくに行いつた。

「ちようど好いようですね」

彼女は誰も自分の傍そばにいないので、せつかく出来上つた滑稽こっけい

な後^{うしろすがた}姿も、眼と眼で笑ってやる事ができないのを物足りなく思つた。

すると小林がまたぐりと向き直つて、外套を着たなり、お延の前にどつきり胡坐^{あぐら}をかいた。

「奥さん、人間はいくら変な着物を着て人から笑われても、生きている方がいいものなんですよ」

「そうですか」

お延は急に口元を締^しめた。

「奥さんのような窮^{こま}つた事のない方にや、まだその意味が解らないでしょうがね」

「そうですか。私はまた生きてて人に笑われるくらいなら、いつ

そ死んでしまった方が好いと思います」

小林は何にも答えなかった。しかし突然云った。

「ありがとう。御蔭おかげでこの冬も生きていられます」

彼は立ち上った。お延も立ち上った。しかし二人が前後して座敷から縁側えんがわへ出ようとするとき、小林はたちまちふり返った。

「奥さん、あなたそういう考えなら、よく氣をつけて他ひとに笑われないようにしないといけませんよ」

八十八

二人の顔は一尺足らずの距離に接近した。お延が前へ出ようと

する途端^{とたん}、小林が後^{うしろ}を向いた拍子^{ひょうし}、二人はそこで急に運動を中止しなければならなかった。二人はぴたりと止まった。そうして顔を見合せた。というよりもむしろ眼と眼に見入った。

その時小林の太い眉^{まゆ}が一層際立^{きわだ}ってお延の視覚を侵^{おか}した。下にある黒瞳^{くろめ}はじつと彼女の上に据^すえられたまま動かなかった。それが何を物語っているかは、こつちの力で動かして見るよりほかに途はなかった。お延は口を切った。

「余計な事です。あなたからそんな御注意を受ける必要はありません」

「注意を受ける必要がないのじやありますまい。おおかた注意を受ける覚^{おぼえ}がないとおっしゃるつもりなんでしょう。そりやあなた

は固^{もと}より立派な貴婦人に違ないかも知れません。しかし――」

「もうたくさんです。早く帰つて下さい」

小林は応じなかった。問答が咫尺^{しせき}の間に起つた。

「しかし僕のいうのは津田君の事です」

「津田がどうしたというんです。わたくしは貴婦人だけでも、

津田は紳士でないとおっしゃるんですか」

「僕は紳士なんてどんなものかまるで知りません。第一そんな階級が世の中に存在している事を、僕は認めていないのです」

「認めようと認めまいと、そりやあなたの御随意です。しかし津田がどうしたというんです」

「聞きたいですか」

鋭^いぞい稲^{いな}妻^{ずま}がお延の細い眼からまともに^{ほと}迸^{とば}した。

「津田はわたくしの夫です」

「そうです。だから聞きたいでしょう」

お延は齒を^か噛んだ。

「早く帰って下さい」

「ええ帰ります。今帰るところです」

小林はこう云ったなりすぐ向き直った。玄関の方へ行こうとして縁^{えん}側^{がわ}を二足ばかりお延から遠ざかった。その後姿を見てたまらなくなつたお延はまた呼びとめた。

「お待ちなさい」

「何ですか」

小林はのっそり立ちどまった。そうして裾ゆきの長過ぎる古外套ふるがいとうを着た両手を前の方に出して、ポンチ絵に似た自分の姿を鑑賞でもするように眺め廻した後で、にやにやと笑いながらお延を見た。お延の声はなお鋭くなった。

「なぜ黙って帰るんです」

「御礼は先刻さつき云ったつもりですがね」

「外套の事じゃありません」

小林はわざと空々そらぞらしい様子をした。はてなと考える態度まで粧よそおつて見せた。お延は詰責きつせきした。

「あなたは私の前で説明する義務があります」

「何をですか」

「津田の事をです。津田は私の夫です。妻さいの前で夫の人格を疑ぐ
るような言葉を、遠廻しにでも出した以上、それを綺麗きれいに説明す
るのは、あなたの義務じゃありませんか」

「でなければそれを取り消すだけの事でしよう。僕は義務だの責任
だのって感じの少ない人間だから、あなたの要求通り説明するの
は困難かも知れないけれども、同時に恥はじを恥と思わない男として、
いったん云った事を取り消すぐらいは何でもありません。——じ
や津田君に対する失言を取り消しましょう。そうしてあなたに詫あやま
りましょう。そうしたらいいでしょう」

お延は黙然として答えなかった。小林は彼女の前に姿勢を正し
くした。

「ここに改めて言明します。津田君は立派な人格を具えた人です。紳士です。（もし社会にそういう特別な階級が存在するならば）」
お延は依然として下を向いたまま口を利きかなかつた。小林は語を続けた。

「僕は先刻奥さんに、人から笑われないようによく気をおつけになつたらよかろうという注意を与えました。奥さんは僕の注意などを受ける必要がないと云われました。それで僕もその後を話あとす事を遠慮しなければならなくなりました。考えるとこれも僕の失言でした。併あわせて取消します。その他もし奥さんの氣に障さわつた事があつたら、総すべて取消します。みんな僕の失言です」

小林はこう云つた後で、沓くつぬぎ脱そろに揃そろえてある自分の靴はを穿はいた。

そうして格子こうしを開けて外へ出る最後に、またふり向いて「奥さんさよなら」と云った。

微かすかに黙礼を返したぎり、お延はいつまでもぼんやりそこに立っていた。それから急に二階の梯子はしごだん段を駈かけ上って、津田の机の前に坐るや否や、その上に突ツ伏してわつと泣き出した。

八十九

幸いにお時が下から上あがつて来なかつたので、お延は憚はばかりなく当座の目的を達する事ができた。彼女は他ひとに顔を見られずに思う存分泣けた。彼女が満足するまで自分を泣き尽した時、涙はおのず

から乾いた。

濡^ぬれた手巾^{ハンケチ}を袂^{たもと}へ丸め込んだ彼女は、いきなり机の抽斗^{ひきだし}を

開けた。抽斗は二つ付いていた。しかしそれを順々に調べた彼女

の眼には別段目新しい何物も映らなかった。それもそのはずで

あつた。彼女は津田が病院へ入る時、彼に入用^{いりよう}の手荷物を纏^{まと}め

るため、二三日前^{にさんちまえ}すでにそこを捜^{さが}したのである。彼女は残された

封筒^{ふうとう}だの、物指^{ものさし}だの、会費の受取^{うけと}りだのを見て、それをまた一々

鄭^{てい}寧^{ねい}に揃^{そろ}えた。パナマや麦藁^{むぎわら}製のいろいろ帽子が石版で印

刷^しされている広告用の小冊子^{しよか}めいたものが、二人で銀座へ買物に

行^いった初夏^{しよか}の夕暮を思い出させた。その時夏帽^{まつか}を買いに立寄った

店から津田が貰^{もら}って帰ったこの見本には、真赤^{まっか}に咲いた日比谷公

園の躑躅だの、突当りに霞が関の見える大通りの片側に、薄暗い影をこんもり漂よわせている高い柳などが、離れにくい過去の匂のように、聯想としてつき纏わっていた。お延はそれを開いたまま、しばらくじっと考え込んだ。それから急に思い立ったように机の抽斗をがちやりと閉めた。

机の横には同じく直線の多い様式で造られた本箱があつた。そこにも抽斗が二つ付いていた。机を棄てたお延は、すぐ本箱の方に向つた。しかしそれを開けようとして、手を環にかけた時、抽斗は双方とも何の抵抗もなく、するすると抜け出したので、お延は中を調べない先に、まず失望した。手応えのない所に、新らしい発見のあるはずはなかった。彼女は書き古したノートブックの

ようなものをいたずらに攪かき廻まわした。それを一々読んで見るのは
 大變であつた。読んだところで自分の知ろうと思ふ事が、そんな
 筆記の底に潜ひそんでいようとは想像できなかった。彼女は用心深い
 夫の性質をよく承知していた。錠じようを卸おろさない秘密をそこいらへ放ほう
 り出だしておくには、あまりに細か過ぎるのが彼の持前であつた。
 お延は戸棚とだなを開けて、錠を掛けたものがどこかにないかという
 眼つきをした。けれども中には何にもなかった。上には殺風景な
 我楽多がらくたが、無器用に積み重ねられているだけであつた。下は長持
 でいっぱいになっていた。

再び机の前に取つて返したお延は、その上に乗せてある状じようさ
 差しの中から、津田宛あてで来た手紙を抜き取つて、一々調べ出した。

彼女はそんな所に、何にも怪しいものが落ちているはずがないとは思った。しかし一番最初眼につきながら、手さえ触れなかった幾通の書信は、やっぱり最後に眼を通すべき性質を帯びて、彼女の注意を誘^{いざな}いつつ、いつまでもそこに残っていたのである。彼女はつい念のためという口実^{もと}の下に、それへ手を出さなければならなくなつた。

封筒が次から次へと裏返された。中身が順々に繰りひろげられた。あるいは四半分、あるいは半分、残るものは全部、ことごとくお延によつて黙読された。しかる後彼女はそれを元通りの順で、元通りの位置^{もと}に復した。

突然疑惑の焰^{ほのお}が彼女の胸に燃え上つた。一^{ひと}束^{たば}の古手紙へ油を

濺^{そそ}いで、それを綺麗^{きれ}に庭先で焼き尽している津田の姿が、ありありと彼女の眼に映った。その時めらめらと火に化して舞い上る紙^かみきれ片を、津田は恐ろしそうに、竹の棒で抑^{おさ}えつけていた。それは初秋^{はつあき}の冷たい風が肌^{はだ}を吹き出した頃の出来事であつた。そうしてある日曜の朝であつた。二人差向いで食事を済ましてから、五分と経^たたないうちに起つた光景であつた。箸^{はし}を置くと、すぐ二階から細い紐^{ひも}で絡^{から}げた包を抱えて下りて来た津田は、急に勝手口から庭先へ廻つたと思うと、もうその包に火を点^つけていた。お延が縁側^{えんがわ}へ出た時には、厚い上包がすでに焦^こげて、中にある手紙が少しばかり見えていた。お延は津田に何でそれを焼き捨てるのかと訊^きいた。津田は嵩^{かさ}ばつて始末に困るからだと言へた。なぜ反故^{ほご}

にして、自分達の髪を結う時などに使わせないのかと尋ねたら、津田は何とも云わなかった。ただ底から現われて来る手紙をむやみに竹の棒で突ツついた。突ツつきたびに、火になり切れない濃い煙が渦を巻いて棒の先に起った。渦は青竹の根を隠すと共に、抑えつけられている手紙をも隠した。津田は煙に咽ぶ顔をお延から背けた。……

お時が午飯ひるめしの催促に上あがつて来るまで、お延はこんな事を考えつづけて作りつけの人形のようにじつと坐り込んでいた。

九十

時間はいつか十二時を過ぎていた。お延はまたお時の給仕で独^{ひと}り膳^{ぜん}に向つた。それは津田の会社へ出た留守に、二人が毎日繰り返す日課にほかならなかつた。けれども今日のお延はいつものお延ではなかつた。彼女の様子は剛張^{こわば}つていた。そのくせ心は纏^{まと}まりなく動いていた。先刻^{さつき}出かけようとして着換えた着物まで、平^ふ生^{だん}と違つたよそゆきの氣持を余分に添える媒^な介^{なか}となつた。

もし今の自分に触れる問題が、お時の口から洩^もれなかつたなら、お延はついに一言^{ひとこと}も云わずに、食事を済ましてしまつたかも知れなかつた。その食事さえ、実を云うと、まるで氣が進まなかつたのを、お時に疑ぐられるのが厭^{いや}さに、ほんの形式的に片づけようとして、膳に着いただけであつた。

お時も何だか遠慮でもするように、わざと談話を控えていた。しかしお延が一膳で箸を置いた時、ようやく「どうか遊ばしましたか」と訊いた。そうしてただ「いいえ」という返事を受けた彼女は、すぐ膳を引いて勝手へ立たなかつた。

「どうもすみませんでした」

彼女は自分の専断で病院へ行つた詫を述べた。お延はお延でまた彼女に尋ねたい事があつた。

「先刻はずいぶん大きな声を出したでしょう。下女部屋の方まで聞こえたかい」

「いいえ」

お延は疑りの眼をお時の上に注いだ。お時はそれを避けるよう

にすぐ云った。

「あのお客さまは、ずいぶん——」

しかしお延は何にも答えなかった。静かに後を待っているだけなので、お時は自分の方で後をつけなければならなかった。二人の談話はこれが緒口^{いとくち}で先へ進んだ。

「旦那様^{だんなさま}は驚ろいていらつしやいました。ずいぶんひどい奴^{やつ}だつて。こつちから取りに來いとも何とも云わないのに、断りもなく奥様と直談判^{じきだんぱん}を始めたり何かして、しかも自分が病院に入っている事をよく承知している癖^{くせ}につて」

お延は輕蔑^{さげす}んだ笑いを微^{かす}かに洩^もらした。しかし自分の批評は加えなかった。

「まだほかに何かおつしやりやしなかつたかい」

「外套だけやつて早く返せつておつしやいました。それから奥さんと話しをしているかと御訊きおきになりますから、話しをしていらつしやいますと申し上げましたら、大変厭いやな顔をなさいました」

「そうかい。それぎりかい」

「いえ、何を話しているのかと御訊きになりました」

「それでお前は何とお答えをしたの」

「別にお答えをしようがございませんから、それは存じませんと申し上げました」

「そうしたら」

「そうしたら、なお厭な顔をなさいました。いったい座敷なんか

へむやみに上り込ませるのが間違っている——」

「そんな事をおっしゃったの。だって昔からの友達なら仕方がないじゃないの」

「だから私もそう申し上げたのでございました。それに奥さまはちようどお召換めしかえをしていらつしやいましたので、すぐ玄関へおでになる訳に行かなかつたのだからやむをえませんて」

「そう。そうしたら」

「そうしたら、お前はもと岡本さんにいただけあつて、奥さんの事というと、何でも熱心に弁護するから感心だつて、冷評ひやかされました」

お延は苦笑した。

「どうも御気の毒さま。それつきり」

「いえ、まだございます。小林は酒を飲んでやしなかったかとお訊きになるんです。私はよく気がつきませんでしたけれども、お正月でもないのに、まさか朝っぱらから酔払って、他の家へお客にいらつしやる方もあるまいと思いましたから、——」

「酔っちょいরাつしやらないと云つたの」

「ええ」

お延はまだ後があるだろうという様子を見せた。お時は果して話をそこで切り上げなかった。

「奥さま、あの旦那様が、帰ったらよく奥さまにそう云えとおっしゃいました」

「なんと」

「あの小林って奴は何をいうか分らない奴だ、ことに酔うとあぶない男だ。だから、あいつが何を云つてもけつして取り合つちやいけない。まあみんな嘘だと思つていれば間違はないんだからつて」

「そう」

お延はこれ以上何も云う氣にならなかつた。お時は一人でげら笑つた。

「堀の奥さまも傍で笑つていらつしやいました」

お延は始めて津田の妹が今朝病院へ見舞に来ていた事を知つた。

九十一

お延より一つ年上のその妹は、もう二人の子持であつた。長男はすでに四年前に生れていた。単に母であるという事実が、彼女の自覚を呼び醒ますには充分であつた。彼女の心は四年以来いつでも母であつた。母でない日はただの一日もなかつた。

彼女の夫は道楽ものであつた。そうして道楽ものによく見受けられる寛大の気性を具えていた。自分が自由に遊び廻る代りに、細君にもむずかしい顔を見せない、と云つてむやみに可愛がりもしない。これが彼のお秀に対する態度であつた。彼はそれを得意にしていた。道楽の修業を積んで始めてそういう境^{きようがい}界に達せ

られるもののように考えていた。人世観という厳めしい名をつけ
 て然るべきものを、もし彼がもっているとするれば、それは取りも
 直さず、物事に生温く触れて行く事であつた。微笑して過ぎる事
 であつた。何にも執着しない事であつた。呑気に、ずばらに、淡
 泊に、鷹揚に、善良に、世の中を歩いて行く事であつた。そ
 れが彼のいわゆる通であつた。金に不自由のない彼は、今までそ
 れだけで押し通して来た。またどこへ行つても不足を感じなかつ
 た。この好成績がますます彼を楽天的にした。誰からでも好か
 れているという自信をもった彼は、無論お秀からも好かれている
 に違ないと思い込んでいた。そうしてそれは間違でも何でもなか
 った。実際彼はお秀から嫌われていなかったのである。

器量望みで貰われたお秀は、堀の所へ片づいてから始めて夫の性質を知った。放蕩ほうとうの酒で臟腑ぞうふを洗濯されたような彼の趣おもむきもよくやく解する事ができた。こんなに拘泥こうでいの少ない男が、また何の必要があつて、是非自分を貰いたいなどと、真面目まじめに云い出したものだろうかという不審さえ、すぐうやむやのうちに葬られてしまった。お延ほど根強くない彼女は、その意味を覺さとる前に、もう妻としての興味を夫から離して、母らしい輝やいた始めての眼を、新らしく生れた子供の上に注そそがなければならなくなつた。

お秀のお延と違ふところはこれだけではなかつた。お延の新しんし世帯よたいが夫婦二人ぎり、家族は双方とも遠い京都に離れているのに反して、堀には母があつた。弟も妹も同居していた。親類の

厄介者までいた。自然の勢い彼女は夫の事ばかり考えている訳に行かなかつた。中でも母には、他の知らない気苦労をしなければならなかつた。

器量望みで貰われただけあつて、外側から見たお秀はいつまで経つても若かつた。一つ年下のお延に比べて見てもやつぱり若かつた。四歳の子持とはどうしても考えられないくらいであつた。

けれどもお延と違つた家庭の事情の下に、過去の四五年を費やして来た彼女は、どこかにまたお延と違つた心得をもつていた。お延より若く見られないとも限らない彼女は、ある意味から云つて、たしかにお延よりも老けていた。言語態度が老けているというよりも、心が老けていた。いわば、早く世帯染みたのである。

こういう世帯染みた眼で兄夫婦を眺めなければならぬお秀には、常に彼らに対する不満があつた。その不満が、何か事さえあると、とかく彼女を京都にいる父母の味方にしたがつた。彼女はそれでもなるべく兄と衝突する機会を避けるようにしていた。ことに嫂にあによめきまず氣下味い事をいうのは、直接兄に当るよりもなお悪いと思つて、平生から慎つつしんでいた。しかし腹の中はむしろ反対であつた。何かいう兄よりも何も云わないお延の方に、彼女はいつでも余分の非難を投げかけていた。兄がもしあれほど派手はでず好きな女と結婚しなかつたならばという氣が、始終しじゅう胸の底にあつた。そうしてそれは身み負びに過いぎない、お延に氣の毒な批判であるという事には、かつて思い至らなかつた。

お秀は自分の立場をよく承知しているつもりでいた。兄夫婦から煙たがられないまでも、けっして快よく思われていないぐらいの事には、気がついていた。しかし自分の立場を改めようという考は、彼女の頭のどこにも入って来なかった。第一には二人が厭がるからなお改めないのであった。自分の立場を厭がるのが、結局自分を厭がるのと同じ事に帰着してくるので、彼女はそこに反抗の意地を出したくなつたのである。第二には正しいという良心が働らいていた。これはいくら厭がられても兄のためだと思えば構わないという主張であつた。第三は単に派手好きなお延が嫌だという一点に纏められてしまわなければならなかった。お延より余裕のある、またお延より贅沢のできる彼女にして、その点では

自分以下のお延がなぜ氣に喰わないのだろうか。それはお秀にとつて何の問題にもならなかった。ただしお秀には姑しゅうとがあつた。そうしてお延は夫を除けば全く自分自身の主人公であつた。しかしお秀はこの問題に関かん聯れんしてこの相違さいていすら考えなかつた。

お秀がお延から津田の消息を電話で訊きかされて、その翌日病院へ見舞に出かけたのは、お時の行く小一時間前、ちょうど小林ががいとう外套を受取ろうとして、彼の座敷へ上り込んだ時分であつた。

九十二

前の晩よく寝られなかつた津田は、その朝看護婦の運んで来て

くれた膳ぜんにちよつと手を出したぎり、また仰向あおもむけになつて、昨夕ゆうべの不足を取り返すために、重たい眼を閉つぶつていた。お秀の入つて来たのは、ちようど彼がうとうとと半睡状態に入りかけた間際まぎわだったので、彼は襖ふすまの音ですぐ眼を覚さました。そうして病人に斟しん酌やくを加えるつもりで、わざとそれを静かに開けたお秀と顔を見合せた。

こういう場合に彼らはけつして愛嬌あいきようを売り合わなかつた。嬉うれしそうな表情も見せ合わなかつた。彼らからいうと、それはむしろ陳腐過ちんぷすぎる社交上の形式に過ぎなかつた。それから一種の虚偽に近い努力でもあつた。彼らには自分ら兄きようだい妹いでなくては見られない、また自分ら以外の他人には通用し悪い默契きくがあつた。

どうせお互いに好く思われよう、好く思われよう意識して、上部わべしよぎの所作だけを人並に尽したところで、今さら始まらないんだから、いつそ下手に騙だまし合う手数を省はぶいて、良心に背そむかない顔そのまま、面と向き合おうじゃないかという無言の相談が、多年の間いつか成立してしまったのである。そうしてその良心に背かない顔というのは、取とりも直なおさず、愛嬌あいきようのない顔という事に過ぎなかった。

第一に彼らは普通の兄妹として親しい間あいだがら柄へらであつた。だから遠慮えんりょの要いらないという意味で、不愛嬌ぶあいきような挨拶あいさつが苦にならなかった。第二に彼らはどこかに調子の合あわなないところをもつていた。それが災わざわいの元で、互の顔を見ると、互に弾はじき合あいたくなつた。

ふと首を上げてそこにお秀を見出した津田の眼には、まさにこ
 うした二重の意味から来る不精ぶしょうと不関心があつた。彼は何物を
 か待ち受けているように、いったんきつと上げた首をまた枕の上
 に横たえてしまった。お秀はまたお秀で、それにはいっこう頓とんじ
 着やくなく、言葉もかけずに、そつと室へやの内に入つて来た。

彼女は何より先にまず、枕元にある膳ぜんを眺めた。膳の上は汚な
 らしかつた。横倒しに引ひツ繰くり返かえされた牛乳の罎びんの下に、鶏卵たまごの
 殻からが一つ、その重みで押し潰つぶされている傍そばに、齒痕はがたのついた焼麴トイ
 麴ストが食欠くいかけのまま投げ出されてあつた。しかもほかにまだ一枚手
 をつけないのが、綺麗きれいに皿の上に載つていた。玉子もまだ一つ残
 つていた。

「兄さん、こりやもう済んだの。まだ食べかけなの」

実際津田の片づけかたは、どっちにでも取れるような、だらしないものであつた。

「もう済んだんだよ」

お秀は眉を^{まゆ}ひそめて、膳を階子段^{はしごだん}の上り口^{あがぐち}まで運び出した。

看護婦の手が隙^すかなかつたためか、いつまでも兄の枕元に取り散らかされている朝食^{あさめし}の残骸^{なきがら}は、掃除の行き届いた自分の家^{うち}を今出かけて来たばかりの彼女にとって、あまり見つともいいものではなかつた。

「汚ならしい事」

彼女は誰に小言を云うともなく、ただ一人こう云つて元の座に

帰った。しかし津田は黙って取り合わなかった。

「どうしておれのここにいる事が知れたんだい」

「電話で知らせて下すったんです」

「お延がかい」

「ええ」

「知らせないでもいいって云ったのに」

今度はお秀の方が取り合わなかった。

「すぐ来ようと思つたんですけれども、あいにく昨日は少し差さしつききのう

支かえがあつて——」

お秀はそれぎり後を云わなかった。結婚後の彼女には、こういう風に物を半分ぎりしか云わない癖がいつの間にか出て来た。場

合によると、それが津田には変に受取れた。「嫁に行った以上、兄さんだつてもう他人ですからね」という意味に解釈される事が時々あつた。自分達夫婦の間あいだから柄りくつとおを考えて見ても、そこに無理はないのだと思ひ返せないほど理窟りくつとおの徹らない頭をもつた津田では無論なかつた。それどころか、彼はこの妹のような態度で、お延が外へ対してふるまってくれば好いがと、暗あんに希望していたくらいであつた。けれども自分がお秀にそうした素振そぶりを見せられて見るとけつして好い気持はしなかつた。そうして自分こそ絶えずお秀に対してそういう素振そぶりを見せているのにと反省する暇も何にもなくなつてしまつた。

津田は後を訊きかずに思う通りを云つた。

「なに今日だって、忙がしいところをわざわざ来てくれるには及ばないんだ。大した病氣じやないんだから」

「だって嫂^{ねえ}さんが、もし閑^{ひま}があつたら行つて上げて下さいって、わざわざ電話でおっしゃったから」

「そうかい」

「それにあたし少し兄さんに話したい用があるんですの」

津田はようやく頭をお秀の方へ向けた。

九十三

手術後局部に起る変な感じが彼を襲つて来た。それはガーゼを

詰め込んだ創口きずぐちの周囲にある筋肉が一時に収縮するために起る特殊な心持に過ぎなかったけれども、いったん始まったが最後、あたかも呼吸か脈搏みやくはくのように、規則正しく進行してやまない種類のものではあった。

彼は一昨日おとといの午後始めて第一の収縮を感じた。芝居へ行く許きよだ諾くを彼から得たお延が、階子段はしごだんを下へ降りて行つた拍子ひょうしに起つたこの経験は、彼にとって全然新しいものではなかった。この前療治を受けた時、すでに同じ現象の発見者であつた彼は、思わず「また始まったな」と心の中で叫んだうち。すると苦い記憶にがをわざと彼のために繰り返くしてみせかえるように、収縮が規則正しく進行し出した。最初に肉が縮むちぢむ、詰め込んだガーゼで荒々しくその

肉を擦こすられた気持がする、次にそれがだんだん緩和かんわされて来る、やがて自然の状態に戻ろうとする、途端とたんに一度引いた浪なみがまた磯いそへ打ち上げるような勢で、収縮感が猛烈にぶり返かえしてくる。すると彼の意志はその局部に対して全く平生の命令権を失ってしまう。止めさせようと焦慮あせれば焦慮るほど、筋肉の方でなお云う事を聞かなくなる。——これが過程であつた。

津田はこの変な感じとお延との間にどんな連絡があるか知らなかった。彼は籠かごの中の鳥見たように彼女を取扱とくうのが気の毒になつた。いつまでも彼女を自分の傍そばに引きつけておくのを男らしくないと考えた。それで快よく彼女を自由な空気の中に放してやつた。しかし彼女が彼の好意を感謝して、彼の病床を去るや否や、

急に自分だけ一人取り残されたような気がし出した。彼は物足りない耳を傾むけて、お延の下へ降りて行く足音を聞いた。彼女が玄関の扉を開ける時、^{はげ}烈しく鳴らした号鈴^{ベル}の音さえ彼にはあまり無遠慮過ぎた。彼が局部から受ける厭^{いや}な筋肉の感じはちようどの時に再発したのである。彼はそれを一種の刺戟^{しげき}に歸した。そうしてその刺戟は過敏にされた神経のお蔭^{かげ}にほかならないと考えた。ではお延^{しよさ}の行為が彼の神経をそれほど過敏にしたのだろうか。お延の所作^{しよさ}に対して突然不快を感じ出した彼も、そこまでは論断する事ができなかった。しかし全く偶然の暗^{あん}合^{ごう}でない事も、彼に云わせると、自明の理であつた。彼は自分だけの料^り簡^{ようけん}で、二つの間にある關係^{こしら}を拵えた。同時にその關係を後からお延に云つ

て聞かせてやりたくなつた。単に彼女を氣の毒がらせるために、
 病氣で寝ている夫を捨てて、一日の歡樂に走つた結果の悪かつた
 事を、彼女に後悔させるために。けれども彼はそれを適当に云い
 現わす言葉を知らなかつた。たとい云い現わしても彼女に通じな
 い事はたしかであつた。通じるにしても、自分の思い通りに感じ
 させる事はむずかしかつた。彼は黙つて心持を悪くしているより
 ほかに仕方がなかつた。

お秀の方を向き直つたとつさに、また感じ始めた局部の収縮が、
 すぐ津田にこれだけの顛^{てんまつ}末を思い起させた。彼は苦^{にが}い顔をした。
 何にも知らないお秀にそんな細かい意味の分るはずはなかつた。
 彼女はそれを兄がいつでも自分にだけして見せる例の表情に過ぎ

ないと解釈した。

「お厭いやなら病院をお出でになつてから後にしましょうか」

別に同情のある態度も示さなかつた彼女は、それでも幾分か斟しんしゃく

酌しなければならなかつた。

「どこか痛いの」

津田はただ首肯うなずいて見せた。お秀はしばらく黙つて彼の様子を

見ていた。同時に津田の局部で収縮が規則正しく繰り返され始めた。沈黙が二人の間に続いた。その沈黙の続いている間彼は苦い顔を改めなかつた。

「そんなに痛くつちや困るのね。嫂ねえさんはどうしたんでしよう。

昨日きのうの電話じや痛みも何にもないようなお話しだったのにね」

「お延は知らないんだ」

「じゃ嫂さんが帰ってから後で痛み始めたの」

「なに本当はお延のお蔭かげで痛み始めたんだ」とも云えなかった津田は、この時急に自分が自分に駄々だだつ子こらしく見えて来た。上部うわべはとにかく、腹の中がいかに兄らしくないのが恥はずかしくなつた。

「いったいお前の用というのは何だい」

「なに、そんなに痛い時に話さなくってもいいのよ。またにしましよう」

津田は優ゆうに自分を偽いつわる事ができた。しかしその時の彼は偽いつわるのが厭いやであつた。彼はもう局部の感じを忘れていた。収縮は忘れ

ばやみ、やめば忘れるのをその特色にしていた。

「構わないからお話しよ」

「どうせあたしの話だから碌な事じゃないのよ。よくって」
津田にも大よその見当けんとうはついていた。

九十四

「またあの事だろう」

津田はしばらく間まを置いて、仕方なしにこう云った。しかしその時の彼はもう例いつもの通り聴ききたくもないという顔つきに返っていた。お秀は心でこの矛盾を腹立たしく感じた。

「だからあたしの方じゃ先刻さつきから用は今度こんだの次にしようかと云つてるんじゃないやありませんか。それを兄さんがわざわざ催促するようにおつしやるから、ついお話しする気にもなるんですわ」

「だから遠慮なく話したらいいじゃないか。どうせお前はそれのもりで来たんだろう」

「だって、兄さんがそんな厭いやな顔をなさるんですもの」

お秀は少くとも兄に対してなら厭いやな顔ぐらいで会えしやく釈しやくを加える女ではなかった。したがって津田も氣の毒になるはずがなかった。かえって妹の癖に余計な所で自分を非難する奴だぐらいに考えた。彼は取り合わずに先へ通とおり過こした。

「また京都から何か云つて来たのかい」

「ええまあそんなところよ」

津田の所へは父の方から、お秀の許へは母の側から、京都の消息が重に伝えられる事にほばきまっていたので、彼は文通の主を改めて聞く必要を認めなかった。しかし目下の境遇から云つて、お秀の母から受け取つたという手紙の中味にはまた冷淡であり得るはずがなかった。二度目の請求を京都へ出してから以後の彼は、絶えず送金の有無を心のうちで氣遣つていたのである。兄妹の間に「あの事」として通用する事件は、なるべく聴くまいと用心しても、月末の仕払や病院の入費の出所に多大の利害を感じない訳に行かなかつた津田は、またこの二つのものが互に困絡かつて、離す事のできない事情の下にある意味合を、お秀よ

りもよく承知していた。彼はどうしても積極的に自分から押して出なければならなかった。

「何と云つて来たい」

「兄さんの方へもお父さんから何か云つて来たでしょう」

「うん云つて来た。そりや話さないでもたいていお前に解つてるだろう」

お秀は解つているともいないとも答えなかった。ただ微かに薄笑の影を締りしまの好い口元に寄せて見せた。それがいかにも兄に打ち勝った得意の色をほのめかすように見えるのが津田には癪しゃくだった。平生は単に妹であるという因縁いんねんづくで、少しも自分の眼につかないお秀の器量が、こう云う時に限つて、悪く彼を刺戟しげきした。

なまじい容色が十人並以上なので、この女は余計^{ひと}他の感情を害するのではなからうかと思う疑惑さえ、彼にとつては一度や二度の経験ではなかった。「お前は器量望みで貰われたのを、生^{しょうがい}涯^{がい}自慢にする気なんだろう」と云つてやりたい事もしばしばあつた。お秀はやがてきちりと整つた眼鼻を揃^{そろ}えて兄に向つた。

「それで兄さんはどうなすつたの」

「どうもしようがないじゃないか」

「お父さんの方へは何にも云つておあげにならなかつたの」

津田はしばらく黙つていた。それからさもやむをえないといった風に答えた。

「云つてやったさ」

「そうしたら」

「そうしたら、まだ何とも返事がないんだ。もつとも家へはもう来ていいるかも知れないが、何しろお延が来て見なければ、そこも分らない」

「しかしお父さんがどんなお返事をお寄こしになるか、兄さんには見^{けんとう}当がついて」

津田は何とも答えなかつた。お延の拵^{こし}らえてくれた纏^{どてら}袍^{えり}の襟^{えり}を手探^{てさぐ}りに探^{くろはちしよう}つて、黒八丈の下から抜き取った小楊枝^{こようじ}で、しきりに前歯をほじくり始めた。彼がいつまでも黙っているのです、お秀は同じ意味の質問をほかの言葉でかけ直した。

「兄さんはお父さんが快よく送金をして下さると思つていらつし

やるの」

「知らないよ」

津田はぶつきら棒に答えた。そうして腹立たしそうに後をつけ加えた。

「だからお母さんはお前の所へ何と云つて来たかつて、先刻から訊^きいてるじゃないか」

お秀はわざと眼を反^そらして縁^{えんがわ}側^わの方を見た。それは彼の前でああ、ああと嘆息して見せる所作^{しよさ}の代りに過ぎなかった。

「だから云わない事じゃないのよ。あたし始からこうなるだろうと思つてたんですもの」

九十五

津田はようやくお秀宛あてで来た手紙の中に、どんな事柄ことが書いてあるかを聞いた。妹の口から伝えられたその内容によると、父の怒りは彼の予期以上に烈しいものであった。月末の不足を自分で才覚さいかくするなら格別、もしそれさえできないというなら、これから先の送金も、見せしめのため、当分見合わせるかも知れないというのが父の実際の考えらしかった。して見ると、この間彼の所へそう云つて来た垣根つくろの繕つくろいだとか家賃とどこおの滞りだとかいうのは嘘うそでなければならなかった。よし嘘でないにしたところで、単に口先の云い前と思わなければならなかった。父がまた何で彼に対し

てそんなしらじらしい他人行儀を云つて寄こしたものだろ。叱るならもつと男らしく叱つたらよさそうなものなのに。

彼は沈吟ちんぎんして考えた。

山羊髯やぎひげを生はやして、

万事にもつたいを

つけたがる父の顔、意味もないのに束髪そくはつを嫌きらつて髻まげにばかり結

いたがる母の頭、そのくらいの特色はこの場合を解釈する何の手

がかりにもならなかつた。

「いったい兄さんが約束通りになさらないから悪いのよ」とお秀

が云つた。事件以後何度となく彼女によつて繰り返されるこの言葉ほど、津田の聞きたくないものはなかつた。約束通りにしないのが悪いくらいは、妹に教わらないでも、よく解つていた。彼は

ただその必要を認めなかつただけなのである。そうしてその立場

を他^{ひと}からも認めて貰いたかつたのである。

「だつてそりや無理だわ」とお秀が云つた。「いくら親子だつて約束は約束ですもの。それにお父さんと兄さんだけの事なら、どうでもいいでしょうけれども」

お秀には自分の良人^{おつと}の堀がそれに関係しているという事が一番重要な問題であつた。

「良人^{うち}でも困るのよ。あんな手紙をお母さんから寄こされると」

学校を卒業して、相当の職にありついて、新らしく家庭を構える以上、曲りなりにも親の厄介にならずに、独立した生計を営^{ひる}んで行かなければならないという父の意見を翻^むがえさせたものは堀の力であつた。津田から頼まれて、また無雑作^{むぞうさ}にそれを引き受

けた堀は、物価の騰貴^{とうき}、交際の必要、時代の変化、東京と地方との区別、いろいろ都合の好い材料を勝手に並べ立てて、勤儉一方の父を口説き落^{くど おと}したのである。その代り盆暮に津田の手に渡る賞与の大部分を割^さいて、月々の補助を一度に幾分か償却させるという方針を立てたのも彼であつた。その案の成立と共に責任のできた彼はまた至極^{しごく}呑気な男であつた。約束の履行^{りこう}などという事は、最初から深く考えなかつたのみならず、遂行^{すいこう}の時期が来た時分には、もうそれを忘れていた。詰責^{きつせき}に近い手紙を津田の父から受取つた彼は、ほとんどこの事件を念頭においていなかっただけに、驚ろかされた。しかし現金の綺麗^{きれい}に消費されてしまった後で、気がついたところで、どうする訳にも行かなかつた。楽天的な彼

はただ申し訳の返事を書いて、それを終了と心得ていた。ところが世間は自分のズボラに適當するように出来上っていないという事を、彼は津田の父から教えられなければならなかった。津田の父はいつまで経つても彼を責任者扱いにした。

同時に津田の財力には不相応と見えるくらいな立派な指輪がお延の指に輝き始めた。そうして始めにそれを見つけ出したものはお秀であつた。女同志の好奇心が彼女の神経を鋭敏にした。彼女はお延の指輪を賞^ほめた。賞めたついでにそれを買った時と所とを突きとめようとした。堀が保証して成立した津田と父との約束をまるで知らなかったお延は、平生の用心にも似ず、その点にかけて、全く無邪氣であつた。自分がどのくらい津田に愛されている

かを、お秀に示そうとする努力が、すべての顧慮こりよに打ち勝った。彼女はありのままをお秀に物語った。

不斷から派手はです過ぎる女としてお延を多少悪く見ていたお秀は、すぐその顛末てんまつを京都へ報告した。しかもお延が盆暮の約束を承知している癖に、わざと夫を唆そそのかして、返される金を返さないようにさせたのだという風な手紙の書方をした。津田が自分の細君に対する虚栄心から、内状をお延に打ち明けなかったのを、お秀はお延自身の虚栄心でもあるように、頭からきめてかかったのである。そうして自分の誤解をそのまま京都へ伝えてしまったのである。今でも彼女はその誤解から逃のがれる事ができなかった。したがってこの事件に関係していると、彼女の相手は兄の津田よ

りもむしろ嫂あによめのお延だと云った方が適切かも知れなかった。

「いったい嫂ねえさんはどういうつもりでいらつしやるんでしよう。

こんだの事について」

「お延に何にも関係なんかありやしないじゃないか。あいつにや何にも話しやしないんだもの」

「そう。じゃ嫂ねえさんが一番気楽でいいわね」

お秀は皮肉な微笑を見せた。津田の頭には、芝居に行く前の晩、これを質にでも入れようかと云つて、ぴかぴかする厚い帯を電灯の光に差し突けたお延の姿が、鮮あざやかに見えた。

「いったいどうしたらいいんでしょう」

お秀の言葉は不謹慎な兄を困らせる意味にも取れるし、また自分の当惑を洩らす表現にもなった。彼女には夫の手前というものがあつた。夫よりもなお遠慮勝な姑しゅうとさえその奥には控えていた。

「そりや良人うちだつて兄さんに頼まれて、口は利きいたようなものの、そこまで責任をもつつもりでもなかったんでしようからね。と云つて、何もあれは無責任だと今さらお断りをする気でもないでしょうけれども。とにかく万一の場合にはこう致しますからつて証文を入れた訳でもないんだから、そうお父さんのように、法律づくめに解釈されたつて、あたしが良人うちへ対して困るだけだわ」

津田は少くとも表面上妹の立場を認めるよりほかに道がなかった。しかし腹の中では彼女に対して気の毒だという料簡りようけんがどこにも起らないので、彼の態度は自然お秀に反響して来た。彼女は自分の前に甚はなはだ横着な兄を見た。その兄は自分の便利よりほかにほとんど何にも考えていなかった。もし考えているとすれば新らしく貰った細君の事だけであつた。そうして彼はその細君に甘くなつていた。むしろ自由にされていた。細君を満足させるために、外部に対しては、前よりは一層手前勝手にならなければならなかつた。

兄をこう見ている彼女は、津田に云わせると、最も同情に乏しい妹らしからざる態度を取つて兄に向つた。それを遠慮のない言

葉で云い現わすと、「兄さんの困るのは自業自得だからしょうがないけれども、あたしの方の始末はどうつけてくれるのですか」というような露骨千万なものになった。

津田はどうするとも云わなかった。またどうする気もなかった。かえって想像に困難なものとして父の料簡を、お秀の前に問題とした。

「いったいお父さんこそどういうつもりなんだろう。突然金を送らないとさえ宣告すれば、由雄は工面くめんするに違ないとも思っているのか知ら」

「そこなのよ、兄さん」

お秀は意味ありげに津田の顔を見た。そうしてまたつけ加えた。

「だからあたしが良人に対して困るって云うのよ」

微かすかな暗示が津田の頭ひらに閃めいた。秋あきぐち口に見る稲妻いなずまのよう

に、それは遠いものであつた、けれども鋭いものに違なかつた。それは父の品性に関係していた。今まで全く気がつかずにいたという意味で遠いという事も云える代りに、いったん気がついた以上、父の平生から押して、それを是認したくなるという点では、子としての津田に、ずいぶん鋭どく切り込んで来る性質たちのものであつた。心のうちで劈頭へきとうに「まさか」と叫んだ彼は、次の瞬間に「ことによると」と云い直さなければならなくなつた。

臆断の鏡によつて照らし出された、父の心理状態は、下しものような順序で、予期通りの結果に到着すべく仕組まれていた。——最

初に体ていよく送金を拒絶する。津田が困る。今までの行いきがかり上堀じょうに訳を話す。京都に対して責任を感じべく余儀なくされている堀は、津田の窮を救う事によつて、始めて父に対する保証の義務を果す事ができる。それで否いや応おうなしに例月分を立て替えてくれる。父はただ礼を云つて澄ましている。

こう段落をつけて考えて見ると、そこには或種の要心があつた。相当な理窟りくつもあつた。或程度の手腕は無論認められた。同時に何らの淡泊たんぱくさがそこには存在していなかつた。下劣とまで行かないでも、狐きつね臭くさい狡こ獪うかいな所も少しはあつた。小額の金に対するどはず度外れの執着心が殊ことさら更に目立つて見えた。要するにすべてが父らしくできていた。

ほかの点でどう衝突しようとも、父のこうした遣やり口くちに感心しないのは、津田といえどもお秀に譲らなかつた。あらゆる意味で父の同情者でありながら、この一点になると、さすがのお秀も津田と同じように眉まゆを顰ひそめなければならなかつた。父の品性。それはむしろ別問題であつた。津田はお秀の補助を受ける事を快よく思わなかつた。お秀はまた兄夫婦に対して好い感情をもつていなかった。その上夫や姑しゅうとへの義理もつらく考えさせられた。二人はまず實際問題をどう片づけていいかに苦しんだ。そのくせ口では双方とも底の底まで突き込んで行く勇氣がなかつた。互いの忤そんた度くから成立つた父の料簡りょうけんは、ただ会話の上で默認し合う程度に発展しただけであつた。

九十七

感情と理窟の纏れ合^{もつあ}った所を解^ほごしながら前へ進む事のできなかった彼らは、どこまでもうねうね歩いた。局所に触るようなま
た触らないような双方の態度が、心のうちで双方を焦^し烈^れつたくし
た。しかし彼らは兄^{きょうだい}妹^いであつた。二人共ねちねちした性質を
共通に具えていた。相手の淡泊^{さつぱり}しないところを暗^{あん}に非難しながら
らも、自分の方から爆発するような不^ふ体^{てい}裁^{さい}は演^{えん}じなかつた。ただ
津田は兄だけに、また男だけに、話を一点に括^{くく}る手際^{てぎわ}をお秀より
余計にもつていた。

「つまりお前は兄さんに対して同情がないと云うんだろう」

「そうじゃないわ」

「でなければお延に同情がないというんだろう。そいつはまあどつちにしたって同^{おん}なじ事だがね」

「あら、嫂^{ねえ}さんの事をあたし何とも云ってやしませんわ」

「要するにこの事件について一番悪いものはおれだと、結局こうなるんだろう。そりや今さら説明を伺わなくつてもよく兄さんには解^とつてる。だから好いよ。兄さんは甘んじてその罰を受けるから。今月はお父さんからお金を貰^{もら}わないで生きて行くよ」

「兄さんにそんな事ができて」

お秀の兄を冷笑^{あざ}けるような調子が、すぐ津田の次の言葉を喚^よび

起おこした。

「できなければ死ぬまでの事さ」

お秀はついにきりりと緊しまった口元を少し緩ゆるめて、白い歯を微かすかに見せた。津田の頭には、電灯の下で光る厚帯を弄いじくつているお延の姿が、再び現れた。

「いつそ今までの経済事情を残らずお延に打ち明けてしまおうか」

津田にとってそれほど容易たやすい解決法はなかった。しかし行きがかりから云うと、これほどまた困難な自白はなかった。彼はお延の虚栄心をよく知り抜いていた。それにできるだけの満足を与える事が、また取も直とりさずなお彼の虚栄心にほかならなかった。お延の自分に対する信用を、女に大切なその一いっ角かくにおいて突き崩くずすの

は、自分で自分に打撲傷だぶくしやうを与えるようなものであった。お延に
 気の毒だからという意味よりも、細君の前で自分の器量を下げな
 ければならないというのが彼の大きな苦痛になった。そのくらい
 の事と他ひとから笑われるようなこんな小さな場合ですら、彼はす
 ぐ動く気になれなかつた。家には現に金がある、お延に対して自
 己の体面を保つには有ありあま余るほどの金がある。のという勝手な
 事実の方がどうしても先に立つた。

その上彼はどんな時にでもむかつ腹を立てる男ではなかつた。
 己おのれを忘れるという事を非常に安つぽく見る彼は、また容易に己
 れを忘れる事のできない性質たちに父母から生みつけられていた。
 「できなければ死ぬまでさ」と放ほうり出だすように云つた後で、彼は

まだお秀の様子を窺^{うかが}っていた。腹の中に言葉通りの断乎^{だんこ}たる何物も出て来ないのが恥^はずかしいとも何とも思えなかった。彼はむしろ冷やかに胸の天秤^{てんびん}を働かし始めた。彼はお延に事情を打ち明ける苦痛と、お秀から補助を受ける不愉快とを商^{しょう}量^{りよう}した。そうしていつそ二つのうちで後の方を冒^{おか}したらどんなものだろうかと考えた。それに応^おずる力を充分もっていたお秀は、第一兄の心から後悔^{こうかい}していないのを慊^{あきた}らなく思った。兄の後に御本尊^{うしろ}のお延が澄^はまして控^{ひか}えているのを悪^{にく}んだ。夫の堀をこの事件の責任者でもあるように見倣^{みな}して、京都の父が遠廻しに持ちかけて来るのがいかにも業^{ごう}腹^{はら}であった。そんなこんな^{わだか}の蟠^{わだか}まりから、津田の意志が充分見え透^すいて来た後^{あと}でも、彼女は容易に自分の方で積極

的な好意を示す事をあえてしなかった。

同時に、器量望みで比較的富裕な家に嫁に行つたお秀に対する津田の態度も、また一種の自尊心に充ちていた。彼は成上りものに近いある臭味しゅうみを結婚後のこの妹に見出した。あるいは見出したと思つた。いつか兄いという厳めしい具足ぐそくを着けて彼女に対するような氣分に支配され始めた。だから彼といえども妄りみだにお秀の前に頭を下げる訳には行かなかつた。

二人はそれでどっちからも金の事を云い出さなかつた。そうして両方共両方で云い出すのを待つていた。その煮え切らない不徹底な内輪話の最中に、突然下女のお時が飛び込んで来て、二人の拵こしえかけていた局面を、一度に崩くずしてしまつたのである。

九十八

しかしお時のじかに来る前に、津田へ電話のかかつて来た事も
たしかであつた。彼は階子段はしごだんの途中で薬局生の面倒臭そうに取
り次ぐ「津田さん電話ですよ」という声を聞いた。彼はお秀との
対話をちよつとやめて、「どこからです」と訊き返した。薬局生
は下りながら、「おおかたお宅からでしょう」と云つた。冷笑な
この挨拶あいさつが、つい込み入った話に身を入れ過ぎた津田の心を横お
うちやくうちやくく着にした。芝居へ行つたぎり、昨日きのうも今日きょうも姿を見せないお
延の仕うちを暗あんに快よく思つていなかった彼をなお不愉快にした。

「電話で釣るんだ」

彼はすぐこう思った。昨日の朝もかけ、今日の朝もかけ、ことによると明日の朝も電話だけかけておいて、さんざん人の心を自分の方に惹き着けた後で、ひょっくり本当の顔を出すのが手だろうと鑑定した。お延の彼に対する平生の素振から推して見ると、この類測に満更な無理はなかった。彼は不用意の際に、突然としてしかも静肅しとやかに自分を驚ろかしに這入はいつて来るお延の笑顔さえ想像した。その笑顔がまた変に彼の心に影響して来る事も彼にはよく解っていた。彼女は一刹那いつせつなに閃めかすその鋭い武器の力で、いつでも即座に彼を征服した。今まで持ち応えもちこたに持ち応え抜いた心機をひらりと転換させられる彼から云えば、見す見す彼

女の術中に落ち込むようなものであった。

彼はお秀の注意もかわらず、電話をそのままにしておいた。

「なにどうせ用じやないんだ。構わないよ。放ほうっておけ」

この挨拶あいさつがまたお秀にはまるで意外であつた。第一はズボラを忌いむ兄の性質に釣り合わなかつた。第二には何でもお延の云いなり次第になつてゐる兄の態度でなかつた。彼女は兄が自分の手前を憚はばかつて、不断の甘いところを押し隠すために、わざと嫂あによめに對して無頓着むとんじやくを粧よそおうのだと解釈した。心のうちで多少それを小気味よく感じた彼女も、下から電話の催促をする薬局生の大きな声を聞いた時には、それでも兄の代りに立ち上らない訳に行かなかつた。彼女はわざわざ下まで降りて行つた。しかしそれは何の

役にも立たなかった。薬局生が好い加減にあしらって、荒らし抜いた後の受話器はもう不通になっていた。

形式的に義務を済ました彼女が元の座に帰って、再び二人に共通な話題の緒いとくち口を取り上げた時、一方では急せきこ込んだお時が、とうとう我慢し切れなくなつて自働電話を棄すてて電車に乗つたのである。それから十五分と経たたないうちに、津田はまた予想外な彼女の口から予想外な用事を聞かされて驚ろいたのである。

お時の帰つた後の彼の心は容易に元へ戻らなかつた。小林の性格はよく知り抜いているという自信はありながら、不意に自分の留守宅るすたくに押しかけて来て、それほど懇意でもないお延を相手に、話し込もうとも思わなかつた彼は、驚ろかざるを得ないのみなら

ず、また考えざるを得なかった。それは外套がいとうをやるやらないの問題ではなかった。問題は、外套とはまるで縁のない、しかし他ひとの外套を、平気でよく知りもしない細君の手からじかに貰い受けに行くような彼の性格であつた。もしくは彼の境遇が必然的に生み出した彼の第二の性格であつた。もう一步押して行くと、その性格がお延に向つてどう働らきかけるかが彼の問題であつた。そこには突飛とつびがあつた。自暴やけがあつた。満足の人間を常に不満足そうに眺める白い眼があつた。新らしく結婚した彼ら二人は、彼の接触し得る満足した人間のうちで、得意な代表者として彼から選せんたくんたく扱たくされる恐れがあつた。平生から彼を輕蔑けいべつする事において、何の容赦も加えなかつた津田には、またそういう素地したじを作つてお

いた自覚が充分あった。

「何をいうか分らない」

津田の心には突然一種の恐怖が湧いた。お秀はまた反対に笑い出した。いつまでもその小林という男を何とかかとか批評したがる兄の意味さえ彼女にはほとんど通じなかった。

「何を云ったって、構わないじゃありませんか、小林さんなんか。あんな人のいう事なんぞ、誰も本気にするものはありませんわ」
 お秀も小林の一面をよく知っていた。しかしそれは多く彼が藤井の叔父おじの前で出す一面だけに限られていた。そうしてその一面は酒を呑んだ時などとは、生れ変ったように打って違った穏やかな一面であった。

「そうでないよ、なかなか」

「近頃そんなに人が悪くなったの。あの人が」

お秀はやっぱり信じられないという顔つきをした。

「だって燐寸^{マツチ}一本だって、大きな家^{うち}を焼こうと思えば、焼く事もできるじゃないか」

「その代り火が移らなければそれまででしょう、幾箱燐寸^{マツチ}を抱え込んでいたって。嫂^{ねえ}さんはあんな人に火をつけられるような女じゃありませんよ。それとも……」

九十九

津田はお秀の口から出た下半句しもはんくを聞いた時、わざと眼を動かさなかった。よそを向いたまま、じつとその後あとを待っていた。しかし彼の聞こうとするその後あとはついに出来なかった。お秀は彼の気になりそうな事を半分云ったぎりで、すぐ句を改めてしまった。

「何だつて兄さんはまた今日に限つて、そんなつまらない事を心配していらつしやるの。何か特別な事情でもあるの」

津田はやはり元の所へ眼をつけていた。それはなるべく妹に自分の心を気取けどられないためであつた。眼の色を彼女に読よまれなかったためであつた。そうして現にその不自然な所作しよさから来る影響を受けていた。彼は何となく臆病な感じがした。彼はようやくお秀の

方を向いた。

「別に心配もしていないがね」

「ただ気になるの」

この調子で押して行くと彼はただお秀から冷笑かされるようなものであつた。彼はすぐ口を閉じた。

同時に先刻から催おしていた収縮感がまた彼の局部に起つた。
彼は二三度それを不愉快に経験した後で、あるいは今度も規則正しく一定の時間中繰り返さなければならぬのかという掛念に制せられた。

そんな事に気のつかないお秀は、なぜだか同じ問題をいつまでも放さなかつた。彼女はいつたん緒口を失つたその問題を、す

ぐ別の形で彼の前に現わして来た。

「兄さんはいつたい嫂さんねえをどんな人だと思つていらつしやるの」

「なぜ改まつて今頃そんな質問をかけるんだい。馬鹿らしい」

「そんならいいわ、伺わないでも」

「しかしなぜ訊きくんだよ。その訳を話したらいいじゃないか」

「ちよつと必要があつたから伺つたんです」

「だからその必要をお云いな」

「必要は兄さんのためよ」

津田は変な顔をした。お秀はすぐ後を云つた。

「だって兄さんがあんまり小林さんの事を気になさるからよ。何だか変じやありませんか」

「そりやお前にや解らない事なんだ」

「どうせ解らないから変なんでしょうよ。じやいったい小林さんがどんな事をどんな風に嫂さんに持ちかけるって云うの」

「持ちかけるとも何とも云つていやしないじやないか」

「持ちかける恐れがあるという意味です。云い直せば」

津田は答えなかった。お秀は穴の開く^あようにその顔を見た。

「まるで想像がつかないじやありませんか。たとえばいくらあの人人が悪くなつたにしたところで、何も云いようがないでしょう。ちよつと考えて見ても」

津田はまだ答えなかった。お秀はどうしても津田の答えるところ

ろまで行こうとした。

「よしんば、あの人何か云うにしたところで、嫂さんさえ取り合わなければそれまでじやありませんか」

「そりや聴きかないでも解とつてるよ」

「だからあたしが伺うんです。兄さんはいったい嫂さんをどう思つていらつしやるかつて。兄さんは嫂さんを信用していらつしやるんですか、いらつしやらないんですか」

お秀は急に畳みかけて来た。津田にはその意味がよく解らなかつた。しかしそこに相手の拍ひょうし子を抜く必要があつたので、彼は

判然はつきりした返事を避けて、わざと笑い出さなければならなかつた。

「大變な権幕けんまくだね。まるで詰問でも受けているようじゃないか」

「ごまかさないで、ちゃんとしたところをおっしやい」

「云えばどうするとうんだい」

「私はあなたの妹です」

「それがどうしたというのかね」

「兄さんは淡泊たんぱくでないから駄目よ」

津田は不思議そうに首を傾けた。

「何だか話が大変むずかしくなつて来たようだが、お前少し癪かんち違がいいをしているんじゃないかい。僕はそんな深い意味で小林の事を云い出したんでも何でもないよ。ただ彼奴あいつは僕の留守にお延に会つて何をいうか分らない困つた男だというだけなんだよ」

「ただそれだけなの」

「うんそれだけだ」

お秀は急に^{あてはず}的の外れたような様子をした。けれども黙ってはいなかった。

「だけど兄さん、もし堀のいない^{るす}留守に誰かあたしの所へ来て何か云うとするでしょう。それを堀が知って心配すると思っていらつしつて」

「堀さんの事は僕にや分らないよ。お前は心配しないと断言する気かも知れないがね」

「ええ断言します」

「結構だよ。——それで？」

「あたしの方もそれだけよ」

二人は黙らなければならなかった。

百

しかし二人はもう因果^{いんが}づけられていた。どうしても或物を或所まで、会話の手段で、互の胸から敲^{たた}き出さなければ承知ができなかった。ことに津田には目前の必要があつた。当座に逼^{せま}る金の工^く面^{めん}、彼は今その財源を自分の前に控えていた。そうして一度取り逃せば、それは永久彼の手に戻つて来そうもなかった。勢い彼はその点だけでもお秀に対する弱者の形勢に陥^{おちい}つていた。彼は失なわれた話頭を、どんな風にして取り返したものだろうと考えた。

「お秀病院で飯を食つて行かないか」

時間がちょうどこんな あいきよう 愛嬌をいうに適していた。ことに今

朝母と子供を連れて横浜の親類へ行つたという堀の家族は留守なので、彼はこの愛嬌に特別な意味をもたせる便宜もあつた。

「どうせ家へ帰つたつて用はないんだらう」

お秀は津田のいう通りにした。話は容易く たやす 二人の間に復活する

事ができた。しかしそれは単に きようだい 兄妹らしい話に過ぎなかつた。

そうして単に兄妹らしい話はこの場合彼らにとつてちつとも腹の たし 足にならなかつた。彼らはもつと相手の胸の中へ もぐ 潜り込もうとして機会を待った。

「兄さん、あたしここに持っていますよ」

「何を」

「兄さんの入用いりようのものを」

「そうかい」

津田はほとんど取り合わなかった。その冷淡さはまさに彼の自尊心に比例していた。彼は精神的にも形式的にもこの妹に頭を下げたくなかった。しかし金は取りたかった。お秀はまた金はどうでもよかった。しかし兄に頭を下げさせたかった。勢い兄の欲しがる金を餌えさにして、自分の目的を達しなければならなかった。結果はどうしても兄を焦しらす事に帰着した。

「あげましようか」

「ふん」

「お父さんはどうしたって下さりつこありませんよ」

「ことによると、くれないかも知れないね」

「だってお母さんが、あたしの所へちゃんとそう云って来ていらつしやるんですもの。今日その手紙を持って来て、お目かけようと思つてて、つい忘れてしまつたんですけれども」

「そりや知つてるよ。先刻さつきもうお前から聞いたじゃないか」

「だからよ。あたしが持つて来たつて云うのよ」

「僕を焦じらすためにかい、または僕にくれるためにかい」

お秀は打たれた人のように突然黙つた。そうして見る見るうちに、美しい眼の底に涙をいっぱい溜ためた。津田にはそれが口くやし惜涙なみだとしか思えなかつた。

「どうして兄さんはこの頃そんなに皮肉になつたんでしょう。どうして昔のように人の誠を受け入れて下さる事ができないんでしょう」

「兄さんは昔とちつとも違つてやしないよ。近頃お前の方が違つて来たんだよ」

今度は呆れた表情がお秀の顔にあらわれた。

「あたしがいつどんな風に変つたとおっしゃるの。云つて下さい」
「そんな事は他に訊^{ひと}かなくつても、よく考^きえて御覧、自分で解る事だから」

「いいえ、解りません。だから云つて下さい。どうぞ云つて聞かして下さい」

津田はむしろ冷やかな眼をして、鋭どく切り込んで来るお秀の様子を眺めていた。ここまで来ても、彼には相手の機嫌きげんを取り返した方が得とくか、またはくしやりと一度に押し潰つぶした方が得かという利害心が働はたらいていた。その中間を行こうと決心した彼は徐おもむろに口を開いた。

「お秀、お前には解らないかも知れないがね、兄さんから見ると、お前は堀さんの所へ行つてつから以来、だいぶ変つたよ」

「そりや変るはずですわ、女が嫁に行つて子供が二人もできれば誰だつて変るじゃありませんか」

「だからそれでいいよ」

「けれども兄さんに対して、あたしがどんなに変つたとおつしや

るんです。そこを聞かして下さい」

「そりや……」

津田は全部を答えなかった。けれども答えられないのではないという事を、語勢からお秀に解るようにした。お秀は少し間まをおいた。それからすぐ押し返した。

「兄さんのお腹なかの中には、あたしが京都へ告つげ口ぐちをしたという事が始終しじゅうあるんでしょう」

「そんな事はどうでもいいよ」

「いいえ、それできつとあたしを眼めの敵かたきにしていらっしやるんです」

「誰が」

不幸な言葉は二人の間に伏字ふせじのごとく潜在していたお延という名前に点火したようなものであつた。お秀はそれを松明たいまつのように兄の眼先に振り廻した。

「兄さんこそ違つたのです。嫂ねえさんをお貰いになる前の兄さんと、嫂さんをお貰いになつた後の兄さんとは、まるで違つています。誰が見たつて別の人です」

百一

津田から見たお秀は彼に対する僻見へきけんで武装されていた。ことに最後の攻撃は誤解その物の活動に過ぎなかつた。彼には「嫂さ

ん、嫂さん」を繰り返す妹の声がいかにも耳障りであつた。むしろ自己を満足させるための行為を、ことごとく細君を満足させるために起つたものとして解釈する妹の前に、彼は尠すくなからぬ不快を感じた。

「おれはお前の考えてるような二本棒にほんぼうじゃないよ」

「そりやそうかも知れません。嫂さんから電話がかかつて来ても、あたしの前じやわざと冷淡よそおを装つて、うっちゃつておおきになるくらいですから」

こういう言葉が所嫌ところきらわずお秀の口からひよいひよい続発して来るようになった時、津田はほとんど眼前の利害を忘れるべく余儀なくされた。彼は一二度腹の中で舌打をした。

「だからこいつに電話をかけるなど、あれだけお延に注意しておいたのに」

彼は神経の亢こうふん奮まぎを紛らす人のように、しきりに短かい口髭くちひげを引張った。しだいしだいに苦い顔をし始めた。そうしてだんだん言葉少なになった。

津田のこの態度が意外の影響をお秀に与えた。お秀は兄の弱点はが自分のために一皮ずつ赤裸あかはだかにされて行くので、しまいに彼は恥はじ入って、黙り込むのだとばかり考えたらしく、なお猛烈に進んだ。あたかももう一息ひといきで彼を全然自分の前に後悔させる事ができでもするような勢いきおいで。

「嫂さんといっしょになる前の兄さんは、もっと正直でした。少

なくとももつと淡泊たんぱくでした。私は証拠のない事を云うと思われるのが厭だから、有体ありていに事実を申します。だから兄さんも淡泊に私の質問に答えて下さい。兄さんは嫂さんをお貰もらいになる前、今こ度んだのような嘘うそをお父さんに吐ついた覚おぼえがありますか」

この時津田は始めて弱った。お秀の云う事は明らかな事実であった。しかしその事実はけっしてお秀の考えているような意味から起ったのではなかった。津田に云わせると、ただ偶然の事実に過ぎなかった。

「それでお前はこの事件の責任者はお延だと云うのかい」
お秀はそうだと答えたところをわざと外そとした。

「いいえ、嫂さんの事なんか、あたしちつとも云ってやしません。

ただ兄さんが変った証^{しょうこ}拠にそれだけの事実を主張するんです」

津田は表向どうしても負けなければならぬ形勢に陥^{おちい}つて来た。

「お前がそんなに変ったと主張したければ、変ったでいいじゃないか」

「よかないわ。お父さんやお母さんにすまないわ」

すぐ「そうかい」と答えた津田は冷淡に「そんならそれでもいいよ」と付け足した。

お秀はこれでもまだ後悔しないのかという顔つきをした。

「兄さんの変った証^{しょうこ}拠はまだあるんです」

津田は素^そ知らぬ風をした。お秀は遠慮なくその証拠というのを挙げた。

「兄さんは小林さんが兄さんの留守へ来て、嫂さんねえに何か云やしないかつて、先刻さつきから心配しているじゃありませんか」

「煩うるさいな。心配じゃないって先刻説明したじゃないか」

「でも気になる事はたしかなんでしょう」

「どうでも勝手に解釈するがいい」

「ええ。——どっちでも、とにかく、それが兄さんの変った証拠じゃありませんか」

「馬鹿を云うな」

「いいえ、証拠よ。たしかな証拠よ。兄さんはそれだけ嫂さんを恐れていらつしやるんです」

津田はふと眼を転じた。そうして枕に頭を載せたまま、下から

お秀の顔を覗のぞき込むようにして見た。それから好い恰好かつこうをした鼻柱しちゅうに冷笑の皺しわを寄せた。この余裕がお秀には全く突然であつた。もう一息ひといきで懺悔ざんげの深谷しんこくへ真ツ逆まさかさまに突き落すつもりでいた彼女は、まだ兄の後に平坦うしろへいたんな地面が残っているのではなからうかという疑いを始めて起した。しかし彼女は行けるところまで行かなければならなかつた。

「兄さんはついこの間まで小林さんなんかを、まるで鼻の先であしらつていらつしたじゃありませんか。何を云つても取り合ひなかつたじゃありませんか。それを今日に限こわつてなぜそんなに怖こわがるんです。たかが小林なんかを怖がるようになったのは、その相手が嫂さんだからじゃありませんか」

「そんならそれでいいさ。僕がいくら小林を怖がつたつて、お父さんやお母さんに対する不義理になる訳でもなからう」

「だからあたしの口を出す幕じやないとおっしゃるの」

「まあその見^{けんとう}当^あだろうね」

お秀は赫^{かつ}とした。同時に一筋の稲妻^{いなずま}が彼女の頭の中を走った。

百二

「解^{わか}りました」

お秀は鋭^{えい}どい声でこう云^い放^{はな}つた。しかし彼女の改^{きりこ}まった切

口^{くちよう}上^うは外面上何の変化も津田の上に持ち来さなかった。彼は

もう彼女の挑戦ちようせんに應ずる氣色けしきを見せなかつた。

「解りましたよ、兄さん」

お秀は津田の肩を揺ぶゆするような具合に、再び前の言葉を繰返した。津田は仕方なしにまた口を開いた。

「何が」

「なぜ嫂ねえさんに対して兄さんがそんなに氣をおいていらつしやるかという意味がです」

津田の頭に一種の好奇心が起つた。

「云つて御覽」

「云う必要はないんです。ただ私にその意味が解つたという事だけを承知していただければたくさんなんです」

「そんならわざわざ断る必要はないよ。黙って独りひとで解ったと思
っているがいい」

「いいえよくないんです。兄さんは私を妹と見倣みなしていらつしや
らない。お父さんやお母さんに關係する事でなければ、私には兄
さんの前で何にもいう権利がないものとしていらつしやる。だか
ら私も云いません。しかし云わなくつても、眼はちゃんとついて
います。知らないで云わないと思つておいでだと間違いますから、
ちよつとお断り致したのです」

津田は話をここいらで切り上げてしまふよりほかに道はないと
考えた。なまじいかかり合えばかかり合うほど、事は面倒になる
だけだと思つた。しかし彼には妹に頭を下げる気がちつともなか

った。彼女の前に後悔するなどという芝居じみた真似まねは夢にも思いつけなかった。そのくらいの事をあえてし得る彼は、平生から低く見ている妹にだけは、思いのほか高慢であつた。そうしてその高慢なところを、他人に対してよりも、比較的遠慮なく外へ出した。したがっていくら口先が和解的でも大して役に立たなかつた。お秀にはただ彼の中心にある軽蔑けいべつが、微温なまぬるい表現を通して伝わるだけであつた。彼女はもうやりきれないと云つた様子を先刻さつきから見せている津田を毫べうも容赦しなかつた。そうしてまた「兄さん」と云い出した。

その時津田はそれまでにまだ見出し得なかつたお秀の変化に気がついた。今までの彼女は彼を通して常に鋒先ほこさきをお延に向けて

いた。兄を攻撃するのも嘘うそではなかったが、矢面やおもてに立つ彼をよそにしても、背後に控えている嫂あねだけは是非射とめなければならぬというのが、彼女の真剣であつた。それがいつの間にか變つて来た。彼女は勝手に主客の位置を改めた。そうして一直線に兄の方へ向いて進んで来た。

「兄さん、妹は兄の人格に対して口を出す権利がないものでしょうか。よし権利がないにしたところで、もしそうした疑うたがいを妹が少しでももっているなら、綺麗きれにそれを晴らしてくれるのが兄の義務——義務は取り消します、私には不釣合な言葉かも知れませんか。——少なくとも兄の人情でしょう。私は今その人情をもつていらつしやらない兄さんを眼の前に見る事を妹として悲しみま

す」

「何を生意気な事を云うんだ。黙っている、何にも解りもしない癖に」

津田の癩癩かんしゃくは始めて破裂した。

「お前に人格という言葉の意味が解るか。たかが女学校を卒業したぐらいで、そんな言葉をおれの前で人並に使うのからして不都合だ」

「私は言葉に重きをおいていやしません。事実を問題にしているのです」

「事実とは何だ。おれの頭の中にある事実が、お前のような教養に乏しい女に捕つかまえられると思うのか。馬鹿め」

「そう私を輕蔑^{けいべつ}なさるなら、御注意までに申します。しかしよござんすか」

「いいも悪いも答える必要はない。人の病氣のところへ来て何だ、その態度は。それでも妹だというつもりか」

「あなたが兄さんらしくないからです」

「黙れ」

「黙りません。云うだけの事は云います。兄さんは嫂^{ねえ}さんに自由にされています。お父さんや、お母さんや、私などよりも嫂さんを大事にしています」

「妹より妻^{さい}を大事にするのはどこの国へ行つたって当り前だ」

「それだけならいいんです。しかし兄さんのはそれだけじゃない

んです。嫂さんを大事にしていながら、まだほかにも大事にしている人があるんです」

「何だ」

「それだから兄さんは嫂さんを怖こわがるのです。しかもその怖こわがるのは――」

お秀がこう云いかけた時、病室の襖ふすまがすうと開あいた。そうして蒼あおしろ白い顔をしたお延の姿が突然二人の前に現われた。

百三

彼女が医者いしやの玄関へかかったのはその三四分前であつた。医者

の診察時間は午前と午後に分れていて、午後の方は、役所や会社へ勤める人の便宜べんぎを計るため、四時から八時までの規定になっているので、お延は比較的閑静な扉ドアを開けて内へ入る事ができたのである。

実際彼女は三四さんよつか日前に來た時のように、編あみあげ上たためだの畳たたみつきだのという雑然たる穿物はきものを、一足も沓脱くつぬぎの上に見出みいださなかつた。患者の影は無論の事であつた。時間外という考えを少しも頭の中に入れていなかつた彼女には、それがいかにも不思議であつたくらい四圍あたりは寂寞ひっそりしていた。

彼女は森しんとした玄関の沓脱そくだつの上に、行儀よく揃そろえられたただ一足の女下駄を認めた。価段ねだんから云つても看護婦などの穿はきそ

うもない新らしいその下駄が突然彼女の心を躍おどらせた。下駄はまさしく若い婦人のものであつた。小林から受けた疑念で胸がいつぱいになつていた彼女は、しばらくそれから眼を放す事ができなかった。彼女は猛烈にそれを見た。

右手にある小さい四角な窓から書生が顔を出した。そうしてそこに動かないお延の姿を認めた時、誰すい何でもする人のような表情を彼女の上に注いだ。彼女はすぐ津田への来客があるかないかを確かめた。それが若い女であるかないかも訊きいた。それからわざと取次を断つて、ひとりで階はしご子段の下まで来た。そうして上を見上げた。

上では絶えざる話し声が聞こえた。しかし普通雑談の時に、言

葉が對話者の間を、淀みなく往ったり来たり流れているのはだ
 いぶ趣おもむきことを異にしていた。そこには強い感情があつた。亢奮こうふんがあ
 った。しかもそれを抑おさえつけようとする努力の痕あとがありありと聞
 こえた。他聞たぶんを憚はばかるとしか受取れないその談話が、お延の神経
 を針のように鋭どくした。下駄を見つめた時より以上の猛烈さが
 そこに現われた。彼女は一倍猛烈に耳を傾むけた。

津田の部屋は診察室の真上にあつた。家の構造から云うと、階
 子段を上あがつてすぐ取とつきが壁で、その右手がまた四畳半の小さい
 部屋になつているので、この部屋の前を廊下伝いに通り越さなけ
 れば、津田の寝ている所へは出られなかつた。したがつてお延の
 聴きこうとする談話は、聴くに都合の好くない見當けんとう、すなわち彼

女の後の方から洩れて来るのであつた。

彼女はそつと階子段を上つた。柔婉な体格をもつた彼女の足音は猫のように静かであつた。そうして猫と同じような成效をもつて酬いられた。

あがぐち
上り口の一方には、落ちない用心に、一間ほどの手欄が拵えてあつた。お延はそれに倚つて、津田の様子を窺つた。するとたちまち鋭いお秀の聲が彼女の耳に入つた。ことに嫂さんがという特殊な言葉が際立つて鼓膜に響いた。みごとに予期の外れた彼女は、またはつと思わせられた。硬い緊張が弛む暇なく再び彼女を襲つて来た。彼女は津田に向つてお秀の口から抛げつけられる嫂さんというその言葉が、どんな意味に用いられているかを知らな

ければならなかった。彼女は耳を澄ました。

二人の語勢は聴いているうちに急になって来た。二人は明らかに喧嘩けんかをしていた。その喧嘩の渦かちゅう中には、知らない間まに、自分が引き込まれていた。あるいは自分がこの喧嘩の主な原因おもかも知らなかった。

しかし前後の関係を知らない彼女は、ただそれだけで自分の位置をきめる訳に行かなかった。それに二人の使う、というよりもむしろお秀の使う言葉は霰あられのように忙がしかった。後から後から落ちてくる単語の意味を、一粒ずつ拾ぎんみって吟味ひましている閑などはとうていなかった。「人格」、「大事にする」、「当り前」、こんな言葉がそれからそれへとそこに佇立たたずんでいる彼女の耳みみたぶ朶ぶを

叩^{たた}きに來るだけであつた。

彼女は事件が分^{ぶん}明^{みょう}になるまでじつと動かずに立つていよう

かと考えた。するとその時お秀の口から最後の砲撃のように出た

「兄さんは嫂さんよりほかにもまだ大事にしている人があるのだ」

という句が、突然彼女の心を震^{ふる}わせた。際^{きわ}立つて明^{めい}瞭^{りょう}に聞こ

えたこの一句ほどお延にとって大切なものはなかつた。同時にこ

の一句ほど彼女にとって不明瞭なものもなかつた。後を聞かなけ

れば、それだけで独立した役にはとても立てられなかつた。お延

はどんな犠牲を払つても、その後を聴かなければ氣がすまなかつ

た。しかしその後はまたどうしても聴いていられなかつた。先刻^{さつき}

から一言^{ひとこと}葉^はごとに一調^{ひとちょう}子^しずつ高まつて來た二人の遣取^{やりとり}は、

ここで絶頂に達したものと見做すよりほかに途はなかつた。もう
一步も先へ進めない極端まで来ていた。もし強いて先へ出ようと
すれば、どつちかで手を出さなければならなかつた。したがって
お延は不体裁を防ぐ緩和剤として、どうしても病室へ入らなけ
ればならなかつた。

彼女は兄妹きようだいの中をよく知っていた。彼らの不和の原因が自
分にある事も彼女には平生から解っていた。そこへ顔を出すには、
出すだけの手際てぎわが要いつた。しかし彼女にはその自信がないでもな
かつた。彼女は際きわどい刹那せつなに覚悟をきめた。そうしてわざと静か
に病室の襖ふすまを開けた。

百四

二人ははたしてぴたりと黙った。しかし暴風雨がこれから荒れようとする途中で、急にその進行を止められた時の沈黙は、けっして平和の象徴^{シンボル}ではなかった。不自然に抑えつけられた無言の瞬間にはむしろ物^{もの}凄^{すご}い或物が潜んでいた。

二人の位置関係から云って、最初にお延を見たものは津田であった。南向の縁側の方を枕にして寝ている彼の眼に、反対の側^{がわ}から入って来たお延の姿が一番早く映るのは順序であった。その刹那に彼は二つのものをお延に握られた。一つは彼の不安であった。一つは彼の安堵^{あんど}であった。困ったという心持と、助かったという

心持が、包み蔵つつかくす余裕のないうちに、一度に彼の顔に出た。そうしてそれが突然入って来たお延の予期とぴたりと一致した。彼女はこの時夫の面上に現われた表情の一部分から、或物を疑つてもさしつか差支えないという証左しょうさを、永く心の中に掴つかんだ。しかしそれは秘密であつた。とつさの場合、彼女はただ夫の他の半面に応ずるのを、ここへ来た刻下こっかの目的としなければならなかつた。彼女は蒼白あおしろい頬ほに無理な微笑を湛たたえて津田を見た。そうしてそれがちようどお秀のふり返るのと同時に起つた所作しよさだったので、お秀にはお延が自分を出し抜いて、津田と默契を取り換わせているように取れた。薄赤い血潮が覚えずお秀の頬ほに上つた。

「おや」

「今日こんちは」

軽い挨拶あいさつが二人の間に起った。しかしそれが済むと話はいつものように続かなかつた。二人とも手持無沙汰てもちぶさたに圧迫され始めなければならなかつた。滅多めったな事の云えないお延は、脇わきに抱えて来た風呂敷包を開けて、岡本の貸してくれた英語の滑稽本こっけいぼんを出して津田に渡した。その指の先には、お秀が始終腹しじゅうの中で問題にしている例の指輪が光っていた。

津田は薄い小型な書物を一つ一つ取り上げて、さらさら頁ぺーじを翻えして見たぎりで、再びそれを枕元へ置いた。彼はその一行さえ読む気にならなかつた。批評を加える勇氣などはどこからも出て来なかつた。彼は黙っていた。お延はその間にまたお秀と二言ふたこと

三言^{みこと}ほど口を利^きいた。それもみんな彼女の方から話しかけて、必要な返事だけを、云わば相手の咽喉^{のど}から圧^おし出したようなものであつた。

お延はまた懷^{ふところ}中から一通の手紙を出した。

「今来^きがけに郵便函^{ゆうびんぼこ}の中を見たら入っておりましたから、持つて参りました」

お延の言葉は几帳面^{きちようめん}に改たまっていた。津田と差向いの時に比べると、まるで別人^{べつじん}のように礼儀正しかった。彼女はその形式的なよそよそしいところを暗^{あん}に嫌^{きら}っていた。けれども他人の前、ことにお秀の前では、そうした不自然な言葉遣^{づか}いを、一種の意味から余儀なくされるようにも思つた。

手紙は夫婦の間に待ち受けられた京都の父からのものであつた。これも前便と同じように書留になつていないので、眼前の用を弁ずる中味に乏しいのは、お秀からまだ何にも聞かせられないお延にもほぼ見当だけはついていた。

津田は封筒を切る前に彼女に云つた。

「お延駄目^{だめ}だとさ」

「そう、何が」

「お父さんはいくら頼んでももうお金をくれないんだそうだ」

津田の云い^い方は珍^{めづ}らしく真摯^{しんし}の氣に充^みちていた。お秀に對する

反抗心から、彼はいつの間にかお延に對して平^{ひら}たい旦^だ那樣^{なさま}になつていた。しかもそこに自分はまるで氣がつかずにいた。銜^{てら}い氣^け

のないその態度がお延には嬉^{うれ}しかった。彼女は慰さめるような温^あ味^{たかみ}のある調子で答えた。言葉遣いさえ吾知らず、平生^{ふだん}の自分に戻^もつてしまった。

「いいわ、そんなら。こつちでどうでもするから」

津田は黙^{もく}つて封を切^きつた。中から出^でた父の手紙はさほど長いものではなかつた。その上一目見ればすぐ要領を得^えられるくらいな大きな字で書いてあつた。それでも女二人は滑稽^{こっけいほん}本の場合のよう^きに口を利^きき合^あわなかつた。ひとしく注意の視線を巻紙の上に向^むけているだけであつた。だから津田がそれを読み了^{おわ}つて、元通りに封筒の中へ入れたのを、そのまま枕元へ投げ出した時には、二人にも大体の意味はもう呑^のみ込^こめていた。それでもお秀はわざと

訊きいた。

「何と書いてありますか、兄さん」

気のない顔をしていた津田は軽く「ふん」と答えた。お秀はちよつとよそを向いた。それからまた訊いた。

「あたしの云った通りでしょう」

手紙にははたして彼女の推察する通りの事が書いてあつた。しかしそれ見た事かといったような妹の態度が、津田にはいかにもさつき氣に喰くわなかつた。それでなくつても先刻いからの行いきがかり上じよう、彼は天然自然の返事をお秀に与えるのが業腹ごうはらであつた。

お延には夫の氣持がありありと読めた。彼女は心の中で再度の衝突を惧れた。^{おそ}と共に、夫の本意をも疑った。彼女の見た平生の夫には自制の念がどこへでもついて廻った。自制ばかりではなかった。腹の奥で相手を下に見る時の冷かさが、それにいつでも付け加わっていた。彼女は夫のこの特色中に、まだ自分の手に余る或物が潜んでいる事をも信じていた。それはいまだに彼女にとつての未知数であるにもかかわらず、そこさえ明^{めいりよう}瞭^{おさ}に抑えれば、苦もなく彼を満足に扱かい得るものとまで彼女は思い込んでいた。しかし外部に現われるだけの夫なら一口で評するのもそれほどむずかしい事ではなかった。彼は容易に怒らない人であつた。英語

で云えば、テンパーを失なわない例にもなろうというその人が、またどうして自分の妹の前にこう破裂しかかるのだろう。もつと、厳密に云えば、彼女が室^{へや}に入つて来る前に、どうしてあれほど露骨に破裂したのだろう。とにかく彼女は退^ひきかけた波が再び寄せ返す前に、二人の間に割り込まなければならなかった。彼女は喧^{けん}嘩の相手を自分に引き受けようとした。

「秀子さんの方へもお父さまから何かお音^{たより}信があつたんですか」

「いいえ母から」

「そう、やっぱりこの事について」

「ええ」

お秀はそれぎり何にも云わなかった。お延は後をつけた。

「京都でもいろいろお物もの費いりが多いでしょうからね。それに元々こちらが悪いんですから」

お秀にはこの時ほどお延の指にある宝石が光って見えた事なかった。そうしてお延はまたさも無邪気らしくその光る指輪をお秀の前に出していた。お秀は云った。

「そういう訳でもないんでしょうけれどもね。年寄は変なもので、兄さんを信じているんですよ。そのくらいの工面くめんはどうにでもできるぐらいに考えて」

お延は微笑した。

「そりや、いざとなればどうかこうにかなりますよ、ねえあなた」

こう云つて津田の方を見たお延は、「早くなるとおっしゃい」という意味を眼で知らせた。しかし津田には、彼女のして見せる眼の働らきが解つても、意味は全く通じなかった。彼はいつも繰り返す通りの事を云つた。

「ならん事もあるまいがね、おれにはどうもお父さんの云う事が変でならないんだ。垣根を繕^{つく}ろつたの、家賃が滞^{とど}つたのつて、そんな費用は元来些細^{ささい}なものじゃないか」

「そうも行かないでしょう、あなた。これで自分の家^{うち}を一軒持つて見ると」

「我々だつて一軒持つてるじゃないか」

お延は彼女に特有な微笑を今度はお秀の方に見せた。お秀も同

程度の愛嬌あいぎようを惜まずに答えた。

「兄さんはその底に何か魂胆こんたんがあるかと思つて、疑つていらつしやるんですよ」

「そりやあなた悪いわ、お父さまを疑ぐるなんて。お父さまに魂胆のあるはずはないじゃありませんか、ねえ秀子さん」

「いいえ、父や母よりもね、ほかにまだ魂胆があると思つてるんですよ」

「ほかに？」

お延は意外な顔をした。

「ええ、ほかにあると思つてるに違ないのよ」

お延は再び夫の方に向つた。

「あなた、そりやまたどういふ訳なの」

「お秀がそう云うんだから、お秀に訊きいて御覧よ」

お延は苦笑した。お秀の口を利く順番がまた廻まわつて来た。

「兄さんはあたし達が陰で、京都を突ツついたと思つてゐるんですよ」

「だつて——」

お延はそれより以上云う事ができなかった。そうしてその云つた事はほとんど意味をなさなかった。お秀はすぐその虚きよを充みたした。

「それで先刻さつきから大変御機嫌ごきげんが悪いのよ。もつともあたしと兄さんと寄るときつと喧嘩けんかになるんですけれどもね。ことにこの事件

このかた」

「困るのね」とお延は溜息ためいきまじ交りに答えた後で、また津田に訊きかけた。

「しかしそりや本当の事なの、あなた。あなただって真逆まさかそんな男らしくない事を考えていらつしやるんじゃないでしょう」

「どうだか知らないけれども、お秀にはそう見えるんだろうよ」
「だって秀子さん達がそんな事をなさるとすれば、いったい何の役に立つと、あなた思つていらつしやるの」

「おおかた見せしめのためだろうよ。おれにはよく解らないけれども」

「何の見せしめなの？　　いったいどんな悪い事をあなたなすつた

の」

「知らないよ」

津田は蒼蠅うるさそうにこう云った。お延は取りつく島もないといった風にお秀を見た。どうか助けて下さいという表情が彼女の細い眼と眉まゆの間に現われた。

百六

「なに兄さんが強情なんですよ」とお秀が云い出した。あによめ嫂に対し、何とか説明しなければならぬ位いち地に追いつめられた彼女は、こう云いながら腹の中でなおの事その嫂を憎にくんだ。彼女から見た

その時のお延ほど、空々しいまたずうずうしい女はなかった。

「ええ良人は強情よ」と答えたお延はすぐ夫の方を向いた。

「あなた本当に強情よ。秀子さんのおっしやる通りよ。そのくせだけは是非おやめにならないといけませんわ」

「いったい何が強情なんだ」

「そりやあたしにもよく解らないけれども」

「何でもかでもお父さんから金を取ろうとするからかい」

「そうね」

「取ろうとも何とも云つていやしないじゃないか」

「そうね。そんな事おっしやるはずがないわね。またおっしやつたところで効目がなければ仕方がありませんからね」

「じゃどこが強情なんだ」

「どこがつてお聴ききになつても駄目だめよ。あたしにもよく解らないんですから。だけど、どこかにあるのよ、強情なところが」

「馬鹿」

馬鹿と云われたお延はかえつて心持ち好きそうに微笑した。お秀はたまらなくなつた。

「兄さん、あなたなぜあたしの持つて来たものを素直すなおにお取りにならないんです」

「素直にも義剛ぎこうにも、取るにも取らないにも、お前の方でてんから出さないんじゃないか」

「あなたの方でお取りになるとおっしゃらないから、出せないん

です」

「こつちから云えば、お前の方で出さないから取らないんだ」

「しかし取るようにして取って下さらないければ、あたしの方だつて厭いやですもの」

「じゃどうすればいいんだ」

「解わかつてるじゃありませんか」

三人はしばらく黙っていた。

突然津田が云い出した。

「お延お前お秀に詫あやまつたらどうだ」

お延は呆あきれたように夫を見た。

「なんで」

「お前さえ詫まつたら、持つて来たものを出すというつもりなんだろう。お秀の料簡りようけんでは」

「あたしが詫まるのは何でもないわ。あなたが詫まれとおつしやるなら、いくらでも詫まるわ。だけど——」

お延はここで訴えの眼をお秀に向けた。お秀はその後あとさえぎを遮った。

「兄さん、あなた何をおつしやるんです。あたしがいつ嫂ねえさんに詫まつて貰もらいたいと云いました。そんな言がかりを捏造ねつぞうされては、あたしが嫂さんに対して面目めんぼくなくなるだけじゃありませんか」

沈黙がまた三人の上に落ちた。津田はわざと口を利きかなかつた。お延には利く必要がなかった。お秀は利く準備をした。

「兄さん、あたしはこれでもあなた方に対して義務を尽しているつもりです。――」

お秀がやつとこれだけ云いかけた時、津田は急に質問を入れた。
「ちよつとお待ち。義務かい、親切かい、お前の云おうとする言葉の意味は」

「あたしにはどっちだつて同おんなじ事です」

「そうかい。そんなら仕方がない。それで」

「それでじゃありません。だからです。あたしがあなた方の陰へ廻つて、お父さんやお母さんねえを突ツついた結果、兄さんや嫂つらさんに不自由をさせるのだと思われるのが、あたしにはいかに辛いです。だからその額だけをどうかして上げようと云う好意から、

今日わざわざここへ持つて来たと云うんです。実は昨日嫂きのうさんから電話がかかった時、すぐ来きようと思つたんですけれども、朝のうちは宅うちに用があつたし、午ひるからはその用で銀行へ行く必要ができたものですから、つい来損きそこなつちまつたんです。元々わずかな金額ですから、それについてとやかく云う気はちつともありませんけれども、あたしの方の心遣いは、まるで兄さんに通じていないんだから、それがただ残念だと云いたいんです」

お延はなお黙っている津田の顔を覗のぞき込んだ。

「あなた何とかおつしやいよ」

「何て」

「何てって、お礼をよ。秀子さんの親切に對してのお礼よ」

「たかがこれしきの金を貰うのに、そんなに恩に着せられちや厭いやだよ」

「恩に着せやしないって今云ったじやありませんか」とお秀が少し癩かんばし走った声で弁解した。お延は元通りの穏やかな調子を崩くずさなかつた。

「だから強情を張らずに、お礼をおつしやいと云うのに。もしお金を拝借するのがお厭いやなら、お金はいただかないでいいから、ただお礼だけをおつしやいよ」

お秀は変な顔をした。津田は馬鹿を云うなという態度を示した。

百七

三人は妙な羽目に陥^{おちい}つた。行^{いき}がかり上^{じよう}一種の關係で因果^{いんが}づけられた彼らはしだいに話をよそへ持つて行く事が困難になつてきた。席^{はす}を外す事は無論できなくなつた。彼らはそこへ坐^{すわ}つたなり、どうでもこうでも、この問題を解決しなければならなくなつた。

しかも傍^{はた}から見たその問題はけつして重要なものとは云えなかつた。遠くから冷静に彼らの身分と境遇を眺める事のできる地位に立つ誰の眼にも、小さく映らなければならぬ程度のものに過ぎなかつた。彼らは他^{ひと}から注意を受けるまでもなくよくそれを心得ていた。けれども彼らは争^せわなければならなかつた。彼らの背^せ後に背負^{なかにしょ}つてゐる因縁^{いんねん}は、他人に解らない過去から複雑な手を

延ばして、自由に彼らあやつを操った。

しまいに津田とお秀の間に下しものような問答が起った。

「始めから黙つていれば、それまでですけれども、いったん云い出しておきながら、持つて来た物を渡さずにこのまま帰るのも心持が悪うござんすから、どうか取つて下さいよ。兄さん」

「置いて行きたければ置いといでよ」

「だから取るようにして取つて下さいな」

「いったいどうすればお前の氣に入るんだか、僕には解らないがね、だからその条件をもつと淡泊たんぱくに云つちまったらいいじゃないか」

「あたし条件なんてそんなむずかしいものを要求してやしません。

ただ兄さんが心持よく受取つて下されば、それでいいんです。つまり兄きょうだい妹らしくして下されば、それでいいというだけです。

それからお父さんにすまなかつたと本氣にひとくち一口おつしやりさえすれば、何でもないんです」

「お父さんには、とつくの昔にもうすまなかつたと云つちまつたよ。お前も知つてるじゃないか。しかも一口や二口じゃないやね」
「けれどもあたしの云うのは、そんな形式的小説わびじやありません。心からの後悔です」

津田はたかがこれしきの事にと考えた。後悔などとは思ひも寄らなかつた。

「僕の詫よう様が空々そらそらしいとでも云うのかね、なんば僕が金を欲し

がるったって、これでも一人前いちにんまえの男だよ。そうぺこぺこ頭を下
げられるものか、考えても御覧な」

「だけれども、兄さんは実際お金が欲しいんでしょう」

「欲しくないとは云わないさ」

「それでお父さんに謝罪あやまったんでしよう」

「でなければ何も詫あやまる必要はないじゃないか」

「だからお父さんが下さらなくなったんですよ。兄さんはそこに
気がつかないんですか」

津田は口を閉じた。お秀はすぐ乗のしかか行って行った。

「兄さんがそういう気でいらつしやる以上、お父さんばかりじや
ないわ、あたしだって上げられないわ」

「じやお止^よしよ。何も無理に貰^{もら}おうとは云わないんだから」

「ところが無理にでも貰おうとおつしやるじゃありませんか」

「いつ」

「先刻^{さつき}からそう云つていらつしやるんです」

「言^いがかりを云うな、馬鹿」

「言^いがかりじゃありません。先刻から腹の中でそう云い続けに云つてるじゃありませんか。兄さんこそ淡泊でないから、それが口へ出して云えないんです」

津田は一種^{けわ}嶮しい眼をしてお秀を見た。その中には憎^{どう}悪が輝やいた。けれども良心に対して恥ずかしいという光はどこにも宿らなかった。そうして彼が口を利いた時には、お延でさえその意外

なのに驚ろかされた。彼は彼に支配できる最も冷静な調子で、彼女の予期とはまるで反対の事を云った。

「お秀お前の云う通りだ。兄さんは今改めて自白する。兄さんにはお前の持つて来た金が絶対にいりよう入用だ。兄さんはまた改めて公言する。お前は妹らしい情愛の深い女だ。兄さんはお前の親切を感謝する。だからどうぞその金をこの枕元へ置いて行つてくれ」

お秀の手先が怒りで顫ふるえた。両方の頬ほに血が差した。その血は心のどこからか一度に顔の方へ向けて動いて来るように見えた。色が白いのでそれが一層鮮あざやかであつた。しかし彼女の言葉遣づかいだけはそれほど変らなかつた。怒りの中に微笑うちさえ見せた彼女は、不意に兄を捨てて、輝やいた眼をお延の上に注いだ。

「嫂さん^{ねえ}どうしましょう。せつかく兄さんがああおっしゃるもの
ですから、置いて行つて上げましょうか」

「そうね、そりや秀子さんの御随意でござんすわ」

「そう。でも兄さんは絶対に必要だとおっしゃるのね」

「ええ良人^{うち}には絶対に必要かも知れせんわ。だけどあたしには
必要でも何でもないのよ」

「じゃ兄さんと嫂さんとはまるで別^{べつ}ツこなのね」

「それでいて、ちつとも別ツこじやないのよ。これでも夫婦だから、
何から何までいっしょくたよ」

「だって——」

お延は皆まで云わせなかつた。

「良人に絶対に必要なものは、あたしがちやんと拵こしらえるだけなのよ」

彼女はこう云いながら、昨日岡本の叔父おじに貰つて来た小切手を帯の間から出した。

百八

彼女がわざとらしくそれをお秀に見せるように取扱いながら、津田の手に渡した時、彼女には夫に対する一種の注文があつた。前後の行がゆきかりと自分の性格から割り出されたその注文というのはほかでもなかった。彼女は夫が自分としつくり呼吸を合わせて、

それを受け取つてくれれば好いがと心の中で祈つたのである。会
 心の微笑を洩らしながら首肯うなづずいて、それを鷹揚おうように枕元ほへ放り
 出すか、でなければ、ごく簡単な、しかし細君に対して最も満足
 したらしい札をただ一口述べて、再びそれをお延の手に戻すか、
 いずれにしてもこの小切手の出所でどころについて、夫婦の間に夫婦ら
 しい気脈が通じているという事実を、お秀に見せればそれで足り
 たのである。

不幸にして津田にはお延の所作しよさも小切手もあまりに突然過ぎた。
 その上こんな場合にやる彼の戯曲的技巧が、細君とは少し趣おもむきを異
 にしていた。彼は不思議そうに小切手を眺めた。それからゆつ々
 り訊きいた。

「こりやいたいどうしたんだい」

この冷やかな調子と、等しく冷やかな反問とが、登場の第一歩においてすでにお延の意気込を恨めしく摧いた。彼女の予期は外れた。

「どうもしないわ。ただ要るから拵えただけよ」

こう云った彼女は、腹の中でひやひやした。彼女は津田が真面目くさってその後を訊く事を非常に恐れた。それは夫婦の間に何らの氣脈が通じていない証拠を、お秀の前に暴露するに過ぎなかった。

「訳なんか病氣中に訊かなくってもいいのよ。どうせ後で解る事なんだから」

これだけ云った後でもまだ不安心でならなかったお延は、津田がまだ何とも答えない先に、すぐその次を付け加えてしまった。「よし解らなくったって構わないじゃないの。たかがこのくらいのお金なんですもの、拵えようと思えば、どこからでも出て来るわ」

津田はようやく手に持った小切手を枕元へ投げ出した。彼は金を欲しがる男であつた。しかし金を珍重する男ではなかつた。使うために金の必要を他人より余計痛切に感ずる彼は、その金を軽^い蔑する点において、お延の言葉を心から肯定するような性質をもっていた。それで彼は黙っていた。しかしそれだからまたお延に一口の礼も云わなかつた。

彼女は物足らなかつた。たとい自分に何とも云わないまでも、お秀には溜飲りゆういんの下さがるような事を一口でいいから云つてくれればいいのにと、腹の中で思つた。

先刻さつきから二人の様子を見ていたそのお秀はこの時急に「兄さん」と呼んだ。そうして懷ふところから綺麗な女持の紙入を出した。

「兄さん、あたし持つて来たものをここへ置いて行きます」
彼女は紙入の中から白紙はくしで包んだものを抜いて小切手の傍そばへ置いた。

「こうしておけばそれでいいでしょう」

津田に話しかけたお秀は暗あんにお延の返事を待ち受けるらしかつた。お延はすぐ応じた。

「秀子さんそれじゃすみませんから、どうぞそんな心配はしないで置いて下さい。こつちでできないうちは、ともかくもですけれども、もう間に合ったんですから」

「だけどそれじゃあたしの方がまた心持が悪いのよ。こうしてせっかく包んでまで持って来たんですから、どうかそんな事を云わずに受取って置いて下さいよ」

二人は譲り合った。同じような問答を繰り返し始めた。津田はまた辛防強しんぼうづよくいつまでもそれを聴きいていた。しまいには二人はとうとう兄に向わなければならなくなった。

「兄さん取つといて下さい」

「あなたにたいてもよくって」

津田はにやにやと笑った。

「お秀妙だね。先刻はあんなに強硬だったのに、今度はまた馬鹿に安っぽく貰わせようとするんだね。いったいどっちが本当なんだい」

お秀は屹きつとなった。

「どっちも本当です」

この答は津田に突然であつた。そうしてその強い調子が、どこまでも冷笑的に構えようとする彼の機鋒きほうを挫くじいた。お延にはなおさらであつた。彼女は驚ろいてお秀を見た。その顔は先刻と同じように火熱ほてつていた。けれども涼しい彼女の眼に宿る光りは、ただの怒りばかりではなかった。口惜くやしいとか無念だとかいう敵意

のほかに、まだ認めなければならぬ或物がそこに陽炎^{かげろ}つた。しかしそれが何であるかは、彼女の口を通して聴^きくよりほかに途^{みち}がなかった。二人は惹^ひきつけられた。今まで持続して来た心の態度に角度の転換が必要になった。彼らは遮^{さへ}ぎる事なしに、その輝やきの説明を、彼女の言葉から聴^きこうとした。彼らの予期と同時に、その言葉はお秀の口を衝^ついて出た。

百九

「実は先刻^{さつき}から云おうか止^よそうかと思つて、考えていたんですけれども、そんな風に兄さんから冷笑^{ひや}かされて見ると、私だつて黙

って帰るのが厭いやになります。だから云うだけの事はここで云ってしまします。けれども一応お断りしておきますが、これから申し上げる事は今までのとは少し意味が違いますよ。それを今まで通りの態度で聴いていられると、私だって少し迷惑するかも知れません、というのは、ただ私が誤解されるのが厭だという意味でなくって、私の心持があなた方に通じなくなるという誤わけ合あいからです」

お秀の説明はこういう言葉で始まった。それがすでに自分の態度を改めかかっている二人の予期に一倍の角度を与えた。彼らは黙ってその後あとを待った。しかしお秀はもう一遍念を押した。

「少しや真面目まじめに聴いて下さるでしょうね。私の方が真面目にな

つたら」

こう云つたお秀はその強い眼を津田の上からお延に移した。

「もつとも今までが不真面目という訳でもありませんけれどもね。何しろ嫂ねえさんさえここにいて下されば、まあ大丈夫でしょう。いつもの兄きょうだい妹喧嘩いげんかになつたら、その時に止とめていただければそれまでですから」

お延は微笑して見せた。しかしお秀は応じなかった。

「私はいつかつから兄さんに云おう云おうと思つていたんです。嫂さんのいらつしやる前ですよ。だけど、その機会がなかったから、今日きょうまで云わずにいました。それを今改めてあなた方のお揃そろいになったところで申してしまふのです。それはほかでもあり

ません。よござんすか、あなた方お二人は御自分達の事よりほかに何にも考えていらつしやらない方だかたという事だけなんです。自分達さえよければ、いくら他ひとが困ろうが迷惑しようが、まるでよそを向いて取り合わずにいられる方だというだけなんです」

この断案を津田はむしろ冷静に受ける事ができた。彼はそれ自分の特色と認める上に、一般人間の特色とも認めて疑わなかったのだから。しかしお延にはまたこれほど意外な批評はなかった。彼女はただ呆れるあきばかりであつた。幸か不幸かお秀は彼女の口を開く前にすぐ先へ行つた。

「兄さんは自分を可愛がるだけなんです。嫂さんはまた兄さんに可愛がられるだけなんです。あなた方の眼にはほかに何にもない

んです。妹などは無論の事、お父さんもお母さんもうないんです」

ここまで来たお秀は急に後を継ぎ足した。二人の中の一人が自分を遮さへぎりはしまいかと恐れでもするような様子を見せて。

「私はただ私の眼に映った通りの事実を云うだけです。それをどうして貰もらいたいというのではありません。もうその時機は過ぎました。有ありてい体にいうと、その時機は今日過ぎたのです。実はたつた今過ぎました。あなた方の気のつかないうちに、過ぎました。私は何事も因いんねん縁えんずくと諦あきらめるよりほかに仕方ありません。しかしその事実から割り出される結果だけは是非共あなた方に聴いていただきたいのです」

お秀はまた津田からお延の方に眼を移した。二人はお秀のいわゆる結果なるものについて、判然はつきりした観念がなかった。したがってそれを聴く好奇心があつた。だから黙つていた。

「結果は簡単です」とお秀が云つた。「結果は一口で云えるほど簡単です。しかし多分あなた方には解らないでしょう。あなた方はけつして他の親切ひとを受ける事のできない人だという意味に、多分御自分じゃ気がついていらつしやらないでしょうから。こう云つても、あなた方にはまだ通じないかも知れないから、もう一遍繰り返します。自分だけの事しか考えられないあなた方は、人間として他の親切に應ずる資格を失なつていらつしやるといふのが私の意味なのです。つまり他の好意に感謝する事のできない人間

に切り下げられているという事なのです。あなた方はそれでたくさんだと思つていらつしやるかも知れません。どこにも不足はないと考へておいでなのかも分りません。しかし私から見ると、それはあなた方自身にとつてとんでもない不幸になるのです。人間らしく嬉^{うれ}しがる能力を天^{てん}から奪われたと同様に見えるのです。兄さん、あなたは私の出したこのお金は欲しいとおつしやるのでしよう。しかし私のこのお金を出す親切は不用だとおつしやるのでなのです。だから大変な不幸なのです。そうして兄さんはその不幸に気がついていらつしやらないのです。嫂^{ねえ}さんはまた私の持つて来たこのお金を兄さんが貰わなければいいと思つていらつしや

るんです。さつきから貰わせまい貰わせまいとしていらつしやるんです。つまりこのお金を断ることによつて、併せて私の親切をも排斥しようとなさるのです。そうしてそれが嫂さんには大変なお得意になるのです。嫂さんも逆です。嫂さんは妹の実意を素直すなおに受けるために感じられる好い心持が、今のお得意よりも何層倍人間として愉快だか、まるで御存じない方かたなのです」

お延は黙っていられなくなつた。しかしお秀はお延よりなお黙つていられなかつた。彼女を遮さへぎろうとするお延の出鼻を抑おさえつけるような熱した語気で、自分の云いたい事だけ云つてしまわなければ気がすまなかつた。

百十

「嫂さん何かおつしやる事があるなら、後でゆっくり伺いますから、御迷惑でも我慢して私に云うだけ云わせてしまつて下さい。なにもう直じきです。そんなに長くかかりやしません」

お秀の断り方は妙に落ちついていた。先刻さつき津田と衝突した時に比べると、彼女はまるで反対の傾向を帯びて、激昂げつこうから沈静の方へ推おし移つて来た。それがこの場合いかにも案外な現象として二人の眼に映つた。

「兄さん」とお秀が云つた。「私はなぜもつと早くこの包んだ物を兄さんの前に出さなかつたのでしよう。そうして今になってま

た何できまりが悪くもなく、それをあなた方の前に出されたのでしよう。考えて下さい。嫂^{ねえ}さんも考えて下さい」

考えるまでもなく、二人にはそれがお秀の詭弁^{きべん}としか受取れなかった。ことにお延にはそう見えた。しかしお秀は真面目^{まじめ}であった。

「兄さん私はこれであなたを兄さんらしくしたかったです。たかがそれほど金でかと兄さんはせせら笑うでしょう。しかし私から云えば金^{かね}額^{ねだか}は問題じゃありません。少しでも兄さんを兄さんらしくできる機会があれば、私はいつでもそれを利用する気なのです。私は今日^{きょう}ここでできるだけの努力をしました。そうしてみごとに失敗しました。ことに嫂さんがおいでになってから以後、

私の失敗は急に目立って来ました。私が妹として兄さんに対する執着を永久に放り出さなければならなくなつたのはその時です。

——嫂さん、後生ごしょうですから、もう少し我慢して聴いて下さい」

お秀はまたこう云つて何か云おうとするお延を制した。

「あなた方の態度はよく私に解わかりました。あなた方から一時間二時間の説明を伺うより、今ここで拝見しただけで、私が勝手に判断する方が、かえつてよく解るように思われますから、私はもう何にも伺いません。しかし私には自分を説明する必要がまだあります。そこは是非聴いていただかなければなりません」

お延はずいぶん手前勝手な女だと思ひながら黙っていた。しか

し初手^{しよて}から勝利者の余裕が附着している彼女には、黙っていても大した不足はなかった。

「兄さん」とお秀が云った。「これを見て下さい。ちゃんと紙に包んであります。お秀が宅^{うち}から用意して持って来たという証拠にはなるでしょう。そこにお秀の意味はあるのです」

お秀はわざわざ枕元の紙包を取り上げて見せた。

「これが親切というものです。あなた方にはどうしてもその意味がお解りにならないから、仕方なしに私が自分で説明します。そうして兄さんが兄さんらしくして下さらなくつても、私は宅^{うち}から持って来た親切をここへ置いて行くよりほかに途^{みち}はないのだという事もいっしょに説明します。兄さん、これは妹の親切ですか義

務ですか。兄さんは先刻さつきそういう間を私におかけになりました。

私はどつちも同じだおんなと云いました。兄さんが妹の親切を受けて下

さらないのに、妹はまだその親切を尽くす気でいたら、その親切は義務とどこが違うんでしょう。私の親切を兄さんの方で義務に変化させてしまうだけじゃありませんか」

「お秀もう解つたよ」と津田がようやく云い出した。彼の頭に妹のいう意味は判然はつきり入った。けれども彼女の予期する感情は少しも起らなかった。彼は先刻から蒼蠅うるさいのを我慢して彼女の云い草を聴いていた。彼から見た妹は、親切でもなければ、誠実でもなかった。愛嬌あいきようもなければ気高けだかくもなかった。ただ厄介やっかいなだけであった。

「もう解ったよ。それでいいよ。もうたくさんだよ」

すでに諦^{あきら}めていたお秀は、別に恨^{うら}めしそうな顔もしなかった。ただこう云った。

「これは良人^{うち}が立て替えて上げるお金ではありませんよ、兄さん。良人が京都へ保証して成り立った約束を、兄さんがお破りになつたために、良人ではお父さんの方へ義理ができて、仕方なしに立て替えた事になるとしたら、なんぼ兄さんだって、心持よく受ける気にはなれないでしょう。私もそんな事で良人^{うち}を煩^{わづら}わせるのは厭^{いや}です。だからお断りをしておきますが、これは良人とは関係のないお金です。私のです。だから兄さんも黙ってお取りになれるでしょう。私の親切はお受けにならないでも、お金だけはお取

りになれるでしょう。今の私はなまじいお礼を云つていただくより、ただ黙つて受取つておいて下さる方が、かえつて心持が好くなつてゐるのです。問題はもう兄さんのためじやなくなつてゐるんです。単に私のためです。兄さん、私のためにどうぞそれを受取つて下さい」

お秀はこれだけ云つて立ち上つた。お延は津田の顔を見た。その顔には何と^{なん}いふ^{あいず}合図の表情も見えなかつた。彼女は仕方なしにお秀を送つて階子段^{はしごだん}を降りた。二人は玄関先で尋常の挨拶^{あいさつ}と^{かわ}交り換せて別れた。

単に病院でお秀に出会うという事は、お延にとって意外でも何でもなかった。けれども出会った結果からいうと、また意外以上の意外に帰着した。自分に対するお秀の態度を平生から心得ていた彼女も、まさかこんな場面^{シーン}でその相手になろうとは思わなかった。相手になった後^{あと}でも、それが偶然の廻^{まわ}り合せのように解釈されるだけであつた。その必然性を認めるために、過去の因果^{いんが}を迹^あ付けて見ようという気さえ起らなかった。この心理状態をもっと砕けた言葉で云い直すと、事件の責任は全く自分にないという事に過ぎなかった。すべてお秀が背負^{しよ}つて立たなければならぬという意味であつた。したがつてお延の心は存外平静であつた。少

くとも、良心に対して^や疚ましい点は容易に見出^みだされなかつた。

この会見からお延の得た収獲は二つあつた。一つは事後に起る不愉快さであつた。その不愉快さのうちには、お秀を通して今後自分達の上に持ち来^もされ^{きた}そうに見える葛藤^{かつとう}さえ織り込まれてゐた。彼女は充分それを切り抜けて行く覚悟をもつてゐた。ただしそれには、津田が飽^あくまで自分の肩を持つてくれなければ駄目だという条件が附帯してゐた。そこへ行くと彼女には七分^{しちぶどお}通りの安心と、三分^{さんぶがた}方の不安があつた。その三分方の不安を、今日^{きょう}の自分が、どのくらいの程度に減らしているかは、彼女にとって重大な問題であつた。少くとも今日の彼女は、夫の愛を買うために、もしくはそれを買ひ戻すために、できるだけの実^{じつ}を津田に見せた

という意味で、幾分かの自信をその方面に得たつもりなのである。

これはお延自身に解^がっている側の消^{しょうそく}息^{ちゆう}中で、最も必要と

認めなければならぬ一端であるが、そのほかにまだ彼女のいつ
こう知らない間^まに、自然自分の手に入るように仕組まれた収獲が
できた。無論それは一時的のものに過ぎなかった。けれども当然
自分の上に向けられるべき夫の猜疑^{さいぎ}の眼^めから、彼女は運よく免^{まぬ}か
れたのである。というのは、お秀という相手を引き受ける前の津
田と、それに悩まされ出した後の彼とは、心持から云つても、意
識の焦点になるべき対象から見ても、まるで違っていた。だから
この変化の強く起^きつた際^{きわ}どい瞬間に姿を現わして、その変化の波
を自然のままに拡^{ひろ}げる役を勤めたお延は、吾^{われ}知らず儲^もけものをし

たのと同じ事になったのである。

彼女はなぜ岡本が強^しいて自分を芝居へ誘^うつたか、またなぜその岡本の宅^{うち}へ昨日行^{きのう}かなければならなくなったか、そんな内情に關するすべての自分を津田の前に説明する手^て数^{かず}を省^{はぶ}く事ができた。むしろ自分の方から云い出したいくらいな小林の言葉についてすら、彼女は一口も語る余裕をもたなかつた。お秀の歸つたあとの二人は、お秀の事で全く頭を占領^{せんりやう}されていた。

二人はそれを二人の顔つきから知つた。そうして二人の顔を見合せたのは、お秀を送り出したお延^{おのび}が、階^{はしご}子^ご段^{だん}を上^あつて、また室^{へや}の入口にそのすらりとした姿を現^{あらわ}した刹^{せつ}那^なであつた。お延は微笑した。すると津田も微笑した。そこにはほかに何^{なん}にもなかつ

た。ただ二人がいるだけであった。そうして互の微笑が互の胸の底に沈んだ。少なくともお延は久しぶりに本来の津田をそこに認めたような気がした。彼女は肉の上に浮び上ったその微笑が何の象徴であるかをほとんど知らなかった。ただ一種の恰好をとつて動いた肉その物の形が、彼女には嬉しい記念であつた。彼女は大事にそれを心の奥にしまい込んだ。

その時二人の微笑はにわかに変つた。二人は齒を露わすまでに口を開けて、一度に声を出して笑い合つた。

「驚ろいた」

お延はこう云いながらまた津田の枕元へ来て坐つた。津田はむしろ落ちついて答えた。

「だから彼奴あいつに電話なんかかけるなつて云うんだ」

二人は自然お秀を問題にしなければならなかった。

「秀子さんは、まさかキリストきよう基督教じゃないでしょうね」

「なぜ」

「なぜでも——」

「金を置いて行つたからかい」

「そればかりじゃないのよ」

「真面目まじめくさつた説法をするからかい」

「ええまあそうよ。あたし始めてだわ。秀子さんのあんなむずかしい事をおつしやるところを拝見したのは」

「彼奴は理窟屋りくつやだよ。つまりああ捏ね返こえさなければ気がすまない

女なんだ」

「だつてあたし始めてよ」

「お前は始めてき。おれは何度だか分りやしない。いったい何でもないのに高尚がるのが彼奴の癖なんだ。そうして生じなまい藤井の叔父の感化を受けてるのが毒になるんだ」

「どうして」

「どうしてつて、藤井の叔父の傍そばにいて、あの叔父の議論好きなところを、始しじゅう終見ていたもんだから、とうとうあんなに口が達者になつちまったのさ」

津田は馬鹿らしいという風をした。お延も苦笑した。

百十二

久しぶりに夫と直じかに向き合つたような氣のしたお延は嬉うれしかつた。二人の間にいつの間にかかけられた薄い幕を、急に切つて落した時の晴々はればれしい心持になつた。

彼を愛する事によつて、是非共自分を愛させなければやまない。

——これが彼女の決心であつた。その決心は多大の努力を彼女に促うながした。彼女の努力は幸い徒勞に終らなかつた。彼女はついに酬むくいられた。少なくとも今後の見込を立て得るくらいの程度において酬はたんいられた。彼女から見れば不慮の出来事と云わなければならぬこの破綻はたんは、取も直とりさず彼女にとって復活の曙しやこう光であつ

た。彼女は遠い地平線の上に、薔薇色ばらいろの空を、薄明るく眺める事ができた。そうしてその暖かい希望の中に、この破綻から起るすべての不愉快を忘れた。小林の残酷に残して行つた正体の解らない黒い一点、それはいまだに彼女の胸の上にあつた。お秀の口から迸ほとばしるように出た不審の一句、それも疑惑の星となつて、彼女の頭の中に鈍い瞬にぶきを見せた。しかしそれらはもう遠い距離に退しりぞいた。少くともさほど苦くにならなかつた。耳に入れた刹那せつなに起つた昂奮こうふんの記憶さえ、再び呼び戻す必要を認めなかつた。

「もし万一の事があるにしても、自分の方は大丈夫だ」

夫に對するこういう自信さえ、その時のお延の腹にはできた。したがって、いざという場合に、どうしても臨機の所置をつけて見

せるといふ余裕があつた。相手を片づけるぐらいの事なら訳はないという氣持も手伝つた。

「相手？　どんな相手ですか」と訊きかれたら、お延は何と答えただろう。それは朧おぼろげ氣に薄うす墨すみで描かれた相手であつた。そうして女であつた。そうして津田の愛を自分から奪う人であつた。お延はそれ以外に何なんにも知らなかつた。しかしどこかにこの相手が潜ひそんでいるとは思へた。お秀と自分ら夫婦の間に起つた波瀾はらんが、ああまで際きわどくならずすんだなら、お延は行いきがかり上じょう、是非共津田の腹のなかにいるこの相手を、遠くから探さがさなければならぬい順序だつたのである。

お延はそのプログラムを狂わせた自分を顧みて、むしろ幸福だ

と思った。気がかりを後へ繰り越すのが辛くて耐らないとはけつして考えなかつた。それよりもこの機会を緊張でできるだけ緊張させて、親切な今の自分を、強く夫の頭の中に叩き込んでおく方が得策だと思案した。

こう決心するや否や彼女は嘘を吐いた。それは些細の嘘であつた。けれども今の場合に、夫を物質的と精神的の両面に亘つて、窮地から救い出したものは、自分が持つて来た小切手だという事を、深く信じて疑わなかつた彼女には、むしろ重大な意味をもつていた。

その時津田は小切手を取り上げて、再びそれを眺めていた。そこに書いてある額は彼の要求するものよりかえつて多かつた。し

かしそれを問題にする前、彼はお延に云った。

「お延ありがとう。お蔭かげで助かったよ」

お延の嘘はこの感謝の言葉の後に随ついて、すぐ彼女の口を滑すべつて出てしまった。

「昨日岡本へ行ったのは、それを叔父さんから貰もらうためなのよ」

津田は案外な顔をした。岡本へ金策をしに行つて来いと夫から頼まれた時、それを断然跳はねつけたものは、この小切手を持つて来たお延自身であつた。一週間と経たたないうちに、どこからそんな好意が急に湧わいて出たのだろうと思うと、津田は不思議でならなかつた。それをお延はこう説明した。

「そりや厭いやなのよ。この上叔父さんにお金の事なんかで迷惑をか

けるのは。けれども仕方がないわ、あなた。いざとなればそのく
らいの勇気を出さなくっちゃ、妻としてのあたしの役目がすみま
せんもの」

「叔父さんに訳を話したのかい」

「ええ、そりやずいぶん辛^{つら}かったの」

お延は津田へ来る時の支度を大部分岡本に拵^{こしら}えて貰^{もら}っていた。

「その上お金なんかには、ちつとも困らない顔を今日^{きょう}までして来
たんですもの。だからなおきまりが悪いわ」

自分の性格から割り出して、こういう場合のきまりの悪さ加減
は、津田にもよく呑^のみ込めた。

「よくできたね」

「云えばできるわ、あなた。無いんじゃないんですもの。ただ云い悪いだけよ」

「しかし世の中にはまたお父さんだのお秀だのっていう、むずかしやも揃そろっているからな」

津田はかえつて自尊心を傷きずけられたような顔つきをした。お延はそれを取り繕とつくろうように云った。

「なにそう云う意味ばかりで貰もらつて来た訳でもないのよ。叔父さんにはあたしに指輪を買かつてくれる約束があるのよ。お嫁に行くとき買かつてやらない代りに、今に買かつてやるつて、此間こないだからそう云つてたのよ。だからそのつもりでくれたんでしようおかた。心配しないでもいいわ」

津田はお延の指を眺めた。そこには自分の買つてやった宝石がちゃんと光っていた。

百十三

二人はいつになく融とけ合つた。

今までお延の前で体面を保つために武装していた津田の心が吾わ知れらず弛ゆるんだ。自分の父が鄙ひりん吝らしく彼女の眼に映りはしまいかという掛け念ねん、あるいは自分の予期以下に彼女が父の財力を見縊みくびりはしまいかという恐れ、二つのものが原因になって、なるべく京都の方面に曖あいまい昧な幕を張り通そうとした警戒が解けた。そうし

て彼はそれに気づかず^にいた。努力もなく意志も働かせずに、彼は自然の力でそこへ押し流されて来た。用心深い彼をそつと持ち上げて、事件がお延のために彼をそこまで運んで来てくれたと同じ事であつた。お延にはそれが嬉^{うれ}しかった。改めようとする決心なしに、改たまつた夫の態度には自然があつた。

同時に津田から見たお延にも、またそれと同様の趣^{おもむき}が出た。余事はしばらく問題外に措^おくとして、結婚後彼らの間には、常に財力に関する妙な暗闘があつた。そうしてそれはこう云う因果^{いんが}から来た。普通の人のように富を誇りとしたがる津田は、その点において、自分なるべく高くお延から評価させるために、父の財産を實際より遥^{はる}か余計な額に見積^はつたところを、彼女に向つて吹^{ふい}

聴ようした。それだけならまだよかった。彼の弱点はもう一步先へ
 乗り越す事を忘れなかった。彼のお延におに匂におわせた自分は、今より
 大變樂な身分にいる若旦那わかだんなであつた。必要な場合には、いくら
 でも父から補助を仰ぐ事ができた。たとい仰がないでも、月々の
 支出に困る憂うれいはけつしてなかった。お延と結婚した時の彼は、も
 うこれだけの言責げんせきを彼女に対して背負しよつて立っていたのと同じ
 事であつた。利巧りこうな彼は、財力に重きを置く点において、彼に優まさ
 るとも劣らないお延の性質をよく承知していた。極端に云えば、
 黄金おうごんの光りから愛その物が生れるとまで信ずる事のできる彼に
 は、どうかしてお延の手前を取とり繕つくろわなければならぬという
 不安があつた。ことに彼はこの点においてお延から輕蔑けいべつされる

のを深く恐れた。堀に依頼して毎月父から助け貰うようにしたのも、実は必要以外にこんな魂胆が潜んでいたからでもあつた。それでさえ彼はどこかに煙たいところをもっていた。少くとも彼女に対する内と外にはだいぶんの距離があつた。眼から鼻へ抜けるようなお延にはまたその距離が手に取るごとくに分つた。必然の勢い彼女はそこに不満を抱かざるを得なかつた。しかし彼女は夫の虚偽を責めるよりもむしろ夫の淡泊でないのを恨んだ。彼女はただ水臭いと思つた。なぜ男らしく自分の弱点を妻の前に曝け出してくれないのかを苦にした。しまいには、それをあえてしないような隔りのある夫なら、こつちにも覚悟があると一人腹の中心できめた。するとその態度がまた木精のように津田の胸に反響し

た。二人はどこまで行っても、直じかに向き合う訳に行かなかった。しかも遠慮があるので、なるべくそこには触れないように慎つつんでいた。ところがお秀との悶もんぢやく着やくが、偶然にもお延の胸にあるこの扉を一度にがらりと敲たたき破った。しかもお延自身毫ごうもそこに気がつかなかった。彼女は自分を夫の前に開放しようという努力も決心もなしに、天然自然自分を開放してしまった。だから津田にもまるで別べつ人にんのように快よく見えた。

二人はこういう風で、いつになく融とけ合った。すると二人が融け合ったところに妙な現象がすぐ起った。二人は今まで回避していた問題を平気で取り上げた。二人はいっしょになって、京都に対する善後策を講じ出した。

二人には同じ予感が働いた。この事件はこれだけで片づくまいという不安が双方の心を引き締めた。きつとお秀が何かするだろう。すれば直接京都へ向つてやるに違いない。そうしてその結果は自然二人の不利益となるにきまつている。——ここまでは二人の一致する点であつた。それから先が肝心かんじんの善後策になつた。しかしそこへ来ると意見が区々まちまちで、容易に纏まとまらなかつた。

お延は仲裁者として第一に藤井の叔父を指名した。しかし津田は首を掉ふつた。彼は叔父も叔母もお秀の味方である事をよく承知していた。次に津田の方から岡本はどうだろうと云い出した。けれども岡本は津田の父とそれほど深い交際がないと云う理由で、今度はお延が反対した。彼女はいつそ簡単に自分が和解の目的で、

お秀の所へ行つて見ようかという案を立てた。これには津田も大した違存いぞんはなかった。たとい今度の事件のためでなくとも、絶交を希望しない以上、何らかの形式のもとに、両家の交際は復活されべき運命をもっていたからである。しかしそれはそれとして、彼らはもう少し有効な方法を同時に講じて見たかった。彼らは考えた。

しまいに吉川の名が二人の口から同じように出た。彼の地位、父との関係、父から特別の依頼を受けて津田の面倒を見てくれている目下の事情、——数えれば数えるほど、彼には有利な条件が具そなわつていた。けれどもそこにはまた一種の困難があつた。それほど親しく近づき悪い吉川にくに口を利きいて貰もらおうとすれば、是非共そ

の前に彼の細君を口説き落さなければならなかった。ところがその細君はお延にとって大の苦手であつた。お延は津田の提議に同意する前に、少し首を傾けた。細君と仲善なかよしの津田はまた充分成せ効いこうの見込がそこに見えているので、熱心にそれを主張した。しまいにお延はどうとう我がを折つた。

事件後の二人は打ち解けてこんな相談をした後で心持よく別れた。

百十四

前夜よく寝られなかった疲労の加わつた津田はその晩案外きやす気易

く眠る事ができた。翌あくるひ日もまた透すき通るような日差ひやしを眼に受けて、晴々はればれしい空気を簞はめガラス硝子の外に眺めた彼の耳には、隣りの洗濯屋で例の通りごしごし云わす音が、どことなしに秋の情趣そそを唆そそつた。

「……へ行くなら着て行かしやんせ。シツシツシ」

洗濯屋の男は、俗歌を唄うたいながら、区切くぎり区切へシツシツシという言葉を入れた。それがいかにも忙がしそうに手を働かせている彼らの姿を津田に想像させた。

彼らは突然変な穴から白い物を担いで屋根へ出た。それから物干へ上のぼつて、その白いものを隙間すきまなく秋の空へ広げた。ここへ来てから、日ごとに繰り返される彼らの所作しよさは単調であつた。しか

し勤勉であつた。それがはたして何を意味しているか津田には解^{わか}らなかつた。

彼は今の自分にもつと親切な事を頭の中で考えなければならなかつた。彼は吉川夫人の姿を憶^{おも}い浮べた。彼の未来、それを眼の前に描き出すのは、あまりに漠^{ばく}然^{ぜん}過ぎた。それを纏^{まと}めようとすると、いつでも吉川夫人が現われた。平生から自分の未来を代表してくれるこの焦点にはこの際特別な意味が附着^{ひっ}していた。

一にはこの間訪問した時からの引^ひかかりがあつた。その時二人の間に封じ込められたある問題を、ぽたりと彼の頭に点じたのは彼女であつた。彼にはその後^{あと}を聴^きくまいとする努力があつた。また聴こうとする意志も動いた。すでに封を切つたものが彼女であ

るとすれば、中味を抜く権利は自分にあるようにも思われた。

二には京都の事が氣になった。輕重^{けいちよう}を別にして考えると、

この方がむしろ急に逼^{せま}っていた。一日も早く彼女に会うのが得策のようにも見えた。まだ四五日はどうしても動く事のできない身体^{からだ}を持ち扱った彼は、昨日お延の歸る前に、彼女を自分の代りに夫人の所へやろうとしたくらいであつた。それはお延に断られたので、成立しなかつたけれども、彼は今でもその方が適當な遣^{やりく}口^ちだと信じていた。

お延がなぜこういう用向^{ようむき}を帯びて夫人を訪ねるのを嫌^{きら}つたのか、津田は不思議でならなかつた。黙つていてもそんな方面へ出入^{いり}をしたがる女のくせに。と彼はその時考えた。夫人の前へ出ら

れるためにわざと用事を拵^{こし}らえて貰^{もら}ったのと同じ事だのにとまで、
 自分の動議を強調して見た。しかしどうしても引き受けたがらな
 いお延を、たつて強^しいる気もまたその場合の彼には起らなかった。
 それは夫婦打ち解けた気分にも起因していたが、一方から見ると、
 またお延の辞退しようにも関係していた。彼女は自分が行くと必
 ず失敗するからと云った。しかしその理由を述べる代りに、津田
 ならきつと成^{せいこう}効するに違^{ちが}いからと云った。成効するにしても、
 病院を出た後^{あと}でなければ会う訳に行かないんだから、遅くなる虞^{おそ}
 れがあると津田が注意した時、お延はまた意外な返事を彼に与え
 た。彼女は夫人がきつと病院へ見舞に来るに違ないと断言した。
 その時機を利用しさえすれば、一番自然にまた一番簡単に事が運

ぶのだと主張した。

津田は洗濯屋の干物^{ほしもの}を眺めながら、昨日^{きのう}の問答をこんな風に、それからそれへと手元へ手繰^{たぐ}り寄せて点検した。すると吉川夫人は見舞に来てくれそうでもあった。また来てくれそうにもなかった。つまりお延がなぜ来る方をそう堅く主張したのか解らなくなった。彼は芝居の食堂で晩餐^{ばんさん}の卓に着いたという大勢を眼先に想像して見た。お延と吉川夫人の間にどんな会話が取り換わされたかを、小説的に組み合せても見た。けれどもその会話のどこからこの予言が出て来たかの点になると、自分に解らないものとして投げてしまうよりほかに手はなかった。彼はすでに幾分の直覚、不幸にして天が彼に与えてくれなかった幾分の直覚を、お延に許

していた。その点でいつでも彼女を少し畏れなければならなかつた彼には、杜撰ずさんにそこへ触れる勇氣がなかつた。と同時に、全然その直覺に信賴する事のできない彼は、何とかしてこつちから吉川夫人を病院へ呼び寄せる工夫はあるまいかと考えた。彼はすぐ電話を思いついた。横着にも見えず、ことさらでもなし、自然に彼女がここまで出向いて来るような電話のかけ方はなかうかと苦心した。しかしその苦心は水の泡あわを製造する努力とほぼ似たものであつた。いくら骨を折つて拵こしらえても、すぐ後から消えて行くだけであつた。根本的に無理な空想を實現させようと巧たくらんでいるのだから仕方がないと気がついた時、彼は一人で苦笑してまた硝子越ガラスごしに表を眺めた。

表はいつか風^{かぜ}立^だった。洗濯屋の前にある一本の柳の枝が白い干物といっしょになつて軽く揺れていた。それを掠^{かす}めるようにかけ渡された三本の電線も、よそと調子を合せるようにふらふらと動いた。

百十五

下から上^{あが}つて来た医者には、その時の津田がいかにも退屈そうに見えた。顔を合せるや否や彼は「いかがです」と訊^きいた後で、「もう少しの我慢です」とすぐ慰めるように云った。それから彼は津田のためにガーゼを取り易えてくれた。

「まだ創きず口の方はそつとしておかないと、危険ですから」

彼はこう注意して、じかに局部を抑おさえつけている個所を少し緩ゆるめて見たら、血が煮染にじみ出したという話を用心のためにして聴きかせた。

取り易かえられたガーゼは一部分に過ぎなかった。要所を剥はがすと、血が迸ほとばしるかも知れないという身体からだでは、津田も無理をして宅うちへ帰る訳に行かなかった。

「やッぱり予定通りの日数にっすうは動かずにいるよりほかに仕方がないでしょうね」

医者は気の毒そうな顔をした。

「なに経過次第じゃ、それほど大事を取るにも及ばないんですが

ね」

それでも医者は、時間と経済に不足のない、どこから見ても余裕のある患者として、津田を取扱かっているらしかった。

「別に大した用事がお有ありになる訳でもないんでしよう」

「ええ一週間ぐらいはここで暮らしてもいいんです。しかし臨時にちよつと事件が起つたので……」

「はあ。——しかしもう直じきです。もう少しの辛しん防ぼうです」

これよりほかに云いようのなかった医者は、外来患者の方がまだ込み合こあわないためか、そこへ坐すわつて二三の雑談をした。中で、彼がまだ助手としてある大きな病院に勤めている頃に起つたという一ひとくち口くち話わが、思わず津田を笑わせた。看護婦が薬を間違えた

ために患者が死んだのだという嫌疑けんぎをかけて、是非その看護婦を殴なぐらせると、医局へ逼せまつた人があつたというその話は、津田から見るといかにも滑稽こっけいであつた。こういう性質たちの人と正反對に生みつけられた彼は、そこに馬鹿らしき以外の何物をも見出みいだす事ができなかつた。平たく云い直すと、彼は向うの短所ばかりに氣を奪とられた。そうしてその裏側へ暗あんに自分の長所を点綴てんてつして喜んだ。だから自分の短所にはけつして思い及ばなかつたと同一の結果に歸着した。

医者の診察が済んだ後で、彼は下らない病氣のために、一週間も一つ所に括くくりつけられなければならない現在の自分を悲觀したくなつた。氣のせいかな彼にはその現在が大変貴重に見えた。もう

少し治療を後廻しにすれば好かったという後悔さえ腹の中には起った。

彼はまた吉川夫人の事を考え始めた。どうかして彼女をここへ呼びつける工夫はあるまいかと思うよりも、どうかして彼女がここへ来てくれればいいかと思う方に、心の調子がだんだん移って行つた。自分を見破られるという意味で、平生からお延の直覚を悪く評価していたにもかかわらず、例外なこの場合だけには、それがあたって欲しいような気もどこかでした。

彼はお延の置いて行つた書物の中から、その一冊を抽ぬいた。岡本の所蔵にかかるだけあるなと首肯うなづかせるような趣おもむきがそこそこに見えた。不幸にして彼は諧ヒューモア諷モアを解する事を知らなかった。

中に書いてある活字の意味は、頭に通じても胸にはそれほど応え
 なかった。頭にさえ呑み込めないのも続々出て来た。責任のない
 彼は、自分に手頃なのを見つけようとして、どしどし飛ばして行
 った。すると偶然下のようなのが彼の眼に触れた。

「娘の父が青年に向つて、あなたは私の娘を愛しておいでなので
 すかと訊いたら、青年は、愛するの愛さないのつていう段じゃあ
 りません、お嬢さんのためなら死のうとまで思っているんです。
 あの懐かしい眼で、優しい眼遣いをただの一度でもしていただく
 事ができるなら、僕はもうそれだけで死ぬのです。すぐあの二百
 尺もあろうという崖の上から、岩の上へ落ちて、めちやくちやな
 血だらけな塊りになつて御覧に入れます。と答えた。娘の父は首

を掉^ふつて、実を云うと、私も少し嘘^{うそ}を吐^つく性^{しょうぶん}分^{ぶん}だが、私の家^{うち}のような少^こ人^{にん}数^ずな家族に、嘘^{うそ}付^{つき}が二人できるのは、少し考えものですからね。と答えた」

嘘^{うそ}吐^{つき}という言葉がいつもより皮肉に津田を苦笑させた。彼は腹の中で、嘘吐な自分を肯^{うけ}がう男であつた。同時に他人の嘘をも根本的に認定する男であつた。それでいて少しも厭^{えん}世^{せい}的^{てき}にならな
い男であつた。むしろその反対に生活する事のできるために、嘘が必要になるのだぐらいに考える男であつた。彼は、今までこういう漠^{ばく}然^{ぜん}とした人世觀^{もと}の下に生きて来ながら、自分ではそれを知らなかつた。彼はただ行^{おこな}つたのである。だから少し深く入り込むと、自分で自分の立場が分らなくなるだけであつた。

「愛と虚偽」

自分の読んだ ひとくちばなし 一口 嚙 からこの二字を暗示された彼は、二つのものの関係をどう説明していいかに迷った。彼は自分に大事なある問題の所有者であつた。内心の要求上是非共それを解決しなければならぬ彼は、実験の機会が彼に与えられない限り、頭の中でいたずらに考えなければならなかつた。哲学者でない彼は、自身に今まで行つて来た人世観をすら、組織正しい形式の下に、わが眼の前に並べて見る事ができなかつたのである。

津田は纏まとまらない事をそれからそれへと考えた。そのうちいつか午過ひるすぎになつてしまった。彼の頭は疲れていた。もう一つ事を長く思い続ける勇氣がなくなつた。しかし秋とは云いながら、ひとり寝ているには日があまりに長過ぎた。彼は退屈を感じ出した。そうしてまたお延の方に想おもいを馳はせた。彼女の姿を今日も自分の眼の前に予期していた彼は横おうちやく着であつた。今まで彼女の手前はば憚はばからなければならぬような事ばかりを、さんざん考え抜いたあげく、それが厭いやになると、すぐお延はもう来そうなものだと思つて平氣でいた。自然頭の中に湧わいて出るものに対して、責任はもてないという弁解さえその時の彼にはなかつた。彼の見たお延に不可解な点がある代りに、自分もお延の知らない事実を、胸の

中に納めて^{うち}いるのだぐらいの料簡^{りようけん}は、遠くの方で働^{はたら}き回^{まわ}らいていたかも知れないが、それさえ、いざとならなければ判然^{はつきり}した言葉になつて、彼の頭に現われて来るはずがなかつた。

お延はなかなか来なかつた。お延以上に待たれる吉川夫人は固^{もと}より姿を見せなかつた。津田は面白くなかつた。先刻^{さつき}から近くで誰かがやっている、彼の最も嫌^{きら}うた^{うたい}い謡曲^{ようきょく}指南^{しなん}という細長い看板^{かんばん}が急に思^{おも}ひ出された。それは洗濯屋の筋向うに当る二階建^{うち}の家であつた。二階が稽古^{けいこ}をする座敷にでもなつてい^いると見えて、距離の割に声の方^{かた}がむやみに大きく響^{ひび}いた。他^{ひと}が勝手にや^やつてゐるものを止め^とめさせる権利をどこにも見出^{みいだ}し得ない彼は、彼の不平をどうする事も

できなかった。彼はただ早く退院したいと思うだけであつた。

柳の木の後^{うしろ}にある赤い煉瓦^{れんが}造りの倉に、山形^{やまがた}の下に一を引

いた屋号のような紋が付いていて、その左右に何のためとも解^{わか}らない、大きな折釘^{おれくぎ}に似たものが壁の中から突き出している所を、

津田が見るとも見ないとも片のつかない眼で、ぼんやり眺めていた時、遠慮のない足音が急に聞こえて、誰かが階子段^{はしごだん}を、どしどし上^{のぼ}つて来た。津田はおやと思つた。この足音の調子から、そ

の主がもう七分通り、彼の頭の中では推定されていた。

彼の予覚はすぐ事実になつた。彼が室^{へや}の入口に眼を転ずると、ほとんどおツつかツつに、小林は貫い立ての外^{がい}套^{とう}を着たままつかつか入つて来た。

「どうかね」

彼はすぐ胡坐あぐらをかいた。津田はむしろ苦しそうな笑いを挨拶あいさつの代りにした。何しに來たんだという心持が、顔を見ると共にもう起つていた。

「これだ」と彼は外套そでの袖を津田に突きつけるようにして見せた。「ありがとう、お蔭かげでこの冬も生きて行かれるよ」

小林はお延の前で云つたと同じ言葉を津田の前で繰り返した。しかし津田はお延からそれを聴きかされていなかったの、別に皮肉とも思わなかった。

「奥さんが來たろう」

小林はまたこう訊きいた。

「来たさ。来るのは当たり前じゃないか」

「何か云つてたろう」

津田は「うん」と答えようか、「いいや」と答えようかと思つて、少し躊躇ちゆうちよした。彼は小林がどんな事をお延に話したか、それを知りたかった。それを彼の口からここで繰り返させさえすれば、自分の答は「うん」だろうが、「いいえ」だろうが、同じ事であつた。しかしどっちが成功するかそこはとつさの際にきめる訳に行かなかつた。ところがその態度が意外な意味になつて小林に反響した。

「奥さんが怒つて来たな。きつとそんな事だろうと、僕も思つてたよ」

容易に手がかりを得た津田は、すぐそれに縋りついた。

「君があんまり苛めるからさ」

「いや苛めやしないよ。ただ少し調戲い過ぎたんだ、可哀想到。

泣きやしなかったかね」

津田は少し驚ろいた。

「泣かせるような事でも云つたのかい」

「なにどうせ僕の云う事だから出鱈目さ。つまり奥さんは、岡本

さん見たいな上流の家庭で育つたので、天下に僕のような愚劣な人間が存在している事をまだ知らないんだ。それでちよつとした事まで苦にするんだろうよ。あんな馬鹿に取り合うなと君が平生から教えておきさえすればそれでいいんだ」

「そう教えている事はあるよ」と津田も負けずにやり返した。小林はハハと笑った。

「まだ少し訓練が足りないんじゃないか」

津田は言葉を改めた。

「しかし君はいったいどんな事を云つて、彼奴あいつに調戲つたのかい」

「そりやもうお延さんから聴きいたろう」

「いいや聴かない」

二人は顔を見合せた。互いの胸を忖そんたく度しようとする試みが、同時にそこに現われた。

百十七

津田が小林に本音^{ほんね}を吹かせようとするところには、ある特別の意味があつた。彼はお延の性質をその著るしい断面においてよく承知してゐた。お秀と正反対な彼女は、飽^あくまで素直^{すなお}に、飽くまで閑雅^{しとやか}な態度を、絶えず彼の前に示す事を忘れないと共に、どうしてもまた彼の自由にならない点を、同様な程度でちゃんともつてゐた。彼女の才は一つであつた。けれどもその応用は両面^{わた}に亘^{わた}つてゐた。これは夫に知らせてならないと思う事、または隠しておく方が便宜^{べんぎ}だときめた事、そういう場合になると、彼女は全く津田の手にあまる細君であつた。彼女が柔順であればあるほど、津田は彼女から何にも掘り出す事ができなかった。彼女と小林の

間に昨日きのうどんなやりとりが起ったか、それはお秀の騒ぎで委細を訊きく暇もないうちに、時間が経たつてしまったのだから、事実やむをえないとしても、もしそういう故障のない時に、津田から詳しいありのままを問われたら、お延はおいそれと彼の希望通り、綿密な返事を惜まずに、彼の要求を満足させたらうかと考えると、そこには大きな疑問があつた。お延の平生から推して、津田はむしろごまかされるに違ないと思つた。ことに彼がもしやと思つている点を、小林が遠慮なくしゃべつたとすれば、お延はなおの事、それを聴きかないふりをして、黙つて夫の前を通り抜ける女らしく見えた。少くとも津田の観察した彼女にはそれだけの余裕が充分あつた。すでにお延の方を諦あきらめなければならぬとすると、津

田は自分に必要な知識の出所でどころを、小林に向つて求めるよりほかに仕方がなかつた。

小林は何だかそこを承知しているらしかつた。

「なに何にも云やしないよ。嘘うそだと思うなら、もう一遍お延さんに訊きいて見たまえ。もつとも僕は帰りがけに悪いと思つたから、詫あやまつて来たがね。実を云うと、何で詫あやまつたか、僕自身にも解らないくらいのものさ」

彼はこう云つて嘯うそぶいた。それからいきなり手を延べて、津田の枕元にある読みかけの書物を取り上げて、一分ばかりそれを黙読した。

「こんなものを読むのかね」と彼はさも軽蔑けいべつした口調で津田に

訊きいた。彼はぞんざいに頁ページを剥はぐ繰りながら、終りの方から逆に始めへ来た。そうしてそこに岡本という小さい見留印みとめいんを見出みいした時、彼は「ふん」と云った。

「お延さんが持つて来たんだな。道理で妙な本だと思った。——
時に君、岡本さんは金持だろうね」

「そんな事は知らないよ」

「知らないはずはあるまい。だってお延さんの里さとじやないか」

「僕は岡本の財産を調べた上で、結婚なんかしたんじゃないよ」
「そうか」

この単純な「そうか」が変に津田の頭に響いた。「岡本の財産を調べないで、君が結婚するものか」という意味にさえ取れた。

「岡本はお延の叔父^{おじ}だぜ、君知らないのか。里^{さと}でも何でもありやしないよ」

「そうか」

小林はまた同じ言葉を繰り返した。津田はなお不愉快になった。
「そんなに岡本の財産が知りたければ、調べてやろうか」

小林は「えへへ」と云った。「貧乏すると他の財産^{ひと}まで苦になつてしようがない」

津田は取り合わなかった。それでその問題を切り上げるかと思つてゐると、小林はすぐ元へ歸つて来た。

「しかしいくらぐらいあるんだろう、本当のところ」

こう云う態度はまさしく彼の特色であつた。そうしていつでも

二様に解釈する事ができた。頭から向うを馬鹿だと認定してしまえばそれまでであると共に、一度こつちが馬鹿にされているのだ
と思ひ出すと、また際限もなく馬鹿にされている訳にもなつた。

彼に対する津田は実のところ半信半疑の真中に立っていた。だからそこに幾分でも自分の弱点が潜在する場合には、馬鹿にされる方の解釈に傾むかざるを得なかつた。ただ相手をつけあがらせない用心をするよりほかに仕方がなかつた彼は、ただ微笑した。

「少し借りてやろうか」

「借りるのは厭だ。^{いや}貰うなら貰つてもいいがね。——いや貰うのも御免だ、どうせくれる氣遣^{きづかい}はないんだから。仕方がなければ、まあ取るんだな」小林はははと笑つた。「一つ朝鮮へ行く前に、

面白い秘密でも提供して、岡本さんから少し取って行くかな」

津田はすぐ話をその朝鮮へ持つて行つた。

「時にいつ立つんだね」

「まだしつかり判らない」

「しかし立つ事は立つのかい」

「立つ事は立つ。君が催促しても、しなくつても、立つ日が来ればちやんと立つ」

「僕は催促をするんじゃない。時間があつたら君のために送別会を開いてやろうというのだ」

今日小林から充分な事が聴^きけなかつたら、その送別会でも利用してやろうと思いついた津田は、こう云つて予備としての第二の

機会を暗^{あん}に作り上げた。

百十八

故意だか偶然だか、津田の持つて行こうとする方面へはなかなか持つて行かれない小林に対して、この注意はむしろ必要かも知れなかった。彼はいつまでも津田の問に応ずるようなまた応じないような態度を取った。そうしてしつこく自分自身の話題にばかり纏^{つけまつ}綿^{まつ}わった。それがまた津田の訊^きこうとする事と、間接ではあるが深い関係があるので、津田は蒼蠅^{うるさ}くもあり、じれったくもあつた。何となく遠廻しに痛振^{いたぶ}られるような氣もした。

「君吉川と岡本とは親類かね」と小林が云い出した。

津田にはこの質問が無邪気とは思えなかった。

「親類じゃない、ただの友達だよ。いつかも君が訊いた時に、そう云って話したじゃないか」

「そうか、あんまり僕に関係の遠い人達の事だもんだから、つい忘れちゃった。しかし彼らは友達にしても、ただの友達じゃあるまい」

「何を云ってるんだ」

津田はついその後へ馬鹿野郎と付け足したかった。

「いや、よほどの親友なんだろうという意味だ。そんなに怒らなくってもよからう」

吉川と岡本とは、小林の想像する通りの間柄に違なかつた。単なる事実はただそれだけであつた。しかしその裏に、津田とお延を貼^はりつけて、裏表の意味を同時に眺める事は自由にできた。

「君は仕合せな男だな」と小林が云つた。「お延さんさえ大事にしていれば間違はないんだから」

「だから大事にしているよ。君の注意がなくなつたつて、そのくらの事は心得ているんだ」

「そうか」

小林はまた「そうか」という言葉を使った。この真面目^{まじめ}くさつた「そうか」が重なるたびに、津田は彼から脅^{おび}やかされるような気がした。

「しかし君は僕などと違って聡明そうめいだからいい。他ひとはみんな君がお延さんに降参し切つてるように思つてゐるぜ」

「他ひととは誰の事だい」

「先生でも奥さんでもさ」

藤井の叔父や叔母から、そう思われている事は、津田にもほぼ見当けんとうがついていた。

「降参し切っているんだから、そう見えたとて仕方がないさ」

「そうか。——しかし僕のような正直者には、とても君の真似はできない。君はやッぱりえらい男だ」

「君が正直で僕が偽物ぎふつなのか。その偽物がまた偉くつて正直者は馬鹿なのか。君はいつまたそんな哲学を發明したのかい」

「哲学はよほど前から発明しているんだがね。今度改めてそれを発表しよう」と云うんだ、朝鮮へ行くについて」

津田の頭に妙な暗示が閃めかされた。

「君旅費はもうできたのか」

「旅費はどうでもできるつもりだがね」

「社の方で出してくれる事にきまったのかい」

「いいや。もう先生から借りる事にしてしまった」

「そうか。そりゃ好い具合だ」

「ちつとも好い具合じゃない。僕はこれでも先生の世話になるのが気の毒でたまらないんだ」

こういう彼は、平気で自分の妹のお金きんさんを藤井に片づけて貰もら

う男であつた。

「いくら僕が恥知らずでも、この上金の事で、先生に迷惑をかけるはすまないからね」

津田は何とも答えなかつた。小林は無邪氣に相談でもするような調子で云つた。

「君どこかに強奪^{ゆす}る所はないかね」

「まあないね」と云い放つた津田は、わざとそつぽを向いた。

「ないかね。どこかにありそうなものだかな」

「ないよ。近頃は不景氣だから」

「君はどうだい。世間とはかく、君だけはいつも景氣が好きそうじゃないか」

「馬鹿云うな」

岡本から貰った小切手も、お秀の置いて行つた紙包も、みんなお延に渡してしまつた後の彼の財布は空と同じ事であつた。よしそれが手元にあつたにしろ、彼はこの場合小林のために金銭上の犠牲を払う氣は起らなかつた。第一事がそこまで切迫して来ない限り、彼は相談に應ずる必要を毫も認めなかつた。

不思議に小林の方でも、それ以上津田を押さなかつた。その代り突然妙なところへ話を切り出して彼を驚ろかした。

その朝藤井へ行つた彼は、そこで例もするように昼飯の馳走になつて、長い時間を原稿の整理で過ごしているうちに、玄関の格子が開いたので、ひよいと自分で取次に出た。そうしてそこに偶

然お秀の姿を見出したのである。

小林の話をそこまで聴いた時、津田は思わず腹の中で「畜生ッ先廻りをしたな」と叫んだ。しかしただそれだけではすまなかつた。小林の頭にはまだ津田を驚ろかせる材料が残っていた。

百十九

しかし彼の驚ろかし方には、また彼一流の順序があつた。彼は一番始めにこんな事を云つて津田に調戲からかつた。

「兄きょうだい妹いげん喧嘩けんかをしたんだつて云うじゃないか。先生も奥さんも、お秀さんにしゃべりつけられて弱つてたぜ」

「君はまた傍そばでそれを聴きいていたのか」

小林は苦笑しながら頭を掻かいた。

「なに聴こうと思つて聴いた訳でもないがね。まあ天然てんねん自然しぜん耳へ入つたようなものだ。何しろしゃべる人がお秀さんで、しゃべらせる人が先生だからな」

お秀にはどこか片意地で一本調子おもむきな趣があつた。それに一種の刺戟しげきが加わると、平生の落ちつきが全く無くなって、不断と打つて変つた猛烈さをひよつくり出現させるところに、津田とはまるで違つた特色があつた。叔父はまた叔父で、何でも構わず底の底まで突きとめなければ承知のできない男であつた。単に言葉の上だけでもいいから、前後一貫して俗にいう辻つじ褻つまが合う最後まで

行きたいというのが、こういう場合相手に対する彼の態度であつた。筆の先で思想上の問題を^{しじゅう}始終取り扱かいつけている癖が、活字を離れた彼の日常生活にも憑^のり移つてしまった結果は、そこによく現われた。彼は相手にいくらでも口を利かせた。その代りまたいくらでも質問をかけた。それが或程度まで行くと、質問という性質を離れて、詰問に変化する事さえしばしばあつた。

津田は心の中で、この叔父と妹と^{たいざ}対坐した時の様子を想像した。ことによるとそこでまた^{ひとはらん}一波瀾起したのではあるまいかという疑^{うたがい}さえ出た。しかし小林に対する手前もあるので、^{うわべ}上部はわざと高く出た。

「おおかためちやくちやに僕の悪口でも云つたんだろう」

小林は御挨拶ごあいさつにただ高笑いをした後で、こんな事を云った。

「だが君にも似合わないね、お秀さんと喧嘩をするなんて」

「僕だからしたのさ。彼奴あいつだって堀の前なら、もつと遠慮すらあね」

「なるほどそうかな。世間じやよく夫婦喧嘩っていうが、夫婦喧嘩より兄妹喧嘩の方が普通なものかな。僕はまだ女房を持った経験がないから、そっちのほうの消息はまるで解わからないが、これでも妹はあるから兄妹の味ならよく心得ているつもりだ。君何だぜ。僕のような兄でも、妹と喧嘩なんかした覚はまだないぜ」

「そりや妹次第さ」

「けれどもそこはまた兄次第だろう」

「いくら兄だって、少しは腹の立つ場合もあるよ」

小林はにやにや笑っていた。

「だが、いくら君だって、今お秀さんを怒らせるのが得策だとは思ってやしまい」

「そりや当り前だよ。好んで誰が喧嘩けんかなんかするもんか。あんな奴とやつ」

小林はますます笑った。彼は笑うたびに一調子ひとちょうしずつ余裕を生じて来た。

「蓋しけだやむをえなかった訳だろう。しかしそれは僕の云う事だ。

僕は誰と喧嘩したって構わない男だ。誰と喧嘩したって損をしつこない境遇に沈淪ちんりんしている人間だ。喧嘩の結果がもしどこかに

あるとすれば、それは僕の損にやならない。何となれば、僕はまだまだかつて損になるべき何物をも最初からもつていないんだからね。要するに喧嘩から起り得るすべての変化は、みんな僕の得とくになるだけなんだから、僕はむしろ喧嘩を希望してもいいくらいなものだ。けれども君は違うよ。君の喧嘩はけっして得にやならない。そうして君ほどまた損得利害をよく心得ている男は世間にたんとないんだ。ただ心得てるばかりじゃない、君はそうした心得もとの下に、朝から晩まで寝たり起きたりしていられる男なんだ。少くともそうしなければならないと始しじゅう終考えている男なんだ。好いかね。その君にして——」

津田は面倒臭そうに小林を遮さへぎった。

「よし解^{わか}った。解^{わか}ったよ。つまり他^{ひと}と衝突するなと注意してくれ
るんだろう。ことに君と衝突しちや僕の損になるだけだから、な
るべく事を穩^{おんびん}便^{びん}にしろという忠告なんだろう、君の主意は」

小林は惚^{とぼ}けた顔をしてすまし返った。

「何僕と？ 僕はちつとも君と喧嘩をする気はないよ」

「もう解^{わか}ったというのに」

「解^{わか}ったらそれでいいがね。誤解のないように注意しておくが、
僕は先刻^{さつき}からお秀さんの事を問題にしているんだぜ、君」

「それも解^{わか}ってるよ」

「解^{わか}ってるって、そりや京都の事だろう。あつちが不首尾になる
という意味だろう」

「もちろんさ」

「ところが君それだけじゃないぜ。まだほかにも響いて来るんだぜ、気をつけないと」

小林はそこで句を切つて、自分の言葉の影響を試験するため、津田の顔を眺めた。津田ははたして平氣でいる事ができなかった。

百二十

小林はここだという時機を捕まえた。

「お秀さんはね君」と云い出した時の彼は、もう津田を擒とりこにしていた。

「お秀さんはね君、先生の所へ来る前に、もう一軒ほかへ廻つて来たんだぜ。その一軒というのはどこの事だか、君に想像がつくか」

津田には想像がつかなかった。少なくともこの事件について彼女が足を運びそうな所は、藤井以外にあるはずがなかった。

「そんな所は東京にないよ」

「いやあるんだ」

津田は仕方なしに、頭の中でまたあれかこれかと物色して見た。しかしいくら考えても、見当らないものはやッぱり見当らなかった。しまいには小林が笑いながら、その宅の名を云つた時に、津田ははたして驚ろいたように大きな声を出した。

「吉川？ 吉川さんへまたどうして行ったんだろう。何にも関係がないじゃないか」

津田は不思議がらざるを得なかった。

ただ吉川と堀を結びつけるだけの事なら、津田にも容易にできた。強い空想の援にたすけ依る必要も何にもなかった。津田夫婦の結婚するとき、表おもてむき向むき媒ばい妁やくの労を取ってくれた吉川夫婦と、彼

の妹にあたるお秀と、その夫の堀とが社交的に関係をもっているのは、誰の眼にも明らかであった。しかしその縁故で、この問題をひっ提ひ上げたお秀が、とくに吉川の門に向う理由はどこにも発見できなかつた。

「ただ訪問のために行っただけだろう。単に敬意を払ったんだろ

う」

「ところがそうでないらしいんだ。お秀さんの話を聴きいていると」
津田はにわかにその話が聴きたくなつた。小林は彼を満足させる代りに注意した。

「しかし君という男は、非常に用意周到なようどこか抜けてるね。あんまり抜けまい抜けまいとするから、自然手が廻りかねる訳かね。今度の事だつて、そうじゃないか、第一お秀さんを怒らせる法はないよ、君の立場として。それから怒らせた以上、吉川の方へ突ツ走らせるのは愚ぐだよ。その上吉川の方へ向いて行くはずがないと思ひ込んで、初手しよてから高を括くくっているなんぞは、君の平生にも似合わないじゃないか」

結果の上から見た津田の隙間すきまを探し出す事は小林にも容易であつた。

「いったい君のファーマーと吉川とは友達だろう。そうして君の事はファーマーから吉川に万事宜よろしく願つてあるんだろう。そこへお秀さんが馳かけ込むのは当り前じゃないか」

津田は病院へ来る前、社の重役室で吉川から聴かされた「年寄に心配をかけてはいけない。君が東京で何をしているか、ちゃんとかつちで解つてるんだから、もし不都合な事があれば、京都へ知らせてやるだけだ。用心しろ」という意味の言葉を思い出した。それは今から解釈して見ても冗談じょうだんはんぶん半分の訓戒に過ぎなかった。しかしもしそれをここで真面目まじめ一式な文句に転倒するものがある

とすれば、その作者はお秀であつた。

「ずいぶん突飛とつぴな奴やつだな」

突飛という性格が彼の家伝にないだけ彼の批評には意外という観念が含まれていた。

「いったい何を云やがったろう、吉川さんで。——彼奴あいつの云う事を真向まともに受けていると、いいのは自分だけで、ほかのものはみんな悪くなつちまうんだから困るよ」

津田の頭には直接の影響以上に、もっと遠くの方にある大事な結果がちらちらした。吉川に対する自分の信用、吉川と岡本との関係、岡本とお延との縁合えんあい、それらのものがお秀の遣口やりぐち一つでどう変化して行くか分らなかつた。

「女はあさはかなもんだからな」

この言葉を聴^きいた小林は急に笑い出した。今まで笑ったうちで一番大きなその笑い方が、津田をはつと思わせた。彼は始めて自分^が何を云っているかに気がついた。

「そりやどうでもいいが、お秀が吉川へ行つてどんな事をしやべつたのか、叔父に話していたところを君^が聴^きいたのなら、教えてくれたまえ」

「何かしきりに云つてたがね。実をいうと、僕は面倒だから碌^{ろく}に聴^きいちゃいなかったよ」

こう云つた小林は肝^{かん}心^{じん}なところへ来て、知らん顔をして圀^{けんが}外^いへ出てしまった。津田は失望した。その失望をしばらく味わ

つた後で、小林はまた圈内^{けんない}へ帰つて来た。

「しかしもう少し待つてたまえ。否^{いや}でも応^{おう}でも聴かされるよ」

津田はまさかお秀がまた来る訳でもなからうと思つた。

「なにお秀さんじゃない。お秀さんは直^{じか}に来やしない。その代りに吉川の細君が来るんだ。嘘^{うそ}じゃないよ。この耳でたしかに聴いて来たんだもの。お秀さんは細君の来る時間まで明言したくらいだ。おおかたもう少ししたら来るだろう」

お延の予言はあつた。津田がどうかして呼びつきたいと思つている吉川夫人は、いつの間にか来る事になっていた。

津田の頭に二つのものが相繼いで閃めいた。一つはこれからこ
こへ来るその吉川夫人を旨く取扱わなければならないという事前
の暗示であつた。彼女の方から病院まで足を運んでくれる事は、
予定の計画から見て、彼の最も希望するところには違なかつたが、
来訪の意味がここに新らしく付け加えられた以上、それに対する
彼の応答ぶりも変えなければならなかつた。この場合における夫
人の態度を想像に描いて見た彼は、多少の不安を感じた。お秀か
ら偏見を注ぎ込まれた後の夫人と、まだ反感を煽られない前の夫
人とは、彼の眼に映るところだけでも、だいぶ違つていた。けれ
どもそこには平生の自信もまた伴なつていた。彼には夫人の持つ

てくる偏見と反感を、一いちじよう場の会見で、充分引繰ひつくり返かえして見せるといふ覺悟があつた。少くともここでそれだけの事をしておかなければ、自分の未来が危なかつた。彼は三分の不安と七分の信力をもつて、彼女の來訪を待ち受けた。

残る一つの閃ひらめきが、お延に對する態度を、もう一遍臨時に變更する便宜べんぎを彼に教えた。先刻さつきまでの彼は退屈のあまり彼女の姿を刻々に待ち設もうけていた。しかし今の彼には別途の緊張があつた。彼は全然異なつた方面の刺戟しげきを予想した。お延はもう不用であつた。というよりも、來られてはかえつて迷惑であつた。その上彼はただ二人、夫人と差向いで話してみたい特殊な問題も控えていた。彼はお延と夫人がここでいっしよに落ち合う事を、是非共防

がなければならぬと思ひ定めた。

附帯条件として、小林を早く追おっばら払う手段も必要になつて来た。

しかるにその小林は今にも吉川夫人が見えるような事を云いながら、自分の歸る気色けしきをどこにも現わさなかつた。彼は他ひとの邪魔になる自分を苦くにする男ではなかつた。時と場合によると、それと知つて、わざわざ邪魔までしかねない人間であつた。しかもそこまで行つて、實際氣がつかずに迷惑がらせるのか、または心得があつて故意に困らせるのか、その判断を確しかと他ひとに与えずに平氣で切り抜けてしまふじれつたい人物であつた。

津田は欠伸あくびをして見せた。彼の心持と全く釣り合わないこの所し作よさが彼を二つに割つた。どこかそわそわしながら、いかにも所在

なさそうに小林と應對するところに、中断された気分の特徴が斑まだらになって出た。それでも小林はすましていた。枕元にある時計をまた取り上げた津田は、それを置くと同時に、やむをえず質問をかけた。

「君何か用があるのか」

「ない事もないんだがね。なにそりや今に限った訳でもないんだ」
津田には彼の意味がほぼ解った。しかしまだ降参する気にはなれなかった。と云つて、すぐ撃退する勇氣はなおさらなかった。

彼は仕方なしに黙っていた。すると小林がこんな事を云い出した。

「僕も吉川の細君に会つて行こうかな」

冗じょうだん談 じゃないと津田は腹の中で思つた。

「何か用があるのかい」

「君はよく用々つて云うが、何も用があるから人に会うとは限るまい」

「しかし知らない人だからさ」

「知らない人だからちよつと会つて見たいんだ。どんな様子だろうと思つてね。いったい僕は金持の家庭へ入つた事もないし、またそんな人と交際^{つきあ}つた例^{ためし}もない男だから、ついでにこういう機会に、ちよつとでもいいから、会つておきたくなるのさ」

「^{みせもの}見世物じやあるまいし」

「いや単なる好奇心だ。それに僕は閑^{ひま}だからね」

津田は呆^{あき}れた。彼は小林のようなみすばらしい男を、友達の内

にもっているという証拠を、夫人に見せるのが厭いやでならなかった。あんな人と付合っているのかと軽蔑けいべつされた日には、自分の未来にまで関係すると考えた。

「君もよほど呑気のんきだね。吉川の奥さんが今日ここへ何しに来るんだか、君だって知ってるじゃないか」

「知ってる。——邪魔かね」

津田は最後の引導いんどうを渡すよりほかに途みちがなくなつた。

「邪魔だよ。だから来ないうちに早く帰つてくれ」

小林は別に怒おこつた様子もしなかった。

「そうか、じゃ帰つてもいい。帰つてもいいが、その代り用だけは云つて行こう、せつかく来たものだから」

面倒になった津田は、とうとう自分の方からその用を云つてしまつた。

「金だろう。僕に相当の御用なら承^{うけたまわ}つてもいい。しかしここには一文も持つていない。と云つて、また外^{がい}套^{とう}のように留^る守^すへ取りに行かれちゃ困る」

小林はにやにや笑いながら、じやどうすればいいんだという問を顔色でかけた。まだ小林に聴^きく事の残っている津田は、出^{しゅ}立^{った}前^{つぜん}もう一遍彼に会つておく方が便宜^{べんぎ}であつた。けれども彼とお延と落ち合う掛^け念^{ねん}のある病院では都合^{つごう}が悪かつた。津田は送別会という名^{もと}の下に、彼らの出会うべき日と時と場所とを指定した後で、ようやくこの厄^{やっ}介^{かい}者^{もの}を退去させた。

百二十二

津田はすぐ第二の予防策に取りかかった。彼は床の上に置かれた小型の化粧箱を取り除^とけて、その下から例のレターペーパーを同じラヴェンダー色の封筒を引き抜くや否や、すぐ万年筆を走らせた。今日は少し都合があるから、見舞に来るのを見合せてくれという意味を、簡単に書き下^{くだ}した手紙は一分かかるかかからないうちに出来上った。気の急^せいた彼には、それを読み直す暇さえ惜かった。彼はすぐ封をしてしまった。そうして中味の不完全なために、お延^ががどんな疑いを起すかも知れないという事には、少し

の顧慮も払わなかった。平生の用心を彼から奪ったこの場合は、彼を忽卒^{そそか}しくしたのみならず彼の心を一直線にしなければやまなかった。彼は手紙を持ったまま、すぐ二階を下りて看護婦を呼んだ。

「ちよつと急な用事だから、すぐこれを持たせて車夫を宅^{うち}までやって下さい」

看護婦は「へえ」と云つて封書を受け取つたなり、どこに急な用事ができたのだらうという顔をして、宛名^{あてな}を眺めた。津田は腹の中で往復に費やす車夫の時間さえ考えた。

「電車で行くようにして下さい」

彼は行き違いになる事を恐れた。手紙を受け取らない前にお延

が病院へ来てはせつかくの努力も無駄になるだけであつた。

二階へ歸つて来た後あとでも、彼はそればかりが苦くになつた。そう

思うと、お延がもう宅うちを出て、電車へ乗つて、こつちの方角へ向

いて動いて来るような氣さえした。自然それといつしよに頭の中

に纏まつ付るのは小林であつた。もし自分の目的が達せられない先に、

細君が階はしご子段の上に、すらりとしたその姿を現わすとすれば、

それは全く小林の罪に相違ないと彼は考えた。貴重な時間を見失

に費やさせられたあげく、頼むようにして歸つて貰つた彼の後うしろ

姿すがたを見送つた津田は、それでももう少しで刻下こつかの用を弁ずるた

めに、小林を利用するところであつた。「面倒でも歸りにちよつ

と宅へ寄つて、今日来てはいけないとお延に注意してくれ」。こ

うという言葉がつい口の先へ出かかったのを、彼は驚ろいて、引ッ込ましてしまったのである。もしこれが小林でなかったなら、この際どんなに都合がよかつたろうにとさえ実は思つたのである。

津田が神経を鋭どくして、今来るか今来るかという細かい予期に支配されながら、吉川夫人を刻々に待ち受けている間に、彼の看護婦に渡したお延への手紙は、また彼のいまだ想い^{おも}いたらない運命に到着すべく余儀なくされた。

手紙は彼の命令通り時を移さず車夫の手に渡つた。車夫はまた看護婦の命令通り、それを手に持ったまますぐ電車へ乗つた。それから教えられた通りの停留所で下りた。そこを少し行つて、大通りを例の細い往来へ切れた彼は、何の苦もなくまた名宛^{なあて}の苗^{みょう}

字を小綺麗こぎれいな二階建の一軒の門もん札さつに見出みいだした。彼は玄関へかかった。そこで手に持った手紙を取次に出たお時に渡した。

ここまではすべての順序が津田の思い通りに行つた。しかしその後あとには、書面を認しためる時、まるで彼の頭の中に入つていなかった事実が横よこわつていた。手紙はすぐお延の手に落ちなかった。

しかし津田の懸念けねんしたように、宅うちにいなかったお延は、彼の懸念したように病院へ出かけたのではなかった。彼女は別に行先を控しんえていた。しかもそれは際きわどい機会を旨うまく利用しようとする敏捷しんしょうな彼女の手腕を充分に發揮した結果であつた。

その日のお延は朝から通例のお延であつた。彼女は不斷のよう
に起きて、不斷のように動いた。津田のいる時と万事変りなく働

らいた彼女は、それでも夫の留守から必然的に起る、時間の余裕
 を持て余すほど楽な午前を過ごした。午飯を食べた後で、彼女
 は洗湯せんとうに行つた。病院へ顔を出す前ちよつと綺麗きれいになつておき
 たい考えのあつた彼女は、そこでずいぶん念入ねんいりに時間を費やし
 た後、晴々あとせいせいした好い心持を湯上りの光沢つやつやしい皮膚はだに包みながら
 歸つて来ると、お時から嘘うそではないかと思われるような報告を聴
 いた。

「堀の奥さんがいらつしやいました」

お延は下女の言葉を信ずる事ができないくらいに驚ろいた。昨
 日の今日きのうきょう、お秀の方からわざわざ自分を尋ねて来る。そんな意外
 な訪問があり得べきはずはなかつた。彼女は二遍も三遍も下女の

口を確かめた。何で来たかをさえ訊^きかなければ気がすまなかった。なぜ待たせておかなかったかも問題になった。しかし下女は何にも知らなかった。ただ藤井の帰りに通^{とお}り路^{みち}だからちよつと寄つたまでだという事だけが、お秀の下女に残して行つた言葉で解つた。お延は既定のプログラムをとつさの間に変更した。病院は抜いて、お秀の方へ行先を転換しなければならぬという覚悟をきめた。それは津田と自分との間に取り換わされた約束に過ぎなかった。何らの不自然^{おち}に陥^{こん}いる痕^{せき}迹^きなしにその約束を履行するのは今であつた。彼女はお秀^{あと}の後^{おつ}を追かけるようにして宅を出た。

堀の家は^{うち}大^{おお}略^{よそ}の見当から云つて、病院と同じ方角にあるので、電車を二つばかり手前の停留所で下りて、下りた処から、すぐ右へ切れさえすれば、つい四五町の道を歩くだけで、すぐ門前へ出られた。

藤井や岡本の住居^{すまい}と違って、郊外に遠い彼の邸^{やしき}には、ほとんど庭というものがなかった。車廻し、馬車廻しは無論の事であつた。往来に面して建てられたと云つてもいいその二階作りと門の間には、ただ三間足らずの余地があるだけであつた。しかもそれが石で敷き詰められているので、地面の色はどこにも見えなかった。

市区改正の結果、よほど以前に取り広げられた往来には、比較

的よそで見られない幅があつた。それでいて商売をしている店は、町内にほとんど一軒も見当らなかつた。弁護士、医者、旅館、そんなものばかりが並んでいたので、四辺あたりが繁華な割に、通りはいつも閑静であつた。

その上路みちの左右には柳の立木が行儀よく植えつけられていた。したがつて時候の好い時には、殺風景な市内の風も、両側に揺うごく緑りの裡うちに一種の趣おもむきを見せた。中で一番大きいのが、ちようど堀ほりの堀際へいぎわから斜めに門の上へ長い枝を差し出しているので、よそ目めにはそれが家と調子を取るために、わざとそこへ移されたやうに体裁ていさいが好かつた。

その他の特色を云うと、玄関の前に大きな鉄の天水桶てんすいおけがあつ

た。まるで下町の質屋が何かを聯想^{れんそう}させるこの長物^{ちやうぶつ}と、そのすぐ横にある玄関の構^{かまえ}とがまたよく釣り合っていた。比較的間口の広いその玄関の入口はことごとく細^{ほそ}い格子^{こうし}で仕切られているだけで、唐戸^{からど}だの扉^{ドア}だのの裝飾はどこにも見られなかった。

一口^{うなず}でいうと、ハイカラな仕舞^{しも}うた屋^やと評しさえすれば、それですぐ首肯^{うなず}かれるこの家の職業は、少なくとも系統的に、家の様子を見ただけで外部から判断する事ができるのに、不思議なのはその主人であつた。彼は自分がどんな宅^{うち}へ入っているかいまだかつて知らなかつた。そんな事を苦^くにする神経をもたない彼は、他^{ひと}から自分の家業^{かぎよう}柄^{がら}を何とあげつらわれてもいっこう平氣であつた。道楽者だが、満^{まんざら}更無教育なただの金持とは違って、人柄か

らいえば、こんな役者向の家に住うのはむしろ不適當かも知れな
 いくらいな彼は、極めて我の少ない人であつた。悪く云えば自己
 の欠乏した男であつた。何でも世間の習俗通りにして行く上に、
 わが家庭に特有な習俗もまた改めようとしなない氣樂ものであつた。
 かくして彼は、彼の父、彼の母に云わせるとすなわち先代、の建
 てた土蔵造りのような、そうしてどこかに芸人趣味のある家に
 住んで満足しているのであつた。もし彼の美点がそこにもあると
 すれば、わざとらしく得意がつていない彼の態度を賞めるよりほ
 かに仕方がなかつた。しかし彼はまた得意がるはずもなかつた。
 彼の眼に映る彼の住宅は、得意がるにしては、彼にとってあまり
 に陳腐過ぎた。

お延は堀の家^{うち}を見るたびに、自分と家との間に存在する不調和を感じた。家へ入^はいってからもその距離を思い出す事がしばしばあった。お延の考えによると、一番そこに落ちついてぴたりと坐^まっていてられるものは堀の母だけであつた。ところがこの母は、家族中でお延の最も好かない女であつた。好かないというよりも、むしろ応対しにくい女であつた。時代が違^{ちが}う、残酷に云えば隔世の感がある、もしそれが当たらないとすれば、肌が合^あわない、出^でが違^{ちが}う、その他評する言葉はいくらでもあつたが、結果はいつでも同じ事に歸着した。

次には堀その人が問題であつた。お延から見たこの主人は、この家^{うち}に釣り合^あうようでもあり、また釣り合^あわないようでもあつた。

それをもう一歩進めていうと、彼はどんな家へ行っても、釣り合うようでもあり、釣り合わないようでもあるというのとほとんど同じ意味になるので、始めから問題にしないのと、大した変りはなかった。この曖昧あいまいなところがまたお延の堀に対する好悪こうおの感情をそのままに現わしていた。事実をいうと、彼女は堀を好いてゐるようでもあり、また好いていないようでもあつた。

最後きたに来るお秀に関しては、ただ要領を一口でいう事ができた。お延から見ると、彼女はこの家の構造に最も不向ふむきに育て上げられていた。この断案にもう少しもつたいをつけ加えて、心理的に翻訳すると、彼女とこの家庭の空気とはいつまで行つても一致しつこなかつた。堀の母とお秀、お延は頭の中にこの二人を並べて見

るたびに一種の矛盾を強いられた。しかし矛盾の結果が悲劇であるか喜劇であるかは容易に判断ができなかった。

家と人とをこう組み合せて考えるお延の眼に、不思議と思われる事がただ一つあった。

「一番家と釣り合の取れている堀の母が、最も彼女を手古摺らせると同時に、その反対に出来上っているお秀がまた別の意味で、最も彼女に苦痛を与えそうな相手である」

玄関の格子を開けた時、お延の頭に平生からあったこんな考えを一度に蘇えらさせるべく号鈴がはげしく鳴った。

百二十四

昨日きのう孫を伴つれて横浜の親類へ行つたという堀の母がまだ歸つて
 いなかつたのは、座敷へ案内されたお延にとつて、意外な機会であつた。
 見方によつて、好都合つごうにもなり、また悪い跋ばつにもなるこの機会は、
 彼女から話しのしにくい年寄を追おい除けてくれたと同時に、ただ一人面めんと向き合つて、
 当の敵かたきのお秀と応対しなければならぬ不利をも与えた。

お延に知れていないこの情実は、訪問の最初から彼女の勝手を狂わせた。
 いつもなら何をおいても小さな鬻まげに結いつた母が一番先へ出て来て、
 義理ぎりずぐめにちやほやしてくれるところを、今日に限つて、
 劈頭へきとうにお秀が顔を出したばかりか、待ち設もうけた老女は

その後からあとも現われる様子をいつこう見せないのです、お延はいつもの予期から出てくる自然の調子をまず外はずさせられた。その時彼女はお秀を一目見た眼の中にうち、当惑の色を示した。しかしそれはすまなかつたという後悔の記念でも何でもなかつた。単に昨日の戦争に勝った得意の反動からくる一種のきまり悪さであつた。どんな敵を打たれるかも知れないという微かすかな恐怖であつた。この場をどう切り抜けたらいいか知らという思慮の悩乱でもあつた。

お延はこの一瞥いちべつをお秀に与えた瞬間に、もう今日の自分を相手に握られたという気がした。しかしそれは自分のもっている技巧のどうする事もできない高い源からこの一瞥いちべつが突如として閃ひらめいてしまった後であつた。自分の手の届かない暗から不意に

来たものを、喰い止める威力をもっていない彼女は、甘んじてその結果を待つよりほかに仕方がなかった。

一瞥ははたしてお秀の上によく働いた。しかしそれに反応してくる彼女の様子は、またいかにも予想外であつた。彼女の平生、その平生が破裂した昨日、^{きのう}津田と自分と寄つてたかつてその破裂を料理した始末、これらの段取を、不斷から一貫して傍の^{はた}人の眼に着く彼女の性格に結びつけて考えると、どうしても無事に納まるはずはなかった。大なり小なり次の波瀾が呼び起されずに片がつこうとは、いかに自分の手際に重きをおくお延にも信ぜられなかった。

だから彼女は驚ろいた。座に着いたお秀が案に相違していつも

より愛嬌あいきようの好い挨拶あいさつをした時には、ほとんどわれを疑うくらいに驚ろいた。その疑いをまた少しも後へ繰り越させないよう
に、手てぬか抜きなく仕向けて来る相手の態度を眼の前に見た時、お延
はむしろ気味が悪くなった。何という変化だろうという驚ろきの
後から、どういう意味だろうという不審ふしんが湧わいて起った。

けれども肝心かんじんなその意味を、お秀はまたいつまでもお延に説
明しようとしなかった。そればかりか、昨日病院で起った不幸な
ゆゆちがい行き違ちがひについても、ついに一言も口くちを利く様子を見せなかった。

相手に心得があつてわざと際きわどい問題を避けている以上、お延
の方からそれを切り出すのは変なものであつた。第一好んで痛い
ところに触れる必要はどこにもなかった。と云つて、どこかで区く

切^{ぎり}を付けて、双方さっぱりしておかないと、自分は何のために、今日ここまで足を運んだのか、主意が立たなくなつた。しかし和解の形式を通過しないうちに、もう和解の実を挙げている以上、それをとやかく表面へ持ち出すのも馬鹿^{ばか}げていた。

怜^{りこう}惻^{さく}なお延は弱らせられた。会話が滑^{なめ}らかにすべって行けば行くほど、一種の物足りなさが彼女の胸の中に頭^{もた}を擡^たげて来た。しまいには彼女は相手のどこかを突き破^{やぶ}つて、その内側を覗^{のぞ}いて見ようかと思ひ出した。こんな点^{てん}にかけると、すこぶる冒険^{あかつき}的なところのある彼女は、万一やり損^{そく}なつた暁^{あかつき}に、この場合から起り得る危険を知らないではなかつた。けれどもそこには自分の腕^{うで}に対する相当の自信も伴^{ともな}つていた。

その上もし機会が許すならば、お秀の胸の格別なある一点に、打診を試ろみたいという希望が、お延の方にはあつた。そこを敲たたかせて貰もらつて局部から自然に出る本音を充分に聴きく事は、津田と打ち合せを済ました訪問の主意でも何でもなかったけれども、お延自身からいうと、うまく媾和こうわの役目をやり終おせて帰るよりも遙はるかに重大な用向ようむきであつた。

津田に隠さなければならぬこの用向は、津田がお延にないしよにしなければならぬ事件と、その性質の上においてよく似通つていた。そうして津田が自分のいない留守るすに、小林がお延に何を話したかを気にするごとく、お延もまた自分のいない留守に、お秀が津田に何を話したかを確しかと突きとめたかったのである。

どこに引^{ひつ}かかりを^{こしら}拵えたものかと思案した末、彼女は仕方なしに、藤井の帰りに寄ってくれたというお秀の訪問をまた問題にした。けれども座に着いた時すでに、「先刻^{さつぎ}いらしつて下すつたそうですが、あいにくお湯に行つていて」という言葉を、会話の口^{くちきり}切に使つた彼女が、今度は「何か御用でもおありだったの」という質問で、それを復活させにかかった時、お秀はただ簡単に「いいえ」と答えただけで、綺麗^{きれい}にお延を跳^はねつけてしまった。

百二十五

お延は次に藤井から入つて行こうとした。今朝^{けさ}この叔父^{おじ}の所を

訪ねたというお秀の自白が、話しをそつちへ持つて行くに都合の
いい便利を与えた。けれどもお秀の門もんがまえ構かまは依然としてこの方
面にも嚴重であつた。彼女は必要の起るたびに、わざわざその門
の外へ出て来て、愛想よくお延に応対した。お秀がこの叔父の世
話で人となつた事實は、お延にもよく知れていた。彼女が精神的
にその感化を受けた点もお延に解わかつていた。それでお延は順序と
してまずこの叔父の人格やら生活やらについて、お秀の氣に入り
そんな言辭ことばを弄ろうさなければならなかつた。ところがお秀から見
ると、それがまた一々誇張と虚偽の響きを帯びているので、彼女は
真面目まじめに取り合う緒いとくち口くちをどこにも見出す事ができないのみなら
ず、長く同じ筋道を辿たどつて行くうちには、自然氣色きしよくを悪くした様

子を外に現わさなければすまなくなつた。敏捷びんしょうなお延は、相

手を見縊みくびり過すぎていた事に気がつくや否や、すぐ取つて返した。

するとお秀の方で、今度は岡本の事を喋ちやうちやう々し始めた。お秀対

藤井とちようど同じ関係にあるその叔父は、お延にとつて大事な

人であると共に、お秀からいうと、親しみも何にも感じられない、

あかの他人であつた。したがつて彼女の言葉には滑すべつこい皮膚が

あるだけで、肝心かんじんの中味に血も肉も盛られていなかった。それ

でもお延はお秀の手料理になるこのお世辞せじの返礼をさも旨うまそうに

鵜呑うのみにしなければならなかつた。

しかし再度自分の番が廻つて来た時、お延は二返目の愛嬌あいきやう

を手古盛てこもりに盛り返して、悪くお秀に強いるほど愚かな女ではな

かつた。時機を見て器用に切り上げた彼女は、次に吉川夫人から煽^{あお}つて行こうとした。しかし前と同じ手段を用いて、ただ賞^ほめそやすだけでは、同じ不成^{ふせい}蹟^{せき}に陥^{おち}いるかも知れないという恐れがあつた。そこで彼女は善悪の標準を度外に置いて、ただ夫人の名前だけを二人の間に点出して見た。そうしてその影響次第^{あと}で後の段取をきめようと覚悟した。

彼女はお秀^{お秀}が自分の風呂の留守^{るす}へ藤井の帰りがけに廻^{まわ}つて来た事を知っていた。けれども藤井へ行く前に、彼女がもうすでに吉川夫人を訪問している事にはまるで想^{おも}い^{いた}に^{いた}らなかった。しかも昨日^{きのう}病院で起^{おこ}つた波瀾^{はらん}の結果として、彼女がわざわざそこまで足を運んでいようとは、夢にも知らなかった。この一点にかけると、

津田と同じ程度に無邪気であつた彼女は、津田が小林から驚ろかされたと同じ程度に、またお秀から驚ろかされなければならなかつた。しかし驚ろかせられ方は二人共まるで違つていた。小林のは明らさまな事実の報告であつた。お秀のは意味のありそうな無言であつた。無言と共に来た薄赤い彼女の顔色であつた。

最初夫人の名前がお延の唇から洩れた時、彼女は二人の間に一滴の靈藥が天から落されたような気がした。彼女はすぐその効果を眼の前に眺めた。しかし不幸にしてそれは彼女にとって何の役にも立たない効果に過ぎなかつた。少くともどう利用していいか解らない効果であつた。その予想外な性質は彼女をはつと思わせるだけであつた。彼女は名前を口へ出すと共に、あるいはその場

ですぐ失言を謝さなければならぬかしらとまで考えた。

すると第二の予想外が繼いで起つた。お秀がちよつと顔を背けた様子を見た時に、お延はどうしても最初に受けた印象を改正しなければならなくなつた。血色の変化はけつして怒りのためでないという事がその時始めて解つた。年来陳腐なくらい見飽きている單純なきまりの悪さだと評するよりほかに仕方のないこの表情は、お延をさらに驚ろかさざるを得なかつた。彼女はこの表情の意味をはつきり確かめた。しかしその意味の因つて来るところは、お秀の説明を待たなければまた確かめられるはずがなかつた。

お延がどうしようかと迷っているうちに、お秀はまるで木に竹を接いだように、突然話題を変化した。行がかり上全然今までと

関係のないその話題は、三度目にまたお延を驚ろかせるに充分なくらい突飛とつぴであつた。けれどもお延には自信があつた。彼女はすぐそれを受けて立つた。

百二十六

お秀の口を洩れた意外な文句のうちで、一番初めにお延の耳を打つたのは「愛」という言葉であつた。この陳腐ちんぷなありきたりの一語が、いかにお延の前に伏兵のような新らし味をもつて起つたかは、前後の連絡を欠いて単独に突発したというのが重おもな原因に相違なかつたが、一つにはまた、そんな言葉がまだ会話の材料と

して、二人の間に使われていなかったからである。

お延に比べるとお秀は理窟^{りくつ}っぽい女であつた。けれどもそういう結論に達するまでには、多少の説明が要つた。お延は自分で自分の理窟を行為の上に運んで行く女であつた。だから平生彼女の議論をしないのは、できないからではなくつて、する必要がないからであつた。その代り他^{ひと}から注^つぎ込まれた知識になると、大した貯蓄も何にもなかつた。女学生時代に読み馴^なれた雑誌さえ近頃は滅多^{めった}に手にしないくらいであつた。それでいて彼女はまだまだかつて自分を貧弱と認めた事がなかつた。虚栄心の強い割に、その方面の欲望があまり刺戟^{しげき}されずにすんでいるのは、暇が乏しいからでもなく、競争の話し相手がないからでもなく、全く自分に大

した不足を感じないからであつた。

ところが秀は教育からしてが第一違つていた。読書は彼女を彼女らしくするほとんどすべてであつた。少なくとも、すべてでなければならぬように考えさせられて来た。書物に縁の深い叔父の藤井に教育された結果は、善悪両様の意味で、彼女の上に妙な結果を生じた。彼女は自分より書物に重きをおくようになった。しかしいくら自分を書物より軽く見るにしたところで、自分は自分なりに、書物と独立したまんまで、生きて働らいて行かなければならなかつた。だから勢い本と自分とは離れ離れになるだけであつた。それをもつと適切な言葉で云い現わすと、彼女は折々柄がらにもない議論を主張するような弊に陥おちいつた。しかし自分が議論の

ために議論をしているのだからつまらないと気がつくまでには、彼女の反省力から見て、まだ大^{だいぶん}分の道^{みち}程^{のり}があつた。意地の方から行くと、あまりに我^がが強過ぎた。平たく云えば、その我がつまり自分の本体であるのに、その本体に副^そぐわれないような理窟^{りくつ}を、わざわざ自分の尊敬する書物の中^{うち}から引張り出して来て、そこに書いてある言葉の力で、それを守護するのと同じ事に帰着した。自然^た弾^{たま}丸を込めて打ち出すべき大砲を、九寸五分^{くすんごぶ}の代りに、振り廻して見るような滑稽^{こっけい}も時々は出て来なければならなかった。

問題ははたして或雑誌から始まった。月の発行にかかるその雑誌に発表された諸家の恋愛観を読んだお秀の質問は、実をいうとお延にとってそれほど興味のあるものでもなかった。しかしまだ

眼を通していない事実を自白した時に、彼女の好奇心が突然起つた。彼女はこの抽象ちゆうしやうてき的な問題を、どこかで自分の思い通り活かしてやろうと決心した。

彼女はややともすると空論に流れやすい相手の弱点をかなりよく呑み込んでいた。際きわどい實際問題にこれから飛び込んで行こうとする彼女に、それほど都合つごうの悪い態度はなかった。ただ議論のために議論をされるくらいなら、最初から取り合わない方がよっぽどましだった。それで彼女にはどうしても相手を地面の上に縛しばりつけておく必要があつた。ところが不幸にしてこの場合の相手は、最初からもう地面の上になかった。お秀の口にする愛は、津田の愛でも、堀の愛でも、乃至ないしお延、お秀の愛でも何でもなか

った。ただ漫然^{まんぜん}として空裏^{くうり}に飛揚^{ひよう}する愛であつた。したがつてお延の努力は、風船玉のようなお秀の話を、まず下へ引き摺^ずりおろさなければならなかつた。

子供がすでに二人もあつて、万事自分より世帯染^{しやたいじ}みているお秀が、この意味において、遙^{はる}かに自分より着実でない事を発見した時に、お延は口ではいいはい向うのいう通りを首肯^{うけが}しながら、腹の中では、じれつたがつた。「そんな言葉の先でなく、裸でいらつしやい、実力で相撲^{すもう}を取りますから」と云いたくなつた彼女は、どうしたらこの議論家を裸にする事ができるだろうと思案した。

やがてお延の胸に分別^{ふんべつ}がついた。分別とはほかでもなかつた。この問題を活^いかすためには、お秀を犠牲にするか、または自分を

犠牲にするか、どつちかにしなければ、とうてい思ふ壺つぼに入つて来る訳がないという事であつた。相手を犠牲にするのに困難はなかつた。ただどこからか向うの弱点を突ツ付きさえすれば、それで事は足りた。その弱点が事実であろうとも仮説的であろうとも、それはお延の意とするところではなかつた。単に自然の反応を目的にして試みる刺戟しげきに対して、真偽の吟味ぎんみなどは、要らざる斟しん酌しやくであつた。しかしそこにはまたそれ相応の危険もあつた。お秀は怒るに違ちがひなかつた。ところがお秀を怒らせるという事は、お延の目的であつて、そうして目的でなかつた。だからお延は迷わざるを得なかつた。

最後に彼女はある時機を掴つかんで起たつた。そうしてその起つた時

には、もう自分を犠牲にする方に決心していた。

百二十七

「そう云われると、何と云っていいか解^{わか}らなくなるわね、あたしなんか。津田に愛されているんだか、愛されていないんだか、自分じやまるで夢中でいるんですもの。秀子さんは仕合せね、そこへ行くと。最初から御自分にちゃんとした保証がついていらつしやるんだから」

お秀の器量^{きりよう}望^{のぞ}みで貰^{もら}われた事は、津田といっしよにならない前から、お延に知れていた。それは一般の女、ことにお延のよう

な女にとつては、羨うらややましい事實に違ちがなかつた。始めて津田からその話を聴きかされた時、お延はお秀を見ない先に、まず彼女に対する軽い嫉妬しつとを感じた。中味の薄つぺらな事實に過ぎなかつたという意味があとで解つた時には、淡い冷笑のうちに、復讐ふくしゅうをしたような快感さえ覺えた。それより以後、愛という問題について、お秀に対するお延の態度は、いつも軽蔑けいべつであつた。それを表おもてむき向むかさも嬉しい消息うれでもあるように取扱かつて、彼我ひがに共通するごとくに見せかけたのは、無論一片のお世辞せじに過ぎなかつた。もつと悪く云えば、一種の嘲弄ちやうろうであつた。

幸いお秀はそこに気がつかなかつた。そうして気がつかない訳であつた。と云うのは、言葉の上はとにかく、實際に愛を体得す

る上において、お秀はとてもお延の敵でなかった。猛烈に愛した経験も、生き一本いっぽんに愛された記憶ももない彼女は、この能力の最大限がどのくらい強く大きなものであるかという事をまだ知らずにいる女であつた。それでいて夫に満足している細君であつた。知らぬが仏ほとけという諺ことわざがまさにこの場合の彼女をよく説明していた。結婚の当時、自分の未来に夫の手で押しつけられた愛の判を、普通の証文のようなつもりで、いつまでも胸うちの中へしまい込んでいた彼女は、お延の言葉を、その胸の中で、真面目まじめに受けるほど無邪気だったのである。

本当に愛の実体を認めた事のないお秀は、彼女のいたずらに使う胡乱うろんな言葉を通して、鋭いお延からよく見透みすかされたのみで

はなかつた。彼女は津田とお延の關係を、自分達夫婦から割り出して平氣でいた。それはお延の言葉を聴きいた彼女が實際驚ろいた顔をしたのでも解つた。津田がお延を愛しているかいないかが今頃どうして問題になるのだろう。しかもそれが細君自身の口から出るとは何事だろう。ましてそれを夫の妹の前へ出すに至つては、どこにどんな意味があるのだろう。——これがお秀の表情であつた。

實際お秀から見たお延は、現在の津田の愛に満足する事を知らない横着者か、さもなければ、自分が充分津田を手の中へ丸め込んでおきながら、わざとそこに氣のつかないようなふりをする、そらぞら空々しい女に過ぎなかつた。彼女は「あら」と云つた。

「まだその上に愛されてみたいの」

この挨拶あいさつは平生のお延の注文通りに来た。しかし今の場合におけるお延に満足を与えるはずはなかった。彼女はまた何とか云つて、自分の意志を明らかにしなければならなかった。ところがそれを判然はつきり表現すると、「津田があたしのほかにまだ思っている人が別にあるとするなら、あたしだってどうてい今のままで満足できる訳がないじゃありませんか」という露骨な言葉になるよりほかに途みちはなかった。思い切つて、そう打つて出れば、自分で自分の計画をぶち毀こわすのと一般だと感づいた彼女は、「だって」と云いかけたまま、そこで逡巡ためらったなり動けなくなつた。

「まだ何か不足があるの」

こう云ったお秀は眼を集めてお延の手を見た。そこには例の指環びわが遠慮なく輝やいていた。しかしお秀の鋭いちべつどい一瞥は何の影響もお延に与える事ができなかった。指輪に対する彼女の無邪気さは昨日きのうと毫ごうも変わるところがなかった。お秀は少しもどかしくなつた。

「だつて延子さんは仕合せじゃありませんか。欲しいものは、何でも買つて貰えるし、行きたい所へは、どこへでも連れていつて貰えるし——」

「ええ。そこだけはまあ仕合せよ」

他ひとに向つて自分の仕合せと幸福を主張しなければ、わが弱味を外へ現わすようになって、不都合だとばかり考えつけて来たお延

は、平生から持ち合せの挨拶あいさつをついこの場合にも使つてしまつた。そうしてまた行きつまつた。芝居に行つた翌日あくるひ、岡本へ行つて継子と話をした時用いた言葉を、そのまま繰り返した後で、彼女は相手のお秀であるという事に気がついた。そのお秀は「そこだけが仕合せなら、それでたくさんじゃないか」という顔つきをした。

お延は自分がかかりそめにも津田を疑つてゐるという形迹けいせきをお秀に示したくなかつた。そうかと云つて、何事も知らない風を粧よそおつて、見す見すお秀から馬鹿にされるのはなお厭いやだつた。したがつて応対に非常な呼吸が要いつた。目的地へ漕こぎつけるまでにはなかなか骨が折れると思つた。しかし彼女はとても見込のない無理

な努力をしているという事には、ついに気がつかなかった。彼女はまた態度を一変した。

百二十八

彼女は思い切つて一足飛びに飛んだ。情実に絡からまれた窮屈な云い廻し方を打ちやつて、面めんと向き合つたままお秀に相しやうけん見しようとした。その代り言葉はどうしても抽象的にならなければならなかった。それでも論戦の刺撃で、事実の面影おもかげを突きとめる方が、まだましだと彼女は思った。

「いったい一人の男が、一人以上の女を同時に愛する事ができる

ものでしょうか」

この質問を基点として歩を進めにかかった時、お秀はそれに対してあらかじめ準備された答を一つももっていなかった。書物と雑誌から受けた彼女の知識は、ただ一般恋愛に関するだけで、毫もこの特殊な場合に利用するに足らなかった。腹に何の貯えたくわもない彼女は、考える風をした。そうして正直に答えた。

「そりやちよつと解らないわ」

お延は氣の毒になった。「この人は生きた研究の材料として、堀という夫をすでもっているではないか。その夫の婦人に対する態度も、朝夕あさゆうそ傍にいて、見ているではないか」。お延がこう思う途端に、第二句がお秀の口から落ちた。

「解^{わか}らないはずじゃありませんか。こつちが女なんですもの」

お延はこれも愚答だと思つた。もしお秀のありのままがこうだとすれば、彼女の心の働らきの鈍さ加減が想^{おも}いやられた。しかしお延はすぐこの愚答を活かしにかかった。

「じゃ女の方から見たらどうでしょう。自分の夫が、自分以外の女を愛しているという事が想像できるでしょうか」

「延子さんにはそれができないの？」と云われた時、お延はおやと思つた。

「あたしは今そんな事を想像しなければならぬ地位にいるんでしょうか」

「そりや大丈夫よ」とお秀はすぐ受け合つた。お延は直^{ただ}ちに相手

の言葉を繰り返した。

「大丈夫!」

疑問とも間投詞とも片のつかないその語尾は、お延にも何という意味だか解らなかった。

「大丈夫よ」

お秀も再び同じ言葉を繰り返した。その瞬間にお延は冷笑の影をちらりとお秀の唇のあたりくちびるに認めた。しかし彼女はすぐそれを切って捨てた。

「そりや秀子さんは大丈夫にきまつてゐるわ。もともと堀さんへいらつしやる時の条件が条件ですもの」

「じゃ延子さんはどうなの。やっぱり津田に見込まれたんじゃない

かつたの」

「嘘うそよ。そりやあなたの事よ」

お秀は急に応じなくなつた。お延も獲物のない同じ脈をそれ以上掘る徒労を省はぶいた。

「いったい津田は女に関してどんな考えをもっているんでしょう」
「それは妹より奥さんの方がよく知つてゐるはずだわ」

お延は叩きつけられた後あとで、自分もお秀と同じような愚問をかけた事に気がついた。

「だけど兄きょうだい妹としての津田は、あたしより秀子さんの方によく解つてゐるでしょう」

「ええ、だけど、いくら解つてたつて、延子さんの参考にやなら

ないわ」

「参考に無論なるのよ。しかしその事ならあたしだって疾^とうから知^ちつてゐるわ」

お延の鎌^{かま}は際^{きわ}どいところで投げかけられた。お秀ははたしてかかった。

「けれども大丈夫よ。延子さんなら大丈夫よ」

「大丈夫だけれども危険^{あぶな}いのよ。どうしても秀子さんから詳しい話^きしを聴^きかしていただかないと」

「あら、あたし何にも知らないわ」

こういったお秀は急に赧^{あか}くなつた。それが何の羞恥^{しゆううち}のために起つたのかは、いくら緊張したお延の神経でも揣摩^{しま}できなかつた。

しかも彼女はこの訪問の最初に、同じ現象から受けた初度しよどの記憶をまだ忘れずにいた。吉川夫人の名前を点じた時に見たその薄うすあ赧かい顔と、今彼女の面前に再現したこの赤面の間にどんな関係があるのか、それはいくら物の異同を嗅かぎ分ける事に妙を得た彼女にも見当がつかなかった。彼女はこの場合無理にも二つのものを繋つないでみたくつてたまらなかった。けれどもそれを繋つなぎ合せる綱は、どこをどう探さがしたつて、金輪際こんりんざい出て来つこなかった。お延にとつて最も不幸な点は、現在の自分の力に余るこの二つのものの間に、きつと或る聯絡れんらくが存在しているに相違ないという推す測そくであつた。そうしてその聯絡が、今の彼女にとつて、すこぶる重大な意味をもっているに相違ないという一種の予覚であつた。

自然彼女はそこをもつと突ツついて見るよりほかに仕方がなかつた。

百二十九

とつきの衝動に支配されたお延は、自分の口を衝ついて出る嘘うそを抑おさえる事ができなかつた。

「吉川の奥さんからも伺った事があるのよ」

こう云つた時、お延は始めて自分の大胆さに気がついた。彼女はそこへとまつて、冒険の結果を眺めなければならなかつた。するとお秀が今までの赤面とは打つて変つた不思議そうな顔をしな

がら訊^きき返した。

「あら何を」

「その事よ」

「その事つて、どんな事なの」

お延にはもう後^{あと}がなかった。お秀には先があつた。

「嘘でしょう」

「嘘じゃないのよ。津田の事よ」

お秀は急に応じなくなつた。その代り冷笑の影を締りの好い口元にわざと寄せて見せた。それが先刻^{さつき}より著るしく目立って外へ現われた時、お延は路を誤まつて一步深田^{ふかだ}の中へ踏み込んだような気がした。彼女に特有な負け嫌いな精神が強く働かなかつた

なら、彼女はお秀の前に頭を下げて、もう救を求めていたかも知れなかった。お秀は云った。

「変ね。津田の事なんか、吉川の奥さんがお話しになる訳がないのにね。どうしたんでしょう」

「でも本当よ、秀子さん」

お秀は始めて声を出して笑った。

「そりや本当でしょうよ。誰も嘘だと思うものなんかありやしないわ。けどどんな事なの、いったい」

「津田の事よ」

「だから兄の何よ」

「そりや云えないわ。あなたの方から云って下さらなくっちゃ」

「ずいぶん無理な御注文ね。云えつたつて、見当^{けんとう}がつかないんですもの」

お秀はどこからでもいらつしやいという落ちつきを見せた。お延^のの腋^{わき}の下から膏^{あぶら}汗^{あせ}が流れた。彼女は突然飛びかかった。

「秀子さん、あなたは基^キ督^{リス}教^{トキ}信^{よう}者^{しん}じゃありませんか」

お秀は驚ろいた様子を現わした。

「いいえ」

「でなければ、昨日^{きのう}のような事をおつしやる訳がないと思いますわ」

昨日と今日の二人は、まるで地位を易^かえたような形勢^{おちい}に陥^{おちい}った。お秀はどこまでも優者の余裕を示した。

「そう。じゃそれでもいいわ。延子さんはおおかた基督教がお嫌きらいなんでしょう」

「いいえ好きなのよ。だからお願いするのよ。だから昨日のような気高けだかい心持になって、この小さいお延を憐あわれんでいただきたいのよ。もし昨日のあたしが悪かったら、こうしてあなたの前に手を突あいて詫あやまるから」

お延は光る宝石入の指輪を穿はめた手を、お秀の前に突いて、口で云った通り、実際に頭を下げた。

「秀子さん、どうぞ隠さずに正直にして下さい。そうしてみんな打ち明けて下さい。お延はこの通り正直にしています。この通り後悔しています」

持前の癖を見せて、眉まゆを寄せた時、お延の細い眼から涙が膝ひざの上へ落ちた。

「津田はあたしの夫です。あなたは津田の妹です。あなたに津田が大事なように、津田はあたしにも大事です。ただ津田のためです。津田のために、みんな打ち明けて話して下さい。津田はあたしを愛しています。津田が妹としてあなたを愛しているように、妻としてあたしを愛しているのです。だから津田から愛されているあたしは津田のためにすべてを知らなければならぬのです。津田から愛されているあなたもまた、津田のために万よろずをあたしに打ち明けて下さるでしょう。それが妹としてのあなたの親切です。あなたがあたしに対する親切を、この場合お感じにならない

でも、あたしはいつこう恨みうらとは思いません。けれども兄さんとしての津田には、まだ尽して下さる親切をもっていらっしゃるでしょう。あなたがそれを充分もっていらっしゃるのは、あなたの顔つきでよく解わかります。あなたはそんな冷刻な人ではけっしてないのです。あなたはあなたが昨日御自分でおっしゃった通り親切な方に違いないのです」

お延がこれだけ云つて、お秀の顔を見た時、彼女はそこに特別な変化を認めた。お秀は赧あかくなる代りに少し蒼白あおしろくなった。そうして度外どはずれに急せぎ込こんだ調子で、お延の言葉を一刻も早く否定しなければならぬという意味に取れる言葉遣づかいをした。

「あたしはまだ何にも悪い事をした覚おぼえはないんです。兄さんに対

しても嫂^{ねえ}さんに対しても、もっているのは好意だけです。悪意はちつとも有りません。どうぞ誤解のないようにして下さい」

百三十

お秀の言訳はお延にとって意外であつた。また突然であつた。

その言訳がどこから出て来たのか、また何のためであるかまるで解らなかつた。お延はただはつと思つた。天恵のごとく彼女の前に露出されたこの時のお秀の背後に何が潜^{くちやみ}んでいるのだろう。お延はすぐその暗闇^{くらやみ}を衝^つこうとした。三度目の嘘^{うそ}が安々と彼女の口^{くち}を滑^{すべ}つて出た。

「そりや解つてゐるのよ。あなたのなすつた事も、あなたのなすつた精神も、あたしにはちゃんと解つてゐるのよ。だから隠しだてをしないで、みんな打ち明けてちょうだいな。お厭いや？」

こう云つた時、お延は出来る限りの愛あい嬌きようをその細い眼に湛たたえて、お秀を見た。しかし異性に対する場合の効果を予想したこの所作は全く外はずれた。お秀は驚ろかされた人のように、卒爾そつじな質問をかけた。

「延子さん、あなた今日ここへおいでになる前、病院へ行つていらしたの」

「いいえ」

「じゃどこか外ほかから廻つていらしたの」

「いいえ。宅うちからすぐ上ったの」

お秀はようやく安心したらしかった。その代り後は何にも云わなかった。お延はまだすが縋りついた手を放さなかった。

「よう、秀子さんどうぞ話してちようだいよ」

その時お秀の涼しい眼のうちに残酷ざんこくな光が射した。

「延子さんはずいぶん勝手な方ね。御自分ひと独り精せい一杯愛されなくつちや気がすまないと見えるのね」

「無論よ。秀子さんはそうでなくつても構わないの」

「良人うちを御覧なさい」

お秀はすぐこう云つて退のけた。お延は話頭わとうからわざと堀を追おけた。

「堀さんは問題外よ。堀さんはどうでもいいとして、正直の云いいつ競くらよ。なんぼ秀子さんだって、気の多い人が好きな訳はないでしょう」

「だって自分よりほかの女は、有れども無きがごとくしてような素直すなおな夫が世の中にいるはずがないじゃありませんか」

雑誌や書物からばかり知識の供給を仰いでいたお秀は、この時突然卑近な実家家となってお延の前に現われた。お延はその矛盾を注意する暇さえなかった。

「あるわよ、あなた。なけりやならないはずじゃありませんか、いやしくも夫と名がつく以上」

「そう、どこにそんな好い人がいるの」

お秀はまた冷笑の眼をお延に向けた。お延はどうしても津田という名前を大きな声で叫ぶ勇気がなかった。仕方なしに口の先で答えた。

「それがあたしの理想なの。そこまで行かなくっちゃ承知ができないの」

お秀が實際家になつた通り、お延もいつの間にか理論家に変化した。今までの二人の位地いちちは顛倒てんとうした。そうして二人ともまるでそこに気がつかずに、勢の運ぶがままに前の方へ押し流された。あとの会話は理論とも実際とも片のつかない、出たとこ勝負になった。

「いくら理想だつてそりや駄目だめよ。その理想が実現される時は、

細君以外の女という女がまるで女の資格を失ってしまわなければならないんですもの」

「しかし完全の愛はそこへ行つて始めて味わわれるでしょう。そこまで行き尽さなければ、本式の愛情は生しょうがいた涯た経たつたつて、感ずる訳に行かないじゃありませんか」

「そりやどうか知らないけれども、あなた以外の女を女と想わないで、あなただけを世の中に存在するたった一人の女だと思ふなんて事は、理性に訴えてできるはずがないでしょう」

お秀はどうとうあなたという字に点火した。お延はいっこう構わなかった。

「理性はどうでも、感情の上で、あたしだけをたった一人の女と

思つていてくれれば、それでいいんです」

「あなただけを女と思えとおっしゃるのね。そりや解^{わか}るわ。けれどもほかの女を女と思つちやいけないとなるとまるで自殺と同じ事よ。もしほかの女を女と思わずにいられるくらいな夫なら、肝^か心のあなただつて、やッぱり女とは思わないでしょう。自分の宅^{うち}の庭に咲いた花だけが本当の花で、世間にあるのは花じゃない枯草だというのと同じ事ですもの」

「枯草でいいと思いますわ」

「あなたにはいいでしょう。けれども男には枯草でないんだから仕方がありませんわ。それよりか好きな女が世の中にいくらでもあるうちに、あなたが一番好かれての方が、嫂^{ねえ}さんにとつても

かえって満足じゃありませんか。それが本当に愛されているという意味なんですもの」

「あたしはどうしても絶対に愛されてみたいの。比較なんか始めから嫌きらいなんだから」

お秀の顔に軽けい蔑べつの色が現われた。その奥には何という理解力に乏しい女だろうという意味がありありと見透みすかされた。お延はむらむらとした。

「あたしはどうせ馬鹿だから理窟りくつなんか解らないのよ」

「ただ実例をお見せになるだけなの。その方が結構だわね」

お秀は冷然として話を切り上げた。お延は胸の奥で地団太じだんだを踏んだ。せつかくの努力はこれ以上何物をも彼女に与える事ができ

なかった。留守に彼女を待つ津田の手紙が来ているとも知らない彼女は、そのまま堀の家を出た。

百三十一

お延とお秀が対坐^{たいざ}して戦っている間に、病院では病院なりに、また独立した予定の事件が進行した。

津田の待ち受けた吉川夫人がそこへ顔を出したのは、お延宛^{あて}で書いた手紙を持たせてやった車夫がまだ帰って来ないうちに、時間からいうと、ちょうど小林の出て行った十分ほど後^{あと}であった。

彼は看護婦の口から夫人の名前を聴^きいた時、この異人種^{いじんしゆ}に近

い二人が、狭い室^{へや}で鉢^{はち}合せ^{あわ}をしず^にすんだ好都合^{こうつごう}を、何より

先にまず祝福した。その時の彼はこの都合をつけるために払うべく余儀なくされた物質上の犠牲をほとんど顧みる暇さえなかった。

彼は夫人の姿を見るや否や、すぐ床の上に起き返ろうとした。

夫人は立ちながら、それを止めた^と。そうして彼女を案内した看護婦の両手に、抱えるようにして持たせた植木鉢^{うえきばち}をちよつとふり返つて見て、「どこへ置きましょう」と相談する^きように訊いた。

津田は看護婦の白い胸に映る紅葉^{もみじ}の色を美しく眺めた。小さい鉢の中で、窮屈^{きうくつ}そうに三本の幹が調子を揃^{そろ}えて並んでゐる下に、恰好^{かつこう}の好い手頃な石さえあしらつたその盆栽^{ぼんさい}が床^{とこ}の間^まの上に置かれた後で、夫人は始めて席に着いた。

「どうです」

先刻から彼女の様子を見ていた津田は、この時始めて彼に対すさつきる夫人の態度を確かめる事ができた。もしやと思つて、暗あんに心配していた彼の掛念けねんの半分は、この一語いちごで吹き晴らされたと同じ事であつた。夫人はいつもほど陽気ではなかつた。その代りいつもほど上うわつ調ちようし子でもなかつた。要するに彼女は、津田がいまだかつて彼女において発見しなかつた一種の氣分で、彼の室に入つて来たらしかった。それは一方で彼女の落ちつきを極度に示していると共に、他方では彼女の鷹揚おうようさをやはり最高度に現わすものらしく見えた。津田は少し驚ろかされた。しかし好い意味で驚ろかされただけに、氣味も悪くしなけりばならなかつた。たといこ

の態度が、彼に対する反感を代表していないにせよ、その奥には何があるか解らなかつた。今その奥に恐るべき何物がないにしても、これから先話をしていううちに、向うの心持はどう変化して来るか解らなかつた。津田は他ひとから機嫌きげんを取られつけている夫人の常として、手前勝手にいくらでも變つて行く、もしくは變つて行つても差さ支しえつかないと自分で許している、この夫人を、一種の意味で、女性の暴君たてまと奉たてつらなければならぬ地位にあつた。漢語でいうと彼女のいっぴん一いっし顰し一笑が津田にはことごとく問題になつた。この際の彼にはことにそうであつた。

「今朝けさ秀子さんがいらしてね」

お秀の訪問はまず第一の議事のごとくに彼女の口から投げ出さ

れた。津田は固^{もと}より相手に応じなければならなかった。そうしてその応じ方は夫人の来ない前からもう考えていた。彼はお秀の夫人を尋ねた事を知つて、知らない風をするつもりであつた。誰から聴いたと問われた場合に、小林の名を出すのが厭^{いや}だつたからである。

「へえ、そうですか。平生あんまり御無沙汰^{ごぶさた}をしているので、たまにはお詫^{わび}に上らないと悪いとも思つたのでしよう」

「いえそうじゃないの」

津田は夫人の言葉を聴^きいた後で、すぐ次の嘘^{うそ}を出した。

「しかしあいつに用のある訳もないでしょう」

「ところがあつたんです」

「へええ」

津田はこう云つたなりその後を待った。

「何の用だかあてて御覧なさい」

津田は空つ惚けて、考える真似をした。

「そうですね、お秀の用事というと、——さあ何でしょうかしら」

「分りませんか」

「ちよつとどうも。——元来私とお秀とは兄妹でいながら、

だいぶん質が違いますから」

津田はここで余計な兄妹関係をわざと仄めかした。それは事の来る前に、自分を遠くから弁護しておくためであつた。それから自分の言葉を、夫人がどう受けてくれるか、その反響をちよつと

聴いてみるためであつた。

「少し理窟りくつッぽいのね」

この一語を聞くや否や、津田は得えたり賢かしこしと虚きよにつけ込んだ。「あいつの理窟と来たら、兄の私でさえ悩まされるくらいですもの。誰だつて、とてもおとなしく辛抱して聴きいていられたものじやございません。だから私はあいつと喧嘩けんかをすると、いつでも好い加減にして投げてしまします。するとあいつは好い氣になつて、勝つたつもりか何かで、自分の都合の好い事ばかりを方々へ行つて触れ散らかすのです」

夫人は微笑した。津田はそれを確かに自分の方に同情をもつた微笑と解釈する事ができた。すると夫人の言葉が、かえつて彼の

思わくとは逆の見^{けんとう}当を向いて出た。

「まさかそうでもないでしょうけれどもね。——しかしなかなか筋の通った好い頭をもった方じゃありませんか。あたしあの方^{かた}は好き^{すき}よ」

津田は苦笑した。

「そりやお宅なんぞへ上つて、むやみに地金^{じがね}を出すほどの馬鹿でもないでしょうがね」

「いえ正直よ、秀子さんの方が」

誰よりお秀が正直なのか、夫人は説明しなかった。

津田の好奇心は動いた。想像もほぼついた。けれどもそこへ折れ曲つて行く事は彼の主意に背いた。そむ彼はただ夫人対お秀の關係を掘り返せばよかつた。病氣見舞を兼た夫人の用向も、ようむき無論それについての懇談にきまつていた。けれども彼女にはまた彼女に特有な趣がおもむきあつた。時間に制限のない彼女は、頼まれるまでもなく、機会さえあれば、他の内輪に首を突ツ込んで、なにかと眼下、ひとことに自分の氣に入つた眼下の世話を焼きたがる代りに、いた到るところでまた道楽本位の本性を露わして平氣であつた。或時の彼女はむやみに急せいて事を纏めようとあせつた。まとそうかと思うと、あの時の彼女は、また正反対であつた。わざわざべんべんと引ツ張

るところに、さも興味でもあるらしい様子を見せてすましていた。
鼠ねずみを弄もてあそぶ猫のようなこの時の彼女の態度が、たとい傍はたから見ても
どうあろうとも、自分では、閑散な時間に曲折した波瀾はらんを与える
ために必要な優者の特権だと解釈しているらしかった。この手に
かかった時の相手には、何よりも辛防しんぼうが大切であつた。その代
り辛防をし抜いた御礼はきつと来た。また来る事をもつて彼女は
相手を奨励した。のみならずそれを自分の倫理上の誇りとした。
彼女と津田の間に取り換わされたこの默契もつけいのために、津田の蒙こうむ
つた重大な損失が、今までにたった一つあつた。その点で彼女が
腹の中でいかに彼に対する責任を感じているかは、伶俐れいりな津田の
見逃みのがすところではなかつた。何事にも夫人の御意ぎよいを主眼に置いて行

動する彼といえども、暗あんにこの強味だけは恃たのみにしていた。しかしそれはいざという万一の場合に保留された彼の利器に過ぎなかった。平生の彼は甘んじて猫の前の鼠となつて、先方の思う通りにじやらされていなければならなかった。この際の夫人もなかなか要点へ来る前に時間を費やした。

「昨日きのう秀子さんが来たでしょう。ここへ」

「ええ。参りました」

「延子さんも来たでしょう」

「ええ」

「今日は？」

「今日はまだ参りません」

「今にいらつしやるんでしょう」

津田にはどうか分らなかつた。先刻^{さつき}来るなという手紙を出した事も、夫人の前では云えなかつた。返事を受け取らなかつた勝手^て違^{ちが}も、実は氣にかかつていた。

「どうですかしら」

「いらつしやるか、いらつしやらないか分らないの」

「ええ、よく分りません。多分来ないだろうとは思うんですが」

「大變冷淡じやありませんか」

夫人は嘲^{あざ}けるような笑い方をした。

「私がですか」

「いいえ、両方がよ」

苦笑した津田が口を閉じるのを待つて、夫人の方で口を開いた。

「延子さんと秀子さんは昨日きのうここで落ち合つたでしょう」

「ええ」

「それから何かあつたのね、変な事が」

「別に……」

「空そらツ惚とほけちやいけません。あつたらあつたと、判はつきり然おつしや

いな、男らしく」

夫人はようやく持前の言葉遣づかいと特色とを、發揮し出した。津

田は挨拶あいさつに困つた。黙つて少し様子を見るよりほかに仕方がな

いと思つた。

「秀子さんをさんざん苛いじめたつて云うじやありませんか。二人し

て」

「そんな事があるものですか。お秀の方が怒ってぶんぶん腹を立てて帰って行つたのです」

「そう。しかし喧嘩けんかはしたでしよう。喧嘩といつたつて殴なぐり合あいじやないけれども」

「それだつてお秀のいふような大袈裟おおげさなものじやないんです」

「かも知れないけれども、多少にしろ有つたには有つたんですね」
「そりやちよつとした行いき違ちがひならございました」

「その時あなた方は二人がかりで秀子さんを苛いめたでしよう」

「苛めやしません。あいつが耶蘇教ヤソキョウのような気きを吐はいただけです」

「とにかくあなたがたは二人、向うは一人だったに違ちがないでし
う」

「そりやそうかも知れません」

「それ御覧なさい。それが悪いじゃありませんか」

夫人の断定には意味も理窟りくつもなかった。したがってどこが悪いんだか津田にはいつこう通じなかった。けれどもこういう場合にこんな風になって出て来る夫人の特色は、けっして逆さからえないものとして、もう津田の頭に叩たたき込まれていた。素直すなおに叱なぐられてい
るよりほかに彼の途みちはなかった。

「そういうつもりでもなかったんですけれども、自然いけおの勢いきおいで、い
つかそうなってしまうたんでしょう」

「でしようじやいけません。ですと判然^{はつきり}おつしやい。いったい
 こういうと失礼なようですが、あなたがあんまり延子さんを大事
 になさり過ぎるからよ」

津田は首を傾けた。

百三十三

伶俐^{れいり}な性分に似合わず夫人対お延の關係は津田によく呑み込^のめ
 ていなかった。夫人に津田の手前があるように、お延にも津田に
 おく氣^{きが}兼^ねがあつたので、それが真向^{まとも}に双方を了解できる聡明^{そうめい}な
 彼の頭を曇らせる原因になつた。女の挨拶^{あいさつ}に相当の割引をして

見る彼も、そこにはつい気がつかなかつたため、彼は自分の前で
 する夫人のお延評を真に受けるまと同時に、自分の耳に聴こえるお
 延の夫人評もまた疑がわなかつた。そうしてその評は双方共に美
 くしいものであつた。

二人の女性が二人だけで心の内に感じ合ひながら、今までそれ
 を外に現わすまいとのみ力めて来た微妙な軋轢あつれきが、必然の要求
 に逼られて、しだいしだいに晴れ渡る靄もやのように、津田の前に展
 開されなければならなくなつたのはこの時であつた。

津田は夫人に向つて云つた。

「別段大事にするほどの女房でもありませんから、その辺の御心
 配は御無用です」

「いいえそうでないようですよ。世間じやみんなそう思ってますよ」

世間という仰ぎょうさん 山な言葉が津田を驚ろかせた。夫人は仕方なしに説明した。

「世間って、みんなの事よ」

津田にはそのみんなさえ明めいりよう 瞭に意識する事ができなかった。

しかし世間だのみんなだのという誇張した言葉を強める夫人の意味は、けっして推察に困難なものではなかった。彼女はどうしてもその点を津田の頭に叩たたき込もうとするつもりらしかった。津田はわざと笑って見せた。

「みんなって、お秀の事なんでしょう」

「秀子さんは無論そのうちの一人よ」

「そのうちの一人でそうしてまた代表者なんでしょう」

「かも知れないわ」

津田は再び大きな声を出して笑った。しかし笑った後ですぐ気がついた。悪い結果になって夫人の上に反響して来たその笑いはもう取り返せなかった。文句を云わずに伏罪ふくざいする事の便宜べんぎを悟った彼は、たちまち容かたちを改ためた。

「とにかくこれからよく気をつけます」

しかし夫人はそれでもまだ満足しなかった。

「秀子さんばかりだと思つて間違ひですよ。あなたの叔父さんや叔母さんおんも、同おんなじ考えなんだからそのつもりでいらつしやい」

「はあそうですか」

藤井夫婦の消息が、お秀の口から夫人に伝えられたのも明らかであつた。

「ほかにもまだあるんです」と夫人がまた付け加えた。津田はただ「はあ」と云つて相手の顔を見た拍子ひょうしに、彼の予期した通りの言葉がすぐ彼女の口から洩もれた。

「実を云うと、私も皆さんと同じ意見ですよ」

権威でもあるような調子で、最後にこう云つた夫人の前に、彼はもちろん反抗の声を揚げる勇氣を出す必要を認めなかつた。しかし腹の中では同時に妙な思おもひちがひおもに想おもひちがひおもいたつた。彼は疑つた。

「何でこの人が急にこんな態度になったのだろう。自分のお延をていちょう鄭重に取扱ひ過ぎるのが悪いといつて非難する上に、お延自身をもその非難のうちに含めているのではなからうか」

この疑いは津田にとって全く新しいものであつた。夫人の本意に到着する想像上の過程を描き出す事さえ彼には困難なくらい新らしいものであつた。彼はこの疑問に立ち向う前に、まだ自分の頭の中に残っている一つの質問を掛けた。

「岡本さんでも、そんな評判があるんでしょうか」

「岡本は別よ。岡本の事なんか私の関係するところじゃありません」

夫人がすましてこう云い切つた時、津田は思わずおやと思つた。

「じや岡本とあなたの方は別つこだったんですか」という次の問が、自然の順序として、彼の咽喉^{のど}まで出かかった。

実を云うと、彼は「世間」の取沙汰^{とりざた}通り、お延を大事にするのではなく^{ごかいまし}た。誤解^{ごかい}交りのこの評判が、どこからどうして起つたかを、他に説明^{ひと}しようとすれば、ずいぶん複雑^{てすう}な手数がかかるにしても、彼の頭の中にはちゃんとした明晰^{めいせき}な觀念があつて、それを一々^{たなごころさ}掌に指す事のできるほどに、事実の縞柄^{しまがら}は解つていた。

第一の責任者はお延その人であつた。自分がどのくらい津田から可愛がられ、また津田をどのくらい自由にしているかを、最も曲折の多い角度で、あらゆる方面に反射させる手際をいたるところ

ろに發揮して憚はばからないものは彼女に違ちがなかつた。第二の責任者はお秀であつた。すでに一種の誇張がある彼女の眼を、一種の嫉妬つとが手伝つて染めた。その嫉妬がどこから出て来るのか津田は知らなかつた。結婚後始めて小姑こじゅうとという意味を悟つた彼は、せっかく悟つた意味を、解釈のできないために持て余した。第三の責任者は藤井の叔父夫婦であつた。ここには誇張も嫉妬しつともない代りに、浮華ふかに対する嫌悪けんおがあまり強く働らき過ぎた。だから結果はやはり誤解と同じ事に歸着した。

百三十四

津田にはこの誤解を誤解として通しておく特別な理由があつた。そうしてその理由はすでに小林の看破かんぱした通りであつた。だから彼はこの誤解から生じやすい岡本の好意を、できるだけ自分の便宜んぎになるように保留しようと試みた。お延を鄭寧ていねいに取扱うのは、つまり岡本家の機嫌きげんを取るのと同じ事で、その岡本と吉川とは、兄弟同様に親しい間柄である以上、彼の未来は、お延を大事にすればするほど確かになって来る道理であつた。利害の論理ロジックに抜目のない機敏さを誇りとする彼は、吉川夫妻が表向おもてむきの媒妁ばいしや人として、自分達二人の結婚に関係してくれた事実を、単なる名誉として喜こぶほどの馬鹿ではなかつた。彼はそこに名誉以外の重大な意味を認めたのである。

しかしこれはむしろ一般的の内情に過ぎなかった。もう一皮剥むいて奥へ入ると、底にはまだ底があつた。津田と吉川夫人とは、事件がここへ来るまでに、他人の関知しない因果いんがでもう結びつけられていた。彼らにだけ特有な内外の曲折を経過して来た彼らは、他人より少し複雑な眼をもつて、半年前に成立したこの新らしい関係を眺めなければならなかつた。

有ありてい体たいにいうと、お延と結婚する前の津田は一人の女を愛していた。そうしてその女を愛させるように仕向けたものは吉川夫人であつた。世話好きな夫人は、この若い二人を喰くつつけるような、また引き離すような閑かんしゆだん手段ほしいを縦ろうまに弄ろうして、そのたびにまごまごしたり、または逆のぼせ上あがつたりする二人を眼の前に見て楽しん

だ。けれども津田は固く夫人の親切を信じて疑がわなかった。夫人も最後に来るべき二人の運命を断言して憚はばからなかった。のみならず時機の熟したところを見計つて、二人を永久に握手させようと企てた。ところがいざという間際になつて、夫人の自信はみごとに鼻柱を挫くじかれた。津田の高慢も助かるはずはなかった。夫人の自信と共に一棒に撲殺ぼくさつされた。肝心かんじんの鳥はふいと逃げた。ぎり、ついに夫人の手に戻つて来なかつた。

夫人は津田を責めた。津田は夫人を責めた。夫人は責任を感じた。しかし津田は感じなかつた。彼は今日きょうまでその意味が解らずに、まだ五里霧中に彷徨ほうこうしていた。そこへお延の結婚問題が起つた。夫人は再び第二の恋愛事件に関係すべく立ち上つた。そう

して夫と共に、表^{おもてむき}向^{むか}の媒妁人として、綺麗^{きれ}な段落をそこへつけた。

その時の夫人の様子を細^{こま}かに観察した津田はなるほどと思った。
「おれに対する賠償^{ばいしょう}の心持だな」

彼はこう考えた。彼は未来の方針を大体の上においてこの心持から割り出そうとした。お延と仲善^{なかよ}く暮す事は、夫人に対する義務の一端だと思い込んだ。喧嘩^{けんか}さえしなければ、自分の未来に間違はあるまいという鑑定さえ下した。

こういう心得に万遺算^{ばんいさん}のあるはずはないと初手^{しよて}からきめてかかつて吉川夫人に対している津田が、たとい遠廻しにでもお延を非難する相手の匂^{にお}いを嗅^かぎ出した以上、おやと思うのは当然であつ

た。彼は夫人に氣に入るように自分の立場を改める前に、まず確かめる必要があつた。

「私がお延を大事にし過ぎるのが悪いとおつしやるほかに、お延自身に何か欠点でもあるなら、御遠慮なく忠告していただきたいと思います」

「実はそれで上つたのよ、今日は」

この言葉を聴いた時、津田の胸は夫人の口から何が出て来るかの好奇心に充ちた。あつ夫人は語を継いだ。

「これは私でない^{あつ}と面^{めん}と向つて誰もあなたに云えない事だと思つから云いますがね。——お秀さんに智慧^{ちえ}をつけられて来たと思つ

ては困りますよ。また後でお秀さんに迷惑をかけるようだと、私

がすまない事になるんだから、よござんすか。そりやお秀さんも
 その事でわざわざ来たには違ちがいのよ。しかし主意は少し違ちがうん
 です。お秀さんは重おもに京都の方を心配しているの。無論京都はあ
 なたから云えばお父さんだから、けっして疎略にはできませんまい。
 ことに良人うちでもあしてお父さんにあなたの世話を頼まれていて
 見ると、黙もくつて放ほうつてもおく訳にも行かないでしょう。けれども
 ね、つまりそつちは枝で、根は別にあるんだから、私は根から先
 へ療治した方が遥はるかに有効だと思ふんです。でないと今度こんだのよう
 な行いき違ちがいがまたきつと出て来ますよ。ただ出て来るだけならよ
 ござんすけれども、そのたんびにお秀さんがやって来るようだと、
 私も口を利きくのに骨が折れるだけですからね」

夫人のいう禍わざわいの根というのはたしかにお延の事に違なかつた。ではその根をどうして療治しようというのか。肉体上の病氣でもない以上、離別か別居を除いて療治という言葉はたやすく使えるものでもないのにと津田は考えた。

百三十五

津田はやむをえず訊きいた。

「要するにどうしたらいいんです」

夫人はこの子供らしい質問の前に母らしい得意の色を見せた。けれどもすぐ要点へは来なかつた。彼女はそこだと云わぬばかり

にただ微笑した。

「いったいあなたは延子さんをどう思っているの？」

同じ問が同じ言葉で昨日きのうかけられた時、お秀に何と答えたかを

津田は思い出した。彼は夫人に対する特別な返事を用意しておかなかった。その代り何とでも答えられる自由な地位にあった。腹ふくぞう

蔵のないところをいうと、どうなりとあなたの好きなお返事を致しますというのが彼の胸中であつた。けれども夫人の頭にあるその好きな返事は、全く彼の想像のほかにあつた。彼はへどもどするうちににやにやした。勢い夫人は一步前へ進んで来る事になった。

「あなたは延子さんを可愛がつていらつしやるでしょう」

ここでも津田の備えは手薄であつた。彼は冗談じようだんはんぶん半分に夫人をあしらう事なら幾通いくとおりでもできた。しかし真面目まじめに改まつた、責任のある答を、夫人の氣に入るような形で与えようとすると、その答はけつしてそうすら出て来なかつた。彼にとって最も都合の好い事で、また最も都合の悪い事は、どっちにでも自由に答えられる彼の心の状態であつた。というのは、事実彼はお延を愛してもいたし、またそんなに愛してもいながつたからである。

夫人はいよいよ真剣らしく構えた。そうして三度目の質問をのつびきさせぬ調子で掛けた。

「私あたしとあなただけの間の秘密にしておくから正直に云つとしまいなさい。私の聴ききたいのは何でもありません。ただあなたの思つ

た通りのところを一口伺えばそれでいいんです」

けんとう 見当の立たない津田はいよいよ迷まごついた。夫人は云った。

「あなたもずいぶんじれかたつたい方ね。云える事は男らしく、さつさと云つちまったらいいでしょう。そんなむずかしい事を誰きも訊いていやしないんだから」

津田はとうとう口を開くべく余儀なくされた。

「お返事ができない訳でもありませんけれども、あんまり問題が漠ばくぜん然ぜんとしているものですから……」

「じゃ仕方がないから私の方で云いましょうか。よござんすか」

「どうぞそう願います」

「あなたは」と云いかけた夫人はこの時ちよつと言葉を切つてま

た継いだ。

「本当によござんすか。——あたしはこういう無遠慮な性分しょうぶんだから、よく自分の思ったままをずばずば云つちまつた後で、取あとり返しのつかない事をしたと後悔する場合がよくあるんですが」
「なに構いません」

「でももしか、あなたに怒られるとそれつきりですからね。後でいくら詫あやまつても追おっつかないなんて馬鹿はしたくありませんもの」
「しかし私の方で何とも思わなければそれでいいでしょう」

「そこさえ確かなら無論いいのよ」

「大丈夫です。偽うそだろうが本当だろうが、奥さんのおつしやる事ならけつして腹は立てませんから、遠慮なさらずに云つて下さい」

すべての責任を向うに背負^{しよ}わせてしまう方が遙^{はる}かに楽だと考えた津田は、こう受け合つた後で、催促するように夫人を見た。何度となく駄^だ目^めを押して保険をつけた夫人はその時ようやく口を開いた。

「もし間違つたら御免遊ばせよ。あなたはみんなが考えている通り、腹の中ではそれほど延子さんを大事にしていらつしやらないでしょう。秀子さんと違って、あたしは疾^とうからそう睨^{にら}んでいるんですが、どうです、あたしの観測はあたりませんかね」

津田は何ともなかった。

「無論です。だから先刻^{さつき}申し上げたじやありませんか。そんなに
お延を大事にしちやいせんて」

「しかしそれは御挨拶ごあいさつにおつしやっただけね」

「いいえ私は本当のところを云つたつもりです」

夫人は断々だんだん乎として首肯うけがわなかつた。

「ごまかしつこなしよ。じゃ後あとを云つてもよござんすか」

「ええどうぞ」

「あなたは延子さんをそれほど大事にしていらつしやらないくせに、表ではいかにも大事にしているように、他ひとから思われよう思われようとかかつているじやありませんか」

「お延がそんな事でも云つたんですか」

「いいえ」と夫人はきつぱり否定した。「あなたが云つてゐるだけよ。あなたの様子なり態度なりがそれだけの事をちゃんとあたし

に解るようにして下さるだけよ」

夫人はそこでちよつと休んだ。それから後を付けた。

「どうですあたったでしょう。あたしはあなたがなぜそんな体ていさ裁いを作っているんだか、その原因までちゃんと知ってるんですよ」

百三十六

津田は今日までこういう種類の言葉をまだ夫人の口から聴きいた事がなかった。自分達夫婦の仲を、夫人が裏側からどんな眼で観察しているだろうという問題について、さほど神経を遣つかっていない

かつた彼は、ようやくそこに気がついた。そんならそうと早く注意してくればいいのにと思いながら、彼はとにかく夫人の鑑定なり料りようけん簡かんなりをおとなしく結末まで聴くのが上じようふんべつ分別だと考えた。

「どうぞ御遠慮なく何でもみんな云つて下さい。私の向後こうごの心得にもなる事ですから」

途中まで来た夫人は、たとい津田から誘われないでも、もうそこで止まる訳に行かないので、すぐ残りのものを津田の前に投げ出した。

「あなたは良人うちや岡本の手前があるので、それであんなに延子さんを大事になさるんでしょう。もっと露骨なのがお望みなら、ま

だ露骨にだつて云えますよ。あなたは表^{おもてむき}向延子さんを大事にするような風をなさるのね、内側はそれほどでなくつても。そうでしょう」

津田は相手の観察が真逆^{まさか}これほど皮肉な点まで切り込んで来たいようとは思わなかつた

「私の性質なり態度なりが奥さんにそう見えますか」

「見えますよ」

津田は一^{ひとかたな}刀で斬られたと同じ事であつた。彼は斬られた後^{あと}でその理由を訊^きいた。

「どうして？ どうしてそう見えるんですか」

「隠さないでもいいじゃないですか」

「別に隠すつもりでもないんですが……」

夫人は自分の推定が十の十まであたったと信じてかかった。心うちの中でその六だけを首肯うけがった津田の挨拶あいさつは、自然どこかに曖あい昧まいな節を残さなければならなかった。それがこの場合誤解の種になるのは見やすい道理であつた。夫人はどこまでも同じ言葉を繰り返して、津田を自分の好きな方角へのみ追い込んだ。

「隠しちや駄目よ。あなたが隠すと後が云えなくなるだけだから」津田は是非その後を聴きたかつた。その後を聴こうとすれば、夫人の認定を一から十まで承知するよりほかに仕方がなかった。夫人は「それ御覧なさい」と津田をやりこめた後で歩を進めた。「あなたにはてんから誤解があるのよ。あなたは私わたしを良人うちといつ

しよに見ているんでしよう。それから良人と岡本をまたいつしよに見ているんでしよう。それが大間違よ。岡本と良人をいつしよに見るのはまだしも、私を良人や岡本といっしよにするのはおかしいじゃありませんか、この事件について。学問をした方にも似合わないのねあなたも、そんなところへ行くと」

津田はようやく夫人の立場を知る事ができた。しかしその立場の位置及びそれが自分に対してどんな関係になっているのかまだ解らなかつた。夫人は云つた。

「解り切つてゐるじゃありませんか。私だけはあなたと特別の關係があるんですもの」

特別の關係という言葉のうちに、どんな内容が盛られているか、

津田にはよく解った。しかしそれは目下の問題ではなかった。な
ぜと云えば、その特別な關係をよく呑み込んでいればこそ、今
日までの自分の行動にも、それ相当な一種の色と調子を与えて
来たつもりだと彼は信じていたのだから。この特別な關係が夫人
をどう支配しているか、そこをもっと明らかに突きとめたところ
に、新しい問題は始めて起るのだと気がついた彼は、ただ自分
の誤解を認めるだけではすまされなかった。

夫人は一口に云い払った。

「私はあなたの同情者よ」

津田は答えた。

「それは今までついで疑って見た例もありません。私は信じ切つ

ています。そうしてその点で深くあなたに感謝しているものです。しかしどういう意味で？　どういう意味で同情者になつて下さるつもりなんですか、この場合。私は迂濶うかつものだから奥さんの意味がよく呑み込めません。だからもつと判然はつきり話して下さい」

「この場合に同情者として私わたしがあなたにして上げる事がただ一つあると思うんです。しかしあなたは多分——」

夫人はこれだけ云つて津田の顔を見た。津田はまた焦じらされるのかと思つた。しかしそうでないと断言した夫人の間は急に變つた。

「私の云う事を聴ききますか、聴きませんか」

津田にはまだ常識が残つていた。彼はここへ押しつめられた何な

んびと

人も考えなければならぬ事を考えた。しかし考えた通りを夫
人の前で公然明言する勇氣はなかつた。勢い彼の態度は煮え切ら
ないものであつた。聴くとも聴かないとも云いかねた彼は躊躇
した。

「まあ云つて見て下さい」

「まあじやいけません。あなたがもつと判切しなくつちや、私
だつて云う気にはなれません」

「だけれども——」

「だけれどもでも駄目よ。聴きますと男らしく云わなくつちや」

どんな注文が夫人の口から出るか見^{けんとう}当のつかない津田は、ひそかに恐れた。受け合つた後で撤回しなければならぬような窮地に陥^{おち}いればそれぎりであつた。彼はその場合の夫人を想像してみた。地位から云つても、性質から見ても、また彼に対する特別な關係から判断しても、夫人はけつして彼を赦^{ゆる}す人ではなかつた。永久夫人の前に赦^{ゆる}されない彼は、あたかも蘇生の活手段を奪^うわれた仮死の形骸^{けいがい}と一般であつた。用心深い彼は生還^{のぞみ}の望の確^{しか}としない危地に入り込む勇氣をもたなかつた。

その上普通の人と違つて夫人はどんな難題を持ち出すか解らなかつた。自由の利き過ぎる境遇、そこに長く住み馴^なれた彼女の眼

には、ほとんど自分の無理というものが映らなかつた。云へばたいていの事は通つた。たまに通らなければ、意地で通すだけであつた。ことに困るのは、自分の動機を明瞭めいりように解剖して見る必要に逼せまられない彼女の余裕であつた。余裕というよりもむしろ放慢な心の持方であつた。他の世話ひとを焼く時にする自分の行動は、すべて親切と好意の発現で、そのほかに何の私わたくしもないものと、てんからきめてかかる彼女に、不安の来るくはずはなかつた。自分の批判はほとんど当初から働らかないし、他の批判は耳ひとへ入らず、また耳へ入れようとするものもないとなると、ここへ落ちて来るのは自然の結果でもあつた。

夫人の前に押しつめられた時、津田の胸に、これだけの考えが

蜿蜒^{うねく}り廻ったので、埒^{らち}はますます開^あかなかつた。彼の様子を見た夫人は、ついに笑い出した。

「何をそんなにむずかしく考えてるんです。おおかた私^{わたし}がまた無理でも云い出すんだと思つてるんでしょう。なんぼ私^{わたし}だつてあなたにできつこないような不法は考えやしませんよ。あなたがやろうとさえ思えば、訳^{わけ}なくできる事なんです。そうして結果はあなたの得になるだけなんです」

「そんなに雑作^{ぞうさ}なくできるんですか」

「ええまあ笑^{しょうだん}談^{だん}みたいなものです。ごくごく大袈裟^{おおげさ}に云つた

ところで、面白^{いたずら}半分の悪戯^{あくご}よ。だから思い切つてやるとおつしやい」

津田にはすべてが謎なぞであつた。けれどもたかが悪戯ならという気がようやく彼の腹に起つた。彼はついに決心した。

「何だか知らないがまあやってみましょう。話してみて下さい」

しかし夫人はすぐその悪戯の性質を説明しなかつた。津田の保証を掴つかんだ後あとで、また話題を変えた。ところがそれは、あらゆる意味で悪戯とは全くかけ離れたものであつた。少くとも津田には重大な関係をもつていた。

夫人は下しものような言葉で、まずそれを二人の間に紹介した。

「あなたはその後清子きよこさんにお会いになつて」

「いいえ」

津田の少し吃驚びっくりしたのは、ただ問題の唐突とうとつなばかりではな

かった。不意に自分をふり棄てた女の名が、逃がした責任を半分背負っている夫人の口から急に洩れたからである。夫人は語を継いだ。

「じや今どうしていらつしやるか、御存知ないでしょう」

「まるで知りません」

「まるで知らなくつていいの」

「よくないつたつて仕方がないじやありませんか。もうよそへ嫁に行つてしまつたんだから」

「清子さんの結婚の御披露ごひろうの時にあなたはおいでになつたんでしたかね」

「行きません。行こうたつてちよつと行き悪いですからね」

「招待状は来たの」

「招待状は来ました」

「あなたの結婚の御披露の時に、清子さんはいらつしやらなかつたようね」

「ええ来やしません」

「招待状は出したの」

「招待状だけは出しました」

「じゃそれつきりなのね、両方共」

「無論それつきりです。もしそれつきりでなかったら問題ですもの」

「そうね。しかし問題にも寄り切りよでしょう」

津田には夫人の云う意味がよく解らなかつた。夫人はそれを説明する前にまたほかの道へ移つた。

「いったい延子さんは清子さんの事を知つてゐるの」

津田は塞^{つか}えた。小林を研究し尽した上でなければ確^{しか}とした返事は与えられなかつた。夫人は再び訊^きき直した。

「あなたが自分で話した事はなくつて」

「ありやしません」

「じゃ延子さんはまるで知らずにゐるのね、あの事を」

「ええ、少くとも私からは何にも聴^きかされちやいけません」

「そう。じゃ全く無邪気なのね。それとも少しは癩^{かん}づいてゐるところがあるの」

「そうですね」

津田は考えざるを得なかった。考えても断案は控えざるを得なかった。

百三十八

話しているうちに、津田はまた思いがけない相手の心理に突き当った。今まで清子の事をお延に知らせないでおく方が、自分の都合でもあり、また夫人の意志でもあるとばかり解釈して疑わなかった彼は、この時始めて気がついた。夫人はどう考えてもお延にそれを気^けどつていて貰^{もら}いたいらしかったからである。

「たいていの見当はつきそうなものですがね」と夫人は云った。

津田はお延の性質を知っているだけになお答え悪にくくなった。

「そこが分らないといけないんですか」

「ええ」

津田はなぜだか知らなかった。けれども答えた。

「もし必要なら話しても好ござんすが……」

夫人は笑い出した。

「今さらあなたがそんな事をしちやぶち壊こわしよ。あなたはしまい
まで知らん顔をしていなくっちゃ」

夫人はこれだけ云つて、言葉に区切くぎりを付けた後で、新たに出直した。

「私の判断を云いましょうか。延子さんはああいう伶俐な方だから、もうきつと感づいているに違ないと思うのよ。何、みんな判るはずもないし、またみんな判つちやこつちが困るんです。判つたようでもまた判らないようなのが、ちょうど持つて来いという一番結構な頃合ころあいなんですからね。そこで私の鑑定から云うと、今の延子さんは、都合よく私のお誂え通りあつらどおのところにいるに違ないのよ」

津田は「そうですか」というよりほかに仕方がなかった。しかしそういう結論を夫人に与える材料はほとんどなからうにと、腹の中では思った。しかるに夫人はあると云い出した。

「でなければ、ああ虚勢を張る訳がありませんもの」

お延の態度を虚勢と評したのは、夫人が始めてであつた。この二字の前に怪訝けげんな思いをしなければならなかつた津田は、一方から見て、またその皮肉を第一に首肯うけがしなければならぬ人であつた。それにもかかわらず彼は躊躇ちゆうちよなしに応諾を与える事ができなかつた。夫人はまた事もなげに笑つた。

「なに構わないのよ。万一全く気がつかずにいるようなら、その時はまたその時でこつちにいくらでも手があるんだから」

津田は黙つてその後あとを待つた。すると後は出ずに、急に清子の方へ話が逆転して来た。

「あなたは清子さんにまだ未練がおありでしょう」

「ありません」

「ちつとも？」

「ちつともありません」

「それが男の嘘うそというものです」

嘘を云うつもりでもなかった津田は、全然本当を云っているのでもないという事に気がついた。

「これでも未練があるように見えますか」

「そりや見えないわ、あなた」

「じやどうしてそう鑑定なさるんです」

「だからよ。見えないからそう鑑定するのよ」

夫人の論議ロジックは普通のそれとまるで反対であつた。と云つて、

支離滅裂はどこにも含まれていなかった。彼女は得意にそれを引

き延ばした。

「ほかの人には外側も内側も同なじとしか見えないでしょう。しかし私には外側へ出られないから、仕方なしに未練が内へ引込ひっこんでいるとしか考えられませんもの」

「奥さんは初手しよてから私に未練があるものとして、きめてかかつていらつしやるから、そうおつしやるんでしよう」

「きめてかかるのにどこに無理がありますか」

「そう勝手に認定されてしまつちやたまりません」

「私がいつ勝手に認定しました。私のは認定じゃありませんよ。事実ですよ。あなたと私だけに知れている事実を云うのですよ。事実ですもの、それをちゃんと知ってる私に隠せる訳がないじゃ

ありませんか、いくらほかの人を騙^{だま}す事ができたって。それもあるただけの事実ならまだしも、二人に共通な事実なんだから、両方で相談の上、どこかへ埋^うめちまわないうちは、記憶のある限り、消えっこないでしょう」

「じゃ相談ずくでここで埋めちゃどうぞです」

「なぜ埋めるんです。埋める必要がどこかにあるんですか。それよりなぜそれを活^いかして使わないんです」

「活かして使う？ 私はこれでもまだ罪悪には近寄りたくありません」

「罪悪とは何です。そんな手荒^{てあら}な事をしろと私がいつ云いました」

「しかし……」

「あなたはまだ私の云う事をしまいまで聴かないじやありませんか」

津田の眼は好奇心をもつて輝やいた。

百三十九

夫人はもう未練のある証拠を眼の前に突きつけて津田を抑えたと同じ事であつた。自白後に等しい彼の態度は二人の仕合に一段落をつけたように夫人を強くした。けれども彼女は津田が最初に考えたほどの点において独断的な暴君ではなかつた。彼女は思つたより細緻さいちな注意を払つて、津田の心理状態を観察しているら

しかつた。彼女はその実券^{じつけん}を、いったん勝つた後^{あと}で彼に示した。「ただ未練未練つて、雲を掴^{つか}むような騒ぎをやるんじゃないやありませんよ。^{わたし}私には私でまたちゃんと握つてるところがあるんですからね。これでもあなたの未練をこんなものだといって他^{ひと}に説明する事ができるつもりでいるんですよ」

津田には何が何だかさっぱり訳が解らなかつた。

「ちよつと説明して見て下さいませんか」

「お望みなら説明してもよござんす。けれどもそうするとつまりあなたを説明する事になるんですよ」

「ええ構いません」

夫人は笑い出した。

「その他の云う事が通じなくっちゃ困るのね。現在自分がちゃんとそこに控えていながら、その自分が解らないで、他に説明して貰う^{もら}なんてえのは馬鹿^{ばか}氣^げているじゃありませんか」

はたして夫人の云う通りなら馬鹿氣^{ばか}ているに違なかつた。津田は首を傾けた。

「しかし解りませんよ」

「いいえ解つてるのよ」

「じゃ氣がつかないんでしょう」

「いいえ氣もついているのよ」

「じゃどうしたんでしょう。——つまり私が隠している事にでも歸着するんですか」

「まあそうよ」

津田は投げ出した。ここまで追いつめられながら、まだ隠し立てをしようとはさすがの自分にも道理と思えなかった。

「馬鹿でも仕方ありません。馬鹿の非難は甘んじて受けますから、どうぞ説明して下さい」

夫人は微かに溜息を吐いた。

「ああああ張合がないのね、それじゃ。せつかく私が丹精しこしらえて拵えて来て上げたのに、肝心のあなたがそれじゃ、まるで無駄骨を折ったと同然ね。いつそ何にも話さずに帰ろうか知ら」

津田は迷宮に引き込まれるだけであつた。引き込まれると知り

ながら、彼は夫人の後を追かけなければならなかつた。そこには

自分の好奇心が強く働いた。夫人に対する義理と気兼ねきがねも、けつして軽い因子ではなかった。彼は何度も同じ言葉を繰り返して夫人の説明を促うながした。

「じゃ云いましょう」と最後に応じた時の夫人の様子はむしろ得意であつた。「その代り訊ききますよ」と断つた彼女は、はたして劈へき頭に津田の毒氣どつきを抜いた。

「あなたはなぜ清子さんと結婚なさらなかったんです」

問は不意に來た。津田はにわかに息塞いきづまつた。黙っている彼を見た上で夫人は言葉を改めた。

「じゃ質問を易かえましょう。——清子さんはなぜあなたと結婚なさらなかったんです」

今度は津田が響の声に応ずるごとくに答えた。

「なぜだかちつとも解らないんです。ただ不思議なんです。いくら考えても何にも出て来ないんです」

「突然^{せき}関さんへ行つちまったのね」

「ええ、突然。本当を云うと、突然なんてものは疾^{とつくむかし}の昔に通り返してましたね。あつと云つて後^{うしろ}を向いたら、もう結婚してましたんです」

「誰があつと云つたの」

この質問ほど津田にとって無意味なものはない。誰があつと云おうと余計なお世話としか彼には見えなかった。然^{しか}るに夫人はそこへとまつて動かなかった。

「あなたがあつと云ったんですか。清子さんがあつと云ったんですか。あるいは両方であつと云ったんですか」

「さあ」

津田はやむなく考えさせられた。夫人は彼より先へ出た。

「清子さんの方は平氣だったんじゃないやありませんか」

「さあ」

「さあじや仕方がないわ、あなた。あなたにはどう見えたのよ、その時の清子さんが。平氣には見えなかったの」

「どうも平氣のようでした」

夫人は輕蔑^{けいべつ}の眼を彼の上に向けた。

「ずいぶん氣楽ね、あなたも。清子さんの方が平氣だったから、

あなたがあつと云わせられたんじやありませんか」

「あるいはそうかも知れません」

「そんならその時のあつの始末はどうつける気なの」

「別につけようがないんです」

「つけようがないけれども、実はつけたいんでしょう」

「ええ。だからいろいろ考えたんです」

「考えて解つたの」

「解らないんです。考えれば考えるほど解らなくなるだけなんです」

「それだから考えるのはもうやめちまったの」

「いいえやっぱりやめられないんです」

「じゃ今でもまだ考えてるのね」

「そうです」

「それ御覧なさい。それがあなたの未練じゃありませんか」

夫人はとうとう津田を自分の思うところへ押し込めた。

百四十

準備はほぼ出来上った。要点はそろそろ津田の前に展開されなければならなかった。夫人は機を見てしだいにそこへ入って行つた。

「そんならもつと男らしくしちやどうぞです」という漠然^{ばくぜん}たる言

葉が、最初に夫人の口を出た。その時津田はまたかと思った。先刻^{つき}から「男らしくしろ」とか「男らしくない」とかいう文句を聴^きかされるたびに、彼は心の中で暗^{あん}に夫人を冷笑した。夫人の男らしいという意味ははたしてどこにあるのだろうと疑^うぐった。批判的な眼を拭^{ぬぐ}つて見るまでもなく、彼女は自分の都合ばかりを考えて、津田をやり込めるために、勝手なところへやたらにこの言葉を使うとしか解釈できなかった。彼は苦笑しながら訊^きいた。

「男らしくするとは？——どうすれば男らしくなれるんですか」
「あなたの未練を晴らすだけでさあね。分り切ってるじゃありませんか」

「どうして」

「全体どうしたら晴らされれると思ってるんです、あなたは」

「そりや私には解りません」

夫人は急に勢い込んだ。

「あなたは馬鹿ね。そのくらいの事が解らないでどうするんです。会って訊くだけじゃありませんか」

津田は返事ができなかつた。会うのがそれほど必要にしたところで、どんな方法でどこでどうして会うのか。その方が先決問題でなければならなかつた。

「だから私が今日わざわざここへ来たんじゃないやありませんか」と夫人が云つた時、津田は思わず彼女の顔を見た。

「実は疾うから、あなたの料理簡をよく伺つて見たいと思つて

たところへね、今朝お秀さんがあの事で来たもんだから、それ
ちように好い機会だと思つて出て来たような訳なんですがね」

腹に支度の整わない津田の頭はただまごまごするだけであつた。
夫人はそれを見澄^{みすま}してこういつた。

「誤解しちやいけませんよ。私は私、お秀さんはお秀さんなんだ
から。何もお秀さんに頼まれて来たからつて、きつとあの方^{かた}の肩
ばかり持つとは限らないぐらひは、あなたにだつて解るでしょう。
先刻^{さつき}も云つた通り、私はこれでもあなたの同情者ですよ」

「ええそりやよく心得ています」

ここで問答に一^{ひとくぎり}区切^はを付けた夫人は、時を移さず要点に達す
る第二の段落に這^{はい}入り込んで行つた。

「清子さんが今どこにいらっしやるか、あなた知ってらっしって」

「関の所にいるじゃありませんか」

「そりや不断の話よ。わたし私のいうのは今の事よ。今どこにいらっし

やるかっていうのよ。東京か東京でないか」

「存じません」

「あてて御覧なさい」

津田はあてっこをしたってつまらないという風をして黙っていた。すると思いがけない場所の名前が突然夫人の口から点出された。一日がかりで東京から行かれるかなり有名なその温泉場の記憶は、津田にとってもそれほど旧いものではなかつた。ふる急にその辺の景色を思い出した彼は、ただ「へええ」と云ったぎり、後を

いう智恵が出なかつた。

夫人は津田のために親切な説明を加えてくれた。彼女の云うところによると、目的の人は静養のため、当分そこに逗留とうりゆうしてあるのであつた。夫人は何で静養がその人に必要であるかをさえ知っていた。流産後の身体からだを回復するのが主眼だと云つて聴きかせた夫人は、津田を見て意味ありげに微笑した。津田は腹の中では、ぼその微笑を解釈し得たような気がした。けれどもそんな事は、夫人にとつても彼にとつても、目前の問題ではなかつた。一口の批評を加える気にもならなかつた彼は、黙つて夫人の聴き手になるつもりでおとなしくしていた。同時に夫人は第三の段落に飛び移つた。

「あなたもいらつしやいな」

津田の心はこの言葉を聴く前からすでに揺うごいていた。しかし行こうという決心は、この言葉を聴いた後あとでもつかなかった。夫人は一ひと煽あおりに煽あおつた。

「いらつしやいよ。行つたつて誰の迷惑になる事でもないじやありませんか。行つて澄ましていればそれまででしょう」

「それはそうです」

「あなたはあなたで始めつから独立なんだから構つた事はないのよ。遠慮だの気き兼ねがねだのつて、なまじ余計なものを荷にし出すと、事が面倒になるだけですわ。それにあなたの病氣には、ここを出た後で、ああいう所へちよつと行つて来る方がいいんです。私に

云わせば、病氣の方だけでも行く必要は充分あると思うんです。だから是非いらつしやい。行つて天然自然来たような顔をして澄ましているんです。そうして男らしく未練の片かたをつけて来るんです」

夫人は旅費さえ出してやると云つて津田を促うながした。

百四十一

旅費を貰もらつて、勤つとめ向むきの都合をつけて貰つて、病後の身体を心持の好い温泉場で静養するのは、誰にとつても望ましい事に違なかつた。ことに自己の快樂を人間の主題にして生活しようとす

る津田には滅多めったにない誂あつらえ向むきの機会であつた。彼に云わせると、見す見すそれを取り外はずすのは愚ぐの極であつた。しかしこの場合に附帯している一種の条件はけつして尋常のものではなかつた。彼は顧慮した。

彼を引きとめる心理作用の性質は一目瞭然いちもくりようぜんであつた。けれども彼はその働きの顯著な力に気がついていただけで、その意味を返照へんしょうする違いがなかつた。この点においても夫人の方が、彼自身よりもかえつてしつかりした心理の觀察者であつた。二つ返事で断行を誓うと思つた津田のどこか渋っている様子を見た夫人はこう云つた。

「あなたは内心行きたがつてゐるくせに、もじもじしていらつしや

るのね。それが私に^{わたし}云わせると、男らしくないあなたの一番悪いところなんですよ」

男らしくないと評されても大した苦痛を感じない津田は答えた。
「そうかも知れませんが、少し考えて見ないと……」

「その考える癖があなたの人格に^{たた}崇つて来るんです」

津田は「へえ？」と云つて驚ろいた。夫人は澄ましたものであった。

「女は考えやしませんよ。そんな時に」

「じや考える私は男らしい訳じやありませんか」

この答えを聴いた時、夫人の態度が急に^き嶮しくなった。

「そんな生意気な口^{なまいき} 応えをするもんじやありません。言葉だけ^{くちごた}

で他^{ひと}をやり込めればどこがどうしたというんです、馬鹿らしい。
 あなたは学校へ行ったり学問をしたりした方^{かた}のくせに、まるで自分が見えないんだからお気の毒よ。だから畢^{ひつきよう}竟清子さんに逃げられちゃったんです」

津田はまた「えッ？」と云った。夫人は構わなかった。

「あなたに分らなければ、私が云つて聴^きかせて上げます。あなたがなぜ行きたがらないか、私にはちゃんと分ってるんです。あなたは臆病なんです。清子さんの前へ出られないんです」

「そうじゃありません。私は……」

「お待ちなさい。——あなたは勇氣はあるという気なんでしょう。しかし出るのは見識^{けんしき}に拘^{かか}わるといふんでしょう。私から云えば、

そう見識よばるのが取りも直さずあなたの臆病なところなんです、
 好よござんすか。なぜと云つて御覧なさい。そんな見識はただの見み
 栄えじやありませんか。よく云つたところで、上うわつ面つらの体てい裁さいじや
 ありませんか。世間に対する手前と気兼きがねを引いたら後に何が残る
 んです。花嫁さんが誰も何とも云わないのに、自分できまりを悪
 くして、三度の御飯を控えるのと同おんなじ事よ」

津田は呆あっけ氣けに取られた。夫人の小言こごとはまだ続いた。

「つまり色氣が多過ぎるから、そんな入いらざるところに我がを立て
 て見たくなるんでしょう。そうしてそれがあなたの己おの惚ぼに生れ
 変つて変なところへ出て来るんです」

津田は仕方なしに黙っていた。夫人は容赦なく一步進んでその

己惚を説明した。

「あなたはいつまでも品ひんよく黙つていようというんです。じつと動かずにすまそうとなさるんです。それでいて内心ではあの事が始しじゅうく終苦になるんです。そこをもう少し押して御覧なさいな。おれがこうしているうちには、今に清子の方から何か説明して来るだろう来るだろうと思つて——」

「そんな事を思つてるもんですか、なんぼ私わたくしだつて」

「いえ、思っているのと同おんなじだということです。実際どこにも變りがなければ、そう云われたつてしようがないじゃありませんか」
津田にはもう反抗する勇氣がなかった。機敏な夫人はそこへつけ込んだ。

「いったいあなたはずうずうしい性質たちじゃありませんか。そうしてずうずうしいのも世渡りの上じや一徳いっとくだぐらいに考えているんです」

「まさか」

「いえ、そうです。そこがまだ私わたしに解らないと思つたら、大間違です。好いじゃありませんか、ずうずうしいで、私はずうずうしいのが好きなんだから。だからここで持前のずうずうしいところを男らしく充分發揮なさいな。そのために私がせつかく骨を折つて拵こしらえて来たんだから」

「ずうずうしさの活用ですか」と云つた津田は言葉を改めた。

「あの人は一人行つてゐるんですか」

「無論一人です」

「関は？」

「関さんはこつちよ。こつちに用があるんですもの」

津田はようやく行く事に覚悟をきめた。

百四十二

しかし夫人と津田の間には結末のつかないまだ一つの問題が残っていた。二人はそこをふり返らないで話を切り上げる訳に行かなかった。夫人が踵を回らさないうちに、津田は帰った。

「それで私が行くとしたら、どうなるんです、先刻おっしゃった

事は」

「そこです。そこを今云おうと思つていたのよ。私に云わせると、これほど好い療治はないんですがね。どうでしょう、あなたのお考えは」

津田は答えなかった。夫人は念を押した。

「解つたでしょう。後は云わなくつても」

夫人の意味は説明を待たないでもほぼ津田に呑み込めた。しかしそれをどんな風にして、お延の上に影響させるつもりなのか、そこへ行くと彼には確とした観念がなかつた。夫人は笑い出した。「あなたは知らん顔をしていればいいですよ。後は私の方でやるから」

「そうですか」と答えた津田の頭には疑惑があつた。後を挙げて夫人に一任するとなると、お延の運命を他人に委ねると同じ事であつた。多少夫人の手腕を恐れている彼は危ぶんだ。何をされるか解らないという掛念けねんに制せられた。

「お任せしてもいいんですが、手段や方法が解っているなら伺っておく方が便利かと思ひます」

「そんな事はあなたが知らないでもいいのよ。まあ見ていらつしやい、私わたしがお延さんをもつと奥さんらしい奥さんにきつと育て上げて見せるから」

津田の眼に映るお延は無論不完全であつた。けれども彼の氣に入らない欠点が、必ずしも夫人の難の打ち所とは限らなかつた。

それをちゃんぽんに混同しているらしい夫人は、少くとも自分に都合のいいお延を鍛え^{きた}上げる事が、すなわち津田のために最も適当な細君を作り出す所以^{ゆえん}だと誤解しているらしかった。それのみか、もう一歩夫人の胸中に立ち入って、その真底^{しんそこ}を探ると、とんでもない結論になるかも知れなかった。彼女はただお延を好かないために、ある手段を拵^{こしら}えて、相手を苛^{いじ}めにかかるのかも分らなかった。気に喰わないだけの根拠で、敵を打ち懲^こらす方法を講じているのかも分らなかった。幸^{さいわい}に自分でそこを認めなければならぬほどに、世間からも己^{おの}れからも反省を強^しいられていない境遇にある彼女は、気楽であつた。お延の教育。——こういう言葉が臆^{おく}面^{めん}なく彼女の口を洩れた。夫人とお延の間柄を、内面から

看破^{みやぶ}る機会に出会った事のない津田にはまたその言葉を疑う資格がなかった。彼は大体の上で夫人の実意を信じてかかった。しかし実意の作用に至ると、勢い^{きぐ}危惧の念が伴なわざるを得なかった。「心配する事があるもんですか。細工はりゆうりゆう仕上^{しあげ}を御覧^{ごらん}うじろつて云うじやありませんか」

いくら津田が訊^きいても詳しい話しをしなかった夫人は、こんな高^{くく}を括^{くく}った挨拶^{あいさつ}をした後で、教えるように津田に云った。

「あの方は少し^{かた}己惚^{おのぼ}れ過ぎてるところがあるのよ。それから内側と外側がまだ一致しないのね。上部^{うわべ}は大変^{ていねい}鄭寧^{ていねい}で、お腹^{なか}の中はしっかりと過ぎるくらいしっかりとっているんだから。それに利巧^{りこう}だから外へは出さないけれども、あれでなかなか慢気^{まんき}が多いのよ。

だからそんなものを皆みんな取っちまわなくっちゃ……」

夫人が無遠慮な評をお延に加えている最中に、階はしご子段だんの途中で足を止とめた看護婦の声が二人の耳に入った。

「吉川の奥さんへ堀さんとおっしゃる方から電話でございます」

夫人は「はい」と応じてすぐ立ったが、敷居の所で津田を顧み
た。

「何の用でしょう」

津田にも解らなかつたその用を足すために下へ降りて行つた夫人は、すぐまた上つて来ていきなり云つた。

「大變大變」

「何が？　どうかしたんですか」

夫人は笑いながら落ちついて答えた。

「秀子さんがわざわざ注意してくれたの」

「何をです」

「今まで延子さんが秀子さんの所へ来て話していたんですって。

歸りに病院の方へ廻るかも知れないから、ちよつとお知らせする
 って云うのよ。今秀子さんの門を出たばかりのところだつて。――

――まあ好かつた。悪口でも云つてるところへ来られようもんなら、
 おおほじ
 大恥おほじを搔かかなくつちやならない」

いったん坐すわつた夫人は、間もなくまた立つた。

「じゃ私わたしはもうお暇いとまにしますからね」

こんな打ち合せをした後でお延の顔を見るのは、彼女にとって

もきまりが好くないらしかった。

「いらつしやらないうちに、早く退却しましょう。どうぞよろしく」

ひとこと
一言の挨拶あいさつを彼女に残したまま、夫人はついに病室を出た。

百四十三

この時お延の足はすでに病院に向つて動いていた。

堀の宅うちから医者うぢの所へ行くには、門を出て一二町東へ歩いて、そこに丁字形ていじけいを描いている大きな往来をまた一つ向うへ越さなければならなかった。彼女がこの曲り角へかかった時、北から来

一台の電車がちょうど彼女の前、方角から云えば少し筋違すじかいの
 所でとまった。何気なく首を上げた彼女は見るともなしにこちら
 側がわの窓を見た。すると窓硝子まどガラスを通して映る乗客の中に一人の女
 がいた。位地いちの関係から、お延はただその女の横顔の半分もしく
 は三分の一を見ただけであつたが、見ただけですぐはつと思つた。
 吉川夫人じゃないかという気がたちまち彼女の頭を刺戟しげきしたから
 である。

電車はじきに動き出した。お延は自分の物色に満足な時間を与
 えずに走り去つたその後影うしろかげをしばらく見送つたあとで、通り
 を東側へ横切つた。

彼女の歩く往来はもう横町だけであつた。その辺の地理に詳し

い彼女は、いくつかの小路こうじを右へ折れたり左へ曲ったりして、一番近い道をはやく病院へ行き着くつもりであつた。けれども電車に会つた後の彼女あとの足は急に重くなつた。距離にすればもう二三丁という所まで来た時、彼女は病院へ寄らずに、いったん宅うちへ帰ろうかと思ひ出した。

彼女の心は堀の門を出た折からすでに重かつた。彼女はむやみにお秀を突ツ付いて、かえつてやり損そくなつた不快を胸に包んでゐた。そこには大事を明らさまに握る事ができずに、裏からわざわざにお匂におわせられた羽痒はがゆさがあつた。なまじいそれを嗅かぎつけた不安の色も、前よりは一層濃く染めつけられただけであつた。何よりも先だつのは、こつちの弱点を見抜かれて、逆さかささに相手から翻ほ

弄んろうされはしなかったかという疑惑であつた。

お延はそれ以上にまだ敏さとい氣を遠くの方まで廻まわしていた。彼女は自分に対して仕組まれた謀はかりごと計はかりごとが、内密にどこかで進行しているらしいとまで癪かんづいた。首謀者は誰にしろ、お秀がその一人である事は確たしかであつた。吉川夫人が関係しているのも明かに推測された。——こう考えた彼女は急に心細くなつた。知らないうちに重じゅううい囲いのうちに自分を見出みいした孤軍こぐんのような心境が、遠くから彼女を襲あたつて來た。彼女は周囲あたりを見廻した。しかしそこには夫を除たよいて依たよりになるものは一人もいなかった。彼女は何をおいてもまず津田に走らなければならなかつた。その津田を疑うがつている彼女にも、まだ信力は残のこっていた。どんな事があるとも、夫だ

けは共謀者の仲間入はよしまいと念じた彼女の足は、堀の門を出るや否や、ひとりでにすぐ病院の方へ向いたのである。

その心理作用が今喰いとめられなければならなくなった時、通りで会った電車の影をお延は腹の底から呪った。もし車中の人吉川夫人であつたとすれば、もし吉川夫人が津田の所へ見舞に行つたとすれば、もし見舞に行つたついでに、——。いかに伶俐なお延にも考える自由の与えられていないその後は容易に出て来なかつた。けれども結果は一つであつた。彼女の頭は急にお秀から、吉川夫人、吉川夫人から津田へと飛び移つた。彼女は何がなしに、この三人を巴のように眺め始めた。

「ことによると三人は自分に感じさせない一種の電気を通わせ合

っているかも知れない」

今まで避難場のつもりで夫の所へ駆け込もうとばかり思っていた彼女は考えざるを得なかった。

「この分じや、ただ行つたつていけない。行つてどうしよう」

彼女はどうしようという分別なしに歩いて来た事に気がついた。するとどんな態度で、どんな風に津田に会うのが、この場合最も有効だろうという問題が、さも重要らしく彼女に見え出して来た。夫婦のくせに、そんなよそ行^{いき}の支度なんぞして何になるという非難をどこにも聴^きかなかつたので、いったん宅^{うち}へ歸つて、よく氣を落ちつけて、それからまた出直すのが一番の上策だと思ひ極^{きわ}めた彼女は、ついにもう五六分で病院へ行き着^{こうじ}こうという小路の中ほ

どから取って返した。そうして柳の木の植^{うわ}っている大通りから賑^{にぎ}やかな往来まで歩いてすぐ電車へ乗った。

百四十四

お延は日のとぼとぼ頃に宅へ帰った。電車から降りて一丁ほどの所を、身に染^しみるような夕暮の靄^{もや}に包まれた後の彼女には、何よりも火鉢^{ひばち}の傍^{はた}が恋しかった。彼女はコートを脱ぐなりまずそこへ坐^{すわ}って手を翳^{かざ}した。

しかし彼女にはほとんど一分の休憩時間も与えられなかった。坐るや否や彼女はお時の手から津田の手紙を受け取った。手紙の

文句は固^{もと}より簡単であつた。彼女は封を切る手数とほとんど同じ時間で、それを読み下す事ができた。けれども読んだ後の彼女は、もう読む前の彼女ではなかつた。わずか三行ばかりの言葉は一冊の書物より強く彼女を動かした。一度に外から持つて歸つた氣分に火を点^つけたその書^{しよかん}翰^{かん}の前に彼女の心は躍^{おど}つた。

「今日病院へ来ていけないという意味はどこにあるだろう」

それでなくつても、もう一遍出直すはずであつた彼女は、時間^{かま}に關^{かん}う余裕さえなかつた。彼女は台所^{だいしよ}から膳^{ぜん}を運んで來たお時を驚^{おど}ろかして、すぐ立ち上がった。

「御飯は歸つてからにするよ」

彼女は今脱いだばかりのコートをまた羽織つて、門を出た。し

かし電車通りまで歩いて来た時、彼女の足は、また小路の角でとまった。彼女はなぜだか病院へ行くに堪えないような気がした。この様子では行つたところで、役に立たないという思慮が不意に彼女に働らきかけた。

「夫の性質では、とても卒直にこの手紙の意味さえ説明してはくれまい」

彼女は心細くなつて、自分の前を右へ行つたり左へ行つたりする電車を眺めていた。その電車を右へ利用すれば病院で、左へ乗れば岡本の宅であつた。いつそ当初の計画をやめて、叔父の所へでも行こうかと考えついた彼女は、考えつくや否や、すぐその方面に横わる困難をも想像した。岡本へ行つて相談する以上、彼女

は打ち明け話をしなければならなかった。今まで隠していた夫婦
 関係の奥底を、曝^{さら}け出さなければ、一步も前へ出る訳には行か
 かった。叔父と叔母の前に、自分の眼が利^きかなかった自白を綺麗^{きれ}
 にしなければならなかった。お延はまだそれほどの恥を忍ぶま
 でに事件は逼^{せま}つていないと考えた。復活の見込が充分立たないの
 に、酔^{すい}興^{きよう}で自分の虚栄心を打ち殺すような正直は、彼女の最も輕^け
 蔑^{いべつ}するところであつた。

彼女は決しかねて右と左へ少しずつ揺れた。彼女がこんなに迷
 っているとはまるで氣のつかない津田は、この時床^{とこ}の上に起き上
 って、平気で看護婦の持つて来た膳に向いつつあつた。先刻^{さつき}お秀
 から電話のかかった時、すでにお延の来訪を予想した彼は、吉川

夫人と入れ代りに細君の姿を病室に見るべく暗^{あん}に心の調子を整えていたところが、その細君は途中から引き返してしまったので、軽い失望の間に、夕^{ゆうめし}食の時間が来るまで、待ち草臥^{くたび}れたせいか、看護婦の顔を見るや否や、すぐ話しかけた。

「ようやく飯か。どうも一人でいると日が長くつて困るな」

看護婦は体^{なり}の小さい血色の好くない女であつた。しかし年頃はどうしても津田に鑑定のつかない妙な顔をしていた。いつでも白い服を着けているのが、なおさら彼女を普通の女の群^{むれ}から遠ざけた。津田はつねに疑つた。——この人が通常の着物を着る時に、まだ肩^{かたあげ}上を付けているだろうか、または除^とっているだろうか。彼はいつか真面目^{まじめ}にこんな質問を彼女にかけて見た事があつた。

その時彼女はにやりと笑って、「私はまだ見習です」と答えたので、津田はおおよその見当を立てたくらいであつた。

膳を彼の枕元へ置いた彼女はすぐ下へ降りなかつた。

「御退屈さま」と云つて、にやにや笑つた彼女は、すぐ後あとを付け足した。

「今日は奥さんはお見えになりませんね」

「うん、来ないよ」

津田の口の中にはもう焦こげた麵パン麴コがいっぱい入つていた。彼はそれ以上何も云う事ができなかつた。しかし看護婦の方は自由であつた。

「その代り外ほかのお客さまがいらつしやいましたね」

「うん。あのお婆さんだろう。ずいぶん肥^{ふと}ってるね、あの奥さんは」

看護婦が悪^{わる}口^{くち}の相槌^{あいづち}を打つ気色^{けしき}を見せないので、津田は一人でしゃべらなければならなかった。

「もっと若い綺麗^{きれ}な人が、どんどん見舞に来てくれると病氣も早く癒^{なお}るんだがな」と云つて看護婦を笑わせた彼は、すぐ彼女から冷嘲^{ひや}かし返された。

「でも毎日女の方ばかりいらつしやいますね。よつぽど間^まがいいと見えて」

彼女は小林の来た事を知らないらしかった。

「昨日^{きのう}いらした奥さんは大変お綺麗ですね」

「あんまり綺麗でもないよ。あいつは僕の妹だからね。どこか似ているかね、僕と」

看護婦は似ているとも似ていないとも答えずに、やっぱりにやにやしていた。

百四十五

それは看護婦にとって意外な儲け日^{もうび}であつた。下痢^{げり}の気味でいつもの通り診察場に出られなかつた医者には、代理を頼まれた彼の友人は、午前の都合を付けてくれただけで、午後から夜へかけての時間には、もう顔を出さなかつた。

「今日は当直だから晩には来られないんだそうです」

彼女はこう云つて、不斷のような忙がしい様子をどこにも見せず、ゆつくり津田の膳ぜんの前に坐すわつていた。

退屈たいくつ凌しのぎに好い相手のできた氣になつた津田の舌したには締りがなかつた。彼は面白半分いろいろな事を訊きいた。

「君の国はどこかね」

「栃木県です」

「なるほどそう云われて見ると、そうかな」

「名前は何と云つたつけね」

「名前は知りません」

看護婦はなかなか名前を云わなかつた。津田はそこに発見され

た抵抗が愉快なので、わざわざ何遍も同じ事を繰り返して訊いた。

「じゃこれから君の事を栃木県、栃木県って呼ぶよ。いいかね」

「ええよござんす」

彼女の名前の頭文字はつであつた。

「露か」

「いいえ」

「なるほど露じゃあるまいな。じゃ土か」

「いいえ」

「待ちたまえよ、露でもなし、土でもないとする。——ははあ、解つた。つやだろう。でなければ、常か」

津田はいくらでもでたらめを云つた。云うたびに看護婦は首を

振つて、にやにや笑った。笑うたびに、津田はまた彼女を追ついきゅ窮うした。しまいに彼女の名がわつきだと判然わった時、彼はこの珍らしい名をまだ弄もてあそんだ。

「お月つきさんだね、すると。お月さんは好い名だ。誰が命つけた」
看護婦は返答を与える代りに突然逆襲した。

「あなたの奥さんの名は何とおっしゃるんですか」

「あてて御覧」

看護婦はわざと二つ三つ女らしい名を並べた後あとで云った。

「お延のぶさんでしょう」

彼女は旨うまくあてた。というよりも、いつの間にかお延の名を聴いて覚えていた。

「お月さんはどうも油断がならないなあ」

津田がこう云つて興じているところへ、本人のお延がひよつくり顔を出したので、ふり返つた看護婦は驚ろいて、すぐ膳を持つたなり立ち上つた。

「ああ、とうとういらしつた」

看護婦と入れ代りに津田の枕元へ坐つたお延はたちまち津田を見た。

「来ないと思つていらしつたんでしよう」

「いやそうでもない。しかし今日はもう遅いからどうかとも思つていた」

津田の言葉に偽りいっわはなかつた。お延にはそれを認めるだけの眼

があつた。けれどもそうすれば事の矛盾はなお募^つるばかりであつた。

「でも先刻^{さつき}手紙をお寄こしになつたのね」

「ああやつたよ」

「今日来ちやいけないと書いてあるのね」

「うん、少し都合^{つごう}の悪い事があつたから」

「なぜあたしが来ちや御都合が悪いの」

津田はようやく気がついた。彼はお延の様子を見ながら答えた。

「なに何でもないんだ。下らない事なんだ」

「でも、わざわざ使に持たせてお寄こしになるくらいだから、何かあつたんでしょう」

津田はごまかしてしまおうとした。

「下らない事だよ。何でまたそんな事を気にかけるんだ。お前も馬鹿だね」

慰藉いしやのつもりで云った津田の言葉はかえって反対の結果をお延の上に生じた。彼女は黒い眉まゆを動かした。無言のまま帯の間へ手を入れて、そこから先刻の書翰しよかんを取り出した。

「これをもう一遍見てちようだい」

津田は黙ってそれを受け取った。

「別段何にも書いぢやないぢやないか」と云った時、彼の腹はよくやく彼の口を否定した。手紙は簡単であつた。けれどもお延の疑いを惹ひくには充分であつた。すでに疑われるだけの弱味をもつ

ている彼は、やり損そくなつたと思つた。

「何にも書いてないから、その理由わけを伺うんです」とお延は云つた。

「話して下すつてもいいじゃありませんか。せつかく来たんだから」

「お前はそれを聴ききに來たのかい」

「ええ」

「わざわざ？」

「ええ」

お延はどこまで行つても動かなかつた。相手の手剛てこわさを悟さとつた時、津田は偶然好い嘘うそを思いついた。

「実は小林が来たんだ」

小林の二字はたしかにお延の胸に反響した。しかしそれだけではすまなかった。彼はお延を満足させるために、かえってそこを説明してやらなければならなくなった。

百四十六

「小林なんか逢うのはお前も厭いやだろうと思ってね。それで気がついたからわざわざ知らしてやったんだよ」

こう云つてもお延はまだ得心した様子を見せなかった。津田はやむをえず慰藉いしやの言葉を延ばさなければならなかった。

「お前が厭でないにしたらところで、おれが厭なんだ、あんな男にお前を合わせるのは。それにあいつがまたお前に聴かせたくないような厭な用事を持ち込んで来たもんだからね」

「あたしの聴いて悪い用事？　じゃお二人の間の秘密なの？」

「そんな訳のものじゃないよ」と云った津田は、自分の上に寸分の油断なく据え^すられたお延の細い眼を見た時に、周章^{あわ}てて後をつけ足した。

「また金を強^せ乞^びりに来たんだ。ただそれだけさ」

「じゃあたしが聴^きいてなぜ悪いの」

「悪いとは云やしない。聴かせたくないというまでさ」

「するとただ親切^{せつしん}ずくで寄こして下すった手紙なのね、これは」

「まあそうだ」

今まで夫に見入っていたお延の細い眼がなほ細くなると共に、
微かな笑が唇を洩れた。

「まあありがたい事」

津田は澄ましていられなくなつた。彼は用意を欠いた文句を
り除ける余裕を失つた。

「お前だって、あんな奴に会うのは厭なんじゃないか」

「いいえ、ちつとも」

「そりや嘘だ」

「どうして嘘なの」

「だって小林は何かお前に云つたそうじゃないか」

「ええ」

「だからさ。それでお前もあいつに会うのは厭だろうと云うんだ」
「じゃあなたはあたしが小林さんからどんな事を聴いたか知っていらっしやるの」

「そりや知らないよ。だけどどうせあいつのことだから碌ろくな事は云やしなからう。いったいどんな事を云ったんだ」

お延は口へ出かかった言葉を殺してしまった。そうして反問した。

「ここで小林さんは何とおっしゃって」

「何とも云やしないよ」

「それこそ嘘です。あなたは隠していらっしやるんです」

「お前の方が隠しているんじゃないかね。小林から好い加減な事を云われて、それを真まに受けていながら」

「そりや隠しているかも知れません。あなたが隠し立てをなさる以上、あたしだって仕方がないわ」

津田は黙った。お延も黙った。二人とも相手の口を開くのを待った。しかしお延の辛防しんぼうは津田よりも早く切れた。彼女は急に鋭鋭どい声を出した。

「嘘よ、あなたのおっしやる事はみんな嘘よ。小林なんて人はここへ来た事も何にもないのに、あなたはあたしをごまかそうと思つて、わざわざそんな拵こしらえ事をおっしやるのよ」

「拵こしらえたつて、別におれの利益になる訳でもなからうじゃないか」

「いいえほかの人が来たのを隠すために、小林なんて人を、わざわざ引張り出すにきまつてるわ」

「ほかの人？　ほかの人とは」

お延の眼は床の上に載せてある楓かえでの盆栽ぼんさいに落ちた。

「あれはどなたが持つていらしたんです」

津田は失敗しくじつたと思った。なぜ早く吉川夫人の来た事を自白してしまわなかったかと後悔した。彼が最初それを口にしなかったのは分別ふんべつの結果であつた。話すのに訳はなかったけれども、夫人と相談した事柄の内容が、お延に対する彼を自然臆病にしたので、気の咎とがめる彼は、まあ遠慮しておく方が得策だろうと思案したのである。

盆栽をふり返った彼が吉川夫人の名を云おうとして、ちよつと口籠くちごもった時、お延は機先を制した。

「吉川の奥さんがいらしたじやありませんか」

津田は思わず云った。

「どうして知ってるんだ」

「知ってますわ。そのくらいの事」

お延の様子に注意していた津田はようやく度胸を取り返した。

「ああ来たよ。つまりお前の予言よげんがあたった訳になるんだ」

「あたしは奥さんが電車に乗っていらした事までちゃんと知ってるのよ」

津田はまた驚ろいた。ことによると自動車が大通りに待ってい

たのかも知れないと思っただけで、彼は夫人の乗物にそれ以上細かい注意を払わなかった。

「お前どこかで会ったのかい」

「いいえ」

「じゃどうして知ってるんだ」

お延は答える代りに訊^きき返した。

「奥さんは何しにいらしたんです」

津田は何気なく答えた。

「そりや今話そうと思つてたところだ。——しかし誤解しちや困るよ。小林はたしかに來たんだからね。最初に小林が來て、その後へ奥さんが來たんだ。だからちようど入れ違になつた訳だ」

百四十七

お延は夫より自分の方が急せぎ込んでゐる事に気がついた。この調子で乗のしかかつて行つたところで、夫はもう圧おし潰つぶされないと、いう見切みきりをつけた時、彼女は自分の破綻ぼろを出す前に身を翻ひるがえした。

「そう、そんならそれでもいいわ。小林さんが来たつて来なくなつたつて、あたしの知つた事じゃないんだから。その代り吉川の奥さんの用事を話して聴きかしてちょうだい。無論ただのお見舞でない事はあたしにも判つてゐるけれども」

「といったところで、大した用事で来た訳でもないんだよ。そんなに期待していると、また聴いてから失望するかも知れないから、ちよつと断つとくがね」

「構いません、失望しても。ただありのままを伺いさえすれば、それで念^{ねん}晴^{ばら}しになるんだから」

「本来が見舞で、用事はついたりなんだよ、いいかね」

「いいわ、どつちでも」

津田は夫人の齎^{もたら}した温泉行の助言^{じよごん}だけをごく淡泊^{あつさ}り話した。

お延にお延流の機略^{きりやく}がある通り、彼には彼相当の懸引^{かけひき}があるので、都合の悪いところを巧みに省略した、誰の耳にも真卒^{しんそつ}で合理的な説明がたやすく彼の口からお延の前に描き出された。彼

女は表おもてむき向むかそれに対して一言いちごんの非難さしはを挟はさむ余地がなかった。

ただ落ちつかないのは互の腹であつた。お延はこの単純な説明を透とおして、その奥を覗のぞき込もうとした。津田は飽あくまでもそれを見せまいと覚悟した。極めて平和な暗闘が度胸比べと技巧比べで演出されなければならなかつた。しかし守る夫に弱点がある以上、攻める細君にそれだけの強味が加わるのは自然の理であつた。だから二人の天賦てんぷを度外において、ただ二人の位地いちち関係から見ると、お延は戦かわない先にもう優者であつた。正味しょうみの曲直を標準にしても、競り合せあわない前に、彼女はすでに勝つていた。津田にはそういう自覚があつた。お延にもこれとほぼ同じ意味で大体的見けんんとうんとう当がついていた。

戦争は、この内部の事実を、そのまま表面へ追い出す事ができるかできないかで、一段落^{いちだんらく}つかなければならぬ道理であつた。津田さえ正直ならばこれほどたやすい勝負はない訳でもあつた。しかしもし一点不正直なところが津田に残っているとすると、これほどまた落し悪い^{にく}城はけつしてないという事にも帰着した。気の毒なお延は、否^{いやおう}応なしに津田を追い出すだけの武器をまだ造り上げていなかった。向うに開門を^{せま}逼るよりほかに何の手段も講じ得ない境遇にある現在の彼女は、結果から見てほとんど無能力者と^{えら}扱ふところがなかった。

なぜ心に勝つただけで、彼女は美しく切り上げられないのだろうか。なぜ凱歌^{がいが}を形の上にまで運び出さなければ気がすまない

のだろうか。今の彼女にはそんな余裕がなかったのである。この勝負以上に大事なものがまだあったのである。第二第三の目的をまだ後^{あと}に控えていた彼女は、ここを突き破らなければ、その後をどうする訳にも行かなかったのである。

それのみか、実をいうと、勝負は彼女にとって、一義の位をもつていなかった。本当に彼女の目指^{めざ}すところは、むしろ真相であつた。夫に勝つよりも、自分の疑を晴らすのが主眼であつた。そうしてその疑いを晴らすのは、津田の愛を対象に置く彼女の生存上、絶対に必要であつた。それ自身がすでに大きな目的であつた。ほとんど方便とも手段とも云われないほど重い意味を彼女の眼先へ突きつけていた。

彼女は前後の關係から、思量分別の許す限り、全身を挙げてそこへ拘泥こだわらなければならなかった。それが彼女の自然であつた。しかし不幸な事に、自然全体は彼女よりも大きかつた。彼女の遙はるか上にも續いていた。公平な光りを放つて、可憐かれんな彼女を殺そうとしてさえ憚はばからなかつた。

彼女が一口拘泥るたびに、津田は一足彼女から退しりぞいた。二口拘泥れば、二足退しりぞいた。拘泥るごとに、津田と彼女の距離はだんだん増まして行つた。大きな自然は、彼女の小さい自然から出た行為を、遠慮なく蹂躪じゅうりんした。一步ごとに彼女の目的を破壊して悔くいになかつた。彼女は暗あんにそこへ氣がついた。けれどもその意味を悟る事はできなかつた。彼女はただそんなはずはないとばかり

思いつめた。そうしてついにまた心の平静を失った。

「あたしがこれほどあなたの事ばかり考えているのに、あなたはちつとも察して下さらない」

津田はやりきれないという顔をした。

「だからおれは何にもお前を疑^{うたぐ}つてやしないよ」

「当り前ですわ。この上あなたに疑ぐられるくらいなら、死んだ方がよっぽどましですもの」

「死ぬなんて大袈裟^{おおげさ}な言葉は使わなくてもいいやね。第一何にもないじゃないか、どこにも。もしあるなら云つて御覧な。そうすればおれの方でも弁解^{くじやう}もしようし、説明もしようけれども、初^{しよて}手から根のない苦情^{くじやう}じゃ手のつけようがないじゃないか」

「根はあなたのお腹なかの中にあるはずですわ」

「困るなそれだけじゃ。——お前小林から何かしやくられたね。きつとそうに違ない。小林が何を云ったかそこで話して御覧よ。遠慮えいは要らないから」

百四十八

津田の言葉つきなり様子なりからして、お延は彼の心めいりよを明あ瞭うに推察する事ができた。——夫は彼の留守るすに小林の来た事を苦くにしている。その小林が自分に何を話したかをなお氣やに病やんでいる。そうしてその話の内容は、まだ判然はつきりつか掴んでいない。だか

ら鎌かまをかけて自分を釣り出そうとする。

そこに明らかな秘密があつた。材料として彼女の胸に蓄わえられて来たこれまでのいっさいは、疑うたがもなく矛盾もなく、ことごとく同じ方角に向つて注ぎ込んでいた。秘密は確實であつた。青天白日のように明らかであつた。同時に青天白日と同じ事で、どこにもその影を宿さなかつた。彼女はそれを見つめるだけであつた。手を出す術すべを知らなかつた。

悩のうらん乱らんのうちうちにまだ一分いちぶんの商しょうりよう量りようを余りした利巧りこうな彼女は、夫はのかけた鎌を外はずさずに、すぐ向うへかけ返した。

「じゃ本当を云いましょう。実は小林さんから詳しい話をみんな聴きいてしまつたんです。だから隠ひそしたつてもう駄目だめよ。あなたも

ずいぶんひどい方かたね」

彼女の云い草ぐさはほとんどでたらめに近かつた。けれどもそれを口にする気持からいうと、全くの真劍沙汰しんけんざたと何の異ことなるところはなかつた。彼女は熱を籠こめた語氣で、津田を「ひどい方かた」と呼ばなければならなかつた。

反響はすぐ夫の上に来た。津田はこのでたらめの前に退避たじろぐ氣色けしきを見せた。お秀の所で遣やり損そくなつた苦にがい経験にも懲こりず、また同じ冒険を試みたお延の度胸は酬むくいられそうになつた。彼女は一躍して進んだ。

「なぜこうならない前に、打ち明けて下さらなかつたんです」

「こうならない前」という言葉は曖昧あいまいであつた。津田はその意

味を捕^ほ捉^{とく}するに苦しんだ。肝^{かん}心^{しん}のお延にはなお解らなかつた。だから訊^きかれても説明しなかつた。津田はただぼんやりと念を押した。

「まさか温泉へ行く事をいうんじやあるまいね。それが不都合だと云うんなら、やめても構わないが」

お延は意外な顔をした。

「誰がそんな無理をいうもんですか。会社の方の都合^{つごう}がついて、病後の身体^{からだ}を回復する事ができれば、それほど結構な事はないじやありませんか。それが悪いなんてむちやくちやを云^い募^つるあたしだと思つていらつしやるの、馬鹿らしい。ヒステリーじやあるまいし」

「じや行つてもいいかい」

「よござんすとも」と云つた時、お延は急に袂たもとから手帛ハンケチを出して顔へ当てたと思うと、しくしく泣き出した。あとの言葉は、啜すすり上げる声の間から、句をなさずに、途切れ途切れに、毀れ物こわのような形で出て来た。

「いくらあたしが、……わがままだつて、……あなたの療養の……邪魔をするような、……そんな……あたしは不断からあなたがあたしに許して下さいる自由に対して感謝の念をもっているんです……のにあたしがあなたの転地療養を……妨げるなんて……」

津田はようやく安心した。けれどもお延にはまだ先があつた。
発作ほつきが静まると共に、その先は比較的すらすら出た。

「あたしはそんな小さな事を考えているんじゃないんです。いくらあたしが女だって馬鹿だって、あたしにはまたあたしだけの体面というものがあります。だから女なら女なり、馬鹿なら馬鹿なりに、その体面を維持いじして行きたいと思うんです。もしそれを毀き損そんされると……」

お延はこれだけ云いかけてまた泣き出した。あとはまた切れ切れになった。

「万……もしそんな事があると……岡本の叔父に対しても……叔母に対しても……面めん目ぼくなくて、合わす顔がなくなるんです。……それでも、あたしはもう秀子さんなんぞから馬鹿にされ切っているんです。……それをあなたは傍そばで見ているが、

……すまして……すまして……知らん顔をしていらつしやるんです」

津田は急に口を開いた。

「お秀がお前を馬鹿にしたって？　いつ？　今日お前が行った時にかい」

津田は我知らずとんでもない事を云ってしまった。お延が話さない限り、彼はその会見を知るはずがなかったのである。お延の眼ははたして閃めいた。

「それ御覧なさい。あたしが今日秀子さんの所へ行つた事が、あなたにはもうちゃんと知れているじゃありませんか」

「お秀が電話をかけたよ」という返事がすぐ津田の咽喉^{のど}から外へ

滑^{すべ}り出さなかつた。彼は云おうか止^よそうかと思つて迷つた。けれども時に一寸^{いっすん}の容赦^{ようしや}もなかつた。反吐^{へど}もどしていればいるほど形勢は危^{あや}うくなるだけであつた。彼はほとんど行きつまつた。しかし間髪^{かんはつ}を容れ^いずという際^{きわ}どい間際^{まぎわ}に、旨^{うま}い口実が天から降つて来た。

「車夫^{くるまや}が歸つて来てそう云つたもの。おおかたお時が車夫に話したんだろう」

幸いお延がお秀の後を追^{おっ}かけて出た事は、下女にも解つていた。偶発^{ぐうちゆう}の言訳が偶^ご中の功^{こう}を奏した時、津田は再度の胸を撫^なで下^{おろ}した。

百四十九

遮^{しやにむに}二無二津田を突き破ろうとしたお延は立ちどまった。夫がそれほど自分をごまかしていたのでないと考える拍^{ひょうし}子に気が抜けたので、一^{ひといき}息に進むつもりの彼女は進めなくなった。津田はそこを覘^{ねら}った。

「お秀なんぞが何を云ったって構わないじゃないか。お秀はお秀、お前はお前なんだから」

お延は答えた。

「そんなら小林なんぞがあたしに何を云ったって構わないじゃありませんか。あなたはあなた、小林は小林なんだから」

「そりや構わないよ。お前さえしつかりしていてくれれば。ただ疑ぐりだの誤解だのを起して、それをむやみに振り廻されると迷惑するから、こつちだつて黙っていらなくなるだけさ」

「あたしだつて同じ事ですわ。いくらお秀さんが馬鹿にしようと、いくら藤井の叔母さんが疎外しようと、あなたさえしつかりしていて下されば、苦くになるはずはないんです。それを肝かん心じんのあなたが……」

お延は行きつまつた。彼女には明めい瞭りょうな事実がなかつた。したがつて明瞭な言葉が口へ出て来なかつた。そこを津田がまた一ひととすくく捌はくい捌はくつた。

「おおかたお前の体面に関わるような不始末でもすると思つてゐる

んだろう。それよりか、もう少しおれに憑よりかかって安心していらいいじゃないか」

お延は急に大きな声を揚げた。

「あたしは憑りかかりたいんです。安心していいんです。どのくらい憑りかかっていたか、あなたには想像がつかないくらい、憑りかかりたいんです」

「想像がつかない？」

「ええ、まるで想像がつかないんです。もしつけば、あなたも變つて来なくっちゃならないんです。つかないから、そんなに澄ましているしやられるんです」

「澄ましてやしないよ」

「気の毒だとも可哀相だとも思つて下さらないんです」
かわいそう

「気の毒だとも、可哀相だとも……」

これだけ繰り返した津田はいつたん塞つかえた。その後で継あとぎ足たした文句はむしろ蹣まんさん蹣まんさんとして揺ゆめいていた。

「思つて下さらないたつて。——いくら思おうと思つても。——
 思うだけの因いんねん縁ねんがあれば、いくらでも思うさ。しかしなけりや
 仕方がないじゃないか」

お延の声は緊張のために顫ふるえた。

「あなた。あなた」

津田は黙っていた。

「どうぞ、あたしを安心させて下さい。助けると思つて安心させ

て下さい。あなた以外にあたしは憑^よりかかり所のない女なんですから。あなたに外^{はず}されると、あたしはそれぎり倒れてしまわなければならぬ心細い女なんですから。だからどうぞ安心しろと云って下さい。たった一口でいいから安心しろと云って下さい」

津田は答えた。

「大丈夫だよ。安心おしよ」

「本当？」

「本当に安心おしよ」

お延は急に破裂するような勢で飛びかかった。

「じゃ話してちょうだい。どうぞ話してちょうだい。隠さずにみんなここで話してちょうだい。そうして一思いに安心させてちょう

うだい」

津田は面喰めんくらった。彼の心は波のように前後へ揺うごき始めた。彼

はいつその事思い切つて、何もかもお延の前に浚さらけ出だしてしまおうかと思つた。と共に、自分はただ疑がわれているだけで、実証を握られているのではないとも推断した。もしお延が事実を知っているなら、ここまで押して来て、それを彼の顔に叩たたきつけないはずはあるまいとも考えた。

彼は氣の毒になつた。同時に逃げる余地は彼にまだ残つていた。道義心と利害心が高こう低ていを描えいて彼の心を上う下へ動うごかした。するとその片方に温泉行の重みが急に加わつた。約束を断行する事は吉川夫人に対する彼の義務であつた。必然から起る彼の要求で

もあつた。少くともそれを済^すますまで打ち明けずにいるのが得策だという気が勝を制した。

「そんなくだかしい事を云つてたつて、お互いに顔を赤くするだけで、際限がないから、もう止^よそうよ。その代りおれが受け合つたらいいだろう」

「受け合うつて」

「受け合うのさ。お前の体面に対して、大丈夫だという証書を入れるのさ」

「どうして」

「どうしてつて、ほかに証文の入れようもないから、ただ口で誓うのさ」

お延は黙っていた。

「つまりお前がおれを信用すると云いさえすれば、それでいいんだ。万一の場合が出て来た時は引き受けて下さいって云えばいいんだ。そうすればおれの方じゃ、よろしい受け合つたと、こう答えるのさ。どうだねその辺のところだ。妥協だきようはできないかね」

百五十

妥協という漢語がこの場合いかにも不釣合に聞こえようとも、その時の津田の心事しんじを説明するには極めて穏当きわであつた。實際この言葉によつて代表される最も適切な意味が彼の肚はらにあつた事はた

しかであつた。明敏なお延の眼にそれが映つた時、彼女の昂奮（こうふん）はようやく喰（く）いとめられた。感情の潮（うしお）がまだ上（のぼ）りはしまいかという掛念（けねん）で、暗（あん）に頭を悩ませていた津田は助かつた。次の彼には喰いとめた潮（うしお）の勢（いきおい）を、反対な方向へ逆用する手段を講ずるだけの余裕ができた。彼はお延を慰めにかかつた。彼女の氣に入りそうな文句を多量に使用した。沈着な態度を外部側（そとがわ）にもつてゐる彼は、また臨機に自分を相手なりに順応（じゆんおう）させて行く巧者（こうしや）も心得ていた。彼の努力ははたして空（むな）しくなかつた。お延は久しぶりに結婚以前の津田を見た。婚約当時の記憶が彼女の胸（むね）に蘇（よみが）えつた。

「夫は變つてゐるんじゃない。やつぱり昔の人だつたんだ」
こう思つたお延の満足は、津田を窮地から救うに充分であつた。

暴風雨になろうとして、なり損ねた波瀾はようやく収まった。けれども事前しぜんの夫婦は、もう事後じごの夫婦ではなかった。彼らはいつの間にか吾われ知らず相互の關係を変えていた。

波瀾の収まると共に、津田は悟った。

「畢ひつきよう 竟女は慰撫いぶしやすいものである」

彼は一場いちじようの風波ふうはが彼に齎もたらしたこの自信を抱いてひそかに喜

こんだ。今までの彼は、お延に対すること、苦手にがての感をどこかに起さずにいられた事がなかった。女だと見下ろしながら、底氣

味の悪い思いをしなければならぬ場合が、日ごとに現前げんぜんした。

それは彼女の直覺であるか、または直覺の活作用とも見倣みなされる

彼女の機略きりやくであるか、あるいはそれ以外の或物であるか、たし

かな解剖かいぼうは彼にもまだできていなかったが、何しろ事實は事實に違いなかった。しかも彼自身自分の胸に畳み込んでおくぎりで、いまだかつて他ひとに洩もらした事のない事實に違いなかった。だから事實と云い条、その実是一個の秘密でもあった。それならばなぜ彼がこの明白な事實をわざと秘密に附していたのだろう。簡単に云えば、彼はなるべく己おのれを尊とうく考がえたかったからである。愛の戦争という眼で眺めた彼らの夫婦生活において、いつでも敗者の位いち地に立った彼には、彼でまた相当の慢心があった。ところがお延のために征服される彼はやむをえず征服されるので、心しんから帰服するのではなかった。堂々と愛の擒とりこになるのではなくって、常に騙だまし打うちに会っているのであった。お延が夫の慢心を挫くじくところ

ろに気がつかないで、ただ彼を征服する点においてのみ愛の満足
 を感ずる通りに、負けるのが嫌きらいな津田も、残念だとは思ひながら、
 力及ばず組み敷かれるたびに降参するのであった。この特殊な関
 係を、一夜いちやの苦説くぜつが逆さかにしてくれた時、彼のお延に対する考えは
 変るのが至当であつた。彼は今までこれほど猛烈に、また真正面
 に、上手うわてを引くように見えて、実は偽りのない下手したでに出たお延と
 いう女を見た例ためしがなかった。弱点を抱だいて逃げまわりながら彼は
 始めてお延に勝つ事ができた。結果は明めい瞭りようであつた。彼はよ
 うやく彼女を軽蔑けいべつする事ができた。同時に以前よりは余計に、
 彼女に同情を寄せる事ができた。

お延にはまたお延で波瀾はらんご後の変化が起りつつあつた。今までか

つてこういう態度で夫に向つた事のない彼女は、一氣に津田の弱点を衝く方に心を奪われ過ぎたため、ついぞ露わした事のない自分の弱点を、かえつて夫に示してしまつたのが、何より先に残念の種になつた。夫に愛されたいばかりの彼女には平常からわが腕に依頼する信念があつた。自分は自分の見識を立て通して見せるという覚悟があつた。もちろんその見識は複雑とは云えなかつた。夫の愛が自分の存在上、いかに必要であろうとも、頭を下げて憐み^{あわれ}を乞うような見苦しい真似^{まね}はできないという意地に過ぎなかつた。もし夫が自分の思う通り自分を愛さないならば、腕の力で自由にして見せるという堅い決心であつた。のべつにこの決心を実行して来た彼女は、つまりのべつに緊張していると同じ事であつ

た。そうしてその緊張の極度はどこかで破裂するにきまつていた。破裂すれば、自分で自分の見識をぶち壊すのと同じ結果に陥いるのは明瞭であつた。不幸な彼女はこの矛盾に気がつかずに邁進した。それでとうとう破裂した。破裂した後で彼女はようやく悔いた。仕合せな事に自然は思ったより残酷でなかつた。彼女は自分の弱点を浚^{さぐ}り出すと共に一種の報酬を得た。今までどんなに勝ち誇つても物足りた例のなかつた夫の様子が、少し變つた。彼は自分の満足する見当に向いて一歩近づいて來た。彼は明らかに妥協という字を使った。その裏に彼女の根^{こん}限り掘り返そうと力めた秘密の潜在する事を暗^{あん}に自白した。自白？。彼女はよく自分に念を押して見た。そうしてそれが默認に近い自白に違いないとい

う事を確かめた時、彼女は口惜^{くや}しがると同時に喜こんだ。彼女はそれ以上夫を押さなかった。津田が彼女に対して気の毒という念を起したように、彼女もまた津田に対して気の毒という感じを持ち得たからである。

百五十一

けれども自然は思つたより頑^{かたくな}愚であつた。二人はこれだけで別れる事ができなかつた。妙な機^{はず}みからいったん収まりかけた風波がもう少しで盛り返されそうになつた。

それは昂^{こうふん}奮したお延の心持がやや平静に復した時の事であつ

た。今切り抜けて来た波瀾はらんの結果はすでに彼女の氣分に働らきかけていた。酔を感じる人が、その酔を利用するような態度で彼女は津田に向った。

「じやいつごろその温泉へいらつしやるの」

「ここを出たらすぐ行こうよ。身体からだのためにもその方が都合がよさそうだから」

「そうね。なるべく早くいらした方がいいわ。行くと事がきまつた以上」

津田はこれでまずよしと安心した。ところへお延は不意に出た。「あたしもいつしよに行つていいんでしょう」

氣の緩ゆるんだ津田は急にひやりとした。彼は答える前にまず考え

なければならなかった。連れて行く事は最初から問題にしていなかった。と云つて、断る事はなおむずかしかった。断り方一つで、相手はどう変化するかも分らなかった。彼が何と返事をしたものだろうと思つて分別するうちに大切の機は過ぎた。お延は催促した。

「ね、行つてもいいんでしょう」

「そうだね」

「いけないの」

「いけない訳もないがね……」

津田は連れて行きたくない心の内を、しだいしだいに外へ押し出されそうになった。もし猜疑さいぎの眸ひとみが一度お延の眼の中に動いた

ら事はそれぎりであるとして見た彼は、実を云うと、お延と同じ心理状態の支配を受けていた。先刻の波瀾から来た影響は彼にもう憑り移っていた。彼は彼でそれを利用するよりほかに仕方がなかった。彼はすぐ「慰撫」の二字を思い出した。「慰撫に限る。女は慰撫さえすればどうにかなる」。彼は今得たばかりのこの新しい断案を提さげて、お延に向った。

「行つてもいいんだよ。いいどころじゃない、実は行つて貰いたいんだ。第一一人じゃ不自由だからね。世話をして貰うだけでも、その方が都合がいいにきまつてるからね」

「ああ嬉しい、じゃ行くわ」

「ところがだね。……」

お延は厭^{いや}な顔をした。

「ところがどうしたの」

「ところがさ。宅^{うち}はどうする気かね」

「宅は時がいるから好いわ」

「好いわって、そんな子供見たいな呑^{のん}気な事を云つちや困るよ」

「なぜ。どこが呑^{のん}気なの。もし時だけで不用心なら誰か頼んで来るわ」

お延は続けざまに留守^{るすい}居として適当な人の名を二三挙^あげた。津田は拒^{こば}めるだけそれを拒んだ。

「若い男は駄^だ目^めだよ。時と二人ぎり置く訳にや行かないからね」
お延は笑い出した。

「まさか。——間違なんか起りっこないわ、わずかの間ですもの」

「そうは行かないよ。けっしてそうは行かないよ」

津田は断乎^{だんこ}たる態度を示すと共に、考える風もして見せた。

「誰か適当な人はないもんかね。手頃なお婆さんか何かあるとちように持つて来いだな」

藤井にも岡本にもその他の方面にも、そんな都合の好い手の空^あいた人は一人もなかった。

「まあよく考えて見るさ」

この辺で話を切り上げようとした津田は的^{あて}が外^{はず}れた。お延は掴^{つか}んだ袖^{そで}をなかなか放さなかった。

「考えてない時には、どうするの。もしお婆さんがいなければ、

あたしはどうしても行っちゃ悪いの」

「悪いとは云やしないよ」

「だってお婆さんなんかいる訳がないじやありませんか。考えないだつてそのくらいな事は解わかつてますわ。それより行つて悪いなら悪いと判はつきり然云つてちようだいよ」

せつぱつまつた津田はこの時不思議にまた好い云いいわけ訳を思いついた。

「そりやいざとなれば留守番なんかどうでも構わないさ。しかし時一人を置いて行くにしたところで、まだ困る事があるんだ。おれは吉川の奥さんから旅費を貰もらうんだからね。他の金ひとを貰つて夫婦連れで遊んで歩くように思われても、あんまりよくないじやな

いか」

「そんなら吉川の奥さんからいただくかないでも構わないわ。あの小切手があるから」

「そうすると今月分の払の方が差支えるよ」

「それは秀子さんの置いて行つたのがあるのよ」

津田はまた行きつまつた。そうしてまた危あやうい血路を開いた。

「少し小林に貸してやらなくつちやならないんだぜ」

「あんな人に」

「お前はあんな人にと云うがね、あれでも今度遠こんだい朝鮮へ行くんだからね。可かわい哀想そうだよ。それにもう約束してしまつたんだから、どうする訳にも行かないんだ」

お延は固^{もと}より満足な顔をするはずがなかった。しかし津田はこれかどうかその場だけを切り抜ける事ができた。

百五十二

後は話が存外楽に進行したので、ほどなく第二の妥協が成立した。小林に対する友誼^{ゆうぎ}を満足させるため、かつはいったん約束した言責^{げんせき}を果すため、津田はお延の貰^{もら}つて来た小切手^{うち}の中から、その幾分を割^さいて朝鮮行の贖^{はなむけ}として小林に贈る事にした。名義は固より貸すのであったが、相手に返す腹のない以上、それを予算に組み込んで今後の訳にする訳には行かないので、結果はつまり

やる事になったのである。もちろんそこへ行き着くまでにはお延にも多少の難色があつた。小林のような横おうちやく着な男に金銭を恵むのはおろか、ちゃんとした証書を入れさせて、一時の用を足してやる好意すら、彼女の胸のどの隅すみから出るはずはなかつた。のみならず彼女はややとすると、強しいてそれを断行しようとする夫の裏側を覗のぞき込むので、津田はそのたびに少なからず冷ひやひや々した。

「あんな人に何だつてそんな親切を尽しておやりになるんだか、あたしにはまるで解らないわ」

こういう意味の言葉が二度も三度も彼女によつて繰り返された。津田が人情一いってんぱり点張でそれを相手にする気色けしきを見せないと、彼女

はもう一歩先の事まで云った。

「だから訳をおつしやいよ。こういう訳があるから、こうしなければ義理が悪いんだという事情さえ明めいりよう瞭ようになれば、あの小切手をみんな上げてても構わないんだから」

津田にはここが何より大事な関所なので、どうしてもお延を通させる訳に行かなかつた。彼は小林を弁護する代りに、二人の過去にある旧い交際と、その交際から出る懐なつかしい記憶とを挙げた。懐かしいという字を使つて非難された時には、仕方なしに、昔の小林と今の小林の相違にまで、説明の手を拡ひろげた。それでも腑ふに落ちないお延の顔を見た時には、急に談話の調子を高尚にして、人道じんどうまで云々した。しかし彼の口にする人道はついに一個の功こ

うりせつ
利説に帰着するので、彼は吾^{われ}知らず自分の拵^{こしら}えた陷^{かん}穽^{せい}に向つて進んでいながら気がつかず、危うくお延から足を取られて、突き落されそうになる場合も出て来た。それを代表的な言葉でごく簡単に例で現^しわすと下^{しも}のようになった。

「とにかく困つてゐるんだからね、内地にいたたまれずに、朝鮮まで落ちて行こうてんだから、少しは同情してやつてもよからうじやないか。それにお前はあいつの人格をむやみに攻撃するが、そこに少し無理があるよ。なるほどあいつはしようのない奴^{やつ}さ。しようのない奴^{やつ}には違^{ちが}ないけれども、あいつがこうなつた困^{おこ}りをよく考えて見ると、何でもないんだ。ただ不平だからだ。じやなぜ不平だというと、金が取れないからだ。ところがあいつは愚^ぐ図^ずで

もなし、馬鹿でもなし、相当な頭を持つてゐるんだからね。不幸にして正則の教育を受けなかったために、ああなつたと思うと、そりや気の毒になるよ。つまりあいつが悪いんじゃない境遇が悪いんだと考えさえすればそれまでさ。要するに不幸な人なんだ」

これだけなら口先だけとしてもまず立派なのであるが、彼はついにそこで止まる事^{とど}ができないのである。

「それにまだこういう事も考えなければならぬよ。ああ自暴^{やけくそ}棄^けになつてゐる人間に逆^{さか}らうと何をするか解^{わか}らないんだ。誰とでも喧^{けん}嘩^かがしたい、誰と喧嘩^{けんか}をしても自分の得^{とく}になるだけだつて、現にここへ来て公言^{こうげん}して威張^{えば}つてゐるんだからね、實際始末^{おそ}に了^おえないよ。だから今もしおれがあいつの要求を跳ね^はつけるとすると、あ

いつは怒るよ。ただ怒るだけならいいが、きつと何かするよ。復か
たきうち 讐し をやるにきまつてるよ。ところがこつちには世間せけん体ていがあ
 り、向うにやそんなものがまるでないんだから、いざとなると敵かな
 いっこないんだ。解とつたかね」

ここまで来ると最初の人道主義はもうだいぶ崩くずれてしまう。し
 かしそれにしても、ここで切り上げさえすれば、お延は黙もくつて点う
なす 頭なすくよりほかに仕方がないのである。ところが彼はまだ先へ出
 のである。

「それもあいつが主義としてただ上流社会を攻撃したり、または
 一般の金持あつこうを悪口あくぐちするだけならいいがね。あいつのは、そうじゃ
 ないんだ、もつと実際じつざい的なんだ。まず最初に自分の手の届く所か

らだんだんに食い込んで行こうというんだ。だから一番災難なのはこれのおれだよ。どう考えてもここでおれ相当の親切を見せて、あいつの感情を美しくして、そうして一日も早く朝鮮へ立つて貰うのが上策なんだ。でないといつどんな目に逢うか解ったもんじやない」

こうなるとお延はどうしてもまた云いたくなるのである。

「いくら小林が乱暴だつて、あなたの方にも何かなくつちや、そんなに怖がる因縁がないじやありませんか」

二人がこんな押問答をして、小切手の片をつけるだけでも、ものの十分はかかった。しかし小林の方がきまると共に、残りの所置はすぐついた。それを自分の小遣として、任意に自分の嗜慾

を満足するという彼女の条件は直ちに成立した。その代り彼女は津田といつしよに温泉へ行かない事になった。そうして温泉行の費用は吉川夫人の好意を受けるといふ案に同意させられた。

うそ寒の宵に、若い夫婦間に起つた波瀾の消長はこれであろうや
く尽きた。二人はひとまず別れた。

百五十三

津田の辛防しなければならぬ手術後の経過は良好であつた。というよりもむしろ順当に行つた。五日目が来た時、医者は予定通り彼のために全部のガーゼを取り替えてくれた後で、それを保

証した。

「至極^{しごく}好い具合です。出血も口元だけです。内部^{なか}の方は何ともありません」

六日目にも同じ治療法が繰り返された。けれども局部は前日より健康になつていた。

「出血はどうです。まだ止まりませんか^と」

「いや、もうほとんど止まりました」

出血の意味を解し得ない津田は、この返事の意味をも解し得なかった。好い加減に「もう癒^{なほ}りました」という解釈をそれに付けて大変喜こんだ。しかし本式の事実は彼の考える通りにも行かなかった。彼と医者之間に起つた一^{いちじよう}場の問答がその辺の消息を

明らかにした。

「これが癒り損そくなつたらどうなるんでしょう」

「また切るんです。そうして前よりも軽く穴が残るんです」

「心細いですな」

「なに十中八九は癒るにきまっています」

「じゃ本当の意味で全癒というと、まだなかなか時間がかかるんですね」

「早くて三週間遅くて四週間です」

「ここを出るのは？」

「出るのは明後日みょうごぐらいで差支えありません」

津田はありがたがった。そうして出たらすぐ温泉に行こうと覚

悟した。なまじい医者に相談して転地を禁じられでもすると、かえって神経を悩ますだけが損だと打算した彼はわざと黙っていた。それはほとんど平生の彼に似合わない粗忽そこつな遣口やりぐちであつた。彼は甘んじてこの不謹慎を断行しようと決心しながら、肚はらの中すでに自分の矛盾を承知しているので、何だか不安であつた。彼は訊きかないでもいい質問を医者にかけてみたりした。

「括約筋かつやくきんを切り残したとおっしゃるけれども、それでどうして下からガーゼが詰つまめられるんですか」

「括約筋はとば口にやありません。五分ほど引つ込んでます。それを下から斜はすに三分ほど削けずり上げた所があるのです」

津田はその晩から粥かゆを食い出した。久しく麵麴パンだけで我慢して

いた彼の口には水ツぽい米の味も一種の新らしみであつた。趣味として夜寒よさむの粥かゆを感じる能力を持たない彼は、秋の宵よいの冷たさを対照に置く薄粥うすがゆの暖かさを普通の俳人以上に珍重して啜すする事ができた。

療治の必要上、長い事止とめられていた便の疎通を計るために、彼はまた軽い下剤を飲まなければならなかつた。さほど苦くにもならなかつた腹の中が軽くなるに従つて、彼の気分もいつか軽くなつた。身体からだの楽になつた彼は、寝転ねころんでただ退院の日を待つだけであつた。

その日も一晩明けるとすぐに來た。彼は車を持って迎いに來たお延の顔を見るや否や云つた。

「やっと帰れる事になった訳かな。まあありがたい」

「あんまりありがたくもないでしょう」

「いやありがたいよ」

「宅の方が病院よりはまだましだとおっしゃるんでしょう」

「まあその辺かも知れないがね」

津田はいつもの調子でこう云った後で、急に思い出したように付け足した。

「今度はお前の^{こしら}拵えてくれた^{どてら}縹袍で助かったよ。綿が新らしいせいか大変着心地が好いね」

お延は笑いながら夫を^{ひやか}冷嘲した。

「どうなすったの。なんだか急に^{せじ}お世辞が^{うま}旨くおなりね。だけど、

違つてるのよ、あなたの鑑定は」

お延は問題の縵袍を畳みながら、新らしい綿ばかりを入れなかつた事実を夫に白状した。津田はその時着物を着換えていた。絞しぼりの模様の入つた縮ちりめん緬へこおびの兵児帯をぐるぐる腰に巻く方が、彼にはむしろ大事な所作しよさであつた。それほど軽く縵袍の中味を見ていた彼の愛あい嬌きようは、正直なお延の返事を待ち受けるのでも何でもなかつた。彼はただ「はあそうかい」と云つたぎりであつた。

「お氣に召したらどうぞ温泉へも持つていらしつて下さい」

「そうして時々お前の親切でも思い出すかな」

「しかし宿屋で貸してくれる縵袍の方がずっとよかつたり何かすると、いい恥つ掻きね、あたしの方は」

「そんな事はないよ」

「いえあるのよ。品質ものが悪いとどうしても損ね、そういう時には。親切なんかすぐどこかへ飛んでつちまうんだから」

無邪気なお延の言葉は、彼女の意味する通りの単純さで津田の耳へは響かなかつた。そこには一種のアイロニーが顫動せんどうしていた。縷袍どてらは何かの象徴シンボルであるらしく受け取れた。多少気味の悪くなつた津田は、お延に背中を向けたままで、兵児帯へこおびの先をこま結びに結んだ。

やがて二人は看護婦に送られて玄関に出ると、すぐそこに待たしてある車に乗った。

「さよなら」

多事な一週間の病院生活は、この一語でようやく幕になった。

百五十四

目的の温泉場へ立つ前の津田は、既定されたプログラムの順序として、まず小林に会わなければならなかった。約束の日が来た時、お延から入用いりようの金を受け取った彼は笑いながら細君を顧み
た。

「何だか惜しいな、あいつにこれだけ取られるのは」

「じゃ止よした方が好いわ」

「おれも止したいよ」

「止したいのになぜ止せないの。あたしが代りに行つて断つて来て上げましょうか」

「うん、頼んでもいいね」

「どこである人にお逢いになるの。場所さえおつしやれば、あたし行つて上げるわ」

お延が本気かどうかは津田にも分らなかつた。けれどもこういう場合に、大丈夫だと思つてつい笑談じょうだんに押すと、押したこつちがかえつて手古摺てこずらせられるくらいの事は、彼に困難な想像ではなかつた。お延はいざとなると口で云つた通りを真面まともに断行する女であつた。たとい違約であろうとあるまいと、津田を代表して、小林を撃退する役割なら進んで引き受けないとも限らなかつ

た。彼は危険区域へ踏み込まない用心をして、わざと話を不真面目な方角へ流してしまった。

「お前は見かけに寄らない勇氣のある女だね」

「これでも自分じゃあると思ってるのよ。けれどもまだ出した例がないから、實際どのくらいあるか自分にも分らないわ」

「いやお前に分らなくっても、おれにはちゃんと分ってるから、それでたくさんだよ。女のくせにそうむやみに勇氣なんか出された日にや、亭主が困るだけだからね」

「ちつとも困りやしないわ。御亭主のために出す勇氣なら、男だって困るはずがないじゃないの」

「そりやありがたい場合もたまには出て来るだろうがね」と云つ

た津田には固^{もと}より本氣に受け答えをするつもりもなかった。「こ今^んにち

日^{おぼえ}までそれほど感服に値する勇氣を拝見した覚もないようだね」

「そりやその通りよ。だってちつとも外へ出さずにいるんですもの。それでも内側へ入って御覽なさい。なんぼあたしだってあなたの考えていらつしやるほど太平じゃないんだから」

津田は答えなかった。しかしお延はやめなかった。

「あたしがそんなに氣樂そうに見えるの、あなたには」

「ああ見えるよ。大いに氣樂そうだよ」

この好い加減な無駄口の前に、お延は微^{かす}かな溜^{ためいき}息を洩^もらした後で云った。

「つまらないわね、女なんて。あたし何だって女に生れて来たん

でしょう」

「そりやおれにかけ合つたつて駄目だ。京都にいるお父さんかお母さんへ尻しりを持ち込むよりほかに、苦情の持つてきどころはないんだから」

苦笑したお延はまだ黙らなかつた。

「いいから、今に見ていらつしやい」

「何を」と訊きき返した津田は少し驚ろかされた。

「何でもいいから、今に見ていらつしやい」

「見ているが、いったい何だよ」

「そりや実際に問題が起つて来なくつちや云えないわ」

「云えないのはつまりお前にも解わからないという意味なんじゃない

か」

「ええそうよ」

「何だ下らない。それじゃまるで雲を掴むつかような予言だ」

「ところがその予言が今にきつとあたるから見ていらつしやいというのよ」

津田は鼻の先でふんと云った。それと反対にお延の態度はだんだん真剣に近づいて来た。

「本当よ。何だか知らないけれども、あたし近頃始しじゆう終しゆうそう思つてるの、いつか一度このお肚なかの中にもつてる勇気を、外へ出さなくつちやならない日が来るに違ちがないつて」

「いつか一度？ だからお前のは妄想もうぞうと同一おんな事なんだよ」

「いいえ生しょうがい涯がいのうちでいつか一度じゃないのよ。近いうちなの。もう少ししたらのいつか一度なの」

「ますます悪くなるだけだ。近き将来において蛮勇なんか亭主の前で発揮された日にや敵かなわない」

「いいえ、あなたのためによ。だから先刻さつきから云つてるじゃないの、夫のために出す勇氣だつて」

真面目まじめなお延のびの顔を見ていると、津田もしだいに釣つり込まれるだけであつた。彼の性格にはお延ほどの詩がなかった。その代り多少気味の悪い事実が遠くから彼を威圧していた。お延の詩、彼のいわゆる妄想は、だんだん活躍かつやくし始めた。今まで死んでいるとばかり思つて、弄いじり廻くしていた鳥つばさの翅はねが急に動き出すよう

に見えた時、彼は変な気持ちがして、すぐ会話を切り上げてしまった。

彼は帯の間から時計を出して見た。

「もう時間だ、そろそろ出かけなくっちゃ」

こう云つて立ち上がった彼の後あとを送つて玄関に出たお延は、
子うしかけから茶の中折を取つて彼の手に渡した。帽ぼう

「行つていらつしやい。小林さんによろしくつてお延が云つてたと忘れずに伝えて下さい」

津田は振り向かないで夕方の冷たい空気の中に出た。

百五十五

小林と会見の場所は、東京で一番賑にぎやかな大通りの中ほどを、ちよつと横へ切れた所にあつた。向うから宅うちへ誘ういに寄つて貰もらう不快を避けるため、またこつちで彼の下宿を訪たずねてやる面倒を省はぶくため、津田は時間をきめてそこで彼に落ち合う手順にしたのである。

その時間は彼が電車に乗っているうちに過ぎてしまつた。しかし着物を着換えて、お延から金を受け取つて、少しの間坐談ざだんをしていたために起つたこの遅刻は、何らの痛痒つうようを彼に与えるに足りなかつた。有体ありていに云えば、彼は小林に対して克明に律義りちぎを守る細心の程度を示したくなかつた。それとは反対に、少し時間を

後おくらせても、放ほう縦しやうな彼の鼻柱くじを挫くじいてやりたかつた。名前は送別会だろうが何だろうが、その実金をやるものと貰うもののが顔を合せる席にきまつている以上、津田はたしかに優者であつた。だからその優者の特権をできるだけ緊張させて、主客しゆかくの位地いちちをあらかじめ作つくておく方が、相手の驕きやう慢まんを未前に防まもぐ手段として、彼には得策であつた。利害を離れた単なる意趣返しとしてもその方が面白かつた。

彼はごうごう鳴る電車の中で、時計を見ながら、ことによるとこれでもまだ横着な小林には早過ぎるかも知れないと考えた。もしあまり早く行き着いたら、一通り夜店でも素見ひやかして、慾よくの皮で硬く張はつた小林の予期を、もう少し焦じらしてやろうとまで思案し

た。

停留所で降りた時、彼の眼の中を通り過ぎた燭光あかりの数は、夜の都の活動を目覚しく物語るに充分なくらい、右往左往へちらちらした。彼はその間に立って、目的の横町へ曲る前に、これらの燭光あかりと共に十分ぐらい動いて歩こうか歩くまいかと迷った。ところが顔の先へ押し付けられた夕刊を除よけて、四辺あたりを見廻した彼は、急におやと思わざるを得なかった。

もうだいぶ待ち草臥くたびれているに違ないと仮定してかかった小林は、案外にも向う側に立っていた。位地いちは津田の降りた舗床ペーヴメントと車道を一へだつ隔てた四つ角の一端なので、二人の視線が調子よく合わない以上、夜と人どちらちらする燭光が、相互の認識を遮さえぎ

る便利があつた。のみならず小林は真面まともにこつちを向いていなかった。彼は津田のまだ見知らない青年と立談たちばなしをしていた。青年の顔は三分の二ほど、小林のは三分の一ほど、津田の方角から見えるだけなので、彼はほぼ露見の恐れなしに、自分の足の停とまつた所から、二人の模様を注意して観察する事ができた。二人はけつして余所見よそみをしなかつた。顔と顔を向き合せたまま、いつまでも同じ姿勢を崩くずさない彼らの体ていが、ありありと津田の眼に映るにつれて、真面目まじめな用談の、互いの間に取り換わされている事は明瞭めいりように解わかつた。

二人の後うしろには壁があつた。あいにく横側に窓が付いていないので、強い光はどこからも射さなかつた。ところへ南から来た自働

車が、大きな音を立てて四つ角を曲ろうとした。その時二人は自働車の前側に装置してある巨大な灯光を満身に浴びて立つた。津田は始めて青年の容貌ようぼうを明かに認める事ができた。あおしろ蒼白い血色は、帽子の下から左右に垂れている、幾力月となく刈り込まないさんさん
々たる髪の毛と共に、彼の視覚を冒した。おか彼は自働車の過ぎ去ると同時に踵きびすを回らした。そうして二人の立っている舗道ほどうを避けるように、わざと反対の方向へ歩き出した。

彼には何の目的もなかった。はなやかに電灯で照らされた店を一軒ごとに見て歩く興味は、ただ都会的で美しいというだけに過ぎなかった。商賈が違うにつれて品物が変化する以外に、何らの複雑おもむきな趣みいは見出されなかった。それにもかかわらず彼は到いたる処

に視覚の満足を味わった。しまいに或唐物屋とうぶつやの店先に飾ってあるハイカラな襟飾ネクタイを見た時に、彼はとうとうその家の中うちへ入って、自分の欲しいと思うものを手に取って、ひねくり廻したりなどした。

もうよかろうという時分に、彼は再び取って返した。舗道の上に立っていた二人の影ははたしてどこかへ行ってしまった。彼は少し歩調を早めた。約束の家の窓からは暖かそうな光が往来へ射していた。煉瓦れんが作りで窓が高いのと、模様のある玉子色きぬの布に遮さえぎられて、間接よに夜の中へ光線が放射されるので、通り際とおぎわに見上げた津田の頭に描き出されたのは、穏やかな瓦斯ガス暖炉だんろを供えた品の好い食堂であつた。

大きなブロックの片隅に、形容した言葉でいうと、むしろひっそり構えているその食堂は、大して広いものではなかった。津田がそこを知り出したのもつい近頃であつた。長い間仏蘭西^{フランス}とかに公使をしていた人の料理番が開いた店だから旨い^{うまい}のだと友人に教えられたのが原^{もと}で、四五遍食いに來た因縁^{いんねん}を措くと、小林をそこへ招き寄せる理由は他に何にもなかった。

彼は容赦^{ようしや}なく扉^{とびら}を押して内へ入った。そうしてそこに案のごとく少し手持無沙汰^{てもちぶさた}でもあるような風をして、真面目^{まじめ}な顔を夕刊か何かの前に向けている小林を見出した。

小林は眼を上げてちよつと入口の方を見たが、すぐその眼を新聞の上に落してしまった。津田は仕方なしに無言のまま、彼の坐すわっている食卓テーブルの傍そばまで近寄つて行つてこつちから声をかけた。

「失敬。少し遅くなつた。よつほど待たしたかね」

小林はようやく新聞を畳んだ。

「君時計をもつてゐるだろう」

津田はわざと時計を出さなかつた。小林は振り返つて正面の壁の上に掛つている大きな柱時計を見た。針は指定の時間より四十分ほど先へ出ていた。

「実は僕も今来たばかりのところなんだ」

二人は向い合つて席についた。周囲には二組ばかりの客がいるだけなので、そうしてその二組は双方ともに相当の扮装みなりをした婦人づれなので、室内は存外静かであつた。ことに一間ほど隔へだてて、二人の横に置かれた瓦斯ガスストーブの火の色が、白いものの目立つ清楚せいそな室へやの空氣に、恰かつ好こうな温ぬくもりを与えた。

津田の心には、変な対照が描き出された。この間の晩小林のお蔭かげで無理に引つ張り込まれた怪しげな酒場バーの光景がありありと彼の眼に浮んだ。その時の相手を今度は自分の方でここへ案内したという事が、彼には一種の意味で得意であつた。

「どうだね、ここの宅うちは。ちよつと綺麗きれいで心持が好いじゃないか」
小林は氣がついたように四辺ぐるりを見廻した。

「うん。ここには探偵はいないようだね」

「その代り美くしい人がいるだろう」

小林は急に大きな声を出した。

「ありやみんな芸者なんか君」

ちよつときまりの悪い思いをさせられた津田は叱るように云つた。

「馬鹿云うな」

「いや何とも限らないからね。どこにどんなものがあるか分からない世の中だから」

津田はますます声を低くした。

「だって芸者はあんな服装なりをしやすいよ」

「そうか。君がそう云うなら確^{たしか}だろう。僕のような田舎^{いなか}ものには第一その区別が分らないんだから仕方がないよ。何でも綺麗な着物さえ着ていればすぐ芸者だと思つちまうんだからね」

「相変らず皮肉^{ひにく}るな」

津田は少し悪い氣色^{きしよく}を外へ出した。小林は平氣であつた。

「いや皮肉^あるんじゃないよ。實際僕は貧乏の結果そちの方の眼がまだ開いていないんだ。ただ正直にそう思うだけなんだ」

「そんならそれでいいさ」

「よくなくつても仕方がない訳だがね。しかし事実どうだろう君」
「何が」

「事実当世にいわゆるレデーなるものと芸者との間に、それほど

区別があるのかね」

津田は空つ惚ける事そらとぼの得意なこの相手の前に、真面目まじめな返事を与える子供らしさを超越して見せなければならなかった。同時に何とかして、ゴツンと喰くらわしてやりたいような氣もした。けれども彼は遠慮した。というよりも、ゴツンとやるだけの言葉が口へ出て来なかった。

「笑談じょうたん じゃない」

「本当に笑談じょうたん じゃない」と云った小林はひよいと眼を上げて津田の顔を見た。津田はふと氣がついた。しかし相手に何か考えがあるんだなと悟った彼は、あまりに伶俐りこう過ぎた。彼には澄ましさわてそこを通り抜けるだけの腹がなかった。それでいて当らず障さわら

ず話を傍^{わき}へ流すくらいの技巧は心得ていた。彼は小林に捕^{つら}まらなければならなかった。彼は云った。

「どうだ君この料理は」

「ここの料理もどこの料理もたいてい似たもんだね。僕のような味覚の発達しないものには」

「不^{まず}味いかい」

「不味かない、旨^{うま}いよ」

「そりや好い案^{あんばい}配だ。亭主が自分でクッキングをやるんだから、ほかよりや少しはましかも知れない」

「亭主がいくら腕を見せたって、僕のような口に合^{かな}つちや敵^{かな}わないよ。泣くだけだあね」

「だけど旨けりやそれでいいんだ」

「うん旨けりやそれでいい訳だ。しかしその旨さが十銭均一の一品料理おんと同じ事だと云つて聞かせたら亭主も泣くだろうじやないか」

津田は苦笑するよりほかに仕方がなかった。小林は一人でしゃべった。

「いったい今の僕にや、仏蘭西料理フランスだから旨いの、英吉利料理イギリスだから不味いのつて、そんな通つうをふり廻す余裕なんかまるでないんだ。ただ口へ入るから旨いだけの事なんだ」

「だってそれじゃなぜ旨いんだか、理由わけが解わからなくなるじやないか」

「解り切つてゐるよ。ただ飢^{ひも}じいから旨いのさ。その他に理窟^{りくつ}も糸^へ瓜^{ちま}もあるもんかね」

津田はまた黙らせられた。しかし二人の間に続く無言が重く胸に^{こた}へるようになった時、彼はやむをえずまた口を開こうとして、たちまち小林のために機先を制せられた。

百五十七

「君のような敏感者から見たら、僕ごとき鈍^{どん}物^{ぶつ}は、あらゆる点で^{けいべつ}軽蔑^{あたい}に値^{あたい}しているかも知れない。僕もそれは承知している、軽蔑されても仕方がないと思つてゐる。けれども僕には僕でまた

相当の云草いぐさがあるんだ。僕の鈍どんは必ずしも天賦てんぷの能力に原因しているとは限らない。僕に時を与えよだ、僕に金を与えよだ。しかる後、僕がどんな人間になつて君らの前に出現するかを見よだ」

この時小林の頭には酒がもう少し廻つていた。笑談とも真面目とも片のつかない彼の氣きえんには、わざと酔の力を藉かろうとする鬱う散さんの傾かたむきが見えて来た。津田は相手の口にする言葉の価値を正面から首肯うけがうべく余儀なくされた上に、多少彼の歩き方につき合う必要を見出した。みいだ

「そりや君のいう通りだ。だから僕は君に同情しているんだ。君だつてそのくらしい事は心得ていてくれるだろう。でなければ、こつやつて、わざわざ会食までして君の朝鮮行ちようせんいきを送る訳がな

いからね」

「ありがとう」

「いや嘘うそじゃないよ。現にこの間もお延にその訳をよく云つて聴きかせたくらいだもの」

胡散臭うさんくさいなという眼が小林の眉まゆの下で輝やいた。

「へええ。本当ほんとかい。あの細君の前で僕を弁護してくれるなんて、君にもまだ昔の親切が少しは残つてると見えるね。しかしそりや……。細君は何と云つたね」

津田は黙つて懐ふところへ手を入れた。小林はその所作しよさを眺めながら、わざとそれを止やめさせるように追加した。

「ははあ。弁護の必要があつたんだな。どうも変だと思つたら」

津田は懷へ入れた手を、元の通り外へ出した。「お延の返事はここにある」といつて、綺麗きれいに持つて来た金を彼に渡すつもりでいた彼は躊躇ちゆうちよした。その代り話頭わとうを前へ押し戻した。

「やはり人間は境遇次第だね」

「僕は余裕次第だというつもりだ」

津田は逆さからわなかった。

「そうさ余裕次第とも云えるね」

「僕は生れてから今日までぎりぎり決着の生活をして来たんだ。まるで余裕というものを知らず生きて来た僕が、贅ぜいたくさんまい沢三昧わがまま三昧に育った人とどう違ふと君は思う」

津田は薄笑いをした。小林は真面目まじめであつた。

「考えるまでもなくここにいるじゃないか。君と僕さ。二人を見
較くらべればすぐ解るだろう、余裕と切迫で代表された生活の結果は」
津田は心の中うちでその幾分を点頭うなずいた。けれども今さらそんな不
平を聴いたって仕方がないと思つているところへ後が来た。

「それでどうだ。僕は始し終ゆう君に軽蔑けいべつされる、君ばかりじやな
い、君の細君からも、誰からも軽蔑される。——いや待ちたまえ
まだいう事があるんだ。——それは事実さ、君も承知、僕も承知
の事実さ。すべて先刻さつき云つた通りさ。だが君にも君の細君にもま
だ解らない事がここに一つあるんだ。もちろん今さらそれを君に
話したつてお互いの位地いちちが変る訳でもないんだから仕方がないよ
うなもの、これから朝鮮へ行けば、僕はもう生きて再び君に会

う折がないかも知れないから……」

小林はここまで来て少し昂奮こうふんしたような気色けしきを見せたが、すぐその後から「いや僕の事だから、行つて見ると朝鮮も案外なで、厭いやになつてまたすぐ歸つて来ないとも限らないが」と正直なところを付け加えたので、津田は思わず笑い出してしまった。小林自身もいったん頓挫とんざしてからまた出直した。

「まあ未来の生活上君の参考にならないとも限らないから聴きたまえ。実を云うと、君が僕を軽蔑している通りに、僕も君を軽蔑しているんだ」

「そりや解つてるよ」

「いや解らない。軽蔑けいべつの結果はあるいは解つてるかも知れない

が、輕蔑の意味は君にも君の細君にもまだ通じていないよ。だから君のこんゆう今夕の好意に対して、僕はまたりゆうべつ留別のために、それを説明して行こうてんだ。どうだい」

「よかろう」

「よくないたつて、僕のような一いちもん文なしじゃほかに何も置いて行くものがないんだから仕方がなからう」

「だからいいよ」

「黙つて聴くかい。聴くなら云うがね。僕は今君の御馳走ごちそうになつて、こうしてぱくぱく食つてゐるフランス仏蘭西料理も、この間の晩君を御招待申して叱られたあの汚らしい酒場バーの酒も、どっちも無差別に旨うまいくらい味覚の發達しない男なんだ。そこを君は輕蔑するだ

ろう。しかるに僕はかえってそこを自慢にして、軽蔑する君を逆に軽蔑しているんだ。いいかね、その意味が君に解ったかね。考えて見たまえ、君と僕がこの点においてどっちが窮屈で、どっちが自由だか。どっちが幸福で、どっちが束縛を余計感じているか。どっちが太平でどっちが動揺しているか。僕から見ると、君の腰は始終ぐらついているよ。度胸が坐つてないよ。厭なものをごきもでも避けたがつて、自分の好きなものをむやみに追かけたがつてるよ。そりやなぜだ。なぜでもない、なまじいに自由が利くためさ。贅沢をいう余地があるからさ。僕のように窮地に突き落されて、どうしても勝手にしやがれという気分になれないからさ」

津田はてんから相手を見縊っていた。けれども事実を認めない

訳には行かなかった。小林はたしかに彼よりずうずうしく出来上つていた。

百五十八

しかし小林の説法にはまだ後があつた。津田の様子を見澄ました彼は突然思いがけない所へ舞い戻つて来た。それは会見の最初ちよつと二人の間に点綴てんてつされながら、前後の勢いきおいですぐどこかへ流されてしまった問題にほかならなかつた。

「僕の意味はもう君に通じている。しかし君はまだなるほどという心持になれないようだ。矛盾だね。僕はその訳を知ってるよ。」

第一に相手が身分も地位も財産も一定の職業もない僕だという事が、聡明そうめいな君を煩わづらわしているんだ。もしこれが吉川夫人か誰かの口から出るなら、それがもつとずつとつまらない説でも、君は襟えりを正して聴くに違いないんだ。いや僕の僻ひがみでも何でもない、争うべからざる事実だよ。けれども君考えなくつちやいけないぜ。僕だからこれだけの事が云えるんだという事を。先生だって奥さんだって、そこへ行くと駄目だという事も心得ておきたまえ。なぜだ？ なぜでもないよ。いくら先生が貧乏したって、僕だけの経験は嘗なめていないんだからね。いわんや先生以上に樂をして生きて来た彼輩かのはいにおいてをやだ」

彼輩とは誰の事だか津田にもよく解らなかつた。彼はただ腹の

中で、おおかた吉川夫人だの岡本だのを指すのだろうと思つたぎりであつた。實際小林は相手にそんな質問をかけさせる余地を与えないで、さつさと先へ行つた。

「第二にはだね。君の目下の境遇が、今僕の云つたような助言じよごん

——だか忠告だか、または単なる知識の供給だか、それは何でも構わないが、とにかくそんなものに君の注意を向ける必要を感じさせないのだ。頭では解る、しかし胸では納得なつとくしない、これが現在の君なんだ。つまり君と僕とはそれだけ懸絶けんぜつしているんだから仕方がないと跳ねはつけれればそれまでだが、そこに君の注意を払わせたいのが、実は僕の目的だ、いいかね。人間の境遇もしくは位地いちちの懸絶といつたところで大したものじゃないよ。本式に

云えば十人が十人ながらほぼ同じ経験を、違った形式で繰り返しているんだ。それをもつと判然はつきり云うとね、僕は僕で、僕に最も切実な眼でそれを見るし、君はまた君で、君に最も適当な眼でそれを見る、まあそのくらいの違いちがいの違だろうじゃないか。だからさ、順境にあるものがちよつと面喰めんくらうか、迷児まごつくか、蹴爪けつまずくかすると、そらすぐ眼の球の色が變つて来るんだ。しかしいくら眼の球の色が變つたつて、急に眼の位置を変える訳には行かないだろう。つまり君に一いっちょ朝事があつたとすると、君は僕のこの助言をきつと思ひ出さなければならなくなるというだけの事さ」

「じやよく氣をつけて忘れないようにしておくよ」

「うん忘れずにいたまえ、必ず思ひ当る事が出て来るから」

「よろしい。心得たよ」

「ところがいくら心得たつて駄目^{だめ}なんだからおかしいや」

小林はこう云つて急に笑い出した。津田にはその意味が解らなかつた。小林は訊^きかれぬ先に説明した。

「その時ひよつと気がつくとするぜ、いいかね。そうしたらその時の君が、やつという掛^{かけ}声^{こゑ}と共に、早變りができるかい。早變りをしてこの僕になれるかい」

「そいつは解らないよ」

「解らなかない、解つてるよ。なれないにきまつてるんだ。憚^{はば}りながらここまで来るには相当の修業^{しゅぎょう}が要^いるんだからね。いかに痴^ち鈍^{どん}な僕といえども、現在の自分に対してはこれで血^ちの代^{しろ}を払^はつて

るんだ」

津田は小林の得意が癩しやくさわに障った。此奴こいつが狗いぬのような毒血を払つてはたして何物を掴つかんでいる？　こう思つた彼はわざと輕蔑けいべつの色を面おもてに現あらわして訊きいて見た。

「それじゃ何のためにそんな話を僕にして聴かせるんだ。たとい僕が覚えていたつて、いざという場合の役にや立たないじゃないか」

「役にや立つまいよ。しかし聴かないよりましじゃないか」

「聴かない方がましなくらいだ」

小林は嬉うれしそうに身体からだを椅子いすの背に靠もたせかけてまた笑い出した。

「そこだ。そう来るところがこっちの思う壺つぼなんだ」

「何をいうんだ」

「何も云やしない、ただ事実を云うのさ。しかし説明だけはしてやろう。今に君がそこへ追いつめられて、どうする事もできなくなつた時に、僕の言葉を思い出すんだ。思い出すけれども、ちつとも言葉通りに実行はできないんだ。これならなまじいあんな事を聴いておかない方がよかつたという気になるんだ」

津田は厭^{いや}な顔をした。

「馬鹿、そうすりやどこがどうするんだ」

「どうもしないさ。つまり君の軽^{けい}蔑^{べつ}に対する僕の復^{ふく}讐^{しゅう}がその時始めて実現されるというだけさ」

津田は言葉を改めた。

「それほど君は僕に敵意をもってるのか」

「どうして、どうして、敵意どころか、好意精一杯というところだ。けれども君の僕を軽蔑しているのはいつまで行っても事実だろう。僕がその裏を指摘して、こっちから見るとその君にもまた軽蔑すべき点があると注意しても、君は乙おつに高くとまって平気でいるじゃないか。つまり口じや駄目だ、実戦で来いという事になるんだから、僕の方でもやむをえずそこまで行つて勝負を決しようというだけの話だあね」

「そうか、解つた。——もうそれぎりかい、君のいう事は」

「いやどうして。これからいよいよ本論に入ろうというんだ」

津田は一氣に洋盃コップくちびるを唇へあてがつて、ぐつと麦酒ビールを飲み干した

小林の様子を、少し呆れながら眺めた。

百五十九

小林は言葉を継ぐ前に、洋盃を下へ置いて、まず室内を見渡した。女おんなづれ伴の客のうち、一組の相手は洗フインガー指ボール盆の中へ入れた果物を食った後の手を、袂たもとから出した美しい手帛ハンケチで拭いていた。彼の筋向うに席を取って、先刻さつきから時々自分達の方を偷ぬすむようにして見る二十五六の方は、咖コーヒー茶碗ぢゃわんを手にながら、男の吹かす煙草たばこの煙を眺めて、しきりに芝居の話をしていた。両方とも彼らより先に来ただけあって、彼らより先に席を立つ順序

に、食事の方の都合も進行しているらしく見えた時、小林は云つた。

「やあちようど好い。まだいる」

津田はまたはつと思つた。小林はきつと彼らの氣を悪くするよ
うな事を、彼らに聴こえようがしに云うに違なかつた。

「おいもう好い加減に止せよ^よ」

「まだ何にも云やしないじゃないか」

「だから注意するんだ。僕の攻撃はいくらでも我慢するが、縁も
ゆかりもない人の悪口などは、ちつと慎^{つつ}しんでくれ、こんな所へ
来て」

「厭^{いや}に小心だな。おおかた場末の酒場^{バー}とここといっしよにされち

やたまらないという意味なんだろう」

「まあそうだ」

「まあそうだなら、僕のごとき無頼漢ぶらいかんをこんな所へ招待するの
が間違だ」

「じゃ勝手にしろ」

「口で勝手にしろと云いながら、内心ひやひやしているんだろう」
津田は黙ってしまった。小林は面白そうに笑った。

「勝ったぞ、勝ったぞ。どうだ降参したろう」

「それで勝ったつもりなら、勝手に勝ったつもりでいるがいい」

「その代り今後ますます貴様を軽蔑けいべつしてやるからそう思えだろ
う。僕は君の軽蔑へなんか屁とも思っちゃいないよ」

「思わなけりや思わないでもいいさ。五月蠅い男だな」

小林はむつとした津田の顔を覗き込むようにして見つめながら云った。

「どうだ解ったか、おい。これが実戦というものだぜ。いくら余裕があつたつて、金持に交際があつたつて、いくら氣位を高く構えたつて、実戦において敗北すりやそれまでだろう。だから僕が先刻から云うんだ、^{さつき}実地を踏んで鍛え^{きた}上げない人間は、^{おん}木偶の坊と同じ事だつて」

「そうだそうだ。世の中で擦れ^すつ枯^からしと酔払いに敵^{かな}うものは一人もないんだ」

何か云うはずの小林は、この時返事をする代りにまた女^{おんなづれ}伴

の方を「いちじゅん順見廻した後で、云った。

「じやいよいよ第三だ。あの女の立たないうちに話してしまわないと気がすまない。好いかね、君、先刻の続きだぜ」

津田は黙つて横を向いた。小林はいつこう構わなかった。

「第三にはだね。すなわち換言すると、本論に入つて云えばだね。僕は先刻あすこにいる女達を捕つかまえて、ありや芸者かつて君に聴いて叱しかられたね。君は貴婦人に対する礼義を心得ない野人として僕を叱つたんだろう。よろしい僕は野人だ。野人だから芸者と貴婦人との区別が解らないんだ。それで僕は君に訊きいたね、いったい芸者と貴婦人とはどこがどう違うんだって」

小林はこう云いながら、三度目の視線をまた女伴の方に向けた。

ハンケチ
手帛で手を拭いていた人は、それを合図のように立ち上った。

残る一人^{いちにん}も給仕を呼んで勘定を払った。

「とうとう立っちまった。もう少し待ってると面白いところへ来るんだがな、惜しい事に」

小林は出て行く女伴の後^{うしろかげ}影を見送った。

「おやおやもう一人も立つのか。じゃ仕方がない、相手はやつぱり君だけだ」

彼は再び津田の方へ向き直った。

「問題はそこだよ、君。僕が仏蘭西料理^{フランス}と英吉利料理^{イギリス}を食い分ける事ができずに、糞^{くそ}と味噌^{みそ}をいっしょにして自慢すると、君は相手にしない。たかが口腹^{こうふく}の問題だという顔をして高を括^{くく}つてい

る。しかし内容は一つものだけ、君。この味覚が発達しないのも、芸者と貴婦人を混同するのも」

津田はそれがどうしたと云わぬばかりの眼を翻ひるがえして小林を見た。

「だから結論も一つ所へ帰着しなければならぬというのさ。僕は味覚の上において、君に軽蔑けいべつされながら、君より幸福だと主張するごとく、婦人を識別する上においても、君に軽蔑されながら、君より自由な境遇に立っていると断言して憚はばからないのだ。つまり、あれは芸者だ、これは貴婦人だなんて鑑識があればあるほど、その男の苦痛は増して来るというんだ。なぜと云つて見たまえ。しまいには、あれも厭いや、これも厭だろう。あるいはこれで

なくっちゃいけない、あれでなくっちゃいけないだろう。窮屈千萬じゃないか」

「しかしその窮屈千万が好きなら仕方なからう」

「来たな、とうとう。食物だくいものと相手にしないが、女の事になると、やっぱり黙っていられなくなると見えるね。そこだよ、そこを實際問題について、これから僕が論じようというんだ」

「もうたくさんだ」

「いやたくさんじゃないらしいぜ」

二人は顔を見合わせて苦笑した。

小林は旨く津田を釣り寄せた。それと知った津田は考えがあるので、小林にわざと釣り寄せられた。二人はとうとう際きわどい所へ入り込まなければならなくなつた。

「例たとえばだね」と彼が云い出した。「君はあの清子きよこさんという女に熱中していたろう。ひとしきりは、何なんでもかでもあの女でなければならぬような事を云つてたろう。そればかりじゃない、向うでも天下に君一人よりほかに男はないと思つてるように解釈していたろう。ところがどうだい結果は」

「結果は今のごとくさ」

「大變淡泊さっぱりしているじゃないか」

「だってほかにしようがなからう」

「いや、あるんだらう。あつても乙おつに氣取きどつて澄ましているんだ

らう。でなければ僕に隠して今でも何かやつてゐるんだらう」

「馬鹿いうな。そんな出鱈目でたらめをむやみに口走るととんだ間違にな

る。少し氣をつけてくれ」

「実は」と云いかけた小林は、その後あとを知つてゐるかと思はぬばか

りの様子をした。津田はすぐ訊きたくなつた。

「実はどうしたんだ」

「実はこの間君あいだの細君にすっかり話しちまつたんだ」

津田の表情がたちまち變つた。

「何を？」

小林は相手の調子と顔つきを、噛^かんで味わいでもするように、しばらく間^まをおいて黙っていた。しかし返事を表へ出した時は、もう態度を一変していた。

「嘘^{うそ}だよ。実は嘘だよ。そう心配する事はないよ」

「心配はしない。今になってそのくらいの事を云^いつけられたって」

「心配しない？　そうか、じゃこつちも本当だ。実は本当だよ。」

みんな話しちまったんだよ」

「馬鹿ッ」

津田の声は案外大きかった。行儀よく椅子^{いす}に腰をかけていた給仕の女が、ちよつと首を上げて眼をこつちへ向けたので、小林はすぐそれを材料にした。

「貴婦人^{レデー}が驚ろくから少し静かにしてくれ。君のような無頼漢^{ぶらいかん}といつしよに酒を飲むと、どうも外聞が悪くていけない」

彼は給^{きゆうじ}使の女の方を見て微笑して見せた。女も微笑した。津田^{おこ}一人怒る訳に行かなかった。小林はまたすぐその機に付け込んだ。

「いったいあの顛^{てんまつ}末はどうしたのかね。僕は詳しい事を聴^きかなかったし、君も話さなかった、のじやない、僕が忘れちまったのか。そりやどうでも構わないが、ありや向うで逃げたのかね、あるいは君の方で逃げたのかね」

「それこそどうでも構わないじやないか」

「うん僕としては構わないのが当然だ。また実際構っちゃいない。

が、君としてはそうは行くまい。君は大構おおかまいだろう」

「そりや当り前さ」

「だから先刻さつぎから僕が云うんだ。君には余裕があり過ぎる。その余裕が君をしてあまりに贅ぜいたく沢たくならしめ過ぎる。その結果はどうかというと、好きなものを手に入れるや否や、すぐその次のものが欲しくなる。好きなものに逃げられた時は、地団太じだんだを踏んで口くち惜やしがる」

「いつそんな様さまを僕がした」

「したともさ。それから現にしつつあるともさ。それが君の余裕ゆえんに崇たられている所以ゆえんだね。僕の最も痛快に感ずるところだね。貧ひ賤せんが富貴ふうきに向つて復讐ふくしゅうをやつてる因果応報いんがおうほうの理だね」

「そう頭から自分の拵こしらえた型かたで、他ひとを評価する気ならそれまでだ。僕には弁解の必要がないだけだから」

「ちつとも自分で型なんか拵こしらえていやしないよ僕は。これでも實際の君を指摘しているつもりなんだから。分らなけりや、事実で教えてやろうか」

教えるとも教えるなとも云わなかつた津田は、ついに教えられなければならなかつた。

「君は自分の好みでお延のぶさんを貰もらつたろう。だけれども今の君はけっしてお延さんに満足しているんじゃないやなろう」

「だって世の中に完全なものない以上、それもやむをえないじゃないか」

「という理由をつけて、もつと上等なのを探し廻る気だろう」

「人間の悪い事を云うな、失敬な。君は実際自分でいう通りの無頼漢だね。観察の下卑げびて皮肉なところから云つても、言動の無

遠慮で、粗野そやなところから云つても」

「そうしてそれが君の輕蔑けいべつに値あたする所以ゆえんなんだ」

「もちろんさ」

「そらね。そう来るから畢ひつきよう竟口先じや駄目だめなんだ。やッぱり

実戦でなくつちや君は悟れないよ。僕が予言するから見ていろ。

今に戦いが始まるから。その時ようやく僕の敵でないという意味が分るから」

「構わない、擦すれっ枯からしに負けるのは僕の名誉だから」

「強情だな。僕と戦うんじゃないぜ」

「じゃ誰と戦うんだ」

「君は今すでに腹の中で戦いつつあるんだ。それがもう少しすると実際の行為になって外へ出るだけなんだ。余裕が君を煽動^{せんどう}して無役^{むえき}の負^{まけいくさ}戦をさせるんだ」

津田はいきなり懷中から紙入を取り出して、お延と相談の上、
餞^{せんべつ}別の用意に持って来た金を小林の前へ突きつけた。

「今渡しておくから受取^{うけと}っておけ。君と話していると、だんだんこの約束を履行するのが厭^{いや}になるだけだから」

小林は新らしい十円紙幣^{さつ}の二つに折れたのを広げて丁寧^{ていねい}に、枚数を勘定した。

「三枚あるね」

百六十一

小林は受け取ったものを、^{あかはだか}赤裸のまま無^む雑^{ぞう}作^さに背^せ広^{びろ}の隠^い袋^{かた}の中へ投げ込んだ。彼の所作^{しよさ}が平淡であつたごとく、彼の礼の云^い方^{かた}も横着であつた。

「サックス。僕は借りる気だが、君はくれるつもりだろうね。いかなとなれば、僕に返す手段のない事を、また返す意志のない事を、君は最初から軽蔑の眼をもつて、認めているんだから」

津田は答えた。

「無論やったんだ。しかし貰^{もら}つてみたら、いかな君でも自分の矛盾に気がつかずにはいられまい」

「いやいっこう気がつかない。矛盾とはいったい何だ。君から金を貰うのが矛盾なのか」

「そうでもないがね」と云つた津田は上から下を見^み下^{おろ}すような態度をとつた。「まあ考えて見たまえ。その金はいふ今まで僕の紙入の中にあつたんだぜ。そうして転^{てん}瞬^{しゆん}の間に君の隠袋の裏に移転してしまつたんだぜ。そんな小説的の言葉を使うのが厭なら、もつと判^は然^{つきり}云おうか。その金の所有権を急に僕から君に移したものは誰だ。答えて見ろ」

「君さ。君が僕にくれたのさ」

「いや僕じゃないよ」

「何を云うんだな禪坊主の寝言ねごと見たいな事を。じゃ誰だい」

「誰でもない、余裕さ。君の先刻さつきから攻撃している余裕がくれたんだ。だから黙ってそれを受け取った君は、口でむちやくちやに余裕をぶちのめしながら、その実余裕の前にもう頭を下げているんだ。矛盾じゃないか」

小林は眼をぱちぱちさせた後あとでこう云った。

「なるほどな、そう云えばそんなものか知ら。しかし何だかおかしいよ。實際僕はちつともその余裕なるものの前に、頭を下げる気がしないんだもの」

「じゃ返してくれ」

津田は小林の鼻の先へ手を出した。小林は女のように柔らかそうなの掌てのひらを見た。

「いや返さない。余裕は僕に返せと云わないんだ」

津田は笑いながら手を引き込めた。

「それみろ」

「何がそれみろだ。余裕は僕に返せと云わないという意味が君にはよく解らないと見えるね。気の毒なる貴公子きこうしよだ」

小林はこう云いながら、横を向いて戸口の方を見つつ、また一句を付け加えた。

「もう来そうなものだな」

彼の様子をよく見守った津田は、少し驚ろかされた。

「誰が来るんだ」

「誰でもない、僕よりもまだ余裕の乏しい人が来るんだ」

小林は裸のまま紙幣をしまい込んだ自分の隠袋ポケットを、わざとらしく軽く叩たたいた。

「君から僕にこれを伝えた余裕は、再びこれを君に返せとは云わないよ。僕よりもつと余裕の足りない方へ順じゅん送おくりに送れと命令するんだよ。余裕は水のようなものさ。高い方から低い方へは流れるが、下から上へは逆ぎやつこう行いしないよ」

津田はほぼ小林の言葉を、意解いかいする事ができた。しかし事解じかいする事はできなかつた。したがって半醒はんせい半酔はんすいのような落ちつきのない状態おちいに陥おちいつた。そこへ小林の次の挨拶あいさつがどきどきと侵入

して来た。

「僕は余裕の前に頭を下げるよ、僕の矛盾を承認するよ、君の詭弁^{べんしゅこう}を首肯するよ。何でも構わないよ。礼を云うよ、感謝するよ」

彼は突然ぼたぼたと涙を落し始めた。この急劇な変化が、少し驚ろいている津田を一層不安にした。せんだつての晩手^{てこず}古摺^{こず}らされた酒場^{バー}の光景を思い出さざるを得なくなつた彼は、眉^{まゆ}をひそめると共に、相手を利用するのは今だという事に気がついた。

「僕が何で感謝なんぞ予期するものかね、君に対して。君こそ昔を忘れていんだよ。僕の方が昔のままですいている事を、君はみんな逆^{さか}に解釈するから、交際がますます面倒になるんじゃないか。例えばだね、君がこの間僕の留守^{がいつう}へ外套を取りに行つて、その

ついでに何か妻に云つたという事も——」

津田はこれだけ云つて暗に相手の様子を窺つた。しかし小林が下を向いているので、彼はまるでその心持の転化作用を忖度する事ができなかった。

「何も好んで友達の夫婦仲を割くような悪戯をしなくつてもいい訳じゃないか」

「僕は君に関して何も云つた覚えはないよ」

「しかし先刻……」

「先刻は笑談さ。君が冷嘲すから僕も冷嘲したんだ」

「どっちが冷嘲し出したんだか知らないが、そりやどうでもいいよ。ただ本当のところを僕に云つてくれたって好きそうなものだ

がね」

「だから云つてるよ。何にも君に關して云つた覚はないと何遍も繰り返して云つてるよ。細君を訊^き糺^{ただ}して見れば解る事じやないか」

「お延は……」

「何と云つたい」

「何とも云わないから困るんだ。云わないで腹^{うち}の中で思つていられちや、弁解もできず説明もできず、困るのは僕だけだからね」
「僕は何にも云わないよ。ただ君がこれから夫らしくするかしないかが問題なんだ」

「僕は——」

津田がこう云いかけた時、近寄る足音と共に新らしく入つて来た人が、彼らの食卓の傍そばに立つた。

百六十二

それが先刻大通りの角で、小林と立たち談ばなしをしていた長髪の青年であるという事に氣のついた時、津田はさらに驚ろかされた。けれどもその驚ろきのうちには、暗あんにこの男を待ち受けていた期待も交まじっていた。明らさまな津田の感じを云えば、こんな人がこへ来るはずはないという断案と、もしこへ誰か来るとすれば、この人よりほかにあるまいという予想の矛盾であつた。

実を云うと、自働車の燭光あかりで照らされた時、彼の眸ひとみの裏うちに映つたこの人の影像イメジは津田にとって奇異なものであつた。自分から小林、小林からこの青年、と順々に眼を移して行くうちには、階級なり、思想なり、職業なり、服装なり、種々な点においてずいぶんな距離があつた。勢い津田は彼を遠くに眺めなければならなかつた。しかし遠くに眺めれば眺めるほど、強く彼を記憶しなければならなかつた。

「小林はああいいう人と交際つきあつてゐるのかな」

こう思つた津田は、その時そういう人と交際あつてゐない自分の立場を見廻して、まあ仕合せだと考えた後あとなので、新来者に対する彼の態度おのも自ずから明白であつた。彼は突然胡散臭うさんくさい人間に

挨拶^{あいさつ}をされたような顔をした。

上^そへ反つ繰り返つた細い顰^{つば}の、ぐにやぐにやした帽子を脱^とつて手に持ったまま、小林の隣りへ腰をおろした青年の眼には異様の光りがあつた。彼は津田に対して現に不安を感じているらしかった。それは一種の反感と、恐怖と、人馴^{ひとな}れない野育ちの自尊心とが錯^{さく}雑^{ざつ}して起す神経的な光りに見えた。津田はますます厭^{いや}な気持ちになつた。小林は青年に向つて云つた。

「おいマントでも取れ」

青年は黙つて再び立ち上つた。そうして釣鐘^{かづね}のような長い合羽^ぽをすぽりと脱いで、それを椅子^{いす}の背に投げかけた。

「これは僕の友達だよ」

小林は始めて青年を津田に紹^{ひきあ}介^わせた。原という姓と芸術家という名称がようやく津田の耳に入った。

「どうした。旨^{うま}く行つたかね」

これが小林の次にかけて質問であつた。しかしこの質問は充分な返事を得る暇がなかつた。小林は後からすぐこう云つてしまつた。

「駄^だ目^めだろう。駄目にきまつてるさ、あんな奴^{やつ}。あんな奴に君の芸術が分つてたまるものか。いいからまあゆつくりして何か食いたまえ」

小林はたちまちナイフを倒^{さか}さまにして、やけに食^{テーブル}卓^たを叩^{たた}いた。
「おいこの人の食うものを持って来い」

やがて原の前にあつた洋盃コップの中に麦酒ビールがなみなみと注つがれた。

この様子を黙つて眺めていた津田は、自分の持つて来た用事の
もう済んだ事にようやく気がついた。こんなお付つき合あいを長くさせ
られては大変だと思つた彼は、機を見て好い加減に席を切り上げ
ようとした。すると小林が突然彼の方を向いた。

「原君は好い絵を描くよ、君。一枚買つてやりたまえ。今困つて
るんだから、気の毒だ」

「そうか」

「どうだ、この次の日曜ぐらいに、君の家うちへ持つて行つて見せる
事にしたら」

津田は驚ろいた。

「僕に絵なんか解らないよ」

「いや、そんなはずはない、ねえ原。何しろ持つて行つて見せてみたまえ」

「ええ御迷惑でなければ」

津田の迷惑は無論であつた。

「僕は絵だの彫刻だのの趣味のまるでない人間なんですから、どうぞ」

青年は傷け^{きずつ}られたような顔をした。小林はすぐ応援に出た。

「嘘^{うそ}を云うな。君ぐらい鑑賞力の豊富な男は實際世間に少ないんだ」

津田は苦笑せざるを得なかつた。

「また下らない事を云つて、——馬鹿にするな」

「事実を云うんだ、馬鹿にするものか。君のように女を鑑賞する能力の発達したものが、芸術を粗末にする訳がないんだ。ねえ原、女が好き以上、芸術も好きにきまつてるね。いくら隠したって駄目だよ」

津田はだんだん辛^{しん}防^{ぼう}し切れなくなつて来た。

「だいぶ話が長くなりそうだから、僕は^{ひと}一^{あし}足先へ失敬しよう、——おい姉さん会計だ」

給仕が立ちそうにするところを、小林は大きな声を出して止^とめながら、また津田の方へ向き直つた。

「ちようど今一枚素敵^{すてき}に好^かいのが描^かいてあるんだ。それを買おう

という望^{のぞ}手^{みて}の所へ価値^{ねだん}の相談に行つた歸りがけに、原君はここへ寄つたんだから、旨^{うま}い機会じやないか。是非買いたまえ。芸術家の足元へ付け込んで、むやみに価値^{ねぎ}切り倒すなんて失敬な奴へは売らないが好いというのが僕の意見なんだ。その代りきつと買手を周旋してやるから、歸りにここへ寄るがいいと、先刻^{さつぎ}あすこの角で約束しておいたんだ、実を云うと。だから一つ買つてやるさ、訳^{ひと}やないやね」

「他に絵も何にも見せないうちから、勝手にそんな約束をしたつてしようがないじやないか」

「絵は見せるよ。——君今日持つて歸らなかつたのか」

「もう少し待つてくれっていうから置いて来た」

「馬鹿だな、君は。しまいに口ハで捲まき上げられてしまうだけだぜ」

津田はこの問答を聴いてほつと一息吐ついた。

百六十三

二人は津田を差し置いて、しきりに絵画の話をした。時々耳にする三角派さんかくはとか未来派みらいはとかいう奇怪な名称のほか、彼は今までかつて聴きいた事のないような片仮名をいくつとなく聴かされた。その何処いずこにも興味を見出みいだし得なかつた彼は、会談の圈外けんがいへ放はな逐うちくされるまでもなく、自分から埒らちを脱ぬけ出したと同じ事であつ

た。これだけでも一通り以上の退屈である上に、津田を厭^{いや}がらせる積極的なものがまだ一つあった。彼は自分の眼前に見るこの二人、ことに小林を、むやみに新らしい芸術をふり廻したがる半^{はんか}可^{おつ}通^{つう}として、最初から取扱っていた。彼はこの偏^{プレジユス}見^ミの上へ、乙^{おつ}に識者ぶる彼らの態度を追加して眺めた。この点において無知な津田を羨^{うら}やましがるのが、ほとんど二人の目的でもあるように見え出した時、彼は無理にいったん落ちつけた腰をまた浮かしにかかった。すると小林がまた抑留した。

「もう直^{じき}だ、いっしょに行くよ、少し待^{まち}つてろ」

「いやあんまり遅^{おそ}くなるから……」

「何もそんなに他^{ひと}に恥^はを搔^かせなくつてもよからう。それとも原

君が食つちまうまで待つてると、紳士の体面に関わるとでも云うのか」

原は刻んだサラダをハムの上へ載せて、それを肉フオーク叉で突き差した手を止めた。や

「どうぞお構いなく」

津田が軽く会えしやく釈を返して、いよいよ立ち上がろうとした時、

小林はほとんど独りごとのように云った。

「いったいこの席を何と思つてゐるんだろう。送別会と号して他を呼んでおきながら、肝かんじん心のお客さんを残して、先へ歸つちまうなんて、侮辱を与える奴やつが世の中にゐるんだから厭いやになるな」

「そんなつもりじゃないよ」

「つもりでなければ、もう少^{すこ}いろよ」

「少し用があるんだ」

「こつちにも少し用があるんだ」

「絵なら御免だ」

「絵も無理に買えとは云わないよ。吝^{けち}な事を云うな」

「じゃ早くその用を片づけてくれ」

「立つてちや駄目だ。紳士らしく坐^{すわ}らなくつちや」

仕方なしにまた腰をおろした津田は、袂^{たもと}から煙草を出して火を

点^つけた。ふと見ると、灰皿は敷島の残骸^{ざんがい}でもういっぱいになつて

いた。今夜の記念としてこれほど適当なものはないという気が、

偶然津田の頭に浮^のかんだ。これから吞^のもうとする一本も、三分経^た

つか経たないうちに、灰と煙と吸口だけに變形して、役にも立たない冷たさを皿の上にとどめるに過ぎないと思うと、彼は何となく厭な心持がした。

「何だい、その用事というのは。まさか無心じやあるまいね、もう」

「だから吝な事を云うなと、先刻さつきから云つてゐるじやないか」

小林は右の手で背広せびろの右前を掴つかんで、左の手を隠袋ポケットの中へ入れ

た。彼は暗闇くらやみで物を探さぐるように、しばらく入れた手を、背広の

裏側で動かしながら、その間始終しじゅう眼を津田の顔へぴったり付け

ていた。すると急に突飛しんな光景が、津田の頭の中に描き出された。

同時に変な妄想もうぞうが、今呑んでいる煙草の煙のように、淡く彼の

心を掠^{かす}めて過ぎた。

「此奴^{こいつ}は懷^{ふところ}から短銃^{ピストル}を出すんじゃないだろうか。そうしてそれ

をおれの鼻の先へ突きつけるつもりじゃないかしら」

芝居^{まっしょう}じみた一刹那^{いつせつな}が彼の予感^{かす}を微^{かす}かに揺^ゆぶった時、彼の神経

の末梢^{まっしょう}は、眼に見えない風^{なぶ}に弄^{なぶ}られる細い小枝^{せんと}のように顫^{せん}

動^うした。それと共に、妄^{みだ}りに自分で拵^{こしら}えたこの一場^{いちじょう}の架空

劇^{くわく}をよそ目に見て、その荒誕^{こうたん}を冷笑^{せせらわら}う理智の力が、もう彼の中

心に働^{はたら}らいていた。

「何を探^{たづ}ねているんだ」

「いやいろいろなものがいつしよに入^いつてゐるからな、手の先でよ

く探^{たづ}ねあてた上でないと、滅多^{めった}に君の前へは出^でされないんだ」

「間違えて先刻放り込んだ札でも出すと、厄介だろう」

「なに札は大丈夫だ。ほかの紙片と違って活きてるから。こ
 やって、手で障って見るとすぐ分るよ。隠袋の中で、ぴちぴち跳
 ねてる」

小林は減らず口を利きながら、わざと空しい手を出した。

「おやないぞ。変だな」

彼は左胸部にある表隠袋へ再び右の手を突き込んだ。しかし
 そこから彼の撮み出したものは皺だらけになつた薄汚ない手帛
 だけであつた。

「何だ手品でも使う気なのか、その手帛で」

小林は津田の言葉を耳にもかけなかった。真面目な顔をして、

立ち上りながら、両手で腰の左右を同時に叩いた後で、いきなり云った。

「うんここにあつた」

彼の洋袴ズボンの隠袋から引き摺り出したものは、一通の手紙であつた。

「実は此奴こいつを君に読ませたいんだ。それももう当分君に会う機会がないから、今夜に限るんだ。僕と原君と話している間に、ちょっと読んでくれ。何訳わけやないやね、少し長いけれども」

封書を受取った津田の手は、ほとんど器械的に動いた。

百六十四

ペンで原稿紙へ書きなぐるように認め^{したた}られたその手紙は、長さから云つても、無論普通の倍以上あつた。のみならず宛名^{あてな}は小林に違なかつたけれども、差出人は津田の見た事も聴^きいた事もない全く未知の人であつた。津田は封筒の裏表を読んだ後で、それはたして自分に何の關係があるのだらうと思つた。けれども冷やかな無關心の傍^{かたわら}に起つた一種の好奇心は、すぐ彼の手を誘つた。封筒から引き抜いた十行二十字詰の罫紙^{けいし}の上へ眼を落した彼は一氣に読み下した。

「僕はここへ来た事をもう後悔しなければならなくなつたのです。あなたは定めて飽^{あき}つぽいと思うでしょう、しかしこれはあなたと

僕の性質の差違から出るのだから仕方がないのです。またかと云わずに、まあ僕の訴えを聞いて下さい。女ばかりで夜がよる不用心だから銀行の整理のつくまで泊りに来て留守番をしてくれ、小説が書きたければ自由に書くがいい、図書館へ行くなら弁当を持って行くがいい、午後は画を習いに行くがいい。今に銀行を東京へ持つて来ると外国語学校へ入れてやる、家の始末は心配するな、転居の金は出してやる。——僕はこんなありがたい条件に誘惑されたのです。もつとも一から十まで当にあてにした訳でもないんですが、その何割かは本当に違いないと思ひ込んだのです。ところが来て見ると、本当は一つもないんです、頭から尻しりまで嘘の皮なんです。叔父は東京にいる方が多いばかりか、僕は書生代りに朝から晩ま

で使い歩きをさせられるだけなのです。叔父は僕の事を「宅の書生」といいます、しかも客の前です、僕のいる前です。こんな訳で酒一合の使から縁側の拭き掃除までみんな僕の役になってしまうのです。金はまだ一銭も貰ったことがありません。僕の穿はいていた一円の下駄が割れたら十二銭のやつを買って穿かせました。叔父は明日金をやると云つて、僕の家族を姉の所へ転居させたのですが、越してしまつたら、金の事は噫おくびにも出さないのです、僕は帰る宅さえなくなりました。

叔父の仕事はまるで山です。金なんか少しもないのです。そうして彼ら夫婦は極めて冷やかな極めて吝りんしよく 嗇さくな人達です。だから来た当座僕は空腹に堪えかねて、三日に一遍ぐらい姉の家へ帰

つて飯を食わして貰いました。兵糧ひょうろうが尽きて焼芋やきいもや馬鈴じゃがい薯もで間に合せていたこともあります。もつともこれは僕だけです。叔母は極めて感じの悪い女です。万事が打算的で、体裁ていさいばかりで、いやにこせこせ突ツ付き廻したがるんで、僕はちくちく刺されどうしに刺されているんです。叔父は金のないくせに酒だけは飲みます。そうして田舎いなかへ行けば殿様などと云つて威張るんです。しかし裏側へ入ってみると驚ろく事ばかりです。訴訟事件さえたくさん起っているくらいです。出発のたびに汽車賃がなくつて、質屋へ駄けついたり、姉の家へ行つて、苦しいところを算段して来てやつたりしていますが、叔父の方じゃ、僕の食費と差引にする気か何かで澄ましているのです。

叔母は最初から僕が原稿を書いて食扶持くいぶちでも入れるものでも思つてるんでしょう、僕がペンを持つていると、そんなにして書いたものはいったいどうなるの、なんてあてこす当擦りを云います。新聞の職業案内欄に出ている「事務員募集」の広告を突きつけて謎なぞをかけたりします。

こういう事が繰り返されて見ると、僕は何しにここへ来たんだか、まるで訳が解らなくなるだけです。僕は変に考えさせられるのです。全く形をなさないこの家の奇怪な生活と、変幻窮きわまりなきこの妙な家庭の内情が、朝から晩まで恐ろしい夢でも見ているような気分になつて、僕の頭に祟たたつてくるんです。それを他ひとに話したつて、とうてい通じっこないと思うと、世界のうちで自分だけ

が魔に取り巻かれているとしか考えられないので、なお心細くなるのです、そうして時々は気が狂いそうになるのです。というよりももう気が狂っているのではないかしらと疑がい出すと、たま^{こわ}らなく恐くなつて来るのです。土の牢の中で苦しんでいる僕には、日光がないばかりか、もう手も足もないような気がします。何となれば、手を挙げて足も足を動かしても、四方は真黒だからです。いくら訴えても、厚い冷たい壁が僕の声を遮ぎ^{さへ}つて世の中へ聴えさせないようにするからです。今の僕は天下にたった一人です。友達はないのです。あつても無いと同じ事なのです。幽霊のような僕の心境に触れてくれる事のできる頭脳をもったものは、有るべきはずがないからです。僕は苦しさの余りにこの手紙を書きま

した。救を求めるために書いたものではありません。僕はあなたの境遇を知っています。物質上の補助、そんなものをあなたの方角から受け取る気は毛頭ないのです。ただこの苦痛の幾分が、あなたの脈管みやくかんの中に流れている人情の血潮に伝わって、そこに同情の波を少しでも立ててくれる事ができるなら、僕はそれで満足です。僕はそれによつて、僕がまだ人間の一員として社会に存在しているという確証を握る事ができるからです。この悪魔の重囲の中から、広々した人間の中へ届く光線は一縷いちるもないのでしょうか。僕は今それさえ疑っているのです。そうして僕はあなたから返事が来るか来ないかで、その疑いを決したいのです」

手紙はここで終っていた。

百六十五

その時先刻火を点けて吸い始めた巻煙草の灰が、いつの間にか一寸近くの長さになって、ぽたりと罨紙の上に落ちた。津田は豎横に走る藍色の柶の上に崩れ散ったこの粉末に視覚を刺撃されて、ふと気がついて見ると、彼は煙草を持った手をそれまで動かさずにいた。というより彼の口と手がいつか煙草の存在を忘れていた。その上手紙を読み終ったのと煙草の灰を落したのとは同時でないのだから、二つの間にはさまるぼんやりしたただの間を認めなければならなかった。

その空虚な時間ははたして何のために起つたのだろう。元來をいうと、この手紙ほど津田に縁の遠いものはなかった。第一に彼はそれを書いた人を知らなかった。第二にそれを書いた人と小林との関係がどうなっているのか皆かいもく目解らなかった。中に述べ立てである事柄に至ると、まるで別世界の出来事としか受け取れないくらい、彼の位置及び境遇とはかけ離れたものであつた。

しかし彼の感想はそこで尽きる訳に行かなかった。彼はどこかでおやと思つた。今まで前の方ばかり眺めて、ここに世の中があるのだときめてかかった彼は、急に後をうしろふり返らせられた。そうして自分と反対な存在を注視すべく立ちどまつた。するとあああ、あれも人間だという心持が、今日までまだ会つた事もない幽霊

のようなものを見つめているうちに起った。極めて縁の遠いものはかえつて縁の近いものだったという事実が彼の眼前に現われた。彼はそこでとまった。そうして、ていかい徊した。けれどもそれより先へは一步も進まなかった。彼は彼相応の意味で、この気味の悪い手紙を了解したというまでであつた。

彼が原稿紙から煙草の灰を払い落した時、原を相手に何か話しかけていた小林はすぐ彼の方を向いた。用談を切り上げるためらしい言葉がただ一句彼の耳に響いた。

「なに大丈夫だ。そのうちどうにかなるよ、心配しないでもいいや」

津田は黙つて手紙を小林の方へ出した。小林はそれを受け取る

前に訊いた。

「読んだか」

「うん」

「どうだ」

津田は何とも答えなかった。しかし一応相手の主意を確かめて見る必要を感じた。

「いったい何のためにそれを僕に読ませたんだ」

小林は反問した。

「いったい何のために読ませたと思う」

「僕の知らない人じゃないか、それを書いた人は」

「無論知らない人さ」

「知らなくともいいとして、僕に何か関係があるのか」

「この男がか、この手紙がか」

「どっちでも構わないが」

「君はどう思う」

津田はまた躊躇ちゆうちよした。実を云うと、それは手紙の意味が彼

に通じた証拠であつた。もつと明瞭めいりやうにいうと、自分は自分な

りにその手紙を解釈する事ができたという自覚が彼の返事を鈍にぶらせたのと同様であつた。彼はしばらくして云つた。

「君のいう意味なら、僕には全く無関係だろう」

「僕のいう意味とは何だ？」

「解らないか」

「解らない。云つて見ろ」

「いや、——まあ止よそう」

津田は先刻さつきの絵と同じ意味で、小林がこの手紙を自分の前に突きつけるのではなからうかと疑った。何でもかでも彼を物質上の犠牲者にし終おせた上で、後あとからざまを見ろ、とうとう降参したじやないかという態度に出られるのは、彼にとって忍ぶべからざる侮辱であつた。いくら貧乏の幽霊で威嚇おどかしたつてその手に乗るものかという彼の感慨が、自然小林の上に働らきかけた。

「それより君の方でその主意を男らしく僕に説明したらいいじやないか」

「男らしく？ ふん」と云つていったん言葉を句切つた小林は、

後から付け足した。

「じゃ説明してやろう。この人もこの手紙も、乃至^{ないし}この手紙の意味も、すべて君には無関係だ。ただし世間的に云えばだぜ、いいかね。世間的という意味をまた誤解するといけないから、ついでにそれも説明しておこう。君はこの手紙の内容に対して、俗社会にいわゆる義務というものを帯びていないのだ」

「当り前じゃないか」

「だから世間的には無関係だと僕の方でも云うんだ。しかし君の道徳観をもう少し大きくして眺めたらどうだい」

「いくら大きくしたって、金をやらなければならぬという義務なんか感じやしないよ」

「そうだろう、君の事だから。しかし同情心はいくらか起るだろう」

「そりや起るにきまつてるじゃないか」

「それでたくさんんだ、僕の方は。同情心が起るといふのはつまり金がやりたいという意味なんだから。それでいて実際は金がないやらないんだから、そこに良心の闘いから来る不安が起るんだ。僕の目的はそれでもう充分達せられているんだ」

こう云った小林は、手紙をポケット隠袋へしまい込むと同時に、同じ場所から先刻の紙幣を三枚とも出して、それを食卓の上へ並べた。

「さあ取りたまえ。要るだけ取りたまえ」

彼はこう云つて原の方を見た。

百六十六

小林の所作は津田にとって全くの意外であつた。突然毒氣を抜かれたところに十分以上の皮肉を味わせられた彼の心は、相手に向つて躍つた。憎惡の電流とでも云わなければ形容のできないものが、とつきの間に彼の身体を通過した。

同時に聡明な彼の頭に一種の疑が閃めいた。

「此奴ら二人は共謀になつて先刻からおれを馬鹿にしているんじゃないかしら」

こう思うのと、大通りの角で立談をしていた二人の姿と、

ここへ来てからの小林の挙動と、途中から入って来た原の様子と、その後三人の間に起つた談話の遣取とが、どれが原因ともどれが結果とも分らないような迅速の度合で、津田の頭の中を仕懸花火のようにくるくると廻転した。彼は白い食卓布の上に、行儀よく順次に並べられた新らしい三枚の十円紙幣を見て、思わず腹の中で叫んだ。

「これがこの摺れツ枯らしの拵え上げた狂言の落所だったのか。馬鹿奴、そう貴様の思わく通りにさせてたまるものか」

彼は傷けられた自分のプライドに対しても、この不名誉な幕切れに一転化を与えた上で、二人と別れなければならぬと考えた。けれどもどうしたらこう最後まで押しつめられて来た不利な

局面を、今になって、旨くどさりと引繰り返す事ができるかの問題になると、あらかじめその辺の準備をしておかなかった彼は、全くの無能力者であつた。

外觀上の落ちつきを比較的平氣そうに保つていた彼の裏側には、役にも立たない機智の作用が、はげしく往来した。けれどもその混雜はただの混雜に終るだけで、何らの歸着点を彼に示してくれないので、むらむらとした後の彼の心は、いたずらにわくわくするだけであつた。そのわくわくがいつの間にか狼狽の姿に進化しつつある事さえ、残念ながら彼には意識された。

この危機一髪という間際に、彼はまた思いがけない現象に逢着した。それは小林の並べた十円紙幣が青年芸術家に及ぼした

影響であつた。紙幣の上に落された彼の眼から出る異様の光であつた。そこには驚ろきと喜びがあつた。一種の飢渴きかつがあつた。掴つかみかかろうとする慾望の力があつた。そうしてその驚ろきも喜びも、飢渴も慾望も、一々真しんその物の発現であつた。作りもの、拵こしらえ事、馴なれ合あいの狂言とは、どうしても受け取れなかつた。少くとも津田にはそうとしか思えなかつた。

その上津田のこの判断を確めるに足る事実が後あとから継ついで起つた。原はそれほど欲しそうな紙幣さつへ手を出さなかつた。と云つて断然小林の親切を斥しりぞける勇氣も示さなかつた。出したそうな手を遠慮して出さずにいる苦痛の色が、ありありと彼の顔つきで読まれた。もしこの蒼白あおしろい青年が、ついに紙幣さつの方へ手を出さない

とすると、小林の拵こしらえたせつかくの狂言も半分はぶち壊こわしになる訳であつた。もしまた小林がいったん隠袋ホケツトから出した紙幣を、当初の宣告通り、幾分でも原の手へ渡さずに、再びもとへ収めたなら、結果は一層の喜劇に変化する訳であつた。どっちにしても自分の体面を繕つくろうのには便宜べんぎな方向へ発展して行きそうなので、そこに一縷いちるの望を抱いだいた津田は、もう少し黙つて事の成行を見る事にきめた。

やがて二人の間に問答が起つた。

「なぜ取らないんだ、原君」

「でもあんまり御氣の毒ですから」

「僕は僕でまた君の方を氣の毒だと思つてゐるんだ」

「ええ、どうもありがとう」

「君の前に坐^{すわ}つてゐるその男は男でまた僕の方を気の毒だと思つてゐるんだ」

「はあ」

原はさつぱり通じないらしい顔をして津田を見た。小林はすぐ説明した。

「その紙幣は三枚共、僕が今その男から貰^{もら}つたんだ。貰い立てのほやほやなんだ」

「じゃなおどうも……」

「なおどうもじゃない。だからだ。だから僕も安々と君にやれるんだ。僕が安々と君にやれるんだから、君も安々と取れるんだ」

「そういう論理^{ロジック}になるかしら」

「当り前さ。もしこれが徹夜して書き上げた一枚三十五銭の原稿から生れて来た金なら、何ぼ僕だつて、少しは執着が出るだろうじゃないか。額からぼたぼた垂れる膏^{あぶらあせ}汗^{あせ}に対しても済まないよ。しかしこれは何でもないんだ。余裕が空間に吹き散らしてくれる浄^{じようぎ}財^{ざい}だ。拾ったものが功德^{くどく}を受ければ受けるほど余裕は喜^きこぶだけなんだ。ねえ津田君そうだろう」

忌^{いまいま}々しい関所をもう通り越していた津田は、かえつて好いところで相談をかけられたと同じ事であつた。鷹^{おうよう}揚^{よう}な彼の^{おうよう}一諾^{いちだく}は、今夜^{いさい}ここに落ち合つた不調和な三人の会合に、少くとも形式上^て体^て裁^{さい}の好い結末をつけるのに充分であつた。彼は醜^{しゆう}陋^{ろう}に見え

る自分の退却を避けるために眼前の機会を捕えた。

「そうだね。それが一番いいだろう」

小林は押問答の末、とうとう三枚のうち一枚を原の手に渡した。残る二枚を再びもとの隠袋ポケットへ収める時、彼は津田に云った。

「珍らしく余裕が下から上へ流れた。けれどもここから上へはもう逆戻りをしないそうだ。だからやつぱり君に対してサンクスだ」
表へ出た三人は濠端ほりばたへ来て、電車を待ち合せる間大きな星ほしづきよ月夜を仰いだ。

百六十七

間もなく三人は離れ離れになった。

「じゃ失敬、僕は停車場へ送って行かないよ」

「そうか、来たってよさそうなものだがね。君の旧友が朝鮮へ行くんだぜ」

「朝鮮でも台湾でも御免だ」

「情合じょうあいのない事夥おびただしいものだ。そんなら立つ前にもう一遍こつちから暇いとま乞こいに行くよ、いいかい」

「もうたくさんだ、来てくれなくつても」

「いや行く。でないと何だか気がすまないから」

「勝手にしろ。しかし僕はいないよ、来ても。明日あしたから旅行するんだから」

「旅行？ どこへ」

「少し静養の必要があるんでね」

「転地か、洒落^{しゃれ}てるな」

「僕に云わせると、これも余裕の賜^{たまもの}物だ。僕は君と違って飽^あくまでもこの余裕に感謝しなければならなんだ」

「飽くまでも僕の注意を無意味にして見せるといふ気なんだね」

「正直のところを云えば、まあそこいらだろうよ」

「よろしい、どっちが勝つかまあ見ている。小林に啓^{けいはつ}発されるよりも、事実その物に戒^{かいしよく}飭^{はる}される方が、遥^{はる}かに覲^{てきめん}面で切実でいいだろう」

これが別れる時二人の間に起った問答であつた。しかしそれは

宵よいから持ち越した悪感情、津田が小林に対して日暮以来貯蔵して来た悪感情、の発現に過ぎなかった。これで幾分か溜りゅう飲いんが下りたような気のした津田には、相手の口から出た最後の言葉などを考える余地がなかった。彼は理非の如何いかんに関わらず、意地にも小林ごときものの思想なり議論なりを、切つて棄すてなければならなかった。一人になった彼は、電車の中ですぐ温泉場の様子などを想像に描き始めた。

明あくる朝あさは風が吹いた。その風が疎まばらな雨の糸を筋違すじかいに地面の上へ運んで来た。

「厄やっかい介かいだな」

時間通りに起きた津田は、縁鼻えんばなから空を見上げて眉を寄せた。

空には雲があつた。そうしてその雲は眼に見える風のように断えず動いていた。

「ことによると、お午ひるぐらいから晴れるかも知れないわね」

お延は既定の計画を遂行する方に賛成するらしい言葉つきを見せた。

「だつて一日おく後れると一日むだ徒為になるだけですもの。早く行つて早く帰つて来ていただく方がいいわ」

「おれもそのつもりだ」

冷たい雨によつて乱されなかつた夫婦間の取とり極きめは、出立間際になつて、始めて少しの行違を生じた。箆たんす笥ひきだしの抽斗から自分の衣裳いしやうを取り出したお延は、それを夫の洋服と並べて渋紙の上へ

置いた。津田は気がついた。

「お前は行かないでもいいよ」

「なぜ」

「なぜって訳もないが、この雨の降るのに御苦労千万じゃないか」

「ちつとも」

お延の言葉があまりに無邪気だったので、津田は思わず失笑した。

「来て貰うのが迷惑だから断るんじゃないよ。気の毒だからだよ。たかが一日とかからない所へ行くのに、わざわざ送って貰うなんて、少し滑稽こっけいだからね。小林が朝鮮へ立つんでさえ、おれは送って行かないって、昨夜断ゆうべちまったくらいだ」

「そう、でもあたし宅うちにいたって、何にもする事がないんですもの」

「遊んでおいでよ。構わないから」

お延がとうとう苦笑して、争う事をやめたので、津田は一人俤くるまを駆って宅を出る事ができた。

周囲の混雑と対照を形かたちづく成なる雨の停ステーション車場の佗わびしい中に立つて、津田が今買ったばかりの中等ちゅうとうきつぷ切符を、ぼんやり眺めてみると、一人の書生が突然彼の前へ来て、旧知己のような挨拶あいさつをした。

「あいにくなお天気で」

それはこの間始めて見た吉川の書生であつた。取次に出た時玄

関で会ったよそよそしさに引き換えて、今日は鳥打を脱ぐ態度からしてが丁寧であつた。津田は何の意味だかいつこう気がつかなかつた。

「どなたかどちらへかいらっしゃるんですか」

「いいえ、ちよつとお見送りに」

「だからどなたを」

書生は弱らせられたような様子をした。

「実は奥さまが、今日は少し差さしつかえがあるから、これを持って代りに行って来てくれとおっしゃいました」

書生は手に持った果物くだものの籃かごを津田に示した。

「いやそりやどうも、恐れ入りました」

津田はすぐその籃を受け取ろうとした。しかし書生は渡さなかつた。

「いえ私が列車の中まで持つて参ります」

汽車が出る時、黙つて丁寧^{えしやく}に会^え釈^{しやく}をした書生に、「どうぞ宜^{よろ}しく」と挨拶を返した津田は、比較的込み合わない車室の一隅に、ゆつくりと腰をおろしながら、「やっぱりお延に来て貰わない方がよかったのだ」と思つた。

百六十八

お延の氣を利かして外^{がい}套^{とう}の隠^{かく}袋^しへ入れてくれた新聞を津田が

取り出して、いつもより念入りに眼を通してゐる頃に、窓外の空模様はだんだん悪くなつて来た。先刻まで疎らに眺められた雨の糸が急に数を揃えて、見渡す限の空間を一度に充たして来る様子が、比較的展望に便利な汽車の窓から見ると、一層凄まじく感ぜられた。

雨の上には濃い雲があつた。雨の横にも限界の遮ぎられない限りは雲があつた。雲と雨との隙間なく連続した広い空間が、津田の視覚をいっぱいに冒した時、彼は荒涼なる車外の景色と、その反対に心持よく設備の行き届いた車内の愉快とを思い較べた。身体を安逸の境に置くという事を文明人の特権のように考えている彼は、この雨を衝いて外部へ出なければならぬ午後的心持を

想像しながら、独り^{ひと}肩を竦^{すく}めた。すると隣りに腰をかけて、ぽつりぽつりと窓硝子^{まどガラス}を打ったびに、点滴の珠^{たま}を表面に残して砕けて行く雨の糸を、ぼんやり眺めていた四十^{しじゅう}恰好^{がっこう}の男が少し上半身を前へ屈^{かが}めて、向^{むこう}側^{がわ}に胡坐^{あぐら}を掻^かいている伴侶^{つれ}に話しかけた。しかし雨の音と汽車の音が重なり合うので、彼の言葉は一度で相手に通じなかった。

「ひどく降って来たね。この様子じゃまた軽便^{みち}の路が壊れやしないかね」

彼は仕方なしに津田の耳へも入るような大きな声を出してこう云った。

「なに大丈夫だよ。なんば名前が軽便だって、そう軽便に壊れら

れた日にや乗るものが災難だあね」

これが相手の答であつた。相手というのは羅紗らしやの道行みちゆきを着たろくじゅうがつこう六十恰好じいの爺さんであつた。頭には唐物屋とうぶつやを採さがしても見当りつばそうもない変な鰐つばなしの帽子を被かぶつていた。煙草たばこ入だの、唐と棧うざんの小片こぎれだの、古代更紗こだいさらさだの、そんなものを器用にきちんと並べ立てて見世を張る袋物屋ふくろものやへでも行つて、わざわざ注文しなければ、とうてい頭へ載せる事のできそうもないその帽子の主人は、彼の言葉遣いづかで東京生れの証拠しやうこを充分に挙げていた。津田は服装に似合わない思ひのほか濶達かつたつなこの爺さんの元氣に驚ろくと同時に、どつちかというと、ベランメーに接近した彼の口の利き方にも意外を呼んだ。

この挨拶あいさつのうちに偶然使用された軽便という語は、津田にとつてたしかに一種の暗示であつた。彼は午後の何時間かをその軽便に揺られる転地者であつた。ことによると同じ方角へ遊びに行く連中かも知れないと思つた津田の耳は、彼らの談話に対して急に鋭敏になつた。転席の余地がないので、不便な姿勢と図ずぬ抜けた大声を忍ばなければならなかつた二人の云う事は一々津田に聴こえた。

「こんな天気になろうとは思わなかつたね。これならもう一日延ばした方が楽だつた」

なかおれ中折らくだに駱駝がいとうの外套を着た落ちつきのある男の方がこうい
と、爺さんはすぐ答えた。

「何たかが雨だあね。濡ぬれると思やあ、何でもねえ」

「だが荷物が厄やっかい介だよ。あの軽便へ雨曝あまざらしのまま載せられる事を考えると、少し心細くなるから」

「じやおいらの方が雨曝しになって、荷物だけを室へやの中へ入れて貰う事にしよう」

二人は大きな声を出して笑った。その後で爺さんがまた云った。
「もつともこの前のあの騒さわぎがあるからね。途中で汽缶かまへ穴あが開あいて動いどけなくなる汽車なんだから、全くのところ心細いにや違ちがない」

「あの時やどうして向うへ着いたつけ」

「なにあつちから来る奴やつを山の中ほどで待ち合せてさ。その方の

汽缶で引つ張り上げて貰ったじゃないか」

「なるほどね、だが汽缶を取り上げられた方の車はどうしたつけね」

「違え^{ちげ}ねえ、こつちで取り上げりや、向うは困らあ」

「だからさ、取り残された方の車はどうしたろうっていうのさ。」

まさか他^{ひと}を救つて、自分は立往生つて訳もなからう」

「今になつて考えりや、それもそうだがね、あの時や、てんで向うの車の事なんか考えちやいられなかつたからね。日は暮れかかるしさ、寒さは身に染みるしさ。顫^{ふる}えちまわあね」

津田の推測はだんだんたしかになつて来た。二人はその軽便の通じている線路の左右にある三力所の温泉場のうち、どこかへ行

くに違ないという鑑定さえついた。それにしてもこれから自分の身を二時間なり三時間なり委まかせようとするその軽便が、彼らのいう通り乱暴至極のものならば、この雨中どんな災難に会わないとも限らなかった。けれどもそこには東京ものの持つて生れた誇張というものがあつた。そんなに不完全なものですかと訊いてみようとしてそこに氣のついた津田は、腹の中で苦笑しながら、質問をかける手数てすうを省はぶいた。そうして今度は清子とその軽便とを聯れんけ結して「女一人でさえ樂々往来ができる所だのに」と思ひながら、面白半分にする興味本位の談話には、それぎり耳を貸さなかつた。

百六十九

汽車が目的の停車場ステーションに着く少し前から、三人によつて氣遣きづかわ
れた天候がしだいに穩かになり始めた時、津田は雨の収まり際おさぎわの
空を眺めて、そこに忙がわがしそうな雲の影を認めた。その雲は汽車
の走る方角と反対の側がわに向つて、ずんずん飛んで行つた。そうし
て後あとから後からと、あたかも前に行くものを追おっかけるように、隙す
間きまなく詰つめ寄せた。そのうち動く空の中に、やや明るい所ができ
てきた。ほかの部分より比較的薄く見える箇所がしだいに多くな
つた。就なにかんずく中一角はもう少しすると風に吹き破られて、破れた
穴から青い輝きを洩らしそうな氣配けはいを示した。

思ったより自分に好意をもってくれた天候の前に感謝して、汽車を下りた津田は、そこからすぐ乗り換えた電車の中で、また先^さ刻会^{つき}った二人^{ふたりづれ}伴の男を見出した。はたして彼の思わく通り、自分と同じ見当へ向いて、同じ交通機関を利用する連中だと知れた時、津田は気をつけて彼らの手荷物を注意した。けれども彼らの雨^{あまぎら}曝しになるのを苦^くに病んだほどの大^{おお}嵩^{おがさ}なものはどこにも見当らなかった。のみならず、爺^{じい}さんは自分が先刻云った事さえも忘れていたらしいかった。

「ありがたい、大当りだ。だからやつぱり行こうと思った時に立つちまうに限るよ。これでぐずぐずして東京にいて御覧な。ああつまらねえ、こうと知ったら、思い切って今朝立つちまえばよか

ったと後悔するだけだからね」

「そうさ。だが東京も今頃はこのくらい好い天気になってるんだろうか」

「そいつあ行つて見なけりや、ちよいと分らねえ。何なら電話で訊きいてみるんだ。だが大たい体てい間ま違ちがいはないよ。空は日本中どこへ行つたつて続いてるんだから」

津田は少しおかしくなった。すると爺さんがすぐ話しかけた。

「あなたも湯治場とうじばへいらつしやるんでしょう。どうもおおかたそうだろうと思ひましたよ、先刻から」

「なぜですか」

「なぜつて、そういう所へ遊びに行く人は、様子を見ると、すぐ

分りますよ。ねえ」

彼はこう云つて隣りにいる自分の伴侶つれを顧みた。中折なかおれの人は

仕方なしに「ああ」と答えた。

この天眼通てんがんつうに苦笑を禁じ得なかつた津田は、それぎり会話を

切り上げようとしたところ、快豁かいかつな爺さんの方でなかなか彼を

放さなかつた。

「だが旅行も近頃は便利になりましたね。どこへ行くにも身体からだ一

つ動かせばたくさんなんですから、ありがたい訳さ。ことにこち

とら見たいな気の早いものにはお詔あつらえむき向だあね。今度だつて荷

物なんか何にも持つて来やしませんや、この合切袋がつさいぶくろとこの大

将かばんのあの鞆を差し引くと、残るのは命ばかりといいたいくらいの

ものだ。ねえ大将」

大将の名をもつて呼ばれた人はまた「ああ」と答えたぎりであつた。これだけの手荷物を書室内へ持ち込めないとするれば、彼らのいわゆる「軽便」なるものは、よほど込み合うのか、さもなければ、常識をもつて測るべからざる程度において不完全でなければならなかつた。そこを確かめて見ようかと思つた津田は、すぐ確かめても仕方がないという氣を起して黙つてしまった。

電車を下りた時、津田は二人の影を見失つた。彼は停留所の前にある茶店で、写真版だの石版だのと、思い思いに意匠を凝らし、た温泉場の広告絵を眺めながら、ちゆうじき昼食を認したためた。時間から云つて、平常より一時間以上も後おくれてゐたその昼食は、膳ぜんむさを食むさば

る人としての彼を思う存分に發揮させた。けれども発車は目前に逼^{せま}つていた。彼は箸^{はし}を投げると共にすぐまた軽便に乗り移らなければならなかつた。

基点に当る停車場^{ステーション}は、彼の休んだ茶店のすぐ前にあつた。彼

は電車よりも狭いその車を眼の前に見つ、下女から支度料の剩^り錢を受取つてすぐ表へ出た。切符に鋏^{はさみ}を入れて貰う所と、プラットフォームとの間には距離というものがほとんどなかつた。五六歩動くとすぐ足をかける階段へ届いてしまった。彼は車室のなかで、また先刻^{さつき}の二人連れと顔を合せた。

「やあお早うがす。こつちへおかけなさい」

爺^{じい}さんは腰をずらして津田のために、彼の腕に抱えて来た膝^{ひざ}か

けを敷く余地を拵こしらえてくれた。

「今日は空すいてて結構です」

爺さんは避寒避暑二様の意味で、暮から正月へかけて、それから七八ふたつき二月わたに涉わたつて、この線路に集あつてくる湯治客とうじきやくの、どんなに雑沓ざつとうするかをさも面白そうに例の調子で話して聴きかせた後あとで、自分の同伴者を顧かみだ。

「あんな時に女なんか伴つれてくるのは實際罪だよ。尻しりが大きいから第一乗り切れねえやね。そうしてすぐ酔うから困らあ。鮎すしのよううに押しめられてる中で、吐いたり戻したりさ。見つともねえ事ことつたら」

彼は自分の傍そばに腰をかけている婦人の存在をまるで忘れてい

らしい口の利き方をした。

百七十

軽便の中でも、津田の平和はややともすると年を取ったこの楽
天家のために乱されそうになった。これから目的地へ着いた時の
様子、その様子しだいを取るべき自分の態度、そんなものが想像
に描き出された旅館だの山だの溪流だのの光景のうちに、取りと
めもなくちらちら動いている際さいなどに、老人は急に彼を夢の裡うちか
ら叩たたき起した。

「まだ仮橋かりばしのままでやってるんだから、呑気のんきなものさね。御覧

なさい、土方があんなに働らいてるから」

本式の橋が去年の出水で押し流されたまままだ出来上らないのを、老人はさも会社の怠慢でもあるように罵った後で、海へ注ぐ河の出口に、新らしく作られた一構ひとかまえの家を指して、また津田の注意を誘い出そうとした。

「あの家も去年波で浚われちまったんでさあ。でもすぐあんなに建てやがったから、軽便より少しや感心だ」

「この夏の避暑客を取り逃さないためでしょう」

「ここいらで一夏休むと、だいぶ応えるからね。やっぱり慾がなくっちゃ、何でも手っ取り早く仕事は片づかないものさね。この軽便だつてそうでしょう、あなた、なまじいあの仮橋で用が足り

てるもんだから、会社の方で、いつまでも横おうちやく着ぎをきめ込みやがつて、掛けかかえねえんでさあ」

津田は老人の人世観に一も二もなく調子を合すべく余儀なくされながら、談話の途切とぎれ目めには、眼を眠るように構えて、自分自身に勝手な事を考えた。

彼の頭の中は纏まとまらない断片的な映像イメジのために絶えず往来された。その中には今朝見たお延の顔もあつた。停車場ステーションまで来てくれた吉川の書生の姿も動いた。彼の車室内へ運んでくれた果物くだものの籃かごもあつた。その蓋ふたを開けて、二人の伴侶つれに夫人の贈物を配わかとうかという意志も働いた。その所作しよさから起る手数てかずだの煩わづらわしさだの、こつちの好意を受け取る時、相手のやりかねない仰ぎようさん山な

挨拶あいさつも鮮あざやかに描き出された。すると爺おやさんも中折なかおれも急に消えて、その代り肥った吉川夫人の影法師が頭の鬘たつを排はしてつかつか這入はいつて来た。連想はすぐこれから行こうとする湯治場とうじばの中心点になつてゐる清子に飛び移つた。彼の心は車と共に前後へ揺れ出した。

汽車という名をつけるのはもつたないくらいな車は、すぐ海に續ついてゐる勾配こうばいの急な山の中途を、危なかしくがたがた云わして駆かけるかと思うと、いつの間にか山と山の間に割り込んで、幾度いくたびも上つたり下つたりした。その山の多くは隙間すきまなく植付けられた蜜柑みかんの色で、暖かい南国の秋を、美しい空の下に累る々と点綴てんてつしてゐた。

「あいつは旨うまそうだね」

「なに根っから旨くないんだ、ここから見ている方がよっぽど綺麗きれいだよ」

比較的峻けわしい曲りくねった坂を一つ上った時、車はたちまちとまった。停車ステーション場でもないそこに見えるものは、多少の霜しもに彩いろどられた雑木ぞうきだけであつた。

「どうしたんだ」

爺さんがこう云つて窓から首を出していると、車掌だの運転手だのが急に車から降りて、しきりに何か云い合つた。

「脱線です」

この言葉を聞いた時、爺さんはすぐ津田と自分の前なかにいる中お

折れを見た。

「だから云わねえこつちやねえ。きつと何かあるに違ねえと思つてたんだ」

急に予言者らしい口吻こうふんを洩もらした彼は、いよいよ自分の駄弁ろっを弄する時機が来たと云わぬばかりにはしやぎ出した。

「どうせ家うちを出る時に、水みづ盃さかずきは済まして来たんだから、覚悟

はどうからきめてるようなものの、いざとなつて見ると、こんな所で弁慶べんけいの立往生たちおうじようは御免蒙こうむりたいからね。といつていつま

でこうやって待つてたつて、なかなか元へ戻してくれそうもなしと。何しろ日の短かい上へ持つて来て、気が短かいと来てるんだから、安閑としちやいらねえ。——どうです皆さん一つ降りて

車を押してやろうじやありませんか」

爺さんはこう云いながら元氣よく真先に飛び降りた。残るものは苦笑しながら立ち上った。津田も独り室内に坐すわっている訳に行かなくなつたので、みんなといっしよに地面の上へ降り立った。そうして黄色に染められた芝草の上に、あつけらかと立っている婦人を後うしろにして、うんうん車を押した。

「や、いけねえ、行き過ぎちやつた」

車はまた引き戻された。それからまた前へ押し出された。押し出したり引き戻したり二三度するうちに、脱線はようやく片づいた。

「また後おくれちまつたよ、大将、お蔭かげで」

「誰のお蔭でさ」

「軽便のお蔭でさ。だがこんな事でもなくつちや眠くつていけねえや」

「せっかく遊びに来た甲斐がないだろう」

「全くだ」

津田は後れた時間を案じながら、教えられた停車場^{ステーション}で、この元気の好い老人と別れて、一人薄暮^{ゆうぐれ}の空気の中に出た。

百七十一

靄^{もや}とも夜の色とも片づかないものの中にぼんやり描き出された

町の様はまるで寂寞^{せきばく}たる夢であつた。自分の四辺^{しへん}にちらちらする弱い電灯の光と、その光の届かない先に横^{よこ}わる大きな闇^{やみ}の姿^みを見較^{くら}べた時の津田にはたしかに夢という感じが起つた。

「おれは今この夢見たようなものの続^{つづ}きを辿^{たど}ろうとしている。東京を立つ前から、もつと几帳^{きちようめん}面に云えば、吉川夫人にこの温泉行を勧められない前から、いやもつと深く突き込んで云えば、お延と結婚する前から、——それでもまだ云い足りない、実は突然清子に背中を向けられたその刹那^{せつな}から、自分はもうすでにこの夢のようなものに崇^たられてゐるのだ。そうして今ちようどその夢を追^おかけようとしている途中なのだ。顧^{かえり}みると過去から持ち越したこの一^{ひとすじ}条の夢が、これから目的地へ着くと同時に、からりと覚

めるのかしら。それは吉川夫人の意見であつた。したがつて夫人
 の意見に賛成し、またそれを実行する今の自分の意見でもあると
 云わなければなるまい。しかしそれははたして事実だろうか。自
 分の夢ははたして綺麗に拭い去られるだろうか。自分ははたして
 それだけの信念をもつて、この夢のようにぼんやりした寒村の
 中に立つているのだろうか。眼に入る低い軒、近頃砂利を敷いた
 らしい狭い道路、貧しい電灯の影、傾むきかかった藁屋根、黄色
 い幌を下した一頭立の馬車、——新とも旧とも片のつけられな
 いこの一塊の配合を、なおの事夢らしく粧つている肌寒と
 夜寒と闇暗、——すべて朦朧たる事実から受けるこの感じは、
 自分がここまで運んで来た宿命の象徴じゃないだろうか。今まで

も夢、今も夢、これから先も夢、その夢を抱^だいてまた東京へ歸つて行く。それが事件の結末にならないとも限らない。いや多分はそうなりそうだ。じや何のために雨の東京を立てこんな所まで出かけて来たのだ。　　畢^{ひつきよう}　　竟　馬鹿だから？　　いよいよ馬鹿と事がきまりさえすれば、ここからでも引き返せるんだが」

この感想は一度に來た。　　半^{はんぶん}分とかからないうちに、これだけの順序と、段落と、論理と、空想を具^{そな}えて、抱き合うように彼の頭の中を通過した。しかしそれから後の彼はもう自分の主人公ではなかつた。どこから來たとも知れない若い男が突然現われて、彼の荷物を受け取った。　　一^{いっぶん}分の猶^{ゆうよ}予なく彼をすぐ前にある茶店の中へ引き込んで、彼の行こうとする宿屋の名を訊^きいたり、馬車に

乗るか俵くるまにするかを確かめたりした上に、彼の予期していないような愛嬌あいぎようさえ、自由自在に忙がしい短時間の間に操縦そうじゆうして退けた。

彼はやがて否応いやおうなしにズツクの幌ほろを下した馬車の上へ乗せられた。そうして御免といいながら自分の前に腰をかける先刻さつきの若い男を見出すべく驚ろかされた。

「君もいつしよに行くのかい」

「へえ、お邪魔でも、どうか」

若い男は津田の目指めざしている宿屋の手代てだいであつた。

「ここに旗が立っています」

彼は首を曲げて御者台ぎよしゃだいの隅すみに挿さし込んである赤い小旗を見た。

暗いので中に染め抜かれた文字は津田の眼に入らなかつた。旗はただ馬車の速力で起す風のために、彼の座席の方へはげしく吹かれるだけであつた。彼は首を縮めて外套がいつうの襟えりを立てた。

「夜中やちゆうはもうだいぶお寒くなりました」

御者台ぎよしやだいを背中に背負しよつてゐる手代は、位地いちちの関係から少しも風を受けないので、この云い草ぐさは何となく小賢こぎやうしく津田の耳に響いた。

道は左右に田を控えているらしく思われた。そうして道と田の境目さかいめには小河の流れが時々聞こえるように感ぜられた。田は両方とも狭く細く山で仕切られているような氣もした。

津田は帽子と外套の襟で隠し切れない顔の一部分だけを風さらに曝

して、寒さに抵抗でもするように黙想の態度を手代に示した。手代もその方が便利だと見えて、強^しいて向うから口を利^きこうともしなかった。

すると突然津田の心が揺^{うご}いた。

「お客はたくさんいるかい」

「へえありがとう、お蔭^{かげ}さまで」

「何人^{なんにん}ぐらい」

何人とも答えなかった手代は、かえって弁解がましい返事をした。

「ただいまはあいにく季節が季節だもんでげすから、あんまりおいでがございません。寒い時は暮からお正月へかけまして、それ

から夏場になりますと、まあ七八ふたつき二月ですな、
繁はんじよう昌しょうするのは。そんな時にや臨時のお客さまを御断りする事が、毎日のよう
にございます」

「じゃ今がちようど閑ひまな時なんだね、そうか」

「へえ、どうぞごゆつくり」

「ありがとう」

「やっぱり御病氣のためにわざわざおいでなんで」

「うんまあそうだ」

清子の事を訊きく目的で話し始めた津田は、ここへ来て急に痞つかえた。彼は気がさした。彼女の名前を口にするに堪えなかった。その上後あとで面倒でも起ると悪いとも思い返した。手代から顔を離し

て馬車の背に倚りかかり直した彼は、再び沈黙の姿勢を回復した。

百七十二

馬車はやがて黒い大きな岩のようなものに突き当ろうとして、その裾をぐるりと廻り込んだ。見ると反対の側にも同じ岩の破片とも云うべきものが不行儀に路傍を塞いでいた。台上から飛び下りた御者はすぐ馬の口を取った。

一方には空を凌ぐほどの高い樹が聳えていた。星月夜の光に映る物凄い影から判断すると古松らしいその木と、突然一方に聞こえ出した奔湍の音とが、久しく都会の中を出なかった津

田の心に不時ふじの一転化を与えた。彼は忘れた記憶を思い出した時のような気分になった。

「ああ世の中には、こんなものが存在していたのだっけ、どうして今までそれを忘れていたのだろう」

不幸にしてこの述懐は孤立のまま消滅する事を許されなかった。津田の頭にはすぐこれから会いに行く清子の姿が描き出された。

彼は別れて以来一年近く経たつ今日こんにちまで、いまだこの女の記憶を失なくした覚おぼえがなかった。こうして夜路よみちを馬車に揺られて行くのも、有体ありていに云えば、その人の影を一図いちずに追おっかけている所作しよさに違ちがなかつた。御者は先刻さつきから時間の遅くなるのを恐れるごとく、止よせばいいと思うのに、濫みだりなる鞭むちを鳴らして、しきりに瘦馬やせうまの尻しりを

打った。失われた女の影を追う彼の心、その心を無遠慮に翻訳すれば、取りも直さず、この瘦馬ではないか。では、彼の眼前に鼻から息を吹いている憐れな動物が、彼自身で、それに手荒な鞭を加えるものは誰なのだろう。吉川夫人？ いや、そう一いちがい概に断言する訳には行かなかった。ではやっぱり彼自身？ この点で精確な解決をつける事を好まなかった津田は、問題をそこで投げながら、依然としてそれより先を考えずにはいられなかった。

「彼女に会うのは何のためだろう。永く彼女を記憶するため？ 会わなくても今の自分は忘れずにいるではないか。では彼女を忘れるため？ あるいはそうかも知れない。けれども会えば忘れられるだろうか。あるいはそうかも知れない。あるいはそうでない

かも知れない。松の色と水の音、それは今全く忘れていた山と溪^{たに}の存在を憶い^{おも}い出させた。全く忘れていない彼女、想像の眼先にちらちらする彼女、わざわざ東京から後^{あと}を跟^つけて来た彼女、はどんな影響を彼の上に起すのだろう」

冷たい山間^{やまあい}の空気と、その山を神秘的に黒くぼかす夜の色と、その夜の色のの中に自分の存在を呑^のみ尽された津田とが一度に重なり合った時、彼は思わず恐れた。ぞつとした。

御者^{ぎよしや}は馬の轡^{くつわ}を取ったなり、白い泡^{あわ}を岩角に吹き散らして鳴

りながら流れる早瀬の上に架^かけ渡した橋の上をそろそろ通った。すると幾点の電灯がすぐ津田の眸^{ひとみ}に映ったので、彼はたちまちもう来たなと思った。あるいはその光の一つが、今清子の姿を照ら

しているのかも知れないとさえ考えた。

「運命の宿火だ。しゅつかそれを目標めあてに辿たどりつくよりほかに途みちはない」

詩に乏しい彼は固もとよりこんな言葉を口にする事を知らなかった。けれどもこう形容してしかるべき気分はあつた。彼は首を手代の方へ延ばした。

「着いたようじゃないか。君の家はどれだいうち」

「へえ、もう一丁ほど奥になります」

ようやく馬車の通れるくらいな温泉ゆの町は狭かつた。おまけに不規則な故意わざとらしい曲折を描いて、御者をして再び車台の上に鞭むちを鳴らす事を許さなかつた。それでも宿へ着くまでに五六分しかかからなかつた。山と谷がそれほど広いという意味で、町はそ

れほど狭かったのである。

宿は手代の云った通り森閑しんかんとしていた。夜のためばかりでもなく、家の広いためばかりでもなく、全く客の少ないためとしか受け取れないほどの静かさのうちに、自分の室へやへ案内された彼は、好時季に邂逅めぐりあわせてくれたこの偶然に感謝した。性質から云えばむしろ人ひと中なかを択えらぶべきはずの彼には都合があつた。彼は膳ぜんの向うに坐すわつている下女に訊きいた。

「昼間もこの通りかい」

「へえ」

「何だかお客はどこにもいないようじゃないか」

下女は新館とか別館とか本館とかいう名前を挙げて、津田の不

審を説明した。

「そんなに広いのか。案内を知らないものは迷^{まい}見^みにでもなりそうだね」

彼は清子のいる見^{けん}当^{とう}を確かめなければならなかった。けれども手代に露骨な質問がかけられなかった通り、下女にも卒直な尋ね方はできなかった。

「一人で来る人は少ないだろうね、こんな所へ」

「それでもございません」

「だが男だろう、そりや。まさか女一人で逗^と留^{りゅう}しているなんてえのはなからう」

「一人いらつしやいます、今」

「へえ、病氣じゃないか。そんな人は」

「そうかも知れません」

「何という人だい」

受持が違うので下女は名前を知らなかった。

「若い人かね」

「ええ、若いお美しい方です」

「そうか、ちよつと見せて貰もらいたいな」

「お湯にいらつしやる時、この室へやの横をお通りになりますから、御覧になりたければ、いつでも——」

「拝見できるのか、そいつはありがたい」

津田は女のいる方角だけ教わつて、膳ぜんを下げさせた。

百七十三

寝る前に一風呂浴びるつもりで、下女に案内を頼んだ時、津田は始めて先刻^{さつき}彼女から聴^きかされたこの家の広さに気がついた。意外な廊下を曲つたり、思いも寄らない階^{はしご}子段^{だん}を降りたりして、目的の湯壺^{ゆつぽ}を眼の前に見出^{みいだ}した彼は、實際一人で自分の座敷へ帰れるだろうかと思つた。

風呂場は板と硝子戸^{ガラスど}でいくつにか仕切られていた。左右に三つずつ向う合せに並んでいる小型な浴槽^{よくそう}のほかに、一つ離れて大きいのは、普通の洗湯に比べて倍以上の尺があつた。

「これが一番大きくつて心持がいいでしょう」と云つた下女は、津田のために擦硝子すりの簾はまつた戸をがらと開けてくれた。中には誰もいなかった。湯気が籠こもるのを防ぐためか、座敷で云えば欄間らんまと云つたような部分にも、やはり硝子戸の設けがあつて、半分ほど隙すかされたその二枚の間から、冷たい一道の夜気が、縊袍どてらを脱ぎにかかつた津田の身体からだを、山里らしく襲おそいに來た。

「ああ寒い」

津田はざぶんと音を立てて湯壺の中へ飛び込んだ。

「ごゆつくり」

戸を閉めて出ようとした下女はいったんこう云つた後で、また戻つて來た。

「まだ下にもお風呂場がございますから、もしそちらの方がお気に入るようでしたら、どうぞ」

来る時もう階子段を一つか二つ下りている津田には、この浴槽の階下したがまだあろうとは思えなかった。

「いったい何階なのかね、この家うちは」

下女は笑って答えなかった。しかし用事だけは云い残さなかった。

「ここの方が新らしくって綺麗きれいは綺麗ですが、お湯は下の方がよく利きくのだそうです。だから本当に療治の目的でおいでの方はみんな下へ入らっしゃいます。それから肩や腰を滝でお打たせになる事も下ならできます」

湯壺から首だけ出したまま津田は答えた。

「ありがとう。じゃ今度こんだそつちへ入るから連れてつてくれたまえ」

「ええ。旦那様だんなさまはどこかお悪いんですか」

「うん、少し悪いんだ」

下女が去った後の津田は、しばらくの間、「本当に療治の目的で来た客」といった彼女の言葉を忘れる事ができなかった。

「おれははたしてそういう種類の客なんだろうか」

彼は自分をそう思いたくもあり、またそう思いたくもなかった。

どっち本位ほんいで来たのか、それは彼の心がよく承知していた。けれ

ども雨を凌しのいでここまで来た彼には、まだ商しょうりよう量の隙間すきまがあつ

た。躊躇ちゆうちよが あつた。幾分の余裕が残っていた。そうしてその

余裕が彼に教えた。

「今のうちならまだどうでもできる。本当に療治の目的で来た客になろうと思えばなれる。なろうとなるまいと今のお前は自由だ。自由はどこまで行っても幸福なものだ。その代りどこまで行っても片づかないものだ、だから物足りないものだ。それでお前はその自由を放り出そうとするのか。では自由を失った暁に、お前は何物を確と手に入れる事ができるのか。それをお前は知っているのか。御前の未来はまだ現前げんぜんしないのだよ。お前の過去にあつた一ひとすじ条の不可思議より、まだ幾倍かの不可思議をもっているかも知れないだよ。過去の不可思議を解くために、自分の思い通りのものを未来に要求して、今の自由を放り出ほうそうとするお前は、

馬鹿かな利巧りこうかな」

津田は馬鹿とも利巧とも判断する訳に行かなかった。万事が結果いかんできめられようという矢先に、その結果を疑がい出した日には、手も足も動かせなくなるのは自然の理であつた。

彼には最初から三つの途みちがあつた。そうして三つよりほかに彼の途はなかつた。第一はいつまでも煮え切らない代りに、今の自由を失わない事、第二は馬鹿になつても構わないで進んで行く事、第三すなわち彼の目指すめざところは、馬鹿にならないで自分の満足に行くような解決を得る事。

この三力条のうち彼はただ第三だけを目的にして東京を立つた。ところが汽車に揺られ、馬車に揺られ、山の空氣に冷やされ、煙けむ

の出る湯壺ゆつぽに漬けられ、いよいよ目的の人は眼前にいるという事
 実が分り、目的の主意は明日あしたからでも実行に取りかかれるという
 間際まぎわになつて、急に第一が顔を出した。すると第二もいつの間まに
 か、微笑して彼の傍かたわらに立つた。彼らの到着は急であつた。けれど
 も騒々しくはなかつた。眼界を遮さへぎる靄もやが、風の音も立てずす
 うと晴れ渡る間から、彼は自分の視野を着実に見る事ができたの
 である。

思いのほかに浪漫ロマンチック的であつた津田は、また思いのほかに着実
 であつた。そうして彼はその両面の対照に気がついていなかつた。
 だから自己の矛盾を苦くにする必要はなかつた。彼はただ決すれば
 よかつた。しかし決するまでには胸の中で一戦争しなければなら

なかった。——馬鹿になっても構わない、いや馬鹿になるのは厭だ、そうだ馬鹿になるはずがない。——戦争でいったん片づいたものが、またこういう風に三段となつて、最後まで落ちて来た時、彼は始めて立ち上れるのである。

人のいない大きな浴槽よくそうのなかで、洗うとも摩こするとも片のつかない手を動かして、彼はしきりに綺麗きれいな温泉ゆをざぶざぶ使った。

百七十四

その時不意にがらがらと開けられた硝子戸ガラスどの音が、周囲あたりをまるで忘れて、自分の中にばかり頭つっこを突込んでいた津田をはつと驚ろ

かした。彼は思わず首を上げて入口を見た。そうしてそこに半身を現わしかけた婦人の姿を湯気のうちに認めた時、彼の心臓は、合図の警鐘のように、どきんと打った。けれども瞬間に起った彼の予感、また瞬間に消える事ができた。それは本当の意味で彼を驚ろかせに來た人ではなかった。

生れてからまだ一度も顔を合せた覚のないその婦人は、寝掛ねかけと見えて、白昼なら人前を憚はばかるような慎つつしみの足りない姿を津田の前に露あらわした。尋常の場合では小袖こそでの裾すその先にさえ出る事を許されない、長い襦袢じゆばんの派手はでな色が、惜氣おしげもなく津田の眼をはなやかに照した。

婦人は温泉煙ゆけむりの中に乞食こじきのごとく蹲踞うずくまる津田の裸体姿はだかすがたを一目

見るや否や、いったん入りかけた身体をすぐ後へ引いた。

「おや、失礼」

津田は自分の方で詫まるべき言葉を、相手に先へ奪られたような気がした。すると階子段を下りる上靴の音がまた聴こえた。それが硝子戸の前でとまったかと思うと男女の会話が彼の耳に入った。

「どうしたんだ」

「誰が入ってるの」

「塞がってるのか。好いじやないか、こんでさえいなければ」

「でも……」

「じゃ小さい方へ入るさ。小さい方ならみんな空いてるだろう」

「勝^{かつ}さんはいないかしら」

津田はこの二人づれのために早く出てやりたくなつた。同時に是非彼の入っている風呂へ入らなければ承知ができないといった調子のどこかに見える婦人の態度が氣に喰^くわなかつた。彼はここへ入りたければ御勝手にお入んなさい、御遠慮には及びませんかという度胸を据^すえて、また浴槽の中へ身体を漬^つけた。

彼は背の高い男であつた。長い足を樂に延ばして、それを温泉の中で上^う下^えしたへ動かしながら、透^すき徹^とるもののうちに、浮いたり沈んだりする肉体の下肢^{かし}を得意に眺めた。

時に突然婦人の要する勝さんらしい人の声がし出した。

「今晚は。大変お早うございますね」

勝さんのこの挨拶あいさつには男の答があつた。

「うん、あんまり退屈だから今日は早く寝ようと思つてね」

「へえ、もうお稽古けいこはお済みですか」

「お済みつて訳でもないが」

次には女の言葉が聴こえた。

「勝さん、そこは塞ふさがつてるのね」

「おやそうですか」

「どこか新らしく拵こしらえたのはないの」

「ございます。その代り少し熱いかも知れませんよ」

二人を案内したらしい風呂場の戸の開あく音が、向うの方でした。

かと思うと、また津田の浴槽よくそうの入口ががらりと鳴った。

「今晚は」

四角な顔の小作りな男が、またこう云いながら入って来た。

「旦那流しましょう」

彼はすぐ流しへ下り立って、小判なりの桶おけへ湯を汲んだ。津田は否いや応おうなしに彼に背中を向けた。

「君が勝さんてえのかい」

「ええ旦那はよく御承知ですね」

「今聴きいたばかりだ」

「なるほど。そう云えば旦那も今見たばかりですね」

「今来たばかりだもの」

勝さんはははあと云って笑い出した。

「東京からおいでですか」

「そうだ」

勝さんは何時なんじの下りだの、上りだのという言葉遣つかつて、津田に正確な答えをさせた。それから一人で来たのかとか、なぜ奥さんを伴つつて来なかったのかとか、今の夫婦ものは浜きいの生糸屋いとやさんだとか、旦那が細君に毎晩義太夫を習っているんだとか、宅うちのお上かみさんは長唄ながうたが上手だとか、いろいろの問をかけると共に、いろいろの知識を供給した。聴かないでもいい事まで聴かされた津田には、勝さんの触れないものが、たつた一つしかないように思われた。そうしてその触れないものは取とりも直なおさず清子という名前であった。偶然から来たこの結果には、津田にとって多少の物足

らなさが含まれていた。もちろん津田の方でも水を向ける用意もなかった。そんな暇のないうちに、勝さんはさっさとしゃべるだけしやべって、洗う方を切り上げてしまった。

「どうぞごゆっくり」

こう云って出て行った勝さんの後影を見送った津田にも、もうゆっくりする必要がなかった。彼はすぐ身体を拭いて硝子戸ガラスドの外へ出た。しかし濡手拭ぬれてぬぐいをぶら下げて、風呂場の階子段はしごだんを上つて、そこにある洗面所と姿見すがたみの前を通り越して、廊下を一曲り曲ったと思ったら、はたしてどこへ帰っていいのか解らなくなつた。

百七十五

最初の彼はほとんど気がつかずに歩いた。これが先刻下女に案内されて通った路^{みち}なのだろうかと思ひこみ、淡い夢のように、彼の記憶を暈^{ほか}すだけであつた。しかし廊下を踏んだ長さに比較して、なかなか自分の室^{へや}らしいものの前に出られなかつた時に、彼はふと立ちどまつた。

「はてな、もつと後^{あと}かしら。もう少し先かしら」

電灯で照らされた廊下は明るかつた。どつちの方角でも行こうとすれば勝手に行かれた。けれども人の足音はどこにも聴^{きこ}えなかつた。用事^{ゆきぎ}で往来をする下女の姿も見えなかつた。手拭と石^{シヤボン} 鹼

をそこへ置いた津田は、宅の書斎で^{うち}お延を呼ぶ時のように手を鳴らして見た。けれども返事はどこからも響いて来なかった。不案内な彼は、第一女^{たま}の溜りのある見当を知らなかった。個人の住宅とほとんど区別のつかない、植込^{うえこみ}の突当りにある玄関から上ったので、勝手口、台所、帳場などの所在^{ありか}は、すべて彼にとっての秘密と何の^{えら}忖ぶところもなかった。

手を鳴らす所作^{しよさ}を一二度繰り返して見て、誰も応ずるものがないのを確かめた時、彼は苦笑しながらまた石鹼と手拭を取り上げた。これも一興だという気になった。ぐるぐる廻っているうちに、いつか自分の室の前に出られるだろうという^{すいきよう}酔興も手伝った。彼は生れて以来旅館における始めての経験を故意に味わう

人のような心になつてまた歩き出した。

廊下はすぐ尽きた。そこから筋違すじかいに二三度上あがるとまた洗面所があつた。きらきらする白い金かな盥ならいが四つほど並んでいる中へ、ニツケルの栓せんの口から流れる山やま水みずだか清水しみずだか、絶えずざあざあ落ちるので、金盥は四つが四つともいっぱいになつてゐるばかりか、縁ふちを溢あふれる水すい晶しょうのような薄い水の幕あとの綺麗きれいに滑すべつて行く様さまが鮮あざやかに眺められた。金盥あらいの中の水は後から押おされるのと、上から打たれるのとの両方で、静かなうちに微細な震盪しんとうを感じるもののごとくに揺れた。

水道ばかりを使い慣れて来た津田の眼は、すぐ自分の居場所おりばしよを彼に忘れさせた。彼はただもったいないと思つた。手を出して

栓せんを締めておいてやろうかと考えた時、ようやく自分の迂濶うかつさに気がついた。それと同時に、白い瀬戸張せとばりのなかで、大きくなったり小さくなったりする不定な渦うずが、妙に彼を刺戟しげきした。

あたりは静かであつた。膳ぜんに向つた時下女の云つた通りであつた。というよりも事實は彼女の言葉を一々首肯うけがつて、おおかたこのくらいだろうと暗あんに想像したよりも遙はるかに静かであつた。客がどこにいるのかと怪しむどころではなく、人がどこにいるのかと疑いたくなるくらいであつた。その静かさのうちに電灯は隈くまなく照り渡つた。けれどもこれはただ光るだけで、音もしなければ、動きもしなかつた。ただ彼の眼の前にある水だけが動いた。渦うずらしい形を描いた。そうしてその渦は伸びたり縮んだりした。

彼はすぐ水から視線を外した。すると同じ視線が突然人の姿に
行き当たったので、彼ははつとして、眼を据えた。しかしそれは洗
面所の横に懸けられた大きな鏡に映る自分の影像に過ぎなかった。
鏡は等身と云えないまでも大きかった。少くとも普通床屋に具え
つけてあるものぐらいの尺はあった。そうして位地の都合上、
やはり床屋のそれのごとくに直立していた。したがって彼の顔、
顔ばかりでなく彼の肩も胴も腰も、彼と同じ平面に足を置いて、
彼と向き合ったままで映った。彼は相手の自分である事に気がつ
いた後でも、なお鏡から眼を放す事ができなかった。湯上りの彼
の血色はむしろ蒼かった。彼にはその意味が解せなかった。久し
く刈込を怠った髪は乱れたままで頭に生い被さっていた。風呂

で濡^ぬらしたばかりの色が漆^{うるし}のように光った。なぜだかそれが彼の眼には暴風雨に荒らされた後の庭先らしく思えた。

彼は眼鼻立の整った好男子であつた。顔の肌理^{きめ}も男としてもつたにないくらい濃^{こまや}かに出来上つていた。彼はいつでもそこに自信をもつていた。鏡に対する結果としてはこの自信を確かめる場合ばかりが彼の記憶に残つていた。だからいつもと違つた不満足な印象が鏡の中に現われた時に、彼は少し驚ろいた。これが自分だと認定する前に、これは自分の幽霊だという気がまず彼の心を襲^すつた。凄^{すご}くなつた彼には、抵抗力があつた。彼は眼を大きくして、なおの事自分の姿を見つめた。すぐ二足ばかり前へ出て鏡の前にある櫛^{くし}を取上げた。それからわざと落ちついて綺麗に自分の

髪を分けた。

しかし彼の所作は櫛しよさを投げ出すと共に尽きてしまった。彼は再び自分の室へやを探すもとの我に立ち返った。彼は洗面所と向い合せに付けられた階子段はしごだんを見上げた。そうしてその階子段には一種の特徴のある事を発見した。第一に、それは普通のものより幅が約三分一ほど広かった。第二に象が乗つても音がしまいと思われ、るくらい巖がんじょう丈にできていた。第三に尋常のものと違って、擬まがいの西洋館らしく、一面に仮漆ニスが塗かっていた。

胡乱うるんなうちにも、この階子段だけはけつして先刻下りなかつたというたしかな記憶が彼にあつた。そこを上のぼつても自分の室へは帰れないと気がついた彼は、もう一遍後あと戻りをする覚悟で、鏡

から離れた身体からだを横へ向け直した。

百七十六

するとその二階にある一室の障子しょうじを開けて、開けた後あとをまた閉て切る音きこが聴えた。階子段の構えから見ても、上にある室の数
 は一つや二つではないらしく思われるほど広い建物だのに、今津
 田の耳に入つた音は、手に取るように判切はつきりしているので、彼は
 すぐその確的たしかさの度合から押して、室の距離を定める事ができた。
 下から見上げた階子段の上は、普通料理屋の建築などで、人の
 しばしば目撃するところと何の異なることところもなかった。そこに

は広い板の間があつた。目の届かない幅は問題外として、突き当りを遮さへぎる壁を目標めやすに置いて、大凡おおよその見当をつけると、畳一枚をたて豎に敷くだけの長さは充分あるらしく見えた。この板の間から、廊下が三方へ分れているか、あるいは二方に折れ曲つているか、そこは階段を上らない津田の想像で判断するよりほかに途みちはないとして、今聴えた障子の音の出所でどころは、一番階段に近い室、すなわち下したから見える壁のすぐ後うしろに違なかつた。

ひっそりした中に、突然この音を聞いた津田は、始めて階上にも客のいる事を悟つた。というより、彼はようやく人間の存在に気がついた。今までまるで方角違いの刺戟しげきに氣を奪とられていた彼は驚ろいた。もちろんその驚きは微弱なものであつた。けれども

性質からいうと、すでに死んだと思つたものが急に蘇よみがえつた時に感ずる驚ろきと同じであつた。彼はすぐ逃げ出そうとした。それは部屋へ帰れずに迷まご兇ごついている今の自分に付着する間まぬけ拔かき加減げんを他ひとに見せるのが厭いやだつたからでもあるが、実を云うと、この驚ろきによつて、多少なりとも度を失なつた己おのれの醜みにくさを人前に曝さらすのが恥はずかしかつたからでもある。

けれども自然の成行はもう少し複雑であつた。いったん歩ほを回めくらそうとした刹せつ那なに彼は氣がついた。

「ことによると下女かも知れない」

こう思い直した彼の度胸はたちまち回復した。すでに驚ろきの上こを超える事のできた彼の心には、続いて、なに客でも構かまわな

という余裕が生れた。

「誰でもいい、来たら方角を教えて貰おう」もら

彼は決心して姿見すがたみの横に立ったまま、階子段はしごだんの上を見つめ

た。すると静かな足音が彼の予期通り壁の後で聴え出した。その

足音は実際静かであつた。踵かかとへ跳ね上る上スリッパ靴の薄い尾がなか

つたなら、彼はついにそれを聴き逃してしまわなければならない

ほど静かであつた。その時彼の心を卒然として襲つて来たものが

あつた。

「これは女だ。しかし下女ではない。ことによると……」

不意にこう感づいた彼の前に、もしやと思つたその本人が容赦なく現われた時、今しがた受けたより何十倍か強烈な驚ろきに囚とら

われた津田の足はたちまち立ち竦すくんだ。眼は動かなかつた。

同じ作用が、それ以上強烈に清子をその場に抑えつけたらしかつた。階上の板の間まで来てそこでぴたりととまった時の彼女は、津田にとって一種の絵であつた。彼は忘れる事のできない印象の一つとして、それを後々のちのちまで自分の心に伝えた。

彼女が何気なく上から眼を落したのと、そこに津田を認めたのとは、同時に似て実は同時でないように見えた。少くとも津田にはそう思われた。無心むしんが有心ゆうしんに変わるまでにはある時がかかつた。驚ろきの時、不可思議の時、疑いの時、それらを経過あとした後で、彼女は始めて棒立になつた。横から肩を突けば、指一本の力でも、土で作つた人形を倒すよりたやすく倒せそうな姿勢で、硬くなつ

たまま棒立に立った。

彼女は普通の湯治客とうじきやくのする通り、寝しなに一風呂入あたたつて温まるつもりと見えて、手に小型のタウエルを提さげていた。それから津田と同じようにニツケル製の石鹼入シャボンいれはだかを裸のまま持っていた。棒のように硬く立った彼女が、なぜそれを床の上へ落さなかったかは、後からその刹那せつなの光景を辿たどるたびに、いつでも彼の記憶中に顔を出したがる疑問であつた。

彼女の姿は先刻さつき風呂場で会った婦人ほど縦ほしいままではなかった。けれどもこういう場所で、客同志が互いに黙認しあうだけの自由はすでに利用されていた。彼女は正式に幅の広い帯を結んでいなかった。赤だの青だの黄だの、いろいろの縞しまが綺麗きれいに通っている

はで だてまき 派手な伊達巻を、むしろずるずるに巻きつけたままであった。寝 ね
まき 巻の下に重ねた ながじゅばん 長襦袢の色が、薄い羅紗製 らしやせい の上 スリッパ 靴 つつ を突か
すあし けた素足の甲 おほ を被っていた。

清子の身体 からだ が硬くなると共に、顔の筋肉も硬くなった。そうし
 て両方の頬と額の色が見る見るうちに蒼白 あおしろ く変つて行つた。その
 変化がありありと分つて来た中頃で、自分を忘れていた津田は気
 がついた。

「どうかしなければいけない。どこまで蒼くなるか分らない」

津田は思い切つて声をかけようとした。するとその途端に清子
 の方が動いた。くるりと後 うしろ を向いた彼女は止まらなかつた。津田
 を階下に残したまま、廊下を元へ引き返したと思うと、今まで明

らかに彼女を照らしていた二階の上り口の電灯がぱつと消えた。
 津田は暗闇くらやみの中で開けるらしい障子しょうじの音をまた聴いた。同時に彼の気のつかなかった、自分の立っているすぐ傍そばの小さな部屋で呼鈴よびりんの返しの音がけたたましく鳴った。

やがて遠い廊下をぱたぱた馳かけて来る足音が聴きこえた。彼はその足音の主ぬしを途中で喰いとめて、清子の用を聴きに行く下女から自分の室へやの在ありどころ所を教えて貰もらった。

百七十七

その晩の津田はよく眠れなかった。雨戸の外でするさらさらい

う音が絶えず彼の耳に付着した。それを離れる事のできない彼は疑った。雨が来たのだろうか、たにがわ 谿川が軒の近くを流れているのだろうか。雨としては底に響がないし、谿川としては勢が緩漫過ぎるとまで考えた彼の頭は、同時にそれより遙か重大な主題のため悩まされていた。

彼は室に帰ると、いつの間にか氣を利かせた下女の暖かそうに延べておいてくれた床を、わが座敷の真中に見出したので、すぐその中へ潜り込んだまま、偶然にも今自分が経過して来た冒険について思い耽ったのである。

彼はこの宵の自分を顧りみて、ほとんど夢中歩行者のような気がした。彼の行為は、目的もなく家中彷徨き廻ったと一般

であつた。ことに階子段はしごだんの下で、静中うずに渦を廻転させる水を見たり、突然姿見すがたみに映る気味の悪い自分の顔に出会つたりした時は、事後一時間と経たたない近距離から判断して見ても、たしかに常軌じょうきを逸した心理作用の支配を受けていた。常識に見捨てられた例ためしの少ない彼としては珍らしいこの気分は、今床の中に安臥する彼から見れば、恥すべき状態ちがいに違なかつた。しかし外聞が悪いという事をほかにして、なぜあんな心持になつたものだろうか、ただその原因を考えるだけでも、説明はできなかつた。

それはそれとして、なぜあの時清子の存在を忘れていたのだらうという疑問に推し移おると、津田は我ながら不思議の感に打たれざるを得なかつた。

「それほど自分は彼女に対して冷淡なのだろうか」

彼は無論そうでないと信じていた。彼は食事の時、すでに清子のいる方角を、下女から教えて貰ったくらいであつた。

「しかしお前はそれを念頭に置かなかつたろう」

彼は實際廊下をうろうろ歩行あるしているうちに、清子をどこかへふり落した。けれども自分のどこを歩いているか知らないものが、他ひとがどこにけんとういるか知ろうはずはなかつた。

「この見当けんとうだと心得てさえいたならば、ああ不意打ふいうちを食うんじやなかつたのに」

こう考えた彼は、もう第一の機会を取り逃したような気がした。彼女が後を向いた様子、電気を消して上り口あがぐちの案内を閉塞へいそくした

所作、たちまち下女を呼び寄せるために鳴らした電鈴べルの音、これらのものを綜合そうごうして考えると、すべてが警戒であつた。注意であつた。そうして絶縁であつた。

しかし彼女は驚ろいていた。彼よりも遙はるか余計に驚ろいていた。それは単に女だからとも云えた。彼には不意の裡うちに予期があり、彼女には突然のうち中にただ突然があるだけであつたからとも云えた。けれども彼女の驚ろきはそれで説明し尽せているだろうか。彼女はもつと複雑な過去を覲てきめん面に感じてはいないだろうか。

彼女は蒼あおくなつた。彼女は硬くなつた。津田はそこに望みを繫つないだ。今の自分に都合つごうの好いようにそれを解釈してみた。それからまたその解釈を引繰ひっくりかえ返して、反対の側がわからも眺めてみた。両

方を眺め尽した次にはどっちが合理的だろうという批判をしな
 ればならなくなつた。その批判は材料不足のために、容易に纏ま
 らなかつた。纏つてもすぐ打ち崩された。一方に傾くと彼の自信
 が壊しに來た。他方に寄ると幻滅の半鐘が耳元に鳴り響いた。不
 思議にも彼の自信、卑下して用いる彼自身の言葉でいうと彼の己
 惚は、胸の中にあるような氣がした。それを攻めに來る幻滅の
 半鐘はまた反對にいつでも頭の外から來るような心持がした。両
 方を公平に取扱かつているつもりでいながら、彼は常に親疎の区
 別をその間に置いていた。というよりも、遠近の差等が自然天然
 属性として二つのものに元から具わつてゐるらしく見えた。結果
 は分明であつた。彼は叱りながら己惚の頭を撫でた。耳を

傾けながら、半鐘の音を忌んだ。

かくして互いに追つ追われつしている彼の心に、静かな眠は来ようとしても来られなかった。万事を明日に譲る覚悟をきめた彼は、幾度かそれを招き寄せようとして失敗つたあげく、右を向いたり、左を下にしたり、ただ寝返りの数を重ねるだけであつた。彼は煙草へ火を点けようとして枕元にある燐寸を取つた。その時袖そで畳たたみにして下女が衣桁いこうへかけて行つた縷袍どてらが眼に入つた。気がついて見ると、お延の鞆かばんへ入れてくれたのはそのままにして、先刻宿で出したのを着たなり、自分は床の中へ入つていた。彼は病院を出る時、新調の縷袍に対してお延に使つたお世辞せじをたちまち思い出した。同時にお延の返事も記憶の舞台に呼び起された。

「どっちが好いか比べて御覧なさい」

縷袍ははたして宿の方が上等であつた。銘仙と糸織の区別は彼の眼にも一目瞭然であつた。いちもくりようぜん縷袍を見較どてら みくらべると共に、細君を前に置いて、内々心の中で考えた当時の事が再び意識の域いきじよう上に現われた。

「お延と清子」

独りひとこう云つた彼はたちまち吸殻を灰吹の中へ打ち込んで、その底から出るじいという音を聴いたなり、すぐ夜具を頭から被かぶつた。

強しいて寝ようとする決心と努力は、その決心と努力が疲れ果ててどこかへ行つてしまった時に始めて酬むくいられた。彼はとうとう

我知らず夢の中に落ち込んだ。

百七十八

朝早く男が来て雨戸を引く音のために、いったん破りかけられたその夢は、半醒半睡の間に、辛^{かる}うじて持続した。室^{へや}の四角^{よすみ}が寝ていられないほど明るくなって、外部^{そと}に朝日の影が充^みち渡ると思ふ頃、始めて起き上った津田の瞼^{まぶた}はまだ重かった。彼は楊枝^{ようじ}を使いながら障子^{しょうじ}を開けた。そうして昨夜来の魔境から今ようやく覚醒した人のような眼を放って、そこいらを見渡した。

彼の室の前にある庭は案外にも山里らしくなかった。不規則な

池を人工的に拵こしらえて、その周囲に稚わかい松だの躑躅つづじだのを普通の約束通り配置した景色は平凡というよりむしろ卑俗であつた。彼の室に近い築山の間から、谿たにみず水を導いて小さな滝を池の中へ落している上に、高くはないけれども、一度に五六筋の柱を花火のように吹き上げる噴水まで添えてあつた。昨夜彼の睡眠を悩ました細工みなもとの源を、苦笑しながら明らさまに見た時、彼の聯想れんそうはすぐこの水音以上に何倍か彼を苦しめた清子の方へ推おし移つた。大根おおねを洗えばそれもこの噴水同様に殺風景なものかも知れない、いやもしそれがこの噴水同様に無意味なものであつたらたまらないと彼は考へた。

彼が銜くわえ楊枝ようじのまま懷ふところ手でをして敷居の上にぼんやり立つて

いると、先刻さつきから高たか箒ほうきで庭の落葉を掃はいていた男が、彼の傍そばへ寄つて来て丁寧ていねいに挨拶あいさつをした。

「お早う、昨夜さくやはお疲れさまで」

「君だったかね、昨夕ゆうべ馬車へ乗つてここまでいっしょに来てくれたのは」

「へえ、お邪魔様で」

「なるほど君の云つた通り閑静だね。そうしてむやみに広い家うちだね」

「いえ、御覧の通り平地ひらちの乏しい所でげすから、地ならしをしてはその上へ建て建てして、家が幾段にもなっておりますので、——廊下だけは仰せの通りむやみに広くつて長いかも知れません」

「道理で。昨夕僕は風呂場へ行つた歸りに迷^{まいご}児になつて弱つたよ」
「はあ、そりや」

二人がこんな会話を取り換^かわせている間に、庭続の小山の上から男と女がこれも二人づれで下りて来た。黄^{こうよう}葉と枯枝の隙^{すきま}間を動いてくる彼らの路^{みち}は、稲妻^{いなずま}形に林の裡^{うち}を抜けられるように、また比較的急な勾^{こう}配^{ばい}を樂^のに上られるように、作つてあるので、ついそこに見えている彼らの姿もなかなか庭先まで出るのに暇^いがかつた。それでも手代^{てだい}はじつとして彼らを待つていながかつた。たちまち津田を放^{ほう}り出した現金な彼は、すぐ岡の裾^{すそ}まで駈^かけ出して行つて、下から彼らを迎いに来たような挨拶^{あいさつ}を与えた。

津田はこの時始めて二人の顔をよく見た。女は昨夕^{ゆうべ}艶^{なま}めかしい

姿をして、彼の浴室の戸を開けた人に違ちがいなかつた。風呂場で彼を驚ろかした大きな髭まげをいつの間にか崩くずして、尋常の束髪ゆかに結ゆい更かえたので、彼はつい同じ人と気がつかずにいた。彼はさらに声を聴きいただけで顔を知らなかつた伴つれの男の方を、よそながらの初対面といつた風に、女と眺め比べた。短かく刈り込んだ当世風の髭ひげを鼻の下に生やしたその男は、なるほど風呂番の云つた通り、どこかに商人らしい面影おもかげを宿していた。津田は彼の顔を見るや否や、すぐお秀の夫を憶い出した。堀庄太郎、もう少し略して堀の庄さん、もっと詰つめて当人のしばしば用いる堀庄ほりしようという名前が、いかにも妹婿の様子を代表しているごとく、この男の名前もきつとその髭を虐殺するように町人染ちやうにんじみていはしまいかと思わ

れた。瞥見べっけんのついでに纏めまとられた津田の想像はここにとどまらなかつた。彼はもう一步皮肉なところまで切り込んで、彼らがはたして本当の夫婦であるかないかをさえ疑問の中に置いた。うちしたがって早起をして食前浴後の散歩に出たのだと明言する彼らは、津田にとつての違例な現象にほかならなかつた。彼は楊枝で齒を磨こすりながらまだ元の所に立っていた。彼がよそ見をしているにもかかわらず、番頭を相手に二人のする談話はよく聴えた。

女は番頭に訊きいた。

「今日は別館の奥さんはどうかなすつて」

番頭は答えた。

「いえ、手前はちつとも存じませんが、何か――」

「別に何って事もないんですけれどもね、いつでも朝風呂場で目にかかるのに、今日はいらつしやらなかったから」

「はあさようで——、ことによるとまだお休みかも知れません」
「そうかも知れないわね。だけどいつでも両方の時間がちゃんときまつてるのよ、朝お風呂に行く時の」

「へえ、なるほど」

「それに今朝けさごいっしよに裏の山へ散歩に参りましようってお約束をしたもんですからね」

「じゃちよつと伺つて参りましよう」

「いいえ、もういいのよ。散歩はこの通り済んじまったんだから。ただもしやどこかお加減でも悪いのじゃないかしらと思つて、ち

よつと番頭さんに訊いてみただけよ」

「多分ただのお休みだろうと思いますが、それとも——」

「それともなんて、そう真面目くさらなくつてもいいのよ。ただ訊いてみただけなんだから」

二人はそれぎり行き過ぎた。津田は齒磨粉で口こうちゆう中をいっぱいにしながら、また昨夜ゆうべの風呂場を探しに廊下へ出た。

百七十九

しかし探すなどという大袈裟な言葉は、今朝の彼にとつて全く無用であつた。路みちに曲折の難はあつたにせよ、一足ひとあしの無駄も踏

まずに、自然昨夜ゆうべの風呂場へ下りられた時、彼の腹には、夜来の自分を我ながら馬鹿馬鹿しいと思う心がさらに新らしく湧わいて出た。

風呂場には軒下に簾はめた高い硝子戸ガラスどを通して、秋の朝日がかんかん差し込んでいた。その硝子戸越ごしに岩だか土堤どてだかの片影を、近く頭の上に見上げた彼は、全身を温泉ゆに浸つけながら、いかに浴よ槽くそうの位置が、大地の平面以下に切り下げられているかを発見した。そうしてこの崖がけと自分のいる場所との間には、高さから云つてずいぶんの相違があると思つた。彼は目分量でその距離を一間半乃至二間ないしと鑑定した後で、もしこの下にも古い風呂場があるとすれば、段々が一つ家の中うちに幾層もあるはずだという事に気がつ

いた。

崖の上には石^{つわ}落があつた。あいにくそこに朝日が射していないので、時々風に揺れる硬く光った葉の色が、いかにも寒そうに見えた。山茶^{さざんか}花の花の散って行く様も湯壺^{ゆつぽ}から眺められた。けれども景色は断片的であつた。硝子戸の長さの許す二尺以外は、上下とも全く津田の眼に映らなかつた。不可知な世界は無論平凡^{ちがひ}に違なかつた。けれどもそれがなぜだか彼の好奇心を唆^{そそ}つた。すぐ崖^{そば}の傍へ来て急に鳴き出したらしい鶉^{ひよどり}も、声が聴^{きこ}えるだけで姿の見えないのが物足りなかつた。

しかしそれはほんのつけたりの物足りなさであつた。実を云うと、津田は腹のうちで遥^{はる}かそれ以上気にかかる事件を捏^こね返^{かえ}して

いたので、彼は風呂場へ下りた時からすでにある不足を暗々^{あんあん}のうちに感じなければならなかった。明るい浴室に人影一つ見出さ^{みいだ}なかつた彼は、万事君の跋扈^{ばつこ}に任せるといった風に寂寞^{せきばく}を極めた建物の中に立つて、廊下の左右に並んでいる小さい浴槽の戸を、念のため一々開けて見た。もつともこれはそのうちの一つの入口に、スリッパーが脱ぎ棄^すててあつたのが、彼に或暗示を与えたので、それが機縁になつて、彼を動かした所作^{しよさ}に過ぎないとも云えば云えない事もなかつた。だから順々に戸を開けた手の番が廻つて来て、いよいよスリッパの前に閉^たて切^きられた戸にかかつた時、彼は急に躊躇^{ちゆうちよ}した。彼は固^{もと}より無心ではなかつた。その上失礼^{そと}という感じがどこかで手伝つた。仕方なしに外部^{そと}から耳^そを聳^そて

たけれども、中は森しんとしていたので、それに勢いきおいを得た彼の手は、思い切つてがらりと戸を開ける事ができた。そうしてほかと同じように空虚な浴室が彼の前に見出された時に、まあよかつたという感じと、何だつまらないという失望が一度に彼の胸に起つた。

すでに裸になつて、湯壺ゆつぼの中に浸つかつた後あとの彼には、この引続きから来る一種の予期が絶えず働らいた。彼は苦笑しながら、昨夕ゆうべと今朝けさの間に自分の経過した変化を比較した。昨夕の彼は丸まる髻まげの女に驚ろかされるまではむしろ無邪気であつた。今朝の彼はまだ誰も来ないうちから一種の待ち設けのために緊張を感じていた。それは主ぬしのないスリッパに唆そそのかされた罪かも知れなかつた。けれどもスリッパがなぜ彼を唆のかしたかという、寝起ねおきに横

浜の女と番頭の噂うわさに上のぼった清子の消息を聴きかされたからであつた。彼女はまだ起きていなかった。少くともまだ湯に入っていないかつた。もし入るとすれば今入っているか、これから入りに来るかどっちかでなければならなかつた。

鋭敏な彼の耳は、ふと誰か階段を下りて来るような足音を聴いた。彼はすぐじゃぶじゃぶやる手を止やめた。すると足音は聴えなくなつた。しかし氣のせいはいつたんとまつたその足音が今度は逆に階段を上のぼつて行くように思われた。彼はその源因を想像した。他の例にならつて、自分のスリッパを戸の前に脱ぎ捨すてておいたのが悪くはなかつたらうかと考えた。なぜそれを浴室の中まで穿はき込まなかつたのだらうかという後悔さえ萌きざした。

しばらくして彼はまた意外な足音を今度は浴槽よくそうの外側に聞いた。それは彼が石路つわの花を眺めた後あと、鶉ひよどり鳥の声を聴きいた前であつた。彼の想像はすぐ前後の足音を結びつけた。風呂場を避けた前の足音の主が、わざと外へ出たのだという解釈が容易に彼に与えられた。するとたちまち女の声がした。しかしそれは足音と全く別な方角から来た。下から見上げた外部の様子によつて考えると、崖がけの上は幾坪かの平地ひらちで、その平地を前に控えた一棟ひとむねの建物が、風呂場の方を向いて建てられているらしく思われた。何しろ声はそちの見当から来た。そうしてその主は、たしかに先刻さつき散歩の帰りに番頭と清子の話をした女であつた。

昨夕湯気を抜くために隙すかされた底ひさしの下ガラスどの硝子戸が今日は閉たて

切られているので、彼女の言葉は明かに津田の耳に入らなかった。けれども語勢その他から推して、一事はたしかであつた。彼女は崖^{がけ}の上から崖の下へ向けて話しかけていた。だから順序を云えば、崖の下からも是非受け応え^{うこた}の挨拶^{あいさつ}が出なければならぬはずであつた。ところが意外にもその方はまるで音沙汰^{おとさた}なしで、互い違ひに起る普通の会話はけつして聴かれなかつた。しやべる方はただ崖の上に限られていた。

その代り足音だけは先刻のようにとまらなかつた。疑いもなく一人の女が庭下駄で不規則な石段を踏んで崖^{のぼ}を上つて行つた。それが上り切つたと思う頃に、足を運ぶ女の裾^{すそ}が硝子戸の上部の方に少し現われた。そうしてすぐ消えた。津田の眼に残つた瞬間の

印象は、ただうつくしい模様の翻^{ひる}がえる様であつた。彼は動き去つたその模様のうちに、昨夕階段の下から見たと同じ色を認めたような気がした。

百八十

室^{へや}に帰つて朝食^{あさめし}の膳に着いた時、彼は給仕の下女と話した。「浜のお客さんのいる所は、新らしい風呂場から見える崖の上だろう」

「ええ。あちらへ行つて御覧になりましたか」

「いいや、おおかたそうだろうと思つただけさ」

「よく当りましたね。ちとお遊びにいらつしやいまし、旦那も奥さんも面白い方です。退屈だ退屈だつて毎日困つてらつしやるんです」

「よつぽど長くいるのかい」

「ええもう十日ばかりになるでしょう」

「あれだね、義太夫をやるつてえのは」

「ええ、よく御存じですね、もうお聴ききになりましたか」

「まだだよ。ただ勝さんに教わつただけだ」

彼が聴くがままに、二人についての知識を惜おしげもなく供給した

下女は、それでも分も心得ていた。急所へ来るとわざと津田の問を外はずした。

「時にあの女の人はいったい何だね」

「奥さんですよ」

「本当の奥さんかね」

「ええ、本当の奥さんでしょう」と云った彼女は笑い出した。

「まさか嘘うその奥さんてのもないでしょう、なぜですか」

「なぜって、素人しろうとにしちやあんまり粹過いきすぎるじゃないか」

下女は答える代りに、突然清子を引合ひきあいに出した。

「もう一人奥にいらつしやる奥さんの方がお人柄ひとがらです」

間取まじりの關係から云つて、清子の室へやは津田うしろの後、二人づれの座敷

は津田の前に當つた。両方の中間に自分を見出みいだした彼はようやくうなず首肯うなずいた。

「するとちようど真中^{まんなか}辺^{へん}だね、ここは」

真中でも室が少し折れ込んでいたので、両方の通路にはなっていないかった。

「その奥さんとあの二人のお客とは友達なのかい」

「ええ御懇意です」

「元から？」

「さあどうですか、そこはよく存じませんが、——おかたここへいらしってからお知合におなんなすったんでしょう。始終^{しじゅう}行ったり来たりしていらつしやいます、両方ともお閑^{ひま}なものですから。昨日^{きのう}も公園へいつしよにお出かけでした」

津田は問題を取り逃がさないようにした。

「その奥さんはなぜ一人でいるんだね」

「少し身体からだがお悪いんです」

「旦那だんなさんは」

「いらつしやる時は旦那さまもごいつしよでしたが、すぐお帰りになりました」

「置おいてきぼりか、そりやひどいな。それつきり来ないのかい」
 「何でも近いうちにまたいらつしやるのかという事でしたが、どう
 になりましたか」

「退屈だろうね、奥さんは」

「ちと話しに行つて、お上げになつたらいかがです」

「話しに行つてもいいかね、後で聴いといてくれたまえ」

「へえ」と答えた下女はにやにや笑うだけで本気にしなかった。

津田はまた訊きいた。

「何をして暮しているのかね、その奥さんは」

「まあお湯に入ったり、散歩をしたり、義太夫を聴かされたり、
——時々花なんかお活いけになります、それから夜よく手習をし
ていらつしやいます」

「そうかい。本は？」

「本もお読みになるでしょう」と中途半端に答えた彼女は、津田
の質問があまり煩はん瑣さにわたるので、とうとうあははと笑い出した。
津田はようやく気がついて、少し狼狽あわてたように話を外そらせた。

「今朝風呂場へスリッパを忘れていったものがあるね、塞ふさがつ

てるのかと思つてはじめは遠慮していたが、開けて見たら誰もいなかったよ」

「おやそうですか、じゃまたあの先生でしょう」

先生というのは書の専門家であつた。方々にかかつている額や看板でその落款^{らっかん}を覚えていた津田は「へええ」と云つた。

「もう年寄だらうね」

「ええお爺さん^{じい}です。こんなに白い髯^{ひげ}を生やして」

下女は胸のあたりへ自分の手をやって書家に相応^{ふさ}わしい髯の長さ^さを形容して見せた。

「なるほど。やっぱり字を書いてるのかい」

「ええ何だかお墓に彫りつけるんだって、大変大きなものを毎日

少しずつ書いていらつしやいます」

書家はその墓碑銘を書くのが目的で、わざわざここへ来たのだと下女から聴きかされた時、津田は驚ろいて感心した。

「あんなものを書くのにも、そんなに骨が折れるのかなあ。素しろう人は半日ぐらいで、すぐ出来上りそうに考えてるんだが」

この感想は全く下女に響かなかつた。しかし津田の胸には口へ出して云わないそれ以上の或物さえあつた。彼は暗あんにこの老先生の用向ようむきと自分の用向みくらとを見較べた。無事に苦しんで義太夫の稽け古いこをするという浜の二人をさらにその傍かたわらに並べて見た。それから何の意味とも知れず花を活けたり手習をしたりするらしい清子も同列に置いて考えた。最後に、残る一人の客、その客は話もしな

ければ運動もせず、ただぽかんと座敷に坐^{すわ}つて山を眺めているという下女の觀察を聴いた時、彼は云った。

「いろんな人がいるんだね。五六人寄つてさえこうなんだから。夏や正月になったら大変だろう」

「いっぱいになるとどうしても百三四十人は入りますからね」

津田の意味をよく了解しなかったらしい下女は、ただ自分達の最も多忙を極^{きわ}めなければならぬ季節に、この家^{うち}へ入^いり込^こんでくる客の人数^{にんず}を挙げた。

百八十一

食後の津田は床とこの脇わきに置かれた小机の前に向った。下女に頼んで取り寄せた絵端書へ一口ずつ文句を書き足して、その表へ名宛なあてを記しるした。お延へ一枚、藤井の叔父へ一枚、吉川夫人へ一枚、それで必要な分は済んでしまったのに、下女の持つて来た絵端書はまだ幾枚も余っていた。

彼は漫然と万年筆を手にしたまま、不動の滝たきだの、ルナ公園パークだのと、山里に似合わない変な題を付けた地方的の景色をぼんやり眺めた。それからまた印氣インキを走らせた。今度はお秀の夫と京都にいる両親宛あての分がまたたく間まに出来上った。こう書き出して見ると、ついでだからという気も手伝つて、ありたけの絵端書をみんな使ってしまったという義理が悪いようにも思われた。最初は考え

ていなかった岡本だの、岡本の子供のはじめ一だの、その一の学校友達
 という連想から、また自分の親戚のみうち方へ逆戻りをして、甥のおい真事まこと
 だの、いろいろな名がたくさん並べられた。初手しよてから気がついて
 いながら、最後まで名を書かなかつたのは小林だけであつた。他ほか
 の意味は別として、ただ在あり所かを嗅かぎつけられるという恐れから、
 津田はどうしてもこの旅行先を彼に知らせたくなかつたのである。
 その小林は不日ふじつ朝鮮へ行くべき人であつた。無検束をもつて自らみずか
 任ずる彼は、海を渡る覚悟ですでにもう汽車に揺られているかも知
 れなかつた。同時に不規律な彼はまた出立と公言した日が来て
 も動かずにいないとも限らなかつた。絵端書を見て、（もし津田
 がそれを出すとすると、）すぐここへやって来ないという事はけ

つして断言できなかつた。

津田は陰晴定めなき天氣を相手にして戦うように厄介やつかいなこの友達、もつと適切にいうとこの敵、の事を考えて、思わず肩を峙そばだてた。するといったん緒いとくち口の開いた想像の光景シーンはそこでまらなかつた。彼を拉らっしてずんずん先へ進んだ。彼は突然玄関へ馬車を横付にする、そうして怒鳴り込むような大きな声を出して彼の室へやへ入ってくる小林の姿を眼前に髻髻ほうふつした。

「何しに来た」

「何しにでもない、貴様を厭いやがらせに来たんだ」

「どういう理由わけで」

「理由も糸瓜へちまもあるもんか。貴様がおれを厭いやがる間は、いつまで

経^たつてもどこへ行つても、ただ追^{おっ}かけるんだ」

「畜生ッ」

津田は突然拳^{こぶし}を固めて小林の横^{よこ}ツ面^{つら}を撲^{なぐ}らなければならなかつた。小林は抵抗する代りに、たちまち大の字になつて室^{へや}の真中へ踏^ふん返^ぞらなければならなかつた。

「撲つたな、この野郎。さあどうでもしろ」

まるで舞台の上でなければ見られないような活劇が演ぜられなければならなかつた。そうしてそれが宿^{やど}中^{じゅう}の視聴^{おびや}を脅^{おび}かさなければならなかつた。その中には是非とも清子が交^{まじ}つていなければならなかつた。万事は永久に打ち砕かれなければならなかつた。事実よりも明^{めい}瞭^{りょう}な想像^{ひとまく}の一幕を、描くともなく頭の中に

描き出した津田は、突然ぞつとして我に返った。もしそんな馬鹿げた立ち廻りが實際生活の表面に現われたらどうしようと考えた。彼は羞恥しゆううちと屈辱を遠くの方に感じた。それを象徴するために、頬ほの内側が熱ほてつて来るような氣さえした。

しかし彼の批判はそれぎり先へ進めなかった。他ひとに對して面めん目めを失う事、万一そんな不始末をしでかしたら大変だ。これが

彼の倫理觀の根柢こんていに横よこわつていただけであつた。それを切りつめると、ついに外聞が悪いという意味に歸着するよりほかに仕方がなかった。だから悪い奴やつはただ小林になつた。

「おれに何の不都合ふつごうがある。彼奴あいつさえいなければ」

彼はこう云つて想像の幕に登場した小林を責めた。そうして自

分を不面目にするすべての責任を相手に背負^{しよ}わせた。

夢のような罪人に宣告を下した後の彼は、^{あと}すぐ心の調子を入れ代えて、紙入の中から一枚の名刺を出した。その裏に万年筆で、
「僕は静養のため昨夜^{さくや}ここへ来ました」と書いたなり首を傾けた。
それから「あなたがおいでの事を今朝^{けさ}聴きました」と付け足して
また考えた。

「これじゃ空^{そら}々しくつていけない、昨夜^{ゆうべ}会った事も何とか書かなくっちゃ」

しかし^{あた}さわり障りのないようにそこへ触れるのはちよつと困難であつた。第一書く事が複雑になればなるほど、文字が多くなつて一枚の名刺では事が足りなくなるだけであつた。彼はなるべく淡^あ

泊つさりした口上を伝えたかった。したがって小面倒な封書などは使いたくなかった。

思いついたように違ちがい棚だなの上を眺めた彼は、まだ手をつけなかった吉川夫人の贈物が、昨日きのうのままでちゃんと載せてあるのを見て、すぐそれを下へ卸おろした。彼は果物くだもの籃かごの蓋ふたの間へ、「御病気はいかがですか。これは吉川の奥さんからのお見舞です」と書いた名刺を挿さし込んだ後あとで、下女を呼んだ。

「宅うちに奥さんという方がおいでだろう」

今朝給仕をしたのと同じ下女は笑い出した。

「奥さつきさんが先刻お話した奥さんの事ですょ」

「そうか。じゃその奥さんでいいから、これを持って行って上げ

てくれ。そうしてね、もしお差支えがなければちよつとお目にかかりたいって」

「へえ」

下女はすぐ果物籃を提^さげて廊下へ出た。

百八十二

返事を待ち受ける間の津田は居^{いすわ}据りの悪い置物のように落ちつかなかつた。ことにすぐ歸つて来^くべきはずの下女が思つた通りすぐ歸つて来ないので、彼はなおの事心を遣^{つか}つた。

「まさか斷るんじやあるまいな」

彼が吉川夫人の名を利用したのは、すでに万一を顧慮したからであつた。夫人とそうして彼女の見舞品、この二つは、それを届ける津田に対して、清子の束縛を解く^と好い方便に違^{ちが}なかつた。単に彼と応接する煩^{わづら}わしさ、もしくはそれから起り得る嫌疑^{けんぎ}を避けようとするのが彼女の当^{とう}体であつたにしたところで、果^{くだもの}物籃^{かご}の礼はそれを持つて来た本人に会つて云うのが、順であつた。誰がどう考えても無理のない名案を工夫したと信ずるだけに、下女の遅いのを一層^く苦にしなければならなかつた彼は、ふかしかけた煙草^{たばこ}を捨てて、縁側へ出たり、何のためとも知れず、黙つて池の中を動いている緋鯉^{ひこい}を眺めたり、そこへしやがんで、軒下に寝ている犬の鼻面^{はなづら}へ手を延ばして見たりした。やつとの事で、下女

の足音が廊下の曲り角に聴えたきこ時に、わざと取り繕つくろった余裕を外側へ示したくなるほど、彼の心はそわそわしていた。

「どうしたね」

「お待遠さま。大変遅かったでしょう」

「なにそうでもないよ」

「少しお手伝いをしていたもんですから」

「何の？」

「お部屋を片づけてね、それから奥さんの御髪おぐしを結いって上げたんですよ。それにしちや早いでしょう」

津田は女の鬚まげがそんなに雑作ぞうさなく結ゆえる訳のものでないと思つた。

「銀杏返しかい、丸鬚いちようがえ まるまげかい」

下女は取り合わずにただ笑い出した。

「まあ行つて御覧なさい」

「行つて御覧なさいって、行つても好いのかい。その返事を先刻さつきからこうして待つてゐるんじゃないか」

「おやどうもすみません、肝心かんじんのお返事を忘れてしまつて。――どうぞおいで下さいましつて」

やっと安心した津田は、立上りながらわざと冗談じょうだんはんぶん半分に駄だ目めを押した。

「本當かい。迷惑むじやくじゃないかね。向むこうへ行つてから氣の毒な思いをさせられるのは厭いやだからね」

「旦那様だんなさまはずいぶんうたぐぶか疑り深い方かたですね。それじゃ奥さんおくさんもさぞ

――

「奥さんとは誰だい、関の奥さんかい、それとも僕の奥さんかい」
「どっちだか解つてゐるじゃありませんか」

「いや解らない」

「そうでございますか」

兵児帯へこおびを締め直した津田ついでの後ろうしへ廻つた下女は、室へやを出ようと
する背中から羽織をかけてくれた。

「こつちかい」

「今御案内を致します」

下女は先へ立つた。夢遊病者むゆうびょうしやとして昨夕ゆうべ彷徨さまよつた記憶が、

例の姿すがた見の前へ出た時、突然津田の頭ひらに閃ひらめいた。

「ああここだ」

彼は思わずこう云った。事情を知らない下女は無邪き氣に訊きき返した。

「何がです」

津田はすぐごまかした。

「昨夕僕が幽霊に出会ったのはここだというのさ」

下女は変な顔をした。

「馬鹿をおっしやい。宅うちに幽霊なんか出るもんですか。そんな事をおっしやると——」

客商売をする宿に対して悪い洒落しやれを云ったと悟った津田は、賢かし

こく二階を見上げた。

「この上だろう、関さんのお室は」

「ええ、よく知ってらっしゃいますね」

「うん、そりや知ってるさ」

「天眼通てんがんつうですね」

「天眼通じゃない、天鼻通てんびつうと云つて万事鼻で嗅かぎ分わけるんだ」

「まるで犬見たいですね」

階子段はしごだんの途中で始まったこの会話は、上り口あがぐちの一番近くにあ

る清子の部屋からもう聴き取れる距離にあつた。津田は暗あんにそれを意識した。

「ついでに僕が関さんの室を嗅ぎ分けてやるから見ていろ」

彼は清子の室の前へ来て、ぱたりとスリッパの音を止めた。

「ここだ」

下女は横眼で津田の顔を睨めるように見ながら吹き出した。

「どうだ当つたろう」

「なるほどあなたの鼻はよく利きますね。 狽りようけん 犬よりたしかで

すよ」

下女はまた面白そうに笑つたが、室の中からはこの賑やかさに
対する何の反応も出て来なかつた。人がいるかいなかまるで分
らない内側は、始めと同じように索寞ひっそりしていた。

「お客さまがいらっしゃいました」

下女は外部そとから清子に話しかけながら、建てつけの好い障子しょうじ

をすうと開けてくれた。

「御免下さい」

一言の挨拶と共に室の中に入つた津田はおやと思つた。彼は

は自分の予期通り清子をすぐ眼の前に見出し得なかつた。

百八十三

室は二間続きになつてゐた。津田の足を踏み込んだのは、床のない控えの間の方であつた。黒柿の縁と台の付いた長方形の鏡の前に横竊の厚い座蒲団を据えて、その傍に桐で拵らえた小型の長火鉢が、普通の家庭に見る茶の間の体裁を、小規模な

がら髻ほうふつ髻せしめた。隅すみには黒塗の衣桁いこうがあつた。異性に附着する花やかな色と手触りてざわの滑すべこそうな絹しまの縞しまが、折り重なつてそこに投げかけられていた。

間の襖あいふすまは開け放たれたままであつた。津田は正面に当る床の間に活いけたて立らしい寒菊の花を見た。前には座蒲団が二つ向い合せに敷いてあつた。濃こげちや茶に染めた縮ちりめん緬めんのなかに、牡丹ぼたんか何かの模様をたつた一つ丸く白に残したその敷物は、品柄から云つても、また来客を待ち受ける準備としても、物々しいものであつた。津田は席につかない先にまず直感した。

「すべてが改あらたまつている。これが今日会う二人の間に横よこたわる運命の距離なのだろう」

突然としてここに氣のついた彼は、今この室へ入り込んで来た自分をとつさに悔いようとした。

しかしこの距離はどこから起つたのだろうか？ 考えれば起るのが当り前であつた。津田はただそれを忘れていただけであつた。では、なぜそれを忘れていたのだろうか？ 考えれば、これも忘れてゐるのが当り前かも知れなかつた。

津田がこんな感想に囚^{とら}えられて、控^{ひかえ}の間に立つたまま、室を出るでもなし、席につくでもなし、うっかり眼前の座蒲団を眺めてゐる時に、主人側の清子は始めてその姿を縁側の隅^{すみ}から現わした。それまで彼女がそこで何をしていたのか、津田にはいつこう解^げせなかつた。また何のために彼女がわざわざそこへ出ていたのか、

それも彼には通じなかった。あるいは室を片づけてから、彼の来るのを待ち受ける間、欄干の隅に倚りかかりでもして、山に重なる黄葉こうようの色でも眺めていたのかも知れなかった。それにしても様子が変であつた。有体ありていに云えば、客を迎えるというより偶然客に出喰でつくわしたというのが、この時の彼女の態度を評するには適當な言葉であつた。

しかし不思議な事に、この態度は、しかつめらしく彼の着席を待ち受ける座蒲団や、二人の間を堰せくためにわざと真中に置かれたように見える角火鉢かくひばちほど彼の気色きしよくに障さわらなかつた。というのは、それが元から彼の頭に描き出されている清子と、全く釣り合わないまでにかけ離れた態度ではなかつたからである。

津田の知っている清子はけっしてせせこましい女でなかった。

彼女はいつでも優^{おっとり}悠^{たり}していた。どつちかと云えばむしろ緩漫と

いうのが、彼女の氣質、またはその氣質から出る彼女の動作について下し得る特色かも知れなかった。彼は常にその特色に信を置いていた。そうしてその特色に信を置き過ぎたため、かえって裏切られた。少くとも彼はそう解釈した。そう解釈しつつも同時に出来上った信はまだ不自覚の間に残っていた。突如として彼女が関と結婚したのは、身を翻^{ひる}がえす燕^{つばめ}のように早かったかも知れないが、それはそれ、これはこれであつた。二つのものを結びつけて矛盾なく考えようとする時、悩乱は始めて起るので、離して眺めれば、甲が事実であつたごとく、乙もやッぱり本当でなければ

ならなかった。

「あの緩い人はなぜ飛行機へ乗った。彼はなぜ宙返りを打った」
疑いはまさしくそこに宿るべきはずであつた。けれども疑おう
が疑うまいが、事實はついに事實だから、けつしてそれ自身に消
滅するものでなかつた。

反逆者の清子は、忠実なお延よりこの点において仕合せであつ
た。もし津田が室^{へや}に入つて来た時、彼の氣合を抜いて、間の合^まわ
ない時分に、わざと縁側の隅^{すみ}から顔を出したものが、清子でなく
つて、お延だつたなら、それに対する津田の反応ははたしてどう
だろう。

「また何か細工をするな」

彼はすぐこう思うに違なかつた。ところがお延でなくつて、清子によつて同じ所作しよさくが演ぜられたとなると結果は全然別になつた。「相変らず緩漫だな」

緩漫と思ひ込んだあげく、現に眼覚めざましい早技はやわざで取つて投げられていながら、津田はこう評するよりほかに仕方がなかつた。

その上清子はただ間まを外はずしたただけではなかつた。彼女は先刻津田が吉川夫人の名前で贈りものにした大きな果物くだもの籃かごを両手でぶら提さげたまま、縁側の隅から出て来たのである。どういつもりか、今までそれを荷厄介にやつかいにしているという事自身が、津田に対しての冷淡さを示す度盛どもりにならないのは明かであつた。それからその重い物を今まで縁側の隅で持つていたとすれば無論、いった

ん下へ置いてさらに取り上げたと解釈しても、彼女の所作は変に
違ちがなかつた。少くとも不器用であつた。何だか子供染こどもじみていた。
しかし彼女の平生をよく知っている津田は、そこにいかにも清子
らしい或物を認めざるを得なかつた。

「滑稽こっけいだな。いかにもあなたらしい滑稽だ。そうしてあなたは
ちつともその滑稽なところに氣がついていないんだ」

重そうに籃かごを提さげている清子の様子を見た津田は、ほとんどこ
う云いたくなつた。

百八十四

すると清子はその籃かごをすぐ下女に渡した。下女はどうしていいか解わからないので、器械的に手を出してそれを受取ったなり、黙っていた。この単純な所作が双方の間に行われるあいだ、津田は依然として立っていなければならなかった。しかし普通の場合に起る手持無沙汰てもちぶさたの感じの代りに、かえって一種の気樂さを味わった彼には何の苦痛も来こずにすんだ。彼はただ間まの延びた挙動の引続きとして、平生の清子と矛盾しない意味からそれを眺めた。だから昨夜ゆうべの記憶からくる不審も一倍に強かった。この逼せまらない人が、どうしてあんなに蒼あおくなつたのだろう。どうしてああ硬く見えたのだろう。あの驚ろき具合とこの落ちつき方、それだけはどうかつても調和しなかった。彼は夜と昼の区別に生れて初めて気がつ

いた人のような心持がした。

彼は招ぜられない先に、まず自分から設けの席に着いた。そうして立ちながら果物くだものを皿に盛るべく命じている清子を見守った。「どうもお土産みやげをありがとう」

これが始めて彼女の口を洩もれた挨拶あいさつであつた。話頭わとうはそのお土産を持つて来た人から、その土産をくれた人の好意に及ばなければならなかつた。もとより嘘うそを吐く覚悟で吉川夫人の名前を利用したその時の津田には、もうごまかすという意識すらなかつた。「道伴みちづれになつたお爺さんじいに、もう少して蜜柑をやっちまうところでしたよ」

「あらどうして」

津田は何と答えようが平氣であつた。

「あんまり重くつて荷になつて困るからです」

「じや来る途中始終しじゅう手にでも提さげていらしたの」

津田にはこの質問がいかにも清子らしく無邪氣に聴きこえた。

「馬鹿にしちやいけません。あなたじやあるまいし、こんなものを提げて、縁側をあつちへ行つたりこつちへ来たりしていられるもんですか」

清子はただ微笑しただけであつた。その微笑には弁解がなかつた。云い換えれば一種の余裕があつた。嘘うそから出立した津田の心はますます平氣になるばかりであつた。

「相変らずあなたはいつでも苦くがなさそうで結構ですね」

「ええ」

「ちつとももとと変りませんね」

「ええ、だって同おんなじ人間ですもの」

この挨拶あいさつを聞くと共に、津田は急に何か皮肉を云いたくなつた。その時皿の中へ問題の蜜柑を盛り分けていた下女が突然笑ひ出した。

「何を笑うんだ」

「でも、奥さんのおつしやる事がおかしいんですもの」と弁解した彼女は、真面目まじめな津田の様子を見て、後からそれを具体的に説明すべく余儀なくされた。

「なるほど、そうに違いございませんね。生きてるうちはどなた

も同^{おん}なじ人間で、生れ変りでもしなければ、誰だつて違つた人間になれつこないんだから」

「ところがそうでないよ。生きてるくせに生れ変わる人がいくらでもあるんだから」

「へえそうですね、そんな人があつたら、ちつとお目にかかりたいもんだけれども」

「お望みなら逢^あわせてやってもいいがね」

「どうぞ」といつた下女はまたげらげら笑い出した。「またこれでしよう」

彼女は人指指^{ひとさしゆび}を自分の鼻の先へ持つて行つた。

「旦那様^{だんなさま}のこれにはとても敵^{かな}いません。奥さまのお部屋をちや

んと臭においで嗅かぎ分かたける方かたなんですから」

「部屋どころじゃないよ。お前の年とし齡れいから原籍から、生れ故郷から、何から何まであてるんだよ。この鼻一つあれば」

「へえ恐ろしいもんでございますね。——どうも敵わない、旦那様に会っちゃ」

下女はこう云つて立ち上つた。しかし室へやを出でがけにまた一句の擲や擲ゆを津田に浴びせた。

「旦那様はさぞ猫がお上手でいらつしやいましょうね」

日当りの好い南みなみむき向むきの座敷に取り残された二人は急に静しずかになつた。

津田は縁側に面して日を受けて坐つていた。清子は欄らんか干かんを背にして日に背そむいて坐つていた。津田の席からは向うに見

える山の壁が、幾段にも重なり合つて、日向日裏の区別を明らさ
 まに描き出す景色が手に取るように眺められた。それを彩どる黄
 葉の濃淡がまた鮮やかな陰影の等差を彼の眸中に送り込
 だ。しかし眼界の豁い空間に対している津田と違つて、清子の方
 は何の見るものもなかった。見れば北側の障子と、その障子の
 一部分を遮ぎる津田の影像だけであつた。彼女の視線は窮屈であ
 った。しかし彼女はあまりそれを苦にする様子もなかった。お延
 ならすぐ姿勢を改めずにはいられないだろうというところを、彼
 女はむしろ落ちついていた。

彼女の顔は、昨夕と反対に、津田の知っている平生の彼女より
 も少し紅かつた。しかしそれは強い秋の光線を直下に受ける生理

作用の結果とも解釈された。山を眺めた津田の眼が、端なく上氣した時のように紅く染った清子の耳みみたぶに落ちた時、彼は腹のうちでそう考えた。彼女の耳朵は薄かった。そうして位置の關係から、肉の裏側に差し込んだ日光が、そこに寄った彼女の血潮を通過して、始めて津田の眼に映ってくるように思われた。

百八十五

こんな場合にどっちが先へ口を利きき出すだろうか、もし相手がお延だとすると、事實は考えるまでもなく明めいりよう瞭であつた。彼女は津田に一寸いっすんの余裕も与えない女であつた。その代り自分に

も五分の寛ごぶくつろきさえ残しておく事のできない性質たちに生れついていた。彼女はただ随時随所に精一杯の作用をほしいままにするだけであつた。勢い津田は始しじゅう終受身の働きを余儀なくされた。そうして彼女に応戦すべく緊張の苦痛と努力の窮屈さを嘗なめなければならなかつた。

ところが清子を前へ据すえると、そこに全く別種おもむきの趣が出て来た。段取は急に逆になった。相撲すもうで云えば、彼女はいつでも津田の声を受けて立つた。だから彼女を向うへ廻した津田は、必ず積極的に作用した。それも十が十まで楽々とできた。

二人取り残された時の彼は、取り残された後で始めてこの特色に気がついた。気がつくと昔の女に対する過去の記憶がいつの間ま

にか蘇生していた。今まで彼の予想しつつあつた手持無沙汰てもちぶさたの感じが、ちょうどその手持無沙汰の起らなければならぬと云う間際へ来て、不思議にも急に消えた。彼は伸のび伸のびした心持で清子の前に坐つていた。そうしてそれは彼女の前で、事件の起らない過去に経験したものと大して變つていなかった。少くとも同じ性質のものに違ちがひないという自覚が彼の胸のうちに起つた。したがつて談話の途切れた時積極的に動き始めたものは、昔の通り彼であつた。しかも昔むかしの通りな氣分で動けるという事自身が、彼には思いがけない満足になつた。

「関君はどうしました。相変わらず御勉強ですか。その後御無沙汰ごぶさたをしていっこうお目にかかりませんが」

津田は何の気もつかなかった。会話の皮切かわきりに清子の夫を問題

にする事の可否は、利害關係から見ても、今日こんにちまで自分ら二人の

間に起つた感情の行掛ゆきがり上かから考えても、またそれらの纏綿てんめんし

た情実を傍かたわらに置いた、自然不自然の批判から云つても、実はひとし一

思案あんしなければならぬ点であつた。それを平生の細心にも似

ず、一顧の掛念けねんさえなく、ただ無雜作むぞうさに話頭わとうに上せた津田は、ま

さに居常きよじょうお延に対する時の用意を取り忘れていたに違ちがなかつ

た。

しかし相手はすでにお延でなかつた。津田がその用心を忘れて

も差支えなかつたという証拠は、すぐ清子の挨拶あいさつぶりで知れた。

彼女は微笑して答えた。

「ええありがとうございます。まあ相変らずです。時々二人してあなたのお樽うわきを致しております」

「ああそうですか。僕も始終しじゅう忙がしいもんですから、方々へ失礼ばかりして……」

「良人うち おんも同なじよ、あなた。近頃じや閑暇ひまな人は、まるで生きていられないのと同なじ事ね。だから自然御互いに遠々しくなるんですわ。だけどそれは仕方がないわ、自然の成行だから」

「そうですね」

こう答えた津田は、「そうですね」という代りに「そうですか」と訊きいて見たいような気がした。「そうですか、ただそれだけで疎遠ほんねになったんですか。それがあなたの本音ですか」という詰問

はこの時すでに無言の文句となつて彼の腹の中に蔵^{かく}れていた。

しかも彼はほとんど以前と同じように単純な、もしくは単純とより解釈のできない清子を眼前に見出^{みいだ}した。彼女の態度には二人の間に関を話題にするだけの余裕がちゃんと具^{そなわ}つていた。それを口にして苦^くにならないほどの淡泊^{たんぱく}さが現われていた。ただそれは津田の暗^{あん}に予期して掛^かつたところのもので、同時に彼のかつて予想し得なかつたところのものに違なかつた。昔のままの女主人公に再び会う事ができたという満足は、彼女がその昔しのままの鷹^お揚^{よう}な態度で、関の話を平気で津田の前にし得るといふ不満足といつしよに來なければならなかつた。

「どうしてそれが不満足なのか」

津田は面と向つてこの質問に対するだけの勇氣がなかった。關が現に彼女の夫である以上、彼は敬意をもつて彼女のこの態度を認めなければならなかった。けれどもそれは表通りの沙汰さたであつた。偶然往來を通る他人のする批評に過ぎなかつた。裏には別な見方があつた。そこには無關心な通りがかりの人と違つた自分というものが頑張がんばつていた。そうしてその自分に「私」という名を命つける事のできなかつた津田は、飽あくまでもそれを「特殊な人」と呼ぼうとしていた。彼のいわゆる特殊な人とはすなわち素人しろうとに對する黒人くろうとであつた。無知者に對する有識者であつた。もしくは俗人に對する専門家であつた。だから通り一遍のものより余計に口を利く權利をもっているとしたか、彼には思えなかつた。

表で認めて裏で首肯うけがわなかつた津田の清子に対する心持は、何かの形式で外部へ発現するのが当然であつた。

百八十六

「昨夕ゆうべは失礼しました」

津田は突然こう云つて見た。それがどんな風に相手を動かすだらうかというのが、彼の覘ねらいどころであつた。

わたくし
「私こそ」

清子の返事はすらすらと出た。そこに何の苦痛も認められなかつた時に津田は疑つた。

「この女は今朝けさになつてもう夜の驚ろきを繰り返す事ができないのかしら」

もしそれを憶おもい起す能力すら失つていけるとすると、彼の使命は善にもあれ悪にもあれ、はかないものであつた。

「実はあなたを驚ろかした後で、すまない事をしたと思つたのです」

「じや止よして下さればよかったのに」

「止せばよかったのです。けれども知らなければ仕方がないじゃありませんか。あなたがここにいらつしやろうとは夢にも思ひがけなかつたのですもの」

「でも私への御土産おみやげを持って、わざわざ東京から来て下すつたん

でしょう」

「それはそうです。けれども知らなかった事も事実です。昨夕は偶然お眼にかかっただけです」

「そうですか知ら」

故意こいを昨夕の津田に認めているらしい清子の口吻こうふんが、彼を驚ろかした。

「だって、わざとあんな真似まねをする訳がないじゃないですか、なんぼ僕が酔すい興きようだつて」

「だけどあなたはだいぶあすこに立っていらしたらしいのね」
津田は水盤あふに溢れる水を眺めていたに違ちがなかつた。姿見すがたみに映るわが影を見つめていたに違なかつた。最後にそこにある櫛くしを取

つて頭まで梳かいてぐずぐずしていたに違ちがなかつた。

「迷まいご児こになつて、行先が分らなくなりや仕方がないじやありませんか」

「そう。そりやそうね。けれども私にはそう思えなかつたんですもの」

「僕が待ち伏せをしていたでも思つてゐるんですか、冗じょうだん談だんじやない。いくら僕の鼻が万まんのう能うだつて、あなたの湯泉ゆに入る時間まで分りやしませんよ」

「なるほど、そりやそうね」

清子の口にしたなるほどという言葉が、いかにもなるほどと合が点てんしたらしい調子を帯びているので、津田は思わず吹き出した。

「いったい何だつて、そんな事を疑^{うたぐ}つていらつしやるんです」

「そりや申し上げないだつて、お解りになつてゐるはずですよ」

「解りつこないじやありませんか」

「じや解らないでも構わないわ。説明する必要のない事だから」

津田は仕方なしに側面から向つた。

「それでは、僕が何のためにあなたを廊下の隅^{すみ}で待ち伏せていたんです。それを話して下さい」

「そりや話せないわ」

「そう遠慮しないでもいいから、是非話して下さい」

「遠慮じゃないのよ、話せないから話せないのよ」

「しかし自分の胸にある事じやありませんか。話そうと思ひさえ

すれば、誰にでも話せるはずだと思いますがね」

「私の胸に何にもありやしないわ」

単純なこの一言は急に津田の機鋒きほうを挫くじいた。同時に、彼の語勢を飛躍させた。

「なければどこからその疑いが出て来たんです」

「もし疑ぐるのが悪ければ、謝あやまります。そうして止よします」

「だけど、もう疑ったんじやありませんか」

「だってそりや仕方がないわ。疑ったのは事実ですもの。その事実を白状したのも事実ですもの。いくら謝あやまったってどうしたって事実を取り消す訳には行かないんですもの」

「だからその事実を聴きかせて下さればいいんです」

「事實はすでに申し上げたじゃないの」

「それは事實の半分か、三分一です。僕はその全部が聴きたいんです」

「困るわね。何といってお返事をしたらいいんでしょう」

「訳ないじゃないですか、こういう理由があるから、そういう疑いを起したんだって云いさえすれば、たつた一ひとくち口で済んじまう事です」

今まで困っていたらしい清子は、この時急に腑ふに落ちたという顔つきをした。

「ああ、それがお聴きになりたいの」

「無論です。先刻さつきからそれが伺いたければこそ、こうしてしつこ

くあなたを煩わづらわせているんじゃないやありませんか。それをあなたが隠そうとなさるから——」

「そんならそうと早くおつしやればいいのに、私隠しも何にもしませんわ、そんな事。理わけ由は何でもないのよ。ただあなたはそういう事をなさる方なのよ」

「待伏せをですか」

「ええ」

「馬鹿にしちやいけません」

「でも私の見たあなたはそういう方なんだから仕方がないわ。嘘うそでも偽いつわりでもないんですもの」

「なるほど」

津田は腕を拱こまぬいて下を向いた。

百八十七

しばらくして津田はまた顔を上げた。

「何だか話が議論のようになってしまいましたね。僕はあなたと問答をするために来たんじゃないかったのに」

清子は答えた。

「私にもそんな気はちつともなかったの。つい自然そこへ持つて行かれてしまったんだから故意こいじゃないのよ」

「故意でない事は僕も認めます。つまり僕があんまりあなたを問

いつめたからなんでしょう」

「まあそうですね」

清子はまた微笑した。津田はその微笑のうちに、例の通りの余裕を認めた時、我慢しきれなくなった。

「じゃ問答ついでに、もう一つ答えてくれませんか」

「ええ何なりと」

清子はあらゆる津田の質問に応ずる準備を整えている人のような答えぶりをした。それが質問をかけない前に、少なからず彼を失望させた。

「何もかももう忘れているんだ、この人は」

こう思った彼は、同時にそれがまた清子の本来の特色である事

にも気がついた。彼は駄目だめを押すような心持になって訊いた。

「しかし昨夕ゆうべはしごだん階子段の上で、あなたは蒼あおくなつたじやありませんか」

「なつたでしょう。自分の顔は見えないから分りませんけれども、あなたが蒼くなつたとおっしゃれば、それに違ちがひないわ」

「へえ、するとあなたの眼に映ずる僕はまだ全うそつきくの嘘吐でもなかつたんですね、ありがたい。僕の認めた事実をあなたも承認して下さるんですね」

「承認しなくつても、實際蒼くなつたら仕方がないわ、あなた」

「そう。——それから硬かたくなりましたね」

「ええ、硬くなつたのは自分にも分つていましたわ。もう少しあ

のままで我慢していたら倒れたかも知れないと思つたくらいです
もの」

「つまり驚ろいたんでしよう」

「ええずいぶん吃驚したわ」

「それで」と云いかけた津田は、俯向加減になつて鄭寧に林檎の皮を剥いている清子の手先を眺めた。滴るように色づいた皮が、ナイフの刃を洩れながら、ぐるぐると剥けて落ちる後に、水気の多そうな薄蒼い肉がしだいに現われて来る変化は彼に一年以上経つた昔を憶い起させた。

「あの時この人は、ちようどこういう姿勢で、こういう林檎を剥いてくれたんだつけ」

ナイフの持ち方、指の運び方、りようひじ 両肘を膝とすれすれにして、
 長い袂たもとを外へ開いている具合、ことごとくその時の模写であつた
 うちに、ただ一つ違ふところのある点に津田は気がついた。それ
 は彼女の指を飾る美しい二個ふたつの宝石であつた。もしそれが彼女
 の結婚を永久に記念するならば、そのぎらぎらした小さい光ほど、
 津田と彼女の間を鋭さえどく遮さへぐるものはなかつた。柔婉しなやかに動く彼
 女の手先を見つめている彼の眼は、当時を回想するうつとりとし
 た夢の消息のうちに、燦然さんぜんたる警戒ひやうの閃めきを認めなければな
 らなかつた。

彼はすぐ清子の手から眼を放して、その髪を見た。しかし今朝
 下女が結いつてやったというその髪は通例ひさしの底であつた。何の奇も

認められない黒い光沢が、櫛の齒を入れた痕を、行儀正しく豎に
残しているだけであつた。

津田は思い切つて、いったん捨てようとした言葉をまた取り上
げた。

「それで僕の訊きたいのはですね——」

清子は顔を上げなかつた。津田はそれでも構わずに後を続けた。
「昨夕そんなに驚ろいたあなたが、今朝はまたどうしてそんなに
平気でいられるんでしょう」

清子は俯向いたまま答えた。

「なぜ」

「僕にやその心理作用が解らないから伺うんです」

清子はやっぱり津田を見ずに答えた。

「心理作用なんてむずかしいものは私にも解らないわ。ただ昨夕はああで、今朝はこうなの。それだけよ」

「説明はそれだけなんですか」

「ええそれだけよ」

もし芝居をする気なら、津田はここで一つ溜息ためいきを吐くところであつた。けれども彼には押し切つてそれをやる勇気がなかつた。この女の前にそんな真似をしても始まらないという気が、技巧に走ろうとする彼をどことなく抑おさえつけた。

「しかしあなたは今朝いつもの時間に起きなかつたじゃないか」

清子はこの問をかけるや否や顔を上げた。

「あらどうしてそんな事を御承知なの」

「ちやんと知ってるんです」

清子はちよつと津田を見た眼をすぐ下へ落した。そうして綺麗きれいに剥いた林檎に刃を入れながら答えた。

「なるほどあなたは天眼通てんがんつうでなくつて天鼻通てんびつうね。実際よく利きくのね」

冗談じょうだんとも諷刺ふうしとも真面目まじめとも片のつかないこの一言いちごんの前に、津田は退避たじろいだ。

清子はようやく剥き終つた林檎を津田の前へ押しやつた。

「あなたいかが」

百八十八

津田は清子の剥むいてくれた林檎りんごに手を触れなかった。

「あなたいかがです、せっかく吉川の奥さんがあなたのためにと
いって贈ってくれたんですよ」

「そうね、そうしてあなたがまたわざわざそれをここまで持つて
来て下さったんですね。その御親切に対してもただただかなくつち
や悪いわね」

清子是这样云いながら、二人の間にある林檎の一片ひときれを手にと
った。しかしそれを口へ持つて行く前にまた訊きいた。

「しかし考えるとおかしいわね、いったいどうしたんでしょ」

「何がどうしたんです」

「私吉川の奥さんにお見舞をいただくとは思わなかったのよ。それからそのお見舞をまたあなたが持つて来て下さろうとはなおさら思わなかったのよ」

津田は口のうちに「そうでしょう、僕でさえそんな事は思わなかったんだから」と云った。その顔をじっと見守った清子の眼に、はつきり判然した答を津田から待ち受けるような予期の光が射した。彼はその光に対する特殊な記憶を呼び起した。

「ああこの眼だっけ」

二人の間に何度も繰り返された過去の光景が、シーンありありと津田

の前に浮き上った。その時分の清子は津田と名のつく一人の男を信じていた。だからすべての知識を彼から仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未来を挙^あげて、彼の上に投げかけるように見えた。したがって彼女の眼は動いても静であった。何か訊^きこうとするうちに、信と平和の輝きがあつた。彼はその輝きを一人で専有する特権をもつて生れて来たような気がした。自分があればこそこの眼も存在するのだとさえ思った。

二人はついに離れた。そうしてまた会った。自分を離れた以後の清子に、昔のままの眼が、昔と違った意味で、やっぱり存在しているのだと注意されたような心持のした時、津田は一種の感慨に打たれた。

「それはあなたの美しくいところですよ。けれどももう私を失望させる美しさに過ぎなくなつたのですか。判然教えて下さい」

津田の疑問と清子の疑問が暫時視線の上で行き合つた後、最初に眼を引いたものは清子であつた。津田はその退き方を見た。そうしてそこにも二人の間にある意気込の相違を認めた。彼女はどこまでも逼らなかつた。どうしても構わないという風に、眼をよそへ持つて行つた彼女は、それを床の間に活けてある寒菊の花の上に落した。

眼で逃げられた津田は、口で追かけなければならなかつた。

「なんば僕だつてただ吉川の奥さんの使に來ただけじゃありません」

「でしょう、だから変なのよ」

「ちつとも変な事はありませんよ。僕は僕で独立してここへ来^きようと思つてるところへ、奥さんに会つて、始めてあなたのここにいらつしやる事を聴かされた上に、ついお土産^{みやげ}まで頼まれちまつたんです」

「そうですね。そうでもなければ、どう考えたつて変ですからね」

「いくら変だつて偶然という事も世の中にはありますよ。そうあなたのように……」

「だからもう変じゃないのよ。訳さえ伺えば、何でも当り前になつちまうのね」

津田はつい「こつちでもその訳を訊ききに來たんだ」と云いたく
 なつた。しかし何にもそこに頓とんじやく着やくしてないらしい清子の質
 問は正直であつた。

「それであなたもどこかお悪いの」

津田は言葉少なに病氣の顛てんまつ末まつを説明した。清子は云つた。

「でも結構ね、あなたは。そういう時に会社の方の御都合ごつごうがつく
 んだから。そこへ行くと良人うちなんか氣の毒なものよ、朝から晩ま
 で忙がしそうにして」

「関君こそ酔すいきよう興きようなんだから仕方がない」

「可かわいそう哀想あいそうに、まさか」

「いや僕のいうのは善いい意味での酔興すいきようですよ。つまり勉強家とい

う事です」

「まあ、お上手だ事」

この時下から急ぎ足で階^{はしごだん}子段^{のぼ}を上つて来る草履^{ぞうり}の音が聴えたので、何か云おうとした津田は黙つて様子を見た。すると先刻^{さつき}とは違つた下女がそこへ顔を出した。

「あの浜のお客さまが、奥さまにお午^{ひる}から滝の方へ散歩においてになりませんか、伺つて来いとおっしゃいました」

「お供^{とも}しましょう」清子の返事を聴いた下女は、立ち際に津田の方を見ながら「旦^{だんなさま}那樣もいっしょにいらつしやいました」と云つた。

「ありがとう。時にもうお午なのかい」

「ええただいま御飯を持って参ります」

「驚ろいたな」

津田はようやく立ち上った。

「奥さん」と云おうとして、云い損いそくなつた彼はつい「清子さん」と呼び掛けた。

「あなたはいつごろまでおいでです」

「予定なんかまるでないのよ。宅うちから電報が来れば、今日にでも帰らなくっちゃならないわ」

津田は驚ろいた。

「そんなものが来るんですか」

「そりや何とも云えないわ」

清子はこう云つて微笑した。津田はその微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の室^{へや}に歸つた。

——未完——

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年6月28日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月から1972（昭和47）年1月

入力：柴田卓治

校正：伊藤時也

1999年8月12日公開

2018年2月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明暗

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>